

博士論文 二〇二一年度

中世地方武家文芸の研究——連歌と和漢聯句——

慶應義塾大学 大学院 文学研究科

国文学専攻 国文学分野

川崎 美穂



凡例… vii

序 章… 1

はじめに

二、研究史―地方武家と文芸

四、本博士論文の構成と概要

一、研究史―連歌と和漢聯句

三、本博士論文の意義とねらい

第一章 上杉氏の文芸… 17

第一節 直江兼統の和漢聯句… 19

はじめに

二、天正期

二―二 句作について

三―一 文禄期の興行状況

一、上杉家関連の聯句会活動

二―一 天正期の興行状況

三、文禄期

三―一 句作について

四、慶長期

四―二 句作について

おわりに

四―一 慶長期の興行状況

四―三 兼統の連歌付合

第二節 連歌師里村紹巴と上杉氏家宰直江兼統 . . . . . 40

はじめに

二、直江兼統と紹巴の交渉

四、「発句拔書」詞書に登場する人物

おわりに

一、「発句拔書」の本文と年代

三、『紹巴発句帳』と『大発句帳』の問題

五、史的価値―兼統上洛後の活動との関係

第三節 戦国末期の詩歌会 . . . . . 59

はじめに

二、成立と諸本

四、詩歌の作風

おわりに

一、上杉氏文芸活動における位置

三、参加者と出題の方法―詩と歌と

五、短冊詩歌の流れ―探題なのか



第四節 「鶉衣」の和と漢	82
--------------	----

はじめに

一、漢語「鶉衣百結」

二、日本における「鶉衣」

三、日本における「百結」の受容

四、「百結」から「もゝむすび」へ

五、「腸百結」

おわりに

第二章 成田氏の文芸	101
------------	-----

第一節 連歌師了意と忍城主成田氏長	103
-------------------	-----

はじめに

一、了意および成田氏連歌壇について

二、諸本について

二―一 書誌

二―二 紹巴書状の写しと本奥書

二―三 批言を附した人物は誰か―奥書の再検討

三、本文の系統分類及び系統内の異同と性格

四、合点・批言

五、句風と批言の特徴

おわりに

第二節 校本「了意千句」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132

はじめに 凡例 校本 別表

第三章 作品研究―直江兼続の連歌・和漢聯句・・・・・・・・・・・・ 191

概説・凡例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193

第一節 天正十四年二月二日漢和聯句「堯舜二難并」注釈・・・・・・・・ 200

はじめに 一、連衆と齋号 二、翻刻 三、注釈

第二節 永青文庫蔵天正十六年閏五月八日漢和聯句「新竹愛風静」注釈・・・・・・・・ 224

はじめに 一、底本書誌 二、翻刻 三、連衆 四、注釈

第三節 直江兼続一座漢倭聯句「楓散風紅色」注釈・・・・・・・・・・・・・・・・ 263

はじめに 一、底本書誌 二、翻刻 三、連衆 四、注釈

第四節 市立米沢図書館蔵慶長三年三月二日賦何人連歌「しめゆふや」注釈 . . . . . 307

―新出の直江兼統・称念寺其阿阿吟連歌―

はじめに 一、底本書誌と連衆 二、翻刻 三、本文の錯簡 四、注釈

第五節 埼玉県立文書館蔵慶長五年正月廿一日賦何船連歌「梅か香は」注釈 . . . . . 341

―上杉景勝主催の連歌―

はじめに 一、底本書誌と連衆 二、翻刻 三、注釈

第六節 慶長六年十月四日漢倭聯句「落葉雨天下」注釈 . . . . . 372

―直江兼統主催の漢倭聯句―

はじめに 一、伝来と連衆 二、翻刻 三、注釈

第七節 慶應義塾図書館蔵慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」注釈 . . . . . 402

— 新出の直江兼続主催の和漢聯句 —

はじめに  
一、底本書誌と連衆  
二、翻刻  
三、注釈

終  
章：  
433

初出一覧：  
437

## 凡例

- 一、和歌の引用は特に断らない限りは『新編国歌大観』に、日記・記録・文書などの史料は校訂刊本に、連歌は『連歌大観』に拠った。
- 一、引用本文の表記は句読点を打ち、清濁を分かつなど私に改め、傍線等を付した場合がある。引用元資料に存する改行を／、改面を「、割注・小字注を山括弧へ～で示した。
- 一、漢字表記は異体字、旧字体の類は原則として使用せず、現行の字体を用いたが、一部には原本の表記をそのまま用いた場合もある。猶、仮名遣いは改めなかった。
- 一、文書類の名称は、原則として所蔵者の目録類に従った。
- 一、注は節毎に、各節の末尾に付した。
- 一、第三章の凡例は、別に記した。



序

章





## はじめに

本博士論文は、日本中世における武家<sup>1</sup>の文芸の様相について、連歌・和漢聯句<sup>2</sup>を対象に考察するものである。

「中世」とはいつても、その対象範囲は広く、源頼朝が守護・地頭設置権を認められた文治元年（一一八五）から慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦、或いは三年後の徳川家康による江戸幕府開設まで、約四世紀に亘る。本博士論文では、そのうち中世の終末とされる織豊政権成立期を対象とする。その時期は裏を返せば近世の初めとも言え、中世末期から近世初期への文化の移行を考える上で、たいへん重要な時期である。本博士論文はその移行期に、越後国から北関東にかけて広大な領国を誇った戦国大名で、後に豊臣政権の中枢でも活躍した上杉氏、事実上その指導者であった家宰直江兼続の政治と文芸の関係に焦点を当てている。

## 一、研究史―連歌と和漢聯句

さて、武家が愛好し、この時期に全国で流行した文芸に、連歌・和漢聯句がある。直江兼続もまた知られた名手であった。

ところで、連歌と和漢聯句は、同じ付合文芸・寄合文芸に属しており、不可分の関係にあるが、その展開の歴史、また研究の現状はかなり異なっている。

まず、連歌の起源は『万葉集』まで遡るが、文芸形式としての確立は中世であり、武家政権の隆盛期と重なる。連

歌は、有心の和歌に比して、無心、つまり滑稽や即興を宗とする遊戯的な性格が強かったが、二条良基・救済による准勅撰集『菟玖波集』の成立は、連歌を雅文芸として洗練させるための、地位向上の契機となった。永享から応仁・文明の乱前後の中興期を経て、連歌師宗祇が台頭した。宗祇は連歌の名匠として、中興期を支えた七賢(宗砌・宗伊・心敬・行助・専順・智蘊・能阿)を顕彰、その作品が脚光を浴び、後代にも影響力を与え続けた。さらに宗祇と猪苗代兼載により二番目の准勅撰集『新撰菟玖波集』が編纂された。こうした有心連歌に対して、中世後期には無心連歌も再び活況を呈し、『犬筑波集』、『守武千句』などが登場し、近世の俳諧連歌開花へと繋がっていくこととなる。連歌史の研究は戦後より盛んで、すでに膨大な蓄積がある。

一方、和漢聯句とは、中国の聯句と、日本の連歌とが折衷され、連歌と同じように百韻を主要な単位としつつ、漢句と和句とで等分に構成される付合の文学である。鎌倉末期には始められ、早く『菟玖波集』巻十九には「聯句連歌」の部が立つが、作品が完全に残るようになるのは室町中期である。とくに記録と作品の残存が充実して来るのは、後土御門天皇(在位一四六四―一五〇〇)の時代からである。その理由は明白で、聯句を好んだ禅僧と、連歌を好んだ公家・武家との文化的な融合がこの時代に急速に進んだことによるのであろう。もともと階層・教養も異なっていた三者が、同座して交流するときに、和漢聯句ほどふさわしいものはなかった。戦国時代には最も隆盛であり、内裏や將軍家ばかりではなく、五山の学僧の策彦周良と、連歌の里村紹巴といった、当代きつての和漢の名匠が同座することも見られた。とくに紹巴は武家社会に広く接点があり、むしろ紹巴を介して和漢聯句が地方の武家にも受容されていた面もある。

しかし、和漢聯句の流行は、五山の衰退とともに下火となり、江戸期には堂上の一隅、あるいは俳諧連歌のうちに辛うじてその残滓をとどめるばかりとなった。連歌と地方の武家との関係については早くから関心が向けられ、多くの専論が備わるのに対し、そもそも和漢聯句はまったく関心を持たれなかった。近年になって、京都大学国文学研究

室・中国文学研究室の共編により、ようやく基礎的な研究に鉾が入れられ、『室町前期 和漢聯句作品集』『室町後期和漢聯句作品集』(二〇〇八〜二〇一〇年、臨川書店)で、現存する主要な作品本文が翻刻されている。但し、それも堂上での催しを中心で、武家の催しについては十分ではなく、地方での開催された作品については作品本文の所在さえ明らかになっていない。もともと五山文学の研究も膨大な作品数に比較して低調であるが、和漢聯句の文芸としての特質については、深沢眞二『「和漢」の世界―和漢聯句の基礎的研究』(二〇一〇年、清文堂出版)がいまに唯一の専著という状態である。

## 二、研究史―地方武家と文芸

続いて、地方の武家と文芸との関係について、連歌を中心にして、戦後の研究史を概観したい。

はやくに、史料が充実していた西国・九州の武家から研究が盛んとなったようで、金子金治郎「中世作家と地方文学―今川了俊の九州探題時代―」(広島大学文学部紀要第七号、一九五五年)、米倉利昭「龍造寺氏の連歌」(中世文芸叢書別巻一『連歌とその周辺』一九六七年、広島中世文芸研究会)、藤原正義「武家と連歌―南北朝・室町初期」(九州大学文学部紀要第一六号、一九七六年)などの研究がある。日本史の領域からも文芸資料に丁寧に目配りした川添昭二『中世文芸の地方史』(一九八二年、平凡社)がある。

つづく、米原正義『戦国武士と文芸の研究』(一九七六年、桜楓社)は、室町幕府から補任された守護職に起源を持つ戦国大名、とりわけ周防・長門の大名大内氏の文芸を扱った、浩瀚な研究である。また、渡辺憲司『近世大名文芸圏の研究』(一九九七年、八木書店)は、室町時代末期の比較的マイナーな武家歌人・連歌作者が近世初期の政治・文化に如何に関わっていたかを明らかにしたもので、細川幽齋といった有名人のみが取り上げられていた、中世近世移

行期の空白を埋めようと試みた研究として重要である。以降、武家連歌を、近世の社会と権力との関係のうちに位置付けようと試みた代表的な研究に、入口敦志『武家権力と文学―柳營連歌、「帝鑑図説」』（二〇一三年、ペリカン社）、綿拔豊昭『近世武家社会と連歌』（二〇一九年、勉誠出版）が挙げられる。

このように主として畿内・西国の、守護から転じた名門の戦国大名には伝統として文芸の関心が厚く、資料も豊富に残るので、やはり研究は偏っているが、いっぽう、かなりの数の戦国大名は、守護代や国人領主が実力によって、独立した領国支配を獲得したもので、こうした新しい勢力、いわゆる狭義の戦国大名の連歌を対象とした研究も、作品の発掘を中心として進展している。とくに三好長慶（一五二二〜六四）と明智光秀（一五二八頃〜一五八二）は、政治的な存在感からおのおのずと関心を集めており、前者では奥田勲「三好長慶―その連歌史的素描―」（中世文学の研究、一九七二年）、後者では鶴崎裕雄「戦国武将の千句連歌―明智光秀の五吟一日千句を中心に―」（関西大学国文学一〇四号、二〇二〇年）などがあり、かなりの研究の蓄積がある。

武家による連歌作品の探索と連歌史上への位置づけは、はやくから精力的な研究成果が見られたが、とくに近年の顕著な成果として、尾崎千佳が、天理大学附属天理図書館編『新天理図書館善本叢書 連歌卷子本集 1〜2』（二〇二〇年〜二〇二一年）の解題にて、毛利元就（一四九七〜一五七一）から続く毛利家の月次連歌を網羅的に整理した。いっぽう、関東・陸奥の武家の研究は、西国に比較して、作品や資料の残存状況が著しく劣るために、どうしても限界があったが、それでも最上義光の連歌について、生田慶穂の考究「最上義光と里村紹巴の接点―文禄二年のふたつの連歌―」（日本文学研究ジャーナル第19号、二〇二一年）が現れたのは注目される。

次に、連歌師との関わりという観点から先行研究を整理したい。

室町時代前期、七賢の一人宗砌（？〜一四五五）は山名持豊の被官（家臣）であり、その周辺で活動した。心敬も晩年は関東に下向し、上杉氏・太田氏の庇護を受けたが、地方の有力武家と連歌師との交流が本格化したのは、やはり

宗祇（一四二一～一五〇二）の登場が契機であろう。室町幕府関係者・後土御門天皇・三条西実隆（一四五五～一五三七）といった中央の要人に対する活動もさることながら、宗祇は活動のもう一つの軸足を明らかに地方に置いた人で、例えば、周防の大内政弘・若狭の武田氏・越後の上杉氏などには何度も下向して、連歌指導・古典講釈を行ったばかりか、中央との連絡役も果たしていたようで、地方文化を語る上で無視できない役割を担った。宗祇の足跡と文学事蹟を跡付ける研究は膨大である。代表的な専著として、伊地知鐵男『宗祇』（一九四三年、青梧堂）、江藤保定『宗祇の研究』（一九六七年、風間書房）、金子金治郎『宗祇の生活と作品』（一九八三年、金子金治郎連歌考叢2、桜楓社）、島津忠夫『連歌師宗祇』（一九九一年、岩波書店）、奥田勲『宗祇』（一九九八年、吉川弘文館）、広木一人『連歌師という旅人―宗祇越後府中への旅』（二〇一二年、三弥井書店）などを挙げるに留める。

宗祇と同じく心敬に学び、共に『新撰菟玖波集』の編纂に関わった兼載にも脚光が当てられた。陸奥会津の出身で、東国と関係深く、下総古河で没した。伝記研究に金子金治郎『連歌師兼載伝考』（一九七七年、桜楓社〔新版〕）がある。子孫は最古の連歌宗匠の家である猪苗代家として続いた。猪苗代家は伊達家に仕えたが、この点に関する研究に綿拔豊昭『近世前期猪苗代家の研究』（一九九八年、新典社）がある。なお、兼載の独吟千句注釈の試みに『兼載独吟「聖廟千句」第一百韻をよむ』（二〇〇七年、和泉書院）がある。

宗祇門弟の牡丹花肖柏（一四四三～一五二七）は大臣家の中院家の出身である。しかし肖柏は自由な境涯を楽しみ、町人文化の栄えた和泉堺を拠点とし、摂津の国人池田氏とも交流した。研究として、綿拔豊昭「牡丹花肖柏と池田」（中央大学大学院論究一六号、一九八四年）、鶴崎裕雄「戦国社会と連歌師―牡丹花肖柏の生涯を通して」（『和歌と貴族の世界』塙書房、二〇〇七年）、浅井美峰「肖柏と池田氏―連歌師と千句連歌主催者の関係について」（比較日本学教育研究センター研究年報一一号、二〇一五年）などがある。

同じく宗祇の弟子柴屋軒宗長（一四四八～一五三二）は、駿河島田の鍛冶の子息と言われる。同国守護の今川義忠（一

四三六～一四七六）、氏親（一四七三～一五二六）に仕えて、とくに氏親からは京都との使者として重用された。鶴崎裕雄の一連の研究が集大成で、「宗長年譜稿―誕生より永正十四年まで」「宗長年譜稿―永正十五年より没年まで」「宗長年譜稿―索引・主要出典一覧」（帝塚山学院短期大学研究年報四四～四六号、一九九六～一九九八年）、「連歌師宗長の肖像」（関西大学國文學第七八号、一九九九年）などを踏まえて、同『戦国を往く連歌師宗長』（二〇〇〇年、角川書店）が刊行された。

そして同じく宗祇の門弟であり、各地への旅行の広範さ・多様さが他の連歌師を圧倒するのが月村齋宗碩（一四七一～一五三三）である。大内義興（一四七七～一五二八）の連歌に関与したことなど、余語敏男『宗碩と地方連歌 資料と研究』（一九九三年、笠間書院）により指摘される。

宗長・宗碩の没後、連歌界の第一人者となったのは、孤竹齋宗牧（？～一五四五）である。京都を拠点としたが、最晩年の旅を記録した『東国紀行』があり、織田信秀・松平広忠・今川義元・北条氏康をはじめとする東海・関東の大名・国人を歴訪、歓迎を受けたことで有名である。ところで京都にあった宗牧は三条西家・近衛家の開催した和漢聯句・連歌の主要メンバーであったが、そこには禅僧梅岳承芳時代の今川義元（一五一九～一五六〇）が参加しており、両者の早くからの交流が確認できること、またその作品も残ることが、小川剛生「戦国大名と和漢聯句―駿河今川氏を中心に」（国語国文八七巻七号、二〇一八年）、小和田哲男「特集 戦国武将と禅僧 太原雪斎と今川義元」（禅文化、二〇一八年）などにより明らかとなった。

宗牧の息子宗養（一五二六～一五六三）は、近衛家に近侍した一方で、尼子晴久（一五一四～一五六二）・三好長慶の連歌活動を指導した。作品も現存する。晴久のもとでの会に関しては「尼子晴久夢想披百韻」（『連歌作品集』、一九九三年）、長慶との会については斎藤義光「翻刻と解説 武将連歌の系譜（上）（下）―三好長慶・安宅冬康・細川藤孝を中心として」（解釈三四号・三五号、一九八八年～一九八九年）などの基礎研究が備わる。

これらの偉大な連歌師の掉尾を飾るのが里村紹巴（一五二五頃～一六〇二）である。紹巴はあまり遠方への旅には出ず、畿内で活動したが、豊臣政権の確立によって、全国の大名が上洛しての奉仕、あるいは遠征への従軍を義務づけられたため、かえって紹巴の交遊圏はそれまでの連歌師よりも広く深いものとなった。

紹巴の活動については、すでに奥田勲「紹巴年譜稿（一）」（四）（宇都宮大学教育学部紀要一七～一九、二三号一、一九六七～六九、七三年）、同『連歌師 その行動と文学』（一九七六年、評論社）、両角倉一「連歌師紹巴―伝記と発句帳」（二〇〇二年、新典社）などにより、網羅的な研究が刊行されている。しかし、これらは江戸期に入つた松永貞徳『戴恩記』などの随筆や説話から抽出されたエピソードに多く依拠した面がある。もとより紹巴関係の資料は膨大であり、人柄・活動を伝える的確な証言を求めようとすれば、後世の文献に依拠せざるを得ない面があるが、同時代資料の発掘、それに基づいた伝記研究が完了したとも言いがたく、とくに地方の大名・国衆との交際は、事實は指摘されても、個別の事情などはほとんど明らかになっていない。

### 三、本博士論文の意義とねらい

以上、研究史を二方向から概観したが、連歌研究には蓄積があっても和漢聯句がいまだ視野に入っていないこと、また地方武家の文芸の研究も西国・畿内が盛んであり、史料残存の制約から、関東より以北ではめぼしい研究に乏しいこと、ここでも連歌は視野に収められるが、和漢聯句はいまだ関心の外にあることが分かる。

その意味で、越後国を本拠とした上杉氏の、和漢聯句を中心とした文芸の研究には、これまでにない意義があると言つてよい。

もちろん、兼統以前から越後において文芸や学問が翫ばれなかった訳ではない。上杉憲実は、南魚沼郡上田に雲洞

庵を建立し、仏教を奨励し、漢籍を蒐集、足利学校再興にも寄与した。また房定の時代には、歌人の堯恵、詩人の万里集九、連歌師の宗祇、公家の飛鳥井雅康らが下向した。彼らが滞在した折には、連歌会、歌会、詩歌会が催されたことも確認されている。そして、上杉謙信も歌道に関心があり、近衛前久から歌書を贈られたりしている。直江兼統は、魚沼郡上田庄坂戸城（現新潟県南魚沼市）の主、長尾越前守政景の家臣樋口惣右衛門兼豊の子であり、永禄七年（一五六四）、五歳で雲洞庵の北高全祝のもとで学んだという。兼統の教養の源流はたしかに越後で育まれたにしても、しかし、領国内の文芸関係催しでそれ以前に本文が伝存するものは全くない。いっぽう御館の乱以降、景勝の側近としての兼統の活動が本格化すると同時に、連歌・和漢聯句の張行の記録が確認できるようになる。兼統の存在は突出しているとと言える。

すでに郷土史研究に十分に蓄積のある地方でも、連歌や和漢聯句の懐紙などは歴史資料としては顧みられて来なかった。まして和漢聯句は、どのようなものかほとんど知られていなかったから、まず活用されていない。従って、新資料を発掘する余地は十分にある。なお、連歌・和漢聯句は、その特性上、原則として大名、家臣、連歌師、禅僧など様々な階層が実際に一つの場所に集まる座の文芸である。懐紙には興行の年月日、連衆、場所が明記されているから、当時の人々の交流の様相を知る貴重な手がかりとなろう。

以上を踏まえて、次の三つの視点を、本博士論文のテーマ、中世末期から近世初期にかけての連文芸研究の課題として位置づけたい。

(一)、堂上と対置される、地方武家開催の和漢聯句の実態把握。

(二)、属する家中・文芸圏を越えた、連衆相互の交流、連歌師の動向の跡付け。

(三)、地方の寺社・図書館・博物館所蔵の未紹介資料群の紹介と考察。

また、本博士論文では、里村紹巴をも考察の対象とする。紹巴が直江兼統にとって重要な存在であったからである。



紹巴の連歌作品の文芸的価値は、これまでの宗匠と比較して、決して高くはないと評されるのが一般的である。しかし、文芸としての完成度はともかくとして、紹巴の活動は別の視点からも評価されるべきであろう。実に多くの大名・国人領主と交わる中で、伝書を授けたり、歌書に奥書を加えたりしたほか、連歌懐紙や関係する資料の残存量は比較を絶し、句集の詞書の情報量も圧倒的である。そして各地方に未整理のまま残された紹巴関係の連歌および和漢聯句の資料の探索と解明もまた十分ではない。知られているのは現存するものの一部に過ぎない。これらの資料についても、まずは総合的な位置付けなくしては、紹巴の真の評価は定められないであろう。

#### 四、本博士論文の構成と概要

先行研究の到達点と課題を踏まえ、本博士論文の構成を一覧し、内容を簡単に述べる。

第一章は、上杉氏の文芸と題して、越後統一から豊臣政権への臣従、そして会津・米沢への転封と困難な時代に主人を支えて指揮を取り、文芸活動をも推進し事実上主催した家宰、直江兼統にスポットを当てて論じた。これは上杉氏で張行された連歌・和漢聯句を網羅的に調査した成果を踏まえている。

第一節では、直江兼統の和漢聯句を取り上げる。作品の文芸的な価値、句風の特徴を分析した。中心となった兼統およびその家臣は、もっぱら漢句を出している。彼らの教養の具体的な傾向を探った。

第二節では、里村紹巴が、天正十五年（一五八七）六月頃、直江兼統に宛てて、みずからの発句十句と詞書を記した抜書一紙の写しを紹介し、詳しい考察を行った。当時の地方の武将が連歌師を介して中央の文学活動にどのような接触したのか、かつこれを受け止めていたかを明らかにした。

第三節では、慶長七年（一六〇二）二月、会津から米沢に転封させられた上杉家の家臣、そして所縁の武将・禅僧

・連歌師、総勢二十七人が奉納した「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」を考察した。これは短冊による催しで、和歌六十七首・漢詩三十三篇、計百の詩歌からなる。その本文、開催動機を考察し、さらに詩歌百首の歴史の上での位置づけ、文学的特色を検討した。

第四節では、この時代の和漢聯句に見られる「百結」の表現に着目し、その語と結ばれる「鶉衣」という表現の系譜を、中国詩人、本邦五山の漢詩、そして和歌・連歌・和漢聯句、それぞれについて追跡した。その結果、檻樓の比喩としての「鶉衣」は古くは『晋書』『荀子』に遡れるもの「百結」の語と結ばれることはなかった。同じく、日本でも室町前期頃までは和歌・連歌に「百結」の表現はみられず、かつ「鶉」の素材と共に摂取された痕跡はみられなかった。しかし、連歌の世界では「鶉衣」の故事の積極的受容が認められ、その傾向は和漢聯句にも引きつがれた。そうした中で、十五世紀に五山僧の詩で明確に「鶉」と「百結」が結ばれた。「鶉衣百結」の表現もまた、とりわけ五山僧が進んで享受した表現であり、周辺の公家・連歌師が自分達の表現世界に取り込んだ一例となる。このことは地方武家の和漢聯句では、本説とはやや異なる形で漢句が表現されることへの参考ともなる。

第二章は、武蔵国忍（現埼玉県行田市）城主で北武蔵の最大の国人である成田氏の文芸活動を中心に取り上げた。成田氏は、上杉氏とはしばしば干戈を交えた、あるいは同盟しているが、北関東の国衆というルーツでは、上杉氏（長尾氏）とは同根であり同格であった。そして成田氏もまた連歌・和漢聯句を好み、紹巴ら連歌師を介して中央と独自に繋がろうとしており、その構図も上杉氏と類似する。成田氏に隣接した羽生城主の木戸氏は、早くから兼続の庇護を受けていて、木戸元齋（休波・寿三）は兼続に親しく仕え、紹巴との間をも仲介したらしい。そして成田氏も、小田原合戦で領地を失って牢人となった後、兼続を頼って、文芸上で浅からぬ交流を持つようになった。

第一節では、成田氏長が召し抱えた連歌師了意によって、天正十六年（一五八八）六月二日から五日間で独吟された千句連歌「了意千句」を対象に、その成立と伝来を検討した。当該千句には、後年慶長二年（一五九七）の、里村紹

巴の合点、紹巴門弟である紹与の批言が附された、とされている。しかしいずれも興行からかなり隔たっていて疑問であり、合点・批言が附された時期を明らかにすることが課題であった。これについて、関係資料を再検討することで、成立直後に紹巴が合点・批言を附したものであることを明らかにし、また当時の関東連歌師の句風に対して、紹巴がいかなる批言を与えているか分析した。「了意千句」は、宗祇以来の連歌師による独吟千句の流れに立つ作品であり、且つ紹巴の教えを忠実に実践した試みであった。かつ紹巴の合点と批言は、その連歌指導の一端を伝える看過できない資料である。以上、この千句を初めて戦国最末期の文学史上に位置づけた。

第二節では、前節で取り上げた「了意千句」の本文研究を踏まえて、詳細な校本を作成した。伝本調査により、成立状況と系統について整理し、よるべき本文を定めている。調査の過程で稿者が新たに見出した伝本もあり、「了意千句」は当時かなり流布していたことが明らかとなった。

第三章は「作品研究―直江兼続の連歌・和漢聯句」と題して、本博士論文で取り上げた、主として直江兼続の関係した連歌・和漢聯句百韻七編（ひとつは七十二句の残欠）の注釈を収録した。いずれも初めての注釈である。本論と不可分の関係にあるので、適宜参照されたい。

第一節では、現時点で兼続にとり初期の和漢聯句と思しき、天正十四年二月二日漢和聯句「堯舜二難并」を取り上げた。当該百韻で兼続は「鈎齋」という号を使用していた可能性を指摘した。『歴代古案』第五巻に翻刻が備わることが、誤りが間々見られるため『上杉年譜』をもって本文を校訂した上で百韻の注釈を試みた。

第二節では、永青文庫蔵天正十六年閏五月八日漢和聯句「新竹愛風静」を扱った。京都の細川幽齋のもとでの開催で、里村紹巴、西笑承兌ら要人の他、上洛した直江兼続が参会している。中央の名匠に互した上杉家の文芸の特質を考える上では好適な催しと考えられる。これもその存在は既に知られ翻刻も備わるが、注釈はなかった。

第三節で取り上げた「直江兼続一座漢倭聯句百韻「楓散風紅色」」は、文禄二年（一五九三）冬、京都での開催と

推定される、直江兼続による漢和聯句である。当該百韻の本文は既に『大日本史料』第十二編之三十二にも収められるが、全体の内容を読み解いた研究はなかった。そこで、新たに米沢市上杉博物館蔵『直江城州漢倭』を底本として、その書誌的考察、興行時期及び連衆の検討を踏まえ、百韻の注釈を試みた。

第四節では、直江兼続と称念寺其阿の両吟連歌「慶長三年三月二日賦何人連歌」（市立米沢図書館蔵）を初めて翻刻、解題・注釈を施し、その文学史的位置付けを試みた。これまで兼続のものとして伝わる作品はすべて漢詩漢文であった。和漢聯句でももっぱら漢句の作者であった。しかし、当該連歌は兼続が連歌をも詠んでいたことが唯一確認され、その資料的価値は高い。

第五節では、埼玉県立文書館蔵慶長五年正月廿一日賦何人連歌「梅か香は」である。これは上杉景勝と家臣が会津で興行した連歌懐紙一巻である。当該連歌は、『鷲宮町史』通史・中巻（一九八六年）に言及されていたが、長らくその所在は不明であった。ところが、今回埼玉県立文書館蔵「長野家文書」のうちに保管されていることが判明したため、全文翻刻と注釈を行った。慶長五年と言えば、上杉氏は会津征伐により家康側の侵攻を受け、その後に関ヶ原合戦が勃発するという、歴史的にも極めて重要な時期であった。その点においても貴重である。他に上杉家関係者による慶長五年興行の連歌・和漢聯句は伝存していない。

第六節では、慶長六年十月十四日、やはり直江兼続の主催した漢和聯句を取り上げた。当該資料の本文は、市立米沢図書館蔵「直江筋書」第二巻に収められる。これは米沢市の郷土史家今井清見氏による写しであり、その親本は現在所在不明、他に伝本も知られない。今井氏の筆写した本文には、誤写や欠脱と思われる箇所も少なくない。例えば、巻末に記載される各人の句数と、書写された句数の総数が一致しない。すると今井氏が見た親本にすでに欠落があった可能性も想定されるが、資料自体には疑わしい点はなく、他に知られない内容であるので、これを底本として翻刻、注釈した。

第七節では、慶應義塾図書館蔵慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」であり、底本は原懐紙と推定される。これも直江兼続を中心に、当時の上杉家の家臣・禅僧を含めて総勢十一人からなる百韻である。本百韻の存在は、上述の今井清見氏が『直江城州公小伝』（慧文社、二〇〇八年〔初版一九三七年〕）において指摘されたのが最初であるが、冒頭の三句が掲出されるのみで、出典の記載もなく、その全貌は長らく不明であった。原本に就いて、翻刻と注釈を試みた。

以上、論考と作品研究によって、中世末期から近世初期における武家の連歌・和漢聯句の活動の実態を明らかにしたが、それとともに、歴史学では顧みられることが少なかった、文芸資料を活用することによって、地方の政治・文化を考えるための新たな手がかりを提示した。武家の文芸愛好にとどまらず、その周辺に形成された文化の網目を浮き彫りにし、文学史上未開拓の分野を切り拓くことが本博士論文の最大の目的である。

## 注

1 「武家」という語は、本来、公家に従属し、武芸をもって軍事・警備などを奉仕した集団を指すが、武家が全国の支配を担った室町時代においては、「武家儀礼」「武家故実」の誕生にみるように、公家と対置される、中央の政治権力の概念となった。本稿対象の室町時代末期の「武家」もこのことを前提とする。しかし、中世末期は室町幕府の求心力が衰え、多くの地域で新興勢力が幕府から補任されていた守護大名を倒して実力で統治者となっている。群雄割拠の時代に、かれらを単に「武家」と呼んでよいか疑問は残る。また江戸時代、公家・寺家が政治権力として実質的な力を失うと、幕府が唯一の公権力となり、武家は一般の武士を指す語へと変遷した。室町末期から江戸初期にお

いて「武家」という語が指す範疇は極めて広範でかつ曖昧であるが、文化史的には連歌も和漢聯句も中世から近世へと連続性を保ち、その主たる担い手について他に適当な名称がないゆえ、広く「武家」と称する。

2 「和漢聯句」の語は、狭義には発句を和句、脇を漢句とし、且つ脇句の末が一巻全体の韻を定める入韻句の役割を果たす作品を指す。逆に、発句を漢句、脇を和句とする一巻は「漢和聯句」として区別される。本博士論文では、原則催しとしての和漢聯句・漢和聯句を指しては、「和漢聯句」で総称した。ただし、資料原本や各種目録に「漢和聯句」の表記が用いられる場合はそれらの表記に従った。

第一章 上杉氏の文芸





## 第一節 直江兼続の和漢聯句

### はじめに

春雁似吾々似雁

春雁吾に似たり 吾雁に似たり

洛陽城裏背花帰

洛陽城裏 花に背いて帰る

慶長三年（一五九八）八月一日の秀吉死後、ほどなくして直江兼続が京を去り会津へ帰る時の詩と伝わる。兼続の学問研鑽の姿勢を賞美する際に、諸書でしばしば引用され代表作として知られる。兼続が文武兼備の人であったことは、旺盛な漢籍の蒐集と『直江版文選』に代表される出版事業によって当時から有名で、各方面に影響を与えた。家康側近の俊才、林羅山はこの『文選』刊本を入手して、「此本近歳米沢黄門景勝陪臣直江山城守某、開板於要法寺、余請秋本但馬守泰朝。而後泰朝告景勝、得之以寄余」と跋文に書き加えて珍藏したほどであった！。

兼続は上杉景勝の家宰であり、同家における多彩な文芸活動も、実際には兼続が主催していたといつてよい。ところが、当時からこれほど漢学の素養が注目されながら、冒頭に掲げた詩を含め、現存する作品は乏しい。そのため、教養・文才は、一般向きの概説を除いては、具体的に検討されないうままになっている。

本節では、上杉家内外で直江兼続を中心に行われた和漢聯句会について、その概要を述べた後、兼続の句作の特徴・傾向について分析を試みる。その際、天正期・文禄期・慶長期の三期に区切り、それぞれの時期において聯句会に参加する者はどのような立場の人々で構成されているのかという点と、当時の上杉氏や兼続を取り巻く社会状

況に触れながら、兼続の句風、また位置づけを試みる。

### 一、上杉家関連の聯句会活動

この時期、上杉家が内外で興行した和漢聯句会については、『新潟県史』などにいちおうの指摘があるものの、その全容が分明となつていないと言ひ難い。まして句風の分析などはいまだ着手されていない。

稿者が調査したところでは、現在のところ、兼続が参加した聯句会は、【別表1】に示した通り、十六回に上る。それらの残された作品から、兼続とその前後の句を抄出し注釈しつつ、彼の句作の特色を述べる。なお、百韻の注釈は第三章に掲載したので参照されたい。

和漢聯句の初見は、二十七歳の天正十四年（一五八六）、終見は四十二歳の慶長六年（一六〇一）であり比較的短期間で（兼続はその後約二十年生きるがその間は開催の記録さえない）、毎年欠かさずという訳ではないが、平均すれば年に一、二回の頻度となる。

天正十六年は三度も確認されている。実際、兼続の生涯ではひときわ多忙で、密度の濃い時期であった。興行場所も領国の越後ではなく、むしろ上洛の折に、当時の公家・武家・禅僧・連歌師の著名人と共に開催したもので、彼らと交際して席を同じくした点が注目される。

【別表 1】

	興行年・月・日	興行地	形式	発句	所収史料	所蔵先(原本)	備考
a	天正十四(一五八六)・二・二	越後力	漢和	堯舜二難并	歴代古案・第五	上杉博物館	鈎齋は兼統の号か
b	天正十六・正・廿七	宇津江亭	漢和力	梅為逢春富	直江筋書・一	原本所在不明	
c	天正十六・閏五・三	京紹巴亭	和漢	葉をおもみ夏はうこかぬ柳哉	直江筋書・一	上杉博物館	
d	天正十六・閏五・八	京細川亭	漢和	新竹愛風静		永青文庫	
e	天正十七・九・廿九	越後	漢和	霜葉凱旋錦	上杉家文書	上杉博物館	
f	天正十九・二・廿	京細川亭	和漢	蝶飛にかよふや心花の庭	石鼎集		
g	天正十九・三・七	不明	不明	不明	鹿苑日録		
h	文禄元(一五九三)・六・三	肥前	漢和	館涼山水地	玄旨詠草天正廿年	不明	
i	文禄二・正・十	朝鮮	連歌	我国へ立かへるとしの霞哉	本間文書か	不明	
j	文禄二	京	漢和	楓散風紅色	上杉家文書	上杉博物館	
k	慶長三(一五九八)・三・二	会津力	両吟連歌	しめゆふよこなたかなたの花さかり	甘粕家文書・十三番	市立米沢図書館	清書懐紙
l	慶長五・一・廿一	会津力	連歌	梅か香は空にかすめる春日哉	長野家文書	埼玉県立図書館	清書懐紙
m	慶長五・九・五	会津力	漢和力	不明	直江筋書・一	原本所在不明	「花使弄風発」句のみ伝わる
n	慶長六・十・四	京	漢和	落葉雨天下	直江筋書・二	原本所在不明	鮎川家旧蔵
o	慶長六・十二・十九	米沢	和漢	堂のすみより世にそ出ける	直江城州公傳	慶應義塾大学	清書懐紙か
p	慶長七・二・廿七	米沢	続歌			大聖寺宝物殿	亀岡文殊堂奉納詩歌百首

二、天正期

二―一 天正期の興行状況

毎年のように聯句会が興行されたこの時期、日本国内は動乱期であり、天正元年に武田信玄が没してから、織田信長の手により足利義昭は追放され、室町幕府は滅亡した。上杉家では、天正六年に上杉謙信が死去。後継者争いに端を発する御館の乱を経て、兼統の主君となる上杉景勝が家督を嗣ぐ。兼統は、動乱の最中、景勝を支える存在

となった。同十年の信長の死後には豊臣氏がその権勢を振るい始める。兼続がこのような社会情勢の中、上杉家内外で行った聯句会は、特に上洛先における人脈形成の面で重要な役割を果たしており、謙信亡き後の盤石な政権を築く上で決して無視し得ない。

兼続が奔走するその一方で、主君の景勝はどうであったか。この時期、景勝は発句を詠んで参加をしているが、その後、明らかに発句を詠んだと分かる会は、文禄、慶長年間に各一度のみである。天正期における句作も、一度の会で一、二句のみで、儀礼的なものとなったかと思われる。また、実弟の大国実頼が中心となって、興行された連歌会に同座する者の構成は、兼続と景勝のそれとは異なり、里村家（昌叱、紹巴、玄仍）との交流が盛んであることを押さえておきたい。

天正期<sup>3</sup>（一五八二〜一五九一）に興行された上杉家内外の聯句会は、兼続とその主君である景勝に焦点を当てれば、その初見である天正十年（一五八二）から同十九年の十年間で九回確認される。年次が不明なもの、興行の事実が曖昧なものを含めると十一回に及ぶ。その内、兼続の出座があるものは六回で、さらにその中から原懐紙が残存するか、資料の所在が明らかで、活字として伝わっているものから、彼の句作が判明している作品は四回である。天正十六年閏五月八日の漢和聯句では、豊臣秀吉、徳川家康の政治顧問であり五山文学の担い手として中心的な役割を果たす西笑承兌、歌人の細川幽齋、連歌師の紹巴とともに詠み、亭主が詠む脇句に続いて、第三句目を詠んでいることから、聯句会における彼の実力は、当代一流の文化人の間で、彼の詩作、文才に当時から定評があったことの現れであろう。

では、具体的に、彼の聯句における漢句の作品を読み解き、その趣向、前句との付け方、転じ方の傾向を考察していく。

## 二―二 句作について

兼統の和漢聯句作品で現存最も古いものは天正十四年二月二日、越後での漢和聯句百韻であり、続いて閏五月八日にも細川幽斎邸で興行された会で漢句を詠んだ<sup>4</sup>。

三日の会において、兼統は九句を出す、そのうち六句は、連歌師の里村紹巴の和句に漢句を付けたものか、逆に紹巴が兼統の漢句の後に和句を付けたものであり、両者の親密な関係が窺える。二人は発句と脇句を詠んでいる。慣例であれば兼統が主催して、紹巴を客人としたことになるが、上杉博物館蔵本（来次氏秀筆、慶長九年写）奥書によれば、「越之後州直江氏豊臣兼統公上洛次ニ、於臨江翁之亭興行也、巴公以自筆清書懷紙被投兼公之几下、然後日愚老ニ被与之」とある。紹巴が自筆で懷紙を清書して、兼統に献じたものの転写であるというのである。

1 葉をおもみ夏はうごかぬ柳哉。

紹巴法橋

2 露涼満晩籬（露涼しく晩籬に満つ）

兼統

一般的には、客が発句を詠み、亭主が脇句をつけるという作法だが、ここでは和漢聯句会の捌き手でもあったのだろうか、主人である紹巴が発句で連衆に対して句を投げかけ、兼統がそれに対して応える形で句を付ける。紹巴が、「葉をおもみ」と詠むが、これは、何故柳の葉が重いのか、と次句を付ける者への問いかけとなっている。無論、発句のみで句意を考えれば、葉が青々と茂っているからその重みで柳は風にそよがず、動くことがない、となるのだが、これを兼統は、籬に満ちるほどの露が柳の葉にのっていたからだ、と上手く転じて付けている。兼統は、前句の柳の葉に置く露が、籬に落ちる様で付けた。露の重さによって葉や梢などが垂れる趣向は、漢詩に典拠を求

められるというよりは、むしろ『玉葉集』の「露をおもみ梢たれたるいとぎくから柳が枝にさくかかとぞ見る」（秋・一五六・入道前太政大臣）といった、和歌的な発想に拠っているものと考えられる。さらに「涼」の字で夏の季節をしっかりとうけつつ、「晩」を詠むことで、時分を定めて句を次の展開へと転じやすいように、と次句を詠む者への配慮もなされている。発句の問いを受け止め脇句の機能を果たしながら、前句とは意味を少しずらして転じさせる力量は評価できよう。

続いて、紹巴への傾倒ではこのような事例がある。

12 をくれじ袖をまちつるゝ道

友益

13 烟微村市散（烟微かにして村市散ず）

兼続

14 あらしはげしきをちの山もと

紹巴法橋

12句と13句の関係は、遅れまいと袖を連ねて急ぐ人々が向かった先では、村の市の炊事の煙は微かとなって、市はたたまれた、というものである。14句では、13句で市がたたまれた理由を、激しい嵐が遠くの山の麓で吹いているからだと付けた。

この三句の中で詠まれる「袖」、「烟微」、「市」、「をちの山もと」は、永禄十二年（一五六九）五月二十三日の漢和聯句、

46 煙微 諳市炊（煙微にして市炊を諳んず） 策彦

47 行袖の遠山もとはくるゝ日に 紹巴

という運びと酷似する。ここで注目したのは、これらの句を詠んだ作者である。この漢和は両吟で、策彦が詠んだ漢句に対して、紹巴が和句を付けているのである。天正十六年の句と永禄十二年の句の表現が類想的であるのは、偶然ではなく、兼続がこの永禄年間における句例を意識した漢句を詠み、それを酌んだ紹巴が、永禄年間に自身が詠んだ句を即座に想起して「をちの山もと」と付けた結果によるものと言えるだろう。表現の背景を探る上で興味深い。

次は、典拠ある詞を用いた句例である。

45 花こそはしる人なれど宿かりて

紹巴法橋

46 毀垣處々疑（毀垣 處々疑ふ）

兼続

前句、紹巴の「花」に対して、それが咲く場所の様子を付けた。「毀垣」「處々」といった詞は、その典拠を『三体詩』（上陽宮・寶庠）の「愁雲漠漠草離離、太掖勾陳處處疑。薄暮毀垣春雨裏、殘花猶發萬年枝（愁雲漠漠として草離離、太掖か勾陳か處處疑ふ。薄暮毀垣春雨の裏、殘花猶ほ發く萬年の枝）」に求められる。この当時、『三体詩』は、唐詩のアンソロジーとして広く五山僧を中心に流布したが、この「毀垣」という語に限っては、室町期の和漢聯句に用例を見ない。前句の紹巴の句にある「花」を受けた「毀垣」という語は、破れ崩れた垣根から花を見る「花」を見ると受けた点が巧みである。これは、兼続の漢詩漢学の造詣が、自身の創作に確実に生かされている事例といえよう。

いっぽう、天正十六年閏五月八日の幽齋亭漢和聯句では、難解な句が目立つ。紹巴も参加しているが、ここでは、兼続の句作全九句のうち五句は細川幽齋、大村由己に続けて詠む。先に見たように、常に紹巴と句の応酬をしていたという訳ではなかったのだろう。

2 雨の名残の露の涼さ

玄旨法印

3 影落雲間月（影落つる雲間の月）

兼続

前句の「雨」が止んで、「雲間」から月が見えると付けた。感覚として感じた前句の「涼しさ」を、兼続は月の光の涼しさであると読み換えた。また、露に月影が映っていることを表現し、前句と付いた時、「影落」先が「露」であるという関係となるという付合の趣向に着目したい。兼続の句に見られる「影落」や「雲間月」といった句を構成する語は、「夜深影落寒潭月、水底武侯眠未驚（夜深くに影落つる寒潭の月、水底に武侯の眠り未だ驚かず）」（翰林五鳳集・臥龍梅・仲芳）や「皎皎雲間月、灼灼葉中華（皎皎たる雲間の月、灼灼たる葉中の華）」（淵明集・擬古九首 其七）」といった漢詩に求められる。だが、その付合の趣向は、「秋かぜの露ふきむすぶ竹のはにきよくもすめる夜半の月かな」（林葉和歌集・秋・四三八）といったこれもまた、和歌的な発想に拠るものである。

46 合飲既酔觴（合飲して既に觴に酔ふ） 由己

47 若違金諾土（若し金諾を違へば土となるらん） 兼続

酒宴の様子で付ける。共に飲む、既に盃を交わして酔う、という漢句に対して、『史記』の季布伝の「得黄金百斤、



不如得季布一諾」の一節を下敷きにして、もし相手との堅い約束を破れば、信頼は土のように価値のないものと化すだろう、とする句である。『史記』を基にしたこのような句は和漢聯句に間々見られる。例えば、「かへらんといふ旅はまこと(誠)かノ諾金 何鑄錯(諾金何ぞ錯を鑄ん)」（天正三年十一月二十五日漢和聯句・六七・策彦）、「この葉のなさけに人やなひくらん東ノ一諾直千金」（貞和二年三月四日漢和聯句・二八・枝沢）などと詠まれる。兼続が内外の交渉、執務を担っていたことを鑑みれば、非常に政教的な作風にも受け取れるが、この傾向は慶長期により一層濃くなる。

### 三、文禄期

#### 三―一 文禄期の興行状況

文禄期は、兼続が外部との交流を着実に広げていく時期であった。秀吉の命による伏見城の堀の普請事業への従事に加え、文禄の役における肥前名護屋、朝鮮での活動があった。南化玄興から詩人の万里集九筆写の『前漢書』十二卷の贈呈、博多の貿易商の神谷宗湛からの茶の湯の湯の招待などがあったのもこの時期である。

だが、この時期の聯句会に関しては、興行が行われたという記録のみが伝わるだけで、その全容が明らかとなるような資料に乏しい。唯一、文禄二年の漢和聯句が、兼続の聯句の全容を精密に伝えている。故に、文禄年間の聯句については、この資料を中心に彼の句作をみていきたい。

文禄期（一五九二〜一五九四）の三年間では、上杉家の人物が関与する会は六回を数え、とくに三年には京都において一年に三度興行されている。

その最初のものは、文禄元年六月三日、肥前名護屋における、兼統が主催した和漢聯句会である。幽斎の『天正廿年 玄旨詠草』<sup>6</sup>に記録される。これは三十三句しか収録せず、おそらく幽斎の句とその前後だけを抜書しているのではないかと疑われる。冒頭はつぎの通りである。

直江城州興行 六月三日

館涼山 水地 (館は涼し山水の地)

玄圃

しげる木の間をおつる滝川

玄旨

月自雨 過色 (月自ずから雨過ぎて色たり)

西咲

名前の現された連衆は相国寺の西笑承兌、細川幽斎、南禅寺の玄圃靈三であり、兼統の名声が中央の有力者に伍するものであったことを印象づける。そして遙かな遠征地での興行であることも興味深い。

をのつからおさまれる代は長閑にて

偃戈喜国全 (戈<sup>か</sup>を偃<sup>ふ</sup>せて国の全きを喜ぶ)

征袖客相連 (征袖の客相連なる)

といった句は、いかにも戦陣の雰囲気を受けたとも言えるが、残念ながら誰の句かははっきりしない。

二度目は、二年正月十日の「賦何人連歌」で、景勝が「我國へ立カヘルトシノ霞哉」と詠む発句に兼統が「雪ニ鷹ナクハルノトオ山」と脇句を詠んだと伝える会である。これが正しければ朝鮮での開催となる。だが、これもそれ以外の詳細は伝わらない。

三度目は、文禄二年九月か十月に、兼統が京都で開催したと推定される漢和聯句「楓散風紅色」である。これは百韻全てが残っており、当時の興行状況を確実に知り得る点で重要である。

なお、残りの三回の会は、大國実頼が主催した連歌会であり、天正年間から兼統の聯句会に参加がみられる、玄

仍、景敏、政盛などがメンバーとなっていた。このことは当時の実頼主催の連歌会は、兼続の聯句会と、分離したものでなかったことを示している。

そして文禄二年（一五九三）から慶長三年（一五九八）までは、上杉家による内外の和漢聯句会の興行は確認されてはいない。天正年間からほぼ毎年のように継続的に興行された会が全く途絶えてしまったとは考えにくい。記録及び原懐紙が散佚してしまい、今は伝わらないと考えるのが自然であろう。

### 三―二 句作について

この時期の句を具体的に見てみよう。いずれも文禄二年の漢和聯句のものである。

3 月になる霧の降りそふ瀧おちて

氏長

4 捲簾好賞商（簾を捲きて商を賞するに好し）兼続

いずれ月夜になるであろうが、瀧の落ちるあたりに、霧も降りて来ている、と詠む前句に対して、兼続は、そのような秋の景色が簾を捲いた先に見えて賞翫するのに好い、と付けた。このような趣向の付けは、「むら時雨木の葉ふりしく音たかみ／捲簾冬嶺晴」（天文二十三年一月二十九日和漢聯句・八四・右大臣）、「ひまもなき籬やきりのうちならん／捲簾月影疎」（天文二四年三月二十五日和漢千句・第一・八八・入道宮）など、室町後期の和漢聯句に屢々見られ、好まれたようである。兼続もそのような先行の句例を踏まえて句作していたように思われる。また、「商」は、『礼記』月令に「仲秋其音商」とあるように、五音の「商」を四季の秋に当てたものであるが、

このような「商」の字の詠み込み方は、「影ハ佳ナリ宮ノ裏ノ月ノ氣ハ肅ナリ夜ノ来ノ商」(天正十九年五月和漢千句・第三・一八・永雄)に見られるように、当時の和漢聯句において、珍しいことではなかった。つまり、この句を詠む限り、兼続の句作は、面八句であることも関係しているだろうが、当時の和漢聯句の句例を踏まえた、素直な付け方をした漢句と言えよう。そのことは、八九句についても同様に行なうことができる。

88 鶯亦弄春光 (鶯も亦た 春光を弄す) 西咲

89 吟履為花緩 (吟履 花の為に緩し) 兼続

鶯もまた、春の穏やかな気色を愛でている、という漢句に対して、春の季節で付け、吟じる主体を「鶯」から、詩人に読み換え、吟行する詩人は花を見るため歩調がゆっくりになる、と表現した。「吟履」は、履き物から歩き回る詩人その人を指した語である。戦国期にはよく見られ、万里集九の詩に「吟履踏春鶯路斜、若王子廟共樹霞(吟履春を踏めば鶯路斜めなり、若王子の廟共に霞に樹む)(梅花無尽蔵・一・山房看花)、また武田信玄主催の天文十五年七月二十六日和漢聯句にも「吟履為誰湿(吟履誰が為に湿ふ)」「(三五・湖月)の句が見え、当時の和漢聯句において、よく好まれた表現を用いている。さらに、兼続は「16沙砌履匆忙(沙砌 履 匆忙たり)」「(天正十六年閏五月八日)においても同様の表現を用いている。こうした兼続の句作からは、よく言えば、当時の和漢聯句の句例を学び、好まれた表現を聯句会の中で積極的に詠んでいたと評価出来よう。だが、それでは彼の句の表現は、当時における平均的な趣向の域を出なかつたのか、といえそうではない。

後の太公望となる姜は十年渭水にて釣りをしていた、という前句に対して、水辺にいる鷗で付けた。この句に詠まれる「黜陟」という語は、底本傍書に「進退ゾ」とある通り、功の有無によって官位をあげさげすることである。『古文真宝』に見られ、当時はよく知られていたであろうが、詩に使われた例は見られず、また、室町期の和漢聯句にも見られない。この点は、兼統の漢学学習の成果が、彼独自の創作に活きた例であろう。一句では、俗事と無縁である鷗の自由な境涯を、前句と付いた時には渭水に釣りする太公望が十年間、官位の進退とは無縁であったことを意味しており、付け方も、また「黜陟」という語を使いながらの意味の転じ方も巧みであることが窺えよう。統治者意識は、過去に向かえば、中国古代の著名な帝王や聖人への関心となり、そのエピソードを踏まえているとおぼしい句もしばしば見られる。

71 濁清 胸 不 混 （濁清 胸 混ぜず） 承兌

72 今古 力 擒 強 （今古 力 強を擒にす） 兼統

前句が殷の紂王のことだとすれば、付句も周の武王のこととして、意味上も対句となる。まず「濁清」は、楚辞の屈原の歎き「举世皆濁、我独清（世を挙げて皆濁り、我独り清めり）」（離騷・漁父）からしても、清廉で濁りを混在させなかったの意となる。「胸」とあるので、殷の賢人比干のことが想定される。紂王の暴虐を諫めたところ、「聖人には心臓に七つの穴があると聞く」と言われて、胸を裂かれて殺された（史記・殷本紀）ことを詠む。それに対して、付句の「力」は、筋力・体力、「力拔山兮氣蓋世（力山を抜き気は世を蓋ふ）」（史記・項羽本紀）

などを念頭に、ここは周の武王が武力をもって強大な殷の紂王を討伐したことを想起したか。紂王は自殺したことになっているが、武王が生け捕りにしたとする書も多い。たとえば「文王見罾於王門、顔色不變、而武王擒紂於牧野（文王王門に罾られ、顔色変ぜず、しかるに武王紂を牧野に擒にす）」（韓非子・七・喻老・二二）とある。

#### 四、慶長期

##### 四―一 慶長期の興行状況

慶長年間には、慶長の役、秀吉の死去、関ヶ原の合戦の度に上杉家にとって大きな転換を何度も余儀された時期である。越後から会津への一二〇万石の移封、さらに米沢への三〇万石の減封を余儀なくされた。こうした中にもあつても彼の創作意欲は衰えることはなかった。

慶長年間（一五九八―一六〇一）は、記録上に確認される全五回の聯句会のうち、慶長四年と五年を除いては、その全容が明らかとなる資料に恵まれている。特筆すべきは、慶長三年興行の「賦何人連歌」で、これは兼続と僧其阿の両吟形式の連歌であるが、『連歌総目録』等に見られない、新たな資料である。これまで、兼続が残したものは、主に漢詩、漢句であり、和歌または和句に対する関心を示す資料に乏しかった。唯一『師説撰歌和歌集』からは、彼が和歌を学ぼうとしていたことが認められるが、実際の作品は残存していなかった。紹巴に師事したのだから、兼続は連歌にも触れており、それを学んでいたのは当然とは言える。また、慶長七年には、『亀岡文殊堂奉納詩歌百首』と称する詩歌会が行われているが、これについては第三節で詳しく論じたい。

慶長年間には、兼続の和句を詠んだ連歌会の開催が確認されるほか、百首詩歌会の催しといった、和漢聯句会以外

の文事も初めて見られた時期である。そうしたなかで興行された「慶長六年十月四日漢和聯句（以下「十月四日漢和」）」と「慶長六年十二月十九日和漢聯句（以下「十二月十九日和漢」）」を中心に、この時期の兼統の句作の様相を探りたい。

#### 四―二 句作について

慶長期における兼統の句作の特徴は、国の平和、統治に関する内容が多い傾向にあることだろう。例えば次のような句である。

96 ながれはほそきさは水のすゑ

其阿

97 歌 堯 村 校 樂 （歌 堯 村 校 樂 し）

兼統 （「十二月十九日和漢」）

前句は、叙景の句で、付句は沢水の下流域近くの村校（村の学び舎）の様子として付けた。「歌堯」は、聖天子の堯が治める世は平和であると謳歌することで、和漢聯句では「ゆたかにみゆる民のつくり田／世歌堯与舜（世は歌ふ堯と舜を）」（文明十四年四月二十二日和漢百韻・四五）の用例もある。一句は、堯が治める世を寿ぎ、村中の学び舎は愉しげである、と詠む。付合はさらに「流れは細き」から、史記・李斯列伝などの「是以泰山不讓土壤、故能成其大、河海不擇細流、故能就其深、王者不却衆庶、故能明其徳」という句を想起して、度量の広大な古代の聖王である堯へとつなげたものであろうか。なお、当該句と発想が似る和漢聯句に、「くれぬとや柴とる人のかへるらん／抺野樂歌堯」（文龜三年九月十三日和漢百韻・二二・宗山）が見られており、この句の趣向自体は珍しいも

のではないと言えよう。

次の句も、国の統治に関する句である。

- 5 小舟 風上載 (小舟 風上かぜうえに載る) 秀定  
6 九鼎 國和平 (九鼎 國平らかに和す) 兼統 (「十月四日漢和」)

前句との付け筋が、不明であるが、九つの州が舟で金を献上しに行くことで付けたか。「九鼎」とは、中国の夏の禹王のとき、九つの州から金を貢上させて鼎をつくり、天子の象徴として伝えたというところから重要なもの、天下にならびない宝物のことをいう。夏・殷・周の三代に伝わったとされるものである。天子の象徴であり天下の宝である九鼎は、夏、殷、周の三国に無事に伝え国を平穩に治めたように天下をまるく治める、と詠み、これもまた国の統治に関する句である。「九鼎」は、室町期の和漢聯句には見られず、兼統独自の創作を思わせる。次もまた、治世に関する句である。

- 60 緩歩 雒陽城 (緩歩す 雒陽の城) 玄松  
61 善政 夷懷惠 (善政 夷 恵を懷ふ) 兼統 (「十月四日漢和」)

前句の洛陽で行われていた政治の内容で付けて、正しくよい政治は、地方の民衆にもその恵みが行く届くと詠む。「善政」は、正しく、よい政治の意だが、これもまた、「九鼎」同様に、和漢聯句に用例は見られない。「夷」は、中国で王化の及ばない地方を蔑んで称した言葉で、一般に遠国の民衆の総称として使われる。当該句では、徳の高



い為政者による善い政治は、地方の民衆にも広く遍く、その恵みが行き届くということの意味する。但し、当該句の用例と類似する「夷」は見られない。他方、「懷惠」は、「国のつかさやかぎりあるらし／移居懷惠野」（天正十年四月和漢千句・第一・九三・英甫）にあるように、『三体詩』「送元史君自楚移越」詩、「露冕行春向若耶、野人懷惠欲移家」を下敷きにしていると思われる。兼続もこれらの詩に目を通しており、ここから「懷惠」の語を取捨したのでらう。但し、語をそのまま借りてくるのみであり、原詩の句意をこの句に取り込んでいる訳ではない。

77 塞 向 寒 衣 暖 （向を塞げば寒衣暖たり） 玄松

78 荷 恩 濁 世 清 （恩を荷へば濁世清たり） 兼続（「十月四日漢和」）

前句とは対句の関係で付いている句である。恩を身に受けることは道徳が乱れた世を清くすると詠む。「荷恩」は、恩恵を身に請け負うことで『宗鏡録』に「荷恩慕徳敬仰。歸心承事。親近受道（荷恩徳を慕ひて仰ぎ敬う。歸心を承る事、親近き道を受く）」と見えるが、これもまた室町期和漢聯句に用例のない語である。

最後に、取り上げる句は、典拠にある表現をそのまま借りてくるのではなく、兼続独自に改変した形で詠まれた例である。

48 一<sup>ひとよ</sup>夜のほどに老となりぬる 其阿

49 不 改 旧 花 耳 （改めざるは旧花のみ） 兼続（「十二月十九日和漢」）

一晚のうちにして、我が身は年をとったものだという前句に対して、花はその美しさを変えない、と付けた。一

般に、『禪林集句』の「只改舊時相、不改舊時人」や、『點鐵集』「山川不改舊、歲月逝肯留」（蘇東坡・十七）のように「不改旧時」と詠まれる。兼続は、「時」の字を「花」の語を入れ替え、小改変した上で「花」の句を詠んだ点で、巧みな付け方である。

#### 四―三 兼続の連歌付合

ところで、兼続は連歌ではどのように句を付けているであろうか。和漢聯句とは異なる特色があるだろうか。掲げたのは慶長三年の、兼続現存唯一の連歌「賦何人両吟連歌」の、散逸した二十八句のうちの一部と考えられる（第三章第四節参照）。

D うらみもふかきことのはのすゑ（其阿）

E わすれねとちぎりすてしを忘かね（兼続）

F こゝろづからのおもひならずや（其阿）

G それとしも似たるをえらぶうつし絵に（兼続）

Eは前句Dでなぜ「うらみもふかき」なのかの説明になっている。男が「忘れない」と通り一遍の約束をしそのまま捨てた、そのことが忘れられない、という訳である。ごく自然な取りなしである。

またGには「うつし絵」が詠まれ、漢の王昭君の故事を想起させる。前句Fで「心づからのおもひならずや（自分の心からの物思いではないのか）」と自問する主体を、男性に読み替えた。美人にも関わらず醜い容貌に描かれて、元帝に顧みられなかった王昭君の故事に基づいて付けて、「そうはいっても、（自分の理想に）似ているものをつし絵から選ぶ。（そのようにして女性を選んだのは自身の心によるものではないか）」という意味である。

「うつし絵」は、室町期の和漢聯句に盛んに詠まれた題材で、「淡粧二美兼／うつし絵は物いはさるを思ひにて」（享祿二年六月十日和漢百韻・七三）などがある。当該両吟で見られる点は、兼統の和漢聯句愛好と無関係ではないだろう。D・E・Fとやや発想が停滞した恋句を「うつし絵」という故事を下敷きにして、転換させた付合の発想は、漢学の才に秀でた兼統ならではである。連歌としてもとくに違和感のない出来映えである。もともと無理なくさばける力があるのに、やはり和漢聯句の漢句を出す時は、身構えてしまうのであろうか。

### おわりに

間隔が均等ではなかったので、句風の変遷を見るには、時代区分が有効でなかった面もあるが、京都で活動し貴紳文人たちに認められた天正期、朝鮮出兵の慌ただしい軍旅を縫っての文祿期、そして関ヶ原合戦後に米沢に滅封されて現地で開催した慶長期と、それぞれの環境は際立って特色を挙げることができる。その間、兼統の力量は他人の認めるところで、ほとんどの会で発句・脇句・第三句を詠み、上杉景勝主催の会でも、主人を凌駕して、事実上の主催者として君臨していた。

この時に詠まれる兼統の句は、難解な故事を使うことなく、表現の趣向は和歌的であり、句を構成する語それ自体は漢詩から借りてくるという特徴がみられる。また、「遮莫」、「下若」、「九鼎」、「毀垣」、「黜陟」など、従来の室町期の和漢聯句には詠まれることのないような語を詠み込む。このことは、決して句を徒に難解にしている訳ではなく、ある二字を糸口に原拠となる詩を巧みに示しているのであり、当時の連衆同士であれば難なく、その意味するところが分かるものである。

その他、この章では取り上げられなかった彼の作品には、特に天正期は、「瘦節」、「和暖」、「吟履」など、室町期において好んで使われた表現が多くみられる。慶長期は、国の統治や平和に関する句が多いのが特徴的であるが、これは、この時期が上杉家にとって二度の移封をしていた時であり、全国的にも、秀吉政権から家康へと権勢が移り、時代が大きく転換していたことと決して無関係ではないように思われる。

## 注

- 1 『羅山文集』巻五十四（題跋四）。渡邊三省氏『正伝直江兼統』（一九九九年、恒文社）参照。
- 2 わずかに鶴崎裕雄氏「直江兼統・大国実頼兄弟と寄合の文芸」、中澤肇氏「文化人としての兼統」（花ヶ前盛明氏『直江 兼統のすべて』（一九九三年所収、新人物往来社）などがある程度。
- 3 ここで言う天正期とは、兼統とその主君である景勝の名が聯句会に見え始める天正十年から同十九年のことを指す。以下、文禄期、慶長期もその原則に倣う。
- 4 なお、これより以前の同年正月二十七日、兼統の漢句、「梅為逢春富」に、木戸元齋の和句、「千里をも我園の鶯」の、計二句のみが伝わる漢和聯句の存在が指摘されている。今井清見氏による『直江城州公小伝』及び、『直江筋書』第一巻に記録される。
- 5 この発句は『大発句帳』（夏・四二三四）に見られる。
- 6 永青文庫蔵。土田将雄『細川幽斎の研究』（一九七六年、笠間書院）に翻刻がある。
- 7 兼統と其阿による両吟連歌は、『慶長三年三月二日 賦何人連歌』という目録書名で、市立米沢図書館郷土資料

室に所蔵される。甘粕家文書の一つである。この連歌懐紙は完全な状態ではなく、欠落した箇所があるが、その欠落部の一部である懐紙のツレが、同じく甘粕家文書の『とりのあと』という手鑑に残されている。現在は、巻子に仕立てられているが、紙を接いだ箇所には、連歌懐紙をまとめるための水引を通した穴の痕跡がある。元々は四折の連歌懐紙であったのであろう。

8 『師説撰歌和歌集』とは、木戸元齋が兼統の求めに応じて編纂した注釈書である。室町最末期に書かれた注釈書として貴重なものであり、現存伝本は、天理大学と京都大学に所蔵されている。なお、歌集の翻刻、本文異同、撰歌資料、撰歌基準については、安井重雄・井上宗雄編『師説撰歌和歌集―本文と研究』(一九九三年、和泉書院)に詳しい。

## 第二節 連歌師里村紹巴と上杉氏家宰直江兼続

### はじめに

里村紹巴は安土・桃山時代を代表する連歌師である。連歌師が当時の政治・文化の両面で果たした役割は大きく、日記や紀行、句集などを材料として、その動向を跡づけた研究には厩大な蓄積がある<sup>1)</sup>。とりわけ紹巴の活動は、その日常を知る『紹巴発句帳』に照らすだけでも、実に旺盛であった。

紹巴は、ことのほか地方の大名・国衆（国人領主）らと広範な交際を繰り広げていた。ただし、自身は永禄十年（一五六七）の駿府下向（『富士見道記』）のほかは遠方への旅はせず、ほぼ在京していた。したがって地方との交際がどのように始められ展開していったのか、あまり明らかではなく、わずかに両角倉一氏が「北の蠣崎（松前）慶広から南の島津義久（龍伯）まで多くの地方武将との交流も、文通による指導または地方人の上京の機会の対面同座のものである。」<sup>2)</sup>と触れる程度である。地方の大名・国衆に対する連歌指導には、まず書状のやりとりがあり、その上で彼らの上洛の機会をとらえたものがあることは自然な想定である。

ここに紹巴が、越後上杉氏の家宰である武将、直江兼続に宛てて、みずからの発句十句と詞書を記した抜書一紙の写しが存する（以下「発句抜書」と略記）。これは天正十五年（一五八七）六月のものとして推定される。

天正十五年といえ、関白に就いた豊臣秀吉が、三月には薩摩の島津氏征伐のため自ら九州へと出陣し、十二月三日には東国北国に対しても、関東・奥羽惣無事令を出して私戦を厳禁するなど、豊臣政権が全国を支配下に置こうとする気運の高まった年であった。

本節では、この「発句抜書」の紹介と分析を通じて、これまで知られていなかった紹巴の活動の一端を窺いたい。

かつ当時の地方の武将が中央の文学活動にどのように触れて、また受け止めていたか具体的に考察することにした。

## 一、「発句抜書」の本文と年代

「発句抜書」は、東京大学史料編纂所所蔵の謄写本『和漢篇』<sup>3</sup>に附載される形で伝わる。

『和漢篇』は、いうまでもなく、一条兼良編『連歌初学抄』に収録される、和漢聯句の簡略な式目である。

史料編纂所所蔵謄写本は、二丁表から三丁表の途中までが『和漢篇』で、三丁表の途中から四丁表まで、本節で分析の対象とする「発句抜書」を収める。さらに五丁表には、改めて『和漢篇』の識語（図版1）と「発句抜書」の差出書・宛所・日付（図版2）が原本の書体のままに模写されている。これによる限り『和漢篇』と「発句抜書」は独立しており、一括されて伝わっていて、謄写本作成時に合写されたと考えられる。

『和漢篇』の識語は「此式目者為直江城州／染筆者也林鐘二日／法橋紹巴（花押）」とあり、紹巴が直江兼統のために、みずから書写した旨を明記する。

「発句抜書」も、「筆ノ次ニ如此候直江城州へ／御伝あるべく候也／三日 巴／元齋まゐる」とあり、こちらも原本は紹巴の自筆であったと分かる。そして抜書された発句十句はすべて紹巴の句集にも見え、たしかに紹巴作と認められる。

それでは「発句抜書」本文を紹介する。各句頭に通し番号を打ち、差出書・宛所・日付をAとする。本文ミセケチ右傍の朱書きを『』内に、『紹巴発句帳』における部立と句番号を（ ）内に注した<sup>4</sup>。

三月尽に 於聖護院殿

1 おしむなよ心／＼に花の春 (春・雑春・一八二〇)

うつまさ為慶典法印懐旧

2 むかしおもふね覚せよと『か』子規 (夏・時鳥・六九五)

武州忍樹齋了意

3 花はねにこもる夏野の草葉哉 (夏・夏草・八〇六)

丹州龜山長尾武州御祈禱に

4 去年生し竹はことしの下枝哉 (夏・若竹・八一九)

九州御陣為御祈禱千句

5 もろこしの人も待『ら』し時鳥 (夏・時鳥・七〇一)

於三井寺 聖護院殿

6 山窓の光をそふるほたる哉 (夏・螢・八三八)

越前玄昌所望

7 夏山もたと『ら』て帰る家路哉 (夏・雑夏・一〇五一)

玄札興行

8 五月雨は河上もなく音もなし (夏・青雨・七八〇)

江州先達出峯に

9 茂りそふ庭やすゝ吹深山かせ (夏・新樹・六五四)

六月二日越後蔵田左京亮国理



10 水さむしは『こ』ふしつくか氷室山 (夏・氷室・八七五)

A 筆ノ次ニ如此候直江城州へ

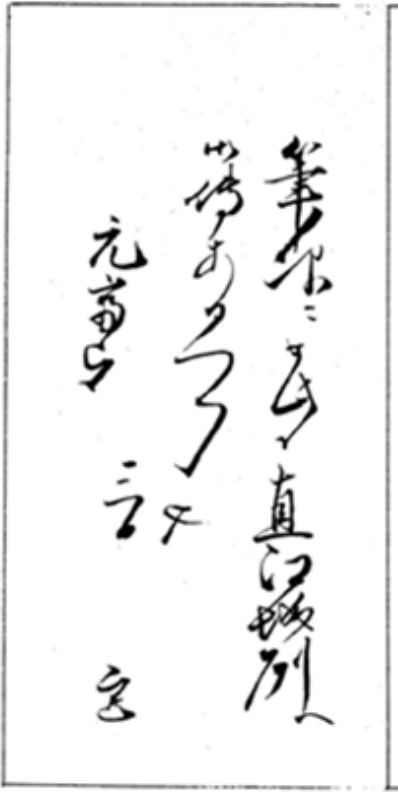
御伝あるべく候也

三日

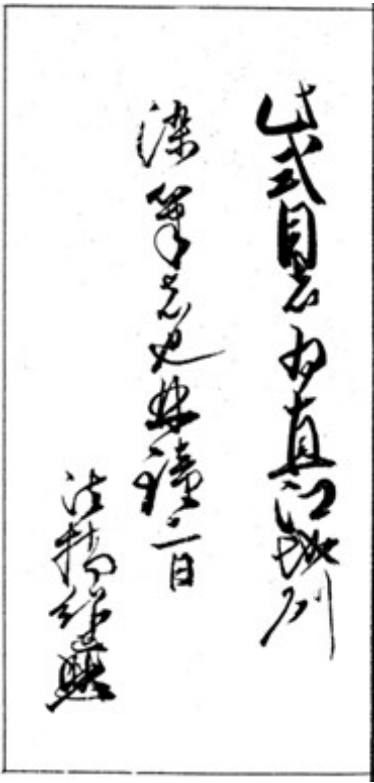
(紹巴)

元齋 まゐる

図版1 東京大学史料編纂所蔵謄写本『和漢篇』識語(五丁表)



図版2 同上所載「発句抜書」差出書・宛所・日付(五丁表)



それでは、これらの発句がいつのものか、また紹巴がいつ抄出したか定めたい。

まず、1・2・10の発句には、その百韻一座の資料が現存している。

1は「天正十五三月晦日於聖護院殿」（九州大学附属図書館細川文庫蔵『玄旨公御連哥』）、2は「天正十五年四月廿二日 懐旧」（宮内庁書陵部蔵『連歌』所収）、10は「天正十五年六月二日何人百韻」（国立国会図書館蔵）である。三つとも天正十五年（一五八七）の百韻であり、また1が三月尽で、2から夏の句となり、5が秀吉の九州遠征を受けてのもの（同年三月一日京都を出立し五月には薩摩に入り島津氏を降伏させた）、8に五月雨が詠まれ、10に「六月二日」とあるので、十五年三月晦日〜同年六月二日に興行された連歌会の発句を興行日順に記した発句抜書であると判明する。

最後にAの差出書・宛所・日付について検討する。「直江城州」とは、山城守を名乗った直江兼続のことである。「元齋」とは兼続の客将であった木戸寿三（休波）の号である。そして、『和漢篇』識語の「林鐘二日」とは陰暦六月二日、「発句抜書」に載る最後の発句も「六月二日」である。

従ってAの「三日」とは「天正十五年六月三日」と考えるべきであろう。紹巴は『和漢篇』を書写し、かつ10の句を詠んだ後、ただちにこれを含む発句十句を抜書し、あわせて兼続に贈ったのである。紹巴六十三歳、兼続二十八歳である。

## 二、直江兼続と紹巴の交渉

それでは何のために紹巴は『和漢篇』と「発句抜書」を兼続に送ったのであろうか。

兼続の文学活動は、すでに前節でまとめた。上杉氏では、天正年間から慶長年間にかけて、連歌会と和漢聯句会

が盛んに行われていた。当主の景勝は参加こそするが、一句のみの出詠がほとんどであり、兼続のそれにはとても及ばなかった。兼続が上杉氏の文学活動を一身に担っていたことが窺える。

また、兼続の実弟大國実頼は連歌会を主催していた。一方、兼続は和漢聯句会への参会と主催に意欲的で、天正十四年二月を初見として、慶長七年まで継続的に確認される。

したがって連歌式目ではなく、『和漢篇』を授けたのは、まさにその需要に叶っていたと言える。

ところで、兼続と紹巴は、これ以前に交渉があったのだろうか。確実な証拠は管見に入らず、これが初めてのやりとりである可能性が高い。

紹巴は北陸には若狭までしか足を伸ばしておらず、越後の大名・国衆とも直接の交渉は確認されない。また、元齋に取り次がせる書札札の存在は、まだこの時点では紹巴と兼続兩人の間には、直接のやりとりがないことを示している。

そこで兼続にこれを取り次いだ木戸元齋に着目したい。木戸氏は関東公方の奉公衆で、武蔵羽生城主であった。天正二年に、後北条氏に属した近隣の成田氏に攻められ、元齋は父忠朝とともに逃亡、上杉氏に寄寓していた<sup>7</sup>。

上杉謙信は、永祿三年（一五六〇）以来、何度も関東に出兵し、後北条氏と抗争した。境界地帯に位置する武蔵・上野の国衆は両氏の間を揺れ動いた。北武蔵最大の国人領主と言われる成田氏も例外ではなく、謙信の侵攻に従うものの、その帰国後には後北条方に戻ることを繰り返した。いっぽう木戸氏は上杉氏への忠誠を守った。元齋はこうして上杉氏家宰である兼続との関係を深め、その代官として活動したのである。

ところで、木戸氏は関東では重代歌人の家であり、文芸でも兼続の相談相手となった。すでに元齋は天正十三年三月に兼続のため古歌の注釈書『師説撰歌和歌集』を著しており、後には兼続主催の和漢聯句会の常連となる。なお、元齋は今川氏真時代の駿府に滞在した三条西実枝より古今集を伝受したといわれ、そこで実枝に随っていた紹巴と知

己となった可能性がある<sup>8</sup>。

以上、若く好学の兼続は、元齋を通じ、連歌師として名声ある紹巴との交際を求めて来たのであろう。それに喜んで応じた紹巴が送ってきたのが『和漢篇』と「発句拔書」であつた。「発句拔書」はいわば自身の近況報告、名刺代わりのような役割を果たしていたと考えられる。

### 三、『紹巴発句帳』と『大発句帳』の問題

ところで、十句はすべて『紹巴発句帳』のうちに見出せた。『紹巴発句帳』は紹巴の発句を網羅的に収め、その詞書とともにこれまで紹巴の伝記資料として利用されてきた。

しかし、「発句拔書」では、この『紹巴発句帳』にはない詞書を有し、しばしば本文の異同も見られる。また、同じく紹巴の発句を含む発句集に『大発句帳』<sup>10</sup>が知られる。これらを比較すると、「発句拔書」は、発句の本文や詠まれた状況について、より正確な情報を伝えていると考えられる。以下五点を挙げる。

1は聖護院で行われた連歌百韻の発句である。「天正十五年三月晦日於聖護院殿」(前掲『玄旨公御連歌』所収)では、本文は「おしむなよ心に句ひ花の春」となっている。『玄旨公御連歌』は後世の編纂<sup>11</sup>であり、興行から年数を経ている。「発句拔書」の「心／＼の」がより自然か<sup>12</sup>。

また、この句は他の2と10とは異なり、『紹巴発句帳』には、底本の明大本には収めない異本句として春(三十七句)の内に見られ、この句を収載しない諸本も多い<sup>13</sup>。紹巴の自作の句ではないという疑いも生じるが、「発句拔書」に記されることで、彼の自作であると信じてよい。

2に関して『紹巴発句帳』では「懐旧」、『大発句帳』では「追善」と記されるのみで、それ以上の情報が得られ

ない。だが、「発句抜書」の詞書から、慶典法印なる人物の追善であることが判明する。

6は、『大発句帳』の詞書に「永原千句に」とあるが、明応九年（一五〇〇）七月十七日成立かとされている『永原千句』に当該句は見出されないし、紹巴の生年より前である。よって、『大発句帳』の詞書は誤りである。

3と9の七句は、懐紙やその写しが現存しないので、「発句抜書」で初めて具体的な興行状況を知り得る。

このように『紹巴発句帳』と『大発句帳』の詞書は、少なくとも「発句抜書」との共通句についていえば、必ずしも正確ではない。両角氏は『紹巴発句集』のうち福井本について、「詞書の豊富さが圧倒的」と述べ、「紹巴の伝記について多くの情報を提供する点に特に注目される」<sup>14</sup>と有用な伝本と位置付けるが、少なくとも5の発句の詞書は再検討の余地があろう。

5の句意は、「はるか唐土の人も郭公の声を待っているようだ」となる。「郭公もろこしまでやまつら山波のはるか雲になくなり」（建保名所百首・松浦山・三五八・範宗）などを踏まえた表現である。さらに「唐土の人も」とあるから、その手前の地（九州）でも郭公の声を待つことになる。つまり秀吉の到来を待つ、という含意があろう。福井本の詞書は「渡唐ノ人所望」とするが、「発句抜書」の詞書に「九州御陣為御祈禱千句」を信ずるべきで、福井本の詞書は、句中の「もろこし」から判断して、紹巴以外の人物が添えた可能性が高い。

その他、福井本に関しては、詞書を有する句は「発句抜書」記載の発句十句のうち、この5のみである。さらに9の本文は「太山かな」という異文があるが、「発句抜書」の「深山かぜ」の方が句意からもふさわしい。

以上、『紹巴発句帳』『大発句帳』の詞書は、伝記資料として活用する際には慎重を期す必要があり、それらの情報はあくまで二次的なものであることが確認された。一方で、「発句抜書」は紹巴が詠句後間もなく自ら記したという点で信憑性が高く、かつ情報量が豊かである。わずか十句とはいえ、紹巴伝のみならず、連歌界の活況を把握できる点、貴重である。

#### 四、「発句抜書」詞書に登場する人物

それでは「発句抜書」の、1と10の句に登場する人物について、紹巴と兼続にとり所縁のある北陸・関東・畿内の三地域に分けて考察したい。

##### (1) 北陸

「発句抜書」中の7と10の発句は、天正期から兼続が定期的に興行・参会していた一連の会と無関係ではない。

7の発句は越前国の玄昌なる人物の所望とある。「夏山」は、

夏山の影を茂みや玉鉾の道行く人も立ちどまるらん(『拾遺集』夏・一三〇・紀貫之)

のように、その木陰に立ち寄り涼をとることが本意となる。したがって句意は、「樹木が青々と茂る夏の山にも涼を求めずに、家への道を帰るよ」となる。玄昌の帰国に際して興行された会の発句と考えてよい。

「玄昌」は出自不明だが、「昌」字を持つので、神余越前守昌綱(？く一五三二)の関係者である可能性がある。神余氏は代々上杉氏の雑掌として在京し、中央の動向を本国に伝達する役目を担った。昌綱の孫親綱(？く一五八〇)は御館の乱で景虎方に付いて討たれ、天正十五年には神余氏本流は既に滅亡していたが<sup>15</sup>、昌綱に近い人物が「昌」の字を賜ってから、世代を跨いでこの時期まで越前にいた可能性も排除できない。

10は、『紹巴発句帳』以外に、他出の百韻がある。伝本は二本(国会図書館本・酒田光丘文庫本)あり、酒田本では興行月日を「文禄五年卯月五日」とするが、「発句抜書」の詞書より正せる。

「蔵田左京亮国理」とは、伊勢外宮の御師にして、青苧座商人としての横顔も持った蔵(倉)田氏の一門である。当時「蔵田左京亮」は上杉氏支配下にある糸魚川の伊勢領の代官でもあった<sup>16</sup>。さらに外交使節の役割も果たし、天

正十一年正月、秀吉との提携にあたり、景勝の命を受けて誓書を帯して上洛している（『越佐史料』巻六「蔵田訴訟書」）。詞書によってその実名が知られる訳である。なお兼続はその近親とおぼしき「蔵田千代松」に仮名与五郎と名字「泰」字を与えており（「某年正月四日兼続書状」『上杉家文書』七九九号）、蔵田氏には主人として臨んでいたことが分かる<sup>17)</sup>。

この発句は、上洛した国理を迎えて、京都で催された会のものと推定される。句の眼目は「氷室山」で、「氷室ハ冬の氷雪を納め置て、六月朔日に天子へ奉る例也」（『産衣』）とある通り、貯蔵した氷を夏に山から運ぶ風習を踏まえる。句意は、「水はつめたい、それは氷室山から運ばれてきた氷の雫だからなのか」となる。六月、京都は暑いが、水がつめたく感じられるのは、六月朔日の献氷の風習にならって山からもたらされた氷のためである。同時期に京都と比せば寒さが残る北国越後から蔵田がその寒気をまもってやって来たからだ、と上洛した国理を迎える気持ちが含蓄されよう。実際に派遣したのは兼続であろうから、ここに記すのも当然である。

## （2） 関東

3は、詞書が「武蔵の忍の樹齋了意の会の発句に」と解される。「樹齋」とは、連歌師了意（古筆了意とは別人）の齋号である。天正十六年に興行された、所謂『了意千句』の諸本に「樹齋千句」と題するものがあり、「樹齋」は了意と同人と見てよい<sup>18)</sup>。

了意は、連歌を愛好した武蔵忍城主成田氏長に仕えていた。戦国軍記の『後北条記』巻第六「松田陰謀露頭之事」<sup>19)</sup>に、

上野国忍の城は、成田下総守氏長居城也。（中略）然るに城の下総守氏長、日比連歌の上手にて有しかば、了意と云名人を抱へ置き、多年此道をたしなみにし、了意上洛し、先年紹巴と同道して、関白殿へ謁し申、かねて御存じありし程に、了意を以て、内々忠節可<sub>レ</sub>申由、被<sub>ニ</sub>申入<sub>一</sub>。関白殿大に悦び、「内々可<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>出仕<sub>一</sub>」との儀也。

とある。天正末年、主君氏長の命令で上洛して、紹巴を通じて豊臣秀吉に拝謁したと伝える。「発句抜書」の詞書は了意の活動を裏付けるもので、了意が上洛して催した会に、紹巴が発句を寄せたのである<sup>20</sup>。

ところで、成田氏は上杉氏と後北条氏との間で帰趨定まらなかったことは先に触れたが、この頃は北条氏政に服属しつつも、独自の人脈によって京都との連絡を保とうとしたのであったらしい。上杉氏からすれば、成田氏は敵方であり、氏長の意を受けた了意の上洛に、兼続も関心を払っていた可能性はある。

事実、成田氏改易後の文禄二年（一五九三）冬と考えられる兼続主催の漢和聯句百韻には、浪人となった氏長、了意、そして元齋が参加しているのである<sup>21</sup>。

句意であるが、「春は根に冬ごもりせし梅の花」（壁草）などを参考にすれば、「春に咲いた花は今根に隠れ、さらに夏野の草葉が繁茂して覆い隠しているよ（それくらいに夏が深まった）」となる。それは「妻もこもれり」（『伊勢物語』十二段）と詠まれた武蔵野を想起させ、そこから上洛して来た了意を迎えるのにふさわしい句となっている。う。

### （3）畿内

「発句抜書」のうち、京都及びその周辺の人物が関係する句が最も多くを占める。

まず、1と6の「聖護院殿」とは、聖護院門跡道澄であり、紹巴と昵懇であった<sup>22</sup>。上杉謙信と盟友関係にあった関白近衛前久（前嗣）はその兄であるが、道澄自身も永禄三年（一五六〇）九月、前久とともに越後国に下向したと伝えられ（『北越軍記』）、さらに謙信の関東遠征と小田原城攻めにも同行した<sup>23</sup>。上杉氏とは最も関係の深かった貴人であった。

なお9は、詞書に「江州先達出峯に」とあることから、近江の先達が熊野から無事に戻ってきたことを祝い、宴を催す坂迎えの連歌であったことを示唆する。当該句で「すゝ吹」と詠むことは先達が熊野の峯を越えて来たことの証



左となる<sup>24</sup>。聖護院の本山派山伏を導いた先達なのである。

8の「玄札」は、弘治三年（一五五七）の大覚寺義俊興行の千句に、紹巴と共に参加した人物か。その外の活動は見られないが、義俊も近衛尚通の男であり、道澄や近衛家に近い人物である。

ついで2の「慶典法印」とは、太秦真珠院の僧と考えられる。たとえば『言継卿記』永禄十三年五月十二日条に紹巴が「太秦真珠院」の使者となつて、三日後の連歌会への参加を乞う記事が見られ、十五日条に「真珠院慶典法印」とある。同記によると和歌・連歌に熱心で、月次会も開くほどで、紹巴の後援者の一人らしい。上杉氏や兼統との関係は不明だが、当時の連歌界の有力者であつたと思われる。没年は不明であるが、詞書に「懐旧」とあることから、天正十五年には没していたことが分かる。

4の「丹州亀山」とは、3の詞書同様に、「丹波の亀山」と解せる。「長尾武州」とは、豊臣秀次の実父で、秀吉の姉の夫である三好吉房であろう。素性・経歴とも不明の点が多く、政治的業績も乏しい人物であるが、当時「長尾武蔵守」を名乗っていた<sup>25</sup>。藤田恒春氏によると、「秀次の父は、初め木下弥助と称し、また長尾氏とも称し、のちに三好吉房あるいは昌之と名乗り、実子秀次が秀吉の養子となるに及び羽柴氏と改称」したという<sup>26</sup>。天正十八年（一五九〇）には秀次の尾張転封とともに尾張国犬山城へ移っているので、これ以前の「発句拔書」では長尾氏を称していても矛盾はない。

発句の句意は、

植ゑて見る籬の竹の節ごとにこもれる千代は君ぞ数へん（『千載集』賀・六〇七・藤原公教）

のように、常緑の「竹」が縁起物であることを踏まえ「昨年植えた竹はその色を変えずに今年は下枝となっているよ」と祈禱連歌として、紹巴が願主である三好の変わらぬ権勢を祈願する句となる。秀次が秀吉の後継者となることは確定していたから、その実父である吉房に阿るような句であつたとしても不思議はない。

ところで5は秀吉の九州征伐のことであり、兼続らも多大の関心を寄せた。秀吉が凱旋すると、すぐ「直山（兼続）舎弟（大国実頼か）」を上洛させている（「天正十五年十一月二十二日増田長盛石田三成連署副状」『上杉家文書』八二九号）。

以上、ここに登場するのは、紹巴との関係はもちろん、上杉氏および兼続とつながりを有するか、強い関心を向けていたであろう人物であり、「発句抜書」がかれらの京都における動静を伝える役割を果たしていることが分かる。発句が会の趣旨、主催者として現れる彼らの状況をも含むからであろう。

##### 五、史的価値―兼続上洛後の活動との関係

「発句抜書」がもたらされた翌年の天正十六年四月、兼続は主君景勝と共に二度目の上洛を果たす。兼続は知られる限りでも立て続けに四度の和漢聯句・漢和聯句に参加した。閏五月三日に紹巴亭の和漢聯句、同月八日に細川幽齋亭で張行された漢和聯句<sup>27</sup>では、兼続と紹巴の同座が初めて確認できる。

とくに八日の漢和聯句には、紹巴・元齋のほか、当代を代表する文化人細川幽齋、五山僧で秀吉の外交顧問として活躍する西笑承兌、秀吉の近習大村由己らもいた。

京都の一流の文化人の間に、兼続がただちに受け容れられたことは、紹巴の手引きによるところが大きかったことは想像に難くない。そこで前年、兼続が紹巴に交際を求め、返答として「発句抜書」が送られていたことは、この意味でも注目する必要がある。

それでは天正十五年に、兼続はなぜ紹巴に接触しようとしたのか。もちろん和漢聯句ははじめ文学愛好熱が一つの動機であろう。現に、紹巴によって京都での人脈が広がるのと同時に、兼続の周囲にも「紹」の一字（偏諱）を持つ、

紹巴一門とおぼしき連歌師が複数現れるようになり、<sup>28</sup> 国元での文学活動を活性化させたと思われる。

もう一つ、当時の越後の情勢、また中央との交渉も考慮する必要がある。以下に略記したい。

上杉氏がかねて越後国内の統一を目指していたが、大きな障害となったのが北越後の国衆（揚北衆）、とくに中心人物の新発田重家である。この問題に対応するために、景勝は秀吉との関係を急速に深めていった。<sup>29</sup>

天正十四年六月、景勝と兼統主従は初めて上洛し、秀吉に拝謁した。景勝は秀吉の推挙により従四位下左少将に任じられ、上杉氏は豊臣政権の傘下に入るようになった。

景勝は秀吉の茶の湯に招かれ、聚楽第の竣工を祝うなどしたものの、国内の脅威に対応するため、短期間の在洛で終わった。兼統にも文雅の交わりに耽る余裕はなかった（『天正十四年御上洛日帳写』）。

秀吉の国内統一の厳命を受ける形で、慌ただしく帰国した後、合戦の準備を進め、翌十五年十月二十五日、景勝は新発田重家を討った。兼統の貢献は多大であり、戦闘の指揮はもちろん、上杉氏の影響力が及びにくかった揚北衆への出陣要請と交渉を一手に担っている。<sup>30</sup>

天正十五年の春から秋、すなわち「発句抜書」を紹巴から受け取った時期、兼統は多忙を極め、前年初めて見聞した京都の文物を憧憬しつつ、越後からは一歩も離れられない、といった状況にあった。兼統から交際の申し入れを受けた紹巴の側では、兼統の事情を十分に汲んでいたであろう。

秀句・手本を示すためだけならば、禁裏・公家と同座した席で詠んだ発句を記したはずである。だが、そうした句を紹巴が入れなかったことは、兼統の所望による以上、彼にとって必要な情報のみをとくに取捨選択したことのあるあらわれであろう。

「発句抜書」は、一見すれば、連歌の発句と詞書が書き記された、純粋な文芸的営みとして位置づけられる。しかし、それだけの評価では十分ではなく、上杉氏の家宰直江兼統と連歌師紹巴との最初の交渉を示す史料であり、かつ

紹巴がいかにかに如才なく、兼続が置かれていた状況に照らして、適宜発句を選び取って、掲載していたかがよく分かり、戦国武将と連歌師との関係に、さらに陰翳を与える史料と言える。

### おわりに

戦国期、この「発句抜書」のように、連歌師が一紙に、複数の自作の発句を記して、門弟に伝えることはしばしば確認される<sup>3)</sup>。零細なものであり、あまり注意されていないが、詳しく分析すれば、連歌師の活動と相手への配慮を知ることができる。

これは発句の文芸性が高まり、やがて独立していくという文学史上の流れに位置づけられるが、発句が会の行われた状況をもよく反映するからこそ、遠方の武士にも、会衆のありさまや当時の状況が伝わったのであろう。

そしてこうした発句抜書には、しばしば詞書が付されたが、後人の編纂による発句集よりも、当時の興行状況が詳細に且つ正確に記され、その資料的価値にも注意すべきであろう。

### 注

1 紹巴の伝記は、奥田勲氏「紹巴年譜稿(一)」(四)、『宇都宮大学教育学部紀要』第一部一七〜二三号、一九六七年(七三年)、小高敏郎氏『ある連歌師の生涯…里村紹巴の知られざる生活』(一九六七年、至文堂)、両角倉一氏『連歌師紹巴―伝記と発句帳』(二〇〇二年、新典社)を参照した。

紹巴の紀行及び発句集に関しては、湯之上早苗氏『発句帳 資料と研究』（一九八五年、桜楓社）、宮脇真彦氏「紹巴・昌琢における発句の問題―連歌と俳諧の交渉に関する前提として」（『東横国文学』二七号、一九九三年）、岸田依子氏「紹巴の旅―『紹巴富士見道記』をめぐって」（『連歌文芸論』二〇一五年、笠間書院）などを参照した。

2 前掲注1 両角氏著書。

3 函架番号二〇三一・六〇。袋綴。一冊。縦二八糎、横一九・三糎。全五丁（内墨付三丁）。内題「和漢篇」。本文に訓点なし。ままた朱の書入あり。裏見返しに「右和漢篇／羽前国西置賜郡書記角永吉蔵本明治三十一／年七月採訪三十七年十一月謄写」と識語があり、角永吉氏が所蔵していた原本と思しき本を謄写したことが判明する。現在、原本の所在は不明。なお、上杉博物館所蔵『読史堂叢書』第四集（函架番号一四七五・一四・三）にも『和漢篇』と題して原本から転写されているが、本文は誤りが多い。図版1・2の謄写も欠く。

4 引用と伝本の略称は、注1前掲両角氏著書による。底本は最終稿的伝本とされる明治大学本。

5 紹巴の誕生年は、大永四年（二五二四）と大永五年の二説がある。天正十一年閏一月以後の「紹巴六十賀何木百韻」に拠ると大永四年の誕生。

6 第一章第一節参照。

7 富田勝治氏『羽生城と木戸氏』（中世武士選書第3巻、二〇一〇年、戎光祥出版）、渡辺憲司氏「近世武家歌人佐川田昌俊の出發」（『近世大名文芸圏研究』一九九七年、八木書店）等参照。

8 『古今伝授血脈』（横井金男氏『古今伝授の史的研究』一九八〇年、臨川書店）。また紹巴は関東に赴いてはなないものの縁が深く、広範な人間関係を築いていたとされる。佐藤博信氏「連歌師昨夢齋紹旨に関する考察」（『中世東国政治史論』二〇〇六年、塙書房）参照。

- 9 「発句拔書」と『紹巴発句帳』の底本(明大本)以外の諸本との間には、主として以下の異同が存する。
- 3 花はねに―花の根に(天理B)、5 もろこしの―もろこしや(柿衛)、7 たどらで―たどりて(柿衛・廣大金子)、
- 8 河上もなく―川上もなく(柿衛・廣大金子)、9 深山風―太山かな(廣大福井)、10 水さむし―水さひし(柿衛)。
- 句と詞書の両方を有さないのは、1の句で天理A、国会、柿衛、廣大金子の四本、6の句で天理B、7と9の句で大谷大。なお、国会本は1・2・4・7・9の五句で句と詞書を有していない。
- 10 成立刊行の時期は、慶長十二年(一六〇七)春頃から同十九年十一月二十五日までの間とされ、編者は玄仍或いは玄仲といった門人が想定されるが、特定には至っていない。
- 11 九州大学附属中央図書館細川文庫蔵本。『連歌大観』第三卷(鈴木元氏解題)参照。
- 12 『紹巴発句帳』は「心々の」と記載し、「発句拔書」と一致。
- 13 注1前掲両角氏著書。1は過渡的伝本とされる福井本・大谷本・天理B本にのみ収録される。
- 14 注1前掲両角氏著書。明大本・福井本・大谷本・天理C本は紹巴没後の成立で、子息玄仍の編集である。
- 15 神余氏については小林健彦氏『越後上杉氏と京都雑掌』(二〇一五年、岩田書院)参照。
- 16 『戦国人名辞典』(二〇〇六年、吉川弘文館)「蔵田左京亮」(市村清貴氏執筆)参照。
- 17 なお、慶長四年十月二十五日の連歌会(今井清見氏「直江筋書」所収)と同七年四月二十七日の「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」に「蔵田忠広」の名が見え、上杉氏の会津、米沢への滅封後も蔵田氏との関係が保たれていた。
- 18 たとえば、豊橋市立図書館蔵本では原外題に「樹斎千句連哥 紹巴判」とする。
- 19 『後北条史料集』(第二期戦国史料叢書1、一九六六年、人物往来社)による。底本は内閣文庫所蔵旧和学講談所本。
- 20 成田氏長自身も、天正十八年と同十九年に興行された連歌百韻に紹巴と同座し、接点が見出せる。また、『天正後

北条記』の「成田下総守降参之事」（注19前掲書による）には、後北条氏滅亡の際に、紹巴の取りなしで助命されたことが見える。

21 第三章第三節参照。

22 中本大氏「天文・永禄年間の雅交―仁如集堯・策彦周良・紹巴そして聖護院道澄―」（『古代中世文学研究論集』第二集、一九九六年、和泉書院）参照。

23 近衛通隆氏「近衛前久の関東下向」（『日本歴史』三九一号、一九八〇年）。

24 実相院義運の入峰に際して詠まれた正徹の歌に、

このたびは安くぞこえんすず分けてもとふみなれし岩のかけ道（『正徹物語』一九六段）とある。「すず」は「簞」（篠竹）に「鈴」を掛け、鈴を手にして篠竹を踏み分けて修験道の道場である大峰（吉野から熊野に続く山系）を越えていくことを詠む。

25 近世の史料ではあるが、天野信景編『尾張国人物志略』の「近世尾張国出生武林略」の項に、「長尾武蔵守吉房（智多郡大高村人秀吉妹之夫入道メ号ニ一路ニ健性院三位法印日海之也）」の呼称が見られる。

26 藤田恒春氏『豊臣秀次』（人物叢書、二〇一五年、吉川弘文館）参照。

27 永青文庫蔵。翻刻に大島富朗氏「翻刻「細川幽斎和漢・漢和聯句」その1（上）」（『学苑』六七四号、一九九六年）がある。

28 天正十七年九月二十九日漢和聯句「霜葉凱旋錦」（『上杉家文書』九六五号）に「紹看」、文禄二年漢和聯句（注21参照）に「紹旨」、兼統の実弟大国実頼主催の文禄三年八月三日何人百韻連歌（連歌合集四九）に「紹与」がそれぞれ見える。うち、紹旨は安房里見氏の一門で、紹巴から一字を受けて活動した（注8前掲佐藤氏論文に指摘）。

29 景勝と豊臣政権との関係は、尾下成敏氏「豊臣政権の九州平定策をめぐる―天正十五年七月から同十九年十二月

までの時期を中心に―」（『日本史研究』五八五号、二〇一一年）、花ヶ前盛明氏編『上杉景勝のすべて』（二〇〇八年、新人物往来社）などに詳しい。

30 兼続の重家の乱での働きは、阿部哲人氏「上杉景勝の揚北衆掌握と直江兼続」（『新潟史学』六三号、二〇一〇年）参照。

31 同様の発句抜書として、たとえば「里村紹巴自筆連歌 仲冬十一日」（東京大学史料編纂所蔵「志賀楨太郎氏所蔵文書」、三〇七一―二五―四。「紹巴発句」と略記）がある。いつ、誰のために執筆したかは不明であるが、末に「老筆」とあることから晩年であろう。彼が晩年に及んでもなお、地方の武士に発句の抜書を送っていた例といえよう。



### 第三節 戦国末期の詩歌会

#### はじめに

慶長七年（一六〇二）二月、上杉家の家臣と所縁の武将・僧・連歌師、計二七人が和歌六七首・漢詩三三篇、計百の詩歌を日頃崇敬する文殊堂に詠進した。『亀岡文殊堂奉納詩歌百首』（以下「亀岡百首」と略記）である。

「亀岡百首」には、初代謙信急死後、関ヶ原合戦までの動乱期に、上杉家を支えた家宰直江兼続とその実弟大國実頼が参加しており、中心的な役割を果たしていたと考えられる。上杉家は五大老として豊臣秀吉に仕えたが、彼の死後、関ヶ原合戦で敗戦し、会津から米沢へと移動させられ、石高も大幅な減封となった。「亀岡百首」はそのわずか二年後に開催された会として注目される。

当該百首は、地方史研究でしばしば言及され、翻刻や部分的な注解も少なくない。しかし、先行研究はいずれも明治・大正期の米沢の郷土史家今井清見氏の調査<sup>2</sup>を敷衍するに止まる。原短冊は現在、山形県米沢市東置賜郡の大聖寺文殊堂宝物殿に「百首短冊」の名で所蔵されるが、短冊には伝来過程で生じた欠損・摩滅がある。原短冊とともに転写本を用いて復元する必要があるにも関わらず、それらの存在に関する指摘がなく、また詩風・歌風の特徴も具体的に検討されていない。

そこで本節では、まず「亀岡百首」原短冊、及びそれを書写した諸本の書誌的調査をもとに、それらの成立状況と系統について整理したい。ついで参会者と歌題の配列を検討し、当時の戦国武将らの歌風的一端を明らかにする。また「亀岡百首」は詩題と歌題が同時に採り取られた後、「続（継）歌」<sup>3</sup>の方式に則って一つの百首歌として継がれたが、そうしたものの原短冊が現存する事例としては早く、注目される。この「続歌形式を取った詩歌百首」という作

品形態に着目して、通時的な考察を加えたい。当時、和と漢が融合した「和漢聯句」の会が地方でも盛行していく中で、既存の「統歌」の形式を超えた、新たな作品形態の需要があったと考えられる。そのことを伝える資料として、「亀岡百首」を戦国期の文学史上に位置づけたい。

一、上杉氏文芸活動における位置

「亀岡百首」について述べる前に、まずは当該百首が催されるまでの上杉家の文芸活動を概観したい。なおその際、その活動が顕著になる、謙信の後継者景勝、そして彼の家宰であった直江兼統の時期に焦点をあてる<sup>4)</sup>。

表 1

(凡例)  
◎：従末編分の会

★	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎							
p	o	n	m	l	k	j	i	h	g	f	e	d	c	b	a
慶長七・二・廿七	慶長六・十二・十九	慶長六・十・四	慶長五・九・五	慶長五・一・廿一	慶長三(一五九八)・三・二	文禄二	文禄元(一五九三)六・三	天正十九・三・七	天正十九・二・廿	天正十七・九・廿九	天正十六・閏五・八	天正十六・閏五・三	天正十六・正・廿七	天正十四(一五八六)・二・二	
米沢	米沢	京	会津力	会津力	会津力	京	朝鮮	肥前	不明	京細川亭	越後	京細川亭	京細川亭	宇津江亭	越後力
統歌	和漢	漢和	漢和力	連歌	両吟連歌	漢和	連歌	漢和	不明	和漢	漢和	漢和	和漢	漢和力	漢和
	堂のすみより世にそ出ける	落葉雨天下	不明	梅か香は空にかすめる春日哉	しめゆふやこなたかなたの花さかり	楓散風紅色	我国へ立かへるとしの霞哉	館涼山水地	不明	蝶飛にかよふや心花の庭	霜葉凱旋錦	新竹愛風静	葉をおもみ夏はうこかぬ柳哉	梅為逢春富	堯舜二難并
	直江城州公傳	直江筋書・二	直江筋書・一	長野家文書	甘粕家文書・十三番	上杉家文書	本間文書か	玄旨詠草天正廿年	鹿苑日録	石鼎集	上杉家文書		直江筋書・一	直江筋書・一	歴代古案・第五
大聖寺宝物殿	慶應義塾大学	原本所在不明	原本所在不明	埼玉県立文書館	市立米沢図書館	上杉博物館	不明	不明		上杉博物館	永青文庫	上杉博物館	原本所在不明	原本所在不明	上杉博物館

表 1 には「亀岡百首」

が行われるまでの十六年間に於ける上杉家の文芸活動を示した<sup>5)</sup>。天正から慶長年間にかけて、上杉家内外で連歌・和漢聯句といった連文芸が盛行していた。毎年欠かさずと

いう程ではないが、この時期に上杉家が文禄・慶長の役、二度の移封を経ていることを考えれば相当な頻度であり、

注目すべきであろう。謙信の時代、またそれ以前にも上杉家ではこうした催しが確認できるが、景勝の治世前半の十六年間に特に集中して行われており、そして、それら一連の会には兼続の存在が欠かせなかったことも分かる（後掲表2）。

兼続は、どの会においても漢句の担い手として登場しているのである。彼の学問の業績は、世にいう「直江版」を出版した事実が集約されることが多く、彼の関心の中心が漢学にあったといわれるのが定説である。だが、古歌とその注解を載せる『師説撰歌和歌集』の編纂を知己の歌人木戸元齋に命じ、さらにkに掲げた僧其阿との両吟連歌の存在も明らかとなったことで、少なからず和文にも関心を抱いていた事実も分明となった。

このように、漢学のみならず和歌にも関心を示した兼続を中心とする一連の文芸活動の、最後に位置づけられるものが、「亀岡百首」である。以上を押さえ、「亀岡百首」の検討に入る。

## 二、成立と諸本

「亀岡百首」の翻刻は既に多数提供されているが、底本は必ずしも明瞭ではなかった。原本である「百首短冊」が伝来しているので、一見本文に問題ないのだが、それには欠損・摩耗があり、転写本も視野に入れる必要がある。まず「百首短冊」及び、新たに見出した転写本二冊について簡略に紹介し、拠るべき本文を確定したい。

### (1) 百首短冊（原本） 折帖一帖。

大聖寺蔵。原短冊（三六・八×五・五糎）を半丁五枚ずつ台紙に添付して、折帖一一丁に仕立てたもの（四一・四×二九・二糎）。但し、表紙は原装だが短冊が貼付される台紙と共に、後人による数度の補修の痕がある。7番目の短

冊は剥落しており九十九枚を存する。短冊は自詠自筆。題は大国実頼筆。裏見返しに、「寛永五年戊辰五月廿五日法印良永／詩歌九拾九枚仍第七番梅有遲速ノ短尺書副／和歌之出題大國但馬守實頼／頭書称号寛文八戊申霜月廿七日大聖寺住法印宥舜」と書入れがある。

(2) 文殊寺詩歌百首 (A本) 写本一冊。(K九一・MO)

市立米沢図書館蔵。外題「文殊寺詩歌百首」。宝永五年(一七〇八)写。末尾に作者の略伝と出詠数一覽あり。二〇丁。(一七・五×一四・二糎)。

(3) 慶長七年奉納詩歌 (B本) 写本一冊。(K九一・Ke)

市立米沢図書館蔵。外題「慶長七年奉納詩歌」。一四丁。奥書なし。外題下方に打付書き「清水」、内題下方に蔵書印「(□矢) 清水氏」。(一九・七×一二・八糎)。

以上、の三本の関係及び成立時期の検討を進める。まず序を掲げる。この序は原本及びA本に見え、原本では折帖に書き込まれている。

奥之西羽之南有山名曰亀岡／昔有徳一大師者於本朝安文／珠室利像者五所此山便是／其一也無緇無素詣此山／默  
禱心事則無願不成矣今／茲慶長壬寅仲春廿七莫／豊臣氏兼統公携二十余員之雅／友入于此山賦唐詩和歌一百篇／  
其詩之妙也其歌之奇也裁／錦緑磨金玉寔千年之風致／也聚作一冊以需予書題辞擲／揄者数回雖然蔽命不獲已謾／  
序

前花園泰安玄劉 (印)

傍線中の「慶長壬寅仲春廿七莫」が興行された時期と定められよう。また、序の筆者「前花園泰安玄劉」も当該百首に参加し漢詩七篇を詠む。泰安は臨濟宗妙心寺派の僧で南化玄興(一五三八〜一六〇四)の弟子である(『正法山宗派図』)。南化は兼統と頗る親しく、その弟子の泰安を会に招いて、序を記させたのであろう。

波線部からは「亀岡百首」が行われて、その後まもなく百枚の短冊が、泰安の手によって製本され、春、夏、秋、冬、恋、雑の部立の順、すなわち四季進行配列に則って貼られ、現在伝わる百首短冊の形と成ったことが分かる。但し早く7番目の「梅有遅速」短冊は失われており、ついで寛永五年（一六二八）に法印良永の手によりそれが補われ、さらに寛文八年（一六六八）に法印宥舜によって詩歌の作者に関する情報が加筆された（点線部参照）。その後、宝永五年（一七〇八）にはA本が書写された。そして明治期にはA本を書写したと思われるB本が成立した、と考えられる。

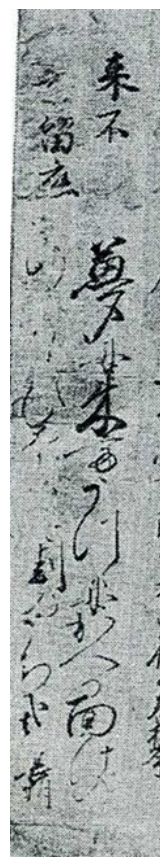
もちろんA本が百首短冊を直接写したとは断定しえず、間に何本か介在していた可能性は否定できない。だが、このことはA本の資料的価値を低めるものではない。

慶長七年百首短冊成立時から間もない寛永五年の時点で原本では既に7番目の短冊の補入が行われていた。また、時期は不明だが28番目「螢入簾」の短冊も剥落し空白のままとなっている。さらに、61番目には『拾遺愚草員外』（雑・十五首歌・赤・三三七六）の所収歌「しぐれつる雲も日影に染られて紅葉をおろすみねのこがらし」が記された、百首短冊とは無関係の短冊が補われる。一方、A本にはたしかに亀岡百首の会で詠まれたと推測される28番目「螢入簾」と61番目「松雪」題の詩が書写される。

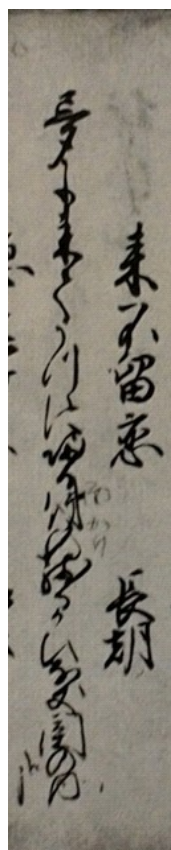
他にもA本の資料的価値が高いことを示す例がある。百首短冊は全体の摩滅が激しく、判読不明な箇所が五十首以上あり、詩歌本文が全て判読出来ない短冊も数多い。図版1は摩滅して判読不能となった短冊（75番）の文字をA本によって、復元できる例を示している。

図版 1

(百首短冊「遠藤氏論文より転載・一部加工」)



(A本)



このように、A本には剥落した短冊を含め、欠損しやすい百首短冊の本文を完全に伝えており、よって興行当時の本文を再現できる重要な資料と位置づけられよう。

一方、B本はどのように評価できるだろうか。写しもごく新しく、片仮名書きである。A本より写しの正確さはかなり劣る。ただB本には書写者の誤写として処理できない異同が見られるばかりか、明らかにA本よりも正確と思われる箇所があり、一概にB本を無視しえない。例えば63番目の「浜寒芦」である(原短冊は摩耗しており読めない)。

味とをる濱風さらでほの／＼と霜の花ちる芦の一村 (A本)

吹通り濱風サヘテホノ／＼ト霜ノ花チル芦ノ一村 (B本)

A本では「浜風さらで」となっているが、B本の「浜風サヘテ」であれば意味が通る。こちらに就くべきであろう。

以上をまとめると原本は、興行された慶長七年当時の短冊で、貴重であることは言うまでもない。しかしながら、原本の百首短冊には、欠落した短冊及び摩滅により判読が不可能となっている箇所が多く、またB本は、一部はA本より内容的に参考となる本文があるが、誤写が散見されるため厳密な書写とは言い難い。したがって、短冊の詩歌の内容を読解するという点においては、欠損・摩耗以前の姿を留めたA本を以て補うべきである。以上の検討を前提に考察を進める。

### 三、参加者と出題の方法―詩と歌と

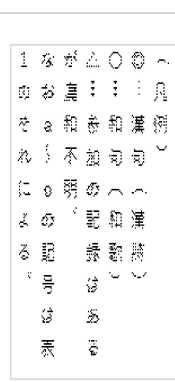
本節では「亀岡百首」の参加者と題について検討を進める。

当日の参加者は表2に掲げた通り、「亀岡百首」以前の各人の参会状況をも合わせてまとめたものである。当時上杉家で行われてきた和漢聯句、連歌会の主要メンバーが半分以上を占める一方、逆にこうした会に初めて参加する、景勝の側近や右筆、兼続直属の家臣、有力な譜代の家臣の子弟らが名を連ねる。

特に兼続とその弟の実頼の關係に着目してみたい。周知の通り、実頼は兼続と厳しく対立し、慶長年間に上杉氏を辞し出奔してしまう。米沢には帰国せず、在京したまま浪人したという説もある。天正期から慶長期にかけてしきりに行われた連歌・聯句会において兼続と実頼は一緒に出座することはなく別々に会を催しており、その構成員も同じ上杉家にありながら、異なっていた(表中★参照)。しかし「亀岡百首」では二人が参加し、彼らが別々に擁していた構成員も同座する点は注意される。背景にはこれまで指摘されてきたように、米沢移封という危機に上杉家内で結束を強めるという目的があったことは十分に考えられるだろう。

表 2

p	o	n	m	l	k	j	i	h	★	g	f	★	e	d	c	b	a	
慶長七・二・廿七	慶長六・十二・十九	慶長六・十・四	慶長五・九・五	慶長五・正・廿一	慶長三(一五九八)・三・二	文禄二カ?	文禄二・正・十	文禄元(一五九三)・六・三	天正十九・三・十	天正十九・三・七	天正十九・二・廿	天正十八・正	天正十七・九・廿九	天正十六・閏五・八	天正十六・閏五・三	天正十六・正・廿七	天正十四(一五八六)・二・二	直江山城守兼統
																		上杉景勝
																		宗繁
																		中堀入道元貞
																		宇津江九衛門朝清
																		弘徳寺玄劉和尚
																		鮎川与五郎秀定
																		八王子民部少輔富隆
																		倉加野左衛門次郎綱秀
																		小国但馬実頼
																		称念寺隠居其阿
																		蔵田惣佐衛門忠廣
																		宇津江藤右衛門長賢
																		沼上弥太郎秀光
																		千坂与市対馬事長朝
																		高津七郎太郎秀景
																		高津刑部長廣
																		春日右衛門元忠
																		来次吉藏朝秀
																		楡井織部綱忠
																		満願寺仙右衛門高信
																		春日与十郎主統忠
																		来次出雲氏秀
																		安田上総介能元
																		吉益右近家能
																		前田慶次郎利貞
																		若松東明寺其阿弥
																		岩井備中信能
																		木戸元斎
																		眼阿
																		隠其
																		覚阿
																		方信
																		元儀
																		泰正
																		行重



そして、新たな参加者のほとんどは上杉家臣の子弟近親で、米沢移封は自然と家臣団にも世代交代を促したと思われる。次の世代へと結束を引き継いでいくという意識もあつたかと思われる。

また総勢二十七名の参加者がありながら、兼統以下六名で詩三三篇を作っており、圧倒的に作詩の担い手が少なかった。

一人平均四、五篇を詠む中で、初めて会に参加した面々は詩にしる歌にしる一首のみ出すが、泰安(序文の作者でもある)と前田慶次の作詠・作詩の数は殊に多く、この「亀岡百首」において中心的な役割を担っていたことがわかる。

次に当該百首において出題された題について検討する。表 3 は出題の一覧である。「亀岡百首」で出題された題と、百首歌の嚆矢である『堀河百首』、そして当時の武家が和歌の出題において参考に使っていたと思われる『明題部類抄』



との比較を行った。

表 3

(凡例)  
 ○：一致。  
 △：一部一致。  
 ◎：一致か「明題部類抄」と一致。  
 ※：二語題が組み合わされ四字題となったもの。  
 ※：伝統的な堀河百首題の題材が「堀河百首」の題の中に見られる場合はその語を表中に記した。  
 ※：網掛けは漢詩、台地は和歌。  
 ※：アラビア数字はA本に記載される順番に拠った。太字を施した題は、兼続が作詩。

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
沼島蒲	馬上關輝	郭公敷声	卯花織家	更衣	春月	杜若写水	橋路御藻	折敷冬	松上藤	故郷梅花	欲散花	花盛	花未開	帰雁	蕨未邊	行路柳	独騎若菜	梅有邊遠	蜂鳴笛代	鶯中鏡	霞隔行舟	兼待子日	立卷	元日	
		郭公	卯花	○		杜若	橋路	折敷	藤				○		柳	若菜	梅	笛代	鶯	霞	子日	○	○	◎	堀河百首
△	○	○	○	△		○	○	△		○		△		△	△		○	○	○	△	○	○			明題部類抄
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	
九月十三夜	駒遊	三日月	正月	槿花	雲間雁	夜鹿	夜声繁夢	麝香薰枕	浅茅露重	女郎花	刈萱乱羅	野萩	七夕	風舎秋使	家々夏敵	池蓮	夏月	泉為夏栢	百合草	照射	深更鶉河	螢入簾	螢使	五月雨	
	○	月	月	槿	雁	鹿	萩	麝	露	○	刈萱	萩	○			蓮		泉		○		螢		○	堀河百首
	△		△	△	△		△	○	○	△	○		△	○	○	△		○		△	○		△		明題部類抄
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	
来不留恋	未契恋	後朝恋	逢恋	始夷恋	未邊識恋	寝一夜	仏名	閑居芦火	深山炭羅	暮野狩	月前神桑	浜津芦	氷上雪	松雪	夜千鳥	關上露	寒露霜	枯野	落葉	初時雨	雨後紅葉	菊花	虫声非一	搦衣声幽	
		○	逢恋			○			炭羅	暮野	神桑	浜津	氷上	雪	千鳥	露	霜			時雨	紅葉	菊	虫	搦衣	堀河百首
			△			◎		△	△	△	△	△			△		△				○	△	○	○	明題部類抄
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	
瑞籬祝	眺望	松邊江	夜鎌	旅行	餞別	往事如夢	閑中燈	観無常	曉鐘	蕭寺	山家	海路日暮	野亭風	漂蓬煙	行客休補	困基	窓前竹	庭邊水	軒松	待恋	老後恋	片恋	結後驚恋	隱在所恋	
			鎌	旅	別	夢		無常	曉		○	海路			○		竹		松			片恋			堀河百首
								△			△	○	△		○		△					△	△		明題部類抄

これを見ると完全に「亀岡百首」と一致する題は二十二あり、「元日立春」、「除夜仏名」のように四字題を二字ずつに分けた題や、四字題から三字、あるいは二字だけ採用した題を含めるとおよそ半分以上が『明題部類抄』と一致する。

「亀岡百首」にしか見られない題であっても、例えば63「浜寒芦」、82「庭遣水」、87「野亭風」、100「瑞籬祝」などのように、題を構成する素材そのものは『堀河百首』、『永久百首』など伝統的な歌題に見られ、他に例がない歌題には、題材同士の結び方に特徴があることが認められる。

その他62「氷上雪」66「深山炭竈」70「未通詞恋」等の題は、『為忠家初度百首』『為忠家後度百首』に見られる歌題であり、定数歌において一般的に出題されてきた題を引き継いでいる。一方で75「来不留恋」のように、『千載集』にあるだけでその後詠まれなかつた題が見られたり、恋部が十一首と、通常より一首多い出題となっている。

これらの題を出したのは前述の通り実頼である。原本の裏見返しに「和歌之出題大国但馬守實頼」、A本の末尾の作者一覧「実頼但馬」の傍書に「出題者也」と記される。実頼も兼統同様歌人木戸元斎に和歌を学んでいた人物であり、出題者を務めても不思議なことではない。では、彼は和歌と漢詩両方の題を出題していたのだろうか。A本では実頼の名の横に「和歌之出題」と記され彼があたかも和歌の題しか出していないかのように捉えられる。だが短冊の題字の筆跡が全て同じであり、漢詩の題であっても『明題部類抄』から採用しそれ以外の題の典故も和歌のものであり、句題ではないことを勘案すれば、百題全てを実頼が出題したのであろう。そのことはつまり、漢詩の作者は、少なくとも題に関しては、和歌に歩み寄って作詩をすることが求められていたと考えられる。

#### 四、詩歌の作風

「亀岡百首」の詩歌作品について作風を検討したい。なお漢詩については別稿で述べる予定なので、ここでは兼統の詩二篇を取り上げるとどめる。まず53「菊花」。

菊逢秋日露香奇、白々紅々華滿枝、好把西施旧脂粉、淡粧濃抹上東籬、

（菊秋日に逢つて露香奇し、白々紅々華枝に滿つ、好し西施の旧脂粉を把りて、淡粧濃抹東籬に上さん）

起句と承句は、題「菊花」の二字を、菊の香（露香）、花の美しさ（白々紅々）で詠む。しかし転結句は、次の『錦繡段』に許沈甫が「明妃曲」<sup>10</sup>の題で詠む詩の後半二句をほぼそのまま踏襲したものである。

漢宮眉斧息邊塵、功厭貔貅百万人、好把香闈旧脂粉、淡粧濃抹上麒麟、

兼統が、「香闈」を「西施」に替えたのは、菊の美しさを西施のそれと重ねた発想に拠る。『翰林五鳳集』<sup>11</sup>に熙春竜喜が「西子菊」の題で、「菊似西施二八姿、露香粧淡雨過時」と詠むなどしており、「菊花」の題から「西施」が連想されたのだろう。「明妃曲」では、王昭君のことを念頭に詠むが、兼統は「菊花」の題意を満たすため、あえて菊との連想関係が強い「西施」の語を入れて作詩する。また、『古文真宝』<sup>12</sup>に載る蘇東坡の「飲湖上初晴後雨詩」と題す詩の「若把西湖比西施、淡粧濃抹總相宜」<sup>12</sup>からも発想を得、「西施」の語を入れたとも考えられる。さらに、「麒麟」を「東籬」に替えたのは同じく『古文真宝』中の陶淵明の飲酒詩の一節「採菊東籬下、悠然見南山」<sup>13</sup>を以て「菊花」の題を満たそうとする意図によるのだろう。

典拠となる『錦繡段』や蘇東坡、陶淵明の詩を引用し、継ぎ接ぎしたような作で、表現は安易な作詩であるとも言えるが、それは彼の漢学の教養を否定するものではない。彼が当時、これらの漢詩のアンソロジーに目を通した上で作詩していたことを示す好例となろう。

次に61「松雪」の詩を掲げる。

孤松吹雪倚巖檐、一夜枝頭白髮添、睡起朝来開箔見、灞橋詩思在蒼髯、

(孤松雪に吹かれて巖檐に倚る、一夜にして枝頭に白髪添ふ、睡起朝来箔を開きて見る、瀨橋の詩思蒼髯に在り)  
起句・承句は松の枝に降り積もった雪が、まるで白髪のようにだと詠んで、「松雪」の題意を満たす。

ここでは特に、朝起きて簾を捲いた先に見える松の姿に対する感慨を述べた結句「瀨橋詩思在蒼髯」の表現に着目する。「瀨橋詩思在」とは、唐の鄭縈に或る人が詩作を問うたのに縈が答えて「詩思は瀨橋風雪の中、驢子の背上に在り」と言った故事をさす(詩人玉屑)<sup>14</sup>。やや降るが「瀨橋詩思」の故事を詠んだ詩を掲げる。

**瀨橋詩思** 晩來添、江雪傾々灑笠簷、欲向前村稅驢轡、有梅茆屋挿青帘。(翰林五鳳集・南江宗沅「驢雪江行圖」)  
鄭縈の故事の発想から「雪」に「詩思」があると詠み、もとの詩の故事のエピソードを損なわないよう「驢馬」を示す語も同時に詠み込んだ詩となっている。それに対して、兼続の詩は「瀨橋詩思」が「蒼髯」にあると詠む。無論、松の上に降り積もった雪に詩思があるとするのであり、「雪」に詩思があると詠む点では、他の作者と同様である。だがここで重要なのは、故事を下敷きにはするがもとの意味を損なわず、あくまで「松雪」の題のうち「松」の題意をも満たすために、既存の故事に「蒼髯」の語を入れた点であり、詩の表現として一歩進んだ作詩と評価できるだろう<sup>15</sup>。

一方、和歌の性格は、大別して以下三種の特徴が見られる。(一)先行歌の表現をそのまま撰取する歌、(二)題の本意を誇張する歌、(三)これまでの和歌ではあまり見られない表現がある歌、の三種である。まず(一)であるが、例えば10「蕨未遍」題に対して其阿が、

朝日さす嶺のつゞきの雪消て所くくに萌る早蕨

と詠む。これは次に掲げる『新古今集』と『拾玉集』の二首の先行歌を繋げ合わせた歌となっている。

朝日さすみねのつづきはめぐめどもまだしもふかし谷のかげ草(新古今集・釈教・先照高山・一九四六・崇徳院)  
むらむらにかかる霞をけぶりにてところどころにもゆるさわらび  
(拾玉集・早蕨未遍・八〇九)

また22「卯花繞家」の題で来次氏秀は、

白妙の波やかかけけむ玉川の里のめぐりに咲る卯の花

と詠むがこれは『後拾遺集』（夏・一七五・相摸）の、

みわたせばなみのしがらみかけてけりうの花さけるたまがはのさと

をそのまま踏まえる。また題の「繞」を回さずに「里のめぐり」と詠む。

次に(二)については例えば、3「兼待子日」題。今年の子日が待ち遠しいというのが本意であるが、八王寺富隆は、

袖はへて引野に松を残しつゝ又こん春の子日をぞ待

と詠む。これは、同題で詠まれた、『夫木抄』（一四四・寂蓮）と『拾玉集』（詠百首和歌・八〇三）の、

千年へん子の日の友をたのめても松はひさしきためしなりけり

君がへん千代のためしと思ふより松はひさしきねのびなりけり

とは異なり、時間がより先に経過した「来年」の子日を待つ、という意となっており本意が誇張されている。

そして(三)では、例えば6「蛙啼苗代」題に対して、瀧上秀光は

所く小草花咲春の田の苗代水に蛙鳴なり

と詠む。この「こくさはなさく」という表現は、伝統的な和歌の表現にはあまり見られず、

色くにうつろふ小草花そまつ秋にはかへす春のあら小田（十体和歌）

名もしらぬ小草花さく川辺かな／芝生かくれの秋の沢水（老のすさみ）

など、心敬、宗祇ら連歌師によつて、当代の立春の発句、歌として挙がる表現であることが確認できる。この語は『藻塩草』（巻八・草部）に「こく、こくつむ、こくはなさく」と立項され当時の連歌語彙の一つであった。

もう一つ78「片思恋」の題で、岩井信能は、

いくゆふべわが誠をやねやの戸に立ふかせ共人は難つれな面なき

と詠み、夜が更けてもなお戸外で立ったまま相手を待ち続けたことを「わが誠」すなわち「誠実である」と表現する。和歌では「まこと」は少なくないが「わがまこと」はきわめて珍しく、連歌において「もしあはば命も今はすてぬべし／わがまこと」にはたえはてしなか（永正十年八月何舟百韻・六四）<sup>16</sup>が見られる程度で、和歌の語が連歌に入るのではなく、連歌の語が和歌に取り入れられる点で特徴的な表現と言えるだろう。

とくにこの傾向は前田利家の甥にあたり傾奇者として知られ、当時上杉家に入入りしていた前田慶次の歌に顕著である。

山柴に岩ねのつゝじ刈こめて花を樵のをひ帰る道

（18 「樵路躑躅」）

夏の夜の明易き月の明残る捲をまゝなるこすの外の月

（33 「夏月」）

ねやの戸は跡も枕も風ふれて霰横ぎりり夜や更ぬらん

（59 「閨上霰」）

それは「刈こめて」「捲をまゝなる」「霰横ぎりり」といった先行歌では類をみない表現に現れている。(一)(二)のような特徴は参会者が和歌を詠みなれていない、つまり詠み手の表現の仕方が成熟していなかった、題を忠実に表現することに精一杯であったことの現れといえるだろう。しかし(三)のように、「小草花さく」、「わが誠」といった、和歌の伝統には見られないが、連歌で流行した表現が見られることは、「亀岡百首」が室町末期と近世初期における和歌表現を示す好例ともいえる。

## 五、短冊詩歌の流れ―探題なのか

最後に当該百首の形式に注目して文学史的な位置づけを試みたい。

作品成立当時、当該百首の形式は如何様に認識されていたか。それは、短冊の序文によって確認できる。「聚作一冊以需予書題辞」という記述から、詩歌の短冊を集めてひとまとまりにしていた詩歌会であったことが分かる。

では、それから百年後に書写されたA本における認識はどうであったか。内題には「詩歌百首会当座」、末尾の作者一覧には「作者探題之衆」の語が見られる。少なくとも書写者にとって、この会が「当座」の「探題」であったと認識されていたと言えるだろう。

そして、先行研究における当該百首の形式に関する言及であるが、まず直江兼続研究の先達といえる今井清見氏は「亀岡文珠堂に遊び詩歌百首を唱和」<sup>17</sup>と述べ、「詩歌百首」と呼ぶ。木村徳衛氏もまた「文珠堂の詩歌会」と述べ、さらに『高島町史』も、「講堂において詩歌百首を唱和」<sup>18</sup>と記す。

今井氏、木村氏、そして郷土史研究において「亀岡百首」は「詩歌会」または「詩歌百首」として扱われている。こうした流れに立って鶴崎裕雄氏が、当該百首を「百首歌」といつても兼続ほか六人が七言絶句の漢詩三十三篇を作り、実頼ほか二十一人が和歌六十七首を詠んでいるので、百首詩歌または詩歌百首と称するのが正しい<sup>19</sup>とし、同時に「続歌」に属するのではないかと指摘をしている点は見逃せない。

『和歌文学大辞典』における「続歌」の項を参照しても、当該百首を「続歌」として扱うことに問題はないように見える<sup>20</sup>。しかしながら、これまでの「続歌」の定義では詩が継がれることは想定されていない。

また「探題」の定義を確認すれば、当該百首の形式は詩歌を詠んだ後に一枚一枚の短冊が集められ、題を四季や恋の進行に従って並べるといふ点でその定義にも一致する。しかし、現行の「探題」の定義はあくまで「和歌」の作品形式であることが前提であり、「詩」も継がれる当該百首はそれら既存の前提から逸脱するのである。

では「亀岡百首」と同様、詩と歌が続歌形式でまとめられた他の作品（以下「詩歌会」と略記）の実態はどうか。ここでは「亀岡百首」以前の詩歌会、「亀岡百首」と同時期の詩歌会、の二時期を概観した上で、当該百首の文学史

上における位置づけを試みる。その際取り上げる作品は「亀岡百首」同様に複数人が出題された複数の題に対して和歌或いは漢詩で詠じられているものを対象とした。

まず「亀岡百首」がしばしば「詩歌」或いは「詩歌会」と称されることから、古くからの「詩歌会」の形式を確認したい。

平安時代から内裏や撰閲家などで詩人歌人を集めて「詩歌会」という名称で会が行われているが、同じ日と同じ場所の開催であっても会としては別々に、つまり詩会・歌会という流れで行われていた。題も詩歌別であり詩題は五字の句題で、和歌は四字の結題であることが多い。また詩は七言律詩がほとんどである。出席者も詩歌で区別されて入れ替わる。和漢兼作は名譽だが、それだけ稀有であった。また料紙は懷紙で、正式には披講が行われていた。

だが、このような詩歌会の歴史と「亀岡百首」の形式は直接にはつながらない。相違は主に三点で、(一)詩が七言絶句であること、(二)料紙が短冊であること、(三)詩題・歌題ともに区別せずに一つの百首のうちで、既存の歌題から出題され続歌の形式でまとめられたこと、が挙げられる。

では、(一)はいつ頃から変化するのか。『明月記』の正治二年(一一二〇〇)二月二十一日条に良経家の詩歌合の記事には、

詩不書発落句、胸腰句合和歌二首也、如相撲立也、

とある。平安から鎌倉時代にかけて、和漢を直接対置させた『和漢朗詠集』、詩歌合などではすべて律詩の胸句(比喻)と腰句(破題)、つまり破題句を番えていた<sup>21</sup>。詩歌会は律詩があるべき姿であったのだ。

それが南北朝時代の康永二年(一三四三)の『五十四番詩歌合』で初めて詩が七言絶句の形となる。以後、『文安詩歌合』、文安五年(一四四八)の『畠山匠作亭詩歌』、文龜二年(一五〇二)の『春日社法楽詩歌』、『文明易然集』など、和漢を対置させた催しでも、詩はほぼすべて絶句となる。これは歌の地位が向上して詩全体と比肩するように



なったのではなく、詩が和歌の世界に順応しやすくなったとも考えられよう。

次に(二)と(三)であるがこれは鎌倉時代に続歌が隆盛すると、やがて詩も続歌形式で行われたことが窺われる。まず早い記録に、弘安三年(一二八〇)の飛鳥井雅有『春の深山路』<sup>22</sup>が見られる。

(同年二月)廿日、内裏の御鞠あり。夜に入りて、初めて御学問所へ召し入らる。詩歌統三十首御会あり。詩と歌が続がれていたか否か明確な傍証はないが、「詩歌統三十首」と記録されている点が注意される。

また『花園院宸記』の正和二年(一一三三)四月二十一日条には、

詩歌会、題年中行事之中、可然之公事為題、或詩或哥也、予一向哥、詩未練無極故也、とあり詩と歌が探題で行われたことを示す記録が見られる。このとき題は年中行事から採用され、その題に対して詩か歌を詠んだとあり、院自身は詩は未だ力量不足であるから和歌だけを詠じた。作品は現存しないが、詩と歌を継ぐ、或いは詩歌共に探題と思われる方法で詠むことがこの頃から行われていたことが分かる。さらに同記の直前の記事を見れば、

今日和歌会、其後又有詩調会、短冊、参議資榮卿・俊言朝臣・公躬・資清・為榮等朝臣・顕親、又女房少々読之、(四月十八日条)

和歌会又詩歌会、皆短冊也、(同十九日条)

天晴、連句、如法内々、(同二十日条)

と、和歌会や詩歌会において詩が「短冊」で詠進されていたこと分かる。そして『看聞日記』応永三十一年(一四二四)九月には、

十一日、(略)十三夜短冊出之、面々賦之

十三日、雨降、晚景晴、今夜明月、天有心歟、月殊更殊勝也。賞翫之儀如例、宰相以下候、短冊取重、不及披講

無念也。詠歌人数、貞成王予・松崖詩・前宰相・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸・正永・真瑛詩等也

と、同じく「短冊」によつて詩歌が詠進されていた記録が見られる。作品は現在に伝わらないが詩歌を継ぐ形式の会がかなり古くから行われていたことを推測させる。ただしこれらは公的な会ではなく、あくまで一つの権門の内々、かつ稽古のための会であつたことは否めない。

しかし次第に公家・武家・禅僧の融合が進んだ室町社会では、かえつて広く用いられることになり大がかりな会に発展した。延徳元年（一四八九）七月三日に細川政国が催し、飛鳥井雅親と五山僧が参加した詩歌会の様子について『蔭涼軒日録』に、

（細川政元）典厩持单尺紙并摠題目録来賦之、（中略）柏（飛鳥井雅親）木殿諸詩一見、而與諸歌同所置之、

とあり、詩歌いづれかで詠じるかの分担は定まっているものの、歌人の雅親が歌題より出題し、名だたる五山僧もそれに従つて作詩したことが明確に分かる。

そしてこのような会の形式は地方にも及んだ。永禄五年（一五六二）「一乗谷曲水宴詩歌」は、地方戦国大名の下での詩歌会として、作品原本は残っていないが「亀岡百首」と共通する性格がある。そして全三十の題に対して和歌二三首、漢詩七篇が詠じられる。和歌に対して漢詩は圧倒的に少なく、また「亀岡百首」同様、ある一つの題に対して、和歌と漢詩のいずれが詠まれるかは事前に定まっていなかったことが窺われる。

「一乗谷曲水宴詩歌」は「亀岡百首」同様題の配列は四季進行に則っているが、題に対する和歌と漢詩の配列が均等ではない（和と漢が交互で配列されるといった何かしらの規則性があるような並べ方ではない）。

この作品は、写本のみが伝わるが、もとは探題で行われ、和歌・漢詩が詠まれた後に、短冊を四季進行に沿つて「統一だ」と考えられ、極めて「亀岡百首」の形式に近い作品と言える。そして、「一乗谷曲水宴詩歌」は室町後期において和歌の題に寄せる（和歌の題に妥協する）かたちで漢詩が詠まれた上で、さらに和歌の詠作形式の一つである「統

歌」の形式に則って継ぎ直された。この時代に公的な場で短冊で詩歌を対等に継ぐという試みが行われるようになった、と推測される。

そこで、原本である短冊がほぼ当時のままの姿で遺されている「亀岡百首」は、詩と歌がともに採題された後、「統歌」の慣例に則って両方とも継がれていたことが百首規模で確認できる早い例として重要であり、「統歌形式の詩歌百首」という、文学史上の空白期を埋める上で看過できない。

これには和漢聯句との関係も見逃せない。実際、和漢聯句のすぐ後に、こうした採題での詩歌百首が開催されている事例が戦国期には目立つ。たとえば今川義元の下での詩歌の催しについて『為和詠草』<sup>23</sup> 天文十七年（一五四八）に次のような記事が見られる点は注意される。

四月十三日於義元亭当座、初聞郭公、

それかとよぬるかうちなる一声は夢の行ゑの初時雨

右、京都之妙心寺東堂（大休宗休）下向、和漢侍る已後之当座詩哥侍り、

同、同於同亭和漢侍り、彼東堂被出發句に

月よゝしよしや折しれ時鳥

傍線部によると義元のもとで和漢聯句を興行した後「当座詩哥」が行われていた。上杉家にも「亀岡百首」の参加者らが、ほぼそのまま同座して二ヶ月前の慶長六年十二月十九日に興行した和漢聯句が現存する（表1の○）。和漢聯句を行った後に当座の詩歌を行うという流れが類似する。詩人歌人が同座して楽しむことができる和漢聯句は座の文芸である性質上、全員参加が原則となる<sup>24</sup>。

以上のように、「亀岡百首」のような詩歌百首は、その源流は鎌倉時代中期に始まる採題詩歌に発するが、やはり公家武家禅林の融合が進み、かつ漢が和に折り合う形で進んだ文芸の一体化と歩調を合わせて、盛んとなった形式で

あるといえる。

そして、それまでの「続歌」の定義を超えた新たな作品形態の需要があったことは、当時和と漢が融合した「和漢聯句」の会の盛行と無関係ではなく、「亀岡百首」はその「詩歌」会の全貌を伝える資料として、戦国期の文芸史上に位置づけられるだろう。

#### おわりに

「続歌」は、これまでは和歌が継がれることを前提にして論じられてきたが、詩が継がれることも考慮すべきである。「亀岡百首」は、詩と歌の短冊が探題された後、「続歌」の慣例に則って両方とも継がれていたことが百首規模で確認できる早い例である。また、「一乗谷曲水宴詩歌」より以前は、禅林と歌壇の棲み分けがはっきりしていた。それを打破した一つの要因が和漢聯句である。

このような傾向は当時和と漢が融合した「和漢聯句」のような会が、禁裏のみならず地方の武士の間にも盛行していく流れの中で、それまでの「続歌」の定義を超えた、新たな作品形態の需要があったことを伝える資料として、看過し得ないものである。

1 「亀岡百首」について言及・引用する資料には、古く江戸期の『米沢古誌類纂』一九〇八年（小幡忠明「米沢地名選」(一八〇四年)）があり、阪口五峰『北越詩話』(一九一八〜一九一九年)、「鶴城叢書」(一九三〇〜一九三五年)、今井清見氏『直江城州公伝』(二〇〇八年「初版一九三八年」、慧文社)、手塚富五郎氏編著『東置賜郡史』(一九七三年「初版一九三九年」名著出版)、木村徳衛氏『直江兼續傳』(一九六九年「初版一九四四年」、佐藤東一氏主筆『高島町史』(一九七六年)、『米沢市史』(通史編、一九九三年)、などがある。「亀岡百首」に関する論考には、遠藤綺一郎氏「亀岡文珠堂奉納詩歌百首について」(県立米沢女子短大付属生活文化研究所報告15一九九八年)、鶴崎裕雄氏「直江兼続・大国実頼兄弟と寄合の文芸」(花ヶ前盛明氏監修『直江兼続の新研究』二〇〇九年、宮帯出版社)などがある。

2 前掲注1今井氏著で「亀岡百首」に関して、「公は詩才横溢、一唱三嘆の文字少なしとせず。されば僧海山は「詩文武の三に達す」と言い、曲肱子は「題詩最も妙を得筆を下すこと神ある如し」と評している。なかんずく文珠堂詩歌百首は慶長七年二月二十七日僧泰安、安田能元、岩井信能、前田慶次、春日元忠、大国実頼、宇津江朝清、来次氏秀等二十余員の雅客と共に、米沢城外三里なる屋代庄文珠寺村現今亀岡村に鎮座する日本五文珠の一つと言われる亀岡文珠堂に遊び詩歌百首を唱和した。出題者は公の弟大国実頼で詩歌はいずれも長さ一尺二寸巾一寸八分の短冊に書いている。公の詩は都合七首あるがその一二を示さん。」とする。

3 鶴崎裕雄氏は「続歌」として本作品を取り上げる。前掲注1、鶴崎氏論文による。

4 上杉謙信以前の越後における上杉家の文芸活動の様相は、『新潟県史』を始めとする自治体史に詳しい。藤木久志氏『戦う村の民俗を行く』（二〇〇八年、朝日選書）、『山形県史』資料編三・新編鶴城叢書・上（一九六〇年、巖南堂書店）、『上越市史』通史編2中世（資料編3古代・中世（二〇〇二年）二〇〇四年）、上越市史編さん委員会）、『新潟県史』別編1（年表・索引）・通史編2中世（一九八七年）、『米沢市史』近世編1・第三卷、近世編2・大年表（一九九一年）一九九三年、米沢市史編さん委員会編）などがある。

5 市立米沢図書館郷土資料室蔵の今井清見氏の資料によって整理を行った。「直江筋書」巻一（K 289・1）、「山城守及其時代―江城州公略傳」（一九三七年）、「訂正直江山城守及其時代全」（一九三八年）、「今井史料雜纂」巻五、「史料抜抄」三（K 212・1）、「清見史料雜記」（一九三五年）、「直江史料」（K 289・1、一九三八年）、「直江筋書」第一卷、（K 289・1）、「直江城州公略傳（小傳）」（K 289・I・2・1、一九三七年）、「直江城州公小傳」（K 289・I・2・2）、「直江筋書」第二卷。なお資料は未整理の状態であるものが多く、整理番号が付されていない資料もある。

6 川上孤山氏『妙心寺史』（一九二一年、本山妙心寺）、140 頁参照。

7 前掲注1 遠藤氏論文参照。

8 宗政五十緒氏ほか編『明題部類抄』（一九九〇年、新典社）引用。

9 兼続の漢詩については第一章第一節でも触れた。

10 久富哲雄氏『影印仮名つき錦繡段・三体詩・古文真宝』（一九九二年、クレス出版）参照。

11 国立国会図書館蔵本（862・108）による。デジタルコレクションで確認。

12 前掲注10に同じ。

13 前掲注10に同じ。

- 14 『和刻本漢籍隨筆集 17 詩人玉屑』(一九九七年、汲古書院) 参照。
- 15 新井白石は、『紳書』八で「我蔵に兼統が和漢聯句百韻あり。其詩才有、うたがふべからず」と述べる。
- 16 国立国会図書館蔵『連歌合集』による。
- 17 前掲注 1、今井氏著書。
- 18 前掲注 1 『高島町史』。
- 19 前掲注 1 鶴崎氏論文。
- 20 『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、二〇一四年、山本啓介氏項目執筆)。
- 21 堀川貴司氏『詩のかたち・詩のこころ』(二〇〇六年、若草書房) 第3章「『元久詩歌合』について―「詩」の側から」参照。
- 22 引用は、新編日本古典文学全集 48 『中世日記紀行集』(一九九四年、小学館) による。なお新編全集頭注(319頁・注二二)では、この「統詩歌三十首」を「漢詩は探韻」とするが、探題であろう。
- 23 引用は、冷泉家時雨亭叢書 第76巻『為和・政為詠草集』(二〇〇七年、朝日新聞社) による。
- 24 しかし、「亀岡百首」のように短冊での詠進であればその場に全員が集まらずとも作品が成立する。もしそうならば、この「亀岡百首」も先に触れた通り、題者の実頼は帰国しないまま、兼統が催した会と考えることもできる。

#### 第四節 「鶉衣」の和と漢

##### はじめに

「百結」という漢語がある。辞書によれば、「使い古しの布切れを何枚もつぎ合わすこと。また、そうして作った衣服。やぶれごろも。襤褸（ぼろ）服。弊衣。」（日本国語大辞典）とある。後で触れるように、あちこち破れたところを修繕して綴り合わせたさまを言うのである。漢詩で用いられ、本邦では「鶉衣百結」として流行した表現である。

たとえば、横井也有の著名な俳文集『鶉衣』（天明七年（一七八七）〜文政六年（一八二三）年刊）<sup>1</sup>は、作者の前言に、「あやしくはへもなききれ<sup>2</sup>を、あつめつゞりたるを、「うづら衣」とはいふなり」とあり、すなわち、鶉衣のような、雑文の寄せ集め、という意味を作品名に込める。

ただ、これが定着するには、いくつかの曲折があつたようで、中国と日本とを比較しながらその表現の系譜を辿り、和歌・連歌・和漢聯句・五山詩における「百結」の撰取の様相と影響を明らかにしたい。

##### 一、漢語「鶉衣百結」

詩作のために韻目に従って文字を並べその語彙を配列し、元の大徳十一年（一三〇七）頃に成立した韻類書『韻府群玉』卷一八・入声・九屑<sup>2</sup>の「結」に「鶉衣百結」という項目があり、その典拠が次のように示される。



鶉衣百結 ①子夏之衣懸結為鶉衣百結、②董威隱居白社、以殘絮縷帛為衣、號百結衣 逸士伝

これによれば、孔子の門人たる子夏の故事(①)と西晋の董京(董威)の故事(②)とに基づくことが分かる。前者は『荀子』大畧篇に、後者は実際には『晋書』隱逸伝に収録される。

まず、『荀子』は孔子の弟子子夏の話である。『荀子増注』<sup>3</sup>に

子夏貧<sup>ニ</sup>メ衣如<sup>シ</sup>ニ縣鶉<sup>一</sup>。人曰、子何<sup>ソ</sup>不<sup>レ</sup>仕。曰、諸侯之驕<sup>ル</sup>我<sup>ニ</sup>者、吾不<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>臣、大夫之驕<sup>ル</sup>我<sup>ニ</sup>者、吾不<sup>ニ</sup>復見<sup>一</sup>。

正字通曰、鶉尾特秃。若<sup>ニ</sup>衣之短結<sup>一</sup>。故凡敝衣曰<sup>ニ</sup>衣若<sup>ニ</sup>懸鶉<sup>一</sup>。

とある。梗概は次の通りである。子夏は貧しく、その衣は「縣鶉」のようであった。人は彼の姿を見て、何故役人として人に仕えないのかと尋ねた。すると彼は諸侯は私に対して驕った態度をとるので、私は彼らの臣とはなりたくないのだと答えた。大夫もまた同じように接してくるので会いたくないのだと言った。

子夏の貧しくとも権力者に媚びることのない矜持を示す話である。「縣鶉」に施された注には、『正字通』(明の張自烈撰)を引用して、「鶉の尾はとくに秃げる。このことは衣が短く結ばれているように例えられる。だから一般に破れた衣(敝衣)のことを懸鶉のようだと言うのだ」とある。

ここから「百結」とは、破れた衣を何度も綴り合わせる意となろう。

次に、『晋書』<sup>4</sup>卷九十四、隱逸伝「董京」の故事を掲げる。

董京字威輦、不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>何ノ郡人<sup>一</sup>也、初與<sup>ニ</sup>隴西ノ計吏<sup>一</sup>、俱<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>洛陽<sup>一</sup>、被<sup>レ</sup>髮而行、道遥吟詠<sup>一</sup>、常<sup>ニ</sup>宿<sup>ニ</sup>白社ノ中<sup>一</sup>、時<sup>ニ</sup>乞<sup>ニ</sup>於市<sup>一</sup>、得<sup>ニ</sup>殘碎ノ繪絮<sup>一</sup>結<sup>テ</sup>、以自覆、全<sup>ニ</sup>帛佳<sup>一</sup>、則不<sup>ニ</sup>肯受<sup>一</sup>。

これによれば、董威とういは洛陽で逍遙吟詠し、いつも白社（晋の慧遠が廬山のふもとの東林寺に、名高い学者を集めて結んだ、念仏修行の結社の名「白蓮社」のこと）の内にいて、時々市に出掛けては残った布や襪褌を乞い、それらを繋げて衣にし、豪華な服は受け取らなかつたという。ここもまた『韻府群玉』が記す「百結」とは襪褌切れを何枚も結んで綴った意とみて良いだろう。また「百結」は、㉔㉕とも「鶉」「衣」といった素材と共に詠まれる点が共通することが分かる。

だが、注意すべきは、『韻府群玉』の原典たる『荀子』と『晋書』の本文と後代の注も含めて、問題となる「百結」の語は見られないことである。

はたして「百結」の表現が見られるのは、宋代の詩人蘇軾「薄薄酒二首并序」の詩中である。

珠一襦一玉一柙一、万一人祖送テ帰シヨリハレ北一邱ニ、不レ如カ懸一鶉一百一結一、独リ坐メ負レ朝一陽、

豪華絢爛たる喪服を着た大勢の人によって北邱山に葬られるのは悪くはないが、一方で何枚もの襪褌切れを繋いだ衣服を着て生きて、たった一人で過ごす人生もある、と詠む。この詩の注『四河入海』卷十三には、

芳一云、荀子子夏貧衣百結如一。

一云珠一、珠襦玉柙ハ葬服ゾ。言ハ珠一玉一ヲキセラレテ結構ニメ、千人万人喪葬伴ヲメ葬ヲ送テ、北邱山

ニ葬ル、ハ結構ニアリハアレドモ、只百結ノ衣ノ如ク鶉ノナルツゞレヲキテ生テ、只一人負テ朝陽、（下略）

懸鶉ハ珠一玉一ノウラゾ。

とあり、「百結」とは鶉の尾が禿げたように衣を繋ぎ合わせたことを言い、それは豪華絢爛な喪服との対比であると注される。ここで「鶉」「衣」「百結」の言葉が明らかに結ばれる。

したがって『韻府群玉』に見られる「百結」の表現は『荀子』『晋書』本文からの影響の他に、蘇軾からの影響も加味すべきだろう。

## 二、日本における「鶉衣」

では、こうした「百結」の表現が日本へもたらされたのはいつ頃であろうか。

本邦における「百結」の受容を追う上で、その言葉と結びつきのあった「鶉」の表現史を和歌・連歌・和漢聯句・五山詩のそれぞれについて確認する。

まず、和歌における鶉のイメージはおそらく次の三首に集約されよう。

野とならばうづらとなきて年はへむかりにだにやは君かこざらむ

(『伊勢物語』百二十三段／古今集・雑下・九七二・よみ人知らず)

鶉鳴く真野の入江の浜風に尾花波よる秋の夕暮れ

(金葉集・秋・二三九・源俊頼)

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里

(千載集・秋上・二五九・藤原俊成)

いずれも秋の素材とともに生まれ、とくに最初の伊勢物語における「深草」という、人から忘れられた、荒廃した土地で鳴く鶉の声が決定的であった。俊成の歌は言うまでもないが、俊頼の歌の「鶉鳴く」もそういう寂寥感を伴うものである。

さて「鶉の衣」という句は、鎌倉後期になって初めて確認される。

いまもなほ野となるさとに誰すみて秋はうづらのころもうつらん

(夫木抄・一五五四六・藤原広範)

うれへある涙の露やかかるらん秋のうづらの衣手のさと

(龜山殿七百首・二八一・六条有忠)

深草や野となる里の秋風にたれか鶉の衣うつらん

(続草庵集・秋・二四四)

これらはいずれも伊勢物語の「深草」の本意に基づきつつ、「うつ」に「打つ」を掛けて、擣衣の題を満たしたも

のである。頓阿はともかく、他の二人は歌人というより漢学者であったから、あるいは漢語「鶉衣」を翻案したのかも知れない。ただし、前に掲げた『荀子』や『晋書』のように、「鶉が尾が短い、剥げていることをもって、衣服が綴れていて貧相である」という発想で詠んだものではない。けつきよく和歌では、「百結」はおろか明確に「衣」の語を伴って詠まれることも稀である。

和歌の場合は、「鶉」という歌語が十分に成熟し定着しており、わずかに「鶉衣」は見られるものの、新たに「鶉衣百結」という発想が受け入れられた、とは言えないようである。

では、連歌における「鶉」のイメージはどうであるか。

若草枕うつらふす声

床寒き旅にしあれは秋更て

(紫野千句(応安三年一三七〇)第三・三九・成阿)

水さひある古江は秋の野と成て

うつらのなくね嶋の羽音

(顕証院会千句(宝徳元年一四四九)第四・四・専順)

一人さびしき床の夕暮

霧立ちて鶉鳴く野は人もなし

(竹林抄(文明五年頃一四七三)・五〇一・心敬)

基本的に和歌と同様、秋の素材、鶉の鳴く声に焦点を当て、ここでもやはり「百結」、つまり「綴り合わせる」、「尾が禿げる」といった意と結びつくことはない。しかし、和歌には稀であった、「鶉」と「衣」との組み合わせが、室町中期よりかなり多く現れるようになる。

尾花ちる野や風ばかり残るらむ

うつらころもをなほかさねはや

(応永三十年(一四二三)十一月十三日熱田社法楽連歌・八二・政保)

うつらころもはほしや侘らん

狩人のゆふ露分てかへる野に

(園塵(一四九五頃)第二・秋・三九一)

月にきむ**鶉衣**は露にぬれて

かへるさをしむこたかかりひと

(弘治三年(一五五七)春雪千句第九・四八)

**鶉の衣**袖にかさねし

色にする草のたもとのはなやかに

(皇学館文庫本千句(一五六三)第五・八五)

このことは、寄合書にもみられる現象である。文明八年(一四七六)成立『連珠合璧集』に、

鶉トアラバ 片うづら 小鷹人 衣イ 床

とあり、鶉と衣の連想が規定される。さらに十六世紀に下ると『春夢草』の注(内閣文庫本・永正十二年(一五一五年))に、

一むらすゝきかせ心せよ

(三五五)

かたしくキイもいかに鶉ウの古コころも

(三五六)

うづら衣とはみしかき衣也、又うづらはふるし／＼と鳴物なればふるきといへるもたよりある詞也、片鶉のやりたる薄をは風も心せよと也

と鶉衣は短い衣であると注される。前節に掲げた『韻府群玉』に引用された、『荀子』の注と重なる表現である。

改めてまとめると、和歌において「鶉」は「衣」とは簡単には結びついていなかった。

一方で、連歌の世界では、「鶉」は十五世紀ころから「鶉衣」を翻案した「うづらころも」「うづらのきぬ」という用例が盛んに確認される。そこでは『荀子』が意識された形跡も見られた。したがって、中国の故事として立項された「鶉衣百結」の話は、日本ではむしろ連歌の世界で受容されたと位置付けられよう。

しかしながら、和歌・連歌ともに「鶉」にせよ「鶉衣」にせよ、「百結」という言葉は未だどこにも見出されない

のである。

その傾向は、室町前期の和漢聯句においても同様である。

92 客衣寸々針 帥(三条西公条)

93 列星鞆尾動 新(中院通胤)

(大永七年(一五二七)九月尽日和漢)

前句から「鞆」が連想されたのは、杜甫「風疾舟中伏枕書懷三十六韻、奉呈湖南親友」詩、

吾安藜不糝、汝貴玉為琛。烏几重重縛、鞆衣寸寸針。

(吾れは安んじて藜して糝せず、汝は貴くして玉を琛と為す。烏几重重に縛り、鞆衣寸寸に針あり。)

に拠る。杜甫詩もまた②の故事を前提として、出世して高貴な身分となった湖南の親友に対して、自分は破れた衣服を針と糸で何度も繕って貧乏暮らしに安んじていると詠む。このように「鞆」と「衣」の結びつきは連歌同様に和漢聯句でも機能する<sup>10</sup>。だが、この場合もやはり「百結」の表現は句の前後に見出せないのである。

以上、和歌・連歌・和漢聯句における「鞆」の表現史を見てきたが、いまだ「百結」の語が受容された形跡は見取れなかった。

では「百結」という表現は、いつ頃、どこからもたらされたのか。

### 三、日本における「百結」の受容

「百結」の語を五山僧の作品に探し、次に用例を作者と題とともに掲げる。

⑧ 白髮逢花惜老年。春來好與綠樽眠。脱衣欲典杏村酒。**百結懸鶉**不直錢。

天隱龍沢(二四二二〜一五〇〇)「花時典衣」

⑦ 跡居良位、意如春。**百結蒲衣**、纏半身。

万里集九(二四二八〜?)「文殊贊」(『梅花無尽藏』所収)

⑥ 寒氣漸從今夜生、**鶉衣百結**最関情。

景徐周麟(二四四〇〜一五一八)「便面」(『翰林葫蘆集』(一五一八年頃)所収)

⑤ 鳥之拙者莫如**鶉**、野草秋風寄此身。**百結衣**兼一莖草、皇天所命任清貧。

三益永因(〜一五二〇)「粟有**鶉**」

④ 風攪殘櫻雪似冬、野僧衣上影重々。和天花裏天香去、**百結懸鶉**一衰龍。

驢雪鷹潮ようは(?〜?)、一五三六年建仁寺住持)「櫻雪灑衣」

③ 迎春日々醉摧頰、到處典衣吹帽回。**百結懸鶉**一盃蟻、餘窓遮莫勒花來。

春澤永恩(〜一五九二)「花時典衣」

② 寒裏衾單難煖身、未眠幾夜達雞晨。**鶉衣百結**若無夢、子夏應言是聖人。

熙春竜喜(〜一五九四)「寒衾無夢」

和歌・連歌・和漢聯句とは異なり、ここには明確に「鶉」「衣」「百結」との結合が見られる。いささか突如として現れること、すべてが五山僧の作例であることからしても、ここには先に挙げた蘇軾の詩の影響が非常に強力であったことを認めざるを得ない。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㉠ ㉡ ㉢ ㉣ ㉤ ㉥ ㉦ ㉧ ㉨ ㉩ ㉪ ㉫ ㉬ ㉭ ㉮ ㉯ ㉰ ㉱ ㉲ ㉳ ㉴ ㉵ ㉶ ㉷ ㉸ ㉹ ㉺ ㉻ ㉼ ㉽ ㉾ ㉿ ㊀ ㊁ ㊂ ㊃ ㊄ ㊅ ㊆ ㊇ ㊈ ㊉ ㊊ ㊋ ㊌ ㊍ ㊎ ㊏ ㊐ ㊑ ㊒ ㊓ ㊔ ㊕ ㊖ ㊗ ㊘ ㊙ ㊚ ㊛ ㊜ ㊝ ㊞ ㊟ ㊠ ㊡ ㊢ ㊣ ㊤ ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑧である。⑩は別にして、やはり粗末な衣のことである。直接に「鶉衣百結」の故事を踏まえていなくとも、もはや「鶉」を伴うことを自明のこととして「百結」が詠まれてくるとも言える。

こうした五山僧の影響は、当時の公家にも伝染したらしく、三条西実隆『再昌』卷十六<sup>11</sup>の永正十三年（一五一六）二月には、次のように見える。

七日、うつらを竹の枝につけて、若槻七郎といふものを、をくり侍りしを、

今朝各会合の事ありときゝて、大藏<sup>（東坊城和長）</sup>卿のもとへ心さすとて

吾家雖咫尺、多情千里隔、君看百結衣、不接諸公席（三〇二五）

和

説丈猶知尺 一生三世隔 鶉衣与鶉衣 春竹珍重席（三〇二六）

細川高国の被官、若槻七郎左衛門尉が<sup>12</sup>、実隆を会合（詩歌会か）に誘った。その際、鶉を竹に付けて贈って寄越したという。家隆の「深草や竹の端山の夕霧に人こそ見えね鶉なくなり」（続古今集・秋・四八九）が意識されるとすれば、竹田のあたりで鶉が鳴くようにあなたを待っていますということか。

そして欠席した実隆は、出席した東坊城和長のもとへ詩を遣わし、「私の家は非常に近い距離にあるが、気持ちが届かないと感じるほど遠く隔たっている。私のつぎはぎだらけの衣を見て欲しい、皆さんの晴れの会には姿を見せられない」と詠む。

それに和長が唱和（和韻）する。「説丈猶知尺」とは『正法眼藏』の「説得一寸、不如説得一寸なり」（三十七品菩提分法）<sup>13</sup>に拠って、丈と尺は相對するが、本質的には同一であり、丈尺の長短は關係がないという意だろう。つまり和長は、詩の前半で「丈を説得してもやはり同じように尺を得られるように、長短は關係がなく、また一生も前世現世来世があるが同じ人生である」と詠むのだろう。続けて「華やかな鶉の衣と、粗末な鶉の衣とが春の竹（＝会合）



に珍しく同席しています」と、実隆の謙遜した詩に対して、身分差は会合(詩歌会)においては皆等しいもので、関係がないのだ、と応じる。

衣のみすぼらしい様を鶉に喩え、身分差を意識した詠みぶりは、先の蘇軾の詩や、五山僧詩の㉔㉕に共通する。併せて「百結」と「鶉」の表現が結ばれるのは、中国では蘇東坡詩に現れる宋代頃、日本では早くも㉔㉕㉖のような十五世紀頃の五山僧の作品に見られ、十六世紀以降になるとその表現が漢学に造詣の深い公家にも伝播したと考えられる。

#### 四、「百結」から「もゝむすび」へ

さて、院政期の歌人九条良経(一一六九―一二〇六)の著作と伝わる『後京極殿鷹三百首』(以下「鷹三百首」と略記)中の和歌に、このような作品が見られる。

**百結**び衣い手てささむむみみももろろううつつらら鷹たかのははかかせせををいといとひひててややなく (二〇八)

使いふるしの布切れを何枚も繋いだ着物は寒いので、諸鶉は鷹がたてる羽風を嫌って鳴くのか、と詠む。歌意の点、「百結」「衣」「鶉」の語の組み合わせ方の点から見ても、五山でもつばら愛好された「鶉衣百結」の故事が下敷きであることは明白である。

さらに、この歌には江戸初期の注が存在する<sup>14</sup>。

もゝ結衣手寒し諸鶉鷹の羽風をいとひてそなく

鶉にもゝむすびと申ハ、毛を落してのち、おいとゝのハす、尾羽村々成を云り。又衣ハやふれヌレハ、もゝ度／に結ふと見へたり。一立をハかた鶉といふ。たとへハ毛羽ととのふ調／共、鷹の羽風つらかるへきに、さして羽

とゝのいかね／て尾かけもよハけれハ、鷹の羽風をいとふと読。

「百結び」の表記を「もゝ結」、「もゝむすひ」と訓じるが、破れた衣を幾度も結ぶ意であることは変わりなく、やはり「鶉衣百結」の故事の内容を踏まえた理解がされる。

「もゝむすひ」という表現は和歌でも僅かに、

ちはやぶるちひろたくなはももむすびうちとけてみよながき心を

(殷富門院大輔集・一四六)

とあるが、下紐をかたく結んでいて、心を閉ざしている様子を詠む恋の歌である。ここで問題とする「鶉」との関係性は認められない<sup>15</sup>。

注目すべきは「鷹三百首」の成立時期である。前節までに確認した通り、「鶉衣百結」の表現は、中国では宋代、本邦では早くも十五世紀頃、本格的には十六世紀以降に五山僧及び五山の知識を受容した公家で見られるのである。「鷹三百首」のこの歌が、良経の時代に成立したとはどうてい考え難いことを示している。

もとより、「鷹三百首」の成立時期に関しては早くから疑義が唱えられてきた<sup>16</sup>。以降、現在に至るまで井上宗雄、青木賢豪、木村尚志らが良経作者説の信憑性の低さを指摘する<sup>17</sup>。依然として、成立時期・作者像が不明な作品である。

しかし、和歌に詠まれる言葉の独自性、荒唐無稽さ、多様性に触れるものの、それらの表現の典拠は深掘りされないのが現状である<sup>18</sup>。

だが「百結」の語の系譜を辿ると、「鷹三百首」の成立時期、あるいは作者や享受圏の教養など再考する一つの手がかりとなる。そして「鷹三百首」和歌の注釈には、同時代の用例のみならず、後代の連歌、和漢聯句、五山詩からの用例蒐集に基づく注釈の必要性が期待される。

## 五、「腸百結」

ところで、唐詩では「鶉衣」とは別に、「百結」するものがあつた。「腸」である。たとえば、聚散竟無形、迴腸百結成、古今銷不得、離別覺潛生。

(聚散 竟無形たり、迴腸 百結と成す。古今銷えて得ず、離別 潜かに生を覚ゆ。)

(『許用晦文集』「題愁」)

醉別千厄不浣愁、離腸百結解無由。蕙蘭銷歇歸春圃、楊柳東西絆客舟。

(醉別 千厄なるも愁を浣がず、離腸 百結して解くに由無し。蕙蘭 銷歇して春圃に帰り、楊柳東西に客舟を絆ぐ)

(『唐人五十家小集』東洋文庫蔵、魚玄機「寄子安」)

許渾(七九一〜八五四頃)の詩は、離別に際しての愁いを詠み、腸が捻転してまるで百度も結ばれるかのような愁いだ、という。魚玄機(八四四頃〜八七一頃)の詩は、武漢の地で李億に捨てられた際の詩で、いくら盃をかさねても、酒では別れの辛さを洗い流すことはできないし、辛さでちぎれた腸を何度も結び付けたような苦しきから解放されることがない、という。

そもそも「腸」からは『世説新語』黜免に所収される「断腸」の故事が連想されよう。

桓公入レ蜀、至二三峡中一。部伍中有下得二猿子一者上。其母縁レ岸哀号、行百餘里不レ去。遂跳上レ船、至便即絶。破二視其腹中一、腸皆寸寸断。公聞レ之怒、命黜二其人一。

人に捉えられた子猿を追いかけ、母猿は船に飛び移るも絶命し、その腹中をみれば腸が割かれていたという話である。「腸」に愁い・悲嘆の気持ちが含まれることは唐代の詩も同様であろう。

この「腸百結」は、本邦では、やはり五山僧の、それも後期になって見られる。

a **百結**愁腸回又断、多端思惑乱猶滋。料君此夜有恩顧、報喜蠅蚋数尺絲。

(百結 愁腸 回り又断つ、多端 思惑 乱れ猶滋る。料君 此夜 恩顧有り、喜を報ずる蠅蚋数尺の絲。)

集雲守藤(一五五九〜一六二一)「寄絲戀」

b 涙雨蕭々天鑑昏、愁腸**百結**劈崑崙、杜鵑聲裡勸帰後、啼向瀟湘喪膽魂 呂<sup>19</sup>

(涙雨蕭々、天鑑昏し、愁腸百結、崑崙を劈く、杜鵑聲裡、帰るを勧めて後、瀟湘に向かつて啼き膽魂を喪す)

a は君の寵愛がなく悲嘆に暮れる後宮の女性が千々に思い乱れる様を、ただでさえ継ぎはぎだらけの腸が捻じれ、また断たれるようだと詠む。b は逸巖世俊なる人物の三回忌に際して、死後に杜鵑となったと伝わる望帝すなわち蜀王杜宇の魂を引き合いに鎮魂の心を詠む。両方とも鶉衣の本来の故事とは異なり、ともに恋の艶や鎮魂の文脈で使用される。

おそらくこうした流行を受けてであろう、慶長六年(一六〇一)十月四日に上杉景勝の家宰直江兼続のもとで張行された和漢聯句でもこんな用例がある<sup>20</sup>。

12 妾扉多少情 (妾扉 多少の情) 秀定

13 一宵腸百結 (一宵 腸は百結) 兼続

14 萬世約三生 (萬世 約は三生) 玄松

連衆の三人はいずれも、上杉家の家臣と僧である<sup>21</sup>。この時期、上杉家は関ヶ原合戦敗戦により、会津から米沢へ減封を命じられている。右の作品も当主景勝の下、しばしば催されてきた連歌会・和漢聯句会の一つである<sup>22</sup>。

この秀定句の前句では「擣いづる礎のよろひしるなれや」と、男性を思慕しながら礎を打って待ち続ける女性の姿

が詠まれる。それを受けて秀定は、主体を男性に転換し、妾を訪ねる(妾扉)男の女性に対する情愛の程度が僅か(多少)であると付ける。

続く兼続の句では、「一宵」は一晩の意で、秀定の句同様に恋句と考えれば男女が逢瀬を重ねた一夜と解せるだろう。すると「腸百結」は一晩の間に腸が捻転するような苦しみだということになる。

「腸百結」は、まだはつきりとは言えないが、古くから唐詩で知られていた表現といっても、鎌倉・室町期にはあまり見られず、このような戦国末期くらいになって突如として現れる。兼続の句も新しさを求めるために、わざと人のあまり知らない故事を使ったのであろう。

そして、「腸百結」は、「百結」という文字は同じにしても、「鶉衣百結」とは、まったく異なる意味で使われている。混乱は見られない。ただ、ほんらい一定の長さのあるものが、あちこちで寸断されて、ズタズタになったというイメージが、ここに投影された可能性はあるかも知れない。

#### おわりに

以上、「鶉衣百結」という表現の系譜を中国の詩・和歌・連歌・和漢聯句・本邦五山の詩それぞれについて見てきた。その結果、襤褸の比喻としての「鶉衣」は古くは『晋書』『荀子』に遡れるものの「百結」の語と結ばれることはなかった。同じく、日本でも室町前期頃までは和歌・連歌に「百結」の表現はみられず且つ「鶉」の素材と共に撰取された痕跡はみられなかった。

しかし、連歌の世界では「鶉衣」の故事の積極的受容が認められ、その傾向は和漢聯句にも引きつがれた。そうした中で、十五世紀に五山僧の詩で明確に「鶉」と「百結」が結ばれた。さらに、こうした背景を踏まえると、かね

てより偽作説が唱えられてきた「鷹三百首」の表現にみられる「鶉」「衣」「百結」の表現は偽作説を首肯する証左となり得ることを示した。そして、戦国期に「百結」は再び「和」の世界に取り入れられる。

このように和漢にまたがる同じ題材が、複雑に交差して発展していくことは、近年、連歌・和漢聯句・古俳諧といった韻文の分野で指摘される<sup>23</sup>。「鶉衣百結」の表現もまた、とりわけ五山僧が進んで享受した表現を周辺の公家・連歌師が自分達の表現世界に取り込み、地方武家の和漢聯句に、本説とはやや異なる形で摂取され、そして近世期には『鶉衣』という書名として人口に膾炙するまでに一般化されていたのだろう。

## 注

1 堀切実氏校注『鶉衣』（二〇一一年、岩波文庫）。堀切氏は「うづら衣」に「鶉の体の全面小さな羽で被われているさまが、「檻樓」に似ていることから、「綴れ衣」のことをいうか」と注す。

2 『韻府群玉』の抄物たる『玉塵抄』は下平声第十「陽」までの収録であり、該当の下平声第十六屑韻は収められない。なお、五山版は「元統二年（一三三四）春 梅溪書院刊」とあるもので、これは元代の朝鮮覆刊本に拠って五山で再覆刊されたもの。近思文庫古辞書研究会編輯『韻府群玉』（一九九八年、大空社）、木村晟氏解題より。

3 『荀子増註』第一九卷、大畧篇第二七（国文学研究資料館蔵鶉飼文庫本）。時代は文政八年（一八二五）刊と下るが、宋代の刊本、いわゆる影宋台州刊本の面影をのこす。米沢興讓館はじめ広く流布した。

4 高啓編集、志村楨幹・荻生茂卿句読『和刻本正史』（一九七一年、古典研究会）。

5 『和刻本漢詩集成11東坡先生詩（上）』（一九九二年、汲古書院）。

- 6 慶長元和期刊『四河入海』卷七「風雷・詩八首」（国立国会図書館蔵）、国会デジタルコレクションによる。
- 7 大岳周崇『翰苑遺芳』の称。
- 8 「鶉」と「衣」を詠む和歌は近世期に僅かに「深草やうづらの声もうきよはをいかにきけとか衣うつらむ」（鈴屋・八一〇）、「毛短に鶉もけふや衣がへ」（犬子集・六二〇・徳元）がある。
- 9 近世初期の寄合書にも『随葉集』慶長八年（一六〇三）に「一 鶉衣などには 山かつ 寒をしのかかぬる／うつら衣とはみしかき衣なり生類にきはす山かつなどのきる衣なり」とある。また、式目では十四世紀頃から秋の言葉、動物ではない言葉として規定されていた。『連歌新式追加并新式今案等』応安五年（一三七二）、文亀元年（一五〇一）再編。「初鳥狩。鳥屋出同。小鷹狩。鶉衣。非動物。」、『梵灯庵主袖下集』至徳元年（一三八四）「九月。上。菊重の衣。鶉の衣。かり田の衣。」、『漢和法式』明応七年（一四九八）「秋部。冷。楸。桐。芭蕉。懸鶉。以上新式。」
- 10 その他「袖」（衣）と「鶉」の連想が働く和漢聯句に、「夕風の声をやさそふかた鶉／袖はいく野をわけ廻らん」（天正十九年四月和漢千句追加和漢聯句・二四）、「襯霜楓夕秀／草ふかくまだ啼かた鶉」（元和九年三月某日和漢聯句・九四）など。
- 11 『新編私家集大成』（底本は書陵部蔵鷹司本）参照。なお『桂宮本叢書』第十一卷（底本は書陵部蔵御所本）との本文の異同なし。
- 12 『新撰菟玖波集』に源元数の名で二句入集。延徳三年（一四九一）七月廿七日の諏訪法楽笠懸、明応七年（一四九八）五月十日・十四日の鞠会に名を連ねる。米原正義氏「細川被官人の文芸―上原・四宮・薬師寺を中心として」（『国史学』一〇四号、一九七八年）附載「細川被官の京畿における文芸一覽」参照。
- 13 『正法眼蔵抄』に「又説ニ得一寸一、不レ如レ説ニ得一寸一也トハ、本ノ詞ハ一丈ヲ説得セムヨリモ、不レ如レ説ニ得一

尺一トアリ(略)此一丈一尺、只同タケナルヘシ、今ノ説得一寸、不如一寸ハ、今一重マキルル方ナク、被ニ心得一タリ」とある。伊藤秀憲氏「『御抄』の『正法眼蔵』解釈―数量表現について―」(『駒澤大学佛教学部論集』九号、一九七八年)参照。

14 遠藤和夫氏「校訂『鷹三百首(撰政太政大臣)』(上)」(和洋女子大学紀要(文系編)三六号、一九九六年)は、宮城教育大学附属図書館所蔵「元和九年壬八月吉日書写」の本奥書を有する写本を底本とする。

15 『日本書紀』神代下にも「今つくりまらむ供造こと、則ち、千尋のたく繩を以て結ひて百八十物」とあり「ももむすひあまりやそむすひにせむ」と訓じるが、紐で幾結びもして強く構築する古代の建築法を指しており、これもまた「鶉衣百結」との関連性はない。

16 『群書類従略解題』(一九〇二年)には、「後京極殿鷹三百首 九条良経／春、夏、秋、冬及び恋、雑、各五十首、鷹によせて詠じたるもの。風躰多く平生の作に似ず。疑ふらくは後人の假託ならむ」。『新校群書類従解題集』(一九八三年)鷹部下、卷第三五七、第十九輯に、「鷹書。一卷。「作者」後京極殿すなわち九条良経(一一六九・一二〇六)と伝えるが疑わしい。類聚本の後批に、「風体多不レ類ニ平生作」、疑後人依託耳、」とあるが、その通りである」とある。

17 青木賢豪氏「伝良経作『鷹三百首』について」(『和歌史研究会会報』六八号、一九七八年)に、「二条家は良経の孫良実を始祖とするから、この点を見ても良経作ということは考えられず、神宮文庫本の如く「撰政太政大臣家鷹三百首和歌 家隆卿」の例もあり、あるいは類聚本の如き良経作という伝そのものに検討の余地があるのかもしれない」。木村尚志氏「鷹百首」(鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史』日本古典の自然観2 鳥の巻、二〇一一年、三弥生書店)に、「(鷹三百首を含む)②から⑥の作品はいずれも作者名を何らかの形で示しているが、信憑性は低い。内題や外題は「鷹百首」「鷹三百首」などで、その下や奥書に作者名を記す場合が多い」。井上宗雄氏「中世教訓歌



略解題 付 教訓歌考」（『立教大学日本文学』二四号、一九七〇年）に、「後京極三百首は中では新しく室町中期以後のもの」。

18 黒木祥子氏「平賀の鷹」（『伝承文学研究』三五号、一九八八年）。『後京極殿鷹三百首』から「鳩屋」「平賀の鷹」「鷹の仇討ち」を詠む歌を拾い、「平賀の鷹の仇討ち」という説話に拠ると歌もあるとするが、それ以外は、説話の内容までは不明とする。

19 雪叟紹立『雪叟詩集』（芳澤勝弘氏『三州太平寺蔵雪叟詩集』二〇一五年、思文閣）所収。雪叟和尚は妙心寺靈雲派下、特芳禅傑―大休宗休―東菴宗暎の法を嗣いだ和尚。永禄年間に活動の蹤あり。呂は、雪叟和尚の弟子か。詩題はないが、逸巖世俊の回忌に際して雪叟の弟子らが詠んだ一連の作の一つであることが以下の詞書によって判明する。「逸巖世俊秀才大祥諱、半齋回向了而示衆云、山僧即今無焼香之語。因齋慶讚底、諸納試道将一轉語来看。各着語了而云。山僧代以一偈。（逸巖世俊秀才の大祥諱、半齋回向了って衆に示して云く、山僧、即今、焼香の語無し。齋に因って慶讚する底、諸納、試みに一轉語を道い將ち来たり看よ。各着語し了って云く、山僧、代わって一偈を以てす。）」。

20 第三章第六節参照。

21 秀定は庄内羽黒山神職家の出身の鮎川与五郎秀定、玄松は臨濟宗妙心寺派の僧、千山玄松である。彼らは当時、直江周辺で張行された和漢聯句会及び詩歌会では常連で、漢句を担った。

22 第一章第三節参照。

23 楊昆鵬氏「五山文学と和漢聯句（特集 五山文学）」（『文学』一二号、二〇一一年）、河村瑛子氏「「負日」の系譜―「ひなたぼこ」の和漢」（『アジア遊学』二二三号、二〇一八年）、中本大氏「「和」と「漢」のはざま―連歌における漢詩文受容の側面―」（『論究日本文学』一一三号、二〇二〇年）。中本氏は「そもそも「和」は「漢」を内

蔵しており、そのため「和」と「漢」は複雑に混淆し、一見してその関係が把握できない事例もある、という理解は必ずしも周知されていないのである。」と述べる。

第二章 成田氏の文芸



## 第一節 連歌師了意と忍城主成田氏長

### はじめに

千句とは、百韻連歌十巻を一つのまとまりとした連歌・俳諧の一形式である。現存最古の千句は文和四年（一三五五）の文和千句であるが、それ以前から行われていたことは、菟玖波集詞書に見え、以降、室町期には、百韻連歌に次いで、間断なく興行された！。

また一人で千句を詠み通す、いわゆる独吟の千句も、康正二年（一四五六）、源意の異体千句が現存最古として、以後、文明三年（一四七一）の宗祇の三島千句、同十五年頃の兼載の難波田千句、宗長の永正元年（一五〇四）の出陣千句および同十一年の浅間千句と、宗匠たちが等しく取り組んでいる。独吟ゆえか、満日後も作品として広く愛読されたようで、写本も多い。

しかし、千句は大部であるため、百韻に比すると研究は不十分である。活字翻刻も主要な作品にとどまる<sup>3</sup>。ことに戦国期は作品の残存量に比して研究の遅れが目立つ。連歌界の巨頭里村紹巴は、千句連歌との関わりが深く、生涯に参加した千句や独吟千句は十五作品ほど知られ、他人の千句にもしばしば合点や批言を附したが、紹巴研究でも正確に位置づけられていない<sup>4</sup>。戦国期の作品の、伝本の発掘と整理、善本による本文の提供、成立事情の考察など基礎的研究が喫緊の課題となる。

紹巴が深く関与した戦国最末期の独吟千句が了意千句である。作者了意は、武蔵国忍（現埼玉県行田市）の城主、成田氏長に召し抱えられた連歌師であり、生没年・出自は未詳ながら、連歌初心抄の編者として知られる<sup>4</sup>。現在、この千句の専論はなく、全文の翻刻もない。わずかに島津忠夫氏が、

連歌千句。写横一。了意独吟。慶長二（一五九七）・四・一一、紹巴評点・奥書。同・一一・二、紹与評。天正一六年（一五八八）六月二日から六日までの興行。巻頭発句「梅がかや更に天みつ時津風」。賦物は、何路・何人・何船・何風・山河・何塩・二字反音・唐何・薄何・何木。追加山河は綱家・泰義ら八人。『大阪天満宮連歌叢書』所収。

と簡潔に解説する程度である<sup>5</sup>。

天正十六年に五日間で独吟された千句を、十年ほどたった慶長二年になって、紹巴が合点を、紹巴門弟である紹与が批言を附したとするが、成立過程や合点・批言が附された時期については再考を要しよう。この時期の千句・百韻で、合点と批言を共に有するものは少なく、この点も看過できない。かなり流布したらしく、『大阪天満宮連歌叢書』所収本以外の伝本も確認される。

本節では、まず成田氏連歌壇の動向からこの千句の成立事情を明らかにし、ついで伝本調査を踏まえ、本文批判を行い、よるべき本文を定めた。さらに批言の分析を通じ、句風に及ぶことにしたい。

なお千句の引用は後述する宮内庁書陵部蔵高野本により、各百韻と句番号は、第一百韻の第五句ならば第一・5のような形で示した。批言は句の傍に小書されるが、「」に入れ句尾に置いた。

#### 一、了意および成田氏連歌壇について

成田氏は鎌倉期から続く武蔵国の名門武士であるが、室町中期には関東管領山内上杉氏の傘下にあり、やがて同氏の家宰である惣社長尾忠景の子の顕泰（？く一五二四）が継嗣に迎えられた。事実上の家祖である。上杉氏・長尾氏は宗祇との関係が深く、顕泰にも兼載・宗長との交友が確認される。連歌愛好の土壤が培われて、曾孫氏長（一五四

二（九五）に至った。氏長は上杉氏との関係を破棄して、新興の小田原北条氏に従ったが、なお北武蔵最大の国人領主として、半ば独立を保っていた。（略年譜参照）。

天正八年（一五八〇）、氏長は紹巴に源氏物語二十巻抄の書写を求め、同年秋には、氏長弟泰親も紹巴の称名院追善千句注を所望して与えられた（広島大学蔵本ほか奥書）。成田氏のもとに好士が出入りし、連歌壇が形成されたことが推察されるが、そこでは了意の活動が最も目立つ。

ところで、北條記巻第六「松田陰謀露頭之事」<sup>7</sup>に、

上野国忍の城は、成田下総守氏長居城也。（略）然るに城の本人<sup>（下）</sup>下総守氏長、日比連歌の上手にて有しかば、了意と云名人を抱へ置き、多年此道をたしなみにし、了意上洛し、先年紹巴と同道して、関白殿へ謁し申、かねて御存じありし程に、了意を以て、内々忠節可<sup>レ</sup>申由、被<sup>ニ</sup>申入<sup>一</sup>。関白殿大に悦び、「内々可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>出仕<sup>一</sup>」との儀也。

とある。天正十五年頃、小田原北条氏と豊臣秀吉との間が緊迫したため、了意が氏長の命令で上洛し、紹巴を通じて秀吉に拝謁し、氏長の内意を啓上したとある。氏長がひそかに生き残りを企て、京都の情報を得るため用いたとしてよい。了意が京都で参加した連歌作品は、天正十四年から慶長四年（一五九九）の間にわたる十八度にもものぼる<sup>8</sup>。紹巴との接点も度々見出され、了意が千句の合点を彼に求める環境が整っていたことも窺える。

小田原北条氏が滅亡すると、成田氏も改易されたが、了意はしばらく関東にとどまった。その頃の足跡は、かわつて忍城に入った松平家忠の日記<sup>9</sup>によって辿ることができる。

その後上洛し、再び連歌に出座する。さらに文禄二年（一五九三）冬、直江兼続が興行した漢和聯句にも、旧主氏長とともに参加した<sup>10</sup>。句上げに「成田内衆 了意」とあり、依然氏長の「内衆（召し抱え人）」とみなされていた。牢人となった氏長は、上杉景勝の家宰である兼続の庇護を受けていた。

ところで、了意は「樹齋」という齋号を持ち、紹巴にもこの名で知られていた<sup>11)</sup>。このため了意千句の伝本には、「樹齋千句」という外題を持つものがある。

このように了意は成田氏長抱えの連歌師ながら、活動範囲は広く、関東と京都に及んだ。了意千句はこうした活動の中に位置づけられるのである。

さて、独吟千句は、だいたい五日間程度で詠み終わった。満日となると、その記念として、周囲の者が八句を詠んで添えるのを常とした。了意千句の伝本にもすべて末尾に追加八句がある。

山何 追加

1 くるゝ夜の螢を道のしるへ哉 綱家

2 月また遅き夏の川つら 泰義

3 陰たかき柳や茂り添ぬらん「弥重<sub>三</sub>候」 実綱

4 呉竹なひくを田の末／＼ 泰定

5 ほのけふる一里むらの風みえて 基如

6 きえ残りたる霜の寒けさ 長澄

7 うつる日の影かすかなる春の野に 宗房

8 さへつり出るうくひすのこゑ 利忠

各句の作者を考証する。泰義は、氏長の父長泰の弟向用齋の孫にあたる<sup>12)</sup>。向用齋は、関東の学問所として重要であった善照寺（現埼玉県本庄市）の僧である。泰定は、文禄四年に鷲宮神社（現久喜市鷲宮）を再興した神主大内泰秀の子にあたり、元和十年に没した<sup>13)</sup>。長澄は、京都で興行された文禄元年正月九日の連歌会に氏長と共に同座した<sup>14)</sup>。氏長上洛の折に同行した家臣か。基如は未詳であるが、異文の「泰如」（豊橋本、後述）に就けば、「如」と「之」は



通用するから、「泰之」である可能性が高い。ならば、氏長の弟泰親の次男泰之であろう。

追加の半数が成田氏一門・被官、忍領のうちに住した僧侶・神主であることを鑑みれば、残る四人もまた天正末年頃の成田氏連歌壇のメンバーであった可能性は高い。

したがって、了意千句は、関東、しかも成田氏長の忍城で試みられたとしてよいであろう。

## 二、諸本について

### 二―一 書誌

了意千句の現存諸本の書誌を略記する。現在、九本が管見に入った。「」内は本節における略称である。「豊」は稿者が新たに了意千句と認めた本である。

#### 宮内庁書陵部蔵高野本「宮」

#### 「江戸後期」写 一冊

一五四・四七八。宗砌・専順等の日発句を合写。原装緋色縁取り割小菱表紙（一八×一二・五糎）。袋綴。上下端に紺色角裂。外題左肩題簽四辺無界「日発句／了意千句」。内題なし。料紙は斐紙。墨付一八丁。每半葉七行。虫損なども忠実に摸写する。字高約一三・五糎。印記「斑山／文庫」。了意千句の末尾、一八丁に、

此一巻は大伴平翁か鎌倉より／もてきたりしを乞もとめて摸写し侍る／されと一日二日かほとにはしりかきたれは筆意のうせた<sup>「リカ」</sup>るたるこそいとねんなけれ／通亨

文化十一年三月十三日

とある。また日発句の末尾（四三丁）には「文化六のとし秋のはしめになん／松園通孝」との奥書があり、文化六年に山田通孝（のち通亨）が書写し、ついで同十一年に大伴平翁の持参した了意千句を書写し、一冊としたことになる。通孝は江戸後期の幕府連歌師で阪昌成に学んだ。文化十一年（一八一四）といえば、岡延宗による文化年中（一八〇四〜一八一八）の『大阪天満宮連歌叢書』の書写集成時期とも重なる<sup>15</sup>。岡氏は、大阪天満宮神主滋岡長昌をめぐる連歌好士のひとりである。大伴平翁については後述する。

大阪大学文学研究科蔵含翠堂文庫本「含 a」

「江戸後期写」写 一冊

土橋・H五・三。紹巴千句を合写。原装縹色無地表紙（一九・二×一五糎）。中央に打付墨書「独吟」。袋綴。外題・内題なし。料紙は楮紙。墨付一三〇丁。每半葉八行。字高約一五糎。印記なし。月と花の定座に朱丸印。第五百韻の挙句を欠く。

大阪大学文学研究科蔵含翠堂文庫本「含 b」

「江戸後期」写 一冊

土橋・H五・四。心前千句を合写。朽葉色無地表紙（改装か。一五・三×二一・五糎、版本の反故紙使用）。裏表紙欠損。袋綴。外題・内題なし。色変わり料紙。墨付六四丁。每半葉一四行。字高約一三・八糎。印記なし。第六・19〜46は句順に乱れあり。

大阪天満宮蔵大阪天満宮連歌叢書岡延宗献上本「満」

「江戸後期」写 一冊

乙・五一・一。原装浅葱色布目表紙（一六×二四・三糎）。袋綴。上端のみ黄檗色角裂。外題左肩打付墨書「了意千句独吟」。内題なし。料紙は楮紙。墨付四二丁。每半葉一四行。字高約一二・五糎。扉裏に第一〜第十及び追加連歌の

発句を記す。印記「岡」。

天理大学附属天理図書館蔵綿屋文庫本「天」

「江戸前期」写 一冊

れ・四・一・九二。原装丁字茶色無地表紙（一三・五×一九・九糎）。袋綴。外題左肩打付墨書「了意千句」。内題なし。料紙は楮紙。墨付四五丁。每半葉一二行。字高約一一・五糎。小口書「了意千句」。印記「わたやのほん」、蔵書票カ「逸漁文庫（辻村逸漁）」。第七・62・63・64は附箋に記され60の後に貼附。四五丁に、

波なみのあや水のはたおる衛哉 常信

冬こそ月は瀧のしら糸 常下

寛永十七五月吉日 貞和（花押）

とある。「常信」は明翰抄によれば、牡丹花を祖とする「堺古今伝授之図」中にみえる大黒長佐衛門のことで堺の連歌師である<sup>16</sup>。「常下」は同じ「常」の字を持つことから親族である可能性が高い。なお「貞和」は書写者とみられ、伊勢神宮外宮神官の檜垣貞和か。

広島大学附属図書館福井文庫本「広」

昭和九年写 一冊

国文・四九九一・N一二八。原装香色斜刷毛目表紙（一九・五×一三・六糎）。袋綴。外題左肩題簽四辺無界「日発句／了意千句 全」。内題なし。扉に「日発句／了意千句 合」。料紙は楮紙。墨付一二七丁。每半葉七行。字高約一四糎。印記「福井氏／蔵書印」、「瑤光書／屋蔵書」。

本文の用字は字母の表記・改行まで「宮」と一致し、本奥書に続いて、「昭和九年八月廿四日／写之／小松園主人（福井久蔵）蔵」とある。さらに湯之上早苗氏による紙片に「コノ本ハ図書館寮本通孝本の写しと思われる」とある通

り、「広」は「宮」の転写本と考えられる。ただ批言の欠脱が間々見られ、第二百韻冒頭八句分も欠く。

豊橋市中央図書館蔵羽田八幡宮文庫本「豊」

「江戸初期」写 一冊

九一・二一。本文共紙白色無地表面紙（一四・一×一八・八糎）。袋綴（後世に包背装とされる）。外題打付墨書「樹齋千句連哥 紹巴判／甫<sub>レ</sub>連歌書」。右上端に「作」と朱書。内題なし。料紙は楮紙。墨付五三丁。每半葉一〇行。字高約一一・五糎。小口書「百<sub>（下）</sub>句連歌書」。虫損儘あり。第三と第九は異筆か。また第六・47の句本文に五字の脱落あり。第五・第六百韻に錯簡があるが、句数は完備する。

岐阜市立中央図書館蔵楠堂文庫本「楠」

「江戸後期」写 一冊

九一・六八。石山千句・心前千句を合写。閲覧の機会を得ず、紙焼き写真によれば、無地表面紙（一四・四×二〇・五糎）。四つ目綴。外題左肩後補題簽「石山千句」。内題なし。墨付一二四丁。每半葉一四行。印記「楠堂所蔵」。奥書なし。間々不審紙あり。最終丁ノドに「□□部久富」と書入。

石川県小松天満宮蔵「小」

「江戸初期」写 一冊

一〇九。原装浅葱色無地表面紙（一三・七×一九・五糎）。袋綴。左肩に金箔散らし題簽を貼るも無記。内題なし。料紙は楮紙。墨付四三丁。遊紙三丁。每半葉一四行。字高約一〇・八糎。印記なし。虫損間々あり。奥書の後に、「以二本校合畢 以上」とある（本文とは別筆）。「以上」の上に「能順」と上書き。おそらく、加賀金沢藩主前田利常が小松天満宮創建にあたり、京都北野天満宮から招聘したのが連歌師能順であったことを知る者が、写本の伝来を飾る目的で後年加筆したのでらう<sup>17)</sup>。

以上いずれも江戸初期以後の写本であり、「天」「小」「豊」が比較的古いが、本文は必ずしも正確ではない。形態的特徴（句の脱落）で判断すれば、「宮」は比較的新しい写しではあるが、古写本を摸写したとする通り最善である。一方、「含 a」「含 b」「広」の書写態度は厳密さを欠く。

## 二二 紹巴書状の写しと本奥書

九本には、「楠」を除き、つぎに掲げる書状の写し・本奥書のいずれかを、追加八句の後に持つ。私に A C の符号を冠し、その出入りを【表 1】（○あり、×なし）に整理した。

### A 書状

此御千句殊勝千萬々々。五日に  
五三人してあそはされ候歟。不審候。

諸国より見せらるゝ百韻にも  
如此のはまれなる事<sub>ニ</sub>候。指合

なとも少候。てにはちかはす候。三日<sub>ニ</sub>

成就候者中々無正体候。京都

百韻之懐昏以下御覽候者、され

事と思召候へく候歟。金軸過分

さに申かと又不知人は申さるゝ  
 事もやあらん。此作者衆は謗り  
 たるとても、御分別あるへく候。  
 然間附墨儀候者、心安候敷。愚  
 意之胸中御覚悟たるへく候。

紹与猶可申入候。以上

卯月廿一日 紹巴判

(樹齋参 案下)

【B】 奥書 「悪カ」

慶長二年十一月二日書之筆之

【C】 書状

紹与迄去年之一書披見候。

此間源氏講尺候の問(含)にて候無寸

隙之故、不及別紙候。

今日さはらひよみ果候。旧冬

臘九日ニ初候き。

樹齋参

【表 1】

小	楠	豊	天	満	含 b	含 a	宮	
○ <sub>2</sub>	×	○	○ <sub>3</sub>	○	○ <sub>1</sub>	○	○	A
×	×	×	×	○	×	×	○	B
×	×	○	×	×	○	×	×	C

- <sub>1</sub> || 含 b は ( ) を欠き、【C】の後「樹齋参 御下」とする
- <sub>2</sub> || 小は「案下」なし。
- <sub>3</sub> || 「樹齋参 案下」まで存

〔A〕〔C〕の有無が、諸本分類のひとつの目安となるが、まずはそれぞれの性格と大意を確定しておく。〔A〕は某年四月二十一日付けの紹巴の書状である。宛所の「樹齋」は了意の号であった。内容からも、了意に宛てたことは明瞭である。「この御千句は実に素晴らしい。五日間に、五三人でなされたのでしょうか、不審です。諸国から見せられる百韻連歌でも、このようなものは稀です。指合なども少なく、てにをはも反則がありません。」と絶賛する。また了意の依頼に応じて、快く「附墨（合点・批言など）」を行うのを引き受けた、という経緯が知られる。

千句は天正十六年六月の興行であるから、この書状は早くとも十七年四月のものであろう。了意は十九年には上洛していたし、十八年は小田原北条氏滅亡の年であるから、十七年と見てよいと思われる。

続いて〔B〕であるが、これは慶長二年（一五九七）、この千句を書写した者の本奥書である。

さらに〔C〕には、差出人は記されないが、了意宛ての書状である。「紹与までの去年の一書、披見し候」とあるので、了意が紹与に出した手紙を読んだ、と告げる。これも紹巴の書状の写しであろう。了意は書札礼として、門弟の紹与に宛てて紹巴に音信し、それに対し、紹巴は直接、源氏物語の講釈のために多忙で返信を出せなかったことを詫びたと分かる。

〔C〕は〔A〕の一部と考えられる。すなわち一通の書状で、〔A〕が本紙、〔C〕は礼紙または追而書と見るべきである。なお〔C〕が〔A〕と同じ四月二十一日付であれば、前年十二月九日から始まった源氏物語の講釈が早蕨巻に到達していたとしても不思議ではない<sup>18)</sup>。

おそらく〔B〕の時点で、物理的に〔C〕が欠落していたか、書写者が不用と考えて、〔A〕の後に〔B〕を記し、〔C〕を書写しなかったものであろう。〔C〕がある本は必ず〔A〕を持つが、〔B〕は有さず、〔A〕から続く形式となっていることでもそのことが窺われる。

### 二一三 批言を附した人物は誰か―奥書の再検討

これによって、了意千句の成立事情や、合点・批言の時期については訂正を要することが分かる。前掲島津忠夫氏をはじめとして、合点・批言は慶長二年に附されたとされていたが、これは[A]の紹巴書状と[B]の奥書とを一連のものと見ていたことによる。しかし、[B]を有する伝本は九本中「宮」と「満」しかなく、かつこれは書写の年時を伝えるものに過ぎない。

紹与が批言を附したとすることにも、疑問が残る。紹巴書状[A]の二重傍線部「紹与猶可申入候」とある箇所に使ったものであるが、これは、紹与からも書状の内容を念のため口頭で伝える、という意の決まり文句である。紹与は紹巴門の連歌師であり、紹巴の指導を受けた際の聞書（従紹巴聞書）を著している<sup>19</sup>。紹巴を差し置いて、紹与が批言を附したとは考えにくい。

したがって、了意千句は、合点・批言ともに、紹巴が附した作品とすべきであり、その時期は興行された天正十六年六月以後、十七年四月の間と見られる。

ところで、[B]の、慶長二年にこの千句を書写した人物については何も知られないが、注目したいのは「宮」が有する書写奥書である。

ここに文化十一年（一八一四）三月十三日に、大伴平翁なる人物が了意千句を鎌倉から持参し、江戸烏森神社の神主であった山田通亨（通孝か）が、一兩日でその本を急いで写したとある。

つまり、現在、所在が確認されない親本X本は、鎌倉から出たと推測される。そして[B]は、大伴氏が持っていたX本に既に記されていた書写奥書と考えられよう。



すると、忍での興行から鎌倉にあったX本が書写されるまで九年ほどであるから、了意千句は鎌倉のいずれかの社寺に奉納されていた可能性が考えられる。

ところで、「大伴平翁」の名は、曲亭馬琴編、兔園小説別集<sup>20</sup>「永銭考、正八幡考」に、

(山崎美成)  
予が嘗聞るは、相模鎌倉鶴岡の神職に、大伴平翁といふ人あり。はやくより地理の学に志ふかゝりければ、

本国の地志撰んことを企たりしが、半に及ばで身まかりけるとぞ。いとをしき事になん。

と記載される。これによれば鶴岡八幡宮の神職に就き、地誌に造詣の深い人物で、相模の地誌の編纂を計画していたが、道半ばで亡くなったという。

ここで考え合わせるべきは、連歌師兼如による鎌倉千句（荏柄千句）である。この千句は、慶長十三年（一六〇五）に鎌倉の荏柄天神に奉納された。書陵部蔵本はやはり高野辰之旧蔵本であり、かつ奥書に「文化十一年五月三日／通亨摹」とあり、了意千句と同じ文化十一年の通亨筆本であることが判明する<sup>21</sup>。

さらに、注目すべきは鎌倉千句に通亨が写した原本の識語である。

尊照律師は吾神宮寺(鶴岡八幡宮)の住侶／にて予か莫逆の人なりし／一時記念にて之を贈る／今荏柄廟の原本散乱して纔／両三卷を存す幸に此本の伝／来律師の手澤と謂へし

甲子の秋 大伴忠男識

傍線部によれば、大伴氏が書写した鎌倉千句は、荏柄天神に伝わっていたことが分かる。識語の「甲子の秋」は文化元年（一八〇四）とみられ、通亨の書写奥書以前であり矛盾しない。この識語を記した大伴忠男は、鶴岡八幡宮の神職であったと伝えられた大伴平翁その人である可能性が高い。そして大伴家譜によれば、忠男は連歌の達者で、寛政頃江戸城の連歌に参加したとある。

したがって、了意千句の親本X本も、これと同じ伝来を辿り、鎌倉、それもおそらく荏柄天神に所蔵されていたと推測される。

そもそも連歌師による独吟千句は、前述の通り、パトロンの追善・祈願・攘災といった動機によるものが目立ち、完成後、神社に奉納されることもある。三島千句は東常縁の子竹丸の病氣平癒を、浅間千句は今川氏親の厄祓い、出陣千句は氏親の武蔵での戦勝をそれぞれ祈願し、浅間神社・三島大社に奉納された。了意千句も同様な事情を考えてよい。成田氏に信任された了意は、小田原北条氏滅亡の前夜、緊迫する空気のうちで、難しい進退を迫られる氏長のため、関東一帯の崇敬を集めていた荏柄天神または鶴岡八幡宮に奉納する目的で、千句を詠んだのではないか。

以上から、戦国末期に関東で興行された了意千句は、江戸後期になって八幡宮神官によって見出され、柳営連歌師によって転写され、その過程で、上方の連歌師に伝播していったと考えられる。

### 三、本文の系統分類及び系統内の異同と性格

諸本はさきに掲げた奥書 **B** の有無によって、二系統に大別される。第二章第二節に校本を用意しているので、詳しい考察はそちらに譲るが、第一系統は **B** を有し、「宮」「満」「広」が当たる。第二系統は、**B** を有さない、残りの「含 a」「含 b」「天」「豊」「小」「楠」となる。このことは、第一系統には、各百韻の端作りに「天正十六年」の年記が記され、第二系統にはそれが無いこと、本文の異同、合点・批言の有無といった点とも連動している。また批言の欠脱は、各系統内でかなり一致する。

【図 1】



はじめに、第一系統における本文と性格を確認する。「広」は「宮」の転写であるので除外し、「宮」と「満」の二本を対校すると、大きな異同は認められないが、「満」でミセケチとされた後の訂正本は、すべて「宮」に一致する。第九百韻には異同は全くない。両者はごく近い関係にある。なお、「宮」と「満」が対立する本文を有するとき、他本はすべて「宮」の本文と一致する。これは「満」が独自に本文を改めた結果と疑われる。

ついで、第二系統に属する諸本の本文と性格を確認する。第二系統はさきの [C] の有無と状態によって三種に細分される。まず、[C] を全文持つ「含 b」「豊」を一種、持たない「含 a」「楠」「小」「天」に分けられる。「天」には特徴的な本文があり、第三種とした。

「含 b」が第二系統の祖本に最も近い。「天」は独自の異文が目立ち、最も距離がある。「含 a」「豊」は誤写誤脱が多く、とくに「豊」は末流の本文である。「小」は奥書に「以二本校合畢」と、少なくとも二本の対校本を参照したとあり、「天」ほどではないが、異文がある。「楠」は倉卒に書写したらしく、ミセケチによる訂正、脱字の補入も間々認められる。

それでは、特徴的な事例によって、第一系統と第二系統の比較を行い、その結果を踏まえた上で、第一系統に属する「宮」と「満」の成立の先後関係について考察したい。

(1) 第五・73

第一系統

舟よする霞のひまの袖フスマイニアリみえて

〔宮〕

舟よする霞のひまの袖みえて

〔満〕

第二系統

舟よする霞のひまの風みえて

〔天〕〔豊〕〔含 a〕〔含 b〕〔楠〕〔小〕

(2) 第十・49

第一系統

盞はすんなかれてもいくめぐり

〔宮〕〔満〕

第二系統

盞はすてなかれてもいくめぐり

〔含 a〕〔豊〕〔楠〕

盞はすんなかるゝもいくめぐり

〔含 b〕

盞はすんなかれてもいくめぐり

〔小〕

盞は末なかれつゝ幾めぐり

〔天〕

(3) 第一・68

第一系統

〱 駒行やらぬ雪ニニのゆふくれニニの雪雪敷

〔宮〕

〱 駒行やらぬ雪の夕くれ

〔満〕

第二系統

〱 駒行やらぬ夕暮の雪

〔天〕〔豊〕〔含 a〕〔楠〕〔小〕

〱 駒行やらぬ雪ニニのゆふくれニニの雪雪敷

〔含 b〕

まず(1)で「宮」に附されるイ本注記は、「宮」が親本の本文を忠実に書写しつつ、おそらく第二系統に属する他本と校合したことを窺わせる。

そのことは第二系統の本文が、「宮」成立以前に存在していた可能性をも示唆する。しかしながら、第二系統が原

初の姿を留めており、整った本文であるとも言いがたい面がある。

(2) は、第二系統内で、書写過程で書写者の解釈によって生じたと思われる異文の例である。「すんなかる」「すてなかれ」「すゑなかれ」の三様があるが、いずれの本文でも一見、句意は通る。しかし、これは第一系統の「ずんながれ」あるいは第二系統の「含b」の「ずんながるゝも」に就くべきであろう。宴席で杯を座次のまま受け取り飲むことを意味する語で、古くは源氏物語に見え、当時の記録・文書にも「順流」として頻出する。「含a」「豊」「楠」「天」などは、改作というより、句意を解せず書写した結果生じた異文であろう。

そして「宮」には、虫損箇所を忠実に模写した箇所が各所に認められ、いたずらに本文を意改するのではなく、忠実な摸写によって、原文の保持に努める意識が窺える。

以上の前提に立ち、(3) の異同を検討する。

これは、前句の「宿とひてつかれやすめん旅の袖」に対し、「旅の袖」に着目し、「こまとめて袖うちはらふかげもなしさののわたりの雪の夕暮」(新古今集・冬・六七一・定家)を本歌にした付けで、そこが評価され合点句となつたのであろう。ならば、「雪の夕暮」の本文が期待される。

しかし、「宮」の親本には、「雪のゆふくれの」とあつたらしい。書写したところで、字余り且つ本文が途切れていることに気づき、上の「雪の」をミセケチとして、句末の体言止めと判断して、「雪敷」と注記したのである。

第二系統のうち、「含b」は、これと同じミセケチと注記を持つ。つまり第二系統の祖本も、「宮」の親本と同一であり、「含b」はそのまま保存したが、「天」以下は、ミセケチと注記に従って「夕暮の雪」という本文としたのであろうと推測される。

いっぽう、「宮」と同じく第一系統に分類される「満」は、他本と比較した上で、書写者の岡延宗が句意が通るよ

これらの事例を比較すると、祖本の姿を忠実に写し留めているのは第一系統であり、そのうち「宮」と「満」とでは、「宮」が先であり、「満」は後に成立したものとなろう。但し、第二系統のうちにも、第一系統の祖本（さきにX本とした鎌倉の本）が既に誤っていたものを訂正できる点もある。

本文の読解という点においては、親本をほぼ忠実に摸写し、さらに他本との校合を行いつつも、積極的に本文の校訂を加えなかった「宮」を底本に用いるべきである、と結論される。

#### 四、合点・批言

ついで、合点・批言についてはどうであろうか。

合点は、現存諸本に大きな出入りがある。各百韻の末尾に合点の数が記録されるが、諸本いずれも実際に附された総数と記録が一致しない。そこで、末尾に記された数と、写本に附された合点の実数との差異を誤差として示したのが【表2】である。（）内は長点の差異である。

【表2】

誤差		
6(2)	宮	第一系統
15(1)	満	
38(1)	広	
26(5)	含 a	第二系統
8(0)	含 b	
9(2)	天	
29(0)	豊	
23(0)	楠	
5(2)	小	

ここから、「宮」がやはり本来の姿を最もよく伝えていると言える。第二系統では「含 b」が優れ、いっぽう「含 a」「豊」「楠」の差異が大きい。また長点の誤差では「含 a」が最大である。

この傾向は批言の有無にも当てはまる。実は批言も合点以上に、現存諸本間に出入りがある。相互を対照すると、千句中87句に附されている。

ところが、各本、欠脱を差し引いた批言の実数は、「宮」76句、「満」と「豊」72句、「小」70句、「楠」と「広」65句、「含b」60句、「天」56句、「含a」49句となり、完備するものはない。やはり欠脱は「宮」が最も少なく（それでも12句に欠く）、「含a」が最も多い傾向にある。

いっぽう、他のすべての本で欠脱するのに、ある一本だけに批言を有する場合もある。これを最も多く有している本は「小」であり、五句に他本には見えない批言を持つ。また「天」「豊」にもそれぞれ一句ある。「小」の句本文は誤脱が多かったり、独自の異文を持つが、批言については無視し得ない価値を有するのである。諸本はどうも批言についてはすべてを網羅して書写せず、適宜省略したことが想定され、かつ小字で倉卒に写されるため誤写誤脱も生じやすい。本文とは別に、批言については他本との校合が不可欠となる。

合点の数は、十の百韻すべてにほぼ二十句前後附されるのに、批言の分布はばらつきがある。第一〜第四百韻には、第二の十六句を最大に、十句以上に附いているのに対して、第五〜第十では十句以下で、かつ次第に減ずる傾向にある。とりわけ第十では批言は一句にしか附されない。なお、追加の八句にも、一句に批言がある。

批言の主な内容は、句作、寄合の善し悪し、指合の指摘などである。これについて島津忠夫氏は「専ら形式的な面からのみ批評を与へてゐる」と、紹巴の関心は職業連歌師として、もっぱら去嫌といった式目にあつたとする<sup>22</sup>。了意千句で批言がある句は全体の7.6%であり、注の密度、積極性からみれば必ずしも行き届いているとは言い難いが<sup>23</sup>、他人の千句への批評であり、別な評価が可能であろう。

具体的に見ると、「珍重」という言葉で、句の構想や表現に新奇性があると肯定する批言が五句。いっぽう、「猶〇〇あるべく候」と、句のより一層の工夫を求める批言で六句ある。句に対する見解、解釈を記した批言は二句。先行句の有無を指摘する批言が一句ある。

興味深いのは否定的な評価も少なからずあることで、指合を指摘する批言は十七句（内一句は批判と重複）、句中の

特定の語や趣向、寄合に関して疑問を呈する批言が五十六句にのぼる。紹巴は書状では「指合なども少候」と述べていたが、実はそうでもなさそうである。

そのことは、紹巴が施注した千句連歌『称名院追善千句』と『毛利千句』の批言には、指合の指摘がなく、かわりに本歌・本説の指摘（称名院一三五句・毛利一三〇句）と付合手法（遣句、取なし等）に関する批言（称名院七〇句・毛利七〇句）が目立つのに対して、了意千句では前者の批言は二句、後者は一句も見られないことから明らかである。奥書[A]で都の連歌より優れているとしたのは励ましであろう。

## 五、句風と批言の特徴

最後に了意千句の句風を、紹巴の批言を手がかりに検討する。独吟千句は、宗祇以来、正風躰に詠むことを重視したようである。了意千句も、成田氏長のための法楽・奉納という背景があったとすればなおさらであるが、俳諧の句はほとんどなく、総じて折り目正しい詠みぶりであると言える。

紹巴が評価し、長点を付けたのは、各百韻一、二句程度であり、

おもふ北野の神のそのかみ

へぬさと散かけの紅葉を手向山（第二・95）

日のさすままに山あらはなり

へ布引の滝は里にやさらすらん（第三・97）



と、本歌によるとともに、見る様の鮮やかな付けを評価していたようである。そういう純正な句に対して、後半では少しではあるが珍奇な発想の句がある。第七百韻には長点がないが、

伴ふ人もあらぬつれ／＼

こゝろたゝ双紙を見つゝ慰めて（第七・67）

がある。源氏物語手習巻における浮舟の面影があるものの、「つれづれ」から「双紙」への付けは、やはり当時ようやく流行しつつあった徒然草、その序段や十二段の影響も見べきであり、注意される。

批言では、不用意な表現を指摘するものが多かった。たとえば、

とふ人のあはれさそなの宇治の山

ふりて残れる陰のみさゝき「みさゝき無分別歟」（第二・56）

宇治山を訪れる人に哀れを感じさせる対象は何かと考えた時、それは長い年月で古びつつ痕跡を留めている御陵である、と定めた付合である。

句意も付合も難解ではなく、十分に解釈可能である。しかし、紹巴は「みさゝき無分別歟」と問題とした。たしかに連歌の作例もわずかで、

ひとりゐやつれつれのみにすくすらむ

むかしわすれすまもるみささき（元和六年「一六二〇」九月二十日百韻・82）

と、白氏文集・新樂府「陵園妾」、後宮の女性が嫉妬を受けて、一人で陵墓を守る役目に左遷され、生涯を幽閉同然に送ったという故事を踏まえる。和歌はさらに稀で、道綱母が村上天皇の崩御を悼んで後宮に贈った、「世中をはかなき物とみささぎのうもるるやまになげくらんやぞ」の一首くらいしかない（蜻蛉日記・上・一一一）。しかも、これは「みささぎ」に「見」を掛ける。

了意の句は特段の故事を下敷きにせず、かつ修辭もないから、紹巴は宇治に「みささぎ」を出す必然性が理解できないとして、「無分別敷」と難じたのである。他に第一・11「杵桧原」、第一・17「尾上こす」、第四・83「秋しらぬ」を難じているが、同様の趣旨であろう。

ただ、このような了意の指向は、むしろ紹巴の風に習おうとしていたゆえでもあるらしい。

ちりにむもれし水かすかなり「ちり無詮候敷」

をこたりてむかふ硯のをしまつき「五もし猶あるへく候敷」（第二・59）

水面が塵芥に埋もれて見えなくなりつつあると詠む前句を受けて、59は「ちりにむもれた」対象を、手習いなどが無沙汰となってしまうた「硯」が載る「をしまつき」に転じて付けた。「塵」と「硯」は縁があったらしく、<sup>24</sup>、少なからず見出せる。

「をしまつき」は、産衣に「オシマツキ 几 机つくゑの事也」とあり、文机の意と了解されるが、その用例は和歌に求め

難く、連歌の作例も僅かである。ところが、これを用いるのが、

つきまてはほとなきあきのおしまつき

むかふとやまはきりにはれつつ

（紹巴亡父追善千句・第七・46）

すずりのみつもこほれもてゆく

くれぬまをしはしよりふすおしまつき (羽柴千句・第九・68)

と、いずれも紹巴の句であり、かつ付合も近似する点は注意される。かねて了意が紹巴の連歌作品、それも千句を目にしてきた可能性は高く、当該千句は、そうした紹巴作品実見の成果を意識的に撰取した現れとも言えよう。

なお、59の「五もし」は「をこたりて」を難とするのであろう。「をこたりて」と「むかふ」は態度としては逆の意味であるのに、それを「て」と順接で繋げた点に工夫がほしいという意であろう。

最後に千句ならではの語に着目したい。千句のうち一句しか用いられない語があったようである。

はなれもやらぬ面かげはなに

へ祈にもしうねきまゝのいきす玉「千句の一躰に候敷、」(第八・29)

前句で、縁を切ることができない面影は何であろうかと問われ、付句でそれは祈禱をしても執念深く憑依したままの生霊であると受ける。これを紹巴が「千句の一躰に候敷」とする点が注意される。合点句であるから、肯定的な評価であろう。では、どのような点が「千句の一躰」に相当するのか。おそらく「いきす玉」の語に手がかりを見出すべきであろう。

「いきす玉」は、匠材集に「いきすたま いき霊也」とある通り、生霊の意である。具体的には、源氏物語・葵巻で、葵の上に取り憑く六条御息所が想起された。

連歌の作例は、文明二年の河越千句、

いでてかはべにはらへするひと

うらめしなそなたにむくへいきすたま(第五・白何・63)

を初見として、東山千句(第二・薄何・84)、石山四吟千句(第十・初何・84)、嵯峨千句(第七・何路・43)、天正四年万句(第一千句・第十・92)などに見出される。明らかに、百韻連歌よりも千句あるいは万句連歌に目立つ語であると見える。

「いきす玉」が、当時は千句連歌での「一句物」として用いられた表現であったとすれば、了意は和歌・連歌に先例を見出し難い語をむやみと詠むのではなく、当該作品が千句であるという意識に強く立脚していたと言え、それを紹巴は追認し評価したのではないか。

ところで、称名院追善千句は紹巴の代表作で、地方連歌師にも熱心に研究されており、紹巴も句意を解説した自注や門弟の聞書を送って応じた。その一人に氏長弟泰親がいたことは述べた。素丹聞書<sup>25</sup>によれば、千句ならではの句作りを指摘する言がしばしばあるが、千句では力を入れたのは前五百韻までであるらしく、後半になればなるほど「遣句なるべし」(第六・84)、「一切不付、独吟千句と見るべし」(第八・50)といった、緊張感の乏しい付けを自ら認め、さらに終盤では「独吟十百韻めの躰也」(第十・22)「千句独吟と見、ゆるさるべし」(第十・79)といった弁解も飛び出す。了意千句でも第五百韻以後は合点・批語が少なくなる現象もこれで説明できよう。

しかし、紹巴は同時に「げにゞ連歌の得心千句にはしかじ」と述べたとあり、紹巴の連歌指導における千句連歌の重要さも知られるのである。了意千句は、千句の修練こそが連歌の本質を捉えられるのだという紹巴の考えを、忠実に実践した作品とも言える。

## おわりに

了意千句の成立過程と諸本の伝来は、次のように考えられる。

天正十六年六月二日から六日まで、忍の地で五日間に亘って詠まれた独吟千句は、了意から紹巴へ送られた。紹巴による合点と批言が附された千句は、天正十七年四月の書状と共に、紹巴門の紹与を介して、了意に返却された。了意はこの千句をおそらく鎌倉の鶴岡八幡宮ないし荏柄天神に奉納し、慶長二年に同地で現在は伝わらない懐紙、或いはその写本X本が書写された。このX本を文化十一年三月十三日に忠実に摸写したのが「宮」であった。

本文については、「宮」は本文を忠実に保持しつつも、校合はイ本注記・ミセケチを用いて本文の改訂を最小限に留める。すなわち同じ第一系統の「満」に比して、原態をとどめ、諸本のうちで最も有用であると評価できる。

だが、第二系統は第一系統の祖本が流布して派生した本文とみられるが、「天」は寛永十七年に、堺の連歌師周辺で成立し、独自の異文が多いが、他本を相対化できる点に意義がある。「小」は現存諸本のいずれとも一致しない批言が数箇所認められ、これまで確認されない系統の本文を伝える点で注目される。

いっぽう、了意千句は、宗祇以来の連歌師の独吟千句の流れに立つ作品であり、且つ紹巴の教えを忠実に実践した試みであった。紹巴の合点と批言は、その連歌指導を垣間見させるものである。

天正・慶長年間の、あるいは一地方連歌師の作品としても、この作品は、多くの興味深い論点を有する。今後は千句連歌の特質に留意しながら、句意と批言の分析を進め、その意義を明らかにすることが求められよう。

- 1 個別作品の翻刻・注釈を除くと、千句連歌の通史的考察に、島津忠夫氏『島津忠夫著作集第二巻 連歌史』（二〇〇三年、和泉書院）第二章・三「千句連歌の興行とその変遷」（初出一九五七年）、形式面の考察に金子金治郎氏『連歌総論』（金子金治郎連歌考叢Ⅴ、一九八七年、桜楓社）Ⅴ「連歌の諸形式2千句連歌」がある。
- 形態・構成・素材に関して、福井毅氏「千句連歌張行覚書」（皇学館大学紀要7、一九六九年）、上野さち子氏「連歌における心情表現と感覚表現——千句連歌を中心に——」（連歌俳諧研究41、一九七一年）、山内洋一郎氏「連歌語彙の構造——千句六種による計量的分析」金子金治郎博士古稀記念論集編集委員会編『連歌と中世文芸』（一九七七年、角川書店）、浅井美峰氏「千句連歌における出句について」（国文123、二〇一五年）、松本麻子氏「千句連歌における「人の耳をもおどろかす」句」前田雅之氏編『画期としての室町——政事・宗教・古典学』（二〇一八年、勉誠出版）などがある。また戦国期作品では、鶴崎裕雄氏「戦国武将の千句連歌——明智光秀の五吟一日千句を中心に——」（関西大学国文学104、二〇二〇年）がある。
- 2 主要な作品は島津忠夫氏他編『千句連歌集』一〜八（一九七八〜八八年、古典文庫）に、文和千句以下、元和元年（二六一五）成立の高野千句を下限に収録。金子金治郎氏『連歌古注釈書の研究』（一九七四年、角川書店）には、三島千句（宗祇）・聖廟千句（兼載）・十花千句（宗碩ほか）・伊勢千句（宗長・宗碩）・称名院追善千句（紹巴）・毛利千句（紹巴・昌叱）の本文とともに、代表的古注の翻刻を収める。
- 3 奥田勲氏「紹巴年譜稿」（宇都宮大学教育学部紀要（第一部）17〜19・23、一九六七年〜七三年）、小高敏郎氏『ある連歌師の生涯——里村紹巴の知られざる生活——』（一九六七年、至文堂）、両角倉一氏『連歌師紹巴——伝記と

- 発句帳―』（二〇〇二年、新典社）など。
- 4 広嶋進氏「連歌初心抄」雲英末雄氏編集『江戸書物の世界―雲英文庫を中心にたどる』（二〇一〇年、笠間書院）参照。
- 5 『俳文学大辞典』（一九九五年、角川書店）「了意千句」の項。
- 6 成田氏の動向については、黒田基樹氏編『武蔵成田氏』（論集戦国大名と国衆7、二〇一二年、岩田書院）など参照。
- 7 引用は『後北条史料集』（第二期戦国史料叢書1、一九六六年、人物往来社）による。
- 8 『連歌総目録』（一九九七年、明治書院）。
- 9 角明浩氏『『家忠日記』にみられる会所の文芸―連歌・茶の湯を中心に』久保田昌希氏編『松平家忠日記と戦国社会』（二〇一一年、岩田書院）、鶴崎裕雄氏「家忠連歌の変遷―雨乞い連歌から京連歌へ」（駒沢史学85、二〇一六年）参照。
- 10 第三章第三節参照。
- 11 第一章第二節参照。
- 12 成田家分限帳（国立国会図書館蔵）に、「成田市左衛門」とある。
- 13 「大内氏系図」（鷲宮神社蔵）。武州埼玉郡太田庄鷲宮大明神由緒書並私家由緒（埼玉叢書3）による。
- 14 前掲注6による。
- 15 前掲注5、「大阪天満宮連歌叢書」（島津忠夫氏執筆）参照。
- 16 なお、常信は紹巴関係の連歌書を広く書写していたようで、慶長十六年六月には称名院追善千句注（素丹聞書）を書写した（京都大学附属図書館蔵本奥書）。京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵貴重連歌資料集

- 6 『(二〇〇二年、臨川書店) 参照(長谷川千尋氏解題執筆)。
- 17 『新修小松市史』資料編7・文芸(二〇〇六年、新修小松市史編集委員会)。
- 18 時慶卿記によれば、慶長七年に連歌師昌叱が近衛前久に行った源氏講釈も、約五カ月で四十帖後半までの講釈を終える。九月十四日に始まった講釈は、十二月十九日に「藤裏葉」(三十三帖)に、翌八年一月二十二日に再開、三月四日に「椎本」(四十六帖)に到達している。
- 19 前掲注5、「紹与」(両角倉一氏執筆) 参照。
- 20 引用は日本随筆大成第2期4(一九七四年、吉川弘文館)による。
- 21 兼如も紹巴門。綿拔豊昭氏『近世前期猪苗代家の研究』(一九九八年、新典社)第二章「是齋兼如」(初出一九八五年)参照。武井和人氏『中世古典籍学序説』(二〇〇九年、和泉書院)序章「古典学者としての高野辰之」(初出一九九二年)は、高野辰之歿後、蔵書は古書肆を経て、昭和二五年にまとめて九一点が書陵部に入った旨を指摘する。ほとんどが山田通孝本であり、了意千句・鎌倉千句のほか、兼載の難波田千句もある。
- 22 『島津忠夫著作集第三卷 連歌史』(二〇〇三年、和泉書院)第十三章「連歌固定への道」(初出一九五六年)。なお、島津氏ここでは批言は紹巴が附したとしている。
- 23 前掲注2金子氏著書による。
- 24 「はらひえぬ心のちりのかゝる身に／すゝりにむかふあさことのまと」(新撰菟玖波集・雑連歌三・二九七六・御製)など。蘇轍「久不作詩呈王適」詩に「筆硯生塵空度日」とある。
- 25 引用は前掲注16による。



	了意・氏長の文事と動向	その他の動向、一般事項
天正8年(1580)	5・氏長、紹巴より源氏物語二十巻抄を贈られる(奥書) この頃 氏長弟泰親、紹巴より称名院追善千句を贈られる(奥書)	
10年(1582)	この頃、氏長、伊勢商人宗治を食客とし、連歌稽古のため上洛させる(年代和歌抄)	3・武田氏滅亡 氏長、織田信長に通ず 6・2 本能寺の変。関東に天正壬午の乱起きる
13年(1585)	この年 氏長、猪苗代兼如を召し連歌(成田記)	7・11 豊臣秀吉関白となる
14年(1586)	4・20 氏長、北条氏と伊達氏の同盟を仲介す(伊達家文書) 12・23 了意、京都にて紹巴らと夢想百韻に参加。この年か 了意独吟百韻成立か	10・徳川家康、秀吉に従属 12・3 秀吉、関東奥惣無事令を発す
15年(1587)	正・3 了意、京都にて紹巴らと何人裏白北野百韻に参加、正10 何船、正13 懐旧(昌叱子息)、4・22 懐旧(慶典法印)も。春 氏長、忍の春日社にて法楽連歌を興行(成田記)。夏 了意、紹巴を招き連歌、ついで東下か(紹巴発句抜書)。	北条氏と秀吉との緊張高まる この年か 了意、紹巴を通じ秀吉に謁見するという(北条記)。
16年(1588)	6・2-6 了意、忍で千句を詠む、成田衆ら追加八句、ついで紹与を通じ千句を紹巴に送る	3・中 北条氏、秀吉に服属せんとするも、交渉決裂す
17年(1589)	4・21 紹巴、了意に返信し、ついで千句に合点と批語を附す	11・24 秀吉、北条氏に討伐を通告す
18年(1590)	9・22 了意、忍の家忠に参上 10・9、了意、家忠に参り連歌(家忠日記) 12・1 氏長、紹巴らと初何百韻に参加。了意も同座。	春 氏長、籠城する小田原城からひそかに秀吉に通ず、忍城開城を命ぜられ果たさず 3・29 山中城攻め 7・6 小田原城開城、北条氏滅ぶ、氏長改易され、会津の蒲生氏郷に預けられる 7・16 泰親、忍城を開城す 8・29 松平家忠、忍城を接收
19年(1591)	正28 了意、家忠に参り点取連歌(家忠日記) 5・3 氏長・了意・紹巴・紹与ら、京都にて山何百韻に参加 5・9 同じく何木百韻に参加 6・20、25 了意、忍の家忠に参り、玄佐・正佐と四吟連歌。(以上家忠日記)	正・26、氏郷会津より上洛、氏長同道か 4・氏長、下野烏山を与えらる 5・氏郷、会津に下向、氏長・了意も東下か 9・4 氏郷、陸奥九戸政実を攻め、氏長従軍す
文禄元年(1592)	正・9 氏長、京都にて紹巴らと何木百韻に参加 8・8 氏長、京都にて紹巴らと懐旧百韻に参加	
2年(1593)	冬 氏長・了意ら、京都で直江兼続の漢和聯句百韻に参加	
慶長2年(1597)	11・2 某、了意千句を書写す	

## 第二節 校本「了意千句」

### はじめに

「了意千句」は、武蔵国忍の城主、成田氏長の下に仕えた連歌師了意による独吟千句である。彼の生没年・出自は未詳ながら、天正十六年（一五八八）六月二日から六日の五日間にわたり張行された。その合点と批言を附したのは、室町時代末期の連歌界の巨頭里村紹巴である。千句は大部であることもあって、百韻に比すると研究は不十分であり、活字翻刻も宗祇、宗長、宗碩、兼載、紹巴といった主要な人物に限られる。

本節はこうした現状を鑑み、千句連歌とそれに附された紹巴の批言を翻刻し、本文の校異と系統分類の結果、善本と定めた宮内庁書陵部蔵本を底本に据え、八本の諸本と対校し、室町時代末期の独吟千句の一樣相としてその本文を広く紹介するものである。

なお、本節で取り上げる諸本の書誌、本奥書の翻刻と再検討、本文の系統分類、合点・批言の出入りについては、第二章第一節で詳細に述べた。

### 凡例

翻刻は以下の方針に拠った。

- 一、底本は宮内庁書陵部蔵『了意千句』（請求記号一五四・四七八）に依った。
- 一、対校本には、岐阜市立中央図書館蔵楠堂文庫蔵本『石山千句』（楠）、石川県小松天満宮蔵本（小）、豊橋市立図書

館蔵『樹齋千句』（豊）、大阪天満宮蔵『了意千句独吟』（満）、大阪大学含翠堂文庫蔵『了意独吟千句』（含 a）、『了意独吟千句』（含 b）、天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵『了意千句』（天）、広島大学福井久蔵文庫蔵『了意千句』（広）を使用した。対校の結果を【校異】欄に示し、はじめに端作・句上げの校異を、次に本文の校異を、最後に批言の校異の順で百韻毎に記した。なお、書名の下の（ ）は本節において稿者が付した略称である。

- 一、各句に通し番号を付し、一句を二行書きにしている場合は、これを一行書きに改めた。
- 一、清濁は付さず、漢字・仮名の区別は底本通りとした。
- 一、反復記号「々」、「／＼」も底本に従った。
- 一、判読不能の字は□で、墨消、擦り消しの字は■で示した。
- 一、平点は「ゝ」、長点は「ゝゝ」で示した。
- 一、合点、批言、ミセケチ、書き入れ、付箋、については可能な限り原本通り再現した。
- 一、原本の端などに付されている折番号は翻刻の対象としなかった。
- 一、明らかな誤字もそのまま翻刻し、期待される本文を右傍に（某カ）のように注記した。
- 一、破損、原本の状態などにより判読できない箇所は、字数が確定できる場合は□、字数不明の場合は「」で示した。推定可能な場合は右傍に（某カ）のように注記した。
- 一、左傍ミセケチの処理は、該当箇所に取り消し二重線で示した。右傍の場合はふりがなで漢数字の二を使用した。
- 一、本文、批言の異同のうち、解釈に関わらない仮名遣いの違いなどについては、これを示さなかった。
- 一、一部旧字異体字を通行の字体に改めたが、仮名遣い・送り仮名・改行は加えず原本のまま表記した。
- 一、明らかな誤り、字足らずな箇所は右傍に（ママ）と記した。
- 一、合点の校異は【別表】にまとめた。

【校本】

天正十六年六月二日

何路<sup>第一</sup>

了意

- 1 梅か香や更に天みつ時つ風
- 2 かすみの上の嶺の明ほの  
あまみつときつは奇特<sup>ニ</sup>候
- 3 雁かへる月の行来の雨はれて
- 4 田面をとをみつく川水
- 5 舟かよふ竹のかくれや里ならん
- 6 たひ／＼はこふ柴人の袖
- 7 空はたゞ雪になるへくさえ／＼て
- 8 あらしのまゝにまよふむら雲
- 9 飛つるゝ鳥の翅やみたるらん
- 10 山のこす急のくるゝ遠かた
- 11 杵原たてる奥より鐘なりて

杵原無詮候敷

- 12 月もさひしきふる寺の庭
- 13 方／＼の霧まの岩根行水に
- 14 音しをとせぬなみの秋風
- 15 入海のかたへ涼しくなり初て
- 16 夕日見る／＼ほのかなる山
- 17 尾上こす雲や時雨をさそふらん  
五もし如何
- 18 ひゞき出たる松の木つたひ
- 19 花／＼の散くるかけは瀧にゝて  
にて猶有へく候
- 20 くもりのうちの春の中空  
一句無分別候敷
- 21 めくるまのうすきひかりや遅らん
- 22 いさりの舟は風の磯さき
- 23 夕しほの満るをまゝに波高み
- 24 いつち千鳥の立さはくらん
- 25 分出る田つらの末は霧こめて

26 朝けの月のかけきゆる山  
27 むら／＼に見えてつゞける木々の色  
28 しくれてとをるあとのしら露  
29 すたれ巻外面の風のしつまりて  
30 〱あくる霞に鳥のなくこゑ  
31 おきいそく春のかり場の道の末  
32 〱雪はるゝ野の長閑なるころ  
33 〱澤水の氷をくゝる音そひて  
34 〱あしのかれはのそよく下をれ  
35 かる跡の冬田を鹿の行かへり  
    芦ニ鹿如何

36 里はなれなるふもとさひしも  
37 〱山風をひとりのみ聞柴の庵  
38 あはれね覚の夜半の暁  
39 〱したひつる別を月におもひ出て  
    一夜ノ別ニハ非す候

40 〱人の形見の袖の露けさ  
41 〱植にけむ跡はむかしの花すゝき

42 〱しけくなりたる野への虫のね  
43 涼みしも良ひやゝかに暮はてゝ  
44 真木の戸口の風の幾度  
    いく度如何

45 軒ちかき竹より竹のなひきあひ  
46 けふりそ霜のふかさあらはす  
47 水さむきなかれの橋の明はなれ  
48 山のあはひの川なみの色  
49 〱小泊瀬やいかにおちそふ花ならし  
    近比珎重候

50 〱春のゆふへのあらしはけしき  
51 〱雲霞きゆるまに／＼月出て  
52 かきりありけるなか雨の空  
53 人のうへをかたるにあかす明しはて  
54 とふつかひにもわかれかねつゝ  
55 忘ぬとかくるなさけの哀にて  
56 とをさかりても又憑む中  
57 花にこし袖まつ庭のはつ紅葉

- 58 春はありとも秋のあさ露
- 59 分ゆけは静なる野の霧晴て
- 60 さす舟見ゆる遠の川つら
- 61 吳竹のひま / \ 明るなみのうへ
- 62 水のけふりそたえ / \ になる
- 63 山もとや俄に風のおちけらし
- 64 ねところかふるむら鳥のこゑ
- 65 木をきりし跡は林のあらはにて
- 66 〱みちのつゝきの里のまちかさ
- 67 宿とひてつかれやすめん旅の袖
- 68 〱駒行やらぬ雪のゆふくれの雪雪
- 69 真砂地にあつさ忘るゝ月をみて
- 70 なみよせかへるはま川の波
- 71 松かねにかゝるもくつの爰かしこ
- 72 道かすかなるを山田の原
- 73 いつよりか住すてにけん草の庵
- 74 のかれての世を又いとふ人

一句無分別候

- 75 ひたすらに入こそふかき法ならめ
- 76 おさまる国にまつりことのみ
- 77 〱ふりにたる神のやしろも改て
- 78 霜かきはらふ森のした道
- 79 日のうつる草葉風吹朝ほらけ
- 80 野へのかすみやはれわたるらん
- 81 春あさき水の水上山かけて
- 82 解ぬつらゝや岩なみのすゑ
- 83 往来せて捨置舟のつなて縄
- 84 いくかふりそふ五月雨のころ
- 85 つれ / \ とこもるをまゝの住かにて
- 86 そのひとゝなきおもひ侘しも
- 87 うらみをもいはてし人のうとみはて
- 88 〱心のへたてあるともはなに
- 89 音つれも聞ぬをのみのとなりにて
- 90 〱春待ころのそのゝうくひす
- 91 月残る雪の上より明るる夜に
- 栖ニ心如何

- 92 戸ほそひらけは山ちかき陰  
 93 へ花はたゝ袖におほへる句ひにて  
 94 へさくらさく野のかた敷の暮  
 95 うさも猶春は忘るゝ旅のみち  
 96 へかすみをわたる舟のしつけさ  
 97 浦風の過る跡より明初て  
 より明る此折候  
 98 しけきまゝなる真葛はの露  
 99 うつろはぬ陰を砌の松垣に  
 100 千年の秋をかねてすむ宿

付墨廿六句

此内長三

- 【校異】  
 天正十六年六月二日―ナシ(天・豊・含 a・含 b・楠・小)  
 了意―了意独吟(天)、ナシ(豊)  
 句上げ―付墨式三句／内長三(天)、付墨廿三句／内長二(小)  
 3 行末の―行来に(含 b)  
 7 雪に―雪ヰ(含 a)  
 8 まよふ―かよふ(楠)  
 10 遠かた―をちこち(含 b・楠・小)  
 12 さひしき―閑敷サヒキ(含 a)  
 15 涼しく―すゝしヰヰク(満)  
 17 時雨―露(天)、尾上―尾口上(楠)  
 21 めくるまの―めくるまも(天・豊・含 a・含 b・小)  
 23 まゝに―儘の(天)、まゝの(満・含 b)  
 28 あと―秋(小)  
 32 ころ―色(楠)  
 34 底本「下」字、虫損により他本で補う。

- 36 なれなる―なれたる(楠)  
 41 枯にけむ―枯にけ木ん(満)  
 43 涼しさの良ひやゝかに暮終て(天)  
 すさみしも梢ひやゝかに暮果て(豊)  
 涼みし―涼しさ(含 a)  
 45 涼しきも漸冷かに暮果て(楠)  
 竹のなひきあひ―竹のうちなひき(満)  
 46 ふかさ―ふかき(含 b)  
 あらはす―あらは■(広)  
 49 花ならし―花ならん(豊・含 a・楠・小)  
 49 はけしき―はけしき(含 b)  
 53 かたるに―語る。(含 b)  
 55 かくる―かへる(含 a)  
 59 分ゆけ―分ゆけ(楠)  
 60 さす舟―さすかかに(楠)  
 62 けふりそ―けふりの(含 b)  
 63 俄に―俄(含 b)  
 64 かふる―こふる(豊)  
 65 あらはにて―顛れて(天)

- 68 雪ニのゆふくれの雪戴―駒行やらぬ夕暮の雪(天・豊  
 ・含 a・楠・小)、雪の夕くれ(満)、駒行やらぬ聃  
 70 氷ゆふくれの雪戴(含 b)  
 はま川の波―はま川の末(天・豊・含 a・含 b・楠  
 ・小)  
 73 住すてにけん―住捨つらん(天)  
 76 国に―国そ(天)、国は(含 a・含 b・楠・小)  
 79 朝ほらけ―朝嵐(天)  
 86 そのごとくなるおもひわひしも(天)  
 87 そのひとゝ―そのことゝ(含 a・楠・小)  
 人―人本ノマ(満)  
 93 おほへる―おほゆる(天)  
 95 旅タビのみち―ルビなし(天・豊・満・含 a・含 b)
- 【批言の校異】  
 1 あまみつ―ナシ(天)、批言ナシ(満・広)、天に満  
 とき奇特候(含 a)、天ニみつときつきとくニ候(含  
 b)、天満時つ奇特ニ候(小)、天にみつ時つ奇特候  
 (楠)



11 無詮に候 | 無詮候(満)

何人 第二

二日

19 へく候 | へし(満)

1 へ朝な / 山たかくなる霞かな

11、17、19、20 | ナシ(広)

2 ふもとの野への雪きゆる比

11、17、19、20、39、86 | ナシ(含 b)

3 草むらも青む柳にさそはれて

17、19、20、97 | ナシ(天・含 a)

4 へつゝみつたひのみちの末 /

65 五もし猶有へく候(豊)、ナシ(天・宮)

5 へ綱手引舟やはるかに帰らん

35 芦に如何(豊)、34に付す(含 a)(小)

6 かすかにくるゝ竹の下かけ

39 夜の別には非候(天)、一夜の別<sup>ニ</sup>あらず候(満)、

7 へ月をそき霧のまかひに飛螢

候 | 敷(含 a)

8 雨よりのちの秋の夜の空

44 いくたひいかゝ(天)、ナシ(豊)

9 かた敷の袖冷しき風おちて

49 近比珍重候(天)、ナシ(豊)、48の左傍に付す(含 a)、

10 軒はの上になかき山まつ

平点を付す(小)

11 かこひすむめくりはふかき岩隠

74 候 | ナシ(満)

12 世をすてはつる人のあはれさ

86 の批言を85の左傍に記す。(天・含 a)

13 へ妹とせもおとろへぬれは引はなれ

17・20・35・39・97 | ナシ(小)

14 あたしちきりをなに憑みけむ

17・19・20・44・97 | ナシ(楠)

15 かならすといひしを待にとひもこて

16 へさかり過行花の山さと

17 さひしさは日をふるまゝの春雨に

- 18 雲に霞のたちかさねつゝ  
 19 天津雁いつち別るゝこゑならん  
 20 田中を人のかよふ明かた  
 21 下露に月もこほれて影薄み  
 22 竹の葉そよく霧のひま／＼  
 23 朝またき戸さし明れはひやゝかに  
 24 庭行水のすみわたるをと  
 25 岩かねの苔にしたゝる雨過て  
 26 袂涼しきかけはしのすゑ  
 27 吹おつる陰の山風いくとをり
- 風落てと  
「有カ」  
 過  
 敷
- 28 つま木たく火のきゆるさゝふき  
 29 さ夜ふかくなれるまに／＼人はねて  
 30 とひきてもたゝむなしかへるさ  
 31 しのふれはおもひかはすもあやなしや  
 32 とけにし中もさはり度／＼  
 33 氷もや春のかけひにのこるらん
- むなしきニあやなし二句

- 34 返し捨たるを山田のはら  
 35 人けせぬ岡への月の夕霞  
 36 露ふかゝれやみちの草／＼  
 37 時雨つる野は虫の音の猶添て  
 38 あらしの風そやゝさむくなる  
 39 いねかてに夜なかきまゝの柴の庵  
 40 くり返しつゝおもふいにしへ  
 41 書をきし文をひらけはあはれにて  
 42 いてゝいにけるあとしたふのみ  
 43 帰こむかきりをいつと松浦に  
 44 波よりなみの末かすむくれ  
 45 なかれよりて水泡にまかふ花はおし  
 46 梅さく谷の風のはけしさ  
 47 鶯のなくこゑもまたはつかにて  
 48 あくるとみしもふかき夜の月
- 時雨ニはむしあるへく候  
 五もし如何  
 夜人ハねてニ折を可嫌也

49 身にしめておもふ衣 / \ までしはし  
 50 なをはた袖のなみた露けし  
 51 程へぬる旅のつらさをかたり出  
 52 もとめし玉の枝をみせつゝ  
 53 此古事ニかたり出人付所如何  
 かつつほむ冬野の梅を尋いり  
 尋入猶あるへく候歟  
 54 ふみ分にけるみちのしら雪  
 55 とふ人のあはれさそな。宇治の山  
 56 ふりて残れる陰のみさゝき  
 みさゝき無分別候歟  
 57 草はたゝ茂きか上に生添て  
 58 ちりにむもれし水かすかなり  
 ちり無詮候歟  
 59 をこたりてむかふ硯のをしまつき  
 五もし猶あるへく候歟  
 60 あけはつる迄いね過すまと  
 いねかてと過歟

61 秋もたゝ月なき夜半はなにならて  
 62 雨のはれまも霧ふかき空  
 63 木ゝの色おもひやらるゝ山高み  
 64 へさかぬ方にも桜ちり行  
 65 春くるゝむらの川風野をかけて  
 村無詮候歟  
 66 霞きえぬる水のをちこち  
 67 みる / \ も波の上より明はなれ  
 68 冬田のいなは露そみたるゝ  
 69 山もとや時雨の跡に日はさして  
 70 方 / \ になる嶺のうき雲  
 71 へふき出る嵐に迷ふゆふ鴉  
 72 おくよりおくのふかき杵むら  
 73 へ夏かけて残る井かきの花盛  
 74 袖の往来のたえやらぬみち  
 75 へ忍よる余所目くるしき月澄て  
 76 おもふあたりのきりはれぬめり  
 霧ノ晴ゝ此折ニ候

77 なかめよと小萩色めく野への末  
 78 秋のかりはのなこりすきうき  
 79 さかつきをめくらしそふる伴ひに  
 80 琴のしらへそ聞にあやしき  
 81 見るまゝにけはる猶はた明石潟  
 一句無分別候歟  
 82 千鳥たちゆくなみのゆふかけ  
 83 満しほにうつろふ月のさえ／＼て  
 84 松風あらきすゑの山きは  
 85 散つくす花や雪とも積るらん  
 86 春も今はの砌さひしも  
 87 なれ／＼し籬のこてふ飛さりて  
 88 野への朝田ののとかなるころ  
 89 うかへぬる汀の舟の散／＼に  
 90 哥に心をよするかしこさ  
 91 うつりかはる折／＼にしも哀ひて  
 92 ときにあひしもおとろふる袖  
 93 さすらへて行こそつらき限なれ

94 おもふ北野の神のそのかみ  
 95 ぬさと散かけの紅葉を手向山  
 96 吹そふまゝの風はいくたひ  
 又幾度如何  
 97 秋さむきかりねの月の更／＼て  
 月のさゆる此折<sup>ニ</sup>候  
 98 露より霜にをきかはる袖  
 99 うら枯てまはらになれる草の庵  
 付墨廿三句  
 100 おくて田まてにもり盡すころ  
 此内長壺

【校異】

- 二日―ナシ(天・豊・含b・広・楠・小)  
 1 8 欠脱(広)
- 6 かすか―かつえ(豊)、かすみ(小)
- 9 冷しき―すさましく(含b)
- 11 岩隠―岩陰かげに(含a)、岩かくれ(楠)
- 12 あはれさ―あはれん(含b)
- 13 妹とせも―妹姉かと(天)
- 引はなれ―引わかれ(満)
- 18 霞の―霞に(天)(楠)
- 19 ならん―ならし(天)
- 22 霧―雫(天)
- 25 したゝる―したるゝ(含b)
- 雨過て―雨晴あて(楠)
- 27 吹おつる―吹出る(豊)
- 28 さゝふき―笹葺(天)、紫茨あざ(楠)
- 33 かけひ―かけ植う(楠)
- 36 露ふかゝれや―露かふるなれや(豊)
- 37 添て―そへて(天)、そこひて(豊)
- 38 風そ―風も(天)
- 43 松浦に―松浦舟(含a・含b・小)
- かきり―恨(楠)
- 45 流つゝ水泡にまかふ花はおし(天)
- おし―なし(含b)
- 50 露けし―つゆけき(天・豊・含a・含b・楠)
- 51 出―出出(含a)
- へぬる―へつる(小)
- 54 けり―ける(天・含a・含b・小)
- 55 な。宇治のの山―なの宇治の山(含b・小)、とふ人の  
 哀ささそなのうちの山(豊)
- 59 をしまつき―玉手箱(天)、をしまつけ(含a)
- 61 ならて―ならす(天・豊)、ならん(含b)
- 65 野をかけて―野を懸て(天)
- 66 きえぬる―さえぬる(含b)
- 69 山もとや―山本は(豊)
- 日は―日の(豊)
- 71 迷ふ―まかふ(天)
- 78 かりはの―かりはそ(天)

- 80 あやしき―あやなき(豊)
- 82 ゆふかけ―夕かせ(天)
- 86 さひしも―さひしき(豊)、春も―春は(含b)
- 89 うかへ―うかひ(天)
- 汀の―小河(天)、散―に―■に(含b)、
- かす―に(楠)
- 90 哥に―年に(豊)
- かしこさ―かしこき(豊)
- 91 折ノにしも―折ノをしも(含a・楠・小)、哀
- ひて―<sup>アルレミア</sup>にて(含a)、あはれみて(含b・楠・小)
- 94 神のそのかみ―神の昔時(楠)
- 95 ぬさと―御幣と(含a)
- 97 秋さむき―秋寒み(満)
- 98 をきかはる―置かは<sup>ル</sup>(含a)
- 99 まはら―末葉(天)、<sup>まはら</sup>小たわらに(含a)
- 100 ころ―山(豊)

【批言の校異】

- 27 過歎―過候(満)、批言ナシ(含a)
- 風なりてと過候(含b)
- 37 時雨ニはかはるへく候―ナシ(天・含a)、時雨ニ
- はかはるへく候か(豊・小)、時雨<sup>ニ</sup>む<sup>マ</sup>へし也(満)
- 34 左傍「五もしいか」に上書きの取り消し線。35に
- 同じ批語を鮮明に表記(天)
- 39 ナシ(含a)
- 52 此事ニかたり出ん付所いか(満)
- 此古事ニかたり出候付所いかん(含a・小)
- 夜ニ人はねて折を可嫌候歎(楠)
- 夜ニ人はねて過候(小)
- 59 あるへく候―いか(満)
- 60 いね過候(小)
- 62 雨―虫損(小)
- 76 霧晴、此折ニあり(満)
- 81 一句無分別歎(満)
- 97 目のさゆる此折ニ歎(満)
- 此折候―此折ニ候(含b)

31、 37、 39、 52、 53、 65、 96 ナシ(含b)  
 53、 60、 65、 81、 96、 97 ナシ(含a)  
 58、 59、 60、 97 ナシ(天)  
 53・96・97ナシ(小)  
 22・25・64合点ナシ(楠)  
 55と62、(豊)は虫損により他本で補う。  
 95 長合点を付す(楠・小)  
 96・97ナシ(楠)

何船 第三

三日

1 曙やさえても春を花さかり  
 春をのをもし無分別候

2 月に雨はれ長閑なる庭

3 小蝶ぬるまかきにしけき露みえて

4 なひきあひたる草むらの色

5 吹とをる秋の野風のとひ／＼に

6 霧まのみちの袖のすゝしさ

7 槇原のおくは夕日のかすかにて

8 かさなりつゝも嶺たかきかけ

9 梯や岩ほつたひをすゑならん  
 此をもし又如何

10 はるかにおつる瀧つみなかみ

11 五月雨も良晴にたる朝ほらけ  
 雨の晴るゝには如何

12 雲をもれつゝひかりほのめく

13 燈は寺のさくらの木のまにて  
 寺のさくら無分別候

14 ゆふへしつけき春の野の道  
 15 そことなくかへり盡せる鳥の声  
 16 苧袖おほきを田の末 / \  
 17 明はつる秋の山もとはるかにて  
 18 霧のとたえにみゆる川水  
 19 月になる竹より竹やそよくらん  
 20 夜半のほたるのかけそ消行  
 21 更わたる空は夏さへ身にしみて  
 22 おちて来にけり軒の松かせ  
 23 冬は猶かけもまはらにならかしは  
 24 見えてさひしき山きはの道  
 25 行かひの袖たえにたる橋の上  
 26 川つらよりも明わたりつゝ  
 27 なみの音霞にこもる末遠み  
 28 羽ふきていつち雁かへるらん  
 29 春の夜のまくらおとろく有明に  
 30 酔ふしにける花の木のもと  
 31 もろ共にあかぬ円居は別かね

32 しらへあはする糸竹のこゑ  
 33 時いたる御法の庭のたゝならて  
 34 こゝちの人のつとひぬる門  
 35 うかれめの住かのあたり暮夜に  
 36 ほのみしまえの袖の面かけ  
 37 さす舟は芦の葉分に遠さかり  
 38 吹をくりたる風のすゑ / \  
 39 山はたゝ見る / \ 雲の方よりて  
 40 月さやかなるむら雨のあと  
 41 端ちかみあつさ残らぬ夕まくれ  
 42 あまたになれる虫の声 / \  
 43 野へは猶千種の花の咲添て  
 44 分て行ゑのあくる朝露  
 45 玉鉾の霜はあへすも解わたり  
 46 春なりけりなかつむ遠こち  
 47 さえ / \ し山もけふはた年越て



48 谷の戸いつるうくひすのこゑ  
 49 へかたへよりむら／＼雪の消る野に  
 50 春みにけらし陰の草／＼  
 51 散つもる桜は夏にくちはてゝ  
 さくらは夏ニ如何  
 52 そゝくあまりや猶残るらん  
 53 へ旅たつをしたふ涙のさかつきに  
 54 めくりあはんもしらぬ行末  
 55 後の世をかたる契の哀にて  
 ゆくすゑニ五もし付過候敷  
 56 文のつたへを憑む法の師  
 一句無分別候 法過て法ノ師如何  
 57 へありと聞も尋かねたる小野の奥  
 58 へ草のしけみのまつむしのこゑ  
 59 秋あさきふもとの道の暮初て  
 60 やすらふ袖の月うすきかけ  
 61 へ閨の外に人目よきつゝ忍より  
 戸ノ字あきて候敷

62 中たちにしもしるへまかする  
 63 へおもふよりちかをとりせはいかならん  
 64 聞はかりにそ見ぬかあやしき  
 65 へなるかみはかさなりにたる雲の上  
 千句ノ内珠重ニ候  
 66 へ雨俄なるすまのうら風  
 67 舟はたゝたゝよふ波にこきかへり  
 68 満しほあらく暮ゝまに／＼  
 69 方／＼におりゐし鳥の鳴立て  
 70 ひろき野中や人かよふらん  
 71 末見えぬ霧の下道あくる夜に  
 72 山のあはひの月くゝきそら  
 73 いくより聞えきぬらん鹿の声  
 74 田面のはらのつゝくはるけさ  
 75 里はたゝ暮ゝかすみにかくろひて  
 76 やゝ春風のたゆるむら竹  
 77 舟よする袖の花の香遠き江に  
 78 なみのまかひのすゑの山のは

79 うつりくる水のなかれの日を薄み

80 へまたはれ残る野への朝霧

81 時雨せし跡も露けき草の庵

82 かた敷わふるまくら夜長き

83 へひとりねのあはれは月にいやまさり

84 あふと見えける夢は覚つゝ

ねニ覚不付候

85 笛の音につくへき末やおもふらん

句作如何

86 さき立袖にいそく草かり

87 道はたゝ里をへたつる野原にて

88 暮てきつねのかよふふる塚

89 草たかきかたへや山につゝくらん

90 へ作りすてたる田つらさひしも

91 蘆ふきのあるゝをまゝにかたふきて

92 へなを風ませに雪つもる比

93 へ散花や松のいろをもかくすらん

94 軒端にかけのしるき梅かえ

95 朝霞はるゝ方よりこす巻て

96 日のさすまゝに山あらはなり

97 へ布引の瀧は空にやさらすらん

98 まなくみたるゝ波のしらたま

99 砌行さゝれ石間の水早み

100 風や小草の中をわくらん

付墨廿六句

此内長二

【校異】

三日―ナシ(天・豊・含b・楠・小)

此内長二―此内長三(豊・含a・楠)、内長三(天・小)

付墨廿六句―付墨廿五句(天)、付墨廿七句(小)

1 花盛さかり―虫損(豊)、さえても―さしても(満)

10・11(天・豊)は句順が逆。

11 晴に―晴に(豊)

晴にたる―晴わたる(含a)

12 もれつゝ―もれ行(天)

ほのめく―うつろふ(豊・含b)

14 しつけき―むすこき(天)

野の道―虫損(豊)

19 竹や―おくや(含b)

22 松風―<sup>松</sup>風(含a)

23 まはら―あはら(豊)

24 山きは―山あひ(天)

25 行かひの―交加(天)、行かひも(含b)

26 明―暮(天・豊)

30 にける―にたる(天・豊・含b)、<sup>け</sup>にける(含a)

33 時いたる―説にたる(天)

34 こゝち<sup>ヲ</sup>―こゝら(豊・満・含a・含b・広・楠・小)

35 うかれめの―加<sup>ウ</sup>かれめ(天)

37 舟は―虫損(豊)

38 吹をくりたる―ふきいたりたる(天)

をくり―虫損(豊)

39 方よりて―重りて(天)

43 野へは―野<sup>ニ</sup>へは(天)

44 行<sup>ユ</sup>ゑ―向後(天)、行末(楠)

45 霜は―霜や(含b)

49 かたへ―片<sup>かたへ</sup>枝(天)

51 散つもる―散つくす(満)

53 涙―わたり(豊)

さかつき―<sup>柘</sup>(楠)

55 かたる―かくる(含b・楠)

56 つたへ―伝ひ(含a)、つたひ(含b)

57 ありと―虫損(豊)、あり<sup>と</sup>ありて(楠)

- 83 あはれは―哀へに(天)、合点ナシ(豊)  
楠)
- 82 わふる―分る(天)、長き―なかさ(含 a・含 b・  
楠)
- 77 花の―春花風の(楠)
- 72 くらき―くらき(天・豊・満・含 a・含 b・広・  
楠)
- 70 野中や―野中を(含 a)
- 69 ゐる―ゐし(天)
- 66 雨俄なる―雨につらなる(天)  
うら風―うらなみ(楠)
- 65 かみは―かみの(天)
- 64 にそ―にて||(楠・天)、見ぬ―見ぬ(含 a)  
あやしき―あやしき(小)
- 63 ちる―ちちるる(含 a)
- 62 まかする―まかするる(含 a)
- 60 月うすき―月そすき(天)
- 59 あさき―ふかき(含 a・楠・小)
- 聞も―きくも(含 a)、きて(楠)
- 85 つくへき―■へき(含 b)  
末や―袖末や(楠)
- 89 草たかき―草たかみ(満)
- 93 かくす―かへす(広)
- 94 するき―しけるき(小)
- 97 には―にや(含 a)
- 【批言の校異】
- 1 春をのを字無分別候(含 a)
- 9 此をいかん(含 a)、批言ナシ(含 b)、此をもし如  
何(小)
- 11 雨のはれにいかん(含 a)  
には如何―ニいかカ(含 b)
- 13 11の批語を12に付す(小)
- 9・11・55・56 ナシ(天)
- 35 候―候か(豊)
- 36 く―くか(豊)
- 51 ナシ(豊・含 b)

55 行末に五字付過候 (含 a)

何風 第四

三日

56 法過ての師如何 | 法の師もなく候 (豊)、付箋に「一

1 又聞やまことの初音郭公

句無分別候 法過て法の如何」(満)、法過て法の師

句作猶あるへく候歟

いと如何 (含 a)、法ノし過候 (含 b)、法過て法

2 へすたれを巻はあくる夏山

ノ師とはなく候 (楠)、法過て法師如何 (小)

3 この夜半を花の春てふ限にて

51・85 如何 | いかゝ (天)

五もし如何

61 戸か字 | 戸の字 (天)、批言ナシ (含 b)

4 藤ちりつくす松の下ふし

61 戸の字めき候か (豊)、戸の字あきて候也 (満)、ナシ

下ふし又如何

(小)

5 風はたゝ霞もやらす音をあらみ

65 千句ノ内 | 千句ノ一躰<sup>ニ</sup>候 (天)、千句ノ内の (豊)、批

6 へゆふへの月のさむき川なみ

言ナシ (広)

7 さはき行方に千鳥の鳴添て

85 句作猶可有候

8 へ田面の原の鳴のたつあと

1・36 批語ナシ (楠)

9 みたれたる朝けの露の爰かしこ

10 夜のまの雨の名残身にしむ

11 うたゝねし枕のうへに風落て

12 さめてはかなき夢のおもかけ

13 恋しさの猶そひにたる物おもひ

14 見るにあはれは水くきの跡

- 15 〱冬かけて深田の稲葉かりはらひ
- 16 なかれあらはに遠き末／＼
- 17 説をきし法のをしへのたえやらて
- 18 後の世をしも誰かおもはぬ
- 19 〱かけ憑む春の宮人かす／＼に
- 20 まつりとときめく春日野の山
- 春ニも日ニも付候 春の宮ニ春日心同意候か但入ほかニて  
候敷
- 21 〱あまたゝひ月に霞を酌添て
- 22 〱しほやのみちそ暮ふかくなる
- 23 真砂地の末もかすかに波たかみ
- 24 〱あらしはけしき松はらのみち
- 25 時雨くるまに／＼袖の行やらて
- 26 あはれいつくに宿りしてまし
- 27 あつき日の影をいたみてとふ鴉
- いたみて如何
- 28 かくれる雲もあらぬ山／＼
- 29 海つらも空もひとしき緑にて
- 30 いつよりもなをあげほのゝ春
- 31 おき出て色香にあかぬ花のもと
- 句作あるへく候
- 32 〱わくるもすそゝわか草の露
- 33 晴て行雨の跡より霞野に
- 34 夜を待月のかけはつかなり
- 35 〱立すゝむ竹のかくれの秋の水
- 36 そよめきけりなを田のかたはら
- 37 〱暮初る方より鹿の鳴出て
- 38 霧のうちなるすゑの山もと
- 39 たえ／＼の道もや里につゝくらん
- 40 まくさかひつゝかへる野の原
- 41 遥なるかりはの袖のつかれはて
- 42 〱ふかきか上に雪のふりそふ
- 43 〱朽ぬへき陰の落葉の色はおし
- 44 苔の雫もおなし岩かね
- 45 〱瀧津瀬の外まで波の越てきて
- 46 〱風あらましくなれる水上

- 47 舟つなく夕の袖の秋寒み
- 48 露霜まよふ月の山きは
- 49 うら枯の野への虫のねほのかにて
- 50 あくるあしたのみちの行末
- 51 うきはたゝあかぬ中をし立別
- 52 したふなみたのかきりなきのみ
- 53 今しはと送り捨たる草のはら  
行やういかん
- 54 へ老てよはれる馬のあはれさ
- 55 へ雪なからはこふ真柴やをもからん
- 56 暮てさむけき陰の山みち  
夕の月のさむき川波と過候
- 57 松風の吹そふ空に月落て
- 58 見るかうちより晴ゝ雲きり
- 59 へ冷しき音も時雨の一とをり
- 60 こもる戸さしをゝしひらきつゝ
- 61 へ例ならぬ心の程のをこたりて
- 62 するしありける人のおこなひ
- 63 へたゝしきに世はしたかへるまつりこと
- 64 ふるきためしをうつすかしこさ
- 65 へ読もたゝなをもと哥をたよりにて
- 66 たえせぬこそはまなひなりけり
- 67 へ山彦のみ谷の瀧にひゝきあひ
- 68 けはひもすこき木かくれの道
- 69 花ちれる跡は生そふ草たかみ
- 70 へあれたる庭そ春もさひしき
- 71 籬か見えしも霞たち消て
- 72 いく度ならしすさむ朝かせ
- 73 出やらぬ舟はみなとの波のうへ
- 74 へいりしほいかにはやきはま川
- 75 芦の葉のこなたかなたに乱ふし
- 76 田つらのみちそ霜にむもるゝ
- 77 笛ふきのあたり涼しき月澄て
- 78 しけきもたゆる夜はの蚊のこゑ
- 79 明かたにまどろむほとのとたゝしはし
- 80 まちつくしつゝ待よはりつゝ

81 へ なひかんをおもふ憑に年を経て  
 82 あやしきはたゝおなしつれなさ  
 83 秋しらぬ砌の桧原松のいる  
 五もし如何  
 84 のこれる露は風の下草  
 85 見る / も明わたる袖の霧晴て  
 86 へ 行水しるく月うつるかけ  
 87 山つゝくかり田の面の末ひろみ  
 かり田一過候  
 88 さと人かへるみちのいくすち  
 89 まつりせしいかきのめくり暮ゝ夜に  
 まつりたゝ一たるへく候  
 90 おくなをさひし木ゝのむら立  
 91 へ まつ咲はのこらぬ跡に花待て  
 92 日数ふりそふ春雨のころ  
 93 柴の戸はとつる霞をさなからに  
 94 とひくる友もあらぬ身そうき  
 95 命たゝたくひ少きなかさにて

96 へ 冬野の原の松むしのこゑ  
 97 ふかゝらぬ霜はあへすも解わたり  
 98 日をほのめかす竹のはつたひ  
 99 川つらの煙を風の吹わけて  
 100 山をうかふる水のしらなみ

此内長一

付墨廿八句



【校異】

- 三日―ナシ(天・豊・含b・楠・小)  
 付墨廿八句―付墨廿七句(天)  
 此内長―内長一(天・小)、此内長(含a)
- 4 つくす―はつる(天)  
 5 音をあらみ―音たてゝ(天)  
 6 さむき―さ<sup>む</sup>き(含a)  
 11 ねし―寝の(豊・小)、うへに―上の(小)  
 13 物おもひ―物録<sup>(マ)</sup>(天)  
 14 あはれは―あはれるゝ(豊)  
 18 おもはぬ―おもはん(天・豊・楠)  
 20 山―道<sup>山</sup>(含a・楠)、うち<sup>ウイ</sup>(小)  
 24 みち―かけ(天・含b・楠・小)、奥(豊)  
 25 時雨くる―時雨つる(含b)  
 28 かくれる―かくるゝ(豊)、かゝれる(満)  
 29 海つらも―海つらを(楠)  
 32 もすそゝ―もすそも(天・豊・含a・含b・楠・小)  
 42 雪の―雪か(含b)
- 43 色はおし―色<sup>本ノマ</sup>(天)  
 49 うら枯の―うらかるゝ(天・含a・楠・小)  
 57 月落て―月出で(天・楠・小)  
 63 空に月落て―<sup>空</sup>に月出で(含a)  
 こと―<sup>こと</sup>事(含a)  
 66 けり―けれ(天・小)、け<sup>れ</sup>れ(含a)  
 67 山彦の―山かけの(満)  
 69 たかみ―ふかみ(含b)  
 71 見えしも霞―見えし霞も(豊・含a・楠)  
 72 すさむ―すさふ(含a・含b・楠)  
 75 こなたかなたに―<sup>下</sup>かなた<sup>上</sup>こなたに(豊)  
 79 明かたに―明方の(豊)  
 80 よはりつゝ―よはりけり(含b)  
 81 なひかんを―なひかんと(豊)  
 82 句欠(含a)  
 85 袖の―野ゝ(天・含b・楠)、夜の(豊)  
 86 しるく―しろく(天・含b)  
 87 末ひろみ―末遠み(含a・楠)  
 95 たくひ―残り(天)

- 97 あへす―あらす(豊)、解わたり―<sup>解</sup>初渡り(含 a)
- 99 竹(楠)
- 100 山を―山も(豊)
- 【批言の校異】
- 1 句作り猶あるへく候(豊)
- 3 如何―いかゝ(天・豊・含 a)
- 4 下ふ―いかゝ(天・小)、批言ナシ(含 b)
- 20 春ニも日ニも春宮ニも春日祭調ニ候か但入ほかにて候か(天)
- 春の宮春日祭同意ニ候但入ほかに候や(豊)
- 春にも日にも付候春の宮に春日祭ノ意同候但入外にて敷(含 a)、春ニも日ニも付候春ノ宮ニ春日祭心同意ニ候但入ほかにてや(含 b)、春ノ宮人ニ春日祭付候但入ほか(小)
- 27・83・87 如何―いかゝ(天)
- 27・53・56・89 ナシ(含 a)
- 27 いたみて如何―いたみてと如何(豊)
- 31 句作あるへく候―句作猶あるへく候(天)、句作猶
- 可有候か(豊)、句作猶可有候(含 a)、ナシ(小)
- 36 (宮)ナシ―秋ノ春水無本意(天)
- 47 (宮)ナシ―水ノ寒き過候(天)、夕の寒と過候(豊)、夕のさむき過敷(含 a・小・楠)
- 53 ナシ(天)
- 56 夕の月の―夕の月(豊)
- 夕ノ月寒とき川浪有候(天)
- 夕ノ月寒きと過て候敷(含 b)
- ナシ(小)
- 83 批語ナシ(小)
- 87 ナシ(広)
- 89 まつり―まつりも(豊)
- まつりたゝ一たるへく候(満)
- 祭るりも只一たるへく候(天)
- 祭とたゝ一有候(含 b)
- ナシ(広)、祭可有候(小)
- 6・22 合点ナシ(楠)

山何<sup>第五</sup>

四日

- 1 へ涼しさをたゝへにけりな岩根水
- 2 へ松風かよふ夕たちのあと
- 3 日のうつる嶺は雲まにあらはれて
- 4 おき出て行みちとをき山  
嶺ニとをき山如何
- 5 へ聞すへし鳥はいつくの方ならん
- 6 へ春草ふかき野へのすゑ／＼
- 7 露ことに月影かすむ朝ほらけ
- 8 雨のなこりのしつかなる庭
- 9 軒ちかき竹のそよきの絶／＼に
- 10 見えみ見えすみほたるとふなる<sup>リ</sup>
- 11 川くまや外はまたきに暮ぬらん
- 12 舟さしかへるなみのをちかた
- 13 俄にもはけしき風の吹落て
- 14 みたれてもろきかけの萩はら
- 15 さをしかの分て行野の道の末
- 16 霧のひまよりあくる山きは
- 17 へ鐘のこゑも月の光もかすかにて

- 18 ね覚する夜のまくらさひしも
- 19 古事をおもひいつれはかす／＼に
- 20 むなしきあとを猶したふのみ
- 21 へ散の上花園のこてふのあはれにて
- 22 露もこほるゝ春の夕風
- 23 川岸のかすみをこゆる波たかみ
- 24 へ解にけらしなこほる瀧つ瀬
- 25 登日は谷のおくまでさし添て
- 26 あつさのほとをいかにしのかむ
- 27 生薬つらき病にえまくほし
- 28 へいのるしるしもなきかあやしき
- 29 人心なひかぬまゝに年をへて
- 30 積りにつもるうらみくるしも
- 31 文はたゝいつはりのみを度／＼に
- 32 かへらんとでも旅みひさしき
- 33 さすらへはゆるす限もそれならて
- 34 憑みかたしやかゝる玉のを
- 35 風のまの露に月澄むら薄
- 36 しはし時雨てすくる秋の野

37 道の辺の袖やゝさむき休らひに  
 38 わかれてもなをわかれかねつゝ  
 39 魂のわかみにそはぬ物おもひ  
 40 いてこしほとのかにうちやま  
 41 川風に真柴つみ行舟みえて  
 句作ハ猶あるへく候敷  
 42 なみに夕日の残る水上  
 43 急雨のなかれを遠み降めぐり  
 44 すゑは雲よりもるゝ呉竹  
 竹ノ雲中如何  
 45 窓はたゝ花の色にし明はなれ  
 46 砌にむかふ春の山の端  
 47 長閑なる空のひかりのさやかにて  
 48 風の跡より月になるくれ  
 49 秋更るかけの板ふき隙しけみ  
 50 うつにしほるゝ衣手の露  
 51 うきはたゝいさめの杖に涙おち  
 52 おおのよはひをおもふあはれさ  
 53 うらなれて住をまゝなる明石瀉

句作如何  
 54 聞こそあかね千鳥なくこゑ  
 55 色ふかき冬田の道を分／＼て  
 56 霜の上なる月さむきかけ  
 57 暮ぬれは風のみわたる梯に  
 58 さひしくとつる古寺のかと  
 59 花盛すきての後の春かすみ  
 60 なをあまたゝひそゝく日永さ  
 61 子規三月の空にまち／＼て  
 62 かへりし跡をしたふうくひす  
 63 野をかくる竹の林の暮わたり  
 64 夏をなかせる水のすゑ／＼  
 65 心さへ清くなりたる御稜川  
 66 いつきの宮もたちかはるとき  
 67 きりをける柚木は爰にかしこにて  
 68 山より山の奥ふかきかけ  
 69 しるへなき道いか斗まよはまし  
 70 黄なる泉そおもひやらるゝ  
 71 款冬のかけをや池にひたすらん

句作あるへく候敷

72 岩ほつたひの春のゆふなみ

風イニアリ(別筆?)

73 舟よする霞のひまの袖みえて

74 なひきあひたるすゑの村竹

75 降つもる雪かとおもふ秋の月

76 置そふまゝに露やふりけむ

77 ひやゝかになりつゝ雨の幾返り

78 〱こすの戸口の萩の葉のをと

79 遠からぬ外面の野への暮初て

80 鹿子たゝすむ道のかたはら

81 人けせぬかけの山田の末ひろみ

82 なかれに舟はつなきすてつゝ

83 川上のたえたる橋をあらためて

84 きよむる廊のおくの瀧殿

85 むす苔にたゝめる岩も埋れはて

86 とひよる跡はそこはかとなき

87 忘ぬる文のをしへを又うけて

88 憑むつかひもゆるされし中

89 かく斗つらきをなにゝしたふらん

90 〱また夜ふかきにわかれ行袖

91 月にいそき出ぬる旅の相宿り

付過ニ候敷

92 霧もしくれも晴わたるあと

93 あらましき風のまに／＼露散て

94 戸ほそに竹のみたれ入つゝ

95 〱夕かほのかゝる小家の陰さひし

96 〱車とゝむるたそかれの道

97 〱行かたのしけき人目をよきかねて

98 はらふに袖そなみたのみなる

99 春の花さくふる跡の塵あくた

100 霞に末はなをうもれ水

付墨廿三句

此内長二

別而此百韻をしなへて

面白故墨数少／＼

奇妙ニ候

【校異】

- 四日―ナシ(天・豊・含b・楠・小)  
 付墨廿三句―付墨二十一(天)、付墨廿四(小)  
 此内長二―内長一(天)  
 面白故墨―面白故付(豊)  
 3 にて―れて(豊)  
 5 すへし―すゑし(小)  
 6 ふかき―たかき(天)  
 10 見えすみ―見えつみ(天)、なる―なり(天・含a  
 ・含b・小)、也(豊・満・楠)、なる(広)  
 13 落て―出て(天・豊・含a・含b・楠・小)  
 15 末尾二字、頁のノドより判読不可(天)  
 17 こゑも―こゑ(豊・含a・含b・楠・小)  
 21 散の上花園―散花の園(天・豊・満)、ちる花の園(含  
 a)、花散<sup>花の</sup>園(含b)、下花の上散園(広)  
 24 こほる―かほる(小)  
 26 しのかむ―しのかん(天)  
 28 するしも―するしの(天)  
 32 旅み―旅<sup>ね</sup>ゆ(含b)、ひさしさ―さひしも(含b)、  
 63 かくる―か<sup>か</sup>へる(含a)  
 61 三月―弥生(含b)  
 60 日永さ―永日(天)、日永き(豊)  
 56 霜の―霜<sup>の</sup>。(天)  
 55 道を―道<sup>を</sup>ゆ(満)  
 54 なくこゑ―なく也(満)  
 53 うらなれて―浦ならて(含b)  
 52 おやの―口<sup>おや</sup>の(楠)  
 51 うきはたゝ―うきハ<sup>た</sup>。(天)、枕―枕<sup>杖</sup>(天)  
 50 うつに―擣<sup>ウツ</sup>に(豊)  
 49 板ふき―板葺(天)  
 48 風の―風<sup>の</sup>。(天)  
 47 ひかりの―ひかりは(満)  
 46 山の端―山の<sup>端</sup>葉(含a)  
 42 なみに―浪の(豊)  
 41 真柴つみ―真柴ゆつみ行舟(含a)  
 39 物おもひ―物詠(天)  
 37 さむき―さ<sup>む</sup>き(含a)  
 久しき(楠)

- 66 宮も―宮み(含 b)
- 70 泉ぞ―いづみは(楠)
- 73 袖―風(天・豊・含 a・含 b・楠・小)、イ本注記  
ナシ(満・楠)
- 76 ふりけむ―しけゝん(楠)
- 78 萩―萩萩(天)
- 84 廊の―廊のの(含 b)
- 85 むす苔に―むす苔や(満)
- 86 そこはかとなき―そこはかとなき(豊)
- 87 忘ぬる―■ぬる(満)、忘ぬも(含 a)
- 92 しくれも―しくれて(天)
- 93 落て―散て(天・含 a・含 b)
- 94 入つゝ―いり(「ひ」の擦り消し)つゝ(天)、より  
て(含 b)
- 99 ふる―める(天)、漑 (満)
- 100 末―池(天・小)、松(楠)
- 当該句のみ丁を跨いで記載(豊)
- 当該句を欠く(含 a)

【批言の校異】

- 4・53 如何―いかゝ(天)
- 4 批言ナシ(含 b)
- 41 ナシ(天・含 a・楠・小)
- 41 あるへく候敷―あるへく候(満)
- 42 (宮)ナシ―句作いかゝ(天)、句作猶可有候(小)
- 44 空中いかゝ(天)
- 竹の雲のうちいかゝ(楠)
- 竹の雲のうち如何(豊)
- 竹の雲の中いかん(含 a)
- 竹の雲中はいかゝ(含 b)
- ナシ(小)
- 45 長合点ではなく平点(天)
- 53 句作り猶可有候(豊)、ナシ(含 b・小)
- 71 句作り猶可有候(豊)、句作猶可有候(小)
- 91 ナシ(天・豊・含 a・楠)
- 5・78 合点ナシ(楠)
- ★別而此百韻おもしろくおほし候／墨付少々奇妙<sup>ニ</sup>候(含 b)

1 萩かえのなひくや夏の花かつら

先達作例ニ候敷

2 汀の野へに茂き朝露

汀の野へ如何

3 ぬる雁や浪を羽ふきて立ぬらん

4 舟さしよするをちのやまもと

5 柳原つゝく木すゑの暮初て

6 かすみのひまそ月になりたる

7 春風や雨の名残にかよふらん

8 かたよりにける竹の葉つたひ

9 あつまりて宿りあらそふ鳥の声

10 いたり日かくれの山のかたはら

11 梯の袖の行ゑのかすかにて

12 松よりおくやすみかなるらん

13 おもひやるも涼しき砌とはまほし

とはまほし如何

14 水のをとなをたえぬかきうち

15 なき跡におこなひ人の手向して

16 仏となふるともし火のもと

17 うつりきて哀なりけり歳の暮

18 花もわするゝ今朝の月雪

19 残りつる草はいつしかしほれはて

20 舞のかさしの袖の面かけ

21 あかさりし衣のかほりの身に副て

22 よりふす床のまくら侘しも

よりふして侘しからん事如何明はなれてとあるへく候

23 さりとともと憑今夜も待よはり

24 いつかは聞んやま郭公

25 おしめともとまらぬ花の春暮て

26 さくらか本になかめする人

27 永日もおほえす酒をくみかはし

28 なをたひ／＼にうたひ添つゝ

29 しつかなる浪より波の奥津舟

30 しくれも風も過る海つら

31 遠山の雲まもうすき月出て

32 たえ／＼になるいなつまのかけ



33 空はたゝ良冷しく更「るカ」に夜に  
 34 露にましりてしもしろき色  
 35 落髪もあはれ涙の袖の上  
 36 おもひにやつれはてし身そうき  
 37 つれなきをくるとあくとに恋侘て  
 38 など及ぬに心かけむ  
 39 おらはやの榊かみの立枝の陰たかみ  
 40 かすむまかひのおくふかき庭  
 41 お長閑なる夕数そふまりの音  
 42 あかぬをまゝの友なひの袖  
 43 をやみなく猶日比ふる雨のうち  
 44 かさなる雲そ上かうへなる  
 45 お山い／＼にはなれてしるき富士の嶽  
 46 お清みか磯のあくるあけほの  
 47 お月影にさそはれつゝも舟うけて  
 48 秋に涼しき浪のをちこち  
 49 おちり出て風をしらする柳かけ  
 50 おく露ふかき霧の隙／＼  
 51 さ夜時雨すきて身にしむ朝開

52 ひらきいてつゝむかふ山まと  
 53 色／＼にうつす心の花さきて  
 54 つくりえもやはかすむしのゝめ  
 55 作りへいろ／＼に付過候  
 56 そことなくおきて行急の春野ゝに  
 57 床はなれつゝひはり立こゑ  
 58 中天の風やしつかになりぬらん  
 59 きゆるとみえし雲うかふなり  
 60 おむすひそへたる月の夕露  
 61 乱あひて分過かたき花すゝき  
 62 爰にかしこにそよく萩あきの葉  
 63 お遙にも浪よせかへる濱つたひ  
 64 さはき立つゝ千鳥なくこゑ  
 65 霜まよふ苦屋のまくら寒る夜に  
 66 吹そへにけりかけのやま風  
 67 方／＼に野は草むらのおれふして  
 68 兎のかよふ道はしるしも  
 第三付やう遠輪廻ニ候敷

69 すむ月の明はてにたるを田の原  
 70 霧はれわたる水の末 / \  
 71 ほに出る芦邊の露の色めきて  
 72 うつる入江のひかりさやけし  
 73 暮ぬれはかす / \  
 74 けはひやもれんしのひ行道  
 75 衣手ははらふもふかき涙にて  
 76 わかれし跡の閨の戸のうち  
 77 うきはたゝ覚てあやなき夜の夢

閨にも覺二句

78 空は雲ひくすまのうらなみ  
 79 漕出る舟より遠にかへるかり  
 80 なかめにかゝる春の山の端  
 81 初雪の佛のこるむらきえに  
 82 かれにしまゝの園の草 / \  
 83 鳴虫のこゑもいつしかたえけらし  
 84 さむさそひぬる秋のあかつき  
 85 独のみね覺愁ふる月のもと  
 86 かたしく袖の露よ涙よ

87 昔おもふ庵まはらに忘はてゝ  
 88 軒より風に匂ふたちはな  
 89 玉すたれおろすともなき夕ま暮  
 90 かすめる色も猶あかぬそら  
 91 はる / \  
 92 つゝく深田やすきわたすらん  
 93 一かたに立かへりぬる鳥のこゑ  
 94 花 / \  
 95 秋ふかき麓の原のたゝならて  
 96 露より露そ月をうつせる  
 97 ふき絶し風の跡さへひやゝかに  
 98 遠さかり行川なみの音  
 99 水や先浅き方より氷るらん  
 100 なかれの末の良暮るゝ比

此内長壺

付墨十七句

【校異】

四日―ナシ(天・豊・含b・楠・小)

付墨十七句―付墨十四句(天)

此内長巻―内長一(天・豊・小)

2 野へに―野辺そ(豊)

3 ぬる雁―ぬるも(天)

5 木すゑ―桜(天)、暮―散(含b)

8 ける―けり(含a)

11 行方―向後(天)

13 おもひやるも―思ひやる(豊)

14 なを―のみ(豊)、草―菊(含a)

17 けり―ける(豊・楠)

19 草―菊(天・満・含b)、菊も(豊)

21 あかさりし―あかさり(楠)

22 侘しも―わひしき(楠)

27 永日も―永日を(含a・楠・小)

28 つゝ―て(含b)

29 奥―沖(満)

30 しくれも―時雨の(天)

31 雲まも―雲まに(天・豊・含a・小・楠)、遠山―

遠近(含b)

33 更に―更る(天・豊・満・楠)

34 ましりてしもしろき色―ましりて

本々、しろき色(天)

37 くるとあくとに―くるしくも猶(小)

38 など―なを(豊)

及ぬに―およはぬと(含a)

39 梅―枝(天)、梅の立枝―梅立枝(満)

43 雨のうち―雨の日に(天)

44 かさ―虫損(豊)

46 磯の―なみの(含b)

47 舟うけて―ナシ(豊)、舟かけて(広)

49 風を―風の(天)

51 身にしむ―身しむ(楠)

54 やは―やゝ(楠)

55 おきて―こして(天)

- 56 立―なく(天)、こゑ―<sup>声</sup> (含 a)
- 58 きゆる―きへる(豊)、みえし―見しも(豊)
- 62 萩―萩<sup>萩</sup>(天)
- 66 吹そへ―吹そひ(豊・楠)、にけり―にける(含 b)
- 69 明はて―明離れ(天)、明はに(豊)
- 74 けはひやも―けはひも(豊)  
もれんし―もれんと(豊)
- 78 一文字判読不可(含 a)
- 81 きえに―消て(豊・含 a・楠)
- 83 けらし―ぬらし(天)
- 89 とも―ひも(含 b)
- 92 わたすらん―わたしけん(豊・含 a・含 b・楠・小)
- 97 風の―「の」字に擦り消し痕あり(含 b)
- 【批言の校異】
- 1 先達无―先達作(豊)、批言ナシ(天・満・含 a・楠)、先達の作例候歟(含 b)
- 2 批言ナシ(含 a・楠)
- 2・13 如何―いかゝ(天・満)
- 13 とはまほし―とはましいかゝ(楠)
- 22 よりふして侘しからん事いかゝ明離れてと可有候か(天)、よりふして侘しからん事いかゝ明はなれてあるへく候(満)、よりいして侘し事いかん明はなれと可有候(含 a)、批言ナシ(含 b)、よりふしてわひしからんこといかゝ明はなれと有へく候歟(楠)
- 39 ナシ―枝過候(小)
- 54 作え冬ニ付有候(天)、色ノ―につくりゑ付有候か(豊)、つくりゑ色ニ付過候歟(含 b)
- 64 第三ニ付やう遠輪廻ニ候歟(天)、第三ノ付やう遠輪廻ニ候(豊)、第三付やう遠輪廻なり(満)、63の左に傍記(含 a)
- 77 閨にも覚二句きらひ候か(豊)、閨<sup>ニモ</sup>覚二句(天)、閨にも覚二句にて候(含 a)、閨<sup>ニモ</sup>覚二句■候歟(含 b)
- 93 鳥の声過候(小)

1 北までもめくれなをみむ空の月

五もしいかん

2 霧はれわたる窓のをちこち

3 竹の葉に松の秋風そよききて

4 山をかけたる川辺涼しき

5 暮初る岩ねの橋の末とをみ

6 かつ／＼霜のをきまよふいろ

7 かけしけき草のかたへの枯ゝ野に

8 つゝくともなきみちかすかなり

9 いつよりかあらを田としも成けらし

10 生そふまゝにたかき草むら

11 花そのゝ跡さひしくも春暮て

12 たえ／＼かすむ志賀の古郷

古郷如何

13 長閑なる鐘のこゑもや明ぬらん

14 夢より後の月うすきかけ

15 敷袖は露にしぐれにぬれ／＼て

16 人待わふる戸ほそ身にしむ

17 見せはやの砌の菊のかほり添

18 まかきにかよふ風のいくたひ

19 塩かまやうら波たかき朝ほらけ

20 出こそやらね蟹のつりふね

21 中空に雨をもよほす雲浮て

22 こゆるひかりのほのかなる嶺

23 行まゝに遠き山路の袖さむみ

24 風はあらしの松の木しけさ

25 いくより散て来にけむ花の色

26 かすみのうちにこもる川なみ

27 明ほのゝ月はつかなる春の水

28 こほりの隙のなみの遠かた

29 かさなれる岩ほつたひのかすかにて

30 雲のうつめるすゑのかけはし

31 虹やたゝ所／＼に残るらん

32 日の色うすきあまいりの空

33 立つゝく木ゝの下みち奥ありて

34 苔の雫のなをふかきくれ  
 35 世をすつる袖のなみたはあやなしや  
 36 わすれもやらすしのふいにしへ  
 37 写絵を其面かけとむかひをり  
 38 扇はかりをかたみはかなや  
 39 〱名乗をも聞ぬにいとゝあくかれて  
 40 〱春よりのちの山郭公  
 〱をもに心如何但如此に有へく候か  
 41 藤かえのなかも雨のたそかれに  
 42 露にいろそふかけの款冬  
 43 玉川やしつかに風の吹すてゝ  
 44 しほひになれる浪の末／＼  
 45 貝つ物ひろふ袂のかす／＼に  
 46 はるかなりける松はらのみち  
 47 涼みつゝ行／＼秋の月待て  
 48 野は夕景の露のむら／＼  
 49 霧のまのしろきや霜のましるらん  
 ましるらん如何

50 なを冷しくなりまさる庭  
 51 暮風せし寺の甍のかけさひし  
 52 〱軒のかはらそおちてくたくる  
 53 〱引ならず琴のしらへのたゝならて  
 54 尋よる江の舟の行すゑ  
 55 匂くる梅はいつくのむらならん  
 56 明はてやらぬ春の野の道  
 57 〱鶯のかすみかくれにこゑはして  
 58 おくいか斗ふるき谷の戸  
 59 やゝつもる麓つゝきの今朝の雪  
 60 かりをきぬるをはこふ柴人  
 61 川舟や猶たひ／＼にわたすらん  
 62 〱たえぬちきりをおもふ七夕  
 63 いとなきわか独ねの月もなし  
 64 露けさならず袖のかたしき  
 65 五月雨のふかき庵に引こもり  
 66 ともなふ人もあらぬつれ／＼  
 67 心たゝ羽〔双カ〕昏を見つゝなくさめて  
 68 あはれにすめる陰の蓬生

69 へなれて聞夕 / \ の松のこゑ  
 70 とはぬ夜そなを侘しさも添  
 71 せめてかと夢をたのむるさ筵に  
 72 ねられぬ月のまくら更行  
 73 へ 蜚かきほをちかみ鳴よりて  
 74 野へより野へのうらかるゝころ  
 75 幾日とか夏のひかりの照すらん  
 76 空の雲なきかけの山 / \  
 77 なへて世は花 / \ にしも明はなれ  
 78 なをことさらの九重の春  
 79 年越て袖のけはひもあらたまり  
 80 寒にし風そあたゝかになる  
 81 隙 / \ の茂き栖をかこひそへ  
 82 へ 軒のめぐりのけさの朝露  
 83 月はたゝ竹の葉分にかくろひて  
 84 田面の末の色ほのかなり  
 85 行水の煙やきえもやらさらん  
 86 なみのうへより風はたえつゝ  
 87 へ 方 / \ に冬のゝ尾花ちり残り

88 またふかゝらぬ道のへの霜  
 89 見る / \ も空は入日のさし捨て  
 90 高ねの雲そなひき添たる  
 91 かけはたゝ霞に遠き比良の山  
 92 へ やゝ明初る春のうみつら  
 93 咲花も松の木の間の波の上  
 94 なかれに里のつゝきぬるすゑ  
 95 へ 布さらす賤屋はこなたかなたにて  
 96 竹より竹に日影うつろふ  
 97 朝かほのみる程もなくしほれはて  
 98 霧のまかきのあたりさひしき  
 99 暮ぬれはをしかたゝすむ野を廣み  
 100 人の往来のとをさかる道

付墨廿三句

【校異】

- 五日―ナシ(天・豊・含 a・含 b・小・楠)  
 付墨廿三句―付墨十八句(天)
- 1 「空」字不審(満)
- 3 竹の葉に―竹の葉の(天)  
 松の―松に(天)  
 そよききて―そよめきて(天・小)
- 4 涼しき―涼しも(天・豊・含 a・含 b・小・楠)  
 なり―かり(含 b)
- 8 かつよりも荒にし田共成けらし(天)  
 けらし―ぬらん(豊・小)
- 9 しくれ―霰?(天)  
 菊―草(含 a)
- 17 いくたひ―度ノ(含 a)
- 18 ひかり―日影(天・豊)、山<sup>嶺</sup>(豊)
- 22 あらしの―あらしに(天)  
 二
- 24 松の木しけさ―松のはけしき(天)  
 川なみ―川かみ(天・豊・満・含 a・小)、川なみ  
 (含 b)、川なみ<sup>上候敷</sup>(楠)
- 26 27 はつかなる―ち<sup>はつかイ</sup>るなり(小)、出<sup>出る</sup>るなる(楠)
- 33 木ノの下みち奥―木の下道の奥(満)
- 37 絵を―絵に(含 a・楠)、面かけと―俤を(含 a)
- 39 聞ぬに―聞ぬと(豊)  
 名乗―余波(楠)
- 40 合点ナシ(小)
- 43 吹すて<sup>ハ</sup>―吹きて(天)、ふき過<sup>上</sup>て(豊)
- 45 貝つ物ひろふ―貝つ物拾ふ(天)
- 46 ける―けり(豊)
- 48 夕景―夕風(天)
- 49 霜の―霜に(天・含 a・楠・小)
- 51 暮風―暴風(豊)、野分(満・含 a・含 b・楠・小)
- 54 江の―舟<sup>江</sup>の(楠)
- 55 むら―方<sup>ハ</sup>(含 b)
- 56 道―すゑ(含 b)
- 57 こゑ―音(含 a)
- 58 ふるき―ふかき(小)
- 61 。此間三句落候(天)
- 62・63・64 は別紙に同筆で記され、60句の後に貼付(天)



- 62 おもふーおもへ(天)
- 63 なしーうし(含 a・楠)
- 65 ふかきーふるき(豊・含 a・楠)
- 66 ともなふーともふ(豊)
- 67 羽昏をー草々の(天)、双紙を(豊)、双昏<sup>サウシ</sup>(含 a)
- 70 侘しさもーわひしさそ(含 a)、も添ーはそふ(含 b)
- 71 友をたのむるー友をそ頼む(天)
- 72 せめてかどーせめてはと(満・含 a・楠)
- 75 月のー月に(天)
- 79 ひかりのー光を(楠)
- 80 袖のー袖は(豊)、けはひもーけはひの(豊)
- 81 風そー風も(豊)
- 83 栖ーすまゐ(含 b)
- 88 露ー霧(天)
- 89 月はたゝー月。は<sup>影敷</sup>(楠)
- 89 霜ー雪(豊)
- 89 捨てー移り(豊)
- 91 霞にー霞も(天)
- 93 比良の山ー平野<sup>比良</sup>の山(楠)
- 98 上ー色(含 a・楠・小)
- 99 さひしきーさひしも(豊・含 b・楠・小)
- 99 たゝすむート(天)
- 【批言の校異】
- 1 いかんーいかゝ(天)、批言ナシ(満・含 a・小)
- 12 如何ーいかゝ(天・満)、批言ナシ(豊・含 a・広)
- 40・49 ナシ(天)
- 40 をもに■いかゝ但如此にあるへし(満)
- 49 ましるらん如何ーましるらんと如何(豊)、批言ナシ(含 b)、ましる如何(小)

- 1 〱とこ世にもしたはゝ待し雁の声
- 2 〱月はいつくもあり明の空
- 3 〱時雨せし山のすそ野の霧晴て
- 4 吹をくりたる松風のをと
- 5 涼しさは浪にまかする舟の上
- 6 すゑより末のくるゝ江の水
- 7 むらつゝく竹のかくれのかすかにて
- 8 かすみのひまのみちの一すち
- 9 〱梯をうつみし雪やきえぬらん
- 10 山のあはひも春日うつろふ
- 11 鳴行にねくらの鳥もさそはれて
- 12 明はなれたる野への遠こち
- 13 水しろき方はけふりの流より
- 14 松のはひえのかけの川つら
- 15 萍の風のまに／＼みたれあひ
- 16 〱きえかへりつゝ螢とふなり
- 17 〱月はたゝ出ても影のほのかにて
- 18 〱秋のゆふへや雨のこるらん

- 19 雲きりの方よりつゝもたゑ／＼に
  - 20 はつかにみゆる末の山のは
  - 21 〱花やまたさかぬ中にもましるらん
  - 22 なみ木のさくら春浅き比
  - 23 ほのかにもさへつりかはす鳥のこゑ
  - 24 庭は霞に夜を残す空
  - 25 〱真木の戸の月に長閑き雨過て
  - 26 吹としもなき軒の山かせ
  - 27 余波なをむすほゝれたる今朝の夢
  - 28 はなれもやらぬ面かけはなに
  - 29 〱祈にもしうねきまゝのいきす玉
- 千句の一躰ニ候敷
- 30 むまれんことそ待にひさしき
  - 31 〱安くしもたのしむ国を心にて
- 大事ニ前句
- 32 なへていつくもおさまれる時
  - 33 漕舟は風より後のうら／＼に
  - 34 明わたりたる浪のはるけさ
  - 35 五月雨にまさる水かさの山かけて

36 しける柳のなひきあひつゝ  
 37 陰たかく早苗ふし立を田のはら  
 38 里のさかひのみちかすかなる  
 39 奥ふかきほこらを見れば神さひて  
 40 くれつゝうすきともし火の影  
 41 釣舟は霧のまかひのなみのうへ  
 42 山のふもとの秋のいりうみ  
 43 芦原に木の間の月の移ひて  
 44 岩根つたひの松のむら／＼  
 45 いくくにか涼み所をもとめまし  
 46 酔の心ちそ例にたかへる  
 47 幾度かくり返してのそゝること  
 48 積おもひにたえわふるころ  
 49 雪とちるをおしむ心の花の本  
 50 風はあらしの袖の梅か香  
 51 巻あくる鉤簾の戸（ほ）その春寒み  
 52 砌の山そかすむともなき  
 53 落瀧つ岩まにしろく顕れて  
 54 あたりは苔のふかきみなかみ

55 おれ朽て土にむもるゝ橋柱  
 56 往来たえたるみちのさひしき  
 57 時にそむく人の栖のあはれにて  
 58 日たけてあくるおくの谷あひ  
 59 いか斗たなひく霧のふかゝらし  
 60 見るに色なをわかぬ木つたひ  
 61 秋あさき松の下陰はるかにて  
 62 行／＼道そあつさ残れる  
 63 月遅き夕の風のたゆる野に  
 64 空は幾重のかすみ立らん  
 65 春雨のけふことにしも降そひて  
 66 池のかはつの方／＼のこゑ  
 67 菱の葉や水のみさひに交るらん  
 68 とをきふか田そ末もしられぬ  
 69 見れはたゝ有かなきかに道ほそみ  
 70 草むらたかくおふる古あと  
 71 塚はなをとふも露けき野中にて  
 72 身にしめつゝも手向する袖  
 73 相坂や旅立月の朝ほらけ

74 あかす都をかへり見るのみ  
 75 かくれかの夢にむかしの花の春  
 76 あはれむこそはかすむ明ほの  
 77 啼てこし秋はあれとも帰かり  
 78 かり田の跡をすきわたす比  
 79 爰かしこなかれの末をせき分て  
 80 へたてゝすめる山かけの庵  
 81 捨にける世やましはりをいとふらん  
 82 仏の御名をひたすらにのみ  
 83 常にしも寺のともし火かゝけ添  
 84 時をしらするかねのこゑ／＼  
 85 明る夜も空おほれする別路に  
 86 おつる涙やうきをすゝむる  
 87 つれなきを思ひたえんもそれならて  
 88 又またれまたるゝ山郭公  
 89 花にみしこすゑ今はた苔みとり  
 90 外面の露のあさな夕くれ  
 91 月は猶あかぬをまゝの影にして  
 92 やすらふ野へそひやゝかになる

93 風わたる道の草／＼なひきあひ  
 94 又おちぬやこほる竹の葉の雪  
 95 出ても朝けの程は寒日に  
 96 まかきの蝶そねたるまゝなる  
 97 木の本は散し桜の朽やらて  
 98 春またくれもはてぬおく山  
 99 嶺はたゝふかきか上の雲かすみ  
 100 いつしか風のしつまれる時

付墨廿二句

此内長一

【校異】

五日―ナシ(天・豊・含b・楠・小)

付墨廿二句―付墨廿一句(天)

此内長―ナシ(豊)

1 待し―待たん(小)

2 月はいつくもおなし有明(豊)

3 野の―野乃敷(楠)

7 かすかにて―明夜(天)

9 きえぬらん―消さらん(豊・含a・含b)、消ぬ敷さらん(楠)

10 あはひも―あはひの(豊・含a・楠)

うつろふ―うつらふ(含a)

11 鳥も―鳥の(天)

16 とふなり―とひさる(楠)

20 山のは―山きは(天)

21 中にも―中にし(天)、中に(楠)、合点ナシ(豊)

さかぬ中にも―咲ぬる中に(豊・含b)

ましますらん―またかしますらん(含b)

24 霞に―霞の(天)

25 月に―月も(含b)

26 軒の―軒麻の(満)

27 むすほゝれたる―むすほふれたる(楠)

28 おもかけは―佛も(天)

29 いきす―いきす(天)

祈にも―祈るにも(楠)

30 ことそ―ことを(天)、ことは(含a)、ことも(楠)、

ねにひ―まつに(豊・含a・含b)

時―比(含a)

35 山かけて―山隠(天)、まさる水―まさるゝ(豊)

36 あひつゝ―あひて(含b)

37 たかく―たかき(天)

38 なりなり(満・含a・含b・広・楠・小)

39 ほこら―ほたし(天)、神さひて―神寂し(含a・楠)

40 うすき―うすき(満)

45 もとめまし―黒「村」を擦り消し(求まし(天)

46 へる―へぬ(天)

47 返しての―返してつゝ(満)、そゝろ―すゝろ(含b)

- 51 戸その―戸ほその(含 a・小)、戸ほ。の(楠)
- 53 落瀧つ―落つ瀧(含 a)
- 54 みなかみ―川上(含 b)
- 55 むもるゝ―むもれる(含 b)
- 57 そ―す(豊)、栖―すまゐ(含 b)
- 59 からし―からん(豊)
- 61 松―森(豊・小)、あさき―寒き(天)、下陰―下道かけ(楠)
- 62 道そ―道の(豊)
- 63 野に―~~木~~に(満)
- 67 菱―夏あか(天)
- 69 なきかに―なきかの(小・楠)
- 70 おふる古あと―送茂かるふるさと(天)
- 71 草むら―草のみ(小)
- 71 塚はなを―塚はたゝ(豊)
- 75 むかしの―昔を(豊)
- 77 秋はあれとも―秋は哀本ノマと(天)
- 78 啼こてこし―啼こてきし(楠)
- すきわたす―すきわたる(含 a)、跡を―あとそ
- 83 かゝける―かゝけそへ(天・豊)
- 85 暮れ―庭(含 b)
- 85 空―ナシ(天)
- 89 花にみし梢今はた苔緑り(天・豊)
- 苔みとり―わかみとり(含 b・小)
- 90 露の―露そ(含 a)
- 92 ひやゝか―ひ〔虫損〕□□か(含 b)
- 93 なひきぢひ―うちなひき(満)、みたれ合(楠)
- 94 雪―色雪(豊)
- 99 雲―虫損ニ(豊)
- 【批言の校異】
- 29 ナシ(天)、千句の一体也(満)、千句一躰ニ候(含 a)
- 31 ナシ(天・豊・満)、大事候前句候歟(含 a)、大事の前句にて候歟(含 b)、大事ノ前句ニ候歟(小)、大事ノ前句ニ候□歟(楠)
- 37 (宮)ナシ―五もし如何(豊・含 a・含 b・楠・小)
- 45 涼し候(小)
- 86 (宮)ナシ―五もし如何(豊・楠)、(小)は 85 に付す

1 春秋をうつまぬ木々の雪もなし

聞なれ候敷

2 山をみきりの松さむきかけ

3 つらゝゐる岩まにむせふ瀧落て

4 朝けのひかりうつる水かみ

5 さし出る舟より遠の空の月

6 方分つゝやきりまよふらん

7 風はたゝ身にしみあへすたゆる野に

8 数そひにたる虫のこゑ／＼

9 草ふかき垣ほつたひの暮初て

10 みちかすかなる荒を田の里

11 往来せぬ霜の柴橋くち渡り

12 竹の葉つもる汀さひしも

13 川風のいくたひ／＼にすさむらん

14 茂きほたるも消はてゝ行

15 秋ちかき影さやかなる月出て

16 あかぬはしみの涼しさそそふ

17 露をたゝ残してはるゝあまそゝき

18 ところ／＼の野へのうす霧

19 冷しき風の跡より明はてゝ

20 卷あけけりな軒の玉たれ

21 車を車を花の木陰に引とゝめ

22 かすみにまじる袖のいろ／＼

23 御仏の去し跡とふ法の庭

24 なをはたかゝけそふるともし火

25 更る夜もおほえすかたる伴ひに

26 秋に涼しくすむ月のもと

27 池水の霧ふきなかつ風みえて

28 露のまに／＼うき藻かたよる

29 ときあらひほすにうすゝくから衣

30 かなやみて後のうきみたれかみ

31 むかふにも哀なみたのます鏡

32 妹 〔かか〕 形見や残るおもかけ

33 うつる香のふかきまくらは敷あかて

34 花ちりはつる跡のわか草

35 過て行風の朝露かすむ野に

36 あへすも春の霜とけぬめり

37 道の辺や人のかよひの重からん  
 38 くれてしも猶わたす川舟  
 39 月になる浪の遠近しつかにて  
 40 〱秋の時雨のはるゝあしはら  
 41 露はたゝこほれし跡のむら／＼に  
 42 誰さき立てわくる野の末  
 43 乗駒のいはふこゑする朝またき  
 44 北より風やおちて来ぬらん  
 45 都さへ冬の入たり空さむみ  
 46 〱富士のねいかに雪の大ひえ  
 47 海つらの浪の上より明わたり  
 48 江のくま／＼はかすみこめつゝ  
 49 長閑なる行ゑや遠き野へならん  
 50 みちさまたけのうくひすの声  
 51 〱梅さける窓は文にもをこたりて  
 52 ゆるふ心はたゝ春にこそ  
 53 〱侘しさのかきりは秋の夕ま暮  
 54 〱物おもはぬも袖や露けき  
 55 〱独ねになかきをかこつさ夜枕

56 あはれは月にいとゝそひつゝ  
 57 紅葉ちる跡の木のまのあらはにて  
 58 風はあらしの松たかき山  
 59 波しろき浦より遠の明はなれ  
 60 鳥のうかふと見ゆる釣ふね  
 61 芦ふきの戸ほその霞隙添て  
 62 そよめき出るを田のなはしろ  
 63 春雨の過行露やみたるらん  
 64 雪きえわたる軒のつま／＼  
 65 庵の上に落ぬる花の朽はてゝ  
 66 たてるあふちのかげのさひしさ  
 67 きり盡す柚木の跡の山の奥  
 68 こなたかなたに見ゆる梯  
 69 〱門／＼やはるかに続く寺ならし  
 70 苔地の末そそことしもなき  
 71 行水のめくる岩ねの重なりて  
 72 むもるゝ塵をかきはらふ庭  
 73 あらためて立かへりすむ故郷に  
 74 〱あさはかにしも捨し世はなに



75 〱仇なるは少のふしをかことにて

76 うらむれはなをたえはつる中

前句かとかこつ心ニとはうらみ

77 〱隙／＼に見し月かくす空の雲

78 雨になりたる秋風のすゑ

79 舷は音やゝさむき波越て

80 満くるまゝにあらき夕しほ

81 遠からぬうらに鯨やうかふらん

82 いくともなく鐘霞こゑ

83 覚にける夢のまくらの春のよに

84 〱花の香ながら真木の戸の月

85 風かよふ籬の草のあさほらけ

86 はれ行霧や露と散らん

霧のちらん事如何

87 降とをる雨より後のひやゝかに

88 わけ出にたる竹の下みち

89 むら近き野飼に牛や放つらん

90 水のなかれのつゝくすゑ／＼

91 〱川浪の氷もはてぬ音はして

92 夏とはさらにしらぬ山あひ

93 〱さかり猶久しきまゝのおそ桜

94 なれ／＼てしもあかぬ蝶鳥

95 春の野のあたりをしむる栖にて

96 ふかきかすみや引かこふらん

97 〱呉竹におくまる庵の道遠み

98 かしこきそたゝ心ひとしき

99 〱君か代は神のむかしを伝きて

100 たえぬみくさのたからあやしも

神ニ三種如何

付墨廿二句

此内長二

【校異】

六日―ナシ(天・豊・含b・小・楠)

付墨廿二句―付墨十八句(天)、付墨廿三句(小)

此内長二―内長二(天)、内長三(小)

2 松さむきかけ―冬の長閑けさ(天)、松のさむけさ

(含b)

3 つらゝ―つゝら(含a)

7 しみ―しめ(天)、風―月(含b)

13 すさむ―すさふ(豊・含a・楠・小)

14 ほたるも―蛩そ(天)

17 残して―残らて(小)

はるゝ―過る(小)

19 はてゝ―離れ(天)

21 木陰に―こか〔虫損〕□□(含b)

22 かすみ―かすか〔虫損〕(天)

25 夜も―夜に(天)、休ひ―伴ひ(豊)

26 すむ―住〔虫損〕(楠)

27 池水の―池水〔虫損〕に(天・豊)

29 ぼす〔虫損〕にうすく―ぼすやうら〔虫損〕／＼(天)

32 や―の(天)、妹〔虫損〕―妹〔虫損〕か(満・含a・楠)

33 うつる―うつり(含a・小)

35 朝露―跡より(含a・小・楠)

36 霜―雪(豊)

43 こゑ―音(含a)、の―も(小)

44 おちて―吹て(天)、風や―風の(含b)

45 入たり―入立(天・豊・含a・小)

54 袖や露けき―袖は露けさ(含a)

56 いとゝそ―いと〔虫損〕□□(含b)

57 木のまのあらはにて―木葉の顛れて(天)

58 風は―かせも(豊)

63 露や―かたや(含b)

66 あふち―梯〔虫損〕(天)

67 右傍に補入(「跡の」)のメモか。(豊)  
句頭に「つくす又いたすな〔虫損〕候」(広)

ならし―ならん(楠・小)

70 苔ちの末はそことしもなき(天)

にことしもなき―そことしもなき(満)

- こけ地のすゑそことしもなき(小)  
末そそこと(含 a)  
「そカ」  
に―そ(含 b)
- 71 岩ねの―岩雲(天)
- 73 すむ―ぬる(小・楠)
- 76 うらむれは―うらむるは(含 b)
- 77 空の雲―空の月(天)、かくす―か仆す(含 a)、空  
の月(含 b)
- 79 さむき―寒く(天)
- 82 なく―なき(天)、霞こゑ―かすか也(豊)  
二
- 84 枯の戸の月―月の枯の戸(天・豊)  
ナなカりハ月ノ東ノ木ノ戸ノ戸(含 b)
- 85 草の―菊の(天・豊・含 b・小)
- 86 散らん―なるらん(楠)
- 87 後の―後は(含 a)
- 88 欠(豊)
- 91 氷も―氷は(含 b)
- 94 なれ／＼て―なれてしも(天)
- 95 をしむる栖にて―ををしむ栖にて(豊)
- 96 引かこふらん―引もるかけ(天・豊)
- 97 らん―かけ(含 b・楠・小)
- 97 おくまる―おくまる(天)、呉竹に―呉竹ヱ(含 a)
- 98 そ―に(天)、ひとしき―久しき(含 b)
- 【批言の校異】
- 1 きゝなれす候(天)、批言ナシ(豊)  
夢なれる候歟(含 a)、夢―闌(含 b)
- 61 ナシ―隙ノ字過候(小)
- 76 ナシ(天)、前句かことかこつ心ニ候うらみは如何  
(豊)、前句かことかこつ心ニ候歟恨はいかん(含 a)、  
前句かことかこつ心やうらみは如何(含 b)、前句のか  
ことかこつ心にて恨如何(小)、前句かことかこつ心ニ候  
歟うらみいかゝ(楠)
- 86 ナシ(天・豊)
- 100 如何―いかゝ(天)、批言ナシ(含 a・楠)

1 すむ声に御慮さそな神々楽

2 ゆふしてさゆる霜のあかつき

哥下句めきて候敷

3 〱 杵むらの月の木枯吹そひて

4 ねくらにまよふからす鳴なり

5 山つゞく江の遠近の霧ふかみ

6 秋のしくれののこる川かみ

7 冷しき波のを舟の出やらて

8 また明はてぬ呉竹の陰

9 立こむる霞のおくやむらならん

10 野へのいつくのうくひすのこゑ

11 〱 春寒き山は猶はた降雪に

12 おりたくま々の柴の戸のうち

13 かりよるもねられぬ旅の宿りにて

14 松かねまくら嵐はけしき

15 〱 月影もくたくる波の岩つたひ

16 ゆふへ身にしむ磯きはのみち

17 むら千鳥霧のまきれに立さはき

18 とをき田面やかりはらふらん

19 里／＼に茂き往来の袖みえて

20 山もかけ野も明はなれつゝ

21 いかなれや小倉の嶺の花盛

22 ふかきか上に霞そふそら

23 たなひきて雨けもよほす春の雲

24 いつこにすきて行郭公

25 〱 夜を残す淀のわたりの舟の上

26 さやかにうつる月の川つら

27 霧やたゝ風のまに／＼に晴ぬらん

28 みたれし跡の露のむら／＼

29 〱 さをしかのふみしたきけん小萩原

30 ふもとの野へのみちの末／＼

31 〱 越てこし山を遥にかへりみて

32 〱 をくるゝ友を待旅の袖

33 つもりそふ雪もかたはら木の本に

34 〱 咲卵花のかきほかたふく

35 玉川のさとのあたりに浪かけて

- 36 さらし置たる賤か手つくり
- 37 長雨の晴まのひかりさしのほり
- 38 雲をもれたる中空の月
- 39 づらなれる雁の翅の跡先に
- 40 田つらのすゑの秋の山の端
- 41 はる / \ と臥見の沢の明過て
- 42 霞をいつる舟あまたなり
- 43 春風や水上よりも晴ハレけらし
- 44 柳かくれにとをき花はなの香かほ
- 45 跡はたゝ夕ふかむる鞠の庭
- 46 なを面かけのさらぬすの内
- 47 そよめける絹の音なひたゝならて
- 48 返すにあかぬ舞人の袖
- 49 蓋はすんなかれてもいくめぐり
- 50 大井の宿をかへるさのみち
- 51 暮ゝ夜の水のひゝきは猶さひし
- 52 松風おつるかけの瀧なみ
- 53 とめ入て夏なき山の休らひに
- 54 蟬にまされる日くらしのこゑ
- 55 いつよりかこすゑの秋の色ならん
- 56 軒にかゝれる葛の葉かつら
- 57 影は猶戸ほそに月のかすかにて
- 58 見をくる袖のへたつ別路
- 59 問こぬやあくかれよとの前渡り
- 60 うとまれてしもおもふあやなさ
- 61 時めける人のゆかりをかこちより
- 62 遠きむかしをかたりいてつゝ
- 63 小初瀬やゆく / \ 末に廻あひ
- 64 時雨の雲のかさなれる山
- 65 吹過る風の跡なを空さむみ
- 66 ひらきし窓をまたさしてけり
- 67 明るかともれは夜ふかき月入て
- 68 いとゝ侘しき秋のひとりね
- 69 さらてたに露けき袖に結ひ添
- 70 うら枯にたる篠ふきの霜
- 71 あらましき音は朝風夕風に
- 72 みなどの舟そつなくまゝなる
- 73 写し絵はたゝ海つらのけしきにて

- 74 なくさむほともうきはさすらへ  
 75 哀はたいつか都の花ならし  
 76 難波のさとの春あさき比  
 77 へはつかにも霞伊駒の嶺高み  
 78 へところ／＼のしら雪のいろ  
 79 へ鷺のゐるを田のつゝきの遥にて  
 80 夕日かくれの水かすかなり  
 81 いつちとか芦まの舟のかへるらん  
 82 むら雨きほふうら風のすゑ  
 83 消のこる霧のかたへのたえ／＼に  
 84 へほたるとひかふ秋の明かた  
 85 竹おほふ外面の月のへたゝりて  
 86 まかきは山の重るかけ  
 87 古寺や雪のしたゝり軒さひし  
 88 松のけふりをもるゝ日の色  
 89 方／＼に塩やくうらの朝ほらけ  
 90 すゑより末の濱へはけき  
 91 鳴行や幾むら千鳥こゑならん  
 92 山のめぐりそ暮わたりたる

- 93 植添てかへるさかひの広き田に  
 94 里はそこともみえわかぬみち  
 95 あはれたゝ野へにまくらや結はまし  
 96 あらしの風を袖に侘つゝ  
 97 へ手折ゆく枝の花／＼散いてゝ  
 98 春も今はの遠き山きは  
 99 永日も限ありける空ならし  
 100 へ哥のむしろはなをあかぬとも

付墨廿二句

此内長二

【校異】

- 六日―ナシ(天・豊・含 a・含 b・楠・小)  
 付墨廿二句―付墨十八句(天)  
 此内長二―内長一(天・豊・楠・小)、此内長一(含 a・含 b)
- 5 ふかみ―晴て(豊)  
 6 川かみ―河つら(天)、川なみ(楠)、しくれの―あらしの(豊)  
 10 野への―野へは(天)  
 13 旅の―まゝの(天)、貼紙の上に「旅」と上書き(満)  
 14 合点あり(別筆?)(豊)  
 16 うち―道(天・豊)  
 18 はらふらん―はこふらん(豊)  
 20 つゝ―て(含 b)、野も―野ゝ(楠)  
 22 に―□(小)  
 23 たなひきて―靡<sup>たなひき</sup>て(楠)  
 32 友を―袖を(含 b)  
 33 かたはら―かたはく(楠)  
 薄橙色の不審紙あり(天)
- 35 あたりに―あたりの(豊)  
 36 手つくり―調布(天・豊)  
 37 晴ま―晴ま(「ま」の字上書き)(豊)  
 38 たる―ぬる(豊)、中空―中<sup>空</sup>帯(含 a)  
 39 翅の―翅や(含 a)  
 40 端―陰(豊)  
 43 晴<sup>吹</sup>けらし―絶けらし(天・豊・含 a・楠・小)  
 44 花<sup>マ</sup>のの香―花の香(満・楠)  
 46 さらぬ―みえぬ(天)  
 47 絹―衣(天・豊)、きぬ(含 a)  
 ならて―な□<sup>虫損</sup>て(小)  
 49 盞はすん―盃はすて(豊・楠・含 a)  
 盃は末なかれつゝ幾めぐり(天)  
 52 おつる―おくる(豊)  
 松風―春風(楠)  
 53 とめ―■(含 a)  
 57 戸ほそに―扉の(天・楠・小)、かすか―さやか(天)  
 59 問こぬや―向よるは(豊)

- 60 うとまれてしも―うとまれにしも(天)、あやなき―  
あやなき(含 a・楠)
- 61 ゆかりを―ゆかりと(含 a・含 b・広・楠)
- 62 あやなき―あやなきさ敷(天・豊)
- 63 山―古路(天)
- 64 なを―より(天)、のみ(楠)、吹過る―吹捨る(含 a)
- 65 風の跡なを―風の音のみ(小)
- 66 また―入(天)
- 67 月入て―月出て(天)
- 68 さらてたに―さらたに(天)、さらてさへ(豊)
- 69 みなとの―みなとに(豊)、舟そ―舟は(豊)
- 70 写し絵―写ウツス絵(含 a)
- 71 さすらへ―さすらひ(豊)、さすらい(含 a)、ほとも―ほとは(含 a)
- 72 はた―たゝ(天)、跡ならし―花ならん(天)、花ならし(豊)、なら虫損□(小)
- 73 哀はた出る都の花ならし(含 a)
- 74 いつか―いつかつる(楠)
- 80 水かすか―道かすか(含 a)
- 81 秋の―春秋敷の(楠)
- 82 り―る(天・豊・含 a・含 b・小)
- 83 けふりを―けふりの(含 b)
- 84 はマヤけき―はるけし(天)、はるけき(満・楠・小)、はるけさ(含 a)
- 85 千鳥―鳥(天・豊)、行や―行は(豊)
- 86 むら千鳥―村鳥の(楠)
- 87 さすらへ―さすらひ(豊)
- 88 わひつゝ(含 b)
- 89 山きは―山越(豊)、山こえ(含 a・楠・小)
- 90
- 91
- 92
- 93
- 94
- 95
- 96
- 97
- 98
- 99
- 100
- 【批言の校異】
- 2 哥ノ下ノ句めき候(天)
- 3 哥ノ下ノ句めき候か(豊)
- 4 哥の下句めきて候歟(満)
- 5 哥の下の句めきて候(含 a)
- 6 哥トノ―哥ノ(含 b)
- 7 ナシ(広)



山何 追加

- |   |                   |    |
|---|-------------------|----|
| 1 | くるゝ夜の螢を道のしるへ哉     | 綱家 |
| 2 | 月また遅き夏の川つら        | 泰義 |
| 3 | 陰たかき柳や茂り添ぬらん      | 実綱 |
|   | 玠重 <sup>ニ</sup> 候 |    |
| 4 | 呉竹なひくを田の末 / \     | 泰定 |
| 5 | ほのけふる一里むらの風みえて    | 基如 |
| 6 | きえ残りたる霜の寒けさ       | 長澄 |
| 7 | うつる日の影かすかなる春の野に   | 宗房 |
| 8 | さへつり出るうくひすのこゑ     | 利忠 |

【校異】

1 螢を | 螢は (含 b)

5 基如 | 泰如 (豊)

※作者表記全てナシ (含 b)

【批言の校異】

3 批言ナシ (豊・含 a・含 b・小)

【別表】合点の有無一覧

	(豊)	(楠)	(広)	(天)	(満)	(含b)	(含a)	(宮)			(豊)	(楠)	(広)	(天)	(満)	(含b)	(含a)	(宮)	
第一									1	第三	×	×					×		2
		×							4										7
									12					×			×		18
									15								×		20
									22										23
									24		×								28
		×						×	30						×				30
									32										34
								×	33										37
									34										40
									37										41
									39										49
		×		×					40			×							50
									41		×								53
									42										57
									49					×					58
		×						×	50			×							61
				×				×	51										63
									66										65
								×	68		×						×		66
	×		×					77				×						80	
								88		×								83	
								90				×						90	
		×						93										92	
								94		×							×	93	
								96										97	
第二									1	第四									2
			句欠						4		×						×		6
									5			×							8
									7										15
									13			×	×						19
	×								16							×			21
	×	×	×				×		22		×						×		22
									24		×		×						24
		×		×					25										32
									33										35
									34										37
								×	41										42
									42			×							43
			×		×			×	43		×	×	×		×	×	×		44
									46										45
									47										46
	×		×				×	64										54	
								71										55	
								73						×				59	
								75										61	
								83										63	

	(豊)	(楠)	(広)	(天)	(満)	(含 b)	(含 a)	(宮)			(豊)	(楠)	(広)	(天)	(満)	(含 b)	(含 a)	(宮)	
第五									1	第七									2
					×				2		×			×			×		4
		×							5		×	×	×		×	×	×	×	6
									6				×	×					7
			×						17		×		×		×			×	11
									21		×	×							13
									24		×			×					15
									28										25
			×		×			×	29					×					26
		×	×	×	×	×	×	×	35										28
		×	×	×	×	×	×	×	36										30
									40										31
			×						41										39
									45										40
	×				×				48					×					52
	×		×						50										53
		×	×	×	×	×	×	×	51										57
			×	×					52					×					62
				×					57				×						69
				×					67										73
	×								70					×					82
		×				×			78			×	×				×		87
	×								90				×						92
									95										95
									96	第八									1
									97										2
第六									4										3
									5		×	×							9
									17								×		16
									18										17
					×	×			19		×								18
		×	×	×	×	×	×	×	24			×	×	×	×	×	×	×	19
									29		×						×		21
									31										25
				×					39										29
		×							41										31
									45										47
				×					46										48
				×		×			47				×						53
									49		×		×						57
					×				59				×		×			×	73
	×	×	×	×		×	×	×	60										77
									63		×								78
		×							92		×								80
									99		×			×					81
																			88
											×								94

	(豊)	(糖)	(広)	(天)	(満)	(含 b)	(含 a)	(宮)	
第九									9
									15
									21
									30
									31
									33
									34
					×		×		40
									46
		×							51
					×				53
									54
									55
		×					×		69
		×			×	×			74
		×			×		×		75
									77
									84
		×							91
		×	×	×	×	×	×	92	
	×	×						93	
		×	×	×	×	×	×	96	
	×							97	
	×			×				99	
第十									3
									11
			×	×	×	×	×	×	14
									15
			×				×		25
									29
					×				31
									32
					×				34
							×		39
					×				44
									50
		×							63
		×			×				64
									67
									68
									75
								77	
								78	
								79	
								84	
								97	
	×	×						100	

(凡例)

空欄 ・ ・ ・ 合点が付されている。  
 × ・ ・ ・ 合点が脱落している。  
 句番号 ・ ・ ・ 網掛けの場合は長合点が付されている。

### 第三章

#### 作品研究―直江兼続の連歌・和漢聯句



## 概説

本章では作品研究にあたり、全巻の注釈を施した左記の七種を主な資料として引用する。なお、各資料の伝来、書誌の詳細は各節の注釈を参照されたい。

- ① 天正十四年二月二日漢和聯句「堯舜二難并」（上杉博物館）
  - ② 天正十六年閏五月八日和漢聯句「新竹愛風静」（永青文庫蔵）
  - ③ 文禄二年直江兼続一座漢倭聯句百韻「楓散風紅色」（上杉博物館蔵）
  - ④ 慶長三年三月二日賦何人両吟連歌「しめゆふや」（市立米沢図書館）
  - ⑤ 慶長五年正月廿一日賦何船連歌「梅か香は」（埼玉県立文書館蔵）
  - ⑥ 慶長六年十月四日漢倭聯句「落葉雨天下」（鮎川家旧蔵）
  - ⑦ 慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」（慶応義塾図書館蔵）
- ③④⑤の三作品は、調査により新たに見出したものである。⑥は従来より冒頭三句のみが、諸先行研究で指摘されていたが、その所在と百韻全句は長らく不明であった。以下、①②⑦の会について概略を述べる。
- まず、①は天正十四年（一五八六）二月二日に、上杉景勝に近侍した家臣らが内々で興行したと思しき漢和聯句である。現時点で上杉家で催された和漢聯句としては最も古いものである。『歴代古案』に所収。重要な点は「鈎齋」と名乗る人物が連衆の一人に居ることである。従来、この人物を兼続と断定しうる根拠が不足していたが、他の確実な兼続の漢句と表現に類似点があることから、鈎齋は兼続の齋号である可能性が高いと推定した。
- ②は天正十六年（一五八八）五月八日、兼続が上洛した際に興行されたものである。興行場所は、脇句を詠み、亭主の位置にいる細川幽齋の邸であろう。本聯句会において重要な点は、これが越後の上杉家家中で行われたもの

ではなく、京で興行した、兼続にとって、最初の会であることである。この聯句会には、初めて集い来た人々が大半を占め、兼続と木戸元齋以外は皆、上杉家以外の人物である。彼らとの縁は一度で絶えてしまうのではなく、その後、慶長七年まで続いていく上杉家の聯句会に間々出入りしていることが確認される。上杉家全体にとって、ここで兼続が築いた人脈の意義は大きいだろう。

聯句会が興行された天正十六年前後、禁裏では後陽成天皇を中心に和漢聯句が催されており、その参加者には、上杉家関連の聯句会に出入りして人物が見られる。一方、政治の面では秀吉による天下統一が進み、それを象徴するかのようになり、本聯句会の前年の天正十五年には聚楽第が完成する。そして、聯句会が行われた年には、方広寺に大仏殿造営、刀狩令発布と確固たる権力を築いている時であった。こうした時代情勢において、上杉家は、豊臣方に付き、執政兼続は上杉景勝と共に、度々京都に上洛していた。天正十六年は、天正十年より確認できる景勝政権における聯句会から数えて三回目であり、本作品を含めて年に三回その興行が確認できるような盛んな年である。

③の興行時期は、明徴がないが、藤木久志は「文禄二年頃カ」と推定している。文禄二年（一五九三）という意見は首肯される。また、包紙にあるように、相国寺の西笑承兌を迎え、京都で行われたとしてよいであろう。

文禄元年、文禄の役が勃発すると、豊臣秀吉の命で上杉景勝・直江兼続は上洛し、ついで渡海。そのまま年を越し、翌二年正月十日に兼続は景勝とともに、朝鮮における陣中で連歌会を開催している。九月に兼続は景勝とともに肥前名護屋に帰陣している。秀吉から帰国を許されると、兩人はただちに西上したようで、閏九月二十七日、相国寺の有節瑞保が兼続と玄齋（木戸元齋か）に贈り物をしている。また、十月十二日にも直江公の名が見られ、前日の十一日に「北闕太閤相國（豊臣秀吉）」において行われた能に参加したとある（以上鹿苑日録）。少なくとも文禄二年十月の時までの在京が確かめられる。いっぽう、同三年になると、秀吉の命によって伏見城総構堀普請に従事するため上洛回数が多くなり、京都での滞在も多くなる。この漢和聯句は、以上のような情勢の狭間で興行



されたものである。

④は「兼統」と「其阿」の両吟連歌である。兼統は、文禄二年（一五九三）の連歌会で和句を詠んではいるが、その他の和漢聯句会では全て漢句のみを詠む。この点に関しては次のような見解がある。鶴崎氏は、「兼統は漢詩を得意とした。和句を主とする連歌には興味がなかったのか、連歌の作品は少なく、和句と漢句を交えた和漢聯句または漢和聯句には盛んに参加している。」と述べる。木村氏もまた、「兼統は漢詩、漢文を能くして其の作詩も少ないが、和文の著作とか、彼の和歌と言ふものは殆んど傳はらない」、「聯句會にても、兼統のものは常に漢の句のみである」、「元来兼統は國文は不得意であつたか、又は当時一般に變體漢文の流行した爲か、和文の著作作品が少ない」と述べる。このように先行研究では兼統の文才は、主に漢詩文の才能に対して賞賛されることが多い。

しかし、この「賦何人連歌」が、兼統と其阿の両吟、つまり二人で七十二句、兼統一人で三十六句詠んでいるとなれば、和歌、連歌に全く興味が無かった、才能がなかったと言いつつ切るのは早計だろう。天正十三年に、兼統が木戸元齋に『師説撰歌和歌集』の編纂を命じていたことは知られるが、兼統の和歌への関心については、この歌集以外には触れられることはなかった。

「其阿」は、時衆の由緒ある阿弥号で、連歌を詠んだ者も多数おり、特定は難しい。だが、卷子に「称念寺其阿」と書かれた題箋が付されていることから、頸城地方の時衆の中心であった府内称念寺（のち高田寺町に移転）の住職其阿であったと推察される。慶長七年（一六〇二）の「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」にもその名が見られる。其阿と上杉家との交友は、彼の歌集『高階尚俊歌集』に「越後国に侍りし時、称念寺其阿すゝめし五十首の歌の中に夕萩といふ事を」とある詞書から推察できる。彼は、木戸元齋の養子であった佐河田昌俊と交流があった。

⑤は、慶長五年（一六〇〇）正月に会津城主上杉景勝が家臣や時衆の僧とともに「賤何船連歌」と題して詠んだ連歌一卷である。その所在は長らく不明であり、翻刻もなされてこなかった。だが、このたび調査でその所在が判

明した。この連歌が興行された慶長五年正月は、そのわずか四ヶ月後に、家康の上洛の命に景勝の家宰直江兼続が異議を申し立てた痛烈な弾劾状「直江状」が作成されたとされる年でもある。さらに家康による上杉氏征伐（会津征伐）を一つのきっかけに、関ヶ原の合戦が勃発する年でもある。

⑥は、米沢の郷土史家今井清見氏が記録に基づく。今井氏によれば「此一巻ハ元鮎川家ノ所蔵ニシテ軸ノ表ニ「直江書」とあり、冊子本ではなく軸装であったと推測される。さらに今井氏が知り得た当時の興行状況が、「慶長六年十月四日 兼続京都伏見にあり、是日中條三盛、楡井綱忠、吉益家能、末次朝秀、鮎川秀定（以上上杉藩）花園退蔵院五世千山玄松、一吉、資種、諏春（三名の姓名詳不明）等十名と共に某所に於て 漢和聯句の會を興行した。」と記される。この時期の冬、兼続或いは上杉家関係者が京都に上洛した折に、興行されたことが分かる。

⑦は、翌月に米沢で催されたもう一つの文事との関わりが深い。これについて、木村氏は、「米澤へ帰國後、幾程もなくして、同十二月十五日、其邸に於て、和漢聯句會を開き、景勝も之に臨み、主従和樂して、三十萬石に減封された年末とは思はれず、兼続に對する景勝の信頼は益々加はつて居る。（略）翌慶長七年四月廿七日、米澤郊外三里の龜岡文殊堂に於て、僧泰安、及び安田能元、岩井信能等 藩將士二十餘人と漢和百韻の雅會を開いて和樂した。これまた、如何に闔藩一致して、戦後の復興に努力したかを物語る史料ともなるであらう。」と述べる。当該百韻が興行された背景を裏付ける資料はないが、木村氏が推測するように、上杉家家臣団の結束を仰ぐべく企画された、とみるのが穏当だろう。

では、①～⑦の連歌会・和漢聯句会の連衆はどのような顔ぶれであったのか。興行日、興行地とともに参加者の名を次の表に掲げる。名前の下の漢数字は、詠んだ句数である。なお、各連衆の伝記は資料篇の注釈冒頭を、全詠出状況については第一章第三節の表を参照されたい。

【表】

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	興行日	形式	興行地	連衆
慶長六年十二月十九日	慶長六年十月四日	慶長五年正月二十一日	慶長三年三月二日	文祿二年力	天正十六年閏五月八日	天正十四年二月二日				
和漢聯句 (夢想)	漢和聯句	賦何船連	両吟連歌会津	漢和聯句	和漢聯句	漢和聯句 (夢想)				
米沢	京都伏見	会津	会津	京都宇津 江朝清邸	京都細川 幽齋邸	越後力				
兼統十三 其九 能元八 其阿七 信能七 秀定八	兼統十七 朝秀二 八一 秀定十三 資種一 諏春七 氏秀	兼統十七 秀十 綱忠八 方信九 元儀七	兼統五十・其阿五十	西笑十三 七氏長八 仙需九 素仙八 了意十	有和九 紹巴十 心前八 壽三六 由己七	西笑八 玄旨十 昌叱九 清齋八	御一 景勝一 休波二十五 鈎齋(兼統か)二十四 公木二十六			

太字で示した連衆は、漢句を詠む者である。②のように、漢句四七・和句五三と不均衡である。連衆の人数は漢和それぞれ六人だが、漢句作者は実質五人で（来次氏秀は一句のみ）、漢が押され気味であった。かつ和句作者には氏長・紹旨・寿三（元齋）・了意など、ほぼ当代の歌人・連歌師と違ってよい人々が揃っているのに対して、漢句作者では禅僧の西笑以外は専門家とは言い難いことが、要因の一つかもしれない。

興行地によって京都と上杉家領内に分かつと連衆の構成もおおよそならう傾向となる。例えば表中①②は、兼続周辺の上杉家に所縁深い人物よりも西咲承兌、細川幽斎、紹巴一門といった当時諸侯と広く交際があり、比較的实力を握っていた人物に近い人々で構成される。句数の点からみても、彼らが座の中心を担っており、兼続の出句も多くて十句止まりである。

一方、③④⑤⑥にみえる連衆は、京都の有力連歌師、禅僧、歌人というよりは、領内の寺僧や家臣で構成される。そこでの兼続の詠に注目すると都の会よりも突出しており、彼が上杉内での座の中心であったことが明らかである。③は兼続が和句を吟じる点で珍しい。表をみても兼続が専ら漢句の担い手であったことは明白である。兼続のみならず当時の武将が連歌を愛好し、興行していた事実は先論に指摘される。時に和漢聯句を張行することもあったが、漢句の担い手は主に僧であった。これほど定期的に和漢聯句に興じ、座の中心人物のみならずその家臣らも漢句を残した家は多くはない点で貴重である。次節では主に兼続と彼の家臣が詠んだ漢句を中心に分析を試みる。

## 凡例

### 《翻刻》

- 一、原本は一句を二行書きにするが、これを一行書きに改めた。
- 一、句頭に通し番号を付し、通行の字体に改めた。
- 一、摩滅、汚損により判読不能な箇所は□で示し、残画から推定される文字は「」で右傍に示した。
- 一、紙移りは、連歌懐紙における通用の名称を用い『「初折才」のように示した。

### 《注釈》

- 一、注釈で掲げる本文は、和句は清濁を施し送り哉仮名を補い、漢句は底本の傍訓返点を略し、訓読を示した。
- 一、注釈は、まず前句との関係を寄合語、句意の点から説明した後、一句の中で使われている語句に関する注を和歌、連歌、和漢聯句における用例を引きながら適宜記した。必要あれば、考察もここに記述した。注釈末尾に、季節とその季に認定した語句を（ ）内に記した。
- 一、和歌の本文・番号は新編国歌大観によるが、室町以後の私家集は新編私家集大成による。連歌の句例は国際日本文化研究センター、連歌データベースを活用し、可能な限り原典に当たり本文を確認した。
- 一、漢句の平仄は右傍に、平○、仄●、押韻字◎によって示した。
- 一、偶数句での押韻字を指摘した。漢和聯句で和句が押韻する場合、使用された韻字と訓は、和訓押韻（島原松平文庫本）・漢和三五韻（貞享版本）で確認した。
- 一、寄合語や付合の認定には、連珠合璧集、連歌初心抄、随葉集・拾花集・竹馬集などを参照し、「霞↓のどかなる」といった形で、適宜省略して掲げた。

はじめに

本節では『歴代古案』<sup>1</sup>（一五六七号）所収の「上杉景勝一座和漢聯句百韻」を取り上げる。現時点で上杉家の和漢聯句として、且つ兼統のまとまった漢句が確認される和漢聯句の初期に位置づけられる作品として重要である。『歴代古案』を底本とし、『上杉年譜』巻十一（略称「年譜」）所収の本文で校訂し、注釈を施した。校訂した箇所は最後に一覧した。

また、「鈎齋」の齋号が付された句の作者の比定には拠るべき資料が不足していた。だが、第三章で稿者による調査で分明となった上杉家関連の和漢聯句を分析の対象に加えることで、兼統の作である可能性が高まった。

一、連衆と齋号

懐紙に記される名を掲げた後、通行の姓名を記した。

〔漢句作者〕

- ・御。上杉景勝が感得した夢想の句か。
- ・景勝。上杉景勝。彼は天正十七年九月二十九日と慶長六年十二月十九日の漢和聯句でも漢句を詠むが、何れも一

句の詠出にとどまり、漢句の主な担い手は当初から兼続であったことが窺える。

・**鈎齋**。景勝に近侍した家宰直江兼続の齋号。年月日は不明ながら彼が五山僧らと「残暑促俶装」題で詩会を催して詠まれた詩と元和四年に新造された禅林寺で詠んだ詩序に「鈎齋」と署名される。

・**江齋**。上杉家の家臣で兼続の側近であった宇津江九右衛門朝清の「江」をとり齋号としたか。彼は慶長期まで和漢聯句に出座し、上杉家の漢句の担い手として活躍が認められる。

・**公木**。二字を組み合わせた「松」を一字名とする人物か。当時の上杉家内で漢和聯句の座を捌ける人物として、藤原惺窩の叔父、清叔寿泉が想定される。彼は二年後の天正十六年に越後で兼続らと漢和聯句を催しており、これ以前に既に越後と縁があったか。或いは、慶長六年十月四日漢和聯句の漢句と亀岡文殊堂奉納詩歌百首序を記した妙心寺退蔵院千山玄松か。

〔和句作者〕

・**休波**。木戸元齋。遁世して沙弥休波と号した。羽生城主忠朝二男。

・**不省**。大国実頼。兼続の実弟。天正十六年一月十一日連歌会以降、上杉家及び京都での連歌会に和句の作者として度々出座。なお、当該漢和聯句第50句「上中しもやなへてさかへん」が、「実頼」の名で詠まれた同十七年九月二十九日漢和聯句一折の挙句「かみなかしももゆたかなる州」と非常に類似することから推定。

以降の節で扱う和漢聯句に名がみえる連歌師里村紹巴、歌人細川幽齋、西咲承兌といった時の文化人などの参会はなく、景勝に近侍或いは上杉家と所縁あった人による内々の会であったことが分かる。

次に既に兼続の確実な漢句と当該作品の鈎齋の漢句とが非常に類似することも、同一人物である可能性を裏付ける。例えば、60句「溪頭霧自横」の「頭・横」は、「江頭芦折横」（慶長六年十月四日漢和聯句・20・第三章六節）の表現に類似する。その他、86句「蘭叢幾露緋」でみられる「露」と「蘭」の組み合わせは、「露於蘭草芳」（文禄二年直江兼続一座漢和聯句・94・第三章第三節）でも詠まれる。また「鷗」を扱う句を好んだようで、47句「鴛不同鷗席」のほか、「鷗不干恩者」（天正十六年閏五月八日漢和聯句・75・第三章二節）、「鷗辺無黜陟」（文禄二年直

江兼統一座漢和聯句・15・第三章第三節)で用いられる。以上が、「鈎齋」を兼統の齋号と比定する上で手掛かりとなる表現である。

## 二、翻刻

※和句の偶数句末には該当の韻字を右傍に記した。

天正十四年二月二日

景勝公御夢想之漢倭

- |    |                           |    |    |                            |    |
|----|---------------------------|----|----|----------------------------|----|
| 0  | 堯舜二難并                     | 御  | 12 | 信書写盡情                      | 公木 |
| 1  | 秀有実花語                     | 景勝 | 13 | 離思深似海                      | 鈎齋 |
| 2  | 春ののちまて梅のうくひす <sup>鶯</sup> | 休波 | 14 | 旅たつ船ををくりこそゆけ <sup>行</sup>  | 休波 |
| 3  | 雪残幽谷側                     | 鈎齋 | 15 | 洛鐘風共響                      | 江齋 |
| 4  | 雲卷遠山晴                     | 江齋 | 16 | 湘笛月而清                      | 鈎齋 |
| 5  | 吹すさむ嵐のすゑに月見えて             | 不省 | 17 | 秋色皆黄落                      | 公木 |
| 6  | 排窓秋細評                     | 公木 | 18 | さとの砧やしつか営み                 | 不省 |
| 7  | ふりそへて庭のすゝむしきり／＼す          | 休波 | 19 | まつことを世にしられしの仮言にて           | 休波 |
| 8  | 雨竹作琴声                     | 鈎齋 | 20 | 忍履送還迎                      | 公木 |
| 9  | 醒尚香春酔                     | 公木 | 21 | 灯我十年故                      | 鈎齋 |
| 10 | 霞になれむ日かすいく程 <sup>ホド</sup> | 不省 | 22 | 学ひの道によはひ傾ふく                | 休波 |
| 11 | かへらはと夕の鴈ををしみ来て            | 休波 | 23 | 見るになをおとろくほとのみす鏡            | 不省 |
|    |                           |    | 24 | 桑日掛銅鉦                      | 鈎齋 |
|    |                           |    | 25 | 融景蝶春舞                      | 公木 |
|    |                           |    | 26 | かせにまかせてにほふ花ふさ <sup>英</sup> | 休波 |



27 曙のかすみふくむる小簾の戸に  
 28 破曉鳥嚶々  
 29 枕路郷千咫  
 30 文邊国太平  
 31 武きさへはかりことにはしたかひて  
 32 解暝以酒兵  
 33 月の前まどゐはなれぬ秋の夜に  
 34 菊詩相伴成  
 35 こゝろをも山路の露に置そへて  
 36 やすらふまゝにさをしかそ鳴  
 37 巉岩樵佇立  
 38 高殿主長生  
 39 寂釣娛天上  
 40 水に涼しく月そ澄ぬる<sup>スミ</sup>  
 41 茂りあふ柳かもとに雨晴て  
 42 旅行簑笠軽  
 43 豈迷梅瘴杲  
 44 今見へたりし人のまことか<sup>誠</sup>  
 45 約深恩顧淺  
 46 あひ逢とてもまれの盟りそ  
 47 鴛不同鷗席  
 48 鸞堪奏鳳箏

不省 公木 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省

49 おさまるに又立かへる世ならまし  
 50 上中しもやなへてさかへん<sup>榮</sup>  
 51 嵩三呼萬歳  
 52 周舊矩新正  
 53 さえ／＼し冬はいつらは春のきて  
 54 水もみとりにこの川やなき<sup>裡</sup>  
 55 遊絲和暖乱  
 56 ものゝ音をしもたれかあらそふ<sup>争</sup>  
 57 人見えぬゆふへさひしき宮所  
 58 よりし面かけたつ眞木<sup>ハシラ</sup>楹  
 59 月下門敲否  
 60 溪頭霧自横  
 61 ひととおりに秋風ゆきて暮る日に  
 62 色つくまゝの水の<sup>ウキッ</sup>萃<sup>サ</sup>  
 63 老涯居不穩  
 64 山もとちかき市そ<sup>ノ、シ</sup>匍<sup>ル</sup>  
 65 嵐浮帰袖動  
 66 さかりのほとは見し家櫻  
 67 知花開落孰  
 68 かすめる比はこゝもみやこか<sup>京</sup>  
 69 さゝなみや志賀津の春もたつぬらん  
 70 香輪處々轟

休波 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省 公木 不省

92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71  
 雅筵涼句賡 我屋村春近 暮行まゝにいそきぬるツエ根 柴はしのしはしやすらふ袖こえて 酌有好黄精 清無瑕玉貞 蘭叢幾露緋 山の端にまたれぬ秋の鴈なきて 友ならむ月も遅き在明 茅響風蹙雨 なにのうへにもたえやらぬ彭みち 読をくもうたてはつかしことたらて もしには見せしたゝはつらき名 滴淚縫衣妾 爽氣石金鏗 しくれしも秋のなかはの空すみて 近望兎記盈 驅景馬蹄疾 えかたき法に身をそ驚く 禪定睡魔屈 仁草泛曾阮 獵塵群晚嶺

公木 鈎齋 不省 休波 鈎齋 公木 鈎齋 不省 休波 鈎齋 不省 鈎齋 不省 同 休波 同 公木 不省 鈎齋 公木 不省 鈎齋 公木 鈎齋

93 月をうかへ紅葉をなかず秋の水 休波  
 94 霧霽楚江宏 鈎齋  
 95 風冷帰帆鬧 公木  
 96 ゆふへになれは山もさか嶮しき 休波  
 97 花見はと日たくるころに立出て 不省  
 98 春遊路転縈 公木  
 99 彩霞吟料夥 鈎齋  
 100 長閑にをくる時の貞タマしき 不省

御一句

景勝一句

休波廿五

鈎齋廿四

江齋三

不省廿一

公木廿六

【校訂箇所一覽（上は底本、下は年譜の本文）】  
 5 盡て↓見えて 14 にて↓こそ 29 子↓千 72 阮↓阮

### 三、注釈

0 堯舜二難并（堯舜二つながら并せ難し）

御

当該句は「夢想」の句で、神仏からの啓示を受けた句とみなして書かれた。発句を詠む景勝が感得したか。一句は、堯と舜のように賢明な天子は再びは揃い難い、と詠む。時の統治者が自らの為政は聖天子たる堯と舜の時代には及ばないと詠む和歌に「なれきつる雲の花もはづかしや代々にをよばぬ春をかさねて」（後花園院御集・三一）があり、一条兼良の評語「大漢唐至治之君、恥不及堯舜之淳化、古今聖情自然府合者歟、」が参考となる。

1 秀有実花語（秀でては実花の語有り）

景勝

前句の「堯舜」が優れた天子であることを踏まえ、「秀」を付けて応じた。「実花」は「花実」のことで二四不同を満たすために語順を入れ替えた。当該作品興行日の二月に咲く植物としての「花実」と歌論用語として

形式（言葉）と内容（心）の意を表す「花実」とが想定される。前句の「二」から言葉と心の二つを兼ね備えることをも導く。一句は、言葉と心の両方を備えた語りは優れている、と詠む。春1（花）。

2 春ののちまで梅のうぐひす<sup>篇</sup>

休波

前句の「実花」は当該句では具体的に「梅」と定まり、「語」る主体が「鶯」であったと付けて、優れた啼き声を響かせているのは、春が過ぎてても梅木にいる鶯である、と詠む。「花の宿↓鶯」（合璧集）。「花間覓友鶯交語、洞裏移家鶴卜隣」（花の間に友を覓むれば鶯語を交ふ、洞の裏に家を移せば鶴隣を卜む）（和漢朗詠集・山家・五六〇・紀長谷雄）。なお、「鶯」（漢和三五韻「以下韻字の引用元同」）の韻字により当該作品の韻は「下平声庚耕清韻」に定まった。春2（うぐひす）。

3 雪残幽谷側（雪は残る 幽谷の側に）

鈎齋

前句の「うぐひす」の住処である「幽谷」の景を導い

て、鶯が住む幽谷のあたりには、まだ雪が残っている、と詠む。「鶯↓谷より出る」「梅↓雪」（合璧集）。「谷ふかきふるすをいづる鶯のこゑきくときぞ春はきにける」（新千載集・春歌上・一三・亀山院）など鶯の声は谷から聞こえる。また「春ののちまで」を受けて、春になつてもまだ雪が残る早春を詠む。春3（雪残）。

4 雲○●●○山晴（雲は巻く 遠山の晴れに） 江斎

前句の「谷」を囲む「山」の姿を付けて対句で展開し、遠くの山では雨が上がって、雲が薄物のように掛かっている、と詠む。「雪気↓雲」（合璧集）。「雲巻」とは、雲が薄物のように山に掛かっている景か。『懐風藻』に「雨晴雲巻羅、霧尽峰舒蓮（雨晴れて雲は羅<sup>うすもの</sup>を巻く、霧尽きて峰は蓮を舒く）」（「從駕」伊与部馬養）。雑。

5 吹すさむ嵐のすゑに月見えて 不省

前句で晴れた山の稜線に見える「月」を付けて、雲を払うほどの激しい風を吹かせる嵐のあとには月が見えて、と詠む。「山↓嵐」（合璧集）。「吹きすさむかぜに

ぞみゆるみねのくもふけてはるべき月の空とは」（法性寺為信集・一三七）。また、前句の「雲」は嵐によつて払われた（吹すさむ嵐）。秋1（月）。

6 排窓○●●○秋細評（窓を排<sup>ひら</sup>き秋の細やかなるを<sup>ハカル</sup>評） 公木

前句の「月」を見るために開いた窓（排窓）を付けて、窓を開き秋の哀れさに心を配る、と詠む。「秋細評」は、秋の哀れさに様々に思いを巡らすということか。蘇軾に「懸知不久別、妙理難細評。（懸知久しく別れず、妙理細やかなるを評り難し。）」（東坡先生詩集・一五・初別子由）。秋2（秋）。

7 ふりそへて庭のすゞむしきり／＼す 休波

前句の「窓」外の庭で鳴く虫を付けて、庭では鈴虫の声に添えるように蜚も鳴いている、と詠む。「ふり」は「振り」を掛け鈴の縁語。「すゞむしのふりすてがたき秋のよのね覚をゆづる蜚かな」（衆妙集・三六一）が参考となる。秋3（すゞむし・きり／＼す）。

8 雨竹作琴声●●●○◎（雨竹 琴声を作る）

鈎齋

たのか、と詠む。韻字は「程 ホト」。春2（霞）。

前句で「ふりそへて」いたものは「雨」だと応じた。

「ふる↓雨」（合璧集）。「嵐山もろき木のはにふりそへて峰行く雲もまた時雨れつつ」（新後拾遺集・冬・四七二・二条為氏）など。また「すゞむし」と「きりくす」から「声」を導き、竹に降り落ちる雨の音はまるで琴の音のようだ、と詠む。雑。

9 醒尚香春醉●●○◎（醒めて尚かぐは香しきは春醉） 公木

前句の「琴声」は春の宴で響くものとして受けて、春の酔いは、覚めてもなお素晴らしい、と詠む。春1（春醉）。

10 霞になれむ日かずいく程 不省

前句の「春」と「酔」から「霞」が導かれた。「嘯野煙之春光、各吟一句、酌山霞之晩色、忽酔数杯（野煙の春光に嘯きて、各一句を吟じ、山霞の晩色を酌んで、忽に数杯に酔へり）」（新撰朗詠集・春・子日・二六・橘在列）。春の霞がかかってから、一体どれほどの日数を経

11 かへらばと夕の鴈ををしみ来て 休波

前句の「日かずいく程」を受けて、春に北へ帰って行く夕方の雁を見ては、私も故郷に帰りたいたいと思いにかられてきた日数は一体どれくらいであるか、と前句に返る心で詠む。「霞↓夕」「数↓雁」（合璧集）。「われも又もとの都へかへらばやこしぢのかたへかりもゆくめり」（拾玉集・厭離百首・六一三）。春3（雁）。

12 信書写盡情●●●◎（信書 写して情を盡す） 公木

前句の「雁」から「信書」を導き、手紙に心情を記し尽くす、と詠む。「雁↓玉章（書）」（合璧集）。「玉づさに涙のかかる心ちしてしぐるるそらに雁のなくなる」（千載集・冬・四一五・読人しらず）など。雑。

13 離思深似海●●○◎（離思 深きこと海に似たり） 鈎齋

前句の手紙に託した思いの深さは海のように深い、と詠む。「離思」は離別の情。「方舟安可極、離思故難任

(方舟安ぞ極むべし、離思故に任せ難し) (曹植・雑詩)。雑。

14 旅たつ船ををくりこそゆけ<sup>行</sup>

休波

前句の「海」を受けて、その海上を行く船を付けて、旅立つ船を見送りに行く、と詠む。前句の「離思」は船を見送る人の心情として受ける。「よど河や橋の下行く舟にみつ旅だつ人の心心を」(草根集・九三六六)など。韻字は「行 ユク」雑、旅。

15 洛鐘風共響 (洛鐘 風と共に響く)

江斎

前句の「船」は黄河の支流、洛水を進むと付けて、その流域の洛陽の鐘が風の吹く音と一緒に響いてくる、と詠む。「他夜約君何所好、紗窓月淡洛鐘前(他夜君と約すに何所好し。紗窓月淡き洛鐘の前)」(策彦和尚詩集・試春之和)。雑。

16 湘笛月而清 (湘笛 月に清し)

鈎齋

前句の「洛」を受けて、湖南省をへて洞庭湖にそそぐ

湘水を付けて、湘水に響く笛の音色は月の光が清く澄んでいるかのよう<sup>笛などに</sup>に清澄だ、と詠む。「風↓ふく」(合璧集)。秋1(月)。

17 秋色皆黄落 (秋色 皆 黄落す)

公木

前句の月の景色を受け、秋の深まった様子を付けて、秋に色づいた葉は全て落ちた、と詠む。秋2(秋色)。

18 さとの砧やしづが営み

不省

前句で深まった秋の季節を受けて、里に響く砧を打つ音は賤の営みだ、と詠む。「賤」は身分の低い者。「衣うつしづがふせやのいたまあらみきぬたのうへに月もりにけり」(玉葉集・秋下・七六三・西園寺実兼)。韻字は「営 イトナム」。秋3(砧)。

19 まつことを世にしられじの仮言にて

休波

前句の「しづか」を「静か」の意も掛けて付けたか。「目をさます砧の音はしづかにて/いまや夜長きかぎりなるらん」(那智籠・二七五四)。「仮言」は口実、他に

かこつける言葉。(男を)待っていることを世間に知られまいとの口実に(砧を夜通し打つ)、と前句に返る心で詠む。雑、恋1(仮言)。

20 忍履送還迎<sup>◎</sup>(履を忍ばずを送り還た迎ふ) 公木

前句で男性を待つ女性を受けて、女性のもとから履の音を立てないように帰っていく男を見送っては、再び迎えることを付けた。劉辰翁「馬上新人紅又紫、眼前歌妓送還迎(馬上の新人紅又は紫たり、眼前の歌妓送り還た迎ふ)」(須溪集・八・「鷓鴣天」)。雑、恋2(送還)。

21 灯我十年故<sup>◎</sup>(灯は我が十年の故<sup>とも</sup>) 鈎齋

前句で女性を訪ねる男性が夜道を照らすために持っていた灯を付けたか。一句は、手元を照らす灯は私にとり十年の友人に相当する、と詠む。黄庭堅が思いを込めて手紙を綴ったことを詠む詩「桃李春風一杯酒、江湖夜雨十年燈(桃李春風一杯の酒、江湖夜雨十年の灯)」(豫章黄先生文集・九・「寄黄幾復」)が参考となる。

雑。

22 学びの道によはひ傾ぶく 休波

前句の「灯」を勉学に励む際に傍らに置いていたものと取りなして、学問の道に励むうちに年老いた、と詠む。「よはひ傾く」は年老いるの意で「春をへてよはひかたぶく我がともにのきばの花のくち木をぞみる」(伏見院御集・五三一)。韻字は「傾 カタフク」。雑。

23 見るになをおどろくほどのます鏡 不省

前句の「よはひ傾ぶく」を受けて、年老いた自分の顔を映し出した「鏡」を付けた。「ます鏡」は真澄<sup>ますみのか</sup>鏡、年を「増す」ことも含蓄。ます鏡を見るにつけてもやはり年を重ねた自分の姿にはっと気がつかされる、と詠む。「君みれば塵もくもらでよろづよのよはひをのみもます鏡かな」(後拾遺集・賀・四四二・伊勢大輔)。雑。

24 桑日掛銅鉦<sup>◎</sup>(桑日 銅鉦を掛く) 鈎齋

前句の「鏡」から「桑日」が導かれた。「鏡↓日のまへ」(合璧集)。「桑」は太陽が出るところにあると言わ

れる想像上の木、扶桑のこと。想像上の木のあたりに昇る太陽は、まるで銅鉦を掛けたかのように円い、と詠む。

蘇軾の「嶺上晴雲披絮帽、樹頭初日掛銅鉦（嶺上の晴雲、絮帽を披き 樹頭の初日、銅鉦を掛く）」（東坡先生詩集・一・「新城道中二首」）、『和漢朗詠集』の「雲擎紅鏡扶桑日、春嫋黃珠嫩柳風（雲紅鏡を擎ぐ扶桑の日、春黄珠を嫋む嫩柳の風）」（春・柳・一〇七・田達音）が参考となる。雑。

25 融景蝶春舞（景を融かして蝶 春に舞う） 公木

前句の「銅鉦」の音に合わせて、蝶々が舞う様子を付けて、春の光がぼんやりとする中、蝶が飛んで舞っている、と詠む。「融景」は、光がぼんやりとしている様か。春1（蝶）。

26 かぜにまかせてにほふ花ぶさ<sup>英</sup> 休波

前句の「蝶」は「かぜにまかせて」飛んでいると付けて、風に吹かれるままに美しく照り映えて咲く花房である、と詠む。「蝶↓花ぞの」（合璧集）。韻字は「英 ハ

ナブサ」。春2（はなぶさ）。

27 曙のかすみふくむる小簾の戸に 不省

前句の「はなぶさ」は「小簾の戸」の側に咲いていたものだとして付けて、小簾が夜が明けるところの霞を含む、と詠む。「風↓霞」（合璧集）。「小簾」は簾の美称。また前句「にほふ」は簾の外から内へと花の香りが漂う意へと取りなされた。「さそひくる匂ひ涼しき夕風やこすの外近き軒の橘」（新明題集・夏・一三一七・房輔）。春3（かすみ）。

28 破曉鳥嚶々<sup>◎</sup>（曉を破る鳥 嚶々） 公木

前句の夜明けの静かな叙景に対して、夜明けを告げる鳥が曉の静けさを破るかにように鳴きあっている、と詠む。「嚶々」は鳥が互いに鳴きあっている様で、『詩経』（小雅・伐木）に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶（伐木丁丁として、鳥は鳴く嚶嚶と）」など。雑。

29 枕路郷千咫（枕路 郷は千咫<sup>し</sup>） 鈞齋



前句で夜明けを告げる鳥の声を聞く主体は旅先にいると付けて、郷里から千咫も離れた旅中に草枕を編む。「枕路」は旅先で草枕を編むことか。咫は古代の長さの単位。中国周時代の尺度で八寸（二四・二釐）にあたる。雑。

30 文邊国太平<sup>○●●</sup>（文は邊国を太平す）

公木

前句とは対句で展開し、武力によらない法令による統治を以て千咫も離れているような辺境の地にまで遍く平和に治まっている、と詠む。雑。

31 武きさへはかりごとにはしたがひて

休波

前句の「文」に対して「武」を付けて、武家でさえも策略には忠実に従って、と詠む。『玉屑集』の「ちかひの文は取かはしぬる／はかりごとに隣の国もしたがひて」（五六〇二・幽齋）が参考となる。雑。

32 解臆以酒兵<sup>●●●</sup>（臆を解かすに酒兵を以てす）

鈎齋

前句の「武き」者を「酒兵」で受けて、怒りは大酒飲みを以て鎮める、と詠む。「臆」は仏語で憎み怒ること

で仏道を修する上に最大の障害となるもの。「酒兵」は大酒飲みを戯れて言ったもの。「酒猶兵也、兵可千日而不用、不可一日而不備、酒可千日而不飲、不可一飲而不醉（酒猶ほ兵なり、兵は千日用ひざるは可なれども、一日はざるは不可なり。酒は千日飲まざるは可なれども、一飲して酔みざるは不可なり）」（南史・陳暄伝）。雑。

33 月の前まといはなれぬ秋の夜に

不省

前句の「酒」から団欒の風景を付けて、秋の夜に綺麗な美しい月の前では車座から離れることはない、と詠む。「里わかずたれもねぬよのまといかな月ゆゑならで有明の空」（正治後度百首・三九五・賀茂季保）など。秋1（秋の夜）。

34 菊詩相伴成<sup>●●●</sup>（菊と詩 相ひ伴ひて成る）

公木

前句の「まとい」は重陽の宴であったと付けて、菊（菊）と詠まれた詩を付けて、菊の花と詩の両方があるからこそ「まとい」の場が成り立つのだ、と詠む。「秋↓菊」（合璧集）。秋2（菊）。

35 こゝろをも山路の露に置そへて

休波

前句の「菊」に置いた「露」を付けて、気持ちまでも  
山道に置いた露に添えて、と詠む。「菊↓山路」（合璧  
集）。「露ながらをりてかざさむきくの花おいせぬ秋の  
ひさしかるべく」（古今集・秋下・二七〇・紀友則）。「山  
路」に「菊」が咲くことを詠む歌に「白菊の花さく秋を  
わけてみん山路の露に袖はぬるとも」（延文百首・一六  
五二・二条為重）。秋3（露）。

36 やすらふまゝにさをしかぞ鳴

不省

前句の山道を歩く足をとめると、雄鹿が鳴く声が聞こ  
える、と詠む。「あさあけのすそののきりにたちしほれ  
山ぢいそがぬさをしかのこゑ」（玉葉集・雑・一九六八  
・賀茂重員）。韻字は「鳴 ナク」秋4（さをしか）。

37 巉岩樵佇立（巉岩 樵佇立す）

公木

前句で「やすらふ」主体が当該句では「樵」となり、  
鋭く険しい岩山に樵がたたずんでいる、と詠む。「鹿↓

たゞずむ」（合璧集）。雑。

38 高殿主長生（高殿主 長生す）

鈎齋

前句とは対句で展開し、あの高楼では主上が名前の通  
り長寿を保つ、と詠む。「長生」は驪山の離宮「長生殿」  
のことか。「聖皇自在長生殿、不向蓬萊王母家（聖皇は  
自から長生殿に在せば、蓬萊王母が家に向んなむともせ  
ず）」（和漢朗詠集・帝王・六五七・楊衡）。雑。

39 寂釣娛天上（寂釣 娛みは天上）

江齋

前句の長生殿に住む主を受けて、静かに釣りをするこ  
とは天上の娯楽に等しい、と詠む。雑。

40 水に涼しく月ぞ澄ぬる

休波

前句で釣りをする水辺に映る月の姿を付けて、水面に  
は冴え冴えとした光の月が澄んで映っている、と詠む。  
「水のおもに月の沈むを見ざりせば我ひとりと思ひは  
てまし」（拾遺集・雑・四四二・菅原文時）など。韻字は  
「澄 スム」夏1（涼しく）。

41 茂りあふ柳がもとに雨晴て

不省

前句の月が見えたのは、雨が晴れたからだと付けて、繁茂する柳の下に雨が晴れて、と詠む。夏2（茂り）。

なる。雑。

44 今見へたりし人のまことか

休波

前句の、人に陥れられて流罪に遭った宗杲の胸中として、今、見えたことだよ、それは人の誠意なのか、と詠むか。韻字は「誠 マコト」。雑。

42 旅行蓑笠軽<sup>◎</sup>（旅行 蓑<sup>さり</sup> 笠<sup>ゆ</sup> 軽し）

公木

旅中に身につけていた雨をしのぐための蓑と笠は、晴れたために水気を含まなくなったので軽くなった、と詠む。「雨↓笠、蓑」（合璧集）。雑。

45 約<sup>●</sup>深<sup>○</sup>恩<sup>○</sup>顧<sup>●</sup>浅<sup>●</sup>（約深くして恩顧浅し）

公木

約束は深いものであったが、かけられた情けは浅いものであった、と詠む。「まことかと又おし返しとふほどの人めのひまもなき契かな」（新後撰集・恋三・九五六・後二条天皇）が参考となる。雑、恋1（約）。

43 豈<sup>●</sup>迷<sup>○</sup>梅<sup>○</sup>瘴<sup>●</sup>杲<sup>●</sup>（豈に迷はん 梅瘴の杲）

鈎齋

前句の蓑笠を身につけていた主体を「杲」つまり南宋の禅僧大慧宗杲とみて付けて、どうして迷うことがあるうか、梅陽の地にかかる深い霧の中で、と詠む。「瘴」は、中国南方の海にかかる深い霧のことか。宗杲は朝廷の政争に巻き込まれ流罪となり紹興三十六年に「梅陽」の地に移ったという。「喚背任横拈、瘴面衡梅杲（背と喚んで横拈に任す、面を瘴にす衡梅の杲）」（鳳城聯句集・慶長十八年六月二十一日・四五・有節）<sup>4</sup>が参考と

46 あひ逢とてもまれの盟りぞ

不省

前句の「約」を男女の契りを結ぶ意味で付けて、互いに出会うとはいってもめつたにない宿運であるよ、と詠む。韻字は「盟 チギリ」。恋2（逢）。

47 鴛<sup>○</sup>不<sup>○</sup>同<sup>○</sup>鷗<sup>○</sup>席<sup>●</sup>（鴛は鷗と席を同じくせず）

鈎齋

前句からは「鷗鷺盟」（俗世を離れた交際）が導かれるが、「鴛」は睦まじい夫婦を表現した「鴛鴦の契」のように「鴛」とつがいとなり、「鷗」とは同席しない、と付けて詠んだか。雑。

48 鸞<sup>〇</sup>堪<sup>〇</sup>奏<sup>●</sup>鳳<sup>●</sup>箏<sup>◎</sup>（鸞は鳳箏を奏でるに堪へたり） 公木

前句の「鴛」「鷗」を受けて同じく鳥の「鸞」「鳳」を付けて、五色の鳥で鳳凰に似た鸞は鳳琴の音色に比類する鳴き声を奏でる、と詠む。「銀管吹時鸞発響、玉徽弾処鳳和鳴（銀管吹く時鸞は発して響き、玉徽弾ずる処鳳は和して鳴く）」（江談抄・二六・大江維時）。雑。

49 おさまるに又立かへる世ならまし 休波

前句の「鳳」は瑞兆で聖人の時代に現れる。たとえば『論語』子罕第九「子曰、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫（子曰く、鳳鳥至らず、河、図を出ださず。吾已んぬるかな）」、集注に「鳳、靈鳥、舜時来儀、文王時鳴於岐山」とある。昔の秩序ある状態に戻る世の中であつてほしい、と詠む。雑。

50 上中しもやなへてさかへん<sup>榮</sup> 不省

前句でうまく「おさまる」ような世の中は、身分の上中下の等級に関係なく世の全ての人が等しく榮えるのだろう、と詠む。『伊勢物語』八二段に「枝を折りてかざしにさして、かみなかしもみな歌よみけり」、「きこえあげて上中下のことはも恵にもれぬ君が代の春」（新明題集・春・五八・日野弘資）など。韻字は「榮 サカフル」雑。

51 嵩<sup>〇</sup>三<sup>〇</sup>呼<sup>〇</sup>萬<sup>●</sup>歲<sup>●</sup>（嵩は三たび萬歳を呼ばふ） 鈞齋

嵩は中国洛陽東南（河南省登封県）の嵩山。五岳の一。漢の武帝が登ると万歳の声が聞こえたとの故事による（漢書・武帝紀）。前句のように、人々が等しく恩恵を受けられるように榮えた地では、天子の統治を祝して上中下がそれぞれ万歳を唱える、と詠む。雑。

52 周<sup>〇</sup>舊<sup>●</sup>矩<sup>●</sup>新<sup>〇</sup>正<sup>◎</sup>（周は舊矩にして新正） 公木

前句が漢であるので周としたか。「萬歳」を新年の正

月を賀する意で付けて、周では昔ながらの古い矩のりで新年を迎える、と詠むか。春1（新正）。

遊」（和漢朗詠集・下・「晴」・四一五・不知）。春4（遊絲）。

53 さえどし冬はいづらは春のきて

不省

前句の「新正」を受けて新年を迎えて春の気配を感じると付けて、非常に冷えた冬はどこに行つて春が来たのか、と詠む。春2（春のきて）。

56 ものゝ音をしもたれかあ争らそふ

休波

前句の「絲」から琴糸を連想させて、楽器の音色を表す「ものゝ音」を付けて、聞こえてくる楽器の音色は誰が張り合つて奏でているのか、と詠む。『源氏物語』桐壺巻に「かうやうの折は、御遊びなどせさせ給ひしに、

54 水もみどりにこの川や榎なぎ

休波

前句で来た春を受け、具体的な春の水辺の様子を付けて、川柳の葉の緑は水面をも緑色にした、と詠む。韻字は「榎 カハヤナキ」。春3（川やなぎ）。

心ことなる物のねをかき鳴らし」と楽器の音として表現される。韻字は「争 アラソフ」。雑。

55 遊〇〇和〇〇暖●●乱●●（遊絲 和暖 乱れり）

公木

前句「川やなぎ」「みとり」から「遊絲」が導かれて、陽炎によって穏やかな天氣が乱れる、と詠む。「初筍篁

57 人見えぬゆふべきびしき宮所

「宮所」は宮殿、または神社。前句で誰かが奏でる楽器の音は聞こえるが、人の姿は見えないと付けて、人の姿が見えない夕べは物寂しい宮殿だ、と詠む。雑。

不省

辺出、遊絲柳外飛（初筍篁 辺に出づ、遊絲 柳 外に飛

58 よりし面かげたつ眞木楹

休波

ぶ）（経国集・一一・「暇日閑居」・良岑安世）、「かすみ晴れみどりの空ものどけてあるかなきかにあそぶ糸

『源氏物語』眞木柱の巻が連想される。「今はとて宿離れぬともなれきつる眞木の柱は我を忘るな」によれば、

髭黒が退去していった妻子を思う心境となるが、むしろ杜牧の「夜深台殿月高低、何人為倚東樓柱（夜深くして台殿に月高低す、何れの人か為に東樓の柱に倚る）」（三体詩・一・「寄題宣州開元寺詩」）も想起か。前句の宮殿から、真木の柱を付けて、凭りかかった人の面影が幻視される、と詠む。「宮↓桂」（合璧集）。韻字は「楹ハシラ」。雑。

59 月下門敲否（月下 門敲くや否や）

公木

詩中の表現において月下に門を敲くか推すべきか吟味する、と詠む。「桂↓門」（合璧集）。一句は唐の詩人賈島の故事に基づく。「細素雜記曰、賈島於ニ京師一騎レ驢得レ句。鳥宿池辺樹、僧敲月下門。始欲レ著ニ推字一。又欲レ著ニ敲字一、鍊レ之未レ定」（唐詩紀事「苕溪漁隱叢話」）。秋1（月）。

60 溪頭霧自横（溪頭 霧自ずから横たふ）

鈞齋

前句とは対句で展開した。谷川のあたりには霧が立ち込めている、と詠む。秋2（霧）。

61 ひととおりの秋風ゆきて暮る日に

休波

前句の「溪頭」あたりには、暮れ方にさつと通りすぎる秋風が吹いて、と詠む。秋3（秋風）。

62 色づくまゝの水の萃

不省

前句の「秋風」で流される水上の浮き草は紅葉が進んでいく、と秋の深まる様を詠む。「あさぢはら色づくまに虫の音もかれがれにこそ成りまさるなれ」（寂蓮集・三八）。韻字は「萃 ウキクサ」。秋4（色つく）。

63 老涯居不穩（老涯 居 穩やかならず）

鈞齋

前句の浮き草のように、年を重ねても住まいは穩やかに定まることはない、と詠む。雑。

64 山もとちかき市そノ、ハ、シる

休波

前句で老人が隠居する山の麓には市場が立ち、麓に近い市場では人々の喧騒が響き渡る、と詠む。市場の近くに住むので「穩やかならず」と前句の原因が付く。韻字

は「匄 ノ、シル」。雑。

65 嵐○○○●●浮○帰○袖○動●（嵐は帰袖を浮かして動かす） 公木

前句の「市」にいる人々を「袖」の表現で受けて、嵐が吹いて市場から帰る人々の袖をまくり上げる、と詠む。雑。

66 さかりのほどは見し家櫻 休波

前句の「袖」は家の桜を見に来た人のそれとして付けたか。家に植えてある櫻の盛りのほどは分かった、と詠む。花の盛りの程度を詠む歌に「風にほひ雨に色そふ花よげにさかりのほどにちる陰はなし」（雪玉集・六四八七・姉小路基綱）。韻字は「櫻 サクラ」。春1（櫻）。

67 知○○○●●花○開○落○執●（花開き落つること孰れかを知る） 鈎齋

前句の「櫻」から「花」が導かれ、花が咲くか落花するかどちらであるかを理解する、と詠む。春2（花）。

68 かすめる比はこゝもみやこか 不省

前句の「花」を受けて、春霞がかかるころにはここも花の都になるのだろうか、と詠む。「花↓都」（合璧集）。韻字は「京 ミヤコ」。春3（かすめる）。

69 さゞなみや志賀津の春もたつぬらん 休波

前句の「みやこ」を当該句では近江大津宮に定めて、志賀の津の春の古京も訪ねたのだろう、と詠む。「都↓志賀」（合璧集）。「さゞなみや」は枕詞。「さゞ浪や志賀の花ぞのみるたびにむかしの人の心をぞしる」（千載集・春上・六七・祝部成仲）。春4（春）。

70 香○○○●●輪○處○々○轟◎（香輪 處々に轟く） 公木

前句の志賀津に訪れた春の景色を見るために乗った美しい車の車輪の音が辺りに大きく響く、と詠む。「香輪」は美しい車のこと。「香輪莫輾青青破、留与遊人一醉眠（香輪青青を輾き破ること莫れ、遊人に留与して一たび醉眠せしめよ）」（三体詩・一「曲江春草」・鄭谷）。雑。

71 獵○○○●●塵○群○晚○嶺●（獵塵 晩の嶺に群がる） 鈎齋

前句の「香輪」が通る際に立てた「塵」を付けて、狩  
獵で生じた塵や埃が晩の山の頂き辺りにたまる、と詠む。  
雑。

72 仁草●●○◎ 會阮に泛ぶ

公木

前句とは対句で展開し、海人草は茶の産地たる會阮に  
浮かぶ、と詠む。「仁草」は海人草という海藻。「會阮」  
は茶の産地で転じて茶名。黄山谷の詩に「茗花浮會阮（茗  
の花は會阮に浮く）」とある（『韻府群玉』巻七「阮」  
所収）。雑。

73 禪定●●●○ 睡魔 屈す

鈎齋

前句の「會阮」で取れたお茶を飲むことで、座禅によ  
る仏道修行中の睡魔を屈服させる、と詠む。雑、釈教。

74 えがたき法に身をぞ驚く

不省

前句の「禪定」から「法」を導き、有難い仏法に我身  
ははっと気付かされる、と詠む。「薪こりみねのこのみ  
をもとめてぞえがたきのりはききはじめける」（玉葉集

・釈教・二六六二・藤原俊成）が参考となる。韻字は「驚  
ヲドロク」。雑、釈教。

75 驅●●●○◎ 景馬蹄疾 馬蹄疾し

公木

前句の「身をそ驚く」理由を、眼前の景色の中で馬蹄  
が疾走するためと詠むか。「法↓馬」（合璧集）。雑。

76 近●●●○◎ 望 兔記盈てり

鈎齋

前句とは対句で展開した。「馬↓兔」（合璧集）。「兔  
記盈」は満月のことか。「夢辺蛩作崇（夢辺蛩崇を作す）  
／身事兔之盈（身事兔盈ち之く）」（享祿元年閏九月四日  
和漢百韻・三九・帥）。一句は、近くに望むのは満ちた  
月だ、と詠む。秋1（兔記）。

77 しぐれしも秋のなかばの空すみて

不省

前句の月は時雨が上がった空に浮かぶと付けて、時雨  
が降っても秋の半ばの空は澄んで、と詠む。秋2（秋）。

78 爽●●●○◎ 氣石金鏗 石金の鏗（こう）

公木



前句の澄んだ秋空を受けてそこに吹く爽やかな空気は  
まるで石金の澄んだ音（鏗）が響くかのようだ、と詠む。  
「時雨↓良寒（爽氣）」（合璧集）。「爽氣」は秋に吹くひ  
やかな風のことで「満楼爽氣向残更、乞巧夜灯影尚明  
（楼を満たす爽氣向残り更く、乞巧の夜灯影尚ほ明らか  
なり）」（再昌・一五三六）など。秋3（爽氣）。

79 滴涙縫衣妾（涙を滴らして 衣を縫う妾） 同

前句の「鏗」を「うつ」と訓じて砧を擣つ意に取りな  
し、男性を待ちながら涙を流して衣を繕う妾の姿を詠む  
か。雑、恋1（涙）。

80 もじには見せじたゞはつらき名 休波

前句で妾が涙を流した理由を付けて、書きつけた文字  
には見せない、ただ辛いだけの浮名を、と憂き恋の心情  
を詠む。韻字は「名 ナ」。雑、恋2（つらき名）。

81 読をくもうたてはづかしことたらで 同

前句でしたためられた文字は書き置きされた和歌と定

めて、書き記された和歌の出来も恥ずかしく言葉足らず  
で、と詠む。「読をく」は、時代は下るが貞門の俳諧集  
『時勢粧』第四に「面白や読置歌のこころごころ」（三  
五二二）とあり、参考となる。雑。

82 なにのうへにもたえやらぬみち 不省

前句の和歌の不出来を受けて和歌の「道」を導き、ど  
んな人にも等しく能力が保証される和歌の道はない、と  
詠むか。「天地やなにの上にもくる春の色を千種にかす  
む山かな」（草根集・三二七）。韻字は「彭 ミチ」。雑。

83 茅颯風蹙雨（茅は颯み 風と雨に蹙む） 鈎齋

前句の「道」を抽象的な意味から具体的な通り道とし  
て取りなして、道に生える茅はしぼみ、さらに風や雨に  
より萎れる、と詠む。秋1（茅）。

84 友ならむ月も遅き在明 休波

前句の風と雨が止んだと受けて月が現れたと付けて、  
月は明け方近くまで見えていて、まるで友人のように側

にいてくれる存在である、と詠む。韻字は「明 アキラカ」秋2（月）。

85 山の端にまたれぬ秋の鴈なきて

不省

前句の「月」から「山の端」が導かれ、山の稜線では人から待たれない雁が鳴いていて、と詠む。秋3（秋の雁）。

86 蘭叢幾露緋◎（蘭叢 幾ばくの露の緋）

鈎齋

前句と同じく秋の景を付けて、蘭が繁る草むらでは一体いくつの露が緋の模様をなしているのか、と詠む。「露滴蘭叢寒玉白、風銜松葉雅琴清（露蘭叢に滴だて寒玉白し、風松葉を銜んで雅琴清し）」（和漢朗詠集・秋・露・三三九・英明）。秋4（露）。

87 清無瑕玉貞●●（清は瑕無き玉貞）

公木

前句の「露」の美しさは瑕一つないほどだと付けて、清いものは傷一つない美しい顔である、と詠む。「露↓玉」（合璧集）。雑。

88 酌有●●●◎好黄精◎（酌は好有る黄精）

鈎齋

前句とは対句で展開した。「黄精」とは「黄精鹿」という薬草の意。蘇軾に「幽人只採黄精去、不見青山鹿養茸（幽人只だ黄精を採りて去り、青山の鹿を見ずして茸を養ふのみ）」（東坡先生詩集・二七「黄精鹿」とある。一句は、媒酌するのによいのは黄精鹿という薬である、と詠む。雑。

89 柴はしのしばしやすらふ袖こえて

休波

前句で媒酌するのは休憩をする時だと付けて、柴橋のたもとでは、暫く休憩をとった人の袖を越えて、橋の下を流れる川波がかかる、と詠むか。「行く水にうきてただよふ柴橋も今朝は氷のかげやすむらん」（称名院集・八六六）。雑。

90 暮行まゝにいそぎぬるツエ根

不省

前句で暫く休んでいたなら早くも日が落ち始めた付けて、夕暮れ時に急いでいるのは帰りを急ぐ人が持つ杖で

ある、と詠む。韻字は「根 ツエ」。雑。

91 我屋村春近 (我屋 村の春に近し) 鈎齋

前句で足早に目指して帰った家を付けて、その家は村が迎えている春と近い、と間もなく春がやってくることを詠む。冬1 (春近)。

詠む。「霧↓紅葉」(合璧集)。秋2 (霧)。

95 風冷帰帆鬧 (風冷ましくして 帰帆さわがし) 公木

前句の楚江を行く船の帆を付けて、風の勢いは荒々しく、港に帰る船の帆は騒がしげに靡いている、と詠む。秋3 (冷まし)。

92 雅筵涼句廣 (雅筵 涼しくして句廣つぐ) 公木

前句とは対句で展開した。ひややかで快い筵の上では句をついでいく、と詠む。夏1 (涼)。

96 ゆふべになれば山もさがし嶮き 休波

前句の「風冷」を受けて、風の勢いも山の険しさも夜になるといよいよ荒くなると付けて、山も盛んになると詠む。「山山のさがしき道をすぎゆけば河にぞつれてかへる下淵」(蓮如上人集・五山山)。韻字は「嶮 サガシ」。雑。

93 月をうかべ紅葉をながす秋の水 休波

前句の筵の上で眺める「月」を付けて、秋の水はその水面に月の姿を浮かべ、紅葉の葉を流す、と詠む。秋1 (月)。

97 花見はと日たくるころに立出て 不省

94 霧霽楚江宏 (霧霽れて 楚江宏し) 鈎齋  
前句の「秋の水」は具体的には「楚江」(長江)であったと付けて、霧が晴れて、広大な長江が姿を現した、と

と日が高くなったころに出発して、と詠む。「日たくる」は日が高くなる意で歌例は僅かだが「しら露の日たくるままに消えゆけばくれまつわれもいかたとぞ思ふ」(玉

葉集・恋二・一四五・藤原朝光が参考となる。春1  
(花見)。  
た。そうした春の景色の中で行われる宴席では数々の詩  
が吟じられた(吟料夥)ことを詠むか。春3(霞)。

98 春遊路○転●榮◎(春遊 路にうたためぐ転たためぐ榮る) 公木 100 長閑にをくる時のただ貞しき 不省

前句の「花見」から「春遊」が導かれ、春遊では路々  
で寄り道をしながら散策する、と詠むか。春2(春遊)。  
前句のように霞がたなびく中で詩を吟じて、穏やかに  
過ぎす時は道德に則っている、と詠む。韻字は「貞 夕  
ダシ」。春4(長閑)。

99 彩霞吟料夥●(霞を彩る 吟料夥し) 鈎齋

前句の「春遊」の季節を受けて、空にかかる霞を付け

## 注

1 史料纂集古文書編『別本歴代古案』第五卷、八木書店、二〇〇二年。

2 「上杉家文書」九六九「直江重光繼筆五山衆等詩」、島森哲男「直江兼統漢詩校釈」(宮城教育大学紀要51巻、二  
〇一七年)参照。

3 『睡余小録』上所収「惺窩先生義絶置文」に「態一筆書置候、天正十六年戊子拙(清叔壽辰)老至于越後之砌、自然於田舎  
令死去候ハ、当院門中無人之条、取立弟子相続之義、頼入之旨、雖為他門、以一筆宗舜首座(惺窩)ニ申置候、然  
所文禄元年壬辰十月無異儀上洛仕候、其已後舜首座致拙老条々不相届緩怠之子細有之故、絶親類之好、令不会候、

文禄二年二月舜首座名護屋〔江〕被下候剋、六条宥西堂和睦之義様々雖被相扱候、拙老対面不申候、」とある。

4 楊昆鵬「『鳳城聯句集』訓注稿(九)」(京都大学国文学論叢44号、二〇二一年)所収の第45句「瘴面衡梅杲」は当該句と類似する。

はじめに

本節では、永青文庫蔵「漢和聯句」一巻を取り上げる<sup>1)</sup>。天正十六年（一五八八）五月八日、兼続が上洛した際に興行されたものである。

本作品の存在については、主に、土田将雄氏『細川幽斎の研究』、中澤肇氏「文化人としての兼続」、大島富朗氏「細川幽斎和漢・漢和聯句」、鶴崎裕雄氏「直江兼続・大國実頼兄弟と寄合の文芸」、竹島一希氏ほか「天正十六年閏五月八日張行漢倭聯句―翻刻と解題―」において指摘される<sup>2)</sup>。だが、大島氏・竹島氏は、本作品全文の翻刻を掲載する<sup>3)</sup>が、その他は発句から十二或いは十三句までを掲げるのみで、百韻全部の正確な翻刻がなされていない。しかしながら、前述の先行研究は、本作品が何故翻刻をする資料に値するのかという資料的価値への言及に乏しい。また、書誌事項を明記していない点、連衆のうち特定の人物のみの略歴を記しているのみである点、本作品前後の史実上の動向に詳しくない点、作品の読解にまで至っていない点に課題が残される。

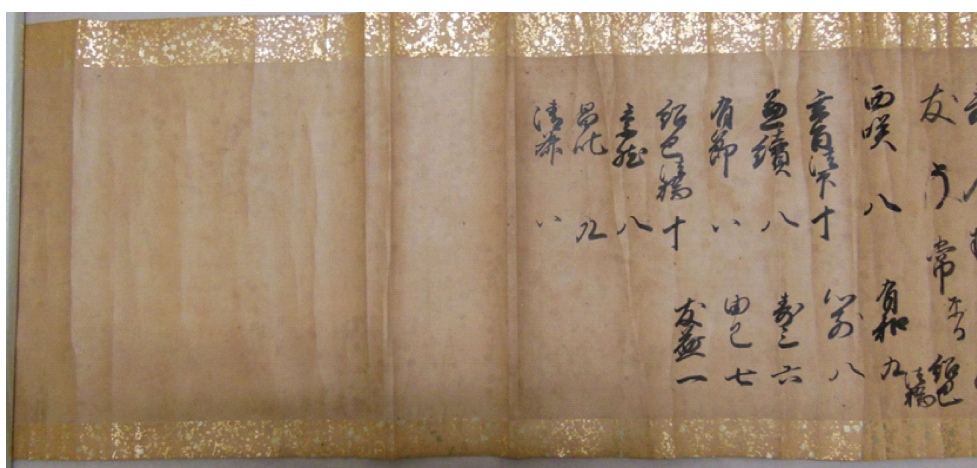
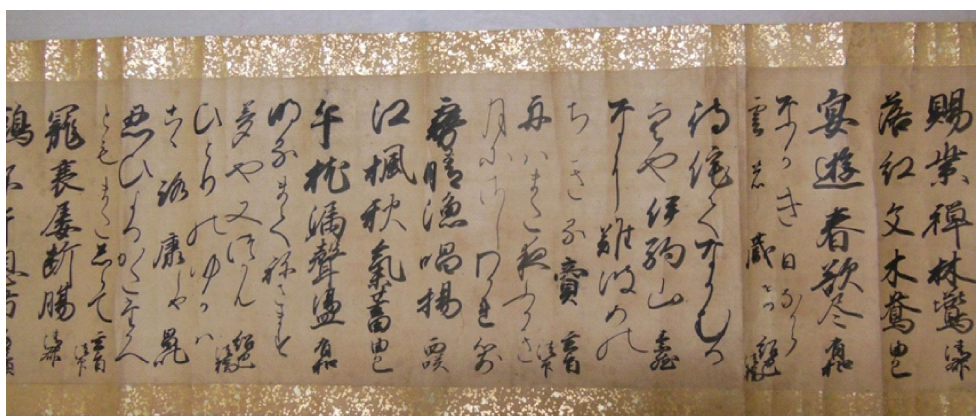
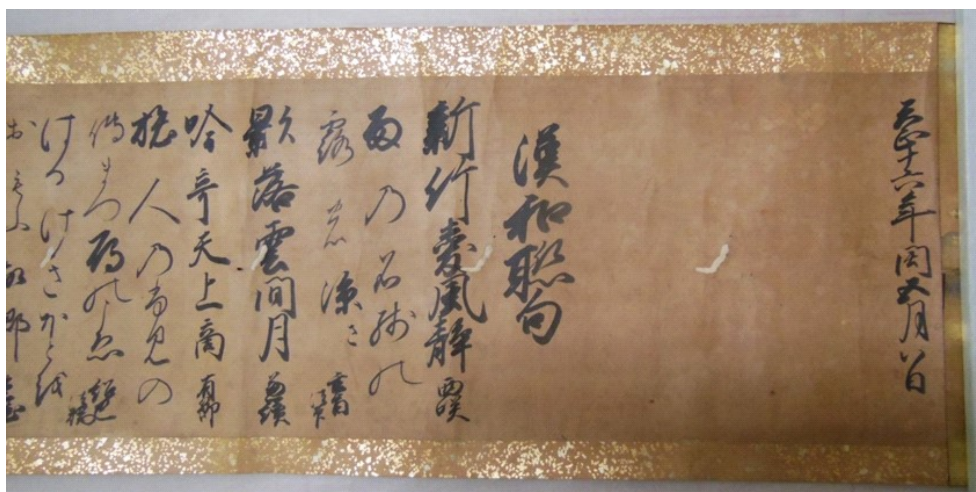
そこで本章の主な目的を次の三点に定める。①今回、稿者は本作品を閲覧する機会を得たので、原典を改めて忠実に翻刻した本文を全文掲げる。②書誌事項、興行時期、連衆の略歴について考察を加える。③本聯句の略注を試み、今まで分析されることがなかった本作品の創作面における全体的な特徴及び傾向などを探る。

## 一、底本書誌

底本の書誌を記す。また、本作品の端作り・第1句〜第5句、第64句〜第74句、句上げの図版を後掲する。

写本。永青文庫蔵。目録書名「漢和聯句」、整理番号(旧)「丑六印―四番」、(新)6735。紙付箋には赤字で「108の5の20」。卷子装一軸。外題なし。端作「天正十六年閏五月八日／漢和聯句」。「江戸初期」写。保存状況は、虫損あり。但し文字の判読に支障なし。箱入り。箱書は「漢和連句／西笑章句／泰勝院殿御入韻」。蔵書印なし。序跋なし。原懐紙を卷子に改装。緞子花卉散表紙。軸見返しには金銀泥に唐草、沙石、雲の文様。裏打ちは金銀の切箔が散らされた装飾。本文料紙は楮紙。卷子全体の寸法は、縦一七・四糎×横四一・七糎。ただし、裏打ちの紙の法量を含めると縦は二一・五糎。懐紙各紙の横寸法は、第一紙・五一・二、第二紙・五一・九、第三紙・五一・四、第四紙・五一・六、第五紙・五一・三、第六紙・五一・五、第七紙・五一・四、第八紙・五一・四糎。字高一三・五糎。下絵、見せ消ち、書入れ、絵なし。擦り消し間々あり。特に韻字に多く見られる。筆跡は、執筆の速水友益か。

上段…端作、第1句～第5句 中段…第64句～第74句 下段…句上げ





二、翻刻

天正十六年閏五月八日

漢和聯句

- 1 新竹愛風静
- 2 雨の名残の露の涼さ
- 3 影落雲間月
- 4 吟哥天上商
- 5 旅人のふみの傳まつ雁のこゑ
- 6 はるけきほとをおもふ故郷
- 7 みし夢も絶もてきての草枕
- 8 衣薄覚厳霜
- 9 春浅蝶車涉
- 10 かすみもあへぬ野ちの傍
- 11 山はまたきゆるともなく雪降て
- 12 簾罅翠嵐彰
- 13 軒ちかき松の葉分の夜はの月

- 西咲
- 玄旨法印
- 兼統
- 有節
- 紹巴法橋
- 素然
- 昌叱
- 清叔
- 一初折才
- 有和
- 心前
- 寿三
- 由己
- 友益

- 14 鐘響入秋堂
- 15 夕霧におこなひ人やかへるらん
- 16 沙砌履念忙
- 17 何去失群鷺
- 18 時雨きにけるなみの颯
- 19 舟はたゝ山ふところに漕とめて
- 20 瀧のなかれをとむる花の香
- 21 霞簇埋佳境
- 22 雲過耕富陽
- 23 さひしさや世をのかれての庵ならん
- 24 むかしの友も夢のあさ床
- 25 別後月添恨
- 26 きぬたのころもをとつれは亡
- 27 胸霧幾時散
- 28 眼波雖陸汪
- 29 地卑逢故少

- 西咲
- 玄旨法印
- 兼統
- 有節
- 紹巴法橋
- 素然
- 昌叱
- 清叔
- 有和
- 一初ウ
- 心前
- 寿三
- 由己
- 西咲
- 有節
- 兼統

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37		36	35	34	33	32	31	30
若達金諾土	合歡既醉觴	たのしみも琴笛の音にあらはれて	おさまるほともいかに唐	如天堯廣徳	群臣仰聖王	たひ／＼に宿直まうしの声たてゝ	入かたほそき月は弓張	ひもやゝさむさそひぬる夜はの霜	近聴處々蟹	駒なへて秋の花野をわけくらし		しゐてひかふるきぬは芳	人妻のつれなきもなをゆかしくて	中たちにさへしのお玉章	こゝろたゝつたへぬこそはつたへなれ	参門拝瞻洋	仕途辛苦蜀	さすらへきつゝ住ゐる方
兼統	由己	心前	玄旨法印	清叔	西咲	昌叱	紹巴法橋	素然	有和	寿三	一 二才	心前	玄旨法印	昌叱	紹巴法橋	清叔	有和	素然
	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51		50	49	48
	なかき日なから雲の藏せる	宴遊春欲尽	落紅文木鴛	賜紫禪林燕	陸座祖提綱	開窓童檢卷	むかふ日かけにさむさ忘る	野分めく風しつまれば飛こ蝶	露明園未荒	月黒村難認	こゑはそこともあらぬさを響	秋もはや朝のはらの一時雨	里はめぐりのやまのかた岡	春くれは田面に水をせきわけて		短堤種柳長	遠寺尋花近	つくるほとけにおもふ粧
		有和	由己	清叔	有節	西咲	寿三	昌叱	兼統	有和	素然	玄旨法印	心前	紹巴法橋		西咲	有節	昌叱
	一 三才													一 二ウ				

65	待侘てなかむる空や伊駒山	素然
66	なに難波めのちきる <b>賣</b>	玄旨法印
67	舟はまた夜ふかき月にさしわかれ	心前
68	霧暁漁唱揚	西咲
69	江楓秋氣蓄	由己
70	午枕漏聲盪	有和
71	明るまてねさます夢や又つかん	紹巴法橋
72	ひとりのゆかはころ康しや	昌叱
73	忍ひよるかたかへともまたしらて	玄旨法印
74	寵衰屢断腸	清叔
75	鷗不千恩者	兼統
76	馬依馳志良	有節
77	老の身も千里の花を行てみる	紹巴法橋
78	かすみこめたる山を望める	寿三 一三ウ
79	帯暖進樵歩	西咲
80	むらのかたへにつく草墻	素然
81	遁喜無温問	清叔
82	宮つかへけんことぞ惶る	紹巴法橋
83	顧吾三不軾	有和
84	宿にうつしてふかき篋	昌叱
85	春秋のあはれもいかにけさの雪	心前
86	景晴瘦杖償	有節
87	五湖詩界窄	由己
88	隻日墨雲翔	兼統
89	にはかなる嵐に雨のきほひ来て	寿三
90	ひいてにけりな小田のわか秧	玄旨法印
91	水清涵月色	有節
92	なみのまに／＼なをくつれ梁	心前
93	冷しく成つゝ春も瀧つ川	一名残才
94	山嶮奈神傷	素然
95	鞋為探花秣	由己
96	茶如酌杏嘗	有和
97	かくれかはかすむ市ちの一かたに	清叔
98	ぬすたつ鳥の跡とむる <b>獫</b>	昌叱
99	豈空風致會	玄旨法印
100	哥のむしろの友そ常なる	兼統 紹巴法橋

西咲	八	有和	九	紹巴法橋	十	友益	一
玄旨法印	十	心前	八	素然	八		
兼統	八	寿三	六	昌叱	九		
有節	八	由己	七	清叔	八		

### 三、連衆

懐紙に記される名を掲げた後、通行の姓名を記した。年齢は興行時のものを記した。

〔漢句作者〕

- ・兼統。直江兼統。上杉家の家宰。山城守。二十九歳。
- ・西笑。西笑承兌。臨濟宗夢窓派。天正十三年鹿苑院主となる。豊臣秀吉・徳川家康の政治顧問として仕え、寺社行政と外交通商文書を作成した。四十二歳。
- ・有節。有節瑞保。臨濟宗僧。京都南禅寺をへて、慶長十二年相国寺鹿苑院にはいる。四十二歳。
- ・有和。有和寿筠。臨濟宗僧。生没年未詳。兄は宗桂（角倉了意の父）。京都竜安寺養花院住職。
- ・清叔。清叔寿泉。七十三歳。臨濟宗僧。儒学者藤原惺窩の叔父。目録では「清斎」と記される<sup>4</sup>。
- ・由己。大村由己。儒僧。軍記作者、豊臣氏御伽衆。生没年未詳。相国寺の仁如集堯について仏教・漢詩を、諸家を尋ねて和歌・連歌を学ぶ。御伽衆の一員として秀吉に近侍。

〔和句作者〕

・壽三。木戸元齋。上杉家の客將。歌人。沙弥休波。もと羽生城主木戸忠朝の次男で、木戸氏滅亡後、越後に亡命した。兼統と行動を共に詩『師説撰歌和歌集』を授ける。佐河田昌俊を養子とする。四十歳か。

・玄旨法印。細川藤孝。大名・歌人。号は幽齋。若くして歌道に志し三条西実枝より『古今和歌集』の秘訣を受けて二条家歌学の正統をつたえる。五十四歳。

・昌叱。里村昌叱。連歌師。昌休の子。父の門人紹巴に養育される。「毛利千句」など、多くの連歌や和歌会に出座。里村南家の祖。五十一歳。

・紹巴法橋。里村紹巴。連歌師。宗養没後、連歌界の第一人者として活躍。三条西公条に師事。近衛植家・三好長慶・細川幽齋・明智光秀・豊臣秀吉・大覚寺義俊・聖護院道澄ら多数の貴人と交流。六十五歳。

・心前。僧・連歌師。紹巴の側近となり多くの連歌に参加。本聯句会の翌年、天正十七年に死去か。

・友益。速水友益。地下官人・連歌作者。下北面。越中守武益の次男。連歌作者として天正三年に初めて名が見え、紹巴・昌巴としばしば一座。三十三歳。

・素然。中院通勝。公卿。中院通為の子。母は右大臣三条西公条の女。天正七年（一五七九）権中納言兼侍従、正三位となるが、翌年正月官を辞す。その六月には勅勘をこうむり、丹後国に出奔。同十四年八月十三日出家し素然と改め也足軒を号した。慶長四年（一五九九）赦されて京都にもどる。三十四歳。

連衆は、連歌師紹巴周辺の人物（紹巴・昌叱・心前）、豊臣氏に用いられた人物（幽齋・友益・由己）、五山の学僧（西咲・清叔・有節・有和）、上杉家にゆかりある人物（兼統・元齋）で構成される。中澤氏は「兼統は連歌史または文化史に名をとどめている人たち」と共に百韻を結んでいると評価するが、右記に挙げた連衆の顔ぶれは、まさ

にその評に値する。また、兼続と勅勘を被っている最中とはいえ、公卿通勝が兼続と同座するのは初めてのことに。出奔先の丹後国田辺城に隠居していた細川幽斎について『古今和歌集』などを学んでいた縁で、参加したのだろう。さらに、句を詠んだ順番が、「西笑↓幽斎↓兼続」である点にも注意したい。発句を詠んだ西笑が客人であり、脇句の細川氏がこの会の主催者、そして、それに続くようにして三番目に兼続の名が見られる。このことは、兼続が西笑、幽斎に次いで力を持ち、越後の地方大名の執政という立場でありながらその存在は小さなものではなかったことを窺わせる。

#### 四、注釈

##### 1 新竹愛風静

（新竹 風 静なるを愛づ）

西咲

としている様子。「竹」との取り合わせでは『點鐵集』に「霧涼花斂夕、風静竹含秋（霧涼しくして花斂む夕、風静なり竹含む秋）」がある。夏1（竹）。

当聯句会が興行された京都細川邸の庭に植えられた竹を称賛し、挨拶とし、今年生えた竹は、風が止んでしんとしている様子を楽しむ、と詠む。「新竹」は、今年生えた竹のこと。「欹枕落花餘幾片、閉門新竹自千竿（枕を欹（そばだ）て落花餘ること幾片か、閉門の新竹自ずから千竿）」（集註分類東坡先生詩・十五「贈惠山僧惠表」）、「新竹最中雨霽初、窓前洗得晚涼除（新竹最中に雨霽れ初め、窓前に洗ひ得る晩れに涼除く）」（再昌草・洗竹迎涼・一八〇〇）。「風静」とは風が止んでしん

##### 2 雨の名残の露の涼さ

玄旨法印

前句で風が静かに吹いて、竹の葉から零れる露の涼しさで付けて、（竹葉に置く）雨の後に残る露の涼しさ、と詠む。「風↓こぼるゝ露」（類船集）。また、前句の「風」が「涼」しいとも付けたか。前句の「竹」と当該句の「露」の縁が認められる和歌に「檐ちかき竹のみどりの色までもまだ朝あけの露ぞ涼しき」（嘉元百首・昭慶門院一条

・二五八一)など。「雨の名残の」とは雨は止んだがその露が残っている様。その露が涼しいという表現は和歌では、「しげりあふきしのみどりのいろそへて雨のなごりの露ぞすずしき」(俊光集・新樹・一二八)に、連歌では「秋ちかくなる雲のむらむら／すずしさや雨の名残の露ならむ」(天正年間百韻・「ききわくや」・七)などのように詠まれる。韻字は涼(スゞシ)(漢和三五韻、以下は略す)。韻字は下平声第七の陽唐韻に定まる。夏2(涼しさ)。

3 影落雲間月

(影落つる雲間の月)

兼続

前句の「雨」が止んで、「雲間」から月が見えると付けて、(雨が止んで)地上に光を差し込むのは雲間から現れた月である、と詠む。感覚として感じた前句の「涼さ」を、当該句では月の光の涼しさであると読み換えた。また、「秋かぜの露ふきむすぶ竹のはにきよくもすめる夜半の月かな」(林葉集・秋・四三八)の歌例のように、露に月影が映っていることを言い、前句と付いた時、「影落」先が「露」であるという関係となるか。「影落」は

月の光が地上などに差し込むこと。「夜深影落寒潭月、水底武侯眠未驚(夜深くに影落つる寒潭の月、水底に武侯の眠り未だ驚かず)」(翰林五鳳集・臥龍梅・仲芳)。「雲間月」は雲の間から姿を現す月。「皎皎雲間月、灼灼葉中華(皎皎たる雲間の月、灼灼たる葉中の華)」(淵明集・擬古九首 其七)。和漢聯句に「荻の葉のみだれそふ野は霧籠て／雲間月未円(雲間の月未だ円ならず)」(天正十三年三月十二日和漢聯句・五八・有和)の用例が見出される。秋1(月)。

4 吟哥天上商

(吟哥 天上の商)

有節

対句で付ける。前句の「月」が現れる場所(天上)の様子で付けて、吟じ、歌う、空の上の秋、と詠む。「吟哥」は歌、詩などを吟じること。「商」は「秋」のこと。「風吹時漏樹間影、一葉落知天上秋(風吹き時漏らす樹間の影、一葉落ちて天上の秋を知る)」(翰林五鳳集・梧軒待月・彦龍)。韻字は商(アキ・ハカル・アキビト)。秋2(商)。

5 旅人のふみの傳まつ雁のこゑ

紹巴法橋

前句の「天上商」を感じさせるものは「雁のこゑ」である。と付けて、旅人が手紙を伝えるにくる人を待っているが、（その頭上では）雁の声がする、と詠む。「傳」は宿場で中継ぎして旅客や手紙を送りとどけること、またその人や馬のこと。「旅なるをまちよわりての物思ひ／ふみのつてさへたえはてにけり」（大原野十花千句・第四何船・六〇）。「ふみ」と「雁」を組み合わせた連歌例に「身を半空に人やなすらむ／ぬししらぬふみのつかひのかへる雁」（紫野千句・第二何木・七三）。秋1（雁）。

6 はるけきほどをおもふ故郷

素然

前句の旅人の心の内で付けて、（旅人は旅先で）遠くに隔たった故郷に思いを巡らす、と詠む。「古郷↓旅」（類船集）。「はるけきほど」はある対象が空間的に遠くにあること。「学びこしいづれの道もいそげひと／はるけき程ぞやまともろこし」（嘉吉年間百韻・何木・一六）。故郷のことを懐かしみ思いやるが、それは遠くにあると

いう趣向は和歌に、「秋風にけふしら川の関こえておもふも遠し故郷の山」（新拾遺集・羈旅・後九条前内大臣・七八四）とあり、当該句の発想と類似する。韻字は郷（サト ムカフ）。雑。

7 みし夢も絶もてきての草枕

昌叱

前句の「故郷」を思いやったのは夢の中であったと付けて、見た夢も、目が覚めて途絶えては、また眠りに落ちて夢がやって来てということを繰り返す旅先の眠り、と詠む。「草枕おもひねにみる古郷の人はいかなる夢むすぶらん」（新統古今集・羈旅・九八二「旅宿夢」・権大僧都堯尋）は、前句との付け方の発想が類似する。5句目から旅に関する句が続き、発想の変化に乏しいか。「みし夢も」は見た夢も。「いまだにつらき人の面影／みし夢もさめての後はかひもなし」（天正四年万句・第六千句・第二何船・一五）。「絶えもてきての」は途絶えては、またやって来るという意か。ここでは、目が覚めて夢が絶えては、また眠りについて夢がやって来るという意となるか。当該句の「絶もてきての」の表現と類



似する連歌例に、「絶えねうきこひにかかれるたまのをよ／とだえもてくる契りもぞうき」(老耳・二六四八)が見られるが、和歌には確認できない。雑、旅。

8 衣薄<sup>○●</sup>覚<sup>○</sup>厳霜<sup>◎</sup>

(衣薄く、厳霜に覚む)

清叔

前句で、夢が「絶」える理由を付けて、身にまといいる衣が薄いので霜の厳しい冷たさに目が覚める、と詠む。「草↓霜」(類船集)。「衣薄」は薄い衣。それを身にまといているのは俗世を捨てた人などが想定されているか。「霜雪侵肌尤寂寥、野僧衣薄畏風飄(霜雪肌を侵して尤も寂寥なり、野僧の衣薄くして畏れ風飄たり)」「(翰林五鳳集・仁如)。「厳霜」は冷たさがきつい霜のこと。「榮華敵勳葉、歳暮有嚴霜(榮華勳葉に敵す、歳暮嚴霜有り)」「(杜甫・十五「壯游」)など。韻字は霜(シモフユ)。冬1(霜)。

9 春浅<sup>○●</sup>蝶車<sup>○</sup>渋<sup>●</sup>

(春浅く、蝶車渋る)

有和

前句の「厳霜」により寒さを感じるのは、春が浅いためと付けて、まだ春は浅いので、蝶車の動きは鈍い、と

詠む。「春浅」は春の余寒の頃。当該句のように春がまだ浅いために、生物の活動が鈍いことを詠む和漢聯句の例に、「つららながれてひびく滝つせ／春浅鶯声渋(春浅くして鶯声渋し)」「(応永三十一年二月七日和漢百韻・二一・綾宰相)がある。「蝶車」は蝶が車輪のようにぐるぐると回りながら舞う様。「迎月燭光彈(迎月燭光彈ふる)／栩々蝶車輾(栩々たる蝶車く)」「(文明十七年十二月十日和漢百韻・二三・天)など室町後期にまに見られる。「渋」は動きがなめらかではなく、ぐずぐずしている様をいう動詞。春1(春、蝶)。

10 かすみもあへぬ野ぢの傍

心前

前句で「春浅」いので、霞もまだ辺りに広がっていないと付けて、(春はまだ浅いので)春霞にもまだ出くわさない野中の道の辺り、と詠む。また、「野」と「蝶」が縁となるか。○かすみもあへぬ 霞も立たない。「も」に込められる意味は、一句のみでは強意だが、前句と付いた時に春が浅いので蝶の動きも鈍いし、霞も立たないという意となる。「雪にかくるる夕暮の春／みわたせば

霞もあへぬ峰の雲」(天正四年万句・第六千句・第六竹何・七一)。○野ぢ 野路のことで野中の道のことか。韻字は傍(カタハラ チカツク)。春2(かすみ)。

11 山はまだきゆるともなく雪降りて

寿三

野から山の様子に転じるが、そこでも春の気配は感じられず雪が降っていると付け、(野では霞が立たず)山ではまだ、雪は消えることなく降り続いて、と詠む。「雪ふりて道ふみまどふ山里にいかにしてかは春のきつらん」(後拾遺集・春・七・平兼盛)の和歌は当該句の発想のもととなっているか。8句辺りから変化のない付けが続く。春はすでに3句目であるが、春らしい春の句が詠まれていない。やや停滞気味。春3(句意)

12 簾罇翠嵐彰

(簾罇に翠嵐彰かなり)

由己

前句の山から下りてきた嵐が簾の隙間に吹きつけてくると付けて、簾の隙間から山嵐が吹き付けてあらわれる、と詠む。「簾罇」の「罇」は、物の隙間、裂け目のことを言うことから、簾の隙間の意。「罇」の字を含む熟語

は和漢聯句例に屢々見られ、例えば「露濃秋有感(露濃やかにして秋有感)／霧罇景猶鮮(霧罇けて景猶ほ鮮やかに)」(室町前期和漢聯句集成【九五】年次未詳和漢百韻・八・久我大納言)は霧の隙間を言う。その他「林罇」「窓罇」「柱罇」などの用例があり、いずれも何かの隙間の意で詠まれる。『俳諧類船集』巻七「簾」に「簾罇」の用例がみられる。「真宗崩ジテ仁宗嗣レ位ヲ年十三大后劉氏垂レ簾ヲ聴レ政ヲ云々。臨ミニ竺乾ヲ於簾罇ニ看ルニ靈山ヲ於席下ニ云々。」「翠嵐」は山嵐のこと。「入座翠嵐生晝寂、夾川紅樹照春餘(座に入る翠嵐は晝寂を生ず、川を夾む紅樹は春余を照らす)」(呂聲之「題南巖寺」)。または、青々とした山の気のことか。韻字は彰(アラハス アキラカナリ)。雑。

13 軒ちかき松の葉分の夜はの月

友益

前句の「簾」を捲いて見上げた「月」を付けて、家の軒近くにある松の葉の間から見える夜半の月を詠む。「露ちる風にはほふ橘／玉簾軒端の月に巻き上げて」(新撰菟玖波集・秋下・八六四・教秀)。「軒↓箔」(類船集)。

○松の葉分の 松の葉を分けたその間の。「にはかにも  
風雲きほふおきつ波／松の葉分けの月ぞかくるる」(浜  
宮千句・第五・五六)など。秋1(月)。

14 鐘響入秋堂◎

(鐘響きて秋堂に入る)

西咲

前句の「軒」は「秋堂」のもので、月を眺める主体が  
いる場所で付けて、鐘が鳴り響いたので秋の気配漂う家  
に入ると詠む。○入秋堂 秋の気配が漂う家に入ること。  
「落葉蟲絲滿窓戸、秋堂獨坐思悠然。(落葉蟲絲 窓戸  
に満つ、秋堂に獨り坐して思ひ悠然)」(三体詩・旅館  
書懷・劉滄)。韻字は堂(トノ タカトノ)。秋2(秋  
堂)、釈教(鐘)。

15 夕霧におこなひ人やかへるらん

玄旨法印

前句で勤行していた人は、鐘が鳴ったので夕暮れに帰  
っていくだろうと付けて、(寺の鐘が鳴り響く)夕方に  
霧の中、勤行する人は帰るのだろうか、と詠む。前句が「か  
へる」理由となる。「鐘↓おこなひ」(類船集)。「鐘の  
音を法のしるべと古寺におこなふ人のかへる暮哉」(言

国詠草・浄侶暮帰・一八七)は前句と当該句の趣向が一  
致する。夕霧が立ち込める中、人が帰っていくという表  
現は連歌に、「なほ手もおもき露のぬれしほ／夕霧にか  
へる山路やまよふらむ」(看聞日記紙背・応永三十二年  
六月二十五日百韻・五九)。「おこなひ」と「霧」を詠  
むこみ、勤行する人の袖を霧が濡らす表現は連歌に「薪  
こりて月の夕にたちかへり／おこなふ袖をぬらす八重  
霧」(寛文十二年八月二十三日百韻・八四)と見られる  
が、霧の中勤行する人が帰っていくという趣向は見られ  
ない。秋3(夕霧)。

16 沙砌履匆忙◎

(沙砌履匆忙たり)

兼続

山から水辺の情景に転じ、前句の「かへる」人の様子  
を「履匆忙」と付けて、水辺の砂石(砌)の上を(音を  
たてて)慌ただしく歩くを詠む。「かめにたたふる水の  
涼しさ／おこなひの砌しづかに塵もなし」(池田千句・  
第三・一一)。「沙砌」は「すなのみぎり」と読み、砂  
を踏んで靴音ともに帰るさま。「履」は、人が歩くこと  
の比喻で、しばしば和漢聯句で用いられる。深沢眞二氏

は、「朝豈叨微禄／沙湿履無声（沙湿ひて履、声無し）」（天文二四年三月二十五日和漢千句・第三・九一・入宮）の和漢聯句を取り上げ、この九一句の表現の背景には、室町歌謡をあつめた『宗安小歌集』の「雨はさながら便りあり／砂潤うて、沓に声なし、沓に声なし」という一節から発想を得た可能性を指摘する（深沢眞二『「和漢」の世界』清文堂、二〇一〇年）。「忙」は慌ただしいさま。「九衢流車馬、相値各匆忙」（黄庭堅「次韻文潜同游王舍人園」）。韻字は忙（ワスル、）。雑。

17 何去失群鷺（何に去らんや群鷺を失ふ） 有節

前句の沙石の上にいる群鷺の姿で付けて、どこに飛び去ってしまったのだろうか、鷺の群れをとり逃してしまふ、と付けた。「失」はとり逃がす意で、和漢聯句では動物を取り逃がすという文脈で、「雲はへだてぬ軒ばもる月／二世失其鹿（二世其の鹿を失ふ）」（天文二十四年三月二十五日和漢千句・第八・四一・菅中）の用例が見られる。「群鷺」は群れをなして集まる鷺。和漢聯句に「すさまじく湊に浪の立ちさはぎ／群鷺下双洪（群鷺双

洪に下りたり）」（文明十六年二月二十五日和漢百韻・七八）などがある。「北渚集群鷺、新年何所之」（集註分類東坡先生詩「新年五首 其二」）と詠まれる。雑。

18 時雨きにけるなみの 颯 紹巴法橋

前句の「群鷺」と「時雨」が詠まれる和歌に「なく蟬を時雨にきけば枝たわに雪をなびかす鷺ぞむれゐる」（松下集・夏鳥・二八七九）。前句の鷺が去って姿が見えなくなつたのは、雨が降り、風が吹いてきたからだという理由をつけて、にわか雨と共にやって来た波に吹き付ける冷たい北風、と詠む。「時雨きにける」は「淀野の道を人かへる暮／にはかにも時雨きにける生駒山（文祿二年正月七日百韻・九七）。「なみの 颯」は、波に吹きつける北風。北風が波を立たせるか。雨と北風の取り合わせは和歌に「涙かもふりくる雨の北風にぬれぬればふ野べの春駒」（松下集・春雨放駒・五四〇）。韻字は、颯（キタカゼ カゼ）。雑。

19 舟はたゞ山ふところに漕ぎとめて

素然

前句で時雨が降って来たので、舟を停泊させると付けた。「風↓舟」「山↓時雨」(類船集)。「山ふところ」は山に囲まれた奥深い所のこと。「日陰まちえて鳥のねぞそふ／水むせぶ山ふところの滝つせに」(紹巴亡父追善千句・第六・九五)。雑。

20 瀧のながれをとむる花の香

昌叱

前句で舟を漕ぎ止めた理由を花の香りを求め尋ねたからだと付けて、瀧の流れを尋ね求める花の香り、と詠む。「身にしみまさる川風ぞふく／花の香をとめゆく舟やちかからむ」(大永四年十月二十三日月並千三百韻・一九)、「舟↓花」(類船集)。「滝のながれ」は「音羽山滝のながれも名にたかき清水もきよき法の寺かな」(草根集・名所滝・九八九八)。韻字は、香 カ カウハシ (漢和三五韻)。春1 (花)。

21 霞簇埋佳境

(霞簇がり佳境を埋む)

清叔

前句のような状況が「佳境」であると付けて、霞がむ

ら立って良い景色を覆う、と詠む。「霞↓花の岑」(類船集)。「霞簇」は霞が群がり立っている様子。「山色帯春霞簇時、雪殘陰處景彌奇。(山色春を帯び霞簇がる時、雪殘れる陰の處景彌奇し)」(翰林五鳳集・山殘雪・英甫)、「春もいまうつる日数ははや川や／霞簇断橋辺(霞簇りて橋辺を裁つ)」(室町前期和漢聯句集成【九五】年次未詳和漢百韻・四六・近衛前関白)など。「佳境」は「遠山まゆのかすむ朝あけ／佳境惜舟過(佳境 舟過るを惜しむ)」(大永七年九月十三日和漢百韻・二五・帥)など。春2 (霞)。

22 雲過耕富陽

(雲 過て富陽に耕す)

有和

小雨が降りすぎたので、豊かな陽の下で畠を耕す、と詠む。「雲過」は、さつと降ってやむ小雨。「雲」は和漢聯句に屢々見られ、「露使行裳湿(露使はして行くに裳湿ふ)／雲過帰扇捐(雲過ぎて帰るに扇捐つ)」(文明十三年七月二十一日和漢百韻・八二)など。「富陽」は豊かな陽光か。韻字は陽(ヒ ミナミ キタ)。春3。

23 さびしきや世をのがれての庵ならん

心前

前句で、耕作する人が帰る場所を付けて、寂しいのは、世俗を離れて住む庵であるのだろう、と詠む。「田↓庵」、  
「庵の煙↓畑」（類船集）。「世をのがれて」は世俗を離れての意で「こころこそややすみまされ世中をのがれて月はみるべかりけり」（風雅集・秋・六一五）「月をよめる」・前大僧正道玄）。「さびしき」と「庵」を組み合わせた歌例に「さびしきにたへたる人のまたもあれないほりならべむ冬の山里」（新古今集・冬・六二七・西行法師）など、庵の中で感じる侘しさが詠まれる。「かげものこらぬこがらしの風／さびしきや冬野のうちの草の庵」（紹巴亡父追善千句 第二山何・四三）。雑、述懐（世）。

24 むかしの友も夢のあさ床

寿三

昔の友人も、世を逃れて住む庵には訪ねて来ることなく、夢に見るのみと付けて、かつての友との交友も朝の床でみる夢のように儂い、と詠む。「さびしきさの友だに

なきは庵さす野中の松の雪の夕暮」（壬二集・冬・四六七）。「昔↓草庵」（類船集）。「むかしの友」は、かつて交友のあった友人。「世にあるを思ふ心はたゆめともむかしの友は猶ぞわすれぬ」（垂槐集・一一一二）。「夢のあさ床」は朝の寝床で見る夢。「別れににたる夢の朝床／波風にわが里おもふ舟のうち」（美濃千句・第九何色・八八）など恋句に詠まれることが通例。それを、あえて「むかしの友」と詠み、ここでは恋句にせず次句における恋の展開を誘う句とした点が作者の工夫か。韻字は床（ユカ トコ）。雑。

25 ●●○●●  
別後月添恨

（別後 月恨みを添ふ）

由己

前句の「夢のあさ床」を恋人と過ごした場所できりなして、恋人が帰った後、月に名残惜しい気持ちを託す、と詠む。また、「むかしの友」と「月」が縁となる。「月影ぞ昔の友にまさりけるしらぬ道にも尋ねきにけり」（玉葉集・旅・一一五二・大僧正行尊）。「別後」は恋人が帰った後。「君雖為我此遅留、別後凄凉我已憂（君我の為めと雖も此れ留めるに遅し、別後凄まじき涼我已に憂

ふ)」（集註分類東坡先生詩「次答邦直、子由五首 其四」)。「月添恨」は名残惜しい気持ちを月に託す。雑、恋1(別、恨)。

26 きぬたのころもとづれば亡

玄旨法印

前句の「月添恨」の理由を女性が主体となって付けて、(月に恨みを添えるのは) 砧で打った衣を着た男性の訪れがないからだ、と詠む。「さよふけてきぬたの音ぞたゆむなる月をみつつや衣うつらん」(千載集・秋・三三八・覚性)。「砧↓月の下」(類船集)。「きぬたのころも」は砧を打つ衣を男性に擬人化する表現。和歌で「たへてうつ砧の衣つれなさのたぐひしらるゝ有明の空」(後花園院御集・暁擣衣・一七二九)のみ見られる表現。「をとづれば亡」は男性の訪れがないこと。「まつ人のわれに心をつくせとや/またこの暮もおとづればなし」(文明万句・第七千句・第十・六六)など。韻字は亡(ナシ)。  
恋2(句意)。

27 胸霧●幾時○散●

(胸霧 幾時か散ぜん)

西咲

前句で恋人の訪れが来ない状況が「胸霧」であると付けて、胸中に広がる暗い気持ちは、何時晴れたらうかと詠む。「胸霧」は胸に霧が広がっているのは、つまり、心が晴れず気持ちは暗いの意か。当該句と類似する趣向の和漢聯句例に「伴吟月結縁(伴吟して月縁を結ふ)/每逢胸霧散(逢ふ毎に胸霧散ぜん)」(天正十年十一月十日漢和聯句・九三・有和)。雑、恋3(句意)。

28 眼波●雖●陸●汪◎

(眼波 陸と雖も汪し)

有節

前句と対句となる。「眼波」は女性のまなざし、秋波。水中ではないが、それが深くて広い、としたもの。「従教弄酒春衫澆、別有風流上眼波」(唐宋千家聯珠詩格・十一・蘇軾「憶飲」)。韻字は汪(フカシ イケ)。雑、恋4(眼波)。

29 地卑○逢○故○少●

(地卑くして故に逢ふこと少なし) 兼統

前句の「陸」を「地」で受けた。『唐宋千家聯珠詩格』卷九・張賁「送人西歸」に「孤雲獨鳥本無依、江海重逢故舊稀(孤雲 獨鳥 本より依るところ無し、江海重ねて

逢ふ故舊稀なり」。。「地卑」は地面が低く荒れているさま、「地卑荒野大、天遠暮江遲」（杜甫「遣興」）。その他和漢聯句でもしばしば見られる。「求薪溪亦遠（薪を求めて溪亦た遠し）／栽竹地非卑（竹を栽ちて地卑きに非ず）」（永正元年十月二十四日和漢百韻・五五・侍従大納言）など。雑。

30 さすらへきつゝ住ゐる方

素然

前句を受けて、辺鄙な地方を「さすらへ」、流浪しながらもこの辺りに住む、と詠む。俗世に定めなく流浪する身をも意味する。「なにとなくあけぬくれぬとさすらへてさもいたづらにゆく月日かな」（続後撰集・雑中・一一八二・右近中将経家）。「住ゐる方」は「住ゐ」という表現は連歌に一例見られるのみで、「きりぎりすきやどる聲やそてならむ／ふるきすまゐは蓬にもしれ」（宗長追善千句・第九夕何・三八）がその用例である。和歌では「みわたせばかすみの里にすまゐしてたれわがものと花をみるらん」（為忠家後度百首・遠村桜・一四三）など。「方」は、「柳籠青瑣煙（柳は籠む 青き瑣煙

を）／一むらの里はたがすむ方ならん」（天文二十三年六月二十五日和漢聯句・五一・言継）のように、辺り、くらの意か。韻字は方（カタ ノリ ミチ…）。雑、述懐。

31 仕途●辛○苦○蜀○

（仕途 辛苦の蜀）

有和

前句の「さすらへきつゝ」を左遷でとりなし、流された人の気持ちで付けて、仕官の道は、険しい蜀の道を超えるような辛苦である、と詠む。「仕途」は仕官の道のこと。「辛苦蜀」は蜀の栈道は険しく辛いものであるということ。李白「蜀道難」詩（『古文真宝』にも所収）いうこと。李白「蜀道難」詩（『古文真宝』にも所収）に、「噫吁戲、危乎高哉。蜀道之難難於上青天（噫吁戲、危ふきかな高きかな。蜀道の難は青天に上るより難し）」。雑。

32 参門●押瞻○洋○

（参門 押瞻の洋）

清叔

対句か。師範に入門し仰ぎ見れば大洋のごとし。「押瞻」は見ることの謙譲語。韻字は洋（サカンナリ オホシ ナミ ウミ）。雑、釈教（句意）。



33 こゝろたゝつたへぬこそはつたへなれ 紹巴法橋

前句を参禅ととり、「教外別伝」、つまり真実というものは、直接には伝えられない、と詠む。「をしへおく法の心をさとらずはつたへぬ道や更になからん」（草根集・十二・九三一五）。「ことのはもおよばぬ法のまこととをば心よりこそつたへそめしか」（新後撰集・釈教・六九七・見性法師）。雑、釈教（句意）。

34 中だちにさへしのぶ玉章

昌叱

前句の「つたえ」る事柄を、法から恋心に転じて付けて、仲人にさえ、隠して秘密にやり取りする手紙、と詠む。秘密に手紙のやり取りをするほど相手への思いが強い。「中だち」は男女間のとりもちをする人。「思ふてふ心ばかりも中だちにもらすを人のかこちもやせむ」（通勝集・憑媒恋・一二〇八）。「しのぶ玉章」は「いとせめて忍ぶる中の玉づさは思ふかぎりを書きもつくさず」（新拾遺集・恋・九六三・花園院御製）、「わぎもこがこひしとかけるたまづさをしのぶものからたれにみせま

し」（教長集・恋・忍恋・六五三）など。韻字は章（アキラカ イロドル ノリ）。雑、恋1（しのぶ）。

35 人妻のつれなきもなをゆかしくて 玄旨法印

前句で手紙を渡した人妻からの返事がないことを「つれなき」として付けて、他人の妻のよそよそしさもやはり、心が魅かれ相手のことを知りたいと思う、と詠む。「難面（つれなし）↓かへしなき文」（類船集）。また、前句の「しのぶ」理由は、思いを寄せる相手が人妻であったからと解せる。「人妻のつれなき」という表現は連歌に、「思へばいかに思ひそめけむ／人妻はことわりになほつれなくて」（長享三年八月二日百韻・二九）と見られるのが唯一か。雑、恋2

36 しみてひかふるきぬは芳かうばし 心前

前句のつれない態度の人妻を強引に引き留めると付けて、無理矢理に引き留める衣の香は芳しい、と詠む。光源氏と空蟬の関係も想起し得るか。「ひかふ」は衣などを押さえて相手の動きを止めること。和歌には用例が乏

しい。「衣々にかへる心のひかふるや 夜のまに生るくすの下つゆ」(草根集・一・別恋・六八六)、「恋路にはひかふる袖もあるものをうき暁のはるのきぬぎぬ」(道遊集・三月尽・六二〇)など。韻字は芳(カフハシ カホル)。雑、恋3(句意)。

37 駒なべて秋の花野をわけくらし 寿三

前句の「きぬは芳」を「花野」を分ける人の衣に漂う香りとして付けて、駒を連ねて秋の草花が繁る野を分け入って過ごす、と詠む。「霧はれぬ花野のこ萩さきにけりゆきかふ人の袖匂ふまで」(新続古今集・秋・行路秋花・三九九・修理大夫顕季)また、無理に引く対象を「駒」に読み換えて付けたか。前句と付いた時は、後朝の別れで庭の「花野」を分け帰っていくことを詠むか。「駒なべて」は馬を連ねて。「秋かぜはせずしくなりぬ駒なべていざ野にゆかん萩の花みに」(古今和歌六帖・のべ・一二二一)。「わけくらし」は花野を左右に分け入って時間を過ごす。秋1(秋)。

38 ●●●●●●●●●●  
近聴處々蟹 (近くに聴く處々の蟹) 有和

秋の野から、間近に聴くあちこちの蟹、と詠む。「蟹」は蝸のこと。「韻会日、蟬ノ属也」(漢和三五韻)。和漢聯句では、主に室町後期から「院叱喫蕉鹿ノ壁聴鳴杼蟹(壁に聴く杼蟹の鳴)」(天文九年四月十八日和漢聯句・五二・高倉三位)などに韻字として見られる。韻字は蟹(ヒグラシ)。秋2(蟹)。

39 比もやゝさむきそひぬる夜はの霜 素然

「蝸↓秋風寒き」(類船集)。日の光もだんだんと寒さを帯びて夜に降りる霜と詠む。「さむきそひぬる」は寒さが加わること。連歌に「なく雁のゆくかたとほきたまくらにノ時雨しあとぞ夜寒そひぬる」(永禄六年十一月十八日以前・皇学館文庫本千句・第五「はなさけば」・六)と類似の表現が見られる。「夜はの霜」は夜中に降りる霜。「夜はの霜を浪のうへにも見つるかなにほのうきすとかものうはげと」(拾玉集・二八七三)。秋3。

40 入がたほそき月は弓張

紹巴法橋

前句から時間が経過した情景で付けて、没しようとする月は細く、形は弓を張ったようである、と詠む。「風さむみおもはぬ朝やかすむらむ／入りがたほそき有明の月」（難波田千句・第七・九六）。「入りがた」は「射」も掛けるか。「弓張の月みるよひは程もなくいるやまのはぞわびしかりける」（玉葉集・雑五・二四九〇・前太宰大弑高遠）。韻字は張（ハル ヒラク…）。秋4（月）。

41 たび／＼に宿直とのみまうしの声たてゝ

昌叱

前句の「弓張」を、「宿直申し」が持つ弓で付けた。「宿直申し」とは夜間、内裏の警備に当たる滝口の武士が定められた時刻に氏名を言上すること。「となへつる仏の御名やつもるらし宿直まうしも声ふけにけり」（公賢集・仏名・七二九）。連歌にも、「来てつかへゐるおほきみのかげ／夜もねぬとのみまうしの弓もちて」（文明十五年千句・第三・九五）。雑。

42 群臣●●●●●  
仰聖王◎

（群臣 聖王を仰ぐ）

西咲

内裏を出したので、臣下が君子を賛美すると付けた。「群臣」は多くの臣下。「八駿隨天子、群臣從武皇」（杜甫・十「城上」）。「聖王」は知徳の優れた君子。『礼記』（祭法）に「夫聖王之制祭祀也、法施於民則祀之」。意外にも室町期の和漢聯句には見られない熟語である。韻字は王（キミ）。雑。

43 如天●●●●●  
堯廣徳●

（天の如し 堯の廣徳）

清叔

前句の「聖王」を具体的に付けて、堯の徳の広大さは、まるで天のそれのようであると詠む。「如天」は「鐘のねは霞やのこる泊瀬山／河漲緑如天（河漲ぎりて緑は天の如し）」（文明十四年四月五日和漢百韻・七八・太政大臣）。「聖主如天萬物春、小臣愚暗自亡身」（集註分類東坡先生詩・二十五・「故作二詩授獄卒梁成、以遺子由、二首其一」）。「堯」は後世、舜とともに理想とされた中国古代の帝王。「広徳」で民衆に遍くゆき届くような徳のこと。雑。

44 おさまるほどもいかに唐

玄旨法印

前句の堯の徳によつて世が治まったと付けて、世の中が治まるとはいつても、中国はどうであろうか（治まっているだろうか）と詠む。「唐」と「おさまる」を組み合わせた連歌に「いづくのふみも君はみるらむ／もろこしのをさまるときをためしにて」（永祿三年二月二十五日何路百韻・八五）。42句から句意が展開せず、やや停滞気味か。韻字は唐（モロコシ ミチ）。雑。

45 たのしみも琴笛の音にあらはれて

心前

世が穏やかに治まっていることで、人々も豊かな生活を送っていると付けて、愉快に感じている人々の気持ちは管絃の音色にも表れていて、と詠む。「洞の中にしらべ長閑き琴笛や千よの春をも手に任すらし」（芳雲集・春到管絃中・一〇七〇）。前句と当該句の関係を考える上で参考となる句に宗長の「琴笛も世のをさまれるしらべにて」（老耳・二六一九）がある。雑。

46 ●○●●●  
合飲既醉觴

（合飲して既に觴に酔ふ）

由己

前句の管絃の催しに加えて行われるだろう、と酒宴の様子で付けて共に飲び既に盃を交わして酔う、と詠む。「琴↓酒のむしろ」（類船集）。「合飲」は飲びを共にすること。「故酒食者所以合飲也」（礼記・楽記）。「醉觴」は盃を交わして酔うこと。韻字は觴（サカヅキ）。雑。

47 ●○●●●  
若違金諾土

兼統

もし（相手との）堅い約束を破れば、信頼は土のように価値のないものと化すだろう、と詠む。「金諾」は信頼のおける堅い約束。「得黄金百斤、不如得季布一諾」（史記・季布伝）。この表現は和漢聯句にもまみ見られる。「かへらんといふ旅はまことか／諾金何鑄錯（諾金何ぞ錯を鑄ん）」（天正三年十一月二十五日漢和聯句・六七・策彦）。「ことの葉のなさけに人やなひくらん／一諾直千金」（貞和二年三月四日漢百韻・二八・周沢）など。雑。

48 つくるほとけにおもふ粧

昌叱

「金↓仏」（類船集）。仏を作つてその裝飾を考へてゐる。せつかくの作善も（仏との約束を違へれば）何にもならないとして、前句とつなげるか。「法をしもさきちる花のうつみ見て／よそほひしめす春の御ほとけ（玄旨公御連歌・三一三六・玄哉）。「塔供養を見聞するに多宝涌出の莊嚴に瑩二九重五仏粧一」（三国伝記・五）。韻字は粧（ヨソヲヒ ヨソヒ カサリ）。雑、釈教。

49 ●●○○●●  
遠寺尋花近

（遠寺 花を尋ねて近し）

有節

遠くにある寺であっても、花を求めて歩いていくうちに辿り着けるほど近くに感じる、と詠む。「花↓仏前」（類船集）。「遠寺」は遠方にある寺。「孤村樹色昏残雨、遠寺鐘声帯夕陽（孤村の樹色残雨昏し、遠寺の鐘声夕陽を帯びん）」（三体詩・盧綸「与従弟瑾出関」）。和漢聯句に用例なし。「遠寺」には「鐘」が付くのが通例だが前句にも次句にも詠まない点に工夫があるか。春1（花）、釈教（遠寺）。

50 ●●○○●●◎  
短堤種柳長

（短堤 柳を種えて長し）

西咲

対句で付けた。柳を植えた堤が長く伸びる様子は「千萬長堤柳、従他爛熳春」（張祜「發蜀客」）など詩では常套の表現。韻字は長（ナガシ ツネ）。春2（柳）。

51 春くれば田面に水をせきわけて

紹巴法橋

春が来れば、田に水をせき止めて分流させて、と詠む。「植木↓水」「堤↓新田」（類船集）。「小山田の池の堤にさす柳なりもならずも汝（ナ）と二人はも」（万葉集・一四・三四九二）。前句の「堤」で囲われた水が田に流れてくると付けた。「水をせきわけて」とは水の流れをせき止めて、田面に分流させる。「桜ちる山した水をせきわけて花にながるる小田のなはしろ」（風雅集・春下・二六四・儀子内親王）、「入江かけたるやなきいくむら／かへす田の水口とほくせきわけて」（永祿四年三月二十二日何垣百韻「ねにかへる」・六五）。春3（春）。

52 里はめぐりのやまのかた岡

心前

里は、前句の「田」の周りの山の片岡にある、と付け  
た。「やせにたる牛はふしたるままにして／里のめぐり  
も深きくさむら」（元龜二年千句・第三何路・六六）。「か  
た岡」は山の一方の斜面がなだらかとなっている所。韻  
字は岡（ヲカ）。雑。

53 秋もはや朝のはらの一時雨 玄旨法印

前句の「片岡」から「朝の原」が導かれ、秋になって  
早くも朝の原に降るにわか雨、と詠む。「霧立ちて雁ぞ  
なくなる片岡の朝の原は紅葉しぬらむ」（古今集・秋下  
・よみ人しらず・二五二）による。「朝のはら」は大和  
国の歌枕（現奈良県北西部、王寺町あたり）。「一時雨」  
はひとしきり降る時雨。「一時雨すぎにけらしなみよし  
野の吉野の滝つ岩たたくなり」（新統古今集・雑上・一  
七六四・勝命法師）など。秋1（秋）。

54 こゑはそこともあらぬさを響 素然

前句の「朝の原」に居る「さを響」で付けて、（妻を  
求める）鳴き声は近くに聞こえるが、姿が見えない雄鹿、

と詠む。「鹿↓原」（類船集）。「朝の原」の鹿は珍しい  
が、「秋草の色づくみれば片岡の朝の原に鹿ぞなくなる」  
（続千載集・秋上・三九九・従三位為継）がある。「響」  
の訓は「くじか」、一説には美しい小さな鹿を言う。一  
句での意は「さを鹿」で雄鹿となり、韻を踏むためにこ  
の字を当てたか。「こゑはそことも」は近くにあるはず  
だが、見えないこと。「入相の声はかすかにきこゆれと  
そこともわかぬおくのふる寺」（拾翠愚草抄・煙寺晚鐘  
・三四三）。鹿の声はするが姿は見えないと詠む連歌に、  
「空にぞのこる弓張の月／かへるさはそこともしらぬ鹿  
の聲」（天文二十四年四月十日何路百韻・八五）。韻字  
は響（クジカ）。秋2（さをじか）。

55 月●●○●● 有和  
月●●○●● 村●●○●● 難認 （月黒みて村認め難し）

前句で鹿の啼き声は聞こえるが、その姿は見えないと  
した理由を付けて、月明かりが暗いので、村が見えにく  
い、と詠む。「月黒」は「月黒探兵錯」（韓愈「晚秋鄜  
城夜會聯句」）などがあるが、和漢聯句には見られない  
語。秋3（月）。

56 露明園未荒

(露明けて園未だ荒れず)

兼統

前句の月の暗さに対し、露明かりで(夜明けの頃は人がまだ踏み入れないので)庭はまだ荒れていない、と詠む。「露明」は、置いた露に光が反射してあたりが明るいこと。韻字は荒(アル)、トヲシ ウユル アラクル ムナシ)。秋4(露)。

57 野分めく風しづまれば飛ぶ胡蝶

昌叱

前句の「園」に飛ぶ蝶の姿で付けて、野分のように激しく吹く風が、穏やかになれば胡蝶が飛ぶ、と詠む。

「荒」は「野分」とも響く。「園↓こてふ」、「野分の朝↓荒るゝ」(類船集)。「野分めく風」は野分のように吹く激しい風。「秋来ては花にみだる虫のこゑ／胡蝶も露も野分めく暮」(石山四吟千句・第十・初何「くれてなほ」・四六)。秋5(野分)。

58 むかふ日かげにさむさ忘る

寿三

前句で「風しづま」った、そして日の光を受けている

ので(暖かくて)寒さを忘れる、と詠む。野分には寒さを感じず。「野分立ちてにはかに膚(はだ)寒き夕暮れのほど」(源氏物語・桐壺)。「寒↓風」(類船集)。「むかふ日かげ」は和歌に用例未見で、連歌に一例、「猿さわぐ心のまとおほはははや／むかふ日影もしらぬやまもと」(老葉毛利本・恋上・六四九)見える程度。「霜やをく閨のうちまで寒き夜もわするゝばかり向ふうづみ火」(言綱詠草・向爐火・一八七)は、対象は「日」ではなく「火」であるが、それによって寒さを忘れるという趣向は類似する。韻字は忘(ワスル)。雑。

59 開窓童檢卷

(開窓する童檢卷す)

西咲

前句の「日かげ」に対座できるのは、「開窓」であるからだと付ける。「開窓」の用例は、その開いた窓から月を見るという趣向が多い。「月も名に秋さへおしきこよひかな／開窓雲霧消(窓を開きて雲霧消す)」(文龜三年九月十三日和漢百韻・二・宗山)、「半夜開窓夜氣寒、庭中屋上白漫々。(半夜窓を開きて夜氣寒し、庭中の屋上白く漫々たり)」(翰林五鳳集・冬月・虎関)な

ど。「童檢卷」は、童が書物を調べることか。西咲には「さやけき月はかげや瑩る／童檢読残卷（童残卷を読み検べる）」（天正十九年四月和漢千句・第三・八三・西咲）という類似の句がある。雑。

60 陸座祖提綱

（陸座する祖 提綱す）

有節

対句で、座に上って祖師が宗門の綱要を説明する、と詠む。「陸座」は禅宗で師僧が説法するとき、高座などに上ること。また、高座に上って説法をすること。「提綱」は大衆に対して宗門の綱要を説明すること。韻字は綱（ヲホヅナ ツナ）。雑、釈教。

61 賜紫禅林燕

（賜紫 禅林の燕）

清叔

紫衣を賜る、禅寺に住む燕、と詠んだ。前句が禅僧の様子であったのを受ける。「賜紫」は高德の僧が紫衣着用を勅許されること。またその人。「燕」は「紫燕」とも別称する。当時の禅林で紫衣が尊ばれたからこれを戯れて言ったもの。雑、釈教。

62 落紅文木鶯

（落紅 文木の鶯）

由己

前句とは対句で、紅い花が散り落ちた梅の木に鶯がとまる、と詠む。「落紅」は紅色の落花。「文木」は「好文木」か。梅の古名。晋の武帝が学問に励む時は梅の花が開き、怠る時は散りしおれた（晋起居注）。「鶯」はオシドリの雌だが、ここは梅の異名の「鴛鴦梅」を使うか。花は重弁、濃紅色で、花卉の縁は淡紅色。実が二個ずつ集まって付く。「鴛鴦梅と云も、梅の一種也」（中華若木詩抄・下）。そして「さきあへぬ冬木の梅も難波津の 浪のはなにや鶯の鳴らん」（後奈良院御詠草・二七四）という作もあり、三条西実隆に「難波に鴛鴦を詠たる証歌候はねとも、鴛鴦梅の心はいかゝ候へき」と評されている。韻字は鶯（ヲシドリ）。春一（文木）。

63 宴遊春欲尽

（宴遊 春尽きなんとす）

有和

前句とは春の季で付いて展開され、酒宴をして過ごすうちに、今にも春が終わろうとする、と詠む。「春欲尽」は「鳳輦不来春欲尽、空留鶯語到黄昏」（鳳輦来たらず



春盡きなんとす、空しく鶯語を留め黄昏に到る」(古今詩刪・二二・段成式「折楊柳枝詞」)など。春2。

64 なぎ日ながら雲の藏せる

紹巴法橋

前句の「宴遊」を楽しむ永日で付けて、没するのが遅い日であつても雲がそれを隠してしまふ、と詠む。「ながき日ながら」は春の長い日であつても、の意、「長き日なからなをおしむかげ／けふは暮ぬあす又きかん鐘ならで」(老耳・一三八三)など。韻字は藏(カクス)カクル、オサム)。春3(ながき日)。

65 待ち侘びてながむる空や伊駒山

素然

前句の「雲」が晴れたら伊駒山が見えると付けて、独り寂しく恋人を待つて眺めやる、と詠む。「伊駒↓雲」(類船集)。伊駒山の上空にかかる雲は、「秋篠や外山のさとや時雨るらん伊駒のたけに雲のかかれる」(新古今集・冬・五八五・西行法師)による。その雲を眺める趣向も多くある。「ながめやる伊駒の山の峰の雲いくへになりぬ五月雨の空」(正治後度百首・五月雨・二二二・

季保)。「たのまずながらなほどこひしき／生駒山雲みるくれにながめわび」(永正十花千句・第六・一五)。雑、恋1(待侘て)。

66 なに難波めのちぎる 賣

玄旨法印

難波の遊女が約束した商人はどうしているのか。前句の「伊駒山」の空を虚しく眺めるさまを受けた。「伊駒↓難波」(類船集)。「難波門をこぎいでて見れば神さぶる生駒高嶺に雲ぞたなびく」(万葉集・二〇・四三八〇・大田部三成)。「難波め」は、船上にいる遊女のこと。「なにはめにみつとはなしにあしのねのよのみじかくてあくるわびしき」(後撰集・恋・八八七・道風)など。「商」は行商する人。難波女が契る対象。「あきびとの舟の昔をおもふにもうらみはふかき涙なりけり」(六百番歌合・恋・寄商人恋・一一九二・信定)。韻字 賣

67 舟はまだ夜ふかき月にさしわかれ

心前

前句と付いた時はこの句の内容は恋として付き、舟は

まだ夜が深い頃の月の下、棹を差して分け別れて、と詠む。また遊女が乗る舟が夜更けの月光の下、去っていく意となる。「舟↓遊女」(類船集)。「さしわかれ」は二艘の船が棹を差して、別々の方向に分かれて進むことか。用例は少なく、和歌に「かがり火も二の鶺舟さしわかれめぐりあふまに明くる川島」(草根集・七・五六一六・鶺舟廻島)の例が見られるのみ。一句のみでは、恋の気配はなく、夜が明けきっていない頃に、旅人が乗った船が岸を離れ、出立する情景と詠めるか。秋1(月)。

68 霧● 曉● 漁○ 唱● 揚◎

(霧 曉 漁 唱 揚ぐ)

西 咲

前句の舟の上で歌う漁師の姿で付けて、夜明け方の霧の中、漁師の歌声が高らかに響く、と詠む。また、前句よりも時分がやや経過して朝の情景を詠む。「別↓曉」(類船集)。「霧 曉」は「曉 霧」と同意で、夜明け方の霧のことか。「山陽 曉 霧 如 細 雨、 炯 炯 初 日 寒 無 光 (山陽 曉 霧 細 雨 の 如 し、 炯 炯 た る 初 日 光 無 く 寒 し)」(東 坡 先 生 詩・七「十月六日記所見」)。「漁 唱」は漁師の歌う舟歌。「殷 勤 聽 漁 唱、 漸 次 入 吳 音 (殷 勤 に 漁 唱 を 聴 く、 漸

次 吳 音 に 入 る)」(鄭 谷 「江 行」)。和 漢 聯 句 で は、「雲 籠 漁 唱 遠 (雲 籠 り て 漁 唱 遠 し) / 霞 遂 羽 衣 輕 (霞 遂 ひ に 羽 衣 輕 し)」(応 永 二 十 五 年 十 一 月 二 十 五 日 和 漢 百 韻 ・ 三 七・ 洪 蔭)、「冷 しく なる 水 の み な か み / 汀 鼓 妨 漁 唱 (汀 鼓 漁 唱 を 妨 ぐ)」(天 正 十 九 年 四 月 和 漢 千 句 ・ 第 一・ 六 五・ 御 製)な だ。韻 字 は 揚 (ア ガ ル) ア ラ ハ ス ヒ タ イ ツ キ ヨ シ)。秋 2 (霧)。

69 江○ 楓○ 秋○ 氣● 蓄●

(江 楓 秋 氣 蓄 ぶ)

由 己

川 辺 の 楓 は 秋 の 気 配 を た め る、と 詠 む。「江 楓」の 用 例 は「月 落 烏 啼 霜 滿 天、 江 楓 漁 火 對 愁 眠 (月 落 ち て 烏 は 啼 く 滿 天 の 霜、 江 楓 漁 火 愁 眠 を 對 ぶ)」(三 体 詩・ 張 繼 「楓 橋 夜 泊」)が あ る。「秋 氣 蓄」は「(孟 秋 之 月) 天 子 乃 難、 以 達 秋 氣」(礼 記・ 月 令)、和 漢 聯 句 に、「風 度 破 芭 苴 (風 度 ろ て 芭 苴 を 破 る) / 枕 簟 貯 秋 氣 (枕 簟 秋 氣 を 貯 ぶ)」(大 永 七 年 九 月 十 三 日 和 漢 百 韻・ 三 一)が あ る。 秋 3 (楓)。

70 ●●●○ 午枕漏聲盪 (午枕 漏聲 盪す)

有和

昼寝をしている所に、聞こえる漏刻の音が水面をゆらす、と詠む。「午枕」は昼寝。「馬齧枯萑誼午枕、夢成風雨浪翻江。」(黄山谷詩集・「六月十七日晝寢」)。「風鈴鐘互答(風鈴鐘互に答ふ)／午枕市尤喧(午枕 市は尤も喧し)」(天正十九年四月和漢千句・第六・九二・西咲)など。「漏聲」と「枕」の用例は「とのゐして人やなれぬる宮の中／撐枕漏声伝(枕を撐へて漏聲伝ふ)」(文明十四年四月五日和漢百韻・五四・御製)など。韻字は盪(ヲス)(和訓押韻)。漢和三五韻には訓がなく、「ウゴカス トラクル ススグ 舟ヲヲス等ハ皆仄也」とある。雑。

71 明くるまでねさます夢や又つがん

紹巴法橋

前句の「枕」から「夢」が連想され、寝ても覚めてしまう夢であることよ、夜が明けるまで夢の続きを見よう、と詠む。「よひよひに枕さだめむ方もなしいかねし夜か夢に見えけむ」(古今集・恋一・五一六・よみ人しらず)。「明くるまで」は夜が明けるまで。「かりねする草

の戸ざしの明くるまで枕にたえぬむしの声かな」(草庵集・秋・旅館聞虫・四八一)など。「ねさます」は眠りから覚める意か。和歌には用例が見られず、連歌には時代がやや下った例に、「あけもはなれぬおくのやままと／鹿のねのねさます枕おきいでて」(元和六年一月三日百韻「うめははるを」・一一)と見える。雑。

72 ひとりのゆかはこゝろ康しや

昌叱

前句で夢を見ていた主体の気持ちで付けて、独りで寝る床は心が穏やかである、と詠む。だが、「ひとりふすあれたるやどの床のうへにあはれいくよのねざめしつらん」(新古今集・恋三・一一一七・安法法師女)のような独り寝の寂しさを詠む恋句の展開ではない点に、昌叱の工夫が見られるか。「ひとりのゆかは」は独り寝をする床。「かひなくも待つ夜いく夜に残らんひとり床にともし火の影」(邦輔親王集・恋・四二五)。韻字は康(ヤスシ タノシム…)。雑、恋。

73 忍びよるかたたがへともまだしらで

玄旨法印

前句の「こころ廉し」の理由を付けて、女は、男が人目を避けて近づいていることをまだ知らないでいて、と詠む。源氏物語・帚木で、光源氏が方違え先の紀伊守の家で、空蟬に言い寄り関係を持つ場面を想起するか。「定めおかぬや旅の宿なる／とふもただひとよひとよのかたかへ」（嗟峨千句・第六・花之何「うめかかは」・七一）など。雑、恋1。

74 寵衰屢断腸◎

（寵衰へて屢 腸を断つ）

清叔

前句で言い寄られた後、男の寵が薄れて嘆く女の気持ちで付けて、しばしば腸が断たれるほど辛い、と詠む。

「白頭官妓寵衰後。笥篋生塵今幾年（白頭の官妓寵衰へたる後、笥篋に生ずる塵、今幾年ぞ）」（翰林五鳳集・歌扇・瑞巖）の例では、寵愛が完全に絶えている様を詠むが、当該句では「屢」とあるので、男性が訪れる頻度が以前よりも少なくなっていることを嘆く。和漢聯句では「きえかへるね覚のたひの袖の露／深閨嘆寵衰（深閨嘆くは寵の衰え）」（室町前期和漢聯句【九六】年次未詳和漢百韻・四四・大閨）と見え、当該句と趣向が一致

する。「断腸」は腸が断たれるくらいに辛いこと。「深宮無人春日長。沈香亭北百花香。美人睡起薄梳洗。燕舞鶯啼空断腸（美人睡起して、薄く梳きて洗ふ、燕舞ひ鶯啼き空しく腸を断つ）」（古文真宝前集下・蘇軾「續麗人行」）。韻字は腸（ハラハタ モノオモヒ）。恋2。

75 鷗不干恩者●

（鷗は恩を干めざる者なり）

兼統

前句で女が男に対して寵を求め、当該句で鷗は君主から恩を求めない、と詠む。鷗は脱俗的で、出世や俸禄を求めないイメージを持たれた。雑。

76 馬依馳志良◎

（馬は志を馳するに依りて良し）有節

対句で付く。馬は思いを馳せるにつれて良馬となる、の意か。韻字は良（ヨシ ハナハダシ カシヨシ…）。雑。

77 老の身も千里の花を歩いてみる

紹巴法橋

前句の「馬」に乗って、年老いた我が身も「千里」先の花を見に行くと付ける。「千里↓馬」（類船集）。「老

の身」が花を見ることは、「老の身にくるしき山のさかこえてなにとよそなる花をみるらん」（新後撰集・春・山花・九四・前大納言為家）など。「千里の花」は遙か遠くにある花。「峰たかみすむべかりけりゆきやらで千里の花を麓にぞみる」（逍遊集・春・五三〇）。連歌に「富士のねをいくへの雪にのぼるらむ／千里の花を見もつくさばや」（表佐千句・第四・八八）。春1（花）。

78 かすみこめたる山を望める

寿三

「山↓花」（類船集）。「千里」先にある「山」に行ってみると、遙か彼方まで霞んでいる山を眺望する、と詠む。「高ねより花の木の間を見くだせば千里に霞む春の雲水」（草根集・十・七四五〇・寄花眺望）。「霞こめたる」は霞にすっぽり覆われているさま。「おもひやる心やはなにゆかざらん霞こめたるみ吉野の山」（山家集・春・六三）など。韻字は望（ノゾム）。春2（かすみ）。

暖かさを帯びてきたので樵夫の歩みが進む、と詠む。「樵夫↓山路」（類船集）。「たえすわがわざとしながら山ふかき道わけわぶる木こりなるらん」（言綱卿詠草・樵夫・三六〇）。「帯暖」は大気が暖かさを帯びること。「吟朗倚欄頭（吟朗 欄に倚る頭）／帯暖梅如字（暖を帯びて梅字の如し）」、「きけばはるかに帰るかりがね／帯暖行舟緩（暖を帯びて行舟緩し）」（天正十九年四月和漢千句・第一〇・五・有節）など。春3（句意）。

80 むらのかたへにつゞく草墻

素然

前句で山にいた「樵」が、村のそばに歩いて来て、草垣が村の端に続く、と詠む。「むらのかたへ」は村の片一方。「あらしのすゑもかすむつきかけ／すきむらのかたへのさくらちりはてて」（紹巴亡父追善千句・第一・一五）。「草墻」は草を垣根のように茂らせたもの。韻字は墻（カキ）。雑。

79 帯●暖●進●樵●歩○

（暖を帯びて樵歩進む）

西咲

前句の「山」の中を歩く「樵」の姿で付けて、大気は

81 通●喜●無●温●問○

（通れて喜ぶ 温問無きことを） 清叔

前句を村外れに住む隠者の住まいとし、中央の権力者

から召されないので嬉しいことだ、と付けた。「温問」は暖かい気持ちで人を訪ねること。慰問。和漢聯句に、「玉章におもふ心をかすませて／温問毎難逢（温問 毎に逢ひ難し）」（弘治二年八月和漢千句・第六・九六・策彦）など、よく詠まれた。特に、天正十九年の和漢千句における趣向は、当該句のそれと類想的である。雑。

82 宮づかへせんことぞ惶る

紹巴法橋

前句の内容から、宮仕えをするようなことは恐ろしい、と詠む。「あさなあさなつかへていそぐ宮人のあとをのみみる庭のしらゆき」（新千載集・冬・七〇一・後醍醐院御製）、「たえず野山を心とやせむ、／いとまなき宮仕へにも身をわびて」（東山千句・第三何船「をきにかせ」八七）。韻字は惶（ヲソル、）。雑。

83 顧吾三不軾

（吾を顧みて 三たび軾せず） 有和

私をお訪ねになること三度、敷物も敷かれなかった。劉備が諸葛亮を迎えた、「三顧の礼」の故事を踏まえる。「先帝不以臣卑鄙。猥自枉屈。三顧臣於草廬之中（先帝

は臣を以て卑鄙とせず、猥りに自ら枉屈し、三たび臣を草廬の中に顧みて）」（古文真宝前集・「出師表」）とある。「軾」は膝突き。劉備が地面に座して諸葛亮を説得したさまをいう。雑。

84 宿にうつしてふかき篁

昌叱

家に移し植えて深くなつた竹藪、と詠む。付合は不明、前句の「軾」を蘇軾として、胸中成竹有り、すなわち竹の絵を描く時、胸中にまず生長した竹を思い浮かべるとした、有名な「篁谷偃竹記」を想起したか。あるいは竹林七賢の住居を想起か。「うつしうへて幾代か宿のなよ竹に七のかしこき人も住みてん」（為和詠草・五「庭上竹」）など。韻字は篁（タカムラ タケ）。雑。

85 春秋のあはれもいかにけさの雪

心前

前句の「宿」の庭に降る雪の景色で付けて、春・秋の趣深さは、今朝の雪の美しさと比べて優るものか、と詠む。その雪は竹に降り積もる。「まづ一節やうちもかこたむ／なよ竹の折るばかりなる今朝の雪」（文龜三年四

月二十九日何人百韻「まつこえし」・六九。「雪↓窓の竹」(類船集)。発想は「春秋のをりのあはれをすぐしきてふかく成りぬる雪の山里」(拾玉集・冬・一日百首・九三六・慈円)などが似ている。冬1(雪)。

86 ●○●●●◎  
景晴瘦杖償

(景晴れて瘦杖償ふ)

有節

前句の「雪」が晴れて外へ出かけたと付けて、良い景色に痩せ細った杖でも十分その甲斐があった、と詠む。

「景晴」は「林暮鐘風聞(林暮れて鐘風聞く)／景晴車日留(景晴れて車日留む)」(天正十九年一月晦日和漢聯句・八・由己)など。「瘦杖」は「偶伴寒梅情不常、一枝杖瘦鬢蒼々たり。」(雪叟詩集・一〇二三・三)など。韻字は償(ツグナフ ムカフ カヘス アタル)。雑。

87 ●○●●●◎  
五湖詩界窄

(五湖 詩界窄し)

由己

前句で佳景を歩き回ったのを受けて、雄大な五湖でさえ、詩で作る世界にとっては窮屈である、とふざけて詠むか。「五湖」は中国太湖付近の五つの湖水。越王のも

とを去った范蠡の故事で名高い。「眼裏に塵あつて三界すぼく、心頭無事にして一生ひろし」(謡曲「清経」)。「雪のうへにも梅が香ぞする／詩界鶯千里(詩界鶯千里)」(天文九年四月十八日和漢聯句・二三・御製)。雑。

88 ●●●○◎  
隻日墨雲翔

(隻日 墨雲翔ける)

兼統

対句。前句の世界が狭いというのを、墨のような黒い雲がかかった、と理由づけした。「隻日」は一日中。「墨雲」は、和漢聯句に「詩興恐催租(詩興 催租を恐れる)／洗硯墨雲湧(硯を洗ひて墨雲湧く)」(天文九年四月十八日和漢聯句・範・六六)など。韻字は翔(カケル トブ)。雑。

89 にはかなる嵐に雨のきほひ来て

寿三

前句の「墨雲」が嵐と雨の前兆となり、唐突な嵐に雨も競ってやって来て、と詠む。「雲↓雨」(類船集)。「きほふ」は先を争ってする。せり合う。「俄なる夏の雨風くもりきて木末の蛙こゑしきるなり」(草根集・九・六八八八「夏蛙」)。雑。

2 (月)。

90 ひいでにけりな小田のわか秧

玄旨法印

前句の嵐や雨によつて、穂が秀でたことだな、小田の若い稲は、と詠む。「あしひきの山田の稲もひいでにけりうゑしにあはぬ我が刈りに来ん」(家持集・秋・一八六)。「小田のわか秧」は下葉の多い稲のことか。「い寝がて」に掛ける。「ひとりすむ門田のいほの月かげにわがいねがてを問ふ人もなし」(続拾遺集・秋下・三一四・前内大臣師)。韻字は秧(イネ マク ウフル)。秋1 (わか秧)。

91 水清涵月色

(水清くして 月を涵す色)

有節

前句の「小田」の近くにある水辺の情景で付けて、水が澄み、豊かな月の光が映る、と詠む。「かりのくる伏見の小田に夢さめてねぬよのいほに月をみるかな」(新古今集・秋・四二七・前大僧正慈円)など。「涵月」は水面に映る月をひたすと表現。「くるゝかと霞にもるゝ鐘きゝて／水天涵月澄(水天 月を涵して澄みたり)」(享禄元年閏九月四日和漢百韻・一〇・新中納言)など。秋

92 なみのまに／＼なをくづれ梁

心前

前句の月を波間から見えるものとして付け、川の波間に壊れた梁も見える、と詠む。「波間より出でける月を船とめて山の端みゆるかたにまつかな」(草庵集・羈旅・一三一五・月前旅宿)。「なみのまに／＼」は波のよせるままにの意。「くづれ梁」は漁期が過ぎて不要になった下り梁が、風雨などで破壊されたまま水中に放置してあるもの。「くづれやな。暮の秋なり」(連歌至宝抄)。「波の浮き木や岩にくだくる／もりすててかたへばかりのくづれやな」(天正十一年閏一月二十七日百韻「こすゑをも」・七一)。韻字は梁(ウツバリ ハシ ヤナ)。秋3 (くづれ梁)。

93 冷じく成りつゝ春も瀧つ川

素然

前句の「なみ」を「瀧つ川」に立つものとして付けて、滝川の水も冷たくなりつつも、春は立つと詠む。「いし



ばしる滝つ河波をちかへり山時鳥ここになかなん」(題  
林愚抄・秋・二一七二・前大納言資季)、「深山路やこ  
のしたいはねひとこえて／くだくる波やたきつ川風」(文  
安雪千句・第九山何「つきゆきの」・四)など。「冷じ  
く成つゝ」は水温が冷たくなる。「みるまゝに庭のやり  
水すさましくすみ行く月のかげ深けにけり」(拾翠愚草  
集・庭月・九〇五)。「瀧つ川」は急流。「いはたたく瀧  
つ川波おとさえて谷の心や夜さむなるらむ」(新勅撰集  
・冬・三九六・前関白)など。「春も」の「も」は気温  
も冷たいし、滝つ川の水温も冷たいということを言うか。

「夏の夜の月やかすかにのこるらむ／涼しくあくる瀧つ  
川波」(文明万句・第七千句・第十六)。春1(春)。

94 山嶮奈神傷 (山嶮しくて奈んぞ神傷まん) 由己

険しい山でも、どうして心が傷つけられることがある  
うか、いやそのようなことはない、と詠む。「神傷」は、  
杜甫の「神傷山行深、愁破崖寺古(神は傷む山行の深き  
に、愁ひは破る崖寺の古きに)」(集千家註杜工部詩集

・十一「法鏡寺」とあるのによる。韻字は傷(キヅツ  
ク イタム ソコナフ)。春2(句意)。

95 鞋為探花秣 (鞋は花を探さんが為に秣つ) 有和

前句で山が「嶮」であり、履き物は花を探すために歩  
きまわったのですり減る、と詠む。「鞋」は草履。麻・  
草・皮などでつくったはきもの。「秣」はここではすり  
減るの意か。「くるゝいそへにとをき鹿の音／探幽鞋未  
秣(探幽す 鞋未だ秣さず)」(享祿元年九月十三日和漢  
百韻・六五)。「秣鞋自笑似臣甫、欲問若溪雲寺人(秣  
鞋自ら笑ふこと臣甫に似たり、問はんとす若しや溪雲寺  
の人かと)」(翰林五鳳集・欽依梅岑俊少試翰嚴韻・仁  
如)。春3(花)。

96 茶如酌杏嘗 (茶 杏を酌むが如く嘗む) 清叔

対句。茶を酒を飲むかのように、嘗めて味を試す、と  
詠む。「酌杏」は「花雖深洪落(花深きと雖も洪くして  
落つ)／杏酌雅筵彈(杏酌雅筵弾く)」(天正十年月日未

詳和漢聯句・五〇・竹)。靴と茶との取り合わせは「鞋  
ハ歴<sup>テ</sup>ニ長途<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>倦<sup>ム</sup>／茶ハ将<sup>テ</sup>双井<sup>ヲ</sup>烹<sup>ル</sup>」(天正三年十一月  
二十五日漢和聯句・八二・令彰)。韻字は嘗(ナムル  
ココロム カツテ)。春4(杏)。

97 かくれがはかすむ市ぢの一かたに 昌叱

前句の「茶」は「かくれが」で飲むと付けて、俗世を  
離れた住まいは、市へ通じる道の片側に、と詠む。「か  
くれがのある世もしらずしば人や山に入りては市に出づ  
らむ」(亜槐集・樵夫・一〇五五)など。「かすむ市ぢ  
の」は市へ通じる道が霞んでいること。「春霞あべの市  
路をこめつればすがたを声にかへてけるかな」(林葉集  
・春・四四)。春5(かすむ)。

98 ぬすたつ鳥の跡とむる 嶺 玄旨法印

鷹や狩人に隠れて飛び立つ鳥のあとを追う、と詠む。  
「ぬすたつ鳥」は日葡辞書に「Nusudachi, tsu (ヌスダツ)  
鷹や狩人を恐れて、つぐみ、きじが草の中や林の中へか

くれる」とある。和歌連歌には稀有な表現。「みるかた  
はそことばかりの春霞／こゑせし鳥のぬすたちてゆく」  
(天正二年五月八日山何百韻「かせふけは」・三四)。「落  
草の犬のおぼえやうとからじぬす立つ鳥の跡のかり声」  
(為和詠草・一四六「鷹狩」)は、当該句に見える「犬」  
「跡」の語も詠み込まれている。「跡とむる嶺」は  
行方を尋ねあとを追う鷹犬のこと。「跡とむるこまのゆ  
くへはさもあらばあれうれしく君にゆきにあひぬる」(山  
家集・冬・雪朝会友・五三四) 嶺は、鷹狩の時に用い  
る獵犬で、「鷹犬」と言われた。韻字嶺は(イヌ)。  
雑。

99 豈<sup>●</sup>空<sup>○</sup>風<sup>○</sup>致<sup>●</sup>會<sup>●</sup> (豈に空しからんや風致の会) 兼統

前句と付いた時、「空」は鳥が飛び立った先を指す実  
体あるものだが、当該句では「空しい」という感覚的な  
表現に読み替えて、どうして虚しいか、いや、そのよう  
なことはない。この品格に富んだ会合は、と詠む。「風  
致」は品格、趣のこと。「若使過門相見了、千年風致一

時休。」(錦繡段抄・訪戴圖・來子儀)。招かれた客人として一座した歴々への謝意か。雑。

原野十花千句・第三何衣「つきはなに」・八六)など。「友ぞ常なる」は、いつもと変わらない顔なじみの友人らのこと。常に変わらない仲間で会を行う歓び、そして

100 哥のむしろの友ぞ常なる

紹巴法橋

兼続への歓迎が詠まれるか。だが、和歌・連歌では「秋

前句の「会」を歌会と読み替えて、歌会に集まる仲間  
はいつも一緒だ、と詠む。「哥のむしろ」は歌会のこと  
だが、当聯句会それ自体を指すか。「おもふどち桜が下  
にながめつつうたのむしろに花をしくかな」(正治後度  
百首・季保・宴遊五首・一八六)、「笛の音にあはする  
こともあだめきて／歌のむしろやいひしらぬとも」(大

の月」(続拾遺集・雑秋・五九七・高弁上人)など、自  
然の景物がいつもと変わらないと詠むのが常套であり、  
当該句のように仲間の顔ぶれはいつも通りであるという  
用例は見いだせない。韻字は常(ツネ)。雑。

注

1 熊本大学法文学部国文学研究室『細川家旧記・古文書分類目録・永青文庫』(一九六一年)の目録に著録。

2 土田将雄『細川幽斎の研究』笠間書院、一九九〇年、『続細川幽斎の研究』笠間書院、一九九四年。

中澤肇「文化人としての兼続」一四四頁(花ヶ前盛明『直江兼続のすべて』新人物往来社、一九九三年)。

大島富朗「翻刻「細川幽斎和漢・漢和聯句」その一(上)」(昭和女子大学「学苑」六七四号、一九九六年)。

鶴崎裕雄「直江兼続・大国実頼兄弟と寄合の文芸」(花ヶ前盛明『直江兼続の新研究』宮帯出版社、二〇〇九年)。

赤嶺孝仁・國部真貴子・竹島一希「天正十六年閏五月八日張行漢倭聯句―翻刻と解題―」(国語国文学研究第51号、

二〇一九年)

3 細川幽齋連歌の基礎資料として管見に入った和漢・漢和聯句を翻刻することを目的に、大島氏は『翻刻「細川幽齋和漢・漢和聯句」』その一〜その三(六七四〜六九四号・一九九六〜一九九八年)において、年月日未詳のものを含め、天正八年から慶長三年にかけて、細川幽齋が出座した和漢・漢和聯句、三十作品を翻刻している。諸機関に残された幽齋関連の聯句を網羅的に収集し、まとめる。

4 前掲注 1 参照。

5 渡辺憲司『近世大名文芸圈研究』八木書店、一九九七年。

はじめに

直江兼続主催のこの漢和聯句百韻「楓散風紅色」（以下、「本漢和聯句」等と略す）は、それ自体の存在は知られており、既に『大日本古文書 上杉家文書』九六八や、『大日本史料』一二編之三二・元和五年十二月十九日条に翻刻が収められているが、参加者の紹介、興行時期の推測、数句の引用にとどまり、全体の内容を読み解いた研究はない。

しかし、その興行が朝鮮出兵をはじめ秀吉と上杉家との政治的結びつきが本格化する時期であること、メンバーが兼続を中心とした当時の上杉家文壇を構成する武士・禅僧らであり、特に歌学に通じた成田氏長・木戸元斎、連歌師の紹旨・了意、さらに秀吉・家康の政治顧問として知られる西笑承允など著名人を含むなど、かたがた注目すべきものである。兼続は天正末年から慶長初年にかけて、知られるだけで一二回の連歌・聯句に参加しており、文芸への意欲は非常に旺盛であったと言える。

このような兼続および上杉家の文壇の、代表的成果としての意義が認められることから、本漢和聯句の注釈を試みた。

底本には、米沢市上杉博物館蔵『直江城州漢倭』を使用し、刊本『上杉家文書』と東京大学史料編纂所蔵謄写本を適宜参照した。

## 一、底本書誌

まず、底本の書誌について略記する。

目録書名は「直江兼統一座漢倭聯句百韻写」。整理番号四三八。袋綴一冊。弁柄色後補表紙（一五・〇×二〇・七糎）。外題は左肩に後補貼題簽、「直江城州漢倭 全」と墨書、原題簽は見返しに貼付、「直江城州漢倭 全」と墨書。内題は「漢倭」とのみ。料紙は楮紙。一〇行書。字面高一三・五糎。墨付六丁、後遊紙九丁。奥書識語などなし。まれに語注あり。同筆で返り点・傍訓・縦点・送り仮名・清濁などを附す。江戸末期から明治初期の書写と見られるが、書写態度は厳密である（図版参照）。

なお明治期のものと思われる包紙のウハ書に「一印／京都ニて直江山城守相国寺兌長老／を招漢和興行之懐紙写／（朱）『筆者 宇津江朝清』」とある。親本は本漢和百韻にも参加する宇津江朝清の筆にかかるという。朝清は兼統の右筆で、しばしば連歌・聯句では一座の執筆を務めていたので、近代の証言ながら、信憑性はあるう。

現在のところこれ以外の伝本は知られず、これまでの翻刻・謄写本はすべてこの本を底本としている。

漢倭

楓散風紅色 西咲  
 去々向々乃倍 昌茂  
 月かりより霧は深く影は長く  
 捲た巻まり好賞高 兼統  
 暮天看盡鳳 仙嵩  
 田たんたんのくくと方 了意  
 川かわの日ひは新く涼しけ 朝清  
 雪ゆき消え岩は徑 歎

たれあつてなれと川の水を日 茂  
 たらせりゆりゆき亭方 長

相國寺老長老 西咲 十三  
 昌茂 九  
 氏長 八  
 兼續 十  
 仙嵩 九  
 了意 十

唐列里足利ノ屋上 朝清 七  
 言後 七  
 仙嵩 一  
 了意 十  
 仙嵩 九  
 了意 十

二、翻刻

漢倭

15	鷗邊無 <small>チヨツチヨク</small> 黜 <small>一</small> 陟 <small>一</small> <small>進退ノ</small>	兼	32	露盤玉 <small>一</small> 已 <small>ニ</small> 瑜 <small>タリ</small>	咲
14	十年釣 <small>ル</small> 渭 <small>ニ</small> 姜 <small>キヤウ</small> <small>太公望也</small>	西	31	冷袖舟先 <small>一</small> 繫 <small>ク</small>	俊
13	とはれしとおもふか内に憑まれて	昌茂	30	月にはけしき秋の川 <small>庭</small>	意
12	空閨幾 <small>カ</small> 斷 <small>カ</small> 腸 <small>ソ</small>	氏秀	29	を初瀬やくるとあとの鐘の聲	旨
11	扇こそ明行月の名残なれ	素仙	28	山ハ彰 <small>ニ</small> 金 <small>コソ</small> 佛 <small>ノ</small> 相 <small>ヲ</small>	続
10	かさなる山そ雲に藏るゝ	壽三	27	景 <small>ハ</small> 落 <small>ニ</small> 畫 <small>工</small> ノ手 <small>ニ</small>	需
9	経 <small>レ</small> 岨 <small>ソ</small> 樵 <small>ヲ</small> 歩 <small>ム</small> 倦 <small>ム</small>	言俊	26	分行さとなつゝくむら笹	茂
8	雪消 <small>メ</small> 岩 <small>ノ</small> 徑 <small>彰</small> ル	朝清	25	かすむ野の日の色うすみ雨晴て	長
7	川音も日のさす影も長閑にて	紹旨	24	雲みはるかになく夕鶺鴒	仙
6	田面の原のかすむをち方	了意	23	春遊歸計少	西
5	暮天看 <small>一</small> 盡 <small>ス</small> 雁 <small>リ</small>	仙需	22	風ハ微 <small>ナリ</small> 桃 <small>ノ</small> 李 <small>ノ</small> 場	言
4	捲 <small>レ</small> 簾 <small>ヲ</small> 好 <small>シ</small> 賞 <small>スルニ</small> 商 <small>アキラ</small>	兼続	21	雪ほとは積もらぬ花の苔むしろ	三
3	月になる霧の降そふ瀧おちて	氏長	20	敷かへけりな衣手の霜	旨
2	しくるゝあとの山の傍	昌茂	19	鐘ハ破 <small>ル</small> 永 <small>ノ</small> 宵 <small>ノ</small> 夢 <small>ヲ</small>	清
1	楓散 <small>メ</small> 風紅 <small>ノ</small> 色	西咲	18	秋寺不 <small>ニ</small> 尋 <small>常</small> ナラ <small>一</small>	需
			17	たえ／＼の霧にむら立松みえて	意
			16	ふもとの嵐吹すつる迹	長
					「初折ウ



33	浮なみたまきれやすの亂碁に	仙	「二折ウ
34	淡・燈照ニス獨・床ヲ	清	
35	童 <sup>レ</sup> 眠 <sup>テ</sup> 書 <sup>レ</sup> 儘 <sup>マ</sup> 擲 <sup>ツ</sup>	続	
36	道のをしへそなたゝ忘る	三	
37	さきたつる行衛をたとり山くれて	意	「二折オ
38	眞柴こるおのかへるかた岡	旨	
39	花ハ雖ニ幽・處ト美 <sup>ナリ</sup>	咲	
40	杏 <sup>ハ</sup> 在 <sup>テ</sup> 遠 <sup>ニ</sup> 村 <sup>ニ</sup> 粧 <sup>ウ</sup>	需	
41	おもふとちまとひにあかぬ春なれや	茂	
42	溪・流飛 <sup>ニ</sup> 羽 <sup>ニ</sup> 觴 <sup>ヲ</sup>	続	
43	もらさしとかけしを君の恵にて	三	
44	しもかしもまで人そ惶るゝ	仙	
45	矮 <sup>ワイ</sup> 屋 <sup>ラク</sup> 難 <sup>レ</sup> 推 <sup>レ</sup> 暑 <sup>ヲ</sup>	清	
46	密 <sup>イ</sup> 雲 <sup>カン</sup> 奈 <sup>レ</sup> 隔 <sup>レ</sup> 郷 <sup>ヲ</sup>	俊	
47	かへりみる跡遠さかる旅の空	長	「三折オ
48	浪よりなみにこく奥津艫	意	
49	更 <sup>レ</sup> 深 <sup>ケ</sup> 月 <sup>ク</sup> 寒 <sup>ク</sup> 互 <sup>サユ</sup>	需	
50	日 <sup>ノ</sup> 昇 <sup>ホツ</sup> 峯 <sup>ツ</sup> 近 <sup>ク</sup> 望 <sup>ム</sup>	咲	
51	霞もや山かた分て晴けらし	旨	「二折ウ
52	ほのかにかへる雁の一行	長	
53	塵 <sup>ソム</sup> 裡 <sup>ニ</sup> 負 <sup>ク</sup> 春 <sup>ニ</sup> 客 <sup>カ</sup>	続	
54	朝 <sup>シ</sup> 来 <sup>ル</sup> 下 <sup>ル</sup> 殿 <sup>ヲ</sup> 嬪 <sup>シヤウ</sup>	清	
55	偽 <sup>キ</sup> ・眞難 <sup>レ</sup> ハ辨 <sup>シ</sup> 約 <sup>ク</sup>	咲	
56	あひおもふにもつらき妨	三	
57	露 <sup>ノ</sup> 間疎 <sup>ニ</sup> 影 <sup>ノ</sup> 月	俊	
58	秋の田つらの行かひも亡し	茂	
59	やゝ寒き伏見の野辺のくるゝよに	意	
60	風のまゝなるすゑの篁	旨	
61	閑 <sup>ニ</sup> 寂鳥知 <sup>ル</sup> 楽 <sup>ヲ</sup>	需	
62	聯 <sup>ヘン</sup> ・翻蝶似 <sup>レ</sup> 狂 <sup>スル</sup> ニ	咲	
63	花さくはすみれましりのくさむらに	仙	
64	霞 <sup>シテ</sup> 融 <sup>シ</sup> 詩 <sup>ノ</sup> 債 <sup>ノ</sup> 償 <sup>ノ</sup>	続	
65	けふもたゝ酒のむしろにくらしはて	長	
66	市のかりやにとまる 賣	意	
67	ふりきぬる雨の氣色を三輪か崎	三	

85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	
取とむる衣を形見もはかなしや	のこるもうすき袖の移り香	電・頃相逢處 <sup>ロ</sup>	別・涙露 <sup>ジヤウ</sup> 濃々	つまことのおもひもまさる秋のくれ	樓・頭横・笛揚ル	機・外遊・糸乱ル	しつえかたよる岸の青楊	瀧津瀬にせきとめられぬ花散て	朧・月水念・忙	晚・煙山鎖・着 <sup>サチヤク</sup>	民の家居も猶昌なり	國遠き御調もはこふためしあれや	今・古力擒 <sup>ヒス</sup> 強 <sup>ヲ</sup>	濁・清胸不 <sup>ムネ</sup> 混	海・深括 <sup>ク</sup> 、 <sup>コ</sup> 智・囊 <sup>ニ</sup>	波・激 <sup>メ</sup> 停 <sup>ム</sup> 征・櫓 <sup>ヲ</sup>	袖に杉間の風そ荒たる	
旨	長	咲	清	茂	俊	需	旨	意	咲	俊	茂	旨	続	咲	需	清	仙	
						┌ 三折ウ												
			100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	
			たちそふ波のとをき旁	なかれあるとみのを川の末廣み	少・室渡 <sup>リ</sup> 堪 <sup>レ</sup> 航 <sup>フナワタシスルニ</sup>	深・宮門可 <sup>レ</sup> 鑰 <sup>ヤク</sup> ス	暮れはしはし人そ彷徨	分かへる野はたひ／＼の雨そゝき	露 <sup>ハ</sup> 於 <sup>テ</sup> 蘭 <sup>・</sup> 草 <sup>ニ</sup> 芳 <sup>シ</sup>	すゝむしの声は砌に遠からて	秋になりぬる月の涼しさ	とくはたゝかはる日毎の法の道	あかぬをまゝの袖の倡ひ	吟 <sup>履</sup> 為 <sup>レ</sup> 花 <sup>ノ</sup> 緩 <sup>シ</sup>	鶯 <sup>モ</sup> 亦 <sup>タ</sup> 弄 <sup>フ</sup> 春 <sup>・</sup> 光 <sup>一</sup>	あら玉の年や今朝より霞むらん	あつまのはてにかへる装ひ	
				長	茂	需	咲	仙	意	続	旨	三	仙	意	続	咲	三	茂
				┌ 名残折ウ							┌ 名残折オ							

了意	成田内衆	仙需	同歸衣僧	兼統	直江山城守	氏長	成田下總守	昌茂	城織部	西咲	相國寺兌長老
十		九		十		八		九		十三	
氏秀	來次出雲守	素仙	竹田	壽三	木戸元齋	言俊	池上兵部少	朝清	宇津江九右衛門	紹旨	房州里見殿ノ後見
一		八		八		七		七		十	

### 三、連衆

連衆は十二名で、百韻を詠むのに平均的な人数であり、漢和それぞれ六名ずつ。巻末に作者と句数を記した句上がある。句上は出詠順に右から左へと記されている。これをもとに、連衆を紹介する。( )内は14句以後用いられる略称。

#### 〔漢句作者〕

・西笑(西・咲。咲は笑と通用)：西笑承兌。相国寺長老、鹿苑院主、秀吉・家康の政治顧問。慶長十二年(一六〇七)十二月二十七日没、六十一歳。

・兼統(兼・統)：直江。伝は略す。

・仙壽(需)：伝未詳。句上に兼統の帰依した僧とある。

・朝清(清)：宇津江九右衛門。直江直属の与板衆(与板城時代からの側近)。執筆。都の連歌会でもしばしばその役を務めた。後世「能書にて文学大才」(越後治乱記・御家中諸士略系譜)と評される。

・言俊(言)：句上に「池上兵部少輔」とある。兼統の家臣。

・氏秀：来次出雲守。直江抱(兼統の家来)。出羽国人、庄内羽黒山神職家の出身。はじめ最上氏に仕え、天正十九年庄内藤島一揆討伐の時、景勝に帰服した。

#### 〔和句作者〕

・昌茂(昌)：城。織部佑・和泉守。武田信玄の家臣で武田氏滅亡後、家康に仕えた。寛永三年(一六二六)七月二日七十六歳で没。

・氏長(長)：成田下総守。はじめ上杉謙信に、ついで小田原北条氏に仕えるが、天正十八年秀吉の小田原攻めで没

落。翌年に上洛し、秀吉から下野烏山城を与えられる。歌学に通じ連歌をよくした。文禄四年（一五九五）十二月十一日没、五十四歳。

・了意（意）：紹巴門の連歌師。師の点を受けた千句があり、連歌初心抄の著もある。なお、句上に氏長の内衆とあり、氏長が召し抱えていたらしい。

・紹旨（旨）：連歌師。里村紹巴の弟子。関東衆。句上に「房州里見殿」の後見とある。これは里見義康（一五七三）一六〇三）か。

・壽三（三）：木戸元齋。俗名は範秀、和泉守、遁世して沙弥休波と号す。羽生城主忠朝二男。上杉景勝の実父長尾政景の代に浅間石見守とともに執権職にあった。関東歌壇の重鎮としても著名で、後年には景勝側近の雅客となつた。

・素仙（仙）：句上に「竹田」とある。紹巴門の連歌師か。

#### 四、注釈

1 楓○●散風紅○●色（楓散じて風紅色たり）

西咲

2 しぐるゝあとの山の傍

昌茂

一句は、楓の葉が散り、風が紅色に吹くと詠む。紅葉は連歌新式「可分別物」に「紅葉散て物を染る已上冬也」とあるので、冬の句と定めた。景勝と兼続の旅程から閏九月秋ではなく十月冬の開催とみてよい（第一章第一節参照）。冬1（楓散）。

時雨がふりそそいだあとが見えるとして句意で付けて、時雨の降った跡が見える山の側面、と詠む。「風↓時雨」（類船集）。二句目の押韻字を「入韻字」といい、形式的にこの巻の韻は陽唐韻に定まった。「傍」は、韻府群玉・一三によれば、下平声「七陽（與唐同用）」に

属する。いわゆる陽唐韻で、以下和訓押韻・漢和三五韻でも陽唐韻の項に在り、「かたはら」の訓が見える。「しぐるゝあと」は時雨の通った跡の木々が特に色づくといふことで、「紅葉葉の山をめぐりて色づくはしぐるるあとのみゆるなりけり」(弘長百首・紅葉・三四三・信実)などが見られる。「山遠くしぐるゝ跡は霧こめて」(文明七年因幡千句・第一・九・承世)はそこを霧が立ち隠す情景。冬2(しぐるゝ)。

3 月になる霧の降りそふ瀧おちて

氏長

連珠合璧集に「霧トアラバ：時雨」とある。第三句目で、時分が夜に経過し、山々の紅葉の景色から水辺への展開をはかり、いずれ月夜になるであろうが、瀧の落ちるあたりに、霧も降りて来ている、と詠む。連歌では「瀧」単体では一句物だが、漢和法式では一座二句物、「只一、名所一、涙ノ瀧別有之」とある。「月になる」は、伝統的な和歌の詠法では「慣る」の意がほとんどであるが、ここでは「いずれは月夜になる」の短縮した言い方であろう。「しがのうらや月に成るらしおほひえや

峰にひかりの遠ざかりゆく」(雪玉集・一二二六「嶺月」)、「月になる霧の水上なほすずし」(永祿四年三月二十二日何垣百韻・八一・宗養)など、同時代の例が見られる。秋1(霧・月)。

4 捲簾好賞商(簾を捲きて商を賞するに好し) 兼統

水が簾のように垂れることから滝の異称を「水簾」といい、そこから滝と簾が付合となり、簾を捲き上げて秋を楽しむのに好い頃である、と詠む。たとえば「曲水なし石を立て、水簾・水錦のけしき、庭前の風景、ことごとく水躰を作成せるは：」(世阿弥・曲附次第)とある。「捲簾」とは、簾を捲き上げ、外の景色を眺める意で、たとえば「晝棟朝飛南浦雲。朱簾暮捲西山雨(晝棟朝に飛ぶ南浦の雲。朱簾暮に捲く西山の雨)」(古文真宝後集卷三・滕王閣序・王勃)とある。「商」は、「仲秋之月 其音商(仲秋の月 其の音は商)」(礼記・月令第六)とあるように、五音の「商」を四季の秋に当てたもの。秋2(商)。

5 暮天看尽雁（暮天に看尽くす雁）

仙需

秋を「商」と表記することから、雁との寄合で、前句では商で「しよう」という音を踏んでいるのみだったが、付合で「商」の字を使ったことが活きて、暮れかかる空に見えなくなるまで見つめていた雁、と詠む。「胡雁一声、秋破商客之夢、巴猿三叫、晓霑行人之裳（胡雁一声、秋商客の夢を破る、巴猿三叫、晓行人の裳を霑す）」（和漢朗詠集・猿・四五七・大江澄明）を踏まえる。「商客」は行商人。「雁」は新式で「春一。秋一、如此二句之物、懐紙をかへてすべき也」、漢和法式でも「春一、秋一」とされ、一座二句物である。「暮天」は暮れかかる空のことで、雁との取り合わせは「鴻声断続暮天遠、柳影疎疎秋日寒（鴻（カリ）の声断続し暮の天遠し、柳の影蕭疎として秋の日寒し）」（新撰朗詠集・雁・三〇一・李順）などの用例が見える。秋3（雁）。

6 田面の原のかすむをち方

了意

伊勢物語・一〇段、「み吉野のたのむのかりもひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる」より、田面と雁がつく。

秋から転じ、春の帰雁にとりなして、田の広がる原の遠

くの方が霞んでいる、と詠む。「田面の原」とは、田のおもてのこと。春1（かすむ）。

7 川音も日のさす影も長閑にて

紹旨

前句の田に日の光が射し込む情景を付けた。「たち騒ぐ流れの末の群千鳥／田面の原の入日さむけし」（天正六年二月十八日何路百韻・六）。連珠合璧集「霞トアラバ：のどかなる」。田面の傍らに日影のうらかな水辺の景を付けて、川の音も、さす日の光もうららかなで、と詠む。「日影さす岡辺の雪やきえぬらむ／つくる田面の水にごるなり」（宝徳四年千句・何船第三、三・竜忠、四・日晟）など。春2（のどか）。

8 雪消岩径彰（雪消じて岩径彰はる）

朝清

随葉集に、「雪消とあらば、日のさす：河水のます」とある。雪解け水が多くなって川の音が高くなるような状況を付けて、雪が消えて岩山の道が顕わになった、と詠む。ここまですが初折オモテである。漢和法式によれば、

「面八句、漢四句和四句也、内ニ漢ノ对句一所あるへし、漢昌句なれば八句目和也、和ノ発句なれば八句め漢句也」とあるが、本聯句の初折オモテは、漢句の対句はなく、漢が発句であるのに八句目は和句になっておらず、法式を忠実に守っているとは言い難い。春3（雪消）。

9 經<sup>○</sup>岨<sup>○</sup>樵<sup>●</sup>歩<sup>●</sup>倦<sup>●</sup>（岨を経て樵歩倦む）

言俊

前句の「岩径」を「岨」で受けて、険しい崖を伝わって樵夫の歩みは倦み疲れる、と詠む。また「雪↓木こり」（類船集）。「岨」は、産衣に「山の嶮岨也。只と、名所と、二句也。岨ニかけ路、五句。仍説。山の岨ハ、田のそハなど地のかたさがりに、けんそなるを云也。」とあり一座二句物とする。「樵歩」は用例乏しいが、樵夫の歩みの意であろう。また、前句で雪が融けて現れた道を歩むととりなした。雑。

10 かさなる山ぞ雲に蔵るゝ

壽三

連珠合璧集に「樵夫トアラバ、山」とあり、連なる山は雲に隠れている、と詠む。句末は「る」であるが、韻

字は「蔵」でとる。和訓押韻（北岡本）「蔵（カクル）小一（ヲクラ）山名」、漢和三五韻「蔵カクス ヲサムカクル」。 「かさなる山」は、「岩根ふみかさなる山はなけれどもあはぬ日かづをこひやわたらん」（拾遺集・九六九・坂上郎女）、「雲かかりかさなる山をこえもせずへだてまさるはあくる日のかげ」（拾遺愚草・上・朝恋・八六七）などに見られる。雑。

11 扇こそ明け行く月の名残なれ

素仙

前句からは「月隠重山兮、撃扇喩之、風息大虚兮、動樹教之（月重山に隠れぬれば、扇を撃げて之に喩ふ、風大虚に息んぬれば、樹を動かして之を教ふ）」（和漢朗詠集・仏事・五八七・摩訶止観）、「月」「重山」「扇」と語が重なる典拠をもつてつけて、扇の形こそ明けゆく中で見えなくなつた月の名残なのである、と詠む。「月」は真理の喩、真理が見えなくなつてもその類似のものを示して理解させる意。恋句の呼び出しとはなるが、当該句を恋句とは断定し難い。夏1（扇）。



12 空閨幾断腸<sup>○</sup> (空閨幾たびか断腸ぞ)

氏秀

前句の「扇」に掛けられる「逢ふ」に付いて、前句を「月が明けゆくまで男を待ち続けたが、かつて逢ったときの扇だけが残されたまま過ぎること幾日か」と詠む。

連珠合璧集に「扇トアラバ、閨」。前句の月が男の、扇は女の暗喩としてみると、扇は秋になると用済みのものとして捨てられてしまう。「班女閨中秋扇色、楚王台上夜琴声（班女が閨の中の秋の扇の色 楚王の台の上の夜の琴の声）」（和漢朗詠集・雪・三八〇・尊敬）とある。

「空閨」は、相手がなく一人で寝るさびしい寝室のこと。「断腸」は、子猿を捕えられて悶死した母猿の腹を割いてみると、腸がばらばらに断ち切れていた故事から、甚だしい悲しみを指す。雑、恋1（空閨）。

13 とはれじと思ふが内に憑まれて

昌茂

男の訪れを期待してひたすら待つ女の心情で付けて、やって来まいと思っているがやはり心のどこかで来てく

れないかと期待してしまう、と詠む。「憑まれて」とは、期待してという意。この趣向は近い時代でも「夕月夜有明の空にうつるまで問はぬを頼む我そつれなき」（実枝集・七六四・「連夜待恋」）などの作例がある。雑、恋2（憑む）。

14 十年釣渭姜<sup>○</sup> (十年 渭に釣する姜)

西

訪ねる、頼みにすることを太公望の故事で受ける。前句の男を待つ女と、訪れはあるまいと思いつつ待つてしまふ太公望の心持ちが重ねて、後の太公望となる姜は十年渭水にて釣りをしていた、と詠む。「渭」は渭水。「渭浜の器」の故事が連想される。「姜」は底本傍書に「太公望也」とある通り、文王の軍師呂尚のこと（姜はその姓）。優れた主君になかなか巡り会えず、老年になって渭水で釣りをしていた時、文王に見出され、輔佐して殷を滅ぼした。文王らの先祖、太公（古公亶父）が待ち望んでいた賢者という意味で、太公望と名づけられた。応永本論語抄に「渭叟と云は、渭水に釣する時の称也。一

字名に仕ふ時は、姜とも望とも呂ともする也」とある。呂尚は八十歳で渭水で釣をし九十歳で文王の師となったと伝えられるのでその間「十年」だが、ここは「三千六百釣」の語に拠るか。李白「梁甫吟」に「八十西来釣渭濱。寧羞白髮照清水、逢時吐氣思經綸。廣張三千六百釣、風期暗與文王親（八十西に来て渭濱に釣す、寧ろ羞ぢむや白髮の清水を照らすを、時に逢ひ氣を吐いて經綸を思ふ、廣く張る三千六百釣、風期暗に文王と親む）」（分類補註李太白詩・三）。雜、述懷（釣）。

15 鷗邊無黜陟

（鷗邊 黜陟 無し）

兼

寄合語は無いが、前句の渭が水辺であるので、そこに鷗がいる情景として付ける。太公望が卑賤から将相となった故事を、官位の上げ下げを意味する「黜陟」で対比して、鷗の遊んでいるあたりでは、官位の昇進左降といったこととは無縁である、と詠む。「鷗邊」の典拠は杜甫の「春日江村五首 其四」「燕外晴絲卷、鷗邊水葉開（燕外に晴絲巻き、鷗邊に水葉開く）」（集千家註分類

杜工部集・一〇）によるか。「黜陟」は底本傍書に「進退ゾ」とある通り、功の有無によって官位をあげさげすること。鷗は自由な境涯、俗世との断絶を象徴する鳥で、俗事と無縁であることを意味する。雜。

16 ふもとの嵐吹きすつる迹

長

連珠合璧集「鳥トアラバ、跡」とあり、「迹」を鳥として付けて、嵐が麓で吹き過ぎていった、その跡と詠む。前句と合わせて考えると、作中主体がいる場所の高低が関係し、麓より高い場所におり、すでに官位とは関係のない世界にいることを意味するか。「ふもとの嵐」を詠んだ和歌には、「ぬる床に吹きまく雲を枕にてのぼる麓のあらしをぞきく」（正徹千首・旅・九〇六）、「すむ人のふもとの嵐あらぬわかある峯の松にかこつな」（草根集・三・一九七三・「旅館嵐」）などがあり、この語が詠まれる時、作中主体は麓より高い場所にいる。「吹きすつる」は吹き過ぎたの意か、「吹きすつるなごりまでこそかなしけれ軒ばの萩の秋の夕風」（玉葉集・雜一

・一九四九・よみ人しらず)。連歌の例に「ゆくかたい  
づこさをしかの声／吹きすつる嵐の跡に月おちて」(永  
禄六年十二月称名院追善千句・第九白何・八六、八七)  
もある。和訓押韻「迄(カウ) 獣迹 アト」、漢和三五  
韻「迹アト 韻会、獣迹也、字林云、一逸道也」。雑。

17 たえだえの霧にむら立つ松みえて

意

連珠合璧集「嵐トアラバ 松」、「たえだえトアラバ  
：通路」とあり、霧の切れ間切れ間に群がって立つ松の  
こずえが見られる、と詠む。「たえだえの霧」から松の  
木立が見える趣向は、「霧はるる浜名の橋のたえだえに  
あらはれわたる松のしき浪」(拾遺愚草・中・浜名橋・  
一九五二)によるか。「むら立つ」は群生する。「こず  
えむらだつ松のうすぎり」(看聞日記紙背、応永二十五  
年十一月二十五日和漢聯句・一〇・慶)。秋1(霧)。

18 秋寺不尋常(秋寺尋常ならず)

需

連珠合璧集「寺トアラバ：松が本」とあり、秋の寺は

常日頃とは異なっている、と詠む。「秋寺」は人が少な  
く、俗塵を遠く離れた場所。「塵勞縁底使吾忘、秋寺人  
稀隔俗談(塵勞底(なに)に縁りてか吾をして忘れしむ、  
秋寺人稀にして俗談を隔つ)」(本朝無題詩・一〇・七  
四八・古寺即事・藤原通憲)。秋句三句を続けるため敢  
えて「秋寺」としたか。秋2(秋寺)、釈教(秋寺)。

19 鐘破永宵夢(鐘は永宵の夢を破る)

清

連珠合璧集「寺トアラバ：鐘」とあり、鐘の音で永い  
迷いから覚めると詠む。「鐘」は、漢和法式に「只一。  
入相一。釈教一。異名一。以上新式」とあり、一座四句  
物。「夢」は「大方恋也」(産衣)とあり、恋句となる。  
「永宵」は永遠に続くように思われる長夜。前句によつ  
て、仏教によって人間の迷妄、無明長夜の闇から悟る意  
を持つが、来ない男を待つ女にとって夜は永遠に続くよ  
うに感じられるもので、恋の意も持つ。惟肖得巖の詩に  
「永宵独坐漏声遅、天末佳人不可期(永宵に独坐し漏声  
遅し、天末の佳人は期すべからず)」(雲壑猿吟・寄竹

隠蔽蔵主（竹隠蔽蔵主に寄す）とあるのもそれである。これで次の句を呼び込む。秋3（永宵）、釈教。

20 敷きかへけりな衣手の霜

旨

連珠合璧集「鐘トアラバ：寺：霜」。また八雲御抄・三・天象部・霜に「かねのこゑ（鐘は霜に響くなり）」とあり、袖に置いた露に替わって、降り積もった霜、と詠む。「衣手の霜」は袖に置いた霜。夢から醒めたという前句の状況と、起きたら床が涙に濡れ、袖の露が霜に置き替わったという意で付ける。「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおくらん」（千載集・冬・三九八・匡房）などによるか。冬1（霜）、恋2（敷きかへけりな）。

21 雪ほどは積もらぬ花の苔むしろ

三

連珠合璧集「莖トアラバ、しく」。前句「敷きかへけりな」から「苔むしろ」が導かれて、雪ほどではないが、散った花びらが積もる、苔の莖、と詠む。参考歌に「ち

る花を苔のむしろにしきかへてあをねがみねに春かぜぞふく」（為家千首・雑・八三三）が挙げられる。雪は、漢和法式・一座四句物に「三、春一。似物ノ一別ニ可有之」とあり、この「雪」は似物、花の比喩である。花は、「花ハ發句、脇、第三の外ハ折の面にせず。裏よりはいづくにても苦しからず」（産衣）とあり、本一座もその規則に従う。「苔のむしろ」とは、苔が一面に生えたさまを敷物に見立てた表現。雪に替わって花がその上に散り敷いた光景。春1（花）。

22 風微桃李場（風は微なり桃李の場）

言

前句の「花」を桃李の花として詠み、風がかすかに吹く、桃や李を植えた園、と詠む。連珠合璧集に、「李トアラバ 雪・はだれ雪」とあり付合となる。「我が園の李の花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも」（万葉集・一九・四一四〇・家持）のように、この雪がまだらに降り積もる雪のことであれば、前句の「雪」の語から「李」が連想される。また、「風微」を前句の句意と重

ねて解釈すれば、風が微かにしか吹いていないから雪が積もるように花が散ることはない、となろう。「桃李の場」は、黄庭堅「上蘇子瞻」の「紅梅有佳実、托根桃李場、桃李終不言、朝露借恩光（紅梅佳実あり、根を託す桃李の場。桃李終に言はず、朝露恩光を借す）」（山谷詩集注・一）の用例あり、朝廷の園、転じて前途ある秀才を指すが、ここは普通名詞か。春2（桃李）。

23 春遊歸計少（春遊歸計少なし）

西

「花下忘帰因美景、樽前勸醉是春風（花の下に帰らむことを忘るるは美景に因つてなり。樽の前に酔ひを勧むるは是春の風）」（和漢朗詠集・春興・一八・白居易）によるか。また前句の「桃李場」を仙境に見立てて、帰るのを忘れたと付け、春に遊んでいて、家に帰ろうとする考えも持たない、と詠む。「桃李不言春幾暮。煙霞無跡昔誰栖（桃李言はず春幾暮るか暮れぬる。煙霞跡無し昔誰か栖んじ）」（和漢朗詠集・仙家・五四八・菅原文時）とあるように、桃李は仙境に咲く花であった。そこ

に入り込んだ人間が、楽しさに帰ることを忘れ、いつしか数百年が経過したという故事も想起できる。「春遊」は、春に花をもとめて山野を歩いたり、花のそばで宴を張ったりして楽しむ遊興。歌題「野遊」も同じ。「歸計」は、家路につこうとする考え。「争敢三年作帰計、心知不及賈生才（争か敢て三年帰計を作さん、心に知る賈生の才に及ばざるを）」（白氏文集・一六・江亭夕望）。春3（春遊）。

24 雲みはるかになく夕鶴

仙

春遊の情景を春の鳥、雲雀に付けて、雲の上はるか高い所から、鳴いている夕暮時の鶴。連珠合璧集には、「春の心 雲雀」「雲雀とあらば、春の野 あがる をつる」とある。ここでは雲雀が空高く鳴く余り、夕方になってもなかなか帰巢しないと取りなした。「もえいづる草葉の床やをしからむ焼野に帰る夕ひばりかな」（新撰六帖題和歌・二・春の野・六六八・知家）。和訓押韻「鶴（サウ） ヒバリ」、漢和三五韻「鶴ヒバリ 和名比波里」。

春4 (夕鶴)。

25 かすむ野の日の色うすみ雨晴れて

長

霞に隠され姿は見えないが、かすかに雲雀が鳴くのが聞こえる情景を付け、霞がかかる野原に日の色がうつすら射し、雨が晴れて来た、と詠む。「春ふかき野べの霞のした風にふかれてあがる夕ひばりかな」(六百番歌合・春二・十七番右・雲雀・信定・九四)などがある。「かすむ野」は、春ののどけさを象徴。「すみれさく道のしばふに花ちりてをちかたかすむ野べの夕暮」(風雅集・春下・二四六・従三位親子)がある。「日の色」は、陽光。霞によって日の色が薄いとされた作例は同時代には「山の端の霞におつる日の色ものこるやうすき空の月影」(時慶集解題・九)があるが、直接には長恨歌の「峨嵋山下少人行、旌旗無光日色薄(峨嵋山下人の行くこと少なり、旌旗光無く日色薄し)」(白氏文集・一二)により生まれた表現か。「霞のうへにうつる日のかげ／なきたつもはるかになれる夕ひばり」(永祿元年三月花千句・第七

三字中略・三八・昌益、三九・仍景)は、「夕鶴」「はるかに」「霞」「日の影」が詠まれて類似する。春5 (かすむ)。

26 分け行くさにつゞくむら管

茂

前句の「野」に「分け行く」が関係するが、そのほかは付合となる語がない。(野から)里に分け入ると、道なりに続いている叢竹、と詠む。和訓押韻「管(タウタケ)」、漢和三五韻「管タケ 韻会、一管ハ竹ノ名、○竹ニ仮用」。「分け行くさと」は、旅の途中さしかかった集落。そこに竹が群生するとは、蘇軾「留題峽州甘泉寺(峽州の甘泉寺に留題す)」詩、「古人飄何之、惟有風竹鬧、行行翫村落、戸々懸網罩(古人、飄として何にか之く、ただ風竹の鬧がしき有り、行き行きて村落を翫べば、戸々に網罩を懸く)」(東坡先生詩集・二三・寺觀)によるか。雑、旅(分け行く)。

27 ●●○●●景落畫工手(景は畫工の手に落つ)

需

前句を絵画に取りなして、この情景は画工の手のうちに落ちる、と詠む。所謂「胸中に成竹あり」、竹を描く際、画家は胸中に構図を浮かべてから筆をとる意。蘇軾の「文與可畫篔簹谷偃竹記」に「故畫竹必先得成竹於胸中、執筆熟視、乃見其所欲畫者、急起從之（故に竹を画くには必ず先ず成竹を胸中に得て、筆を執りて熟視す。乃ち其の画かんと欲する所の者を見て、急ぎ起ちて之に従ふ）」（東坡全集・三六。古今事文類聚前集・四二にも収める）とある。前句の韻字「篔」から、この記を連想させるのはたやすい。文與可は北宋の文人文同（一〇一八〜七九）のことで、蘇軾の従兄に当たると好んで水墨で竹を描き、「墨竹画」の流行のきっかけを作った人物である。「畫工」は絵描き。「落手」は、手のうちに落ちる、思いのままになる意。「何乃明妃命、独懸画工手（何の明妃の命、独り画工の手に懸けむや）」（白氏文集・二・青塚）。雑。

28 山彰金佛相（山は金佛の相を彰す）

続

これも同じく蘇軾の詩「贈東林総長老」の一節によって付けて、山は金色佛の相をあらわにする、と詠む。「溪声便是広長舌、山色豈非清浄身（溪声は便ち是広長舌、山色は豈に清浄身に非ざるや）」（東坡先生詩集・一九・仙釈）、「谷川の音は法を説く釈尊の声、山の姿は仏の清浄な御身に他ならない」の意。前句の主張を敷衍していることになろう。「山色豈非清浄身」の句は碧巖録三十七則にも取られて人口に膾炙した。「金仏相」は仏の三十二相の一つ金色相のことで、身体手足全て黄金色に輝くさまであろう。雑。

29 を初瀬やくるとあくとの鐘の声

旨

長谷寺の本尊は金色十一面観音であることが、前句「金佛」と付いて、この小初瀬では、暮れても明けても、鐘の音が響く、と詠む。「を初瀬」は「初瀬」に美称「小」を冠したもの。大和国の著名な歌枕で、長谷寺がある。朝晩の「鐘」を詠み込む歌は多く、「夕霧に梢も見えず初瀬山入相の鐘の音ばかりして」（詞花集・秋・一一二

兼昌)、「春の夜は明け行く鐘のひびきまで花に霞める小初瀬の山」(文保百首・一四・忠房)など。「くるとあく」とあくとは日が暮れても夜が明けても。「くるとあく」とめかれぬものを梅の花いつの人まにうつろひぬらむ」(古今集・春上・四五・貫之)。雑。

30 月にはげしき秋の川 颯

意

「を初瀬」から「はげしき」が導かれて、月の光の下、激しく吹きつける秋の川風、と詠む。「うかりける人を初瀬の山おろしよはげしかれとは祈らぬものを」(千載集・恋二・七〇八・源俊頼)による。28から「山類」の句が続いたのでこの句で転じを試みたか。和訓押韻「リヤウカセ 北風、只風トモ」。漢和三五韻「颯キタカゼカセ 説文ニ北風謂之、集韻ニ或ハ作風十良、かぜトモ用」。秋1(秋・月)。

31 冷袖舟先繫 (冷袖 舟 先づ繫く)

俊

連珠合璧集「河トアラバ、：舟」。阿房宮賦により、

風の激しさを受けて冷袖を出して、袖が冴えて来て、まづは港に舟を繋いだ、と詠む。「舟よするをちかた人の袖みえて夕霧うすき秋の川浪」(続拾遺集・秋上・二七七・宗尊親王)の表現にも通ずる。「冷袖」は、杜牧の「阿房宮賦」に「歌台暖響、春光融融、舞殿冷袖、風雨凄凄(歌台の暖響は、春光融融たり、舞殿の冷袖は、風雨凄凄たり)」(古文真宝後集・上)があり、これを典拠とするか。秋2(冷袖)。

32 露盤玉已搶 (露盤 玉 已に瑋たり)

咲

前句が秦の始皇帝、本句が漢の武帝、意識して帝の建てた建造物で対句に揃え、承露盤には、玉のような露がもう音を立てんばかりに置いている、と詠む。「露盤」は金茎承露盤の略で、漢の武帝が建章宮内に建てた銅盤。仙人の手のひらをかたどり、この盤にたまった上天の精である露を飲むと長寿を得るとされた。「瑋」は玉が触れて鳴る音の形容。玉のような露がびっしり置いたさま。秋3(露盤)。



33 浮くなみだまぎれやするの亂碁に

仙

連珠合璧集に「玉トアラバ 涙」とある。前句の承露盤の「盤」の字を碁盤としてとりなして付け、なみだする気持ちが紛れるかと亂碁をするの、と詠む。源氏物語・手習巻に「苦しきまでもながめさせ給ふかな、御碁をうたせたまへといふ、いとあやしうこそはありしか、とはのたまへど、打たむとおぼしたれば、盤とりにやりて」とある。薰と匂宮との板挟みとなり、川に身を投じた浮舟は囚らずも助かってしまい、彼女の看病をしていた少将の尼が、ふさぎこむ浮舟に、慰めに碁を勧める場面で、浮舟は「心には秋のゆふべをわかねどもながむる袖に露ぞみだるゝ」と詠む。露は涙で思い乱れた心を表現。碁が乱れた心の慰めや癒しとして機能した、この場面を下敷きにしたかと思われる。「なみだ」は、「産衣」に依ると七句去也。人の泣二句也。」と規定される。「亂碁」は、ちきり・みだれご・らご・らんご等と読み、碁石または小石を用いてする遊び。指の先につけて拾い

取り、多くを得たものを勝ちとするという。中世の賭博によく用いられた。「まぎれ」とは、心のしこりや結ばれた思いを、他のことのでつい忘れるという意。雑、恋1（浮くなみだ）。

34 淡燈照獨床

（淡燈 獨床を照らす）

清

竹馬集「碁：ともしび」とあり、淡い燈火が、獨り寝の床を照らしている、と詠む。源氏物語・空蟬巻に「灯近うともしたり」とあるのは、源氏が空蟬と軒端萩とが碁を打つのを垣間見する場面である。空蟬が床から逃げ出した後は、「君は入りたまひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。」と、軒端萩が残され、一人で臥す描写となる。恋人がいない独り寝の夜の寂しさとなる。床が淡い燈火によって照らし出されていることでその切なさ際立つ。「床」は産衣に「一也。夜分也。居所の體也。ゆかハ折也。夜分ニ非ず。ゆかならバ毎にかなに書くべしと也。共ニ床の字をよめり。居所也」とあるので、居所で一座一句物。「獨床」は、一人寝の夜を意味する

が、「独夜」「独臥」「独寝」といった熟語はあるのに、用例希である。押韻のためか。雑、恋2（独床）。

35 童眠書儘擲（童眠りて 書 儘擲つ） 続

随葉集「灯かゝぐるには：学び」とあり、童は眠つてしばしば書物を取り落とす、と詠む。前句、床の傍らに置かれている「燈」を、書齋に燈す「書燈」としてとりなし、苦学する童が眠ってしまった、しばしば書物を取り落とすさまを言うか。漢和法式の一座三句物に「文へ恋一、旅一、学文二一」とあり、学問（文）の「書（ふみ）」に宛てた。「儘」は「尽（ことごとく）」の意だが、底本「まま」と傍訓する。和語「間々」に宛てたか。「陪筵儘促詩（筵に陪しては儘詩を促す）」（慶長九年九月和漢千句第五・三二・周洪）も同じか。雑。

36 道のをしへぞうたゝ忘るゝ 三

前句の「眠」から、「うたゝ」に「うたた寝」も懸けるか。「たらちねの親のいさめしうたた寝はもの思ふと

きのわざにぞありける」（拾遺集・恋四・八九七・よみ人知らず）、「そむくものから子はあはれなり／聞きいれぬ道のをしへのたびたびに」（天文廿四年正月梅千句・第一何木・三四、三五）にも、「親のいさめ」を聞かない子の姿が詠まれる。前句の句意と合わせて考えると、書物を擲ってしまったから、親の教誡、すなわち人の道をますます忘れてしまふとなり、道の教えをいよいよ忘れてしまふ、とよむ。「道のをしへ」は儒学などの道德的な教誡。「うたた」は状態がいつそうはなはだしくなる意。ますます。雑。

37 さきだつる行衛をたどり山くれて 意

前句を山中の道にとりなし、案内人にはぐれ教えられた道を忘れて迷ってしまったと付け、先に立てた案内人が示した方向を辿っていくうち山中は暮れてきた、と詠む。「さきだつ」は、ここでは道を案内して先に立つ人をいう。「行衛（行方）」とは、目指し、進んでいく方向のこと、行った方向のことである。雑。

38 眞柴こる男のかへるかた岡

旨

前句「山くれて」から、柴を刈ってきた男が帰ってきた夕暮れの片岡の情景で付けて、柴を伐る山男が帰っていく片岡、と詠む。「眞柴」は柴の美称。「こる（樵る）」とは、枝を切ること、また株を残して立木を切ることを言う。「眞柴こるしづの爪木と名乗らせて我人しらぬ思ひにぞたく」（新続古今集・恋一・一〇四五・俊成）のように、「眞柴こる」は、賤しい山男を形容する表現。「片岡」とは、裾の一方が他方より長く、なだらかに傾斜した岡のこと。雑。

39 花雖幽處美（花は幽處と雖も美なり）

咲

前句で、樵夫が柴を刈って帰っていると、ふとひらけた一本の道が幽處への入り口となり、開けた先で花が美しく咲いている情景を付け、花は、山奥で静かなところであっても、美しい、と詠む。その発想は、古今集・仮名序「大伴黒主はそのさまいやし。いはば、薪おへる山

人の、花の陰にやすめるがごとし」によるか。黒主の和歌を批判するための譬喩であるが、中世には黒主が志賀明神に祀られたこともあり、この句も愛好された。謡曲「志賀」にも転用されている。「幽處」は、奥まった静かなところ。「曲径通幽處、禪房花木深」（曲径は幽處に通ず、禪房の花木深し）（三体詩・三・常建「題破山寺後禪院」）によるか。春1（花）。

40 杏在遠村粧（杏は遠村に在りて粧ふ）

需

開けた道の先に咲く眼前の花から視線を移し、遠くの方に見える村とそれを彩る杏花の景色を付けて、杏の花は遙か遠くの村に咲き誇っている、と詠む。「遠村」とは、遠方にある村。この句の典拠として、杜牧「清明」詩の「借問酒家何處有、牧童遙指杏花村（借問す酒家は何處にか有ると、牧童は遙かに指したり杏花村）」（分門纂類唐宋時賢千家詩選・三・清明）の一節がある。さらに宋の張鑑（功父）の詩句にも「梨花風骨杏花粧（梨花の風骨、杏花の粧）」（詩人玉屑・二・詩評）とある。

春2 (杏)。

41 おもふどちまどひにあかぬ春なれや

茂

「大庾嶺之梅早落、誰問粉粧、匡廬山之杏未開、豈趁紅艷（大庾嶺の梅は早く落ちぬ、誰か粉粧を問はむ、匡廬山の杏は未だ開けず、豈に紅艷を趁めんや）」（和漢朗詠集・柳・一〇六・江納言）による。そして杏から梅を連想して万葉集・古今集の詞を導き、友人たちと団欒することに飽きることがない春であることよ、と詠む。「おもふどち」は、無言抄・産衣に「人倫ニあらず」とある。「どち」は同士、仲間の意で、仲のよい友だちどうし、気の合った仲間、「梅の花今盛りなり思ふどち挿頭にしてな今盛りなり」（万葉集・五・八二〇・葛井大夫）。「円居」は親しい者同士の楽しい集まり。「思ふどちまどひせる夜は唐錦たたまくをしき物にぞありける」（古今集・雑上・八六四・よみ人知らず）もある。春3（春）。

42 溪流飛羽觴（溪流 羽觴を飛ばす）

統

李白の春夜宴桃李園序に導かれて、春の円居に集つての団欒から、曲水宴の光景を連想して付け、谷のせせらぎに流した盃を盛んに酌み交わす、と詠む。一条兼良の公事根源にも、「曲水宴は、周の世より始まりけるにや。文人ども水の岸になみゐて、水上より盃を流して、我が前を過ぎざるさきに、詩を作りて、其の盃を取りて飲みけるなり。羽觴を飛ばすなどいふも此の事なるべし」とあり、「羽觴を飛ばす」を曲水宴に結びつけ用いている。「溪流」は谷川の流れ。「觴」は雀の形をした杯。「羽觴を飛ばす」とは、杯のやりとりを盛んに行うこと、酒宴のさま。李白の「春夜宴桃李園序（春夜桃李の園に宴するの序）」、「会桃李之芳園、序天倫之樂事、群季俊秀、皆為惠連、吾人詠歌、独慚康樂、幽賞未已、高談轉清、況開瓊筵以坐花、飛羽觴而醉月（桃李の芳園に会して、天倫の樂事を序す、群季の俊秀なるは、皆惠連たり、吾人の詠歌、独り康樂に慚づ、幽賞未だ已まらず、高談轉た清し、況や瓊筵を開きて以て花に坐し、羽觴を飛ばして

月に酔ふ)」（古文真宝後集・三）による。雑。

43 もらさじとかけしを君の恵にて

三

前句での盃に注がれた酒を「もらさじ」と取る。さらに年中行事のつながりから「賑給」を連想して付け、君主の恵みが、誰一人もらすまいと施された、と詠む。「賑給」とは、「賤しき民に米塩などを給ふことなり」（公事根源）、朝廷が困窮者や病人に対して国家が衣料品や食糧を支給する制度、またはその行為を指す。「もらさじ」は民衆を救恤の手から洩らすまいの意で、「時しあれば民の草葉をもらさじと恵の露を君やかくらん」（年中行事歌合・賑給・三二・丹波嗣長）によるか。年中行事歌合は南北朝時代の成立であるが、兼続が寿三（元齋）に編纂させた、古典和歌の注解書である師説撰歌和歌集にも取り上げられており、当時著名な故実書であった。

雑。

44 しもがしもまで人ぞ惶るゝ

仙

主君の恩恵が世に行きわたるのを、下々の民まで恐懼すると受けて、身分の低い下の、そのまた下の者まで、あらゆる人が懼れ畏まる、と詠む。和訓押韻「惶クワウ、フソル、」、漢和三五韻「惶フソル、」、説文、恐也」とある。「しもがしも」は、身分の最も卑しい者のことで、源氏物語に見られる語。源氏が夕顔の隠れ住む宿を尋ねる場面、「かの下が下と、人の思ひ捨てし住ひなれど、そのなかにも、思ひのほかにくちをしからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり」（夕顔巻）とある。雑。

45 ●●○●●  
矮屋難推暑（矮屋 暑を推し難し）

清

前句に引用した、源氏の夕顔巻により「しもがしもま」と「矮屋」が付いて、この小さなあばら屋では暑さもなかなか去らない、と詠む。「矮屋」は、低く小さい家屋、南宋・楊萬里の「午熱登多稼亭詩（午熱多稼亭に登る詩）其一」に「矮屋炎天不可居、高亭爽氣亦元無（矮屋炎天居るべからず、高亭爽氣亦た元より無し）」（誠

齋集・九）とある。随葉集にもこの詩を引用して、「一、あつき日には、せばき庵 錦繡段詩、矮屋炎天不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>居、矮屋、せばき家也」とある。「推暑」は、寒暑が互いに取って変わり季節が進行するさま。周易・繫辭下傳・五章「寒往則暑来、暑往則寒来、寒暑相推而歳成焉（寒往けば則ち暑来り、暑往けば則ち寒来り、寒暑相推して歳と成る）」による。夏1（暑）。

46 ●○●●●◎ 密雲奈隔郷（密雲 郷を隔つるをいかん） 俊

前句と対句。狭い家に暑さが籠もるとしたのを受けて、同じ周易により、厚い雲が出て夕立になりそうだが、まだ集落からは遙か彼方に見えるとし、厚い雲は里から遠く隔たっておりどうしようもない、と詠む。「密雲」は、雲が厚く重なっているが、まだ雨の降らない状態。周易・小畜卦「密雲不雨、自我西郊（密雲あれど雨ふらず、わが西郊よりす）」による。孤平。雑。

47 かへりみる跡遠ざかる旅の空

長

連珠合璧集に「旅トアラバ、故郷」とあり、「郷」を故郷に転じ、振り返ると通ってきた道が遙かに遠ざかる、この旅の空、と詠む。雲が通り過ぎた跡に懸かるという趣向は「山遠雲埋行客跡、松寒風破旅人夢（山遠くしては雲行客の跡を埋む、松寒くしては風旅人の夢を破る）」（和漢朗詠集・雲・四〇四）による。「跡」は、自分の通ってきた道の意。「旅の空けふはおぼえず遠くきぬ跡 おふ嵐くだる山路に」（草根集・六・四九四六・旅宿嵐）。雑。

48 浪よりなみにこぐ奥津鯉 意

連珠合璧集「旅トアラバ、舟路」。航跡を顧みる趣向は「世の中をなににたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとのしら浪」（拾遺集・哀傷・一三二七・沙弥満誓）に基づき、波から波に渡るように漕いでいく沖合の舟、と詠む。和訓押韻「鯉（クワウ）フネ」。漢和三五韻「鯉フネ、説文ニ鯉―也、鯉―具、大舟ノ名」とある。「奥津鯉」は、沖に出ている舟。「浪よりなみに」の表

現は、実隆の「島もあらはまかいてみはや月の行く浪よ  
り浪の末のしら雲」（再昌・三・寄月眺望・二〇四）が  
ある。雑、旅（奥津鯉）。

49 更○● 更深月寒 互●●（更深けて月寒く互ゆ）

需

連珠合璧集「月トアラバ：舟」、但し付合ははつきり  
せず、かつ和句であつても句境に差がない。句意は夜が  
更けて、月光は寒気のなか澄み切っている。ここまで漢  
和が均衡していたが、二折裏では、句までに和句が七  
句出ており、49・50は漢句とせざるを得なかったのかも  
知れない。「互」は水がかたく凍てついて、こごえるよ  
うに冷たいこと。冬1（寒）。

50 日昇○● 峯近望◎（日昇つて峯近く望む）

咲

前句で夜分に照る月と対比させ、夜明けに昇る日をつ  
け、日が昇つて、峰が近くに眺められる、と詠む。雑。

51 霞もや山かた分けて晴れけらし

旨

前句では、明け方の山中、麓は見えず、峯が見えると  
いう状況に、霞もまた山の片側から晴れて来たと付けて、  
霞もまた、山を二つに分けるように晴れたことであるよ、  
と詠む。「霞もや」とは、霞もまたくだなあ、の感歎。

「霞もやあけゆく空ををしむらん心ぼそげにたちわたる  
かな」（六百番歌合・春曙・経家・一一〇）。「かた分く」  
は、二つに分けるの意。陽光が射す所射さない所がある  
のを表現する用例が同時代にある。「夕日影かた分けて  
さす片岡はおなじもみちの色そなをこき」（江雪・岡紅  
葉・二四七）、「はれわたる日影ながらもかた分けて時  
雨や雲をまたさそふらん」（邦房親王御詠・時雨雲・一  
五三七）。春1（霞）。

52 ほのかにかへる雁の一行

長

「霞」から「ほのか」に付ける。霞の間から一列とな  
って北に帰る雁の姿が遠望できると付け、かすかに姿を  
見せて帰って行く一列の雁を詠む。「雁の一行」は、雁  
の編隊の形。「ほのかにかへる」は、「朝ぼらけ霞のひ

まの山のはをほのかにかへる春のかりがね」（続拾遺集・雑春・四八六・経家）によるか。和訓押韻「行へカウツラナル」雁ノ一―（ツラ）書ノ一―（クタリ）ニ用也」。春2（かへる雁）。

53 塵裡負春客（塵裡春に負く客）

続

雁↓客。「春霞立つを見捨ててゆく雁は花なき里にすみやならへる」（古今集・春上・三一・伊勢）により、前句では春に帰るのは雁、本句では旅人とし、美しい春を見捨てて帰る雁と、華やかな世に背を向けて流浪する身の上を重ねて、俗世にあつて、春を見捨てて流浪する旅人を詠む。「塵裡」とは俗にまみれた生活。「負春」は、春を見捨てること。「如今老病須知分、不負春来二十年（如今老病すべからく分を知るべし 春を負かざりてこのかた二十年）」（白氏文集・五六・老病）。「客」は、家郷をはなれて異地に在る人がみずから指して言う。孤平。春3（春）。

54 朝来下殿嬪（朝来 殿を下る嬪）

清

帰雁・旅人と、なじみの場所を後にする情景が続いたが、この句では後宮の女官が朝に退出する様子を「下る」で表現する。前句の「客」を受けて、女官が秦に迎えられた亡国の「客」であるとして、朝が来て、宮殿を去る女官を詠む。「朝来」は朝になつて。「嬪」は、「をんなめ 説文婦官也」（漢和三五韻）とあるように、宮殿で一夜を過ごし朝に退出する女官を指すが、「殿を下る」は、杜牧「阿房宮賦」の一節、「妃嬪、媵嬪、王子、皇孫、辭樓下殿、輦来於秦、朝歌夜絃、為秦宮人（妃嬪・媵嬪・王子・皇孫、楼を辞し殿を下りて、輦して秦に来る、朝歌夜絃し、秦の宮人となる）」（古文真宝後集・一）が重ねられる。秦に滅ぼされた戦国六国の貴人たちが連行され、秦の宮廷に仕えたことをいう。なお漢和法式では「女」は一座一句物。雑、恋1（句意）。

55 偽真難辨約（偽真辨じ難きは約）

咲

前句を、かねて契りを結んだ女が宮殿に召されて退出



して来た場面にとりなし、約束が守られるか否か、眞偽は判断し難いものだ、という男の慨嘆とした。男女の契りは、真か偽か判別することは難しい、と詠む。雑、恋2（句意）。

56 あひおもふにもつらき妨

三

契っても眞偽は判断し難いのが、相思相愛の仲にも障害となつていと付け、互いに思う仲にもつらい妨げがある、と詠む。「つてにきく契もかなしあひ思ふ梢の鴛鴦のよなよなの声」（拾遺愚草・上・三九九）。「あひおもふ」「つらき」「妨」の語によつて遣句的な恋の句を付けた。雑、恋3（あひおもふ）。

57 露間疎影月（露間疎影の月）

俊

「露間」と「疎」という語から前句と合わせて解釈すると、月は男の比喻で、一瞬逢いに来たかと思つたがあつという間にいなくなつてしまふ、ということとで付き、ほんの僅かの間、まばらな枝からさしこむ月影、と詠む。

「露間」は、露が結ばれて消えてしまふまでのつかの間  
の意であり、和語「つゆのま」を漢字表記したか。「ぬ  
れてほす山路の菊の露の間にいつかちとせを我はへにけ  
む」（古今集・秋下・一七三・素性）。「疎影」は、枝も  
まばらな樹木の影、とくに梅の枝を言う。張鼎「僧舎小  
池」詩の「冷光揺砌錫、疎影露枝猿（冷光砌錫に揺れ、  
疎影枝猿を露す）」（三体詩・三）。しかし、これは樹木  
ではなく、荒廃した家の屋根の隙間から、月光が板敷を  
点々と照らすさまであろう。「やへむぐらしげれる宿は  
人もなしまばらに月の影ぞすみける」（新古今集・雑上  
・一五五三・匡房「あひしりて侍りける人のもとにまか  
りたりけるに、その人ほかにすみて、いたうあれたるや  
どに、月のさしいりて侍りければ」）によるか。漢句の  
表現が、和歌に典拠を求めている例である。男女の關係  
の疎遠なことも響かせるか。秋1（月）。

58 秋の田づらの行くかひも亡し

茂

前掲の伊勢物語五八段には「昔、心つきて色好みなる

男、長岡といふ所に家づくりてをりけり。その隣なりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ、田刈らんとて、この男のあるを見て、いみじのすき物のしわざや、とて集まりて入り来ければ、(中略)この女ども穂ひろはむといひければ」とある。男が稲刈りをしようとした時の、近くの女とのやりとりである。男の和歌は「あなたたちが貧乏で落穂拾いをする」と聞いていたならば、私も田に出てあげましたものを」という意。前句が女の荒れた家の描写とすれば、伊勢物語によつて、男はもはや田に出ることもない(女に言い寄ることもない)、と応じて付け、秋の田の辺りにはもはや行く甲斐もない、と詠む。「田づら」は、田の面と同じ。田のあたり、ほとり。「うちわびて落穂拾ふと聞かませば我も田づらにゆかましものを」(伊勢物語・五八段)による。和訓押韻「亡(バウ)ナシ ウシナフ」、漢和三五韻「亡ニグル ナシ ホロブ シスル ツクル ウシナフ」。

秋2(秋)。

59 やゝ寒き伏見の野辺のくるゝ夜に 意

「田面」と「伏見」が、「伏見山松のかげよりみわたせば明くる田面に秋風ぞ吹く」(新古今集・秋上・二九一・俊成)により付く。但し、俊成歌の「伏見山」は山城、「伏見の野辺」は大和で、同一視されている。句意は、うすら寒い伏見の野辺で日が暮れて、となる。「やや寒き」は、「やや寒きをののあさぢの秋風にいつよりしかのなきはじめけん」(続古今集・秋下・四三八・資季)など、秋の歌に用いられる。「伏見の野辺」は、大和国の歌枕。「かりそめに伏見の野辺の草枕露かかりきと人にかたるな」(新古今集・恋三・一一六五・よみ人知らず)による。「くるゝ夜」は「時分也。夜分ニ非ず」(産衣)とあり、夕方とする。秋3(やゝ寒き)。

60 風のまゝなるすゑの篁 旨

連珠合璧集「竹トアラバ、…伏見里」、「夢かよふ道さへたえぬ呉竹の伏見の里の雪の下折れ」(新古今集・冬・六七三・有家)に基づき、風にまかせて吹かれてい

る。竹林の果てのあたり、と詠む。「篁」は、竹の群が  
って生えているところ、竹の林のこと。押韻のために用  
いたもの。和訓押韻「篁（クワウ）タカムラ」タケ」、漢  
和三五韻「篁タカムラ タケ 説文ニ竹田也、一曰竹  
名」。雑。

61 閑寂鳥知楽（閑寂鳥楽しみを知る）

需

前句の「竹」を受けて、竹林七賢のような脱俗の隠者  
の境涯を導き、閑寂の境地、鳥は楽しむことを知る、と  
詠む。もう一つ、「阮籍嘯場人歩月、子猷看處鳥栖煙（阮  
籍が嘯く場には人月に歩む、子猷が看る處には鳥煙に栖  
む）」（和漢朗詠集・竹・四三一・章孝標）があろう。「王  
子猷がいつも見ていた所（竹藪）には、鳥が煙（ような  
竹林の）の中に隠れ棲んでいる」という意である。王子  
猷は竹を熱愛したが、鳥は関係ない。しかしこの句は、  
徒然草一二一段に「王子猷が鳥を愛せし、林に楽しぶを  
見て、逍遙の友としき」と引用されるように、鳥も竹に  
住むことから隠賢の友になる、と飛躍して理解されてい

たらしい。「閑寂」は、物静かな様、世間に遠ざかって  
寂しいこと。「自吾閑寂家僮倦、春樹春栽秋草秋（吾が  
閑寂にして家僮の倦んじより、春の樹は春栽秋の草は  
秋なり）」（和漢朗詠集・前栽・二九六・文時）。孤平。  
雑、述懐（閑寂）。

62 聯翩蝶似狂（聯翩蝶狂するに似たり）

咲

「帰溪歌鶯、更逗留於孤雲之路、辞林舞蝶、還翩翩於一  
月之花（溪に帰る歌鶯は、更に孤雲の路に逗留し、林を  
辞する舞蝶は、還て一月の花に翩翩たり）」（和漢朗詠  
集・閏三月・六〇・源順）か。しかし「聯翩」を文選の  
李周翰注は「鳥の飛ぶ貌」とする。前句と対句を成し、  
鳥の飛ぶ様から「聯翩」を用いたか。今にも落ちそうに  
飛んでいるさまは、蝶がまるで狂ったようだ、と詠む。  
「聯翩」とは、つづいて絶えないさま、今にも墮ちそう  
なさま。「浮藻聯翩、若翰鳥嬰繳墜曾雲之峻（浮藻聯翩  
たり、翰鳥の繳に嬰つて曾雲の峻しきより墜つるがごと  
し）」（和漢朗詠集・文詞付遺文・四七〇・文賦・陸士

衡)。春1(蝶)。

63 花さくはすみれまじりのくさむらに

仙

蝶と花、または蝶と草むらで付いて、花が咲いているのは、葦が点在する叢であつて、と詠む。連珠合璧集「蝶トアラバ、こてふ 夢 花その 花ぞの」、随葉集「蝶のあそぶには、…草むらのかげしづか」など。「すみれまじり」は、「しばしとて出で来し庭も荒れにけり蓬のかれ葉すみれまじりて」(拾遺愚草・上・三一〇)の如く、しばしば荒廃した住居の垣根を形容する。春2(すみれ)。

64 霞融詩債償(霞融して詩債償ふ)

続

司空図の詩を踏まえれば、前句で葦の花が咲く春の叢の光景に感じて詩を作つたと解せるが、決定的なつながりが見つかからない。句意は、春になり霞が立つと、詩を賦して借りを返した、となる。「霞融」は霞の立ちこめるさま。「詩債」は、贈られた詩に酬答しようとして果

たさないこと。作るべき詩を作らないこと。転じて感興に突き動かされて詩を完成させることを、前世で詩を作らなかつた故に現世でその負債を返していると喩えた。晩唐の司空図「白菊雑書四首」詩に「此生只是償詩債、白菊開時最不眠(此の生只だ是れ詩債を償ふのみ、白菊開く時最も眠られず)」(司空表聖詩集・五)がある。春3(霞)。

65 けふもたゝ酒のむしろにくらしはて

長

「仙人輒飲我以流霞一杯、数月不饑(仙人輒ち我に飲まするに流霞一杯を以てす、数月饑へず)」(論衡・道虚)とあるように、仙人が飲む酒を「流霞」といい、連珠合璧集「酒トアラバ：ながるゝ霞」とある。また拾花集「酒には、つくる詩」ともある。これらを踏まえ、句意は今日もひがな一日ただ酒を飲んで日暮れまで過ごしてしまふ、と詠む。「酒のむしろ」は酒席。「口びるの笑や詞に出でぬらむ/酒のむしろはあかぬかたらひ」(竹林抄・雑上・一二二〇・賢盛)。「筵」は連歌新式に「只

一。法の筵などに一。苔筵・草筵など此中に可用之」とある。21句に「苔筵」があった。雑。

66 市のかりやにとまる 賚

了意

随葉集「酒を酌みかはすには、…市のかりや」とあり、市の仮小屋に宿をとる商人を詠む。謡曲「松虫」（世阿弥作）で、阿倍野市で酒を売る商人が、毎日酒宴をする男たちを「市の屋形」に迎えて引き留める。「われこの

阿倍野の市に出でて酒を売り候ところに、いづくとも知らず若き男のあまた来たり酒を飲み。帰るさには酒宴をなして帰り候。…今に知られて市屋形に樽をすゑ盃を並べて。寄り来る人を待ちゐたり」とある。このような物語を取り入れたものか。連歌の作例は「馴々てくむ盃のいくめぐり／かり屋の内につどふ市人」（天正九年十一月五吟一日千句第六山何、二七、二八、心前・紹巴）があり、同時代の今川氏真の和歌、「帰さをわするゝ酒のむしろかな市の屋かたも月のかり屋に」（今川氏真詠草・市中月・六二〇）も、この物語に基づき、月も市に宿

を借りたとする趣向で、表現も酷似している。なお「松虫」は豊臣秀次の命で編纂された謡抄でも取り上げられ、談義の場に西笑承兌も居た（言経卿記文禄四年四月二日条）。「市のかりや」は市場の仮小屋のこと。中世の市場には常設の建造物がなかった。和訓押韻に「賚（ヘシヤウ）アキヒト」―賚、漢和三五韻にも「賚 アキヒト」とある。『上杉家文書』などで「賚」と翻刻するが、これは別字。雑。

67 ふりきぬる雨の氣色を三輪が崎

三

「市には、三輪の里」（随葉集）、「三輪ニハ 杉、市」（連歌付合の事）とあり、降って来た雨の氣配の見える、三輪が崎、と詠む。但し、市と寄合になるのは、紀伊の「三輪が崎」でなく、大和の「三輪」（現・奈良県桜井市金屋）で、古代から栄えた海柘榴市がある。「大和なる三輪の市路に急ぎても何時まで世にはふるの山ごえ」（夫木抄・三一・一四八六三・寂蓮）など。本歌により、雨が降って来ても、辺りに雨宿りする家もないため、市

場の小屋に仮泊することになる。「三輪が崎」は紀伊国の歌枕。「見」を掛ける。「くるしくもふりくる雨か三輪の崎佐野のわたりに家もあらなくに」(新勅撰集・羈旅・五〇〇・よみ人知らず。原歌は万葉集・三・二六五、長忌寸奥麿)が本歌である。雑。

68 袖に杉間の風ぞ荒たる

仙

三輪と杉、また天候の急変を暴風で受けて、袖に杉の間を吹き抜ける風が吹きすさぶ、と詠む。「杉間」は杉木立の間。大和の三輪山は杉を神木とする。「古郷の三輪の山べをたづぬれど杉間の月のかげだにもなし」(後拾遺集・雑二・九四〇・素意)。雑。

69 波激停征櫓 (波激して征櫓を停む)

清

暴風に荒波を付ける。山から海に転じて、波が激しく、漕いでいく櫓の手を止める、と詠む。この句を上杉景勝主従が朝鮮に在陣した経験の反映とする解釈があるが、「征」は漕ぎ出すことで、必ずしも「外征」の意ではな

い。「征棹」「征櫓」も、「餞筵猶未収、征櫓不可停(餞筵猶未だ収まらざるに、征櫓停むべからず)」(白氏文集・五一「別蘇州」)。「瀟湘無事後 征棹復嘔唾(瀟湘無事の後 征棹復た嘔唾たり)」(三体詩・卷三・李咸用「江行」)などの用例があり、やはり漕ぎ出すこと、あるいは航行それ自体を指す。雑。

70 海深括智囊 (海深く智囊に括る)

需

69と対句。前句で危険を未然に回避したと見て、それは智慧の賜物として、海のように深い知恵を持っていても、表に出すことはない、とよむ。「海」は広く大きな智慧の譬喩か。「仏心湛水。智恵之海無涯(仏心水を湛ふ。智恵の海涯無し)」(本朝文粹・一三・朱雀院被修御八講願文・大江維時)。「括囊」は、袋に入れて口を締める。転じて沈黙して知能を隠すこと。「括囊、无咎无誉(囊を括る、咎無し誉無し)」(周易・坤・六四)とある。孤平。雑。

71 ●濁清胸不混● (濁清 胸 混ぜず)

咲

智慧の深さから、聖賢を導き、濁と清とを胸中に混ぜ  
ることはなかった、と詠む。「濁清」は清濁と同じ。平  
仄の関係で倒置か。楚辞の屈原の歎き「举世皆濁、我独  
清（世を挙げて皆濁り、我独り清めり）」（離騷・漁父）  
からしても、清廉で濁りを混在させなかったの意。「胸」  
とあるので、殷の賢人比干のことか。紂王の暴虐を諫め  
たところ、「聖人には心臓に七つの穴があると聞く」と  
言われて、胸を裂かれて殺された（史記・殷本紀）。第  
二字の「清」、各種活字本では「酒」と作る。雑。

72 ●今古力擒強● (今古 力 強を擒にす)

続

前句が紂王のことだとすれば、武王のこととして意味  
上も対句となり、昔も今も、力ある者が、強い者を生け  
どりにする、と詠む。「力」は筋力・体力、「力拔山兮  
気蓋世（力山を抜き気は世を蓋ふ）」（史記・項羽本紀）  
など。ここは周の武王が武力をもって強大な殷の紂王を  
討伐したことを想起か。紂王は自殺したことになってい

るが、武王が生け捕りにしたとする書も多い。たとえば  
「文王見罝於王門、顔色不變、而武王擒紂於牧野（文王  
王門に罝られ、顔色変ぜず、しかるに武王紂を牧野に擒  
にす）」（韓非子・七・喻老・二一）とある。孤平。雑。

73 國遠き御調もはこぶためしあれや

旨

周の武王が殷を討つと、西戎から珍しい大犬を貢いだ。  
「惟克商、通道于九夷八蠻、西旅底貢厥獒（惟れ商（殷）  
に克ちて、遂に道を九夷八蠻に通ず。西旅、厥の獒を底  
貢す）」（尚書・旅獒）。そこで召公が「珍禽奇獸は国に  
養わず、遠き物は宝とせず」と武王を諫めたとする。  
句意は、遠国からも貢物を献上される前例があったこ  
とだなあ、となる。「御調」は、属国から服属のしるし  
として貢献されるもの。「あまざかる鄙のながぢもへだ  
たらずはこぶ御調の民のゆききは」（宝治百首・旅行・  
三七七五・藤原定嗣）、「わが国の御調そなへてとしご  
とにいまも百済の舟ぞたえせぬ」（年中行事歌合・大唐

商客・一〇〇・女房)などが参考歌。雑。

74 民の家居も猶昌なり

茂

連珠合璧集「御調トアラバ、民のかまど」。「たかき屋にのぼりてみれば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり」(新古今集・賀・七〇七・仁徳天皇「みつぎものゆるされて、くにとめるを御覧じて」)により、やはり貢物を停止したことで民戸を富ませた、わが国の聖天子で受けて、国も民の住まいもますます栄えている、と詠む。和訓押韻「昌(ヘシヤウ)サカフル)サカリ 花ニハ不可也」とある。雑。

75 晩煙山鎖着(晩煙 山 鎖着す)

俊

連珠合璧集「煙トアラバ、民のかまど」とあり、夕餉の煙で、山は、鎖を巻きつけたようである、と詠む。「民の家居」から仁徳天皇の故事を介して、夕方山肌に棚引いている煙を発想。既に和歌では「あしひきの山のあなたの夕けぶり民のかまどのほどは見えけり」(洞院

撰政家百首・眺望・一七〇五・藤原経通)と詠まれている。「晩煙」は、夕餉を作る竈の煙。「鎖着」の語は、たとえば唐・賈島の「田將軍書院」詩、「行背曲江誰到此、琴書鎖著未朝廻(行きて曲江に背きて誰か此に到らん、琴書鎖著して未だ朝より廻らず)」(長江集・一〇)など、何かを中に入れて鍵を掛ける様。しかしこの句は山肌に煙がたなびく様子を鎖が巻き付いたようだと形容するもので、ズレがある。雑。

76 朧月水忿忙(朧月 水 忿忙たり)

咲

連珠合璧集「煙トアラバ、水」とあり、朧月の下、水は、せわしく流れる、と詠む。75句と対句。山に巻きついた煙を、水に煙る朧月で受ける。朧月の下を水が流れる情景は、和歌に学んだ表現か。「朧月」と「水」は、歌枕の「おぼろの清水」を連想か。「みくさみしおぼろの清水そこすみて心に月のかげはうかぶや」(後拾遺集・雑三・一〇三六・素意)。春1(朧月)。



77 瀧津瀨にせきとめられぬ花散りて

意

激しく流れる「水」のつながりから「瀧」を導き、瀧の急流にせきとめられない花が散って流れていく、と詠む。瀧の急流と落花の取り合わせは、「春風の吹きそめしより瀧つ瀨のこほりもとけて花ぞちりける」（古今和歌六帖・一・三七九・はるのかぜ）、「吉野川瀧つ岩波せきもあへずはやく過行く花の比かな」（拾遺愚草・上・一〇一九）などがある。春2（花）。

78 しづえかたよる岸の青楊

旨

「瀨」と「岸」とが寄合となり、岸の青柳の下枝が水面について、一方に寄っている、と詠む。柳は水際の植物で、その枝の先が急流に流されているさま景を捉える。「しづえ」は下枝。「池水の水草もとらであをやぎのはらふしづえにまかせてぞみる」（後拾遺集・春下・七五・経衡）。「青楊」は、川柳・水揚の異名。激しく流れる「水」のつながりから「瀧」を導く。春3（青楊）。

79 機外遊糸乱（機外 遊糸乱る）

需

連珠合璧集に「柳トアラバ、糸」「青柳トアラバ、糸よりかけて」とあり、機織りから飛び出した糸が乱れるように、大空に陽炎が立っている、と詠む。「遊糸」は春の野に立つ陽炎。糸の縁で機を出すのは常套。「機外」という語は珍しく、機織りの外という意味か。「あまつ空雲のはたてにみだれつつ目もあやなりやあそぶいといふ」（千五百番歌合・二六一番左・五二〇・季能）。この歌は「雲のはたて」に「機」を掛ける。このような和歌の趣向に基づくか。春4（遊糸）。

80 樓頭横笛揚（樓頭 横笛揚る）

俊

前句の「糸」を「絃」と見て、こちらは「管」で応じた。随葉集「管絃（イトタケ）には、糸とは琴の事、竹とは笛の事也」とあり、楼の上で横笛を音高く鳴らすと詠む。「樓頭」と「横笛」との取り合わせは、唐・張巡「聞笛」詩の「旦夕更樓上、遙聞横笛音（旦夕更樓の上、遙に聞く横笛の音）」（古今詩刪・一五。唐詩選・三にも）

などによるか。「笛：楼の上」（竹馬抄）ともある。雑。

81 つまごのおもひもまさる秋のくれ

茂

「笛」から「琴」への連想。久しぶりに恋の句を出した、と付けて女の弾く琴の音が聞こえて、思いが募る秋の夕暮であるよと詠む。「つまごと」は爪で弾くことから箏のこと。「妻」も重ねる。「秋の暮」は秋の夕暮。「春の暮、秋の暮としたるは大暮にてはこれなき也、時分の暮なり」（産衣）。秋1（秋）。

82 別涙露濃々

（別涙 露 濃々）

清

「秋の暮」から「露」につなげる。前句で夕には相手への思いがまさるものの、逢えても朝に別れなくてはならないことに涙を流すことで付き、別離の時の涙で露のようにしとどに濡れる、と詠む。「別涙」は後朝の別れを悲しむ涙。連歌新式に一座二句物として「待恋。逢恋。別恋等之類」がある。「濃々」は、露の多いこと、ここでは顔が涙に濡れている様。毛詩・國風・鄭風、「野有

蔓草」の「野有蔓草、零露漙漙（野に蔓草有り、零露漙漙たり）」による。この詩の底意は毛伝に「思遇時也。

君之澤不下流、民窮於兵革、男女失時、思不期而會焉（時に遇ふを思ふなり。君の澤下流せず、民兵革に窮す、男女時を失ひ、期せずして會するを思ふのみ）」とあるが、そこまで読まなくとも、まずは男女が逢えない悲しみと取れる。秋2（露）、恋1（別涙）。

83 電頃相逢處

（電頃 相逢處）

咲

連珠合璧集「稻妻トアラバ：露にやどる」。短い逢瀬の場で、露のような涙を流す。前句とは、金剛般若波羅蜜經「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、応作如是觀（一切有為の法、夢幻泡影の如し、露の如し亦た電の如し、応に如是觀を作すべし）」などによる「露電」の語もあり、意味上もよく付いて、少しの間、男女が出会う場所を詠む。「電頃」は、いなづまがひらめく程の刹那の意。漢語の用例に北宋の道教類書の雲笈七籤・一〇六・其一に「千齡猶一刻、万紀如電頃（千齡猶ほ一刻、

万紀電頃の如し」とある。「相逢」は、人と人とが会うこと。秋3(電)、恋2(相逢)。

84 のこるもうすき袖の移り香 長

竹馬集「袖の移り香。付合には、逢ひ見し中」とあり、あの人が袖に焚き染めていた香りは微かに残るのみ、と詠む。前句でほんのわずかな間しか逢えず、逢ってもすぐに別れてしまう切なさを「袖の移り香」に込める。後朝では82句と輪廻する感がある。「袖の移り香」は、一夜を共にして移った恋人の香。「ありしよの袖のうつり香きえはててまたあふまでのたのみだになし」(六百番歌合・顕恋・七三九・女房)がある。表現は飛鳥井雅親の「うつり香の残るもうすき形見かな人のよりみし真木の柱は」(亜槐集・恋下・寄柱恋・九三四)に酷似。雑、恋3(袖の移り香)。

85 取りとむる衣を形見もはかなしや 旨

源氏物語・空蟬巻による付合。拾花集に「袖の移り香

には、：形みの衣」、連珠合璧集に「移り香トアラバ：かたみ」とあり、手許に留めた衣を思い出とするのものはかないものだ」と詠む。「取りとむる」は、押さえ留める、引き留める。光源氏が空蟬の寝所に忍び込んだが、女は察して逃げ、源氏が女の残した薄衣を手に空しく帰る場面による。「蟬のはのよるの衣はうすけれど移り香こくもにほひぬるかな」(古今集・雑上・八七六・友則)も重なる。雑、恋4(句意)。

86 あづまのはてにかへる装ひ 茂

前句の「衣」を天女が羽織る衣でとりなし、漁師がその衣を隠したものの、結局天女は月へと帰る、羽衣伝説に取材し、東方の果てまで帰る旅装を整えると詠む。謡曲「羽衣」(伝世阿弥作)では、「東遊の数々に、東遊の数々に、その名も月の宮人ハ、三五夜中の空に又。満願真如の影となり」と、富士山の天女の舞に起源を持つとして、「東遊」の駿河舞について語る。天女の帰る先は、富士山・蓬萊とも、「東」にあるとの理解でよい。

なお、これも景勝らの朝鮮からの帰還を詠んだとする説があるが、首肯し難い。「あづまのはて」とは、東海道の東端の常陸国で、そこは同時に日本国の東端でもあった。「波たかき鹿島の崎にたどりきてあづまのはてをけふみつるかな」（夫木抄・二一六・一一一・二三・藤原光俊）。「装ひ」は旅装、旅の準備・支度。雑、旅（かへる）。

87 あら玉の年や今朝より霞むらん 三

「帰（かへる）↓年」（類船集）。「あづま路はなこそその関もあるものをいかでか春の越えて来つらむ」（後拾遺集・春上・三・師賢）など、春は東方からやって来ることで付けて、新しい年を迎えた朝から空が霞むのであるうか、と詠む。「あらたまの」は、新年・正月・新春に懸かる枕詞。年が「改まる」を掛ける。春1（あら玉の年・霞むらん）。

88 鶯亦弄春光（鶯も亦た 春光を弄す）○●○○◎咲

「あらたまの年」から「鶯」、「あらたまの年たちかへる朝より待たるるものは鶯の声」（拾遺集・春・五・素性。和漢朗詠集・鶯にも）により、鶯もまた、春の穏やかな気色を愛でる、と詠む。「春光」は、春のけしき、春の風光のこと。春2（春光）。

89 吟履為花緩（吟履 花の為に緩し） 続

前句の「鶯」に「吟履」が対応し、吟行する詩人は花を見るため歩調がゆっくりになる、と詠む。「吟履」は、「吟杖」などと同じく、履き物から歩き回る詩人その人を指す。戦国期にはよく見られ、万里集九の詩に「吟履踏春鶯路斜、若王子廟共斟霞（吟履春を踏めば鶯路斜めなり、若王子の廟共に霞に斟む）（梅花無尽蔵・一・山房看花）、また武田信玄主催の天文十五年七月二十六日和漢聯句にも「吟履為誰湿（吟履誰が為に湿ふ）」（三五・湖月）の句がある。春3（花）。

90 あかぬをまゝの袖の倡ひ

意

積教（法の道）。

履と袖で対。詩人が歩くと、あちこちに心惹かれるさまが付けられ、満たされない状態のままあちこち引つ張られていく、と詠む。「あかぬをまゝの」とは、満たされない状態のまま。「袖の倡ひ」は袖またはその人が惹かれること。「いざなふ さそふニ二也。さそふ心也。又いざと許もさそふ也。共ニ倡（イザ）の字也」（産衣）。和訓押韻「倡（シヤウ）イザナフ」。雑、衣類（袖）。

91 とくはたゞかはる日毎の法の道

仙

随葉集「とく法には、墨染の袖」。前句の「袖」を出家者にとりなし、さまざまな教義や修行に触れるさまとなり、変わりゆく毎日ひたすらに仏法の道を説く、と詠む。仏教では、入る道は違うが同じ悟りに辿り着くことをいうか。「法の道いるべき門はかはれどもつひにはおなじさとりとぞ聞く」（新後拾遺集・釈教・一五〇四・如月）。「とくのりのをしへはこころこころにて」（元龜二年三月千句第七初何・六七）も同じ意であろう。雑、

92 秋になりぬる月の涼しさ

三

この句は秋であるが、前句の「法の道」と「涼しさ」とを重ねると、「涼しき道 極楽の事にして非レ夏」（産衣）とあるように、清く澄んだ境地、すなわち浄土への道となる。源氏物語・権本卷に、「世に心とどめ給はねば、いで立ちいそぎをのみおぼせば、すずしきみちにもおもむき給ひぬべきを」も参照した付けか。句意は、秋になったことが感じられ、月が澄んでいる、と詠む。「月の涼しさ」の和歌の用例は、「しげりあふ庭の木ずゑをふき分けて風にもりくる月のすずしさ」（風雅集・夏・三八二・鷹司師平）がある。この歌のように本来「涼しき」の語は夏であるが、秋句とするために敢えて「秋」を入れたか。秋1。

93 すゞむしの声は砌に遠からで

旨

連珠合璧集「秋の心、：鈴虫」とあり、軒下近くから

鈴虫の声が聞こえる、と詠む。「すず虫のこゑふるさとの浅茅生によすがらやどる秋の月かな」（後鳥羽院御集・一二四四）など、砌の虫とともに月も宿るとした趣向は多い。鈴虫・蟋蟀・松虫などいわゆる名虫は一座一句物なので、終わり近くなつて出した感もある。「砌」は、軒下に敷いた雨滴を受ける石。転じて庭そのもの。連歌新式に一座一句物、「不可為居所」とある。作中主体の近くに鈴虫の声がすること。秋2（すゞむし）。

94 露於蘭草芳（露は蘭草に於いて芳し）

続

連珠合璧集「虫トアラバ、露」とあり、蘭においた露は芳しく香ると詠む。また「蘭」は軒近く植えて鑑賞するので「砌」と取り合わず。「蘭叢衰砌半摧紫 桐葉満壇不払紅（蘭叢砌に衰へて半ば紫を摧く、桐葉壇に満ちて紅を払はず）」（和漢兼作集・八二七・親隆）など。「蘭草」は藤袴の異名。芳香がする。そこに露が置いた様は「露滴蘭叢寒玉白、風銜松葉雅琴清（露蘭叢に滴て寒玉白し、風松葉を銜んで雅琴清し）」（和漢朗詠集・蘭・

三三九・源英明）による。秋3（露・蘭草）。

95 分けかへる野はたび／＼の雨そゞぎ

意

連珠合璧集「雨そゞぎトアラバ：蓬生の宿」とあり、分け入って帰る野には、何度も雨がかかって散ると詠む。源氏物語・蓬生巻で、源氏が末摘花の屋敷を訪ねる場面、「御さきの露を馬の鞭して払ひつゝ、いれたてまつる。雨そそぎも、なほ秋の時雨めきてうちそゞげば」による。前句の「蘭」は零落しながら貞節を守った女の譬喩となり、付句はそんな女の家に通い、朝に草をかき分けて帰る男の描写となる。「分けかへる」は、草などを凌いで野を帰るさま、露に濡れると詠むと、「わけかへる路のさゝ原朝露の思はぬさへもけぬがつれなき」（草根集・四三七〇・後朝恋）など、恋の気分が濃い。「雨そそぎ」は、催馬楽・東屋「東屋の真屋のあまりのその雨そそぎ 我立ち濡れぬ 殿戸開かせ」により、軒下から滴る雨水のこと、やはり女に逢えず涙に濡れたさまを暗示する語。雑、恋1（句意）。

96 暮るればしばし人ぞ彷徨

仙

前句で後朝の別れなので、付句は夕暮の男の来訪とし、暮れになって、男はしばし行ったり来たりしている、と詠む。「雨そそぎ」の語からも、たたずむ男を連想しやすい。「たたずむ」は、行きつ戻りつ、その辺りをうろつくこと。夕暮、女の門前でしばしためらう男の様子である。和訓押韻に「徨(クワウ) 彷徨(タ、スム)日本」とある。雑、恋2(句意)。

97 深宮門可鑰(深宮 門 鑰すべし)

咲

前句と連接させると、男が夕方女のもとを訪ねて来たが、門が閉ざされることを恐れ、うろつくさまとなる、と付けて後宮では門に鑰をかけるであろう、と詠む。「深宮」は、宮殿の奥深く、後宮のこと。「鑰」は、かぎとざし。杜牧「宮詞」、「監宮引出暫開門、随例須朝不是恩、銀鑰卻收金鎖合、月明花落又黄昏(監宮より引き出でて暫く門を開く、例に随ひて須く朝すべし是恩にあ

らず、銀鑰卻りて収めて金鎖合す、月明らかに花落ち又黄昏)」(三体詩・一)による。後宮には、天子の寵愛を切望する宮女がいるが、夕暮には門が厳しく鍵で閉ざされる。その歎きを詠んだ詩。雑、恋3(句意)。

98 少室渡堪航(少室渡り航するに堪へり)

需

前句が門を厳重に閉ざすところから、弟子の入門をなかなか許さなかつた達磨の姿勢を付け、少室山の渡し場は、渡し船で向こうに渡ることができると詠む。思いがけぬ転じ方である。「少室」は、中国河南省登封県の嵩山の西の山。穎水の源。達磨が面壁九年の座禅を行った地。和訓押韻「航(カウ)フナワタシ ワタシフネトモ用之」。雑、釈教(少室)。

99 ながれあるとみのを川の末廣み

茂

少室(達磨)から聖徳太子(とみのを川)が導かれ、流れの絶えない富緒川の末が広いように、仏教の教えは広く末にまで伝わっているのでと詠む。「渡江達磨」の

画題に拠る付け筋。達磨がインドから中国に渡る時、一葉の小舟に乗ったという伝説である。聖徳太子と片岡山に臥していた旅人との贈答歌、「しなてるや片岡山にひにうゑてふせる旅人あはれおやなし／いかるがやとみのを河のたえばこそわがおほきみのみなをわすれめ」（拾遺集・哀傷・一三五〇、一）による。後にこの旅人の正体は達磨であり、達磨は太子に直接伝法したと広く信じられた。富緒川から少室山へと仏法の起源を遡る。「とみのを川」は、法隆寺附近を流れる富雄川の古称。聖徳太子または仏法の源流の象徴。その「すゑ」は我が国での仏教各宗となる。「汲みて知れたえせぬ法の水はみな富緒川の末にやはあらぬ」（再昌・二四・尺教・四五九二）。雑、釈教（とみのを川）。

「待ちなれし都の山の面影も立ちそふ浪にぬるる月かな」（心敬集・海上待月・一三六）。「旁」は、あちらこちら、また至る所にといい意。雑。

100 たちそふ波のとをき かたがた 旁

長

川から波が導かれ、あちこちで波を立てている光景で、祝言の句に仕立て、重なる波があちこち遠くの方で立っている、と詠む。「たちそふ波」は、波が重なり立つ様。



#### 第四節 市立米沢図書館蔵慶長三年三月二日賦何人連歌「しめゆふや」注釈

―新出の直江兼続・称念寺其阿両吟連歌―

##### はじめに

直江兼続（一五六〇～一六一九）は、室町末期から江戸初期にかけて文武にその名を馳せた戦国武将である。上杉家の家老上杉景勝の家宰として関ヶ原合戦前後に領国の内外において、その政治的手腕を發揮したことは既に先行研究に詳しい<sup>1)</sup>。加えて、文芸を嗜好する姿は同時代人にも賛美された。実際、彼は上杉家では腹心の家臣と共に、上洛の折には当代の知識人である西咲承兌や連歌師里村紹巴らと共に連文芸、とりわけ和漢聯句に親しんだことが知られる<sup>2)</sup>。それらの事蹟は翻刻・解説されることも少なくないが<sup>3)</sup>、依然として未紹介の資料は多く、その全貌は明らかでない。

そこで、本稿では兼続が関与した作品で、市立米沢図書館に蔵される「慶長三年三月二日賦何人連歌」を取り上げ、解題を付して翻刻することとしたい。『連歌総目録』（明治書院、一九九八年）にも記載がなく、これまで未紹介の作品であり、伝本も他に知られていない。

これまで直江の創作として伝わる作品は、その全てが漢詩或いは漢句であったが、当該作品は現存唯一の連歌である<sup>4)</sup>点で、その資料的価値は高い。彼の学問への姿勢、関心の広さを捉え直す上で注目すべきであり、ここに資料の全貌を紹介し本文を提供したい。

## 一、底本書誌と連衆

まず、書誌を記す。市立米沢図書館郷土資料室蔵（函架番号…甘粕家文書13）<sup>5)</sup>。目録書名「時宗称念寺其阿」。卷子装。一軸。木軸。軸高一九・五cm。改装墨色菱入斜格子。表紙題簽に「時宗称念寺其阿」（図版1）。無地紺色の見返し。墨書で「称念寺」と裏書（図版2）。料紙は斐楮。藍と紫の内曇り。縦一七・五糎、横三一五糎（一紙の横幅は、五二・五糎）。字高一五糎。本来は四折の懐紙（内一折分の一部散佚）であったが、後年卷子装に仕立てた。綴じ穴痕あり。端作に「慶長三年三月二日／賦何人連歌」。本来は全百句であったが、伝来の過程で懐紙一紙分が散逸し、現在は七十二句が伝わるのみである、と考えられる。

本作品の筆跡は、慶應義塾大学図書館貴重書室に蔵される「慶長六年十二月十九日／夢想和漢聯句」と同筆である。この作品には、直江兼続を筆頭に上杉家家臣が連衆に名を連ねる。上杉家の右筆として知られる人物が参加者のうちに見える。例えば、景勝の右筆のひとりで、後年「能書にて文学大才」と評された、宇津江朝清や直江の実弟大國実頼、直江の家臣であり能書家であった池上言俊らである。当該作品の筆跡も、彼らのうちいずれの手になると考えられるが、慶應義塾大学に蔵される和漢聯句と同筆であれば、連歌懐紙の執筆作法から一巡の最後の詠者である鮎川秀定である可能性が高い。鮎川家には、原本は逸しているが、「慶長六年十月四日和漢聯句」一巻が蔵されていたことが確認できる<sup>6)</sup>。

なお、本連歌には、ツレと思しき懐紙の断簡が別に存在する（図版3）。断簡は市立米沢図書館郷土資料室蔵「甘粕家文書10」の手鑑『鳥のあと』に挟み込まれた状態で混入していた。以下に断簡の書誌を記す。縦一八・九糎、横三三・五糎。七句分が完全な状態で、一句は句の前半部のみを残して記載される。紫の内曇りが施される。「うらみもふかき」と書かれる前後二箇所が切断される。卷子装の懐紙よりも縦幅は一・四糎長い、字高が一五・八糎であ

ること、卷子装と内曇りの書式が一致すること、先に掲げた卷子の両吟連歌と同筆であることから卷子の両吟連歌のツレと見てよい。

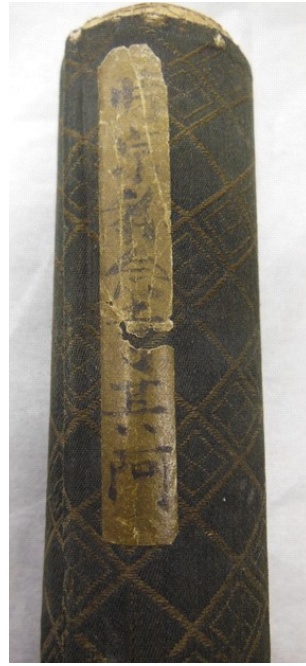
ここで問題となるのは、この断簡が既に仕立てられた卷子のどの位置に本来は挿入されるべきか、ということである。この検討については本稿の三節で後述する。

次に連衆についてだが、本連歌は「兼統」と「其阿」の両吟である。懐紙に「兼統」とあるのは言うまでもなく戦国武将の直江兼統である（図版4）。直江は、文禄二年（一五九三）の連歌会で和句を詠むが、その他の和漢聯句会では全て漢句のみを詠んでいる。この点に関しては次のような見解がある。鶴崎氏は、「兼統は漢詩を得意とした。和句を主とする連歌には興味がなかったのか、連歌の作品は少なく、和句と漢句を交えた和漢聯句または漢和聯句には盛んに参加している。」と述べる。木村氏もまた、「兼統は漢詩、漢文を能くして其の作詩も少ないが、和文の著作とか、彼の和歌と言ふものは殆んど傳はらない」、「聯句會にても、兼統のものは常に漢の句のみである」、「元来兼統は國文は不得意であったか、又は当時一般に變體漢文の流行した爲か、和文の著作が少ない」と述べ<sup>10</sup>、このように先行研究では直江の文才は、主に漢詩文の才能に対して賞賛されることが多い。しかし、この「賦何人連歌」が、直江と其阿の両吟、つまり二人で交互に七十二句、直江一人で三十六句詠んでいるとなれば、和歌、連歌に全く興味や才能がなかったと言いつけるのは早計であると分かる。無論、天正十三年に、直江が木戸元齋に『師説撰歌和歌集』の編纂を命じていたことは知られるが<sup>11</sup>、直江の和歌への関心については、この歌集以外には触れられることはなかった。

「其阿」は、時宗の由緒ある阿弥号で、連歌を詠んだ者も多数おり、特定は難しい。だが、卷子に「称念寺其阿」と書かれた題箋が付されていること、裏書に「称念寺」とあることから、頸城地方の時宗の中心であった府内称念寺（のち高田寺町に移転）の住職其阿であったと推察される。慶長七年（一六〇二）の「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」に

もその名が見られる<sup>12</sup>。また、其阿と上杉家との交友は、木戸元齋の養子であった佐河田昌俊<sup>13</sup>の歌集『高階尚俊歌集』に「越後国に侍りし時、称念寺其阿すゝめし五十首の歌の中に夕萩といふ事を」とある詞書からも窺える。

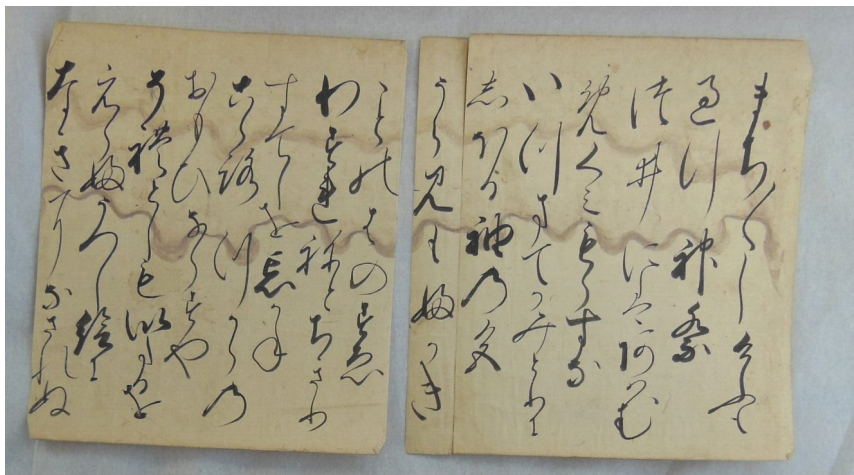
(図版1) 表紙題簽「時宗称念寺其阿」



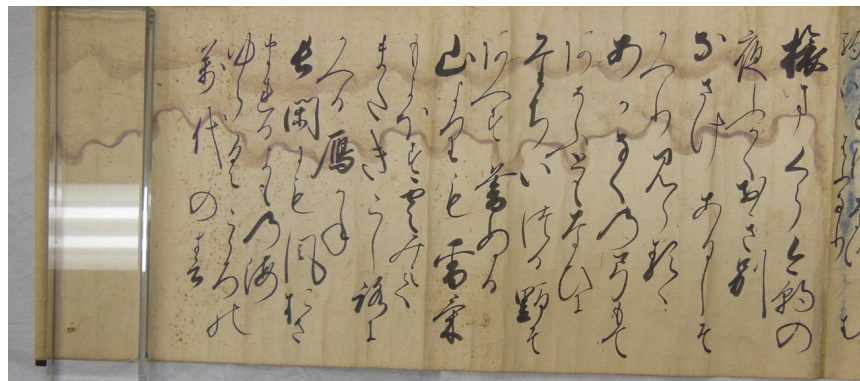
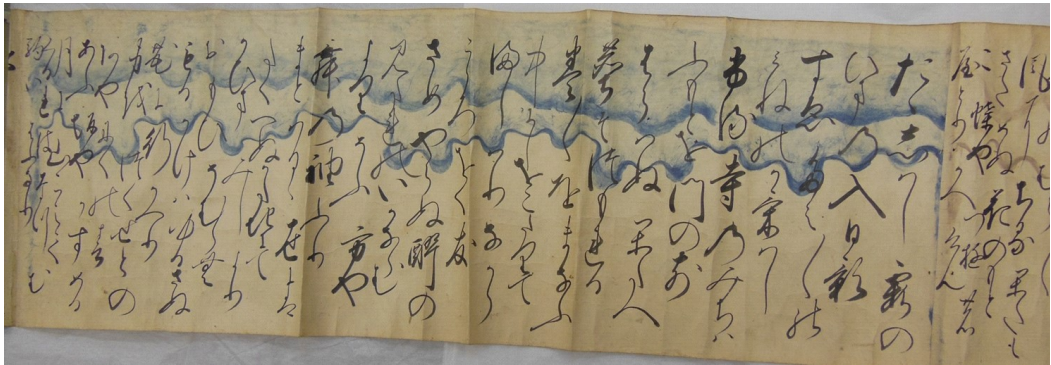
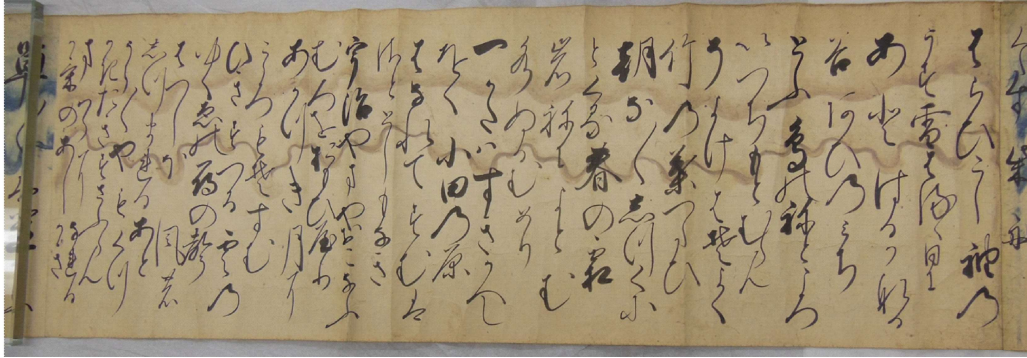
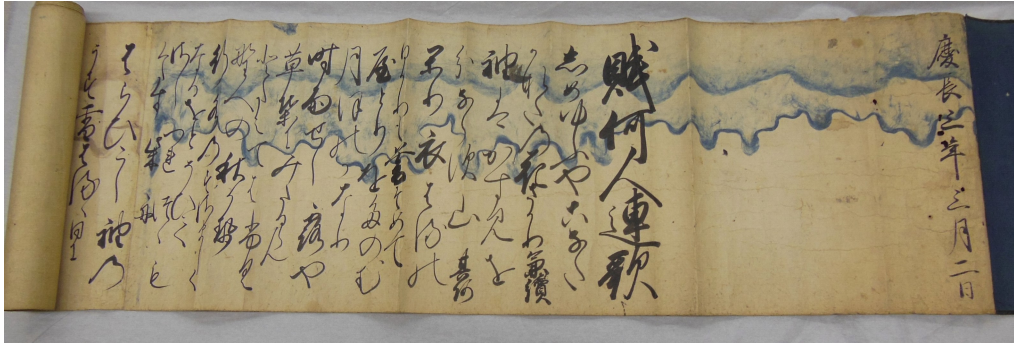
(図版2) 裏書「称念寺」



(図版3) ツレ断簡







(図版4) 上から第一紙、第二紙、第三紙、第六紙

※転載禁止

二、翻刻

慶長三年三月二日

賦何人連歌

1 しめゆふやこなたかなたの花さかり  
 2 袖はかすみを分ならず山  
 3 かり衣はるのひかりも暮そめて  
 4 やとりをたのむ月ほのかなり  
 5 時雨せし露や草葉にみたるらん  
 6 とたえてはふく野への秋かせ  
 7 行水のすさましくなるをとそひて  
 8 さしつれつゝもくたす柴舟  
 9 はらひこし袖のうす雪はるゝ日に  
 10 あとをはるかなる谷あひのみち  
 11 とふ鳥のねところいつちもとむらん

兼続  
其阿

12 そよけはそよく竹の葉つたひ  
 13 朝な／＼しづくにとくる春の霜  
 14 岩ねによとむ水ぬるむめり  
 15 一かたはすきかへしをく小田の原  
 16 はなれてすむはさととしもなき  
 17 宇治やまやおこなふむろをおもひやり  
 18 あかつき月にこゝろもそすむ  
 19 ひきすつる雲のゆくゑの雁の音  
 20 はつしほ風のしつまれるあと  
 21 うら／＼やもくつかきたきすさふらん  
 22 まはらになれるかけのあしかき  
 23 草／＼は置そふ霜におれふして  
 24 ゆきゝまれなるかたはらの道  
 25 時めくに世を侘人のうき住居  
 26 かゝらむとやはたのためつる中  
 27 いつはりの文とみる／＼くり返し

一紙

二紙

28 やすくうけひくちきりあやしも  
 29 いむ事のふかきをしへの法の師に  
 30 すかたをやつす袖のあはれさ  
 31 たちかへる都の月もはつかしな  
 32 たひね露けき玉ゆらの夢  
 33 過かての秋の名残の野辺の色  
 34 あけはつるまでちかき鹿の声  
 35 山かつはかきほにつく道ありて  
 36 ひとむら雪のうつむ卯のはな  
 (二折ウゝ三折オ欠)  
 37 茂りあふ木ゝの下陰くるゝ夜に  
 38 蛍とひかふ袖のすゝしさ  
 39 はしちかみまとろみやらぬ枕して  
 40 人まつけはひそれとしるしも  
 41 とひきてもあたし心はおほつかな  
 42 をくれてはなにあらましの山  
 43 さひしさの夕をさそふ秋の風

一 三紙

44 いかにあなかまきり／＼すなく  
 45 とこはたゝ夜さむの月をかたしきて  
 46 舟こきとむるなみのあら磯  
 47 浜川やわたるむかひは岩つたひ  
 48 みとりすくなき苔のむら／＼  
 49 風にちるかたもさためぬ花のもと  
 50 こ蝶やつゆのやとりかへけん  
 51 たゝしはし霞のひまの入日影  
 52 すゑたえ／＼のみねのかけはし  
 53 ふる寺のみちはふもとを門の前  
 54 はらはぬかたへ塵そつもれる  
 55 巻／＼をまなふ中にしをこたりて  
 56 ましはりなからこゝろをく友  
 57 さめやらぬ酔のみたれのいかならむ  
 58 よりそふ方や舞の袖ふり  
 59 まとはるゝ世にはたくへぬかたちにて  
 60 かひまみしよりおもひそむらむ

一 四紙

- 61 もるかけはゆるさぬ花に行かへり  
 62 身をつくせとのあやにくの春  
 63 あふ坂やかすめる月に山こえて  
 64 くるれはなつむ駒いはふなり  
 65 旅まくら今朝の夜ふかくおき別  
 66 なさけありしそかへりみらるゝ  
 67 あかなくの弓もてあそふともなひに  
 68 たちいつる野そあへす暮ぬる  
 69 山よりも雪けよほす雲みえて  
 70 またきこし路にかへる雁かね  
 71 長閑にも風おさまれるよもの海  
 72 ゆらくこゝろの万代の春

「ツレの懐紙断簡」

- A まち／＼しけふも過行神祭  
 B つゐにはあはむめくみもらすな  
 C いつまでかみとりにしほる袖の色

「五紙

- D うらみもふかきことのはのすゑ  
 E わすれねとちきりすてしを忘かね  
 F こゝろつからのおもひならずや  
 G それとしもにたるをえらふうつし絵に  
 H なきになされぬ「以下欠」

「六紙



### 三、本文の錯簡

次に本資料の本文の錯簡について検討する。

断簡を無視した場合の本連歌懐紙は、懐紙三枚を折り目で切断して継いだ卷子装で六紙からなり、句数は七十二句である。連歌の懐紙作法には「七十二候」という形式があり、それに基づいた作品であるとも考えられよう。しかし、句上げの記載が無いことは聊か不審である。

ところが、この両吟連歌には欠落部の懐紙ツレが存することが明らかとなった。それでも、ツレには八句（内第八句は前半七字のみ）が残るのみであり、なおも完全な状態とは言えないが、この両吟連歌は全百韻の構成であった可能性が高いと言えるだろう。

ここで問題となるのは、この断簡が卷子に仕立てられた連歌懐紙のどの位置に挿入され得るか、ということである。結論から述べれば、ツレは36句の後に続き、その後ろに散逸してしまった第二折ウラと考えられる。天の内曇りが施された懐紙が続くと推察される。現在卷子として繋がっているものそれ自体の順番が初折と名残折を除き、全て無秩序になっている可能性も鑑みた上で、ツレの位置を推測する。第1句〜第8句、第65句〜第72句はそれぞれ初折の表と名残の折の裏であると考えられるので、それ以外の懐紙の繋がりを検討したい。

まず、第四紙と第五紙の順番の妥当性であるが、第四紙の最後の句である第50句目「こ蝶やつねのやとりかへけん」と第五紙の最初の句にあたる第51句目「たゝしはし霞のひまの入日影」は、「蝶」と「日影」や「日」という言葉が寄合語となっており付いていると考えられる。そしてこの付合は、次に挙げた和漢聯句三例の通り、室町後期にはよく見られるものである。

67 些暖蘇霜蝶

新大納言

68 かすみにうすく日|の移る庭

曼殊院宮

(天文廿三年六月廿五日 北野社御法楽 和漢聯句)

4 飛蝶|夢何円

大闡

5 あけ初るそのふの日影|うららにて

才阿

(文明十八年二月廿七日 和漢聯句)

6 菊畔蝶|翎円

7 日|の影のさしくる籬つゆはひて

(文明十三年三月十一日 禅閣点 和漢聯句)

さらに、このような「蝶」と「日影」の付合の他、49句、50句、51句は春の句が三句続くことも合わせて考えれば第四紙と第五紙の繋がりには自然である。そのように考えると、A断簡の懐紙（地の内曇り）と、B未だ行方不明である懐紙（天の内曇り）の挿入箇所は、四通り考えられる。8句の後ろにA Bの順、22句の後ろにB Aの順、36句の後ろにA Bの順、64句の後ろにA Bの順である。「月」「花」の座の位置や季節、恋、居所、山類等の配置の規則からは、これら四通りのうち、どこが断簡の挿入部として適切か推測することは難しい。そこで『連珠合璧集』を参照し、寄合語の繋がりから断簡の位置を考える。すると、四通りのうち36句の後ろにA Bという順の可能性が浮上してくる。36句「ひとむら雪のうつむ卯のはな」と断簡A「まちくしけふも過行神祭」は、「卯のはな」と「神祭」とが寄

合語となる可能性が高い。それは、『連珠合璧集』に「59 卯月トアラバ 神まつる 賀茂の御あれ」、「890 夏の始の心ナラバ 卯のはな 神まつる」と立項されること、『産衣』で、「神祭 夏也。只祭と許も夏也。かもの祭を本とする故也。」とあることから分かる。また、「卯の花 夏也、木也」とあり、夏という季節が続くという点でも繋がるだろう。現行の36句、37句、38句の順でも「夏」の季節は連続し、第三紙と第四紙の関係は妥当であるように思われるが、「神祭」の語に注目した時、他の三通りでは適切でないように思われる。

したがって、断簡は36句の後ろに挿入された状態が原形であった可能性が高い<sup>14</sup>。

#### 四、注釈

1 しめゆふやこなたかなたの花ざかり

兼続<sup>15</sup>

一句は、まるで注連縄を結って白い幣を垂らしたよう

だ、あちらこちらに花が盛んに咲いている、と詠む。「しめ」は、注連縄で、神域・結界を示すために張り、紙の幣を垂らす。桜の花の白さを見立てた。「花」を「しめゆふ」と詠む和歌に、「うゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらん」（後撰集・秋中・二八〇・伊勢）。なお、『賦物篇』の「何人」の項に「花」とあり、発句は賦物を満たす。但し、『連歌初学抄』によれば「近代は発句ばかりに賦物沙汰あり、腋句以下一向

不レ取レ之」という状況となり、かつては全巻を統一する要であった賦物は、発句・脇・第三あたりの句まで賦する程度になり、形骸的な規則となる。春1（花）。

2 袖はかすみを分ならず山

其阿

前句で白い注連を結ったようにあちこちで咲く花の景を受けて、袖は山で立ち込めた霞を均すように分けて進む、と詠む。前句で咲いている「花」を当該句では「霞」に見立て、山に立ち込めると詠む。「花ざかり霞の衣ほころびて峰白妙のあまのかぐ山」（拾遺愚草・二一五八・藤原定家）。「分ならず」は、霞を均すように分けて進むこと。「わけならず人なきやどの夏草に待つことと

ては秋のしら露」（拾玉集・二九九一）など。賦物は「山」。春2（かすみ）。

3 かり衣はるのひかりも暮れそめて

前句の「分ならず」を「狩」をして山を分け進む意に取りなし、狩をしているうちに暮れ方になったと時の経過を付けた。「春」と「張る」を掛けたか。袖は山の霞を均すように分けて進み、張り切って狩りに出て、春の日も暮れ始めて、と詠む。また「かすみ」から「衣」が導かれた（連珠合璧集「以下「合璧集」と略記」）。

前句からの展開と、同じような発想の和歌に「露分けてやどかり衣いそげども里はとほぢの野べの夕暮」（続千載集・羈旅・八一六・従三位宣子）がある。なお、発句の「しめゆふ」の「ゆふ」を脇句で「木綿」の意に取りなした、という付け筋の可能性も考えられるが、当該句の「かり衣」と前句の「袖」が連続し、打越しとなる。賦物は「狩」。春3（はる）。

4 やどりをたのむ月ほのかなり

前句の「ひかり」から「月」が導かれ（合璧集）、夕暮れ時から、月が見える時分となったので、宿を求めると展開し、日が沈み始めて月光がわずかな中で、宿を求めると詠む。『随葉集』に「宿りを求めるには、日のくるゝ」とある。また、前句の「かり衣」には宿を「借りる」意が掛けられる。『新古今集』に「いづくにかこよひは宿をかり衣日もゆふぐれのみねの嵐に」（羈旅・九五二・藤原定家）。賦物は「月」。秋1（月）。

5 時雨せし露や草葉にみだるらん

前句で「やどりをたのむ」理由を、「時雨」が降ったからだと付けた。また、前句の「月」の光がわずかであるのは「時雨」が降ったため、一句は時雨が降って、草葉の上に置いた露は乱れているだろう、だから、月光がわずかな中で宿を求めめるのだ、と前句に返る心で付ける。「時雨には、月のかすか」、「宿を求るには、雨のふり出る」（随葉集）。時雨が降って草葉の「露」があち

ここに乱れて置いているのが、ほのかな月の光に反射して知られる、ということ。賦物はなし。当該両吟では、発句から第四句まで賦物の規則が機能していたことになる。秋2（露）。

#### 6 とだえてはふく野べの秋かぜ

前句の草葉に置いた露が乱れる理由を、当該句では野辺に吹く秋風のせいだ、と付けて、草葉を乱れさせるのは途絶えてはまた吹く野辺の秋風、と詠む。「ふぢばかまぬしはたれともしら露のこぼれてにほふ野辺の秋風」（新古今集・秋上・三三九・公猷法師）。また、「草葉」から「野辺」が導かれる（合璧集）。秋3（秋かぜ）。

#### 7 行水のすさまじくなるをとそひて

前句の「秋かぜ」の音に、流れる水の音が加わる、と付けて、途絶えては吹く野辺の秋風に流れていく水が激しくなる音に加わって、と詠む。また、前句の「秋かぜ」は「すさまじい」ものであった。『新古今集』に「山里の風すさまじき夕暮に木の葉みだれて物ぞかなしき」（冬

・五六四・藤原秀能）。「をとそひて」とは、既に聞こえる音に加えて別の音が聞こえること。「雪とくるけさからことに音そふや春をしらぶる山の滝つせ」（新明題集・三九九四・後水尾院）。秋4（すさまじ）。

#### 8 さし断簡つゝもくだす柴舟

前句の「行水」の上に浮かぶ舟の様子を付けて、流れる水が激しいので筏を連ねて、下る柴舟、と詠む。「さし断簡」は連歌に見られる表現で、筏の連なるさまの意か。連歌に「ゆふきりわたるみつのをちこち／ほのかなるあしわけをぶねさし断簡て」（称名院追善千句・第六・三）など。筏を連ねて柴を積む舟が進む、と詠むか。「柴舟」は柴を積んで運ぶ船のこと。雑。

#### 9 はらひこし袖のうす雪はるゝ日に

「はらひこし」は、袖に積もった雪を払って来たの意。明確な寄合語はないが、「舟」とそれを棹を差して進ませる人の「袖」が付くか。「かねてより涙ぞ袖をうちぬらすうかべる舟にのらむと思へば」（後撰集・離別・一

三四七・読み人知らず)など。袖に積もった雪を払いながら来たが、その薄雪が晴れる日に柴舟を下す、と前句に返る心で詠む。冬1(うす雪)。

10 あとはるかなる谷あひのみち

前句の「雪」から「あと」が導かれ(合璧集)、薄雪の上に足跡が遥かに続いている谷間の道、と詠む。「あと」は、前句の「雪」を受けて、雪上に残る足跡の意となる。「はるかなる」は、やってきた道のりが遥かであることを言う。雑、旅(みち)。

11 とぶ鳥のねどころいづちもとむらん

前句の「あと」を足跡ではなく飛んでゆく鳥の行方の意に取りなして付けて、遥かに続く谷合の道の上を飛ぶ鳥はその寝床をどこに求めて飛ぶのだろうか、と詠む。「跡なき雲にかゝる日の影/身をすれば空とぶ鳥もうらやまし」(河越千句・第二・八三・修茂)など。「鳥トアラバ 跡」(合璧集)。雑。

12 そよげばそよぐ竹の葉づたひ

前句の「鳥のねどこ」がある「竹」の様子を付けて、飛ぶ鳥はその寝床を求めて、次から次へとそよそよと音を立てる竹の葉を伝って、と詠む。「朝ぼらけねぐらの鳥も出でぬまで霜にとちたる窓の呉竹」(草根集・竹霜・五一九〇)。「竹には、ねぐらの鳥」(随葉集)。「そよぐ」は『産衣』に「さやぐと云にちかし」とあり、竹の葉がそよそよと音を立てる意。二度繰り返すことで葉が隣の葉から隣の葉へと順次「そよぐ」ことを表現。雑。

13 朝な／＼しづくにとくる春の霜

前句の「竹の葉」を伝って、雫がなつて滴ると付けて、竹の葉を伝って毎朝滴り落ちる雫によつて解けてしまう春の霜、と詠む。「つたひくる山のしづくやさえぬらんやがてもこほる庭の玉水」(宝治百首・三六五八・顕氏)。「春の霜」は解けて消えやすい。「池におふるみ草のうへのはるの霜あるにもあらぬ世にもふるかな」(続拾遺集・雑春・四七二・雅成親王)。春1(春)。

14 岩ねによどむ水ぬるむめり

前句で霜が解けるのは、水がぬるくなるほどに暖かな春を迎えたからだと付けて、春の霜が解けて岩根のところで滞留している水がぬるくなっているようだと詠む。「水ぬるむ」とは氷が溶けて水がぬるくなるの意で、『産衣』に「氷の解たる春の水也」とある。春2（水ぬるむ）。

15 一かたはすきかへしをく小田の原

前句の「水ぬるむ」を受けて、春の心（小田かへす）で付けて（合璧集）、岩根に滞留している水がぬるくなる頃、一通り土を返したままにしておく田の周りの野原、と詠む。「一かた」は、田の一部は土をすき返しておく（田植えの準備をする）、という意となり、次句と付く時には、「一方では」の意に取りなされる。「すきかへしをく」は鋤で田畑の土を返したままにしておくことで、『古今集』に「あらを田をあらすきかへしかへしても人の心を見てこそやまめ」（恋五・八一七・読み人知らず）がある。「小田」は普通名詞。17句に「宇治」とあり、名所は三句隔てる規則なので、ここは名所にあたらぬ。

春3（すきかへし）。

16 はなれてすむはさととしもなき

前句の「小田」を受けて、人里離れた場所のイメージを付けて、田を鋤き返しておく一方、離れて住むのは、人里とも言えない場所である、と詠む。「つくるにもあれがちになるをだのはら／のをかたかけてくさふかさ」と（天正三年三月八日何船百韻・七八）など。「し」は強意の助詞。雑。

17 宇治やまやおこなふむろをおもひやり

前句の人里とはいえない場所に住む人は、仏道修行に励むような人なのだろう、と思いつける句を付けて、人里とも言えない場所で、宇治山の仏道修行に励んでいる庵を思いやり、と詠む。『源氏物語』宇治十帖の橋姫巻「あとたえて心すむとはなければも世をうち山に宿をこそかれ」（六二四）の人の宮詠に基づくか。またこの詠が記される直前に冷泉院が「あはれなる御住まひを人づてに聞くこと」と述べるが、これは「おもひやり」に通

じるか。雑、釈教（むろ）。

18 あかつき月にこゝろもぞすむ

前句の「宇治山」から『古今集』の仮名序「宇治山の僧、喜撰は言葉かすかにして始め終り確かならず。いはば、秋の月を見るに曉の雲にあへるがごとし（わがいはは都の巽しかぞすむ世をうち山と人はいふなり）、詠める歌おほく聞こえねば、かれこれをかよはして、よく知らず」に基づいて、「あかつき月」を付けて、宇治山の仏道修行に励む庵室では、曉の澄んだ月に照らされて、月だけでなく心も澄むことがあるう、と詠む。また、前句で仏道修行をすることによって、心も澄むと付けた。秋1（月）。

19 ひきすつる雲のゆくゑの雁の声

前句の曉の月にかかる雲のその先に聞こえる雁の声を付けて、明け方に細くたなびく雲の流れゆく先には雁の声聞こえる、と詠む。「波にきよする雁のひとつら／時雨つるすゑの白雲ひきすてて」（宮島千句・第二・

七）。「曉トアラバ横雲、鳥」（合璧集）。秋2（雁）。

20 はつしほ風のしづまれるあと

前句の雁がやってくるのは、風が静まった後のことである、と付けて、初潮の風が静まったあと雁が帰ってくる鳴き声とする、と前句に返る心で詠む。「はつしほ風」は、八月十日の大潮に吹く風のこと。また、「引トアラバ塩」（合璧集）。秋3（はつしほ）。

21 うらく／やもくづかきたきすさぶらん

前句の「しほ」から「焼（かきたき）」が導かれ（合璧集）、初潮の風が静まったあと、所々の浦では藻屑を焚いて、（その藻屑の火も）消えかけているだろう、と詠む。「かきたき」は「搔焚」で、木切れや焚きつけなどのような細かなものを集めて焚くこと。「やどりかる入江のむらの寒き日に／藻くづかきたき明すたび人」（河越千句・第十・四四・長敏）。「すさぶ」は、藻屑を焚く火が衰え、消えかかっている意と解した。「ふりすさび春雨かすむ夕暮の青葉のどかにわたる山風」（夫木抄



・春三・九六一・飛鳥井雅有)。雑。

ど。冬1(霜)。

22 まばらになれるかげのあしがき

前句の「すさぶ」を、荒廃するの意に取りなし、葦が枯れて元気をなくしているため、垣が疎らになっている、と付けて、疎らになった蘆垣の陰、そこは浦の所々で藻屑を焚いていた場所である、と前句に返る心で詠む。「あしがきのかげだにみえずなりゆけば露もひるまの庭の秋草」(新撰六帖・一・ひる・二二六・衣笠家良)など。また「蘆トアラバ焼火」(合璧集)。「かげのあしがき」は、『産衣』に「陰の蘆屋 陰の蘆茨等植物、又水辺嫌べからず。蘆屋の陰を打かへしたる詞なれば也」とあるように「蘆垣の陰」と同義か。雑。

23 草くは置そふ霜におれふして

前句の蘆垣が疎らになったその理由は、「霜」が置かれたためだと付けて、草々は置き加わる霜のために折れ伏して蘆垣は疎らになった、と詠む。「かけはしは置きそふ霜に朽ち果てて」(天正年間百韻・何路・四七)な

24 ゆきまねなるかたはらの道

明確な寄合語はないが、前句の草が折れ伏しているのは、稀に人が往来したためだ、と付けて、人の往来が稀にあるわき道では草々が折れふしている、と詠む。雑。

25 時めくに世を侘び人のうき住居

前句の人の往来が少ない場所で、隠棲する者を付けて、時流に乗りながら、世を憐んだ人のつらい侘び住まいよ、と詠む。「時めくに」の「に」は逆接か。「世を侘」に、「世をわび」と「侘人」の掛詞となる。雑、述懐。

26 かゝらむとやはたのめつる中

前句の「うき住居」の「うき」を、恋愛における憂慮と取りなして恋句を付け、こんな風になろうと思つて、あなたとの仲を期待したのに、世を憐むつらい暮らしをする、と詠む。「かゝらむ」は、「かくあらむ」の略、こんな風であろう、の意で「かゝらんといつか契しわが

袖にうきなみだこすすゑの松山」（政範集・三九〇）など。「やは」は反語。『合璧集』に「恋の心 うき」。雑、恋（たのため）。

27 いっはりの文とみるくくり返し

前句であなたとの仲をあてにしてと詠むのを受けて、偽りの手紙だと見ているうちに、ますますやりとりが度重なる、と詠む。「みるく」は「みる」の疊語で見ているうちにの意と、ますますの副詞の意が掛けられる。雑、恋（文）。

28 やすくうけひくちぎりあやしも

前句の「いっはりの文」によって交わされた約束（契）は、怪しいと付けて、偽りの文を繰り返し見るにつけても、たやすく応じるような関係は心配であることよ、と詠む。「うけひく」は、相手の誘いや頼みを承諾するの意で、ここでは関係を迫られ応じること。『源氏物語』浮舟巻に「宮（匂宮）、（浮舟が）かくのみなほうけひくけしきもなくて、返り事さへ絶え絶えになるは」とあ

る。「あやしも」の「も」は詠嘆か。雑、恋（ちぎり）。

29 いむ事のふかきをしのべ法の師に

たやすく応じる契りは疑わしいことよと詠む前句を受けて、法の師に受戒された深い教えをよく思い出せ、と詠む。『源氏物語』に基づく句か。夢浮橋巻には「御弟子になりて、忌むことなど授けたまひてけりと聞きはべるは」とあり、薫詠に「法の師とたづぬる道をしるべに思はぬ山にふみまどふかな」が見られる。「いむ事」は受戒の意。雑、釈教（法の師）。

30 すがたをやつす袖のあはれさ

前句とは『源氏物語』夢浮橋巻の「法師といひながら、心もなく、たちまちにかたちをやつしけること、と胸つぶれて」に基づいて付けて、剃髪をして身を変えてしまふ墨染の袖、と詠む。「すがたをやつす」は剃髪をして、出家をする意。雑、釈教（すがたをやつす）。

31 たちかへる都の月もはづかしな

前句で出家して身をやつしたその姿で、都という俗世に立ち戻って月を眺めることは恥ずかしいと付けて、出家をしたのに俗世に立ち戻って都で見る月はきまりが悪い、と詠む。「たちかへる此身なりせばめできつる月の都や世世のふる郷」（春夢草・二一四六）。或いは前句の「やつす」を受けて「月」を詠む。「くまもなきをりしも人をおもいでて心と月をやつしつるかな」（新古今集・恋四・一二六八・西行）。また前句の「袖」と「たち（裁ち）」は縁語。秋1（月）。

### 32 たびね露けき玉ゆらの夢

前句の「たちかへる」を俗世に戻って都に帰る意から、旅先から都に戻って来る意に取りなして付けて、ほんの少しの間夢を見ていただけなのに、枕は露でびっしりである、と詠む。また、「夢トアラバかへる」（合璧集）。「たびね露けき」とは、旅の途上で結んだ草枕が露に濡れがちであるさま。「草枕なみだかたしくわがそでの月のたびねもとこやつゆけき」（雅有集・七三二）。「玉ゆらの夢」はほんの少しの間にみた夢のこと。『春夢草』

に「かるもふく磯やのたびね玉ゆらの夢をとだえに鳴く  
衡かな」（一四一一）。秋2（露）。

### 33 過ぎがての秋の名残の野辺の色

前句で旅寝をする場所の様子を具体的に付けて、過ぎ去りかねる秋の気配が残る野辺の草々の色、と詠む。「過ぎがて」は、過ぎ難いの意で、秋を惜しむ気持ちが込められる。類想の連歌に「過ぎがての秋や時雨を残すらむ／なれてはなどか旅の濡れ袖」（宗硯発句並付句拔書）がある。秋3（秋）。

### 34 あけはつるまでちかき鹿の声

秋が過ぎ去りそうにない野辺を詠む前句を受けて、夜がすっかり明けきるまで、近くで鳴く鹿の声が聞こえる、と詠む。「ちかき鹿の声」は、鹿の声は去る秋を惜しんで鳴くとした。「鹿のねのちかき枕に月をみて明くるよしたふ秋の山ざと」（文保百首・秋・一五四五・為相）。詠歌主体が一人寝ているところに鹿の声が近くに聞こえる、と詠むのが通例。独り寝していた自分と、相手を求

めて明け方まで鳴く鹿の姿を重ねるか。但し、そのように解すると32句と打越になってしまふ。秋4（鹿）。

35 山がつはかきほにつゞく道ありて

前句の「鹿の声」は垣根に続く道の辺りから聞こえる、と付けて、山人には粗末な家へと続く道があつて、鹿はその道を通つて家の近くまで来て鳴くのだ、と詠む。「山がつ」は樵夫や柚人など山中で生きる民、「かきほ」でその粗末な棲家を暗示。『源氏物語』常夏巻に「山がつの垣ほに生ひしなでしこのもとの根ざしをたれか尋ねむ」。垣根の近くで鹿が鳴いていると詠む連歌に「かつがつも色になりぬる小田の原／暮るるかきほにちかき鹿の音」（天正六年五月一日羽柴千句・第四・三〇）。

36 ひとむら雪のうづむ卯のはな

前句の「かきほ」に咲く白い卯の花を受けて、その様はまるで雪が辺り一帯を覆つたかのようにだと付け、粗末な家の垣根に咲くのはひと群れの雪が覆っているような

白い卯の花、と詠む。「山賤のかきほにさける卯の花はたが白妙の衣かけしぞ」（古今六帖・一・うの花・七七）に基づく展開か。「卯花トアラバ垣ね」（合璧集）。夏1（卯の花）。

A まちくしけふも過ぎ行く神祭

一句は、ずっと待ち望んでいたが、今日も過ぎて行く賀茂祭り、と詠む。「まちくし」は、ある事態をずっと待ち望んでいたという意で、連歌に「唐衣うらめつらしくたつ秋に／さぞまちまちしけふの七夕」（三島千句・第十・一〇）。「神祭」は賀茂祭のこと。なお寄合書には「卯月トアラバ 神まつる」、「夏の始の心ナラバ 卯はな 神まつる」（合璧集）とあることから、この断簡は36句「ひとむら雪のうづむ卯のはな」の次に続く可能性が高いか（第三節参照）。夏（神祭）

B つみにはあはむめぐみもらすな

前句の「まちくし」を受けて、ずっと待っていたのであるから、じきに神からの恩恵に授かれるだろうと付

けて、ずっと待ち望んでいたのだから最終的には受けるであろう、神の恵みから洩れないようにせよ、と詠む。雑。

けてちぎりおくかな」（玉葉集・釈教・二六六三・前権僧正実聡）。雑、恋1（うらみ）。

#### C いつまでかみどりにしほる袖の色

前句の「めぐみ」を、官位昇進の恩恵に具体的に取りなして、いったい、いつまで緑の衣の袖を涙で濡らすのか、最終的には神の恩恵を受けられるのだから、と詠む。

「みどりの袖」が六位の人の袍を指すので、「みどりにしほる」は六位の低い位（卑位）でいることを嘆いて涙を流すとした。『源氏物語』夕霧巻に「猶かの緑の袖の名残あなづらはしきにことつけて」。雑。

E わすれねとちぎりすてしを忘かね  
前句の「ことのはのすゑ」が具体的にどのようなものであったのかを付けて、恨みも深いことだよ、結局約束が守られなかった言葉は、「忘れよ」と言い捨てたのに、私は、その人を忘れかねている、と詠む。「わすれね」と言い捨てたのに、私は、その人を忘れかねている、とする女の句。『後撰集』に「忘れねといひしにかなふ君なれどとはぬはつらき物にぞありける」（恋五・九二八）。雑、恋2（ちぎり）。

#### D うらみもふかきことのはのすゑ

前句の「みどり」が「葉」と縁語となり、いったい、いつまで緑の衣の袖を涙で濡らすのか、恨みも深いことだよ、結局守られなかった約束の言葉は、と詠む。「ことのは」は、約束の最終的な形、結局は守らなかつた約束の意。「いつはりのなきことのはのすゑの露後の世か

#### F こゝろづからのおもひならずや

前句の「忘れかね」ているのは自分ではないか、と自問する句を付けて、忘れよと言われたのに忘れられずにいる、それは自分の心による思いではないのだろうか、いや自分の心によるものだ、と詠む。「こゝろづから」は、自身の心によって、の意。『古今集』に「春風は花

のあたりをよきてふけ心づからやうつろふと見む」（春下・八五）とある。恋3（おもひ）。

G それとしも似たるをえらぶうつし絵に

前句で「おもひならずや」と自問する主体を男性に読み替える。漢の元帝は後宮の女を絵に描かせ、理想とする美貌の女性を召したが、王昭君は美人なのに醜い容貌に描かれたため、匈奴へ嫁がされたという。後でそれを知り後悔した元帝の心中を踏まえ、通釈は「そうはいっても、（自分の理想に）似ているものをうつし絵から選ぶ。（そのようにして女性を選んだのは自身の心によるものではないか）」となる。「それとしも」はそうはいつてもよいか。「それとしも分くる跡やはあらしふくこのはのうへに冬はみえても」（雪玉集・三七一〇）。「似たる」は、元帝がのことを指すか。恋4（うつし絵）。

H なきになされぬ 「欠」

37 茂りあふ木々の下陰くるゝ夜に

『玉吟集』の「まれにやはあまてる夏の月はもる木のかげにさけるうのはな」（夏・一四五八）に基づいて、36句と付く可能性もあるが、「月」が詠まれていないため、36句を当該句の前句とは、し難いか。『産衣』に「茂りあふ林の下葉、うつろふなども夏也」。仮に6句に続くと考えれば、一面に覆い咲いてる卵の花のように、繁茂している木々の下の光があたらない場所が暮れていく夜に、と詠むか。夏1（茂りあふ）。

38 蛍とびかふ袖のすゞしさ

前句の「くるゝ夜」を受けて、暗闇に「蛍」が飛び交う様子を付けて、木々の下陰で蛍が飛び交い、袖は冷気を帯びる、と詠む。『続拾遺集』に「よるはもえひるはきえゆく蛍かな衛士のたく火にいつ習ひけん」（夏・九九・中務卿宗尊親王）。夏2（蛍）。

39 はしちかみまどろみやらぬ枕して

前句で「袖」に冷気を感じるの、外に面した縁近くで横になっているからだ、と付けて、飛び交う蛍が見え

る家の縁近くで、うとうとできないまま横になって、と詠む。縁近くで夜半の涼しさを感じつつ、一睡もできない様子を詠む和歌に「はしちかみすずみがてらのうたたねにまどろみあへずあくる東雲」（風雅集・夏・三八四・盛親）がある。一句では恋句ではないが、次句の恋を誘う句となる。雑。

40 人まつけはひそれとしるしも

前句で家の端近くで一睡もしないで横になっている様子を受けて、それは恋人の訪れを待っているのである、と付けてある人が恋人を待っている気配がありと分かる、と詠む。「それとしるしも」は「それ」で人を待つ気配を指示する。雑、恋1（まつ）。

41 とひきてもあだし心はおぼつかな

前句で、恋人の訪れを期待していても、相手の浮気心は（私を）不安にさせる、と付けて訪ねて来てくれるが、（相手の）浮つき移ろいやすい心は、不安にさせると詠む。恋2（とひ・あだし心）。

42 をくれてはなにあらましの山

前句の「あだし心」を浮気心という恋の意から、出家の決心がつかないあてのならないという述懐の意に取りなした付けて、いずれ山に入り出家したいと思うが、出家の時期を逸し、俗世に取り残されては何があるか、いや何もない、と詠む。「あらまし」とは、ここでは、将来には山住み、つまり出家をしたいという願望（君嶋重紀「あらましの情景―『新葉集』への一視座」）。いずれ出家したいと山を訪ねても、覚悟のないままでは完全に悟ることはできない、と詠む。雑。

43 さびしさの夕をさそふ秋の風

前句の「あらましの山」に吹く秋の風を付けて、あらましの山では寂しい夕暮れを誘う秋の風が吹く、と詠む。「有増トアラバ夕暮の空」（合璧集）。あらましの山に訪れる夕暮れを詠む和歌に『新古今集』の「おもひつつへにける年のかひやなきただあらましの夕暮れの空」（恋一・一〇三三・後鳥羽院）。秋1（秋の風）。

44 いかにあなかまきりくすなく

前句の秋の風に乗って、夕暮れの寂しさを誘うようなきりぎりすの鳴声を付けて、なんとまあ、やかましく鳴くきりぎりすの声が、秋の風に乗って聴こえる、と詠む。

「きりぎりすには、さびしき夕」（随葉集）。和歌に「あさぢふの秋のゆふべのきりぎりすねになきぬべき時はしりけり」（続後撰集・秋・三八一・藤原信実）。「あなかも」は、感嘆詞で和歌に「あなかもゆかのあたりの虫のねや月にのみかは秋はねられず」（正治初度百首・秋・二二四六・信広）など。秋2（きりくす）。

45 とこはたゞ夜ざむの月をかたしきて

きりぎりすの鳴き声がかましく聞こえたと詠む前句を受けて、床ではただ夜の寒さを感じさせる月を片敷き一人寝をして、と付けた。「きりくすには、床の下、枕の月、衣かたしく」（随葉集）。『新古今集』の「きりぎりすなくやしものさむしろに衣かたしきひとりかもねむ」（秋歌下・五一八・藤原良経）に基づく付け句か。

「さむしろや待つよの秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫」（新古今集・秋下・四二〇・藤原定家）。秋3（月・夜ざむ）、恋1（かたしき）。

46 舟こぎとむるなみのあら磯

前句の恋人がいない一人寝から、舟上の旅における一人寝に取りなして、岸に舟を漕ぎとめて月を見ると付けて、夜の冷気を感じる月の下、波が打ち寄せる岩石の多い岸に、漕ぐ舟を繫留する、と詠む。「月」から「舟」が導かれる（合璧集）。「なみのあら磯」は、波が打ち寄せる岩石の多い海岸。前句との付合には、『拾遺集』の「おきつ浪よるあらいそをしきたへの枕とまきてなれる君かも」（哀傷・一三一六・柿本人麻呂）が意識されるか。雑、旅（舟）。

47 浜川やわたるむかひは岩づたひ

前句で舟を漕ぐのを止めたのは、多くの岩があり、それを伝って対岸に渡る必要があるためで、漕ぐ舟を繫留して海に流れこむ川の対岸までは、岩を伝って渡る、と



詠む。「舟」から「川」、「磯」から「岩」が導かれる（合璧集）。対岸に渡るといふ表現は、「よど河のむかひにみゆるみつのもりよそにのみしてこひわたるかな」（新撰六帖・もり・六〇七・為家）。雑。

48 みどりすくなき苔のむらく

前句の浜川の周辺は、岩がごつごつとしているから（或いは人が岩を伝って苔を踏んでいくから）、苔がまばらに生えている、と付けたか。人が岩を伝って対岸まで渡る、と詠む。苔がまだらに生じて、緑が少なく見える、と詠む。苔がまだらに生ず様は「庭の面の苔の通ぢむらむらに風の跡見るはなのしら雪」（卑懐集・苔径落花・八〇）。「巖←苔のむす」（合璧集）。雑。

49 風にちるかたもさだめぬ花のもと

前句の苔の上に花が八方に散り敷く情景を付けて、風によつて、方向も定まらず散る花の下では緑が少なく苔がまだらに生ず、と詠む。「苔の上にむらむら花はちり敷きてくもりの空を庭にみるかな」（夫木抄・春四・庭

上花・一五三二・後九条内大臣）に基づく付けか。当該句の本歌は、『拾遺集』の「風ふけば方もさだめずちる花をいづ方へゆくはるとかは見む」（春・七六・紀貫之）。春1（花）。

50 こ蝶やつゆのやどりかへけん

「つゆのやどり」は胡蝶が露を求めて、前句の花に宿ることをいうが、「おもからぬこてふはやどれ花の露」（大発句帳・春・一九一八・紹巴）など、露のはかないイメージから「かりそめの宿」の意も掛ける。なお「つゆ」は秋の季となることが多いが、当該句は「こ蝶」と取り合わせることで春の句の中で詠まれる。風によつて方向も定まらず方々に散る花の下では、胡蝶はその仮の宿りを換えたのだろうか、と詠む。春2（こ蝶）。

51 たゞしばし霞のひまの入日影

前句の「こ蝶」を受けて、その蝶が飛んでいたのは、暖かな春の光の中であつたと付けて、すこしばかりの間、霞の切れ間から、沈もうとする夕日の光が差し込んでい

る胡蝶はその中を仮の宿りを替えながら飛ぶ、と詠む。

『草根集』に「若草の花咲くそのの初蝶も春日のどけみ  
あそぶいとゆふ」（園春草・十・七四〇〇）。また「つ  
ゆのやどり」に「たゞしばし」が応じ、はかなさのイメ  
ージでも付く。「霞のひま」は霞の隙間の意で、『後拾  
遺集』に「あさぼらけかすみのひまの山のはをほのかに  
かへる春のかりがね」（雑春歌・四八六・右近中将経  
家）。「入日影」は夕方に西に沈もうとする太陽の光の  
ことで「入日影花のとぶさにくつろひて薄紅かをる夕ば  
え」（菊葉集・一六八・入道前左大臣）など。春3（霞）。

52 すゑたえぐのみねのかけはし

前句の「霞」が「途切れ途切れに棚引く」ため、「行  
く先の峰の梯が途切れ途切れに見える」と付けて、行く  
先は途切れ途切れになっている険阻な峰にかかるかけは  
しがかかる峰に西日が沈もうとしている、と詠む。また  
「入日」から「みね」が導かれる（合璧集）。「かけは  
し」が「たえぐ」であると詠む和歌に「分けくらすき  
そのかけはしたえだえに行末ふかきみねの白雪」（続拾

遺集・羈旅・七〇〇・後京極摂政前太政大臣）。雑。

53 ふる寺のみちはふもとを門の前

前句の「かけはし」は寺に続く道にかかっているもの  
である、と付けて、古寺へと続く道は、麓から寺門の前  
に導く道にかかる嶺のかけはしは途切れ途切れである、  
と詠む。「かけはしには、寺の前」、「ふもとには、峰」  
（拾花集）。連歌に「梯を妻木のみちのたよりにて／ま  
へゆく寺のをちの一むら」（伊庭千句・第七・九二・宗  
碩）。「ふもとを門の前」の句意が取り難いが、「麓から  
寺門の前に導く」の意か。雑、釈教（寺）。

54 はらはぬかたへ塵ぞつもれる

前句の古寺の門は、人の訪れもまれであるので、「塵」  
が払われることなく積もっているのだと付けて、古寺に  
続く門の傍らでは払われることなく塵が積もっている  
よ、と詠む。「年をへて苔にむもるふるてらの軒に秋  
あるつたの色かな」（玉葉集・秋歌下・八〇三・前大僧  
正慈鎮）。また「麓」から「塵」が導かれ（合璧集）、『古

今集』序の「たかき山もふもとのちりひぢよりなりて」も意識されるか。「かたへ」は「方へ」か「傍・片方」か判然としないが、58句に「よりそふ方」とあるので、後者でとる。また、前句に「道」が詠まれるが、連歌では「片方・傍」と「道」の取り合わせは間々見られる。「道はかたへの岩のはざま田」（大原野十花千句・第二・七〇）。雑、釈教（塵）。

55 巻くをまなぶ中にしをこたりて

前句の「塵」を、学問に怠けたがため辺りに積もった塵に取りなして付けて、幾巻もの書物を学ぶ中で、怠けてしまつて傍らでは払われることなく塵がつもっているよ、と詠む。「巻く」は、何巻もの書物のことで、和歌では『新拾遺集』の「敷島の道の光とまきまきの中にみかける玉をみるかな」（雑歌中・一七七九・従二位行家）ほか、歌集の巻々を指すことが多いが、ここでは「巻く」をまなぶで学問を学ぶの意であろう。それを怠ると詠む連歌に「しるべかほなるおもかげはうし／それかとはたとるまなびのおこたりに」（永正七年四月一日百

韻「なつころも」・七三）など。雑、釈教（巻）。

56 まじはりながらこゝろをく友

前句の「巻々をまなぶ中」を「学友との仲」の意に取りなす。ともに学問に励んでいたが、自分は怠けてしまひ、友との間に心の隔たりが出来てしまふと展開して、幾巻もの書物を学ぶ中で、怠けてしまつて付き合いはしながらも、心に隔てをおいてしまふ友人、と詠む。「こゝろをく」は、和歌では「執心する」の意で比較的多く用いられるが、ここでは「気兼ねする、心に隔てを置く」の意。連歌に「おもふこといはむとすれどはづかしみ／なるるはじめはこころおくなか」（文明万句・第六千句・第六・一八）。雑。

57 さめやらぬ酔のみだれのいかならむ

「付き合っていないながらも隔心のある友」という前句を受けて、その隔心も「さめやらぬ酔のみだれ」ではどうであろうか、つまり、つい本心を打ち明けてしまふのではないだろうか、と付けたか。付き合いはしながらも、

心に隔てをおいてしまう友人であるが、醒め切らない酔いの心地の乱れの際には、どうであろうか、と詠む。雑。

58 よりそふ方や舞の袖ふり

前句の「みだれ」を、酒宴で舞う人の袖の「みだれ」と取りなして、醒め切らない酔いの乱れの中で寄り添う方は、舞の袖を振っている、と詠む。「君すむ昔おもふ三芳野／そでふりし面影したふあまをとめ」（天正四年万句・第十千句・第十・七一）などを参考にすれば、五節の舞などが想定されるか。雑。

59 まどはるゝ世にはたぐへぬかたちにて

前句で「舞の袖ふり」をしている人の容姿が「たぐへぬかたち」であると付けて、袖を振って舞う人は自然と惑われる俗世には類もない容貌で、と詠む。「まどふ」、「舞」、「たぐへぬかたち」の組み合わせは『源氏物語』紅葉賀巻に見られる。「源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中將、容貌用意人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木な

り。（略）同じ舞の足踏面持、世に見えぬさまなり。（略）、もの思ふに立ち舞ふべきもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや。」前句とはこれを下敷きに展開されるか。『産衣』に「たぐふ」は「只と恋と以上二也」。雑、恋1（世）。

60 かひまみしよりおもひそむらむ

前句の類まれなる容貌を受けて、垣間見たときから思慕いはじめているのだろう、と詠む。「おもひそむらむ」は、恋しく想い始めるの意で「さきの世は覚えぬ旅の道なれや／いつより人を思ひそむらむ」（竹林抄・巻九・一四二五）。雑、恋2（かひまみし）。

61 もるかげはゆるさぬ花に行かへり

「もるかげ」は、『産衣』に「日月人水等の動く物ハ影の字也」とあり、垣間見をしに来た人の人影のことか。前句の垣間見たときから思い慕いはじめているのだろうという句を受けて、もれて見える人影は（折ることを）許されない花の下を行ったり来たりしている、と詠む。

「ゆるさぬ花」は、和歌では「揺るさぬ」の例が多いが、連歌では「許さぬ」の例が多く、当該句もその意か。『老葉』に「そふ心をば人もとがめず／一枝も許さぬ花をよそにみて」（六四）。前句は「かひまみ」なので外から内を覗く趣向であるが、当該句は折ることを許されない花を諦めきれずに、その近くを往来し続ける人影が内から見える趣向。また、「花」を女に見立てているのであれば、手折ることを許されない花、つまり手に入れることができない女の意となり、その女性を諦めきれずに往來している意に解せるか。春1（花）、恋3。

62 みをつくせとのあやにくの春

前句の「ゆるさぬ」を受けて、花を手折ることが許されない状況を作っているような春は「あやにく」である。と付けて、命を捧げよと（言っているかのような）意地悪な春には花を手折ることを許してくれない、と詠む。「花トアラバ身」（合璧集）。「あやにく」は、『産衣』に「あいなくと云俗語也。哥註ニ愛相なき心也。」とあり、つれないこと。『後拾遺集』に「いかにせんあなあ

やくの春の日やよはのけしきのかからましかば」（恋二・六八三・藤原隆経）。春2（春）、恋4（みをつくせ）。

63 あふ坂やかすめる月に山こえて

前句の「あやにくの春」を、朧月夜の美しさに取りなしたか。また、「みをつくせ」を恋に心身を滅ぼすの意ではなく、山越えのために体力が削られるの意に取りなして、逢坂では、霞む月の光を頼りに山を越えて体力を消耗させて、と詠む。「逢坂」に女に逢うの意も込める。春3（かすめる）、旅（山こえて）。

64 くるればなづむ駒いばふなり

『後拾遺集』の「みちのくのあだちの駒はなづめどもけふ逢坂の関まではきぬ」（秋上・二七九・源縁法師）に基づいて付けて、逢坂山で、霞んでいる月の下に山を越えて日が暮れると、行きなやむ馬がいなくなることが聞こえる、と詠む。また「駒トアラバもち月」（合璧集）。「なづむ」は行く悩むの意で「けふさへよ暮れにけるかない

はむらも又過ぎがてに駒はなづみて」（宝治百首・三七八一・真観）。「駒いばふ」は馬がいなくなること。連歌に「たたずめるかどは霜夜の明けやらで／かりねの里に駒いばふこゑ」（葉守千句・第四・一八）。『産衣』に「駒（略）行歩にしてハ多分旅也」。雑、旅（駒いばふ）。

65 旅まくら今朝の夜ふかくおき別

前句の「駒」に乗った人は、まだ明けきっていない朝に、出立すると付けて、日が暮れて、行きなやみいなく馬は今朝、まだ夜が明けきらない中を出立し、その地に別れを告げる、と詠む。「旅トアラバ 朝たつ」（合璧集）。雑、旅（旅まくら）。恋の誘いの句であり、当該句自体は旅句。

66 なさけありしぞかへりみらるゝ

前句の「まくら」、「おき別」、「今朝」の語が、当該句では後朝の句として取りなされて、今朝、まだ夜が明けきらない中を出立し、その地に別れを告げる共寝をした（女性の家を）自然と振り返って見てしまう、と詠む。

「なさけありし」は共寝をしたこと。『新古今集』に「なさけありしむかしのみ猶忍ばれてながらへまうき世にもふるかな」（雑歌下・一八四二・西行法師）。「かへりみらるゝ」は、後ろを振り返ってみるの意。「かへりみらる逢坂の山／ふかき夜に出づれば月はいりやらで」（永祿四年九月十九日百韻・三六）。一夜を共にした女性の家を振り返りながら名残惜しそうに帰っていく男性の姿。雑、恋1（なさけ）。

67 あかなくの弓もてあそぶともなひに

前句で「かへりみらるゝ」のは契りが「あかなくの」、つまり満ち足りないものであったからだと付けて、満ち足りない思いを抱きながら弓を狩りの連れとしてなぐさみにして、と詠む。また「弓」と「かへり」が寄合となる。雑、恋2（あかなく）。

68 たちいづる野ぞあへず暮ぬる

前句の「あかなくの弓」を受けて、まだ満ちに狩りができていないのに、野遊びが終わるのを待たずに日は暮

れたよ、と付けて、満足に狩りができないで野に出て、持ちこたえることなくすぐ日が暮れた、と詠む。「たちいづる」は、野に出るの意で用例は稀だが、連歌に「都人まちてまたるなやまざくら／たちいづる野の袖のあさたか」(大原野十花千句・第九何水・二二)。雑。

69 山よりも雪げもよほす雲みえて

「雪げ」は「雪消」と「雪気」があるが、ここは雪が降りそうな気配という意で後者でとり、遊びに出た野からも山からも、今にも雪を降らしそうな雲が見えて、と詠む。春になつてもなお残る余寒の情景か。『新古今集』に「空はなほ霞もやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月」(春・二三・良経)。春1(雪げ)。

70 まだきこし路にかへる雁がね

空には、雪を降らしそうな雲が浮かぶと詠む前句を受けて、早くも(秋に)越えて来た北国への道を帰ってゆく雁がねを付けた。「まだき」は早くも、「こし路」は越路(北国への道、北陸道)で、「来し」を掛ける。秋に飛

んで来た北国への道を、早くも帰って行く雁、の意。春2(かへる雁がね)。

71 長閑にも風おさまれるよもの海

前句の「雁がね」が飛ぶ、その眼下には波が風いだ海が広がっている情景を付けて、穏やかに風がおさまる四方の海なのにそれを見捨てて越えて来た空に帰って行く、と詠む。「帰雁トアラバこしの海」(合璧集)。「よものうみ風おあさまりてひさかたのひかりのどけき春はきにけり」(柳葉集・初春・一四四)、「のどかなりをさまるなみのよものうみ／わかふるさとをいそぐかりがね」(享禄年間百韻)。春3(長閑)。

72 ゆらぐこゝろの万代の春

前句の「おさまれる」を当該句では、天下が穏やかに治まっているという意に取りなして、長く続く春を寿ぐように、音を立てて心が揺れる、と詠む。「ゆらぐこゝろぞどきにひかる／ことふえもよのをさまれるしらべにて」(老耳)。「万代」は、長く続く世を寿ぐ語。和歌

に「わが君のよろづのはるのはじめにはまづかめをかにお、当該句で挙句となる。春4（万代の春）。  
わかなつみけり」（大嘗会悠紀主基和歌・六四六）。な

注

1 藤木久志氏『戦う村の民俗を行く』（朝日選書、二〇〇八年）。

2 第一章第三節参照。

3 『米沢市史』近世編1／第三卷（米沢市史編さん委員会編、一九九一―一九九三年）など。

4 伊佐早謙編「上杉景勝卿記」（謙信文庫蔵本の東京大学史料編纂所謄写本による）に、景勝連歌会での一句のみ兼続の和句が伝わるが、懐紙の所在は不明。「文禄二年／正月十日於朝鮮將士ト連歌会ヲ開催ス／「本間文書」賦何人連歌／我國と立カヘルトシノ霞かな 景勝／雪に鷹なくはるのとお山兼続」。

5 上杉景勝と直江兼続の時代、甘粕家には甘粕広信（景継）がおり、彼は天正十一年の軍功により景勝から一字賜り景勝と改称している。また、天正十六年一月十一日の春日山城での連歌会に同座、慶長元年（一五九六）五月には、直江と共に羽黒山長寿寺金堂宝形を造営している。このように甘粕家と上杉家には接点があったため、本連歌懐紙が「甘粕家文書」として伝わった可能性が高い。

6 第三章第七節に注釈した懐紙にも「兼続」と記載される。

7 今井清見氏『直江城州公伝』（慧文社、二〇〇八年（初版一九三七年））。

8 原本は失われているが、米沢市の郷土史家今井氏によって一部が謄写される。「慶長六年十月四日 兼続京都伏見にあり、是日中條三盛、楡井綱忠、吉益家能、末次朝秀、鮎川秀定（以上上杉藩）花園退蔵院五世千山玄松、一



吉、資種、諷春（三名の姓名未詳）等十名と共に某所に於て漢和聯句の會を興行した。此一巻八元鮎川家の所蔵にして軸の表に「直江書」とある。（『直江筋書』第二巻）と記されることから旧鮎川氏蔵本であったと推察される。

9 鶴崎裕雄氏「直江兼続・大国実頼兄弟と寄合の文芸」（花ヶ前盛明氏監修『直江兼続の新研究』宮帯出版社、二〇〇九年）。

10 木村徳衛氏『直江兼続』（私家版、一九六九年）。

11 前掲注（10）木村氏著書。「さりとて國文學の修業を怠った譯ではない。嘗て兼続は自ら古今集以下十餘の歌集より百十数首の古歌を撰んで「師説撰歌和歌集」と號し、上杉藩中武人にして文學の造詣深き木戸元齋壽三をして、天正十三年三月之に註釈せしめた事もある。」

12 其阿の名は、天正十六年（一五八八）正月十一日、慶長四年十月二十五日、慶長六年十二月十九日の連歌会にも見られるが、彼は会津若松東明寺の其阿であり、本懐紙の其阿とは別人であることに留意したい。

13 佐河田は、江戸初期の文壇で活躍した歌人であるが、彼は元齋とともに越後に移り、関ヶ原の戦いで活躍した後、二〇歳過ぎで上杉家を去った。渡辺憲司氏「佐川田昌俊の前半生」（『近世大名文芸圏研究』八木書店、一九九七年）。

14 先ず第二紙を初折裏と見なして付合を考えた。但し、第一紙（初表）と第六紙（名残裏）以外の順番は無秩序になつてゐる可能性も残るため9の前句が8ではない場合も考えてみる。現存部分で9の前句となり得るのは、8の他に

36 . 64（天の内曇紙の最終句である）

36 ↓ 9 の場合

ひとむら雪のうづむ卵のはな

はらひこし袖のうす雪はるゝ日に

となり、前句付句ともに「雪」という語を含むことになってしまっているので、36↓9は順番は想定する必要はないだろう。

#### 64↓9の場合

くればなづむ駒ははふなり

はらひこし袖のうす雪はるゝ日に

となる。9句は「こまとめて袖うちはらふかげもなしさののわたりの雪の夕暮」（新古今集・冬・六七一・定家）を連想させ、「駒・暮↓袖・雪・はらふ」が寄合語となり、

付け句としては自然であると言える。ただし、そうすると問題も生ずる。63「あふ坂やかすめる月に山こえて」と打越になり、式目に抵触する。（『連歌新式追加並新式今案等』「可嫌打越物」に「月に日次の日」とある）

また、第四紙↓第五紙の紙継ぎについて考察を加える。春を二句で捨てるとは考えられないので、50の次の句は春の句でなければならぬ。しかし懐紙の一句目に春の句があるのは現存の懐紙では第五紙のみであるから、第四紙の後に第五紙が続く可能性は極めて高い。ただし、一句も残っていない散佚懐紙は最初の句が不明であるので、これが第四紙に続く可能性は否定できないので注意が必要。現状、翻刻に掲げた順番で良いように思われるが、錯簡は巻子に装訂される際に生じた可能性も考慮にすべきか。

15作者は原則、奇数句が直江兼続、偶数句が其阿となる。「両吟の場合は、二人で交互に詠みあつていくので、甲は長句、乙は短句のみに片寄りがちになるので、その片寄りを平均化させるために、折ごとか、適当な個所（二・三折の表裏など）で一人が二句続けて詠み、長短句を変えて詠むのが通例である。」（伊地知鐵男氏『連歌の世界』吉川弘文館、一九六七年）、とあり当該連歌も五十一句目あたりで長短句を変えている可能性がある。だが、本来五十一句目にあたるであろう懐紙が散佚しているため、作者の表記から入れ替えた箇所を断定することは難しい。

第五節 埼玉県立文書館蔵慶長五年正月廿一日賦何船連歌「梅か香は」注釈―上杉景勝主催の連歌―

はじめに

埼玉県立文書館に、上杉景勝とその家臣たちが興行した連歌懐紙一巻が所蔵される。長野家文書に含まれる。

上杉家では、天正末年から慶長七年頃まで、領内及び上洛時の京都で度々、連歌と和漢聯句が行われていた<sup>1)</sup>。

だが、会の実施記録が判明しても、当時の懐紙の所在は不明なものが多く、その全貌が明らかとなったとは言い難い。本稿で紹介する連歌懐紙も『鷲宮町史』<sup>2)</sup>に、

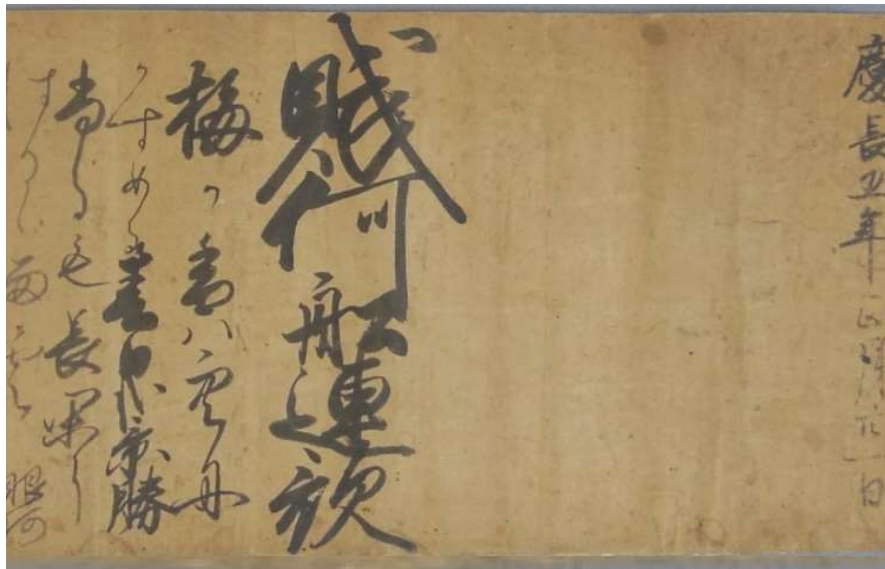
熊谷の長野氏が伊勢に参宮したのも、また連歌師を迎えに行つたのも、それは表向きであつて実は商売のためであつたとみられる。このように氏長は、連歌を単なる嗜みとしてでなく経済活動にも利用していたのである。

ちなみにこの長野家では、慶長五年(一六〇〇)一月に会津城主上杉景勝が家臣や時衆の僧とともに「賤何船連歌」と題して詠んだ連歌一巻を所蔵している。

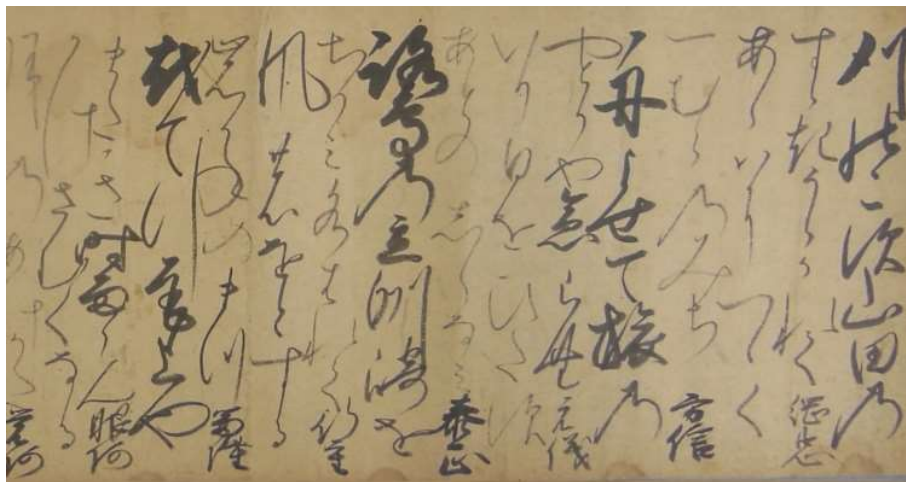
と言及されていたが、その所在は長らく不明であり、翻刻もなされてこなかった。

だが、このたび調査でその所在が判明した。この連歌が興行された慶長五年正月は、そのわずか四ヶ月後に、家康の上洛の命に景勝の家宰直江兼続が異議を申し立てたことに端を発する「直江状」が作成されたとされる年でもある。さらに家康による上杉氏征伐(会津征伐)を一つのきっかけに、関ヶ原の合戦が勃発する年でもある。

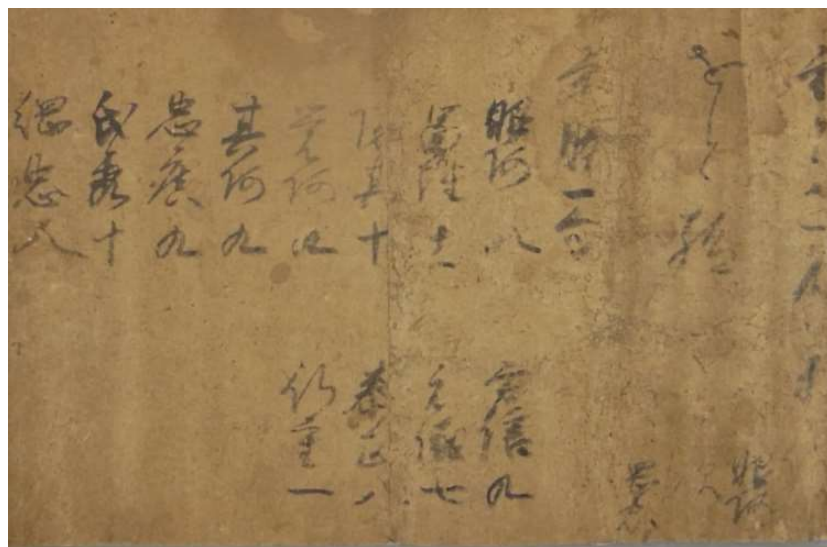
図版1 端作(埼玉県立文書館蔵長野家文書)



図版2 初折ウラ



図版3 句上



※転載禁止

当該連歌と同年に興行された和漢聯句があつたとされるが<sup>3</sup>、現在その所在は不明である。

以上、興行時期、及び百韻が完備すること、資料的価値の点から、紹介には極めて意義があると考え、ここに本文を掲げ、かつ注釈を施した。

### 一、底本書誌と連衆

まず書誌を記す。埼玉県立文書館蔵長野家文書「賦何船連歌」（成田下総守より喜三江被下候）。卷子装。金茶色地牡丹唐草文様。一軸。外題なし。巻緒（紫色）に旧蔵者独自の整理番号と思しき「二五〇」の記号を記した紙片が貼付。一紙は縦一八・三糎、横四一三・六糎（一才 五二糎、一ウ 五一・六糎、二才 五一・六糎、二ウ 五二糎、三才 五二糎、三ウ 五一・八糎、四才 五一・二糎、四ウ 二四・四 句上げ二七糎）で計九紙。字高一六糎前後。斐楮。無地。裏打補修あり。擦り消し痕間々あり。各紙に水引きで綴じた際の二ツ穴の跡あり。第九八句、第九九句、第一百句は一部または全てが摩滅し判読不能な箇所がある。本文とは別筆で後世のものと思しき貼紙（縦一五・九糎、横一五・四糎）が裏見返しの金箔上に重ね貼りされ、「此一巻は上杉景勝公始夫々連／歌連中連歌有之候節之書物／之由ニ候慶長天正之比連歌流／行ニテ候別而成田下総守連歌相好／候ニ付此一巻所持之品喜三江被下候故／所持罷在候由候」と当該連歌の伝来過程が記される。

次に本百韻の連衆の略歴<sup>4</sup>と句数を句上に従い掲げる。懐紙に記される名を挙げた後、（ ）内に句数を示した。

《連衆》

・景勝（一）…上杉景勝。豊臣家五大老の一人。慶長三年正月より会津に国替え。同五年九月、上杉討伐を掲げる徳

川家康と交戦。この時、四十五歳。

・眼阿(八)・・・未詳。時宗の僧か。

・富隆(十一)・・・八王子富隆。民部少輔。上杉家の家臣か。慶長六年十二月十九日兼統主催の和漢聯句に参加。

・隠其(十)・・・越後称念寺隠居。元越後府中時宗寺院の住職。

・覚阿(九)・・・文禄三年の「懐旧百韻」(連歌合集四八)に忍城主成田氏長、連歌師里村紹巴、兼統の実弟大国実頼らと共に名を連ねる。

・其阿(九)・・・会津若松東明寺其阿弥。時宗の僧。翌六年十二月十九日の和漢聯句の和句、同七年の続歌百首で和歌を詠む。

・忠廣(九)・・・蔵田忠廣。惣左衛門。上杉家の家臣か。

・氏秀(十)・・・来次氏秀。出雲守。直江兼続の家臣。出羽国人、庄内羽黒山神職家の出身。はじめ最上氏に仕える。

天正十九年庄内藤島一揆討伐の折に景勝に帰服。文禄二年の兼統主催の漢和聯句で執筆を務め、慶長六年十月の和漢聯句に参加。

・綱忠(八)・・・楡井綱忠。織部。信濃にあった楡井氏は仲共が越後守護房定に随い、その後謙信の旗下に属す。綱忠の代に景勝に従い会津から米沢へ移った。

・方信(九)・・・未詳。米沢の郷土史家、今井清見氏の『直江筋書』<sup>5)</sup>によれば、会津若松で興行された慶長四年十月二十五日連歌に「方重」がおり、その関係者の可能性が高い。

・元儀(七)・・・未詳。方信と同じ連歌会に参加した。

・泰正(八)・・・未詳。成田氏の関係者か。

・行重(一)…未詳。執筆か。

連衆は、明確な事績が追えない者も多いが、いずれにしても天正期以降、上杉家内外で催されてきた会に、度々参加してきた人物を中心に構成される。例えば、隠其は、同六年十二月十九日の兼続主催の和漢聯句に参会している。また、富隆、其阿、忠廣、綱忠は、慶長七年に上杉家の家臣らの和歌と漢詩が続がれた「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」にも名を連ねる。なお、他の上杉家関連の連歌・和漢聯句会に比して眼阿、隠其、覚阿、其阿など、時宗僧の参会が目立つ。

## 二、翻刻

慶長五年正月廿一日

### 賦何船連歌

- |   |                 |    |    |                 |    |
|---|-----------------|----|----|-----------------|----|
| 1 | 梅か香は空にかすめる春日哉   | 景勝 | 6  | ふきかへけりな月のした風    | 其阿 |
| 2 | ふるも長閑にはるゝ雨雲     | 眼阿 | 7  | 鐘の音ほのかなりしも冷しみ   | 忠広 |
| 3 | 鶯の古巢にかへるこゑたてゝ   | 富隆 | 8  | くれ行秋の霜払ふめり      | 氏秀 |
| 4 | はつほとゝきすきくもめつらし  | 隠其 |    |                 |    |
| 5 | 夜ふかくもさむるかりねの夢は惜 | 覚阿 | 9  | 刈のこす山田のすゝきうらかれて | 綱忠 |
|   |                 |    | 10 | あらはにつゝく一むらのみち   | 方信 |
|   |                 |    | 11 | 舟よせて旅のやとりや急らむ   | 元儀 |
|   |                 |    | 12 | いり日をひたすあとのしらなみ  | 泰正 |
|   |                 |    | 13 | 鶯の立洲崎をちかみ水はれて   | 行重 |

「(初折才)」

30	29	28	27	26	25	24	23		22	21	20	19	18	17	16	15	14
くれぬる月に袖なとかめそ	神かきにしはふくこゑの翁さひ	身はいつまてかみやつかへまし	伴ふもなかはゝあらすなれる世に	ものかなしきは老のあかつき	みえつくも夢をし風やさそふらん	なをおもはるゝあとの古郷	さすらふる袖にうらやむかへる雁		あやなくくらす春のさひしさ	花にたに問人あらぬやもめ住	色にいつるもうきしのふ草	寺もたゝ穂は軒はの朽そひて	きりの雫そ板まもりぬる	長き夜をうちも侘たる麻衣	かけさむくなる月のあけかた	越て行尾上やまたき時雨らん	風のをとする岩かねのまつ
忠広	覚阿	氏秀	富隆	其阿	泰政	眼阿	方信	「(初折ウ)	元儀	氏秀	綱忠	其阿	忠広	隠其	覚阿	眼阿	富隆

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37		36	35	34	33	32	31
葛城や分行すゑはみちもなし	雲にかすみのたちおほふ山	花ちれはつらきあらしも吹すさひ	こてふのやとる露のむら竹	みたれぬる舞のいりあやたゝならて	さけのむしろにくるゝ日はおし	春秋のあはれを哥に書つらね	むかしをおもふゆふへ明ほの	結ひぬる草の庵りの袖ぬれて	むら雨きほふ岩のしたたり	重れる落葉やなかれあへさらん		舟は大井の河つらのなみ	小車のをともはるかにとゝろきて	引やそま木もをのかみち／＼	思ひとり人やりならすすむ山に	とひこぬとてもうとからぬ秋	兼ことの露のよすかを頼みにて
覚阿	忠広	富隆	泰正	眼阿	綱忠	忠広	氏秀	其阿	覚阿	方信	「(二折オ)	富隆	氏秀	泰政	綱忠	方信	元儀



48 ありあけなれや月のしら雪 元儀  
 49 夏の夜はまた宵なから更／＼て 隠其  
 50 まつにほと時過て啼声 富隆  
 「(二折ウ)  
 51 難面をうらみはてぬる物思ひ 氏秀  
 52 かひまみしより露もわすれす 元儀  
 53 手折はやうへ置小萩をみなへし 忠広  
 54 あきのかり場をかへるとりしは 隠其  
 55 身にしめてかはすこと葉や馬の上 其阿  
 56 月にそめくりあへる旅人 方信  
 57 出てこし都の空ははるかにて 富隆  
 58 山より山のおくのかくれ家 覚阿  
 59 雲水のなかれをとするうす煙 泰正  
 60 松の木のまにおち瀧つなみ 氏秀  
 61 五月雨はいつを限りと晴さらん 綱忠  
 62 かたへくつるゝ小田のなはて路 富隆  
 63 里とをく住しとはかり暮初て 隠其  
 64 竹一むらのなひく鳥かぬ 眼阿

65 しら露とみる／＼まかひ置霜に 方信  
 66 入かたはなを月のさやけき 忠広  
 67 漕かへる袖ひややかのみなと舟 氏秀  
 68 をとあらましき奥津しほ風 其阿  
 69 松ならふ天のはしたて幽にて 元儀  
 70 ゆく／＼くるゝ真砂ちのすゑ 隠其  
 71 やつしぬる姿もしるきまへ渡り 富隆  
 72 たれにおもひをふかくなしけん 眼阿  
 73 たらちねのあはするえにしそむかれて 覚阿  
 74 さためなきこそうき心なれ 方信  
 75 ちりて又咲もたのまぬ花の陰 隠其  
 76 こすゑに残る藤のあはれさ 泰正  
 77 住すてしあともさなから春を得て 其阿  
 78 むすふ古井の水そぬるめる 綱忠  
 「(三折ウ)  
 79 おこなへる気色も年もあらたまり 方信  
 80 ゆつりをうくる國のたゝしき 氏秀

95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
色鳥や日影におりてあさるらむ	ひろふもむしはこゝにかしこに	草かりの霧のしたみち分迷ひ	笛のとをねも露にしめれり	秋風や目さましかちに吹ぬらん	月は磯屋のすきまをもとふ	海人の住里あらはるゝともす火に	くれてほたるのとひまかふ空	夏草は茂るをまゝの野へにして	あるかなきかのみちの一すち	化なるは誰にか又も契らし	うしろめたきはとひすつる跡	たきしむる衣のをとなひかほりきて	みぬ人こもる閨そゆかしき	善悪も学ひぬるこそ賢けれ
忠広	隠其	氏秀	元儀	隠其	泰正	富隆	忠広	綱忠	其阿	覚阿	隠其	泰正	富隆	眼阿

「(名残折才)

綱忠	氏秀	忠広	其阿	覚阿	隠其	富隆	眼阿	景勝	100	99	98	97	96
八	十	九	九	九	十	十一	八	一句	をと絶□□吹	「	仏のわかれとひ□□る袖	外面より折きて花をさすかめに	きえものこらぬ春のあさ霜
				行重	泰正	元儀	方信		「	「			其阿
				一	八	七	九		綱忠	眼阿	覚阿	方信	

「(名残折ウ)

三、注釈

1 梅が香は空にかすめる春日哉

景勝

「空に」は、「梅か香」が空に満ちていることと、霞が空に立っていることの二句にかかる。「空はかすみ梅はにほひて物ごととに世は春になる色ぞのどけき」（沙玉集・三一二）。「春日」は、日の長い春の日。「さきにけりいまや句をかすが山みかさのべの梅のした風」（宝治百首・二五五・頼氏）のように、地名の「かすが」を掛け、大和国の郷名或いは春日神社を想定するが、ここは上杉家の家臣が連衆にしていること、当主の景勝が詠む発句であることを鑑み、かつての本拠地であった越後の春日山城を意識させるか。一句は、梅の香りは空に満ち、空に立つ霞は春の日をぼんやりとさせているよ、と詠む。春1（梅）。

2 ふるも長閑にはるゝ雨雲

眼阿

前句の「空」に「雨雲」で応じた。「風まぜに空にた

だよふあま雲の晴るる時なき五月雨のころ」（新明題集・一三九九・隆貞）。また、「春日」に「長閑」。「春の日のどかに見ゆる春日野にふる里人もわかなくなつむなり」（為家集・九）など。降っても日がやわらかく照つて晴れる雨雲、とゆったりとした春の空の情景を詠む。春2（長閑）。

3 鶯の古巢にかへるこゑたてゝ

富隆

前句で雨が晴れた空を飛んで古巢に帰っていく鶯を付けた。「朝日かげのどかにさして春日なるみかさの杜に鶯ぞ鳴く」（為家五社百首・二五）。鶯が鳴き声を立てて古巢に帰っていく。鶯の声で春が来たことを知る。春3（鶯）。

4 はつほとゝぎすきくもめづらし

隠其

前句の「こゑたて」る主を鶯から時鳥に読み換えて付けた。「鶯↓郭公」「郭公↓鳴ふるす」（合璧集）。「鶯之

生卵カヒゴノナカニ乃中尔

霍公鳥ホトトギス

独所生而ヒトリウマレテ

己父尔サガチチニ

似<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>者<sup>ハ</sup>不<sup>ナ</sup>鳴<sup>ズ</sup> 己<sup>サ</sup>母<sup>ガ</sup>尔<sup>ハ</sup> 似<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>者<sup>ハ</sup>不<sup>ナ</sup>鳴<sup>ズ</sup> 宇<sup>ウ</sup>能<sup>ノ</sup>花<sup>ハ</sup>乃<sup>ノ</sup>  
開<sup>サ</sup>有<sup>ケ</sup>野<sup>ノ</sup>辺<sup>ヘ</sup>從<sup>ヨリ</sup> 飛<sup>ト</sup>翻<sup>ビ</sup>（下略）（万葉集・九・一七五五・  
詠み人知らず）。「はつほとゝきす」は、「鶯は帰りし谷  
の古巢出て都にいそげはつほとゝきす」（為広詠草・漸  
待郭公・七六）。初時鳥の鳴き声を耳にするのも、新鮮  
で心ひかれる。春4（ほとゝきす）。

5 夜ふかくもさむるかりねの夢は惜し

覺阿

「郭公↓ね覚」（合璧集）。「も」は感嘆の係助詞。一  
句は、まだ夜が深いのに覚めてしまふ仮寝の夢は名残  
惜しい。雑。

6 ふきかへけりな月のした風

其阿

前句の「かりね」を旅寝ととり、目が覚めたのは草  
枕をしたところに風が吹き返してきたからだ、と付け  
た。また、「かりね」と「月」は縁がある。「草枕かり  
ねの夢にいる物は出でしみやこの有明の月」（拾玉集・  
三〇四六）。「ふきかへ」は、一度静まった風が逆方向

から吹きもどすこと。「吹き返す東風のかへしは身にし  
みき都の花のしるべと思ふに」（後拾遺集・雑五・一一  
三四・康資王母）、「衣手の森の下風吹きかへてさむき  
蟬なく秋は来にけり」（夫木抄・秋一・三八八三・頼  
氏）。一句は、吹き戻してきたのだな、月下に吹く風が。  
秋1（月）。

7 鐘の音ほのかなりしも冷<sup>すさま</sup>しみ

忠広

前句の「した風」と「月」の光が「冷しみ」である  
と受けた。「すさましみみる人もなき庭のおもにひとり  
さしゐる冬の夜の月」（伏見院詠草・一四七）。前句の  
「した風」のために消え入りそうな鐘の音がわずかに  
聞こえたのも、秋のひやかさを一層感じさせると詠  
む。鐘の音が別の音に遮られてわずかにしか聞こえな  
いと詠む歌に「かねの音も窓うつ雨にほのかにて枕に  
ふかき長き夜のやみ」（壬二集・下・三〇五五）。秋2（冷  
しみ）。

8 くれ行秋の霜払ふめり

氏秀

前句の「鐘」に降った「霜」を誰かが払っているのだろう、と思い遣る句を付けた。「鐘」と「霜」（合璧集）。「秋くれてあはれつきにし鐘の音の霜にこたふる冬はきにけり」（千五百番歌合・八三三番左・一六六四・讚岐）。「秋の霜」は、「つもりぬる我がよもぎふの秋の霜ふり行く庭の月ぞさびしき」（宝治百首・一七三二・忠定）など、秋が一層深まるさまを表現。一句は、深まっていく秋に降りた霜を払うのだろう。秋3（秋）。

9 刈のこす山田のすゝきうらがれて

綱忠

前句で降りた霜によって、秋の象徴である薄も枯れた、と秋がより一層深まった様を付けた。「一もとの薄のかれほ霜折れて草なき野べとなれる冬かな」（草根集・一四・寒草纒残・一〇二四三）。「霜↓草のうら枯」（合璧集）。刈り残されている山裾の田に生える薄が枯れて。秋4（すゝき）。

10 あらはにつゞく一むらのみち

方信

薄が枯れたことで、隠れていた道が続いているさまがはつきりと見えるようになった、と付けた。「一むらは、『産衣』に「居所の心過て、又竹一村など有べし。以上二也」とあり、前句とでは薄が一群生える道となるが、当該句では居所と解した。前句の「田」がある場所には村が近くにあり、その村まで道が続くさまを詠むか。

「みぞれにくるゝ一むらのみち／柏木のもとつ葉まつも落添て」（玄旨公御連歌・冬・七一〇）。雑。

11 舟よせて旅のやどりや急らむ

元儀

前句で露わになった村へ続く道をみて、舟を岸辺に寄せて、旅人が宿へ急ぐ。「やどりとる里やはるけきの夕しらぬ山路をいそぐ旅人」（為村集・二〇一五）、「いでやらぬ旅のやどりの霜ふかみ／をぶねにかゝるあしのかしたおれ」（三島千句・第二・八）。雑。羈旅。

12 いらり日をひたすあとのしらなみ

泰正

前句で旅人が宿りを急いだ理由を、日が海に沈んだためと付けた。「浪の上に入日の影はなるみがたさす夕しほにいそぐ旅人」(経氏集・三五六)。日が海に沈むさまが、まるで白波が日を浸したかのようだと詠む連歌に、「山より遠の雲ぞ暮れゆく／紅の入日をひたす波の上」(永正十花千句第七「早大伊地知本」・七一・聴雪)。一句は、落ちる日を水のなかに浸からせた後に立つ白波、と詠む。雑。

13 鷺の立洲崎をちかみ水はれて

行重

前句の「しらなみ」が立つ水辺の具体的な描写で付けた。「はますゑのゆきあひの洲崎しほみてば入江へだてぬ興つしら波」(信実集・二一二)。「水はれて」は、水面に何も映らず、波も立たない穏やかなさまのことか。勅撰集には求め難い表現であるが、「鷺のとぶ川辺を遠み水晴れて入日に過ぐるあきのむら雨」(雪玉集・二二三九)、「水はれてきりに月すむあしたかな」(大発

句帳・五〇四三)などが参考となる。洲の先端が水中から出た「洲崎」には鳥が群れる。「おきつしほ入江はなきて夕浪もたたぬ洲崎にたづぞむれる」(草根集・九・七一九〇)。鷺が飛び立つ洲崎は近く、水は穏やかで。雑。

14 風のをとする岩がねのまつ

富隆

前句の「洲崎」に生える「まつ」を付けた。「から崎や夕なみ千鳥ひとつ立つ洲崎の松も友なしにして」(心敬集・一五八)。岩に近接するように松が生えている。「岩がねの枕はさしもなれにしになにおどろかず松のあらしぞ」(続千載集・羈旅・八五五・土御門院御製)、「契置きて幾世をへぬる友ならんむす苔青き岩がねの松」(新明題集・四一一七・幸仁)。風の音を響かせているのは、岩の側に生える松である。松が風で揺れて擦れる音は、風の音なのだ。雑。

15 越て行尾上やまだき時雨らん

眼阿

前句の松風の音を時雨の音に取りなして付けた。「時雨↓松風」（合璧集）。前句の風が時雨を降らす雲を誘ってきた。松の音は時雨のそれと聞き分け難いことを詠む和歌に「風のおとにわきぞかねまし松がねのまくらにもらぬ時雨なりせば」（千載集・羈旅・五二五・実房）。松風が吹くと時雨が想定される和歌に、「そでぬらすをじまがいそのとまりかな松かぜさむみ時雨ふるなり」（続古今集・羈旅・九〇四・俊成）。これから越えようとすする峰の上では、早くも時雨が降っているのだらう。雑。

時雨や軒の松かぜ」（藤葉集・冬・三二五・有忠）、「影

寒く嵐にすめるよはの月雲なき空も秋にかはりて」（新明題集・冬・二八一〇・資茂）。一句は、明け方の月の光は冷たく寒々しくなる。秋1（月）。

17 長き夜をうちも侘たる麻衣

隠其

前句の「月」から、月光の下で衣を打つ秋の長夜のさまを付けた。「あらしふくとほ山がつのあさ衣ころも夜さむの月にうつなり」（新勅撰集・秋下・三二一・真昭法師）。「みるままにかげさむくなるあけがたの月にかこちてうつ衣かな」（俊光集・三二〇）。秋の長夜を麻衣を打って憂いながら過ごす。秋2（長き夜）。

16 かげさむくなる月のあけがた

覺阿

前句の「時雨」が降ってきたから、体感的にも寒くなり、その中で浮かぶ月の光も寒々しい、と視覚的に感じる寒さを付けた。「秋のよのふかきあはれは有明の月みしよりぞしぐれそめにし」（新後拾遺集・秋下・四一四・俊成）。「影寒き月はくもらで出でにけりふらぬ

18 きりの雫ぞ板まもりぬる

忠広

前句の「麻衣」に落ちる雫を付けた。「そでもさながら野べの色／＼から衣霧の雫にしほれきて」（石山四吟千句第十（九大支子文庫本）・九・公条）。板間が漏れ落ちる雫を連歌に、「時雨しくれて月は有明／板間よ

り露のしつくのさむしろに」(羽柴千句第五・八七)など。一句は、霧が雫となったものが、板間から漏れ落ちてくる。秋3(きり)。

19 寺もたゞ穂は軒ばの朽そひて

其阿

前句の「雫」が軒端を朽ちさせる、と付けた。「霜に残らぬつたの葉の色／いはかねの雫は秋のなほそひて」(元龜二年千句第三・七七)。「かすかにも麻の狭衣うつ里に／軒端の秋の霜深き暮れ」(宮島千句第六・二〇)。(霧の雫は)寺でもただ秋は軒端を朽ちさせて。秋4(穂)。

20 色にいづるもうきしのぶ草

綱忠

前句の秋の気配、風情を「猶そ」はせる具体的な景物「しのぶ草」を付けた。「わたくしの宿はあるとも恨むなよ／しのぶ草おふる軒のかげ」(葉守千句第九・八二・宗祇)。色に出てしまうのもつらい思い出のよすがとなるしのぶ草である。雑。

21 花にだに問人あらぬやもめ住

氏秀

前句の「うき」理由を付けた。前句のしのぶ草を「やもめ住」の人が住む家のそれと定めた。「籬↓草花」(合璧集)。前句「しのぶ草」がわすれな草の異名であることから、人から忘れられた独り住まいの寂しさも含意するか。「わかれしあとのうきねやのうち／わすられてこのよなからのやもめすみ」(五吟一日千句第十・二一)。「はるのよのねくらのからすたちわかれ／わひしきものはやもめすみなり」(天文廿四年梅千句第八・五二)。花でさえも一緒に愛でる人がいない、独り住まいであるよ。春1(花)。

22 あやなくくらす春のさびしさ

元儀

前句の「やもめ住」を受けて、その人が春の日を過ごすことのむなしさ、さびしさを付けた。「身にかへてあやなく花を惜しむかないければのちのはるもこそあれ」(拾遺集・春・五四・長能)。(独り住まいで訪う人もなく)むなしく過ごす春の心細さである。春2(春)。



23 さすらふる袖にうらやむかへる雁

方信

前句の「さひしき」を、寄る辺なき旅人の寂しい姿を付けた。人が空を飛ぶ鳥に「うらやむ」感情を抱くことを詠む和歌に「ふる里をいづれの春か行きて見んうらやましきは帰るかりがね」（源氏物語・須磨・二・光源氏）がある。流浪する人の袖に羨ましいと思わせる北へ帰る雁。春3（雁）、旅1。

24 なをおもはるゝあとの古郷

眼阿

「帰雁↓故郷」（合璧集）。当該句との類相句に「思ふも遠しあとの古郷／旅枕草と浪とに隔て来て」（竹林抄・旅・九六七・能阿）。（北へ帰る雁をみて）いっそう思いが募る、後方の故郷。雑、旅2。

25 みえつくも夢をし風やさそふらん

泰政

前句で「古郷」を想うばかりに、草枕の「夢」にその光景を見たと付けた。和歌に「おのづからふる郷人もおもひいでば旅ねにかよふ夢やみゆらん」（新後撰集

・羈旅・六〇二・平親清女妹）など。「みえつくも」は例なし、「みえつくも」の誤写か。夢に見えながらその夢は風がさそうのだろうか。雑。

26 ものがなしきは老のあかつき

其阿

前句の「夢」は、年老いた人がみると、朝方にはやく覚めてしまふと付けた。「老眠早覚常残夜、やまひのちからまづおとろへてとしをまたず病力先衰不待年」（和漢朗詠集・七二四・白居易）。

「夜る（つゞ）の鶴の思ひに袖もせきかねて／目さますのみの老のあかつき」（伊庭千句第一・一四・聴雪）。なんとなく悲しいのは、老いの明け方である。雑。

27 伴ふもなかばゝあらずなれる世に

富隆

前句の「あかつき」を「月」に取りなして、「伴ふ」と付けたか。「春の花月に開きあふ年まれに友なふ人のおほきよはかな」（草根集・一二・八八一）。老いの嘆き。一緒にいた仲間も半ばは居なくなつたこの世の中で。雑。

28 身はいつまでかみやづかへまし

氏秀

前句は「宮仕へ」の仲間が半ばはいなくなり、自分もいつまでと思う句を付けた。類想的な連歌に「あはれゆかりにあふもはづかし／いつまでかしもがしもなる宮仕へ」(元和六年九月二十日百韻・七三)我が身は、いつまで宮仕えをするのだろう。雑。

行平。伊勢物語一一四段にも)に基づいた付け。「翁↓

人などがめそ」(合璧集)。暮れる月の下で(狩衣)袖を見咎めないでくれ。秋1(月)。

31 兼ごとの露のよすがを頼みにて

元儀

前句の「月」を見ている人の「袖」に「露」が置く。

「秋はつるさよふけがたの月みれば袖ものこらず露ぞおきける」(新古今集・秋下・四八六・道信)。「兼ごと」

29 神がきにしはぶくこゑの翁さび

覚阿

前句「宮仕え」を神社の祀官に取りなして付けたか。「しはぶく」は咳き込む、「翁さび」は老人めくこと、連歌に「みやはとがめぬ物おもふいろ／あすをこそ我身にしらぬ翁さび」(顕証院会千句第六・八七・専順)。神垣のうちの咳き込む声はすっかり老人めいて。雑、神祇。

は、前もって言うておく約束の言葉。「昔せし我がかねごとの悲しきはいかに契りし名残なるらんむ」(後撰集・恋三・七一〇・定文)。以前からの約束の言葉は露のようににはかないものだが唯一のよすがとして頼みにして。秋2(露)、恋1(兼言)。

30 くれぬる月に袖などがめそ

忠広

前句の「翁さび」から、「翁さび人などがめそ狩衣けふばかりとぞ鶴も鳴くなる」(後撰集・雑・一〇七六・

32 とひこぬとてもうとからぬ秋

方信

前句の「兼ごと」をあてにしていたが、結局訪れはなくても、関係は深いのだと付けた。当該句のように訪れはないことを恨んだり、憂慮したりすることがな

い連歌に、「岡のべの松の葉ごしの峰の庵／とひこぬもたゞ恨とはせじ」（永禄石山千句第九〔京大平松文庫本〕・六六・為九）。あの人の訪れがなくても、浅い仲ではない秋である。秋3（秋）、恋2（とひ）。

33 思ひとり人やりならずすむ山に

綱忠

前句の「とひこぬ」を受けて、誰も訪れることのない「山」に住むと付けた。「思ひとり」は、悟り決心すること。和歌に「うきものと思ひとりてもこりずまに又ながめつる秋のゆふぐれ」（続後撰集・秋上・二七五・雅成）、連歌に「かりいほつくりひとりある人／おもひとりて世をはなるゝはうらやまし」（聖廟千句第二・一三）。「人やりならず」は、自分の意思で行動すること。「世もかこたれぬたひのかなしさ／ふるさとを人やりならずすみすてゝ」（新撰菟玖波集・羈旅・二一三五・多々良政弘）。決心して、誰かに言われたのではなく、自分の意思で山に住む。雑。

34 引やそま木もをのがみち／＼

泰政

前句の「山」に「人やりならずすむ」人を、山に生える杣木を引いて過ぐす樵夫などを想定して付けたか。「杣↓山」（合璧集）。「ひく人もなくてくちゆくことのはそ色にいつみの杣木ともなき」（貞敦親王御詠・三八四）。切り出した杣木にも人に引いて運ばれる際に、それぞれ道があるのだな。雑。

35 小車のをともはるかにとゞろきて

氏秀

前句の「引」、「みち」から「車」が導かれた。「とくりの声にさめぬる秋の夢／鹿も車をひくとこそきけ」（文明十四年万句第六千句第六・八六）。前句の「みち」を車が通るそれに取りなした。牛車の音も遠くに響いて。雑。

36 舟は大井の河つらのなみ

富隆

前句で「とゞろ」いたものを、当該句では大堰河の水の流れに取りなして付けた。和歌に「山たかみとど

ろきおつるおとはしてかすむ岩せのたきの白浪」(為尹千首・滝霞・二六)。前句の陸上の乗り物に対して、水上のそれを付けた。「せりかはや絶えぬみゆきを伝ふらむ／舟はおほみの波に浮かへり」(慶長十一年一月三日百韻・八六)。舟は大堰川の川辺に立つ波の上を進む。雑。

37 重れる落葉やながれあへざらん

方信

前句の大井の川面に浮ぶ落葉を付けた。「舟↓落葉」(合璧集)。重なり落ちている葉は流れることができな  
いのだろう。冬1(落葉)。

38 むら雨きほふ岩のしたたり

覚阿

前句の「ながれあへざらん」に対して、「したたり」と付けて、水が流動するさまを付けた。一句は、村雨が岩の雫が滴るのよりも先に落ちようとするさま。連歌に「のどかなる嵐の雲や残るらむ／舟路の末にきほふ村雨」(初瀬千句第四・一六・宗砌)。雨粒が先を争

うように岩から滴りおちる。雑。

39 結びぬる草の庵りの袖ぬれて

其阿

前句の結んだ草の庵で宿をとる人の袖は濡れたと付けた。和歌に、「むらさめのもるや山田のかりやかたあらはばしぼし袖もほさまし」(宝治百首・三七二五・為家)など。結んだ草の庵では、袖が濡れて。雑。

40 むかしをおもふゆふべ明ぼの

氏秀

前句の「草の庵り」の中で、昔のことに想いを馳せる様子を付けた。「むかしおもふくさのいほりのよるの雨に涙なそへそ山時鳥」(新古今集・夏・二〇一・俊成)。一句は、夕暮時にも明け方にも昔に想いを馳せる、と詠む。雑。

41 春秋のあはれを哥に書つらね

忠広

前句の「ゆふべ明ぼの」と一日の時間の流れを詠む句に対して、それよりも大きな「春秋」という一年間

の時間軸を付けた。「あづま路や春たつけふの朝霞／し  
なかはりたる春秋の歌」(宗砌発句並付句抜書・二二八  
三)。一年の情趣を歌に詠んで書き連ねる。雑。

42 さけのむしろにくるゝ日はおし

綱忠

前句で「哥を書きつらね」る場を宴席と見て付けた。

「年みてるをぞいのるゆく末／よむ哥はあかぬなさけ  
のゑひ心ち」(慶長四年五月十日百韻・三七)など。酒  
を飲む筈に暮れていく日は名残りおしい。雑。

43 みだれぬる舞のいりあやたゞならで

眼阿

前句の「さけのむしろ」で披露される「舞」を付け  
た。「いりあや」は「入り際の綾」で、舞人が退場する  
直前に引き返して舞うこと。「たをりそへたるつつじ山  
吹／永き日もいりあやしたふまどゐして」(紹巴亡父追  
善千句第八・三)。入綾の乱舞は、並々ではなく。雑。

44 こてふのやどる露のむら竹

泰正

前句の「舞」から舞うように飛ぶ「こてふ」を付け  
た。「野べの胡蝶ぞちりほひて飛／春の日の舞の入綾の  
どかにて」(初瀬千句第七・九九・宗砌)。「舞↓こてふ」  
(合璧集)。胡蝶がとどまる(仮のすみか)露の下りた竹  
の一群。春1(こてふ)。

45 花ちればつらきあらしも吹すさび

富隆

花が散ると嵐も吹き弱るので、前句の「露」は竹に  
宿ると付けた。「嵐ふく野原の草の露ながらむすぶかり  
ねの夢ぞはかなき」(新後拾遺集・羈旅・八八九・法眼  
澄基)。なお、「吹すさび」には風が強まる意と弱まる  
意があるが、ここでは後者。花が散ると、薄情な嵐も  
吹き弱って。春2(花)。

46 雲にかすみのたちおほふ山

忠広

前句で「あらし」によって吹き散らされた花がまる  
で、「雲」や「かすみ」のように見え、山を覆ってるか

のようだと付けた。「雲やたつ霞やまがふ山ざくらはなよりほかも花と見ゆらむ」(新勅撰集・春上・七一・俊成)など。「嵐↓山」(合璧集)。一句では、山に雲や霞が立つ実景を詠み、雲にさらに霞が立つて山を覆う、となる。春3(かすみ)。

47 葛城や分行すゑはみちもなし

覚阿

前句の山を具体的に葛城山と定めて付けた。「こえてくるみちもなきまでかづらきのたかまの山は雪ふりにけり」(為忠家後度百首・四五九)分け進んで行く果てには道はない葛城山であるよ。雑。

48 ありあけなれや月のしら雪

元儀

前句の「分行すゑ」の「みち」に積もった雪の様を詠む。雪の白さを有明の月の光のそれに見立てる和歌に「有明の月とみしまの白妙は雪の庭なる朝ぼらけかな」(新明題集・二七五四・後西院)。有明の月の光の白さなのだろうかと思うほどの白い雪。冬1(した雪)。

49 夏の夜はまだ宵ながら更／＼て

隠其

夏の夜が深まっていくと、有明の月が見える時間帯になると、前句に返る心である。「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづくに月宿るらん」(古今集・夏・一六六・深養父)、「まつほどに夏の夜いたくふけぬればをしみもあへぬ山のはの月」(詞花集・夏・七七・道濟)。夏の夜はまだ宵の口のままの明るいさで更けていって。夏1(夏)。

50 まつにほど時過て啼声

富隆

前句の「更／＼て」を受けて、夜がすっかり更けてしまいうまで、待つて聞こえる時鳥の鳴く声を付けた。「ほど時過て」には「時鳥」が掛けられる。「ほととぎすまつはひさしき夏のよをねぬにあけぬと誰かいひけん」(千載集・夏・一四八・公通)。待つほどに時が過ぎてから聞こえる時鳥の啼き声。雑。

51 難面つれなきをうらみはてぬる物思ひ

氏秀

前句で身が老いてしまいそうなくらい長い時間、恋人を「まつ」女性が、相手の素っ気ない態度に恨みを抱く句を付けた。「こゝらの年に逢へるうれしき／つれなさを半は恨み思ひわび」（竹林抄・恋下・九二〇・専順）。冷淡な態度を怨んだ末に思い悩む。雑、恋1（うらみ）。

52 かひまみしより露もわすれず

元儀

前句で、男性のつれなさに歎息する女性の心を詠んだ句に対して、当該句は、あなたのことを一目見た頃からずっと思っていたという男性の心を付けた。あの人をのぞき見た時から片時も忘れることはない。秋1（露）、恋2（かひまみ）。

53 手折たおばやうへ置小萩をみなへし

忠広

前句の「露」を小萩と女郎花に置くものに取りなし、露がついたままの秋の花を手折りたいたものだ、と付け

た。「露↓置」（合璧集）。「あさままだきたをらでを見む

はぎの花うはばのつゆのこぼれもぞする」（新勅撰集・秋上・二三九・師時）。手折りたいたものだ、植えてある小萩や女郎花を。秋2（小萩）。

54 あきのかり場をかへるとりしば

隠其

前句の小萩や女郎花の枝を「鳥柴」の木に取りなした。「とりしば」は鳥柴のこと。鷹狩りの獲物を贈る際に鳥を結びつける木。「つれもなき人のこころをとりしばにこがねのきぎすつけえてしかな」（夫木抄・春五・一八〇二・仲正）。獲物を付けた鳥柴とともに秋の狩り場をあとにする。秋3（あき）。

55 身にしめてかはすこと葉や馬の上

其阿

前句の「あき」の語を受けて「身にしめて」と応じた。「泪ぞ袖の色かはり行く／秋深き月と風とを身に入れて」（浅間千句・第三・二五）。しみじみと身に染み入らせて、馬上で言葉を交わす。秋4（身にしめ）、羈旅。

56 月にぞめぐりあへる旅人

方信

前句の「身にし」む対象を「月」と定め、「かはすこと葉」は当該句では旅人同士が交わしたものとなる。月の下でこそ巡り会うことができる旅人。秋5(月)、

羈旅。

57 出でこし都の空ははるかにて

富隆

前句の「旅人」が出立した場所を「出でこし都」と受けた。旅人が遙か彼方になってしまった都を思い遣る気持ちである。「たえずぞ誰も物はかなしき／ひきつれて出こし都遠ざかり」(伊庭千句第八・八九・宗碩)。また、「月」が姿を現すことを「出でこし」で応じる。「月↓都」(合璧集)。出立してきた都の空は遙かかなたにあつて。雑、旅3。

58 山より山のおくのかくれ家

覺阿

前句で都を「出でこし」人が目指した場所を付けた。山の深奥に人が踏み入ることを詠む和歌に、「まだしら

ぬ山よりやまにうつりきぬあとなき雲のあとをたづねて」(続後撰集・羈旅・一三一三・良経)。山のさらにその山の奥の隠れ家である。雑。

59 雲水のながれをとするうす煙

泰正

人が隠れ住むような山奥を受けて、そこに立ち込める「うす煙」を付けた。「谷よりのぼる雲のしたみち／身をかくす庵につらきうす煙」(河越千句第七・二七・修茂)。煙が視界を遮っている中、雲や水が流れる音だけは聞こえる状況を詠む。なお、隠者の山家では、水車で動く、仙菓の原料を碾く臼の音だけが聞こえていたという、「雲確無人水自春(雲確に人なくして水おのづから春く)」(和漢朗詠集・仙家・五四一・白居易)の連想もあるか。「うす煙」に「白」を掛けることになる。「雲↓山」(合璧集)。薄煙の中で雲や水が流れる音がする。雑。



60 松の木のまにおち瀧つなみ

氏秀

前句の水の音を辿っていくと、松の木の間から瀧が見えたという展開。「けぶりにこもるみなかみの山／一むらのまつの木の上に滝落て」（大原野十花千句第四・二三・了弦）。「煙↓松、水」（合璧集）。「時雨もや風にまがひてすぎつらむ／この葉たえだえおち瀧つ波」（紹巴亡父追善千句第七・一四）。松の木の間から落ちる瀧の波である。雑。

61 五月雨はいつを限りと晴ざらん

綱忠

前句の木の間から見えたと思つた瀧は、実は五月雨であったと付けた。「滝↓雨」（合璧集）。「さぞなとおもふうつせみのこゑ／五月雨はこのまにたきのおちあひて」（永禄三年十一月十日何路百韻・八一）。五月雨はいつを果てだとおもつて、止まないのだろうか。夏。

62 かたへくづるゝ小田のなはて路

富隆

前句で降り続いた五月雨によつて、小田のあぜ道が

ぬかるみ崩れるさまを付けた。あぜ道に限らず、雨が降った後には、土で出来た岸などの土地が崩れることを詠む連歌に「みよしののよしのをはなのところにて／きしもくつるるゆふたちのあと」（那智箴・二八八〇）。「なはて路」は「畷、田間道、奈八天」（和名抄）とあるように、田の間の道。小田のあぜ道の片側が崩れている。雑。

63 里とをく住しとばかり暮初て

隠其

前句の「小田のなはて路」を通つて、日が暮れ始めたので遠くにある里に帰る、と付けた。里から離れた場所に住んだところだけが暮れはじめて。雑。

64 竹一むらのなびく鳥がね

眼阿

前句で日が沈みはじめた時に鳴く鳥を付けた。夕方、一叢の竹で鳥が鳴くさまを詠む連歌に「たれもや世々の親子なるらん／鳴鳥の林の竹にすをかけて」（紫野千句第十・四一・牧<sup>マヤ</sup>）。一叢の竹がなびき、そこから鳥

の鳴き声が聞こえる。雑。

65 しら露とみる／＼まがひ置霜に

方信

前句の竹が風で揺れたことで、そこに置いていた露が落ち、霜かのように見まがうと付けた。「みる／＼まがひ」とは、見ているうちに入り乱れるの意で、ここでは露かと見ていたものに、霜も混在してきたことを詠む。ある二つのものが入り乱れることを詠む連歌に、「半天は風もなきたる朝月夜／霧にまがひて小雨涼しも」(石山四吟千句第十「九大支子文庫」・九二・紹巴)。白露と見ているうちに、入り乱れて霜も入り乱れて置く。秋1(露)。

66 入かたはなを月のさやけき

忠広

前句の「まかひ」を、霜の白さが月光のそれと見まがうものであるの意に取りなして付けた。「月↓霜」(合璧集)。「まことゝたのむ一ふしはなし／竹に置霜こそ月にまがひけれ」(菟玖波集・冬・九七七・尊氏)。ま

た、前句の「みる／＼」と「月」が縁となって、月を見ているうちに「入かた」になるまでの時間的経過を含蓄するか。「月のもと見る／＼いく夜かすむらむ／くさのまくらにとほさかるゆめ」(宗長出陣千句・第二白何・四)。月は沈むころ、なおもその姿がくつきりする。秋2(月)。

67 漕かへる袖ひややかのみなと舟

氏秀

前句の「月」から「ひややか」の語を導いた。「秋のほたるのほのかなるかげ／端居する袖ひやゝかに月出て」(飯盛千句第六・十三・興久)など。また、前句の月が沈むころになったから舟を漕いで帰港すると付けた。「月↓舟」(合璧集)。湊舟を漕いで帰る人の袖は冷え冷えとしている。秋3(ひややか)。

68 をとあらましき奥津しほ風

其阿

前句の「舟」が受ける風の様子を詠み、舟を漕ぐ人の袖が「ひややか」であった理由が明らかとなる。「沖つ

しほ風」が激しいことを詠む句に、「またふきたつは沖  
つしほ風／松原のあなたの里の夕けぶり」（菟玖波集・  
雑二・二五三〇・行阿法師）。沖を吹く潮風の音は荒々  
しい。雑。

69 松ならば天のはしだて幽にて

元儀

前句で荒々しく吹く風によって天橋立の姿が消えて  
しまいそうだと付けた。また、前句の「をと」は、当  
該句では松風がたてる音になる。「神代にもいもせはあ  
りと聞ものを／松風さびし天のはしだて」（北畠家連歌  
合〔書陵部本〕・一七九・伝阿法師）。松が並び立つ天  
橋立の姿は消えてしまいそう。雑。

70 ゆく／＼くるゝ真砂ちのすゑ

隠其

前句の松が立ち並ぶ白い海岸線の路を付けた。「散る  
こそ波の玉柏なれ／真砂地にたてる松がね頭れて」（文  
安月千句第六・一一・専順）。「ゆく／＼」は、前に進  
んで行くことで、和歌に「むさし野やあかず千種に花

を分けばゆくゆく秋のはてもみてまし」（新明題集・一  
九五〇・宗量）、連歌に「舟よばふこの河ごしや遠から  
む／行／＼なをぞ道いそぎける」（文安雪千句第三・九  
八・有春）など。歩きながらも進む真砂地の果ての方が  
暮れていく。雑。

71 やつしぬる姿もしるきまへ渡り

富隆

前句で日が暮れてから、女性のもとへ通う男性の姿  
を付けた。「袖もまぎれずただならぬ人／しのぶにや姿  
やつしてかよふらむ」（園塵〔早大本〕・恋・九四〇）。  
「前渡り」は、ここでは、思う人の家の辺りをさまよ  
い歩くこと。目立たなくしてもそれとわかる、思う人  
の家の辺りをさまよう人の姿。雑、恋1。

72 たれにおもひをふかくなしけん

眼阿

前句で女性のもとへと姿を変えてまで熱心に通って  
いる人物に対して、第三者が男性の心を思い遣る句を  
付けた。一体、誰に慕う気持ちを深くしていったのだ

ろう。雑、恋2（おもひ）。

73 たらちねのあはするえにしそむかれて 覚阿

親が取り決めた縁に背かれたのは、相手が誰か別の人を慕ったのだろうか、と前句に返る心である。「たれたひならぬ国／＼の人／おもへともそむき／＼の中はうし」（東山千句第十・四一・聴雪）。親が出会わせた縁に背を向けられて。雑、恋3（えにし）。

74 さだめなきこそうき心なれ 方信

前句で縁に「そむかれ」た側の憂き心を付けた。「しぐれしそらの袖もひぬ比／定めなき契りのすゑを打佐て」（伊庭千句第十・二三・聴雪）。定まらない状況はつらい気持ちである。雑。

75 ちりて又咲もたのまぬ花の陰 隠其

前句の「さだめなき」対象を儂く散って、咲くことを繰り返す花の様子と受けて付けた。「花↓心」（合璧

集）。「たそがれ時ぞやすらはれぬる／たをるべきひとまをたのむ花のかげ」（老耳・一八五五）。散って、また咲いても期待はしない花の下である。春1（花）。

76 こずゑに残る藤のあはれさ 泰正

前句の「花」が具体的に何であるか付けた。「藤↓花のあたり」（合璧集）。『源氏物語』胡蝶に「ほかには盛りすぎたる桜も今さかりにほゝゑみ、廊をめぐれる藤の色も、こまやかにひらけゆきにけり」。梢に残っている藤の花の趣のあることよ。春2（藤）。

77 住すてしあともさながら春を得て 其阿

誰かが住んで捨てた跡も春になると再び華やぎを取り戻したようで、梢に藤の花だけが残っている、とその趣を前句に返って求める心である。「ふぢばかまなに句ふらんすみすてて野となる庭は誰かきてみん」（続千載集・秋上・三七九・前僧正道性）。誰かが捨てていた住み家の跡もそつくり春を得て。春3（春）。

78 むすぶ古井の水ぞぬるめる

綱忠

前句で到来した「春」によつて、掬った水が温かくなっていると付けた。また、前句で住み捨てたところが変わらず残る井戸を詠む。「たえどになびく霞のあとさびて／古井の水をたれかむすばむ」（文明万句第三千句第四・八六）。掬った古井戸の水は温かくなる。春4（ぬるむ）。

79 おこなへる気色も年もあらたまり

方信

前句で「ぬるめり」と水が温かくなつたのは、年が明けて春となり、寒さが和らいだから、と付けた。「色も香もおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける」（古今集・春上・五七・友則）。何かを行う様子も年も新しくなり。春5（年あらたまり）。

80 ゆづりをうくる國のたゞしさ

氏秀

前句の「あらたまり」を、年が改まるの意から、王のような支配者が代わる意に取りなして付けた。連歌

に、「さまかへばやもあらましにのみ／ゆづりてもしはしは国の後見に」（飯盛千句第六・四五・紹巴）。「ゆづり」は皇位継承も意味するので、王位の譲渡（禅譲）が正しく行われる国家は平和であると祝言した。「をみの衣の袖の数々／すめらぎのゆづりをうくる世の始め」（元龜二年千句第九・五九）。一句は、その国の治世の公平さは、しかるべき手続きを踏んで王位を譲られることに表れている。雑。

81 善悪も学びぬるこそ賢けれ

眼阿

前句の「國」を受けて「善悪」を付けた。民間の聖賢の人に王位を譲った、堯・舜のことを想起か。「只一ふしの諫はづかし／諷ふにも国のよしあし顕れて」（池田千句第六・五一）。「よしあしのことわりわかぬすゑのよに／かしこきひとはたれをつくらむ」（美濃千句第二・六六）。世の中の善悪を知り尽くすことこそ、賢人である、と詠む。雑。

82 みぬ人こもる閨ぞゆかしき

富隆

男性が、まだ逢ったことのない深窓の女性を思い遣る心情を付けた。「見ぬ人をおもふこそなほゆかしけれ／あふ夜にくらき閨の灯」（老葉・恋上・八〇四）。前句とのつながりがはつきりしないが、逆接の意で、物の善し悪しは学べば賢者となるが、まだ姿を見たことがない人が籠っている閨の中を見てみたいと思う、の意か。雑、恋1（閨）。

83 たきしむる衣のをとなひかほりきて

泰正

前句の「みぬ人」に逢いたいと思う理由を、その人が着ている衣に焚き染められたお香の匂いを嗅いだためと付けた。「衣の音なひ」は訪問の時の物音。「心せよかさぬる衣の音なひはやはらかなるもしるかりぬべし」（草根集・九・六九五八）。香を焚き染めた衣を着た人の気配が、香りが漂って来て知られる。雑、恋2（をとなひ）。

84 うしろめたきはとひすつる跡

隠其

前句で衣を着た女性を愛した男性が、その後彼女を顧みることがなくなると付けた。気が咎めるのは、女性を訪うておいて、顧みなかったことである。雑、恋3（とひすつ）。

85 化<sup>あだ</sup>なるは誰にか又も契らし

覚阿

前句で女性を「とひす」てた行為を「化なる」で受けた。「夢になせ我おきふしの物思ひ／あだのちぎりは又もたのまし」（美濃千句第一・二二・紹永）。浮気者は、今度は誰と約束を交わすのか。雑、恋4（契るらし）。

86 あるかなきかのみちの一すぢ

其阿

前句の「契」が果たされることがあるのか否か分からないと付けた。一句では、いまにも隠れて見えなくなりそうな一筋の道を詠む。「哀にもつくれる小田はわづかにて／あるかなきかの道の一すぢ」（東山千句・第二・七〇・雅教）。あるのかどうかも分からないほどの

道の一筋。雑。

87 夏草は茂るをまゝの野べにして

綱忠

前句の「みち」を「あるかなき」ものにしては、生い茂った夏草であると付けた。夏草を茂らせたままにしている野辺であつて。夏1(夏草)。

88 くれてほたるのとびまがふ空

忠広

前句の「夏草」に宿る螢を付けた。「よのなかをなにとたとへむ／夏草に宿る螢の夜のとしひ」(菟玖波集・雑体・二〇二三)。日が沈んで、螢が飛び交っている空。「とびまがふ」は連歌になし。夏2(ほたる)。

89 海人の住里あらはるゝともす火に

富隆

前句の螢の光を、海辺で焚かれる火に取りなした。「ほたる↓いさり火」(合璧集)。『伊勢物語』八七段の「むかしおとこ、津の國むばらの郡芦屋の里にしるよしして、いきて住みけり(略)やどりの方を見やれば、あ

まのいさり火多く見ゆるに、かのあるじのおとこよむ。晴るゝ夜の星か河辺の螢かもわが住むかたのあまのたく火か」に基づくか。灯している火の明るさで海女の住む里がはつきりと見えてきた。雑。

90 月は磯屋のすきまをもとふ

泰正

前句の海人の住む家に射し入る月の光を付けた。「磯屋」は、波で荒廃したり、時雨が漏れるなどする粗末な家。「風かよふ軒ばゝ松にうづもれて／すめるいそ屋は波に荒ぬる」(顕証院会千句第三・一〇・来阿)、「やどりさだめぬ舟の浦浪／かりふきの磯屋の苦をもる雨に」(宝徳四年千句第三・三一・宗砌)など。月光は磯辺の家の隙間からも射し入り、遍く照らす。秋1(月)。

91 秋風や目ざましがちに吹ぬらん

隠其

前句の「磯屋のすきま」から吹き入る「秋風」によつて、目が覚めがちになると付けた。「風↓すきま」(合璧集)。「目ざましがちにあかしはてけり／松風もまだ

聞き馴れぬ山に来て」（称名院追善千句第四・六五）。  
秋風が目を覚まさせがちに吹くのだろう。秋2（秋風）。

など。草を刈っているそばの下道に立ち込める霧をかき分けてさまよい進む。雑。

92 笛のとをねも露にしめれり

元儀

前句の「吹」を風が吹きつける意から、笛を吹くの意に取りなして付けた。「笛↓吹」（合璧集）。笛の音が露とともに詠まれる例に、「さをしかのふえふくみねのおひ風にしのぶもぢずり露ぞみだるる」（夫木抄・秋三・四八五一・後鳥羽院）。遠くから聞こえる笛の音も露に湿っている（かのように寂しげである）。秋3（露）。

94 ひろふもむしはこゝにかしこに

隠其

「ひろふ」は、一句のみでは何を拾うのか不明である。前句の「草かり」の結果出た草、落ち穂などを指すか。拾うと虫はあちこちにいることに気づいて。雑。

95 色鳥や日影におりてあさるらむ

忠広

前句の虫を鳥たちが漁っている光景を付けた。「色鳥」

93 草かりの霧のしたみち分迷ひ

氏秀

「笛↓草かり」（合璧集）。前句の「露」が置いている草を刈る光景を付けた。「草かり」は田の草を刈ることか。「春ふかき野べのさは水せきとめて草かりいるる賤がなはしろ」（文保百首・春・一五一六・為相）。下道に霧が立ち込める様子は、「ふみわけんものともみえず朝ぼらけ竹のは山の霧の下道」（壬二集・一七三九）

はさまざまな小鳥の意。「日影」は日陰か。極めて類似した連歌の例に「こほりぬる小川の水も暮れわたり／おつる日影にあさるとりどり」（文禄二年千句・第三・三八）<sup>10</sup>。さまざまな小鳥たちが日陰に降りてきて餌をあさっているのだろう。雑。

96 きえものこらぬ春のあさ霜

其阿

「きえものこらぬ」とは、消えて残らないの意。「も」



は感嘆の係助詞。ただでさえ消えやすい春の朝の霜は 内に、霜を持ち込む。外から手折って持ち帰った花を消えて跡形もなくなる。春1(春)。挿す甕に(春の朝霜は消えて跡形もない)。春2(花)。

97 外面より折きて花をさすかめに 方信 98 仏のわかれとひ□□る袖 覚阿

前句の朝霜が付いた花を手折って来たと付けた。外 99 「 「 眼阿  
では霜が降り、それが置いている花を手折ることで室 100 をと絶□□吹「 「 綱忠

注

- 1 第一章第三節、第三章第三節参照。
- 2 『鷺宮町史』通史・中巻、鷺宮町、一九八六年。
- 3 今井清見氏「直江筋書」第二巻(市立米沢図書館蔵)。
- 4 『戦国人名辞典』(吉川弘文館、二〇〇六年)、『三百藩家臣人名事典』(人物往来社、一九八七年)、花ヶ前盛明氏編『上杉景勝のすべて』(新人物往来社、二〇〇八年)、藤木久志氏『戦う村の民俗を行く』(朝日選書、二〇〇八年)。
- 5 前掲注3同書。
- 6 新日本古典文学大系『竹林抄』(岩波書店、一九九一年)。
- 7 大阪俳文学研究会編『兼載独吟「聖廟千句」第一百韻をよむ』(和泉書院、二〇〇七年)。
- 8 大阪天満宮蔵。私に漢字をあて表記を改めた。
- 9 『京都大学蔵貴重連続歌資料集6』(臨川書店、二〇〇二年)所収「称名院追善千句注」参照。
- 10 熱田神宮蔵。私に漢字をあて表記を改めた。

第六節 慶長六年十月四日漢倭聯句「落葉雨天下」注釈―直江兼統主催の漢倭聯句―

はじめに

慶長六年（一六〇一）十月四日に上杉家家宰直江兼統が主催した漢倭聯句（以下「和漢聯句」と略記）が伝わる<sup>1</sup>。

兼統は天正末年から慶長初年にかけて、一二回の連歌・聯句に参会したことが知られる<sup>2</sup>。単なる嗜好としての文芸活動ではなく、それを手段として、上洛の折には当時の連歌界の巨頭里村紹巴や、五山を代表し秀吉の顧問であった禅僧西笑承兌らと交わり、時々刻々と変化する各地の情勢を探っていたことも分明となっている<sup>3</sup>。

そもそも、和漢聯句は、南北朝期から江戸初期に流行した付合文芸である。その形式は、連歌と同様に長句（五七五）と短句（七七）を交互に繰り返し、適宜五言の漢句を交える特殊さを備える。公家や五山禅僧、連歌師を中心として、一流の知識人が愛好した。だが、和句と漢句双方の連想関係は難解であり、和漢聯句の注釈は、長らく研究の及ばないものであった。現在、禁裏で興行された和漢聯句の翻刻と注釈の成果は蓄積されつつある<sup>4</sup>。しかし、戦国期には武家にまで浸透した作品形式であるにもかかわらず、多くは資料の博搜が必至であり、翻刻と注釈まで至らずに未整理であるのが現状である。

そこで、本稿は上杉家の文化的水準の高さを示す上でも、また戦国期の和漢聯句として未紹介の作品であることから意義があると考え、当該資料の翻刻及び注釈を試みた。

## 一、伝来と連衆

当該資料は、市立米沢図書館蔵「直江筋書」第二巻に収められる。米沢市の郷土史家今井清見氏によるペン書きの写しで、昭和前半頃のものである。その親本が現存するかは不明である。

今井氏の筆写した本文は、八十八句しかなく、また写し誤りと思われる箇所も少なくない。句上げの各人句数の合計は百句となるので、途中に脱落が生じたものを筆写したと考えられる。いっぽうで、氏の記録によると、「次ノ不  
明点原書を摸写ス」とある句の一覧に、「直江筋書」の筆写には収められない、「はたさむく引別ての跡さひし 綱  
忠」という句が記される。つまり今井氏は後には百句完備した原本を見ていた可能性が高い。ただ、それもまた所在  
は不明である。

欠脱があると推定されるのは77句と78句との間である。絶対の規準ではないが、漢和聯句では、花の句が各折に各  
一とされるが、51句から始まる三折には77句まで花の句が出ていない。単純に考えて78句には花の句があったと考え  
られる。欠脱は他の場所にも想定し得るが、この折でも偶数句に和句が来た場合は、短句となる原則は崩れておらず、  
可能性としては、付合も不明の77句と78句との間が最も大きいと思われる。なお今井氏の筆写本でもこの間で改丁  
している。また83句と84句との間も、付合が分からないが、親本に破損もあったようで、欠脱を想定してよいか。そ  
して88句は明らかに挙句なので、84〜88句は名残折の最終の五句であろう。これに従うと、つぎのような欠脱箇所が  
想定できるか。

第三折裏 第一句〜一三句（65〜77）存、第一四句（78）欠 一句欠

名残折表 第一句〜？句欠、六句（78〜83）存、第？句〜一四句欠 八句欠

名残折裏 第一句〜三句欠、第四句〜八句（84〜88）存 三句欠

月の句も名残折の表裏のいずれかの欠脱箇所にあったことになろう。

さて、この漢和聯句の伝来過程と興行の背景は、今井氏の記録によりある程度復元できる。例えば、

。按、右ノ聯句ハ鮎川秀定ノ子孫ニ伝ヘシモノノ明治以降戎屋ノ手ニ移ル

の一文から、鮎川秀定に伝わった原本が、鮎川家に先祖代々受け継がれ、明治期に戎谷喜兵衛なる人物の手に渡った、と理解される。鮎川秀定は、揚北衆（北越後の一族）であり上杉謙信に仕えた鮎川盛長（生没年未詳）の養子で、新発田重家の乱後に没落した後は、越中国の神官二宮長恒の子となる。寛永十六年（一六三九）鮎川信重の時に鮎川家は上杉定勝に仕え、上杉家に復帰した経緯を辿る。このことが、「鮎川秀定ノ子孫ニ伝ヘシモノ」と判断された理由なのだろう。戎谷は米沢の骨董商であったらしい。その後、戎谷氏から何処に伝わったかは不明だが、少なくとも今井氏が見た原本は戦前には存在していたと言えよう。

原本の状態は、今井氏の記録に、「此一巻ハ元鮎川家ノ所蔵ニシテ軸ノ表ニ「直江書」とあり、冊子の写本ではなく、軸装であったと推測される。さらに今井氏が知り得た当時の興行状況が、

慶長六年十月四日 兼統京都伏見にあり、是日中條三盛、楡井綱忠、吉益家能、末次朝秀、鮎川秀定（以上上杉藩）花園退蔵院五世千山玄松、一吉、資種、諏春（三名の姓身詳不明）等十名と共に某所に於て漢和聯句の會を興行した。

と記される。この年の冬、兼統或いは上杉家関係者が京都に上洛した折に、興行されたことが分かる。

次に本百韻の連衆の略歴と句数を句上に従って挙げる。句の下に記される名を掲げた後、（ ）内に句数を示した（上段は句上の数、下段は実際の句数）。生没年が分明な者は興行時の年齢を記した。

《連衆》

兼統（漢 17 / 16）…直江山城守兼統。上杉家家宰。上杉景勝に近侍。この時、四十二歳。

綱忠（和 7 / 6）…楡井綱忠。楡井氏は越後守護上杉房定に随臣、その後謙信の旗下に属す。綱忠の代に景勝に従い、会津から米沢へ移る。

三盛（和 9 / 8）…中条三盛。越後国の国人。領主中条氏二十二代当主。会津移封後、慶長三年に出羽国奥賜郡鮎貝城主。この時、二十八歳。

家能（和 8 / 7）…吉益家能。与板衆。大瀬口より最上領へ侵攻を命じられる。

一吉（和 8 / 7）…太田一吉。丹羽長秀の臣。長秀の死後豊臣秀吉に仕え、慶長二年豊後臼杵城主。元和三年没。

資種（和 1 / 1）…中条資種。三盛は兄。関ヶ原の戦い頃に上杉家に帰参。執筆か。

玄松（漢 18 / 15）…花園退蔵院玄松。臨濟宗妙心派を退き隠遁した僧（『正法山宗派図』）。なお「前花園泰安玄劉」の名が、上杉家主催慶長七年亀岡文殊堂奉納詩歌百首の短冊帖の序に見られる。

朝秀（漢 2 / 2）…来次朝秀。来次出雲守氏秀の子息か。

秀定（漢 13 / 12）…鮎川与五郎秀定。庄内羽黒山神職家の出身。天正十九年庄内藤島一揆討伐の時、景勝に帰服。慶長六年十二月十九日兼統主催の和漢聯句に出座。

諏春（和 7 / 6）…岩井諏春か。

氏秀（和 10 / 8）…来次出雲守氏秀。天正十八年の小田原征伐に上杉景勝の配下として従軍。文禄の役にも肥前国名護屋へ。慶長五年の会津征伐・関ヶ原の戦いに西軍が破れ、上杉氏が米沢へ減封されると氏秀も従い米沢に移る。

二、翻刻

一、底本としたのは市立米沢図書館蔵「直江筋書」第二巻である。今井清見氏の筆写の本文には多数の抹消訂正、書き込み、傍書がある。それらはすべて省略して、あるべき本文を推定して翻刻した。但し、他の百韻よりは多く（ママ）を附した。

一、欠脱が推定される箇所には句と句との間に点線を挿入した。

一、番号は通し番号として句頭に冠した。

一、欠脱が想定されるため、三折以後は各折の表・裏は表示しなかった。

慶長六年十月四日

漢和聯句

- |   |               |    |    |                                                                               |         |
|---|---------------|----|----|-------------------------------------------------------------------------------|---------|
| 1 | 落葉雨天下         | 兼統 | 9  | 話盡月西落                                                                         | 玄松      |
| 2 | ゆふへの空に月そさえ行   | 三盛 | 10 | 日々にすきゆく秋そ驚く                                                                   | 綱忠      |
| 3 | ちとり立浪は汀によせくたけ | 一吉 | 11 | 擣 <small>（ママ）</small> いつる礎 <small>（ママ）</small> のよろ <small>（ママ）</small> ひしるなれや | 家能      |
| 4 | 釣竿漁弄晴         | 玄松 | 12 | 妾扉多少情                                                                         | 秀定      |
| 5 | 小舟風上載         | 秀定 | 13 | 一宵腸百結                                                                         | 兼統      |
| 6 | 九鼎國和平         | 兼統 | 14 | 萬世約三生                                                                         | 玄松      |
|   |               |    | 7  | かと／＼のす <small>（ママ）</small> かきよるは戸さしせて                                         | 諏春      |
|   |               |    | 8  | 袖はあまたにたち更しけり                                                                  | 氏秀      |
|   |               |    |    |                                                                               | 「（初折才）」 |

32	暮色 <small>（マヤ）</small> 認鐘 <small>（マヤ）</small> 色	兼統	50	頌其 <small>（マヤ）</small> 毳唱評	秀定
31	旅なるかゆくゑをおもふ秋の空	諏春	49	信自 <small>（マヤ）</small> 鯉沈少	兼統
30	きなれし衣露や根てん	氏秀	48	なかめえならぬ露の萃	三盛
29	とし月をむすひそへたる菊の水	一吉	47	一すちの橋の下水ひやゝかに	諏春
28	長生薬術彭	玄松	46	樵径月残明	玄松
27	困乏筆耕愈	兼統	45	雲まより朝日うつろふ春の山	氏秀
26	騷社日研精	秀定	44	緑陰紅紫英	兼統
25	廢家風扣寂	玄松	43	松かゑにそなれて藤の生のほり	綱忠
24	ちる卯花のかきそ傾く	三盛	42	旧杖以同盟	秀定
23	積つゝすゑ野の杜もしら雪に	綱忠	41	雨床難続夢	玄松
22	やとりもとめてからす鳴なり	家能	40	まくらそかゝるうき <small>（マヤ）</small> 鬢	諏春
21	斜輝舒翼鷺	秀定	39	稀にあふきみの心はうちとけて	家能
20	江頭芦折横	兼統	38	かたるにあかぬ中の <small>（マヤ）</small> 鱗	一吉
19	舟はたゝさとの中河行かへり	氏秀	37	簾隙風遮莫	兼統
18	たそかれにちかき方そ耕す	諏春	36	気暖景霏々	玄松
17	うちそゝく雨もかすめる朝またき	三盛	35	月融春処々	秀定
16	花さくかけにきゐる鶯	一吉	34	めてぬはあらしこのはな桜	綱忠
15	薫読攤梅譜	朝秀	33	舟よする浪もしつかに志賀の浦	三盛

51 賢はまなひつくせる窓の前  
 52 かゝけそへたる夜半の繁  
 53 欵枕聴帰雁  
 54 すさひしも又のとかなる廳  
 55 霞晴山色顯  
 56 雲暮月光撐  
 57 空はたゝ秋の時雨を催して  
 58 小鷹狩場のかへるさの運  
 59 手をりつゝかさゝぬはなき萩すゝき  
 60 緩歩雒陽城  
 61 善政夷懷惠  
 62 とおきかたまで御調整る  
 63 陋巷無来往  
 64 旅亭有送迎  
 65 暑於槐蔭避  
 66 松操祝元正  
 67 家々の門は霞に明(ママ)りたり  
 68 市路をいそく馬に撈つ

一吉  
 家能  
 玄松  
 氏秀  
 兼統  
 秀定  
 兼統  
 三盛  
 綱忠  
 氏秀  
 玄松  
 兼統  
 一吉  
 玄松  
 兼統  
 秀定  
 兼統  
 家能

一(二折ウ)

69 利以錐刀切  
 70 たかためにしもおしむあたし名  
 71 椿壽須臾変  
 72 蘿閣沈醉醒  
 73 月に猶歌の筵は敷あかて  
 74 はし居のつゆはさなからの瓊  
 75 砌よりおきのうは風吹をくり  
 76 軒にすゝめのねくらかる(ママ)布  
 77 塞向寒衣暖  
 78 荷恩濁世清  
 79 遁聞江水楽  
 80 戦囲石碁秤  
 81 仙侶洞門鶴  
 82 山よりおくのみちそ嶮しき  
 83 尋花無遠近  
 84 立ふる川檉  
 85 雨そゝく空につはめの飛かはし

兼統  
 氏秀  
 秀定  
 玄松  
 家能  
 兼統  
 玄松  
 兼統  
 家能  
 兼統  
 玄松  
 兼統  
 秀定  
 兼統  
 玄松  
 兼統  
 家能  
 三盛  
 氏秀



- 86 春昼鳥嚶々 秀定 資種一  
 87 民奏太平曲 朝秀 (花園退蔵院) 玄松十八 (來次) 朝秀二  
 88 君と臣とのみちそ奥しき 資種 秀定 十三  
(イ)

(直江) 兼統 十七 (楡井) 綱忠 七 (來次) 氏秀 十  
 (中条) 三盛 九 (吉益) 家能 八

三 注釈

1 ●●●○●●●  
 落葉雨天下 (落葉 雨天より下る) 兼統

「落葉」の語により冬の句に定まる。「落葉冬也」(産衣)、「冬の始の心ナラバ 木の葉」(合璧集)。端作に記された興行日十月の季節を反映させた発句。葉が散るさまを雨が降るさまに重ねて詠む和歌と連歌に「梢にはそれかとばかり降過ぎて落葉に高き雨の音かな」(文保百首・冬・日野俊光・一二五六)、「あくるまで月はのこれど影もなし／雨のなごりはおちばなりけり」(続草庵集・連歌・六二六)。葉は、雨が空から降ってくるのと同じように、空から舞い降りてくる、という情景を詠

む。なお、平仄は四句目が孤平。冬1(落葉)。

2 ゆふべの空に月ぞさえ行<sup>ユク</sup> 三盛

前句で葉がすっかり散り、夕方の空に月光がつめたく澄んでいく、と付けた。「雨←ゆふべ」(合璧集)。夕方の空に澄む月を詠む和歌に、「月すまん夕の空の気色にて鶉なくなり更科のさと」(壬二集・上・九四六)など。前句と当該句において「雨」と「ゆふべの空」の語が縁となるが、類想的な連歌例に「影ほそく夕べの空に月出でて／ひややかに降る秋の村雨」(聖廟千句・第四・七六)。また、『産衣』に「又云、春夏冬の月一ヅ」と

あるので当該句の「月」は秋ではなく冬の季節と解した。  
なお、「行」の字によって当該聯句の韻は下平声の庚耕  
清韻に定まる。第一節で取り上げた天正十四年二月二日  
の夢想漢和聯句と同じである。冬2（さえ行く）。

3 ちどり立浪は汀によせくだけ

一吉

前句で月が澄み渡る空に向かって、千鳥が飛び立つそ  
の下では、立つ波は汀に寄せては砕けている情景を付け  
た。「千鳥なくには、月さゆる」（随葉集）。前句の季節  
である冬に千鳥がいることは、「思ひかね妹がりゆけば  
冬のよの川かぜ寒み千鳥なく也」（拾遺集・冬・二二四  
・紀貫之）。「立」には千鳥が飛び立つことと、波が立  
つことが掛けられる。冬3（千鳥）。

4 釣竿漁弄晴

（釣竿 漁は晴に弄す）

玄松

前句の汀で千鳥が飛び立ったあと、漁夫は晴天のもと、  
魚を釣る竹竿を垂らしてなぐさみにする、と付けた。漁  
夫が浦などの水辺で釣竿を垂らすことは「いく浦か浪に  
釣竿ながき夜の月みぬあまの漕ぎめぐらん」（草根集

・一四・一〇五〇三）。韻字は「晴」。雑。

5 小舟風上載

（小舟は風の上に載る）

秀定

前句で釣りをする漁夫が乗る舟の様子を付けた。「釣  
舟」（類船集）。「風上載」は和漢聯句に先例が見られ  
ないが、『日葡辞書』に「Cazayeni（カザウエニ）ノル、  
または、ノリアガル。」とあり、斜めに吹く風に対して、  
船を直進させるために、風上側に配置させるといふ意か。  
一句は、小舟が、（風が吹く向きに合わせて進路をとる  
ように）風に乗って進んでいく状況を詠む。雑。

6 九鼎國和平

（九鼎 國 和平なり）

兼統

「九鼎」は『中華若木詩抄』に「九鼎は、天下を保つ  
者が、宝とする処也」とあるように、夏の禹王のとき、  
九つの州から金を貢上させて作らせた、天下に並びない  
宝物の容器のこと。一句は、天子の象徴であり天下の宝  
である九鼎は、天下を平らかに治める、という意。韻字  
は「平」。雑。

7 かと<sup>ママ</sup>のすがきよるは戸ざしせで

諏春

奇数句だから長句でなくてはならないはずで、あるいは「すがきも」の誤りか。「すがき」は『日葡辞書』に「Sugaki (スガキ)」とあり、竹で作った垣の意。「戸ざしせで」は鍵をかけないで。前句の太平の世を受けて、一句は、民戸は夜も鍵をかけない、とした。「是故謀閉而不興、盜竊亂賊而不作、故外戸而不閉、是謂大同」(礼記・礼運篇)などで知られる。雑。

8 袖はあまだにたち更しけり

氏秀

前句の「御とゞ」という高貴な身分に対して「あま」を付けたか。「たちふかす」は、立ったまま夜を明かすことか。「立ふかしたのむはかりの秋風に／きこえもするや松むしの声」(揚波集・七五二)。句意は不明であるが、閉ざされた門の前で立ち明かすさまか。韻字は「更」。雑。

9 ●●●○●●●  
話盡月西落

(話盡きて 月 西に落つ)

玄松

前句の「袖」を「月」を見ながら尽きない話をしてい

た人に取りなして付けた。「話盡」とは、語らうことが尽きるほどに、長く語らい合うこと。「月西落」も、月が東の空から昇ってから西に沈むまで、一晚中という時間の経過を詠む。『翰林五鳳集』の宜竹の詩に「二更始至五更終、話盡君家月與風(二更に始り五更に至って終る、話は盡く君の家の方と風と)」。秋1(月)。

10 日々にすぎゆく秋ぞ驚く

綱忠

前句で、詠まれた時間の経過は一日の内のものではつたのを、当該句では秋という季節の経過のはやさにはつと気付かされる意に取りなして付けた。『新勅撰集』に「いくめぐりすぎゆく秋にあひぬらむかはらぬ月のかげをながめて」(秋下・二九四・小侍従)。韻字は「驚」。秋2(秋)。

11 擣いづる礎のよろひしるなれや

家能

前句で「秋ぞ驚く」と、秋の気配に気づかされたのは、「礎」を打つ音がはっきりと響いているから、だと付けた。「礎のよろひ」の意味は定め難く二つの例が想定さ

れる。一つは、「よろひ」とは屏風、手箱といった調度品などの揃いの物を数える語のことで、ここでは、礎の数を数えていることか。しかし、和歌・連歌共に礎と共に用例は求めにくい。一方で「鎧」の意で解せる可能性として「卯の花のかつ散る里の夏衣／これやよろひの糸の色々」（菟玖波集・夏・二〇三・救済）を踏まえ、鎧を礎で打っているとするべきか。秋3（礎）。

12 ●○●●  
妾扉多少情◎

（妾扉 多少の情）

秀定

前句で礎を打ちながら男性の訪れを待つ女性の姿を受けて、男性の女性に対する情の程度を説明する内容を付けた。「妾扉」は、妾がいる室の扉のこと。「多少情」は少しの情愛で、ここでは妾を訪ねた男性の女性に対する情愛の程度が少ない意。韻字は「情」。雑、恋1（妾）。

13 ●○●●  
一宵腸百結

（一宵 腸 百結す）

兼統

前句の「多少情」に対して、当該句は男女の間の深い愛情を詠む。「一宵」は一夜のこと。「百結」は使い古しの布切れを何枚もつぎ合わせる意だが、ここでは深く

苦悩するさま（第一章第四節参照）。『雪叟詩集』に「涙雨蕭々天鑑昏、愁腸百結劈崑崙。杜鵑聲裡勸歸後、啼向瀟湘喪膽魂」とある。一句は、一晚に腸が百度ちぎれるほど苦悩する、と詠む。雑、恋2。

14 ●●●○  
萬世約三生◎

（萬世 三生を約す）

玄松

前句とは対句で展開した。前句の「百結」を仏教語の「七百結」の意に取りなして、且つ「三生」という仏教語も詠み、釈教句を付けた。「萬世」は万代、永世のこと。「三生」は前世・現世・後世のこと。恋の句とすれば、永遠に三世にわたる仲を約す、となる。韻字は「生」。雑、恋、釈教。

15 ●●●○  
薰読攤梅譜

（薰読 梅譜を攤ひらく）

朝秀

前句の「萬世」と「三生」を受けて、今も昔も永く伝わり続ける「梅譜」を付けた。梅の花は散ってしまうが、画としての梅はいつまでも咲き続けていることを「萬世」「三生」から連想させたか。「薰読」の意は不明だが、「梅譜」を開いた時に、あたかも香りが立つようだと

の意か。「梅譜」は、画梅の技法を図などで集成した書。『翰林五鳳集』に「讀范至能梅譜」という詩題が見られる。春1（梅）。

16 花さくかげにきゐる鶯

一吉

前句の「梅譜」の「梅」を実際の梅の梢に取りなして、そこに留まる鶯を付けた。和歌に「梅がえの花にこづたふうぐひすのこゑさへにほふ春の曙」（千載集・春上・二八・守覚）。一句は、花が咲いているその蔭に来た鶯、と詠む。韻字は「鶯」。春2（鶯）。

17 うちそゞぐ雨もかすめる朝まだき

三盛

前句の「鶯」が鳴く時間帯の情景を付けた。鶯がまだ夜が明けきららないころに鳴くことを詠む和歌に「朝未きかすみをこめてうぐひすのなく音に寝屋の窓はあけけり」（為忠集・一四）など。降り注いでいる雨も霞んでみえる、まだ夜の明けきらないころには。春3（かすめる）。

18 たそがれにちかき方ぞ耕す

諏春

前句の「朝まだき」に対して、夕暮れの情景を付けた。「耕す」は和歌・連歌共に用例が求めにくい。和歌・連歌では「高安」という表現が一般的であり、耕作を意味する「たかやす」は俳諧的な表現か。夕暮れ時に近くにあるほうの田を耕す。韻字は「耕」。雑。

19 舟はたゞさとの中河行かへり

氏秀

前句で田畑などを「耕」していたその側を流れる川の情景で付けた。「さとの中河」は里を流れる川のこと。連歌に「ゆふべにや旅のうさをもかさぬらむ／舟あつまれる里のながは」（聖廟千句・第二・九八）。一句は、舟はただ里を流れる中川を行きつ戻りつする、と詠む。雑。

20 江頭芦折横

（江頭 芦折れて横たふ）

兼統

前句で舟が行き交うために、江頭の芦が折れて横に倒れてしまうと付けた。和歌に「なにはかたあしのをりををしわけて漕はなれ行舟とこそみれ」（和泉式部集統

集・二〇六)。「江頭」は川のほとりのこと。「芦折」とは水辺の芦が折れていること。和漢聯句に「蘆折鷗迷宿(蘆は折れて鷗は宿に迷ふ)」「(永禄元年十一月二十二日和漢聯句・九五・菅中納言)。一句は、川の辺に生える芦が折れて横に倒れ伏す、と詠む。韻字は「横」。雑。

21 斜輝舒翼鷺

(斜輝 翼を舒ぶる鷺)

秀定

前句の「江頭」で休息する鷺の姿で付けた。「斜輝」とは「陽斜」「照斜」「斜陽」のように斜めに差す日の光のことか。「一點斜輝照寂寥(一點 斜輝 寂寥を照らす)」「(雪叟詩集・九七二一七)。鳥に太陽の光が当たる、という類似の発想は、和漢聯句に「みわたしの野辺ははるかに打かすみ／鴉背載斜陽(鴉の背は斜陽を載す)」「(天正十九年四月和漢千句・第八・九二・玄圃)。一句は、輝く日の光が鷺の広げた翼の上に斜めに差し込む、と詠む。雑。

22 やどりもとめてからす鳴なり

家能

前句で翼を展べて飛ぶ鳥を、宿る場所を求めて鳴いて

いる鴉に定めて付けた。宿る場所に帰る鴉を詠む例は、連歌に求めやすく「やどりやいづこからす鳴くこゑ／墨染の夕べは鐘の色ならし」(大原野十花千句第二・一七)など。韻字は「鳴」。雑。

23 積つゝすゑ野の杜もしら雪に

綱忠

前句の「からす」の黒色に対して、白色の「しら雪」が導かれた。また、前句の仮りの宿りは「杜」となり、そこに雪が積もっている。「ちえにさく花かとぞみる白雪のつもるしのだの森の梢は」(続千載集・冬・六六九・大藏卿重経)。一句は、積もっていくうちに、野原の端の森も白雪で埋もれる、と詠む。冬1(しら雪)。

24 ちる卯花のかきぞ傾く

三盛

前句の「しら雪」を受けて、その白雪のように白い卯花を詠む。「卯の花のさけるかきねは白雪のところをわきてふるかとぞみる」(草庵集・夏・二五八)など。また、前句の「しら雪」が「積」もったことで「かき(垣)」が傾く、と付けた。韻字は「傾」。夏1(卯花)。

25 廃家風扣寂 (廃家 風 寂を扣く) 玄松

前句の「卯花」が咲いている垣根がめぐらしてある廃屋に吹く風の様子を付けた。「扣」は叩くの意で、風がこつこつと叩く意。一句は、荒れて廃れた家に吹く風は、静寂を破る。雑。

26 騒社日研精 (騒社 日に研精す) 秀定

前句と対句。「寂」に対して「騒」を詠む。「騒社」は用例少ないが、風騒の結社、つまり詩人の集団か。「研精」は詳しく、細かく調べること。和漢聯句に「幽栖灯照恨(幽栖 灯 恨を照らす) / 学校筆研精(学校 筆 精を研く)」(永禄七年二月二日和漢聯句・九四・周璘)。一句は、詩人の結社では毎日研鑽を積む、と詠むか。韻字は「精」。雑。

27 困乏筆耕愈 (困乏す 筆耕の愈) 兼統

「愈」は唐代の文人韓愈。「筆耕」は書写や清書をすることによって報酬を受けて文筆で生活すること。詩

人として知られた韓愈も貧乏で筆耕で生計を立てた、と詠む。雑。

28 長生薬術彭 (長生す 薬術の彭) 玄松

対句。「彭」は彭祖。古代の伝説上の仙人で、呼吸術を用い、秘薬を服して八百歳の寿命を保った。前句の「筆耕」に対して、「薬術」を付ける。一句は、長命する薬術に通じた彭祖、と詠む。韻字は「彭」。雑。

29 とし月をむすびそへたる菊の水 一吉

前句の「長生」を受けて、飲めば長命するという「菊の水(菊水)」を付けた。しかし、和歌・連歌ともに「菊の水」の用例は求めにくい。一句は、長年掬って加えている菊の水。秋1(菊)。

30 きなれし衣露や根てん 氏秀

前句の「むすび」から「露」が導かれる。前句の「菊の水」の露に着慣れた衣が触れたという展開。「根」は字体ははっきりしないが、韻字であるので、「根」とし

た。『和訓押韻』に「根 チヤウ・フル、・触也」とある。但し、衣が菊の露に触れたとすれば、必然的にその衣を着る人が長生すると導かれ、打越となる危険もある。韻字は「根」。秋2（露）。

31 旅なるかゆくゑをおもふ秋の空

諏春

前句の衣に落ちた露を払う人物は、旅にある人であった、と付けた。「衣の袖←旅」（類船集）。「旅なるか」は、連歌に「はかなかりけるかりのたまづさ／旅なるかこむとたのめし秋すぎて」（毛利千句・第二・二一）。「おもふ秋の空」は、秋の空に思いを馳せる意。「心からながめて物をおもふかなわがためにうき秋の空かは」（続拾遺集・秋・二三九・澄覚法親王）。一句は、旅中であるからなのか、これからの行く末に思いを馳せる秋の空の下、と詠む。秋3（秋の空）。

32 暮色認鐘色（<sup>4,4</sup>）

兼統

一句に「色」が二字ある点が不審、但し末字は押韻字なので、「声」の誤りと見てよい。また四字目が孤平。

前句の「秋」に「鐘」が付く。和漢聯句に「秋景短宵長（秋景 短き宵 長し）／明やらぬね覺身にしむ鐘聞て」（天文九年四月十八日和漢聯句・五・甘露寺大納言）など。「暮色」は暮れ方の薄暗い景色のこと。一句は、暮れ方に鐘の音の情趣を知る、と詠む。韻字は「声」。雑、釈教（鐘）。

33 舟よする浪もしづかに志賀の浦

三盛

前句の山寺の鐘の景から、水辺の景に転じた。「志賀の浦」の「浪」を詠む和歌に、「しがのうらやとほざかり行く浪間よりこほりて出づるあり明の月」（新古今集・冬・六三九・藤原家隆朝臣）など。船が停泊する周囲の浪の様子が穏やかであることは、和歌に「舟よするいさりの島は風ふかで浪もたたでやのどけかるらん」（夫木抄・雑五・一〇五一五・読人不知）など。一句は、舟が停泊する志賀の浦の浪は穏やかに凪いでいる、と詠む。雑。

34 めでぬはあらしこのはな桜

綱忠



前句の「志賀の浦」から、『千載集』の「桜さく比良の山風吹くままに花になりゆく志賀の浦風」（春下・八九・良経）などを踏まえ、「はな桜」を導いたか。一句は、愛玩しないものはない、この花と桜を、と詠む。韻字は「桜」。春1（はな桜）。

35 月融春處々 ●●●●●●●● (月は融して 春處々たり) 秀定  
「月融」は、月が霞んでいる意。月の光がぼんやりとして、春はここかしこに来ている。春2（春）。

36 気暖景霏々 ●●●●●●●● (気暖くして景 霏々たり) 玄松  
前句とは対句の関係。「気暖」は氣候が暖かいことで、主に春の暖かさを表現する際に用いられる。「暖気」と同義か。和漢聯句に、「春宵金豈換（春宵 金豈に換えんや）／暖気茗将羞（暖気 茗 将に羞めんとす）」（延徳二年六月八日和漢百韻・四二・依緑）。「霏々」は、白い雲が花びらのように飛ぶさま。一句は、氣候は温暖で、景色は白い雲が花びらのように飛ぶ、と詠む。韻字は「霏」。春3（暖）。

37 簾隙風遮莫 ●●●●●●●● (簾隙 風 遮莫れ) 兼統

前句とは、「簾隙」から入り込む風が暖かさを帯びている、または、「簾隙」から見える景が「霏々」であると付けた。「簾隙」は、床に近いところが少し開いている簾の状態のこと。和漢聯句にしばしば詠まれ、簾が少し開いているところから眺める景を「春めける日影に霜やとけけらし／簾隙彩霞連（簾隙 彩霞 連ぬる）」（天正十年十一月十日漢和聯句・十・玄圃）のように詠む。また、当該句の趣向と同じく、「簾隙」から風が入り込むことを「破屋霧如修（破屋 霧 修むるがごとし）／簾隙秋風入（簾隙 秋風 入る）」（文明十一年八月十四日和漢百韻・四一・元修）と詠む。「風遮莫」は吹き込んでくる風よ、ままよ。「遮莫」は唐代以降の俗語として「遮莫枝根長百丈、不如当代多還往（遮莫れ枝根の長百丈たり、当代多く還往するに如かず）」（李白「少年行」）など漢詩では詠まれるが、和漢聯句の用例は見られない。一句は、少し開いている簾に吹き込んでくる風よ、ままよ。雑。

38 かたるにあらぬ中の 鱺

一吉

前句の簾の中で、酌み交わす盃を付けた。「かたるにあらぬ」は、声に出して語るまでもなく、互いの気持ちに分かり切っているの意。連歌では、「つたへもてこしいまのひとまき／うちとけてかたるをきけはなつかしみ」（永祿石山千句・第三・山何「しけるのを」七三）など、「うちとけ」た状態で「かたる」ことが常套。一句は、氣心の知れた仲で交わす（サカツキ）。韻字は「鱺」。雑。

39 稀にあふきみの心はうちとけて

家能

前句で「かたるにあらぬ中」であったところから、距離が縮まった、と付けた。和歌に「あしの屋のしづはたおびのかたむすび心やすくもうちとくるかな」（新古今集・恋三・一一六四・俊頼朝臣）など。一句は、時々逢瀬を重ねる君との心の距離は近くなつて、と詠む。雑、恋1（あふ）。

40 まくらぞかゝるうき（ママ） 鬢

諏春

前句の「稀にあふ」を受けて、男性の訪れが稀有であることによつて、枕に掛かるようにしてあるのは、物憂げな女性の髪の毛であると詠む。末の字は字体は不分明であるが、韻字であることから「鬢」と解される。漢和三五韻に「鬢 ミダレガミ」とある。「人香こそかくれなきまで深からめ／かきやるままにうき乱れがみ」（天正十二年正月十日百韻・七二）。雑、恋2（みだれがみ）。

41 雨床難続夢

（雨の床 夢を続けるは難し） 玄松

前句の「枕」を受けて「床」を導き、雨が打ち付ける音で、床での眠りは覚まされるので夢を見続けることは容易ではない、と詠む。連歌に「夏を昔とかをるたちはな／夢をみし夜は明けたちてふる雨に」（文安雪千句第一・五五）など。雑。

42 旧杖以同盟

（旧き杖 以て盟を同じくす） 秀定

前句とのつながりがよく分らないが、古い杖が仲間であるとの意か。韻字は「盟」。雑。

43 松がゑにそなれて藤の生はのほり

綱忠

「松がゑ」は松の枝で、そこに藤の花が咲く発想は常套で、『新古今集』の「緑なる松にかゝれる藤なれどおのが比とぞ花は咲きける」(春・一六六・紀貫之)など。

「藤」と「杖」との付合は、杜甫の詩によるか。「兼将老藤杖、扶汝醉初醒。(兼ねて老藤杖を以て、汝が酔ひの初めて醒むるを扶けむ)」(集千家註杜工部詩集・一九「路逢襄陽楊少府入城戲呈楊四員外綰(路にて襄陽の楊少府が入城するに逢ひ、戯れに楊四員外綰に呈す)」。 「そなれて」は磯馴れ、水辺ではないが、松にかかる藤はしばしば風に揺られて波に喩えられるので、それを借りた表現か。一句は、松の枝に、藤の花がすっかりなじんで上の方まで伸びてかかっている。夏1(藤)。

44 緑陰紅紫英はなぶさ

兼統

前句の「松がゑ」を「緑」で、「藤」を「英」で受けて付けた。「藤←紫」(合璧集)。「緑陰」は青葉の茂つた木陰。「千紫萬紅飛作塵、緑陰深處鳥聲頻(千紫萬紅

飛びて塵を作す、緑陰深處にして鳥聲頻りなり)」(翰

林五鳳集・鳥聲惜春・清叔)など。「紅紫」は紅と紫、転じて種々の美しい色。花などの美しさを喩える。前句と付いた時には、藤と松の美しい色を表し、一句のみでは、藤と松に限らない花の美しさを詠んだ句となる。「老松連枝亦偶然、紅紫事退獨參天(老松の連枝亦た偶然なり、紅紫の事退獨り天に參る)」(點鐵集・山谷集・九) 「英」は、はなぶさと読むが、和漢聯句では「菊」の花を表すことが多い。「秋の霜夕へ／＼にをきそひて／籬辺採菊英(籬辺に菊の英を採る)」(文明十五年六月七日和漢百韻・一〇〇・権帥)。一句は、青葉の茂つた木陰に、美しい色の花が咲いている、と詠む。韻字は「英」。夏2(緑陰)。

45 雲まより朝日うつろふ春の山

氏秀

前句の「英」が咲く場所を春の山と定めて付けた。「紫←雲」、「山←花」(類船集)。「雲まより」は雲の切れ間から。「雲まよりみねのさくらを出づる日の空もうつろふ花の色かな」(続拾遺集・春上・六三・前内大臣

基)。「朝日うつろうふ春の山」は朝日の影が春の山に映ることで「朝日影うつろふ峰の山ざくら空さへにほふ花の色かな」(新拾遺集・春下・九六・中宮大夫公宗)が意識されるか。一句は、雲の切れ間から差す朝日が移ろう春の山と詠む。春1(春の山)。

46 樵<sup>○</sup>径<sup>●</sup>月<sup>○</sup>残<sup>○</sup>明<sup>◎</sup> (樵径 月残りて明らかなり) 玄松

前句の「雲ま」から差し込む月光を付けた。また、春の山を歩く樵夫の姿が連想される。「樵径」は樵が通る道のこと、月が残っているからその光で、道が照らされ、明るくなっている、と詠む。韻字は「明」。秋1(月)。

47 一すぢの橋の下水ひやゝかに 諏春

前句の「月」を受けて、その光が映る「下水」を付けた。また、「月」から「ひやゝか」が導かれる。橋のすぐ下を流れる一筋の水は冷え冷えとしている。秋2(ひやゝか)。

48 ながめえならぬ露の萃<sup>うきくさ</sup>

三盛

前句の下水に浮かぶ浮草で付けた。「ながめえならぬ」は、眺めがあり得ぬほど(素晴らしい)だ。また「江」も掛けるか。「露の萃」は露が置いた浮草のことで連歌に、「くちはしの下なる月もなかはにて／こけのいろなるつゆのうきくさ」(看聞日記紙背「応永三十一年三月十八日」山何百韻・八八)。一句は、この眺望は言うに言われぬ程だ、露が浮き草に置いて。韻字は「萃」。秋3(露)。

49 信<sup>○</sup>自<sup>●</sup>鯉<sup>○</sup>沈<sup>○</sup>少<sup>●</sup> (信は自づから鯉沈みて少なし) 兼続

前句の「萃」が浮かんでいるような水辺で泳ぐ「鯉」を連想し、「ながめ」る対象を「信」の字で表される便りと見て、と付けた。「信」と「鯉」は和漢聯句によく見られる表現で、鯉の腹の中に絹地に書いた手紙を入れ届けた故事に取材する。「潮痕波未平(潮痕 波 未だ平らかならず)／久無潜鯉信(久しく無し 鯉に潜む信)／おもふこゝろのえにしあやしき」(天文二十四年三月二十五日和漢千句・第六・七一・入宮)、「笛毫雁行乱(笛毫 雁は行きて乱る)／墨淋伝鯉信(墨淋 鯉の信を

伝ふ) / 便さへ遠かた人とへだゝりて(天正八年四月二十二日和漢聯句・六・慈稽)など。「鯉沈」は便りが絶えることを意味する。「鷗侶寧争席(鷗侶 寧ろ席を争ふ) / 鯉沈無寄緘(鯉沈すれば緘寄すること無し) / 草茂 昼猶露(草茂りて昼猶ほ露たり)」(享禄二年七月二十二日和漢百韻・八・寿信)。来信は自然と間遠になつていつて。雑。

50 頌<sup>●</sup>其<sup>○</sup>毳<sup>●</sup>唱<sup>○</sup>評<sup>○</sup> (頌は其れ 毳の唱する評) 秀定

「頌」は、詩経における六義の一つで、先祖の徳を讃えて宗廟に奉納する舞歌。「毳」は毛皮のこと、『詩経』王風「大車」の「大車檻檻、毳衣如茨(大車檻檻たり、毳衣茨の如し)」。前句とは対句で展開しているが、句意はよく分からない。韻字は「評」。雑。

51 賢<sup>かしこき</sup>はまなびつくせる窓の前 一吉

前句の「頌」を、『孟子』万章章句下、「頌其詩、読其書、不知其人、可乎(其の詩を頌し、其の書を読み、其の人を知らず、可ならんや)」に基づき、賢い人は学

窓であらゆる書を読んで詩を学ぶ、と付けたか。雑。

52 かゝけそへたる夜半の 繫<sup>ともしび</sup> 家能

前句の「窓の前」で学ぶ人の手元を照らす 繫<sup>ともしび</sup>を付けて、掲げて寄り添うように光るのは夜半の灯である、と詠む。韻字は「繫」。雑。

53 敬<sup>○</sup>枕<sup>●</sup>聽<sup>○</sup>歸<sup>○</sup>雁<sup>●</sup> (枕を 敬<sup>そばだ</sup>て 歸雁を聴く) 玄松

「敬枕」は、枕の片端をもちあげる意で、「ひとり目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに」(源氏物語・須磨)など。枕を斜めに高くして、歸雁の鳴き声に耳をすます、と詠む。春1(歸雁)。

54 すさびしも又のどかな 颯<sup>さ</sup>る 氏秀

前句で枕をそばだてて聴いていた対象を雁の声から、風の 颯<sup>さ</sup>音に取りなした。「すさぶ」はここでは荒れるの意味。一句は、甚だしく吹いてはいたが、穏やかな風である、と詠む。韻字は「颯」。春2(のどか)。

55 霞晴山色頭

(霞晴れて山色頭はる)

秀定

前句で吹いた風が霞を分けて、晴れたと付けた。立ち込めた霧が晴れて、隠されていた景色があらわになることは、「景佳春委轡(景は佳し 春 轡に委ぬ) / 霞晴数峰青(霞は晴れて数峰青し)」「天文二十四年三月二十五日和漢千句・第七・一九・入右)。「山色」は、山の色、またその景色。「氷ふきとくかせのたえく / 霞飛山色界(霞飛びて山 色界す)」「大永七年九月尽日和漢百韻・三七・範)。一句は、立ち込めていた霞が晴れて、山の景色があらわになる、と詠む。雑。

56 雲暮月光撐

(雲暮れて月光撐ふ)

兼統

対句となる。前句の霞が晴れて、月光が差し込んだと付く。「山←雲」(合璧集)。「雲暮」は夕暮れになることで、和漢聯句にまみ見られ、「夫獵獲非熊(夫れ獵は熊に非ざるを獲る) / 雲暮渭村樹(雲は暮るる渭村の樹)」「(明応三年正月二十四日和漢百韻・三九・師富朝臣)など。韻字の「撐」は「撐」と同じで、『和訓押韻』に「撐 サ、フル 支柱也 撐同」とある。一句は、夕

暮れになると雲は月光が支える、と詠む。秋1(月光)。

57 空はたゞ秋の時雨を催して

三盛

当該句でもたらされた時雨は、前句では晴れて月光が見えていた。前句よりも時間は遡る句。「時雨←月を待」(合璧集)。「むら雲のすぎのいほりのあれまより時雨にかはる夜はの月かげ」(玉葉集・冬・八五六・大蔵卿有家)。「秋の時雨」は秋の末に降る時雨で「風にゆく秋の時雨のうき雲に心やすくもはるる月かな」(嘉元百首・一六三八・定為)。一句は、空は、秋の時雨を降らすような様子で。秋2(秋の時雨)。

58 小鷹狩場のかへるさの 運

綱忠

前句で「時雨」が降ったから、狩場から帰るのだと付けた。「狩」は、「小鷹狩」と「狩場」の意を含む。「小鷹狩」は、小鷹を用いて行う秋の鷹狩のこと。韻字は「運」(みち・ウサギミチ)。秋3(小鷹)。

59 手をりつゝかざぬはなき萩すゝ 氏秀

前句の「かへるさの 運」で、手折った草花を付けた。萩や薄を手折っては頭に翳す。「袖見ればかざさぬはなきさくら花」(飯盛千句・第十・九九)。秋4 (萩)。

60 緩歩●●雒陽城◎ (歩を緩くす雒陽の城) 玄松

前句の萩薄を翳しつつ、歩みをゆるめる、と付けた。「緩歩」はゆっくりと歩くことで、和漢聯句に間々見られる表現。「衰顔堪擲鏡(衰顔 鏡を擲つに堪へん)／緩歩或扶藜(歩を緩めて 或は藜を扶く)」(永正七年正月二日和漢百韻・三二・公条)、「緩歩尋春城外家、一枝折挿小鳥紗(歩を緩めて春を尋ぬる城外の家、一枝折りて挿す小鳥の紗)」(翰林五鳳集・野歩尋花・月舟)など。「雒陽城」は洛陽のこと。「洛陽城裏見秋風」(三體詩・一・張籍「秋思」)。一句は「ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮らしつ」(新古今集・春下・一〇四・赤人)を秋の洛陽に置き換えた感がある。洛陽の城ではゆるりと歩む、と詠む。雑。

61 善政●●夷懷●● (善政 夷 恵に懐く) 兼統

前句の洛陽で行われていた政治の内容を付けた。「善政」は、正しくよい政治。「夷」は昔中国で王化の及ばない地方を蔑んで称した言葉で、一般に遠国の民衆の総称として使われる。当該句では、徳の高い為政者による善い政治は、蛮夷の民にも恵みが行き届くと詠む。「懐恵」は、類似する用例として「周王扇暍皆懐恵、一握清風八百霜(周王の扇暍皆恵に懐く、一握の清風八百の霜)」(翰林五鳳集・緑樹鶯聲・江西)が見られる。「国のつかさやかぎりあるらし／移居懐恵野(居を移して 恵に懐く野)」(天正十九年四月和漢千句・第一・九三・英甫)は、『三體詩』卷一・劉商「送元使君自楚移越(元史君楚より越に移るを送る)」に「露冕行春向若耶、野人懐恵欲移家(露冕春に行りて若耶に向ふ、野人恵に懐ひて家に移さんとす)」を下敷きにしてあると思われる。兼統もここから「懐恵」の語を取った可能性もある。一句は、正しくよい政治は、地方の民衆にもその恵みが行く届くと詠む。雑。

62 とおきかたまで御調撃ささげる

一吉

前句の「善政」が「とおきかたまで」遍く行き届いていと付けた。君主の恵みも行きわたっている結果、御調の制度も問題なく保たれている。「とおきかたまで」

前句とは対句で展開した。「旅亭」は旅人を泊める宿。「送迎」は、宿の客を送迎するという意か。一句は、旅人を泊める宿には、客を送迎すると詠む。韻字は「迎」。

は遠くの方まで。貢物を捧げる主体は地方の人であるので、同じ主体で「遠くの方にいる君主の元まで」という意で取るべきか。「かしこきはいかにたえせぬのりならむ」とほきかたまでよこそをさまれ」（慶長年間百韻・八〇）。「都ぢは田舎びたるも目にたたて／はこぶみつぎぞ今もたえせぬ」（称名院追善千句・第十・三八）。一句は、遠くの方にいる君主の元まで、貢物を献上しに行く」と詠む。韻字は「撃」。雑。

65 暑●於○槐○蔭●避●（暑は槐蔭に於いて避く） 兼統  
前句の旅亭に行く途上で感じる暑さをしのぐ、と付けたか。「槐蔭」は槐の木の木陰のこと。一句は、暑さを槐の木陰で避ける、と詠む。夏1（槐）。

63 陋巷○無来往●（陋巷 往来無し）

玄松

前句で遠方まで御調を運びたいが、巷に続く、人が往来できるような道がない、と付けたか。雑。

66 松○操●祝●元○正○（松 操りて元正を祝ふ） 兼統  
前句とは対句で展開した。「松操」は、正月を祝うのに縁起のよい松をとることか。「懶看雪柏霜松操、庭上須栽夜合花（看るに懶し雪柏霜松の操、庭上須べからく栽ふべし夜合花）」（翰林五鳳集・寄木戀・英甫）。「祝元正」は元日を祝うこと。一句は松を採って新年を祝う、と詠む。韻字は「正」。春1（元正）。

64 旅亭○有送迎●

（旅亭 送迎有り）

秀定

67 家々の門は霞に明（ママ）りたり

諏春



前句で元旦を迎えた家々の情景を付けた。「家々の門」は連歌に「燕飛ぶひとむら柳風吹きて／人のいりたつ家々の門」（浅間千句・第五・一〇〇）。「霞に明りたり」の本文不審。和歌、連歌に見られない。一句は、家々の門は、春霞の中明け方を迎えている。春2（霞）。

68 市路をいそぐ馬にむちらう撈つ

家能

前句の家々の門と「馬」が付くか。「人目のたえぬ通い路のすゑ／ときめける門にや馬をつなぐらむ」（天正年間百韻・九一）など。「市路をいそぐ」とは市場へ続く道を急こと。市路ではないが、道を急ぐ馬の姿を詠む連歌に「ひくひともよとのうしのおそき日に／やせたる馬も道急ぐなり」（難波田千句・第五・四〇）。馬に鞭を打つことは、「暮れぬればかげのやましはおひいてて／馬にむちうつ声あまたなり」（称名院追善千句・第三・八六）。一句は、市へ続く道を急ぐ、馬に鞭を打つと詠む。韻字は「撈」。雑。

69 利●以●錐●刀●切●

（利は錐刀を以て切る）

兼統

前句の「市」における利益を「利」で付けた。「錐刀」は小さな刃物だが、わずかな利益を意味する「錐刀の利」を表現し、『後漢書』（輿服志上）の「上争錐刀之利、殺人若刈草然（上は錐刀の利を争ふ、人を殺めて若し刈らば草然たり）」に基づくか。一句は、利益は小さな刃物を以て断ち切る、と詠む。雑。

70 たがためにしもおしむあだし名

氏秀

前句の「利」は誰のためのものか、と付けたか。「おしむあだし名」は、相手が取った浮名を残念に思う、の意。「あだし名となりにし後は問ひもこで／ひとごとしげき世をや恨みむ」（壁草・恋上・一一九八）。一句は、誰のために、色恋の噂が立つことを悔しく思うのか。韻字は「名」。雑、恋1（あだし名）。

71 椿●寿●須●臈●変●

（椿寿 須臾に变ず）

秀定

前句が相手への恨み言であったので、その相手が誓った言葉がたちまち変じたことを述べたもの。「椿寿」は長生の意で、『莊子』逍遙遊の「上古有大椿者、以八千

歳為春、八千歳為秋（上古に大椿有るは、八千歳を以て春となり、八千歳をもって秋となる）」による。椿にとつては春と秋が各八千年であるというところから。「須臾」はわずかの間。一句を、いつまでも不変を誓ったのにすぐに変じた、と詠む。雑、恋2（句意）。

72 蘿閣沈醉醒◎

（蘿閣 沈醉醒めたり）

玄松

前句とは対句で展開した。「蘿閣」の表現は求めにくいが、「通夢夜深蘿洞月（ゆめをとうするによふけぬらとうのつき）、尋跡春暮柳門塵（あとをたづぬるにはるくれぬりうものちり）」（和漢朗詠集・仙家・五五二・菅三品）といった用例から、蕙の茂る高殿の意となるか。「沈醉」は深酔い。二四不同に違反。一句は、蕙の絡まる高殿で酔から醒める、と詠む。韻字は「醒」。夏1（蘿）。

73 月に猶歌の筵は敷あかで

家能

前句を、月下に集う詩歌の席だけでは満足せず、酒に酔った意に取りなして付けた。蕙が茂っていた夏の季節から御殿の台を開放してそこで月を愛でると展開し、季

節の推移も意識するか。「歌の筵」は、詩歌を詠む集いのことで、地面に照らされる月の光を筵に見立てるか。和歌に「雲の上や歌のむしろに月をしきてねぬにみじかき秋のよの空」（基綱集・秋・八三）。また、月、桜などの景物を愛でて開かれる「歌の筵」では、簡単には人は解散しないのが常である。連歌に「遠くとも家路は暮れし永き日に／哥の筵のあかぬかたらひ」（聖廟千句・第十・一〇〇）。美しい月下では、やはり詩歌の席だけでは物足りなくて。秋1（月）。

74 はし居のつゆはさながらの瓊

綱忠

前句の「月」の出を待つ人の袖に置く露を詠んで付けた。「瓊」は美玉。「またれつる月も軒ばにかたぶきて端居すずしく更けぬこの夜は」（嘉吉三年前摂政家歌合・八十一番左・一六一・権少僧都宗我）。「はし居のつゆ」とは、家の縁先で涼む人の袖に結ぶ露。和歌に「草の葉にあらぬ袂も秋くれははしるの程に露はをきけり」（時慶卿集・初秋露・五四〇）、連歌に「今ぞ吹くなり秋風の空／衣手の端居の露やふけぬらむ」（紹巴亡父追善

千句・第三・五)。一句は、家の縁先で涼をとれば(私の袖に)露はあたかも美しい玉のように結ぶ、と詠む。韻字は「瓊」。秋2(つゆ)。

75 砌よりおぎのうは風吹をくり

三盛

前句の端居する人の袖に置いた「露」は、「荻の上風」が吹き送ってきたのだ、と付けた。「荻の上風」は「秋のよはやどかる月も露ながら袖に吹きこす荻のうは風」(新古今集・秋上・四二四・右衛門督通具)など和歌に定型の表現。「砌」は軒下の敷石。一句は、砌の辺りから荻の上風を吹き送ってくる、と詠む。秋3(おぎ)。

76 軒にすゞめのねぐらかる布

一吉

前句で砌を受けて、軒の雀を出した。末字が韻字のはずだが、字形不明。時間帯や天候か。「雪の日は軒ばにちかく鳴よりてねぐらもとむるむらすゝめ哉」(言国詠草・六〇八)。一句は、軒に雀が疇を借りる、と詠む。雑。

77 塞向寒衣暖

(向を塞がば寒衣暖かたり) 玄松

前句の「ねぐら」を人の寝床に取りなして付けた。「塞向」は、家屋の北壁の通気孔を塞ぐことか。『黄山谷詩集』(次韻文潜)に「汀洲鴻鴈未安集、風雪牖戸當塞向(汀洲の鴻鴈未だ安集せず、風雪は牖戸當に向に塞く)」。『寒衣』は、冬着のことで、『錦繡段』(寄衣曲・嚴仁)に「君戌交河春復冬、寒衣到日看親封(君戌交わる河春復た冬、寒衣日に到り親を看て封ず)」、和漢聯句に「旅にしていくたびむすぶ草枕／寒衣已雨矣(寒衣已に雨たり)」(享祿二年六月十日和漢百韻・三四・帥)。一句は、家屋の壁の通気孔を塞ぐことで冬着は暖かくなる。つぎの78句との間に欠脱があるか。雑。

78 荷恩濁世清

(恩を荷へば濁世清たり) 兼統

欠脱のためか前句とのつながり不明。「荷恩」は恩恵を身に請け負うこと。蘇轍「謝除中書舍人表」に「譬如木之在山、生則荷恩、而死無所怨(譬へば木の山に在るが如し、生は則ち荷恩、死は所怨に無し)。「濁世」は道德の乱れた世。一句は、御恩を受けると、汚れた世も

清らかである、と詠む。韻字は「清」。雑。

79 遁聞江水樂 (遁れて聞く 江水の樂を) 秀定

前句の道德の荒廃した世の中から逃れた場所を付けた。楚辞の屈原も意識か。「江水」は揚子江の水のこと。杜甫の「十薄暮」に「江水最深地、山雲薄暮時（江水最も深き地、山雲薄くして暮るる時）」（點鐵集）、和漢聯句に「松の葉ごしにうつる日のかげ／景遠澄江水（景は遠くして江水に澄む）」（天正十九年四月和漢千句・第十・一三・英甫）。一句は、世俗から遁れて、大河の流れが奏でる音を聞く。雑。

80 戦囲石碁秤 (戦ひて囲む 石碁の秤を) 玄松

前句とは対句。「戦囲」は碁による勝負事を戦の陣営に喩えて表現するか。「石碁」は盤上の碁石のこと。「碁」は「棋」の字と同じ。和漢聯句に「霞是脱機綺（霞は是れ機を脱する綺）／霞其拾石碁（霞は其れ石を拾ふ碁）」（年次未詳漢和聯句・九二・中務卿宮）。「秤」は囲碁盤のこと。当該句のように盤の上に碁石があることを詠

む詩に、「女秤金釵郎玉冠、松間坐鬪石碁盤」（翰林五鳳集・男女圍碁圖・瑞巖）。一句は、戦の陣営を盤上の碁石で表現すると詠む。韻字は「秤」。雑。

81 仙侶洞門鶴 (仙侶 洞門の鶴) 兼統

前句の囲碁に興じる「仙侶」の姿を付けたか。『錦繡段』に「日暮仙翁騎鶴去、碧桃華滿石碁盤（日暮れて仙翁鶴に騎して去る、碧桃の華石碁の盤に満つ）」（仙興・葉介老）。「仙侶」は仙人の仲間、山人のこと。「佳人拾翠春相問、仙侶同舟脱更移（佳人翠春を拾ひ相ひ問ふ、仙侶同舟脱更移）」（點鐵集・杜十五秋興）。「洞門鶴」は、洞穴の入り口にいる鶴のこと。『梅花無尽蔵』に「猶有 洞門子孫鶴」。一句は、山人と、洞穴の入り口にいる鶴、と詠む。雑。

82 山よりおくのみちぞ嶮しき 家能

前句の「仙侶」や「鶴」がいる場所の様子を付けた。また「洞」から「山」が導かれた（類船集）。「山よりおく」とは、今いる山の辺りよりもずっと奥の方という

意か。連歌に「あをみゆくのちの篠原雪消えて／山より奥の風ぞかすめる」（新撰菟玖波集・春・四七）。「嶮」は字形が不明だが、押韻字なので、句意とあわせて「嶮」であると分かる。一句は、今いる山より奥にある道はずっと険しい、と詠む。雑。

83 尋花無遠近 ●●● (花を尋ねて 遠近無し) 玄松

前句で山の奥の道まで来たのは、花を求めて歩いてきたからだ、と付けた。「桜ばなさけるこずゑにひかされてやまざとふかく入りにけるかな」（秋風集・「永承二年二月うへのをのこども、遠近尋花といふことをよみ侍りける」・一〇六七・権中納言つねいへ）。「無遠近」は道のりの遠近を忘れる、の意か。一句は、花を求めれば道のりの遠近を忘れてしまふ、と詠む。以下脱落があるか。春1（花）。

84 立ふる川檉 三盛

83句とは句のつながりが不明で、この句の前に脱落があるか。この句では「ふるかはやなぎ」を詠む。川沿い

の柳のこと。なお「檉カハヤナギ」は韻字と考えられる。春1（川檉）。

85 雨そゝく空につばめの飛かはし 氏秀

前句の「檉」から同じく春の景物である「つばめ」を導き、春の景を付けた。和歌に「永き日の柳の糸にみだれきてつばめあまたの庭の春風」（草根集・一三・燕来・九六九九）、連歌に「たてる柳に水のさびしさ／燕飛ぶ夕べしづかに雨落ちて」（天文十八年梅千句・第五・三一）。雨が降る中、燕が飛ぶ姿は、「古枝の柳くる春やたつ／雨に飛ぶひとむら燕声すなり」（宗長連歌自註・壬生宛・三八）など。「雨そゝく」は『日葡辞書』の「*Amesosos* (ソソク)」により清音とした。「飛かはし」は、和歌・連歌ともに用例が求めにくい。「問かはし」の可能性はあるか。一句は、雨が間断なく降る空に、燕が交差して飛行する、と詠む。春2（つばめ）。

86 春昼鳥嚶々 (春昼 鳥嚶々たり) 秀定

前句の「飛かはし」を「問かはし」の意に取りなして、

その様を「鳥嚶々」と応じて付けたか。「春昼」は、和歌の歌題に見られ、「春の空のなかばめぐるも冬の日の時にも絶えぬ花の陰かな」（草根集・七・五五〇二）と詠じられる。「鳥嚶々」は、鳥の鳴く音が和らぎのあるさまで、『名義抄』に「嚶 ヤハラギナク・ヤハラカナリ」とある。『詩経』小雅「伐木」に「伐木丁々、鳥鳴嚶々（木を伐ること丁々、鳥鳴くこと嚶々たり）」とある。一句は、春の昼時に鳥は和らぎのある声で鳴く、と詠む。韻字は「嚶」。春3（春晝）。

87 民<sup>○</sup>奏<sup>●</sup>太平<sup>○</sup>曲<sup>●</sup>

（民は奏す 太平の曲）

朝清

前句の「嚶々」を鳥の声から人のそれに取りなし、民が奏でる曲にのせて唱和する光景を付けた。「太平曲」は『三体詩』の「繡嶺宮」に「春草萋萋春水緑、野棠開盡飄香玉。繡嶺宮前鶴髮翁、猶唱開元太平曲。（春草萋萋として春水緑たり、野棠開き盡くして香玉飄る。繡嶺

の宮前 鶴髮の翁、猶ほ唱するは開元の太平曲。）」とある。一句は、民衆は天下が平らかであることを寿ぐ曲を奏でる、と詠む。雑。

88 君と臣<sup>ひと</sup>とのみちぞ<sup>（みち）</sup>奥<sup>（おく）</sup>しき

資種

前句のような平和な治世をもたらす君臣の道はよこしまではない、と付けた。「君と臣」とが力を合わせた治世を畏敬する用例、和歌に「世をおさめ民をめぐむも君と臣身をあはせたる時ぞかしこき」（草根集・祝言・二〇三九）、和漢聯句に「君と臣とかしこき世をやしたふらし」（慶長十六年二月十一日和漢聯句・五九）。「奥しき」は不審だが、韻字とすれば「貞しき」が正しいと考えられる。なお天正十四年二月二日夢想漢和聯句の挙句も「長閑にをくる時の貞しき」である。『和訓押韻』に「貞<sup>ただし</sup>」とする。第三章第一節参照。雑。

注

- 1 仮綴、二五・五糰×一七・〇糰、全三三三三丁、書き込み貼紙多し。
- 2 第一章第三節参照。
- 3 第二章第一節参照。
- 4 『京都大学蔵実隆自筆和漢聯句訳注』（臨川書店、二〇〇九年）、『慶長・元和和漢聯句作品集』（臨川書店、二〇一八年）ほか。
- 5 注1と同じ。
- 6 『三百藩家臣人名事典』（人物往来社、一九八七年）。
- 7 注1と同じ。
- 8 『戦国人名辞典』（吉川弘文館、二〇〇六年）、花ヶ前盛明氏編『上杉景勝のすべて』（新人物往来社、二〇〇八年）、藤木久志氏『戦う村の民俗を行く』（朝日選書、二〇〇八年）などを参照した。
- 9 大津有一氏『伊勢物語古注釈の研究』（八木書店、一九八六年）。

第七節 慶應義塾図書館蔵慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」注釈

―新出の直江兼続主催の和漢聯句―

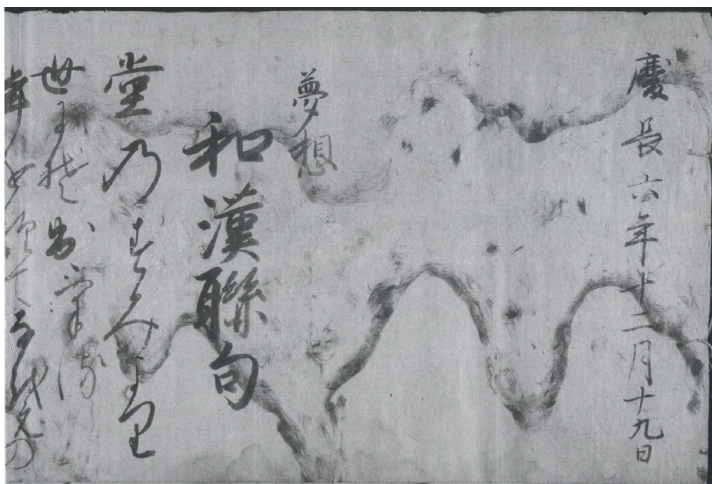
はじめに

本節は、慶應義塾図書館に蔵される和漢聯句百韻を取り上げ翻刻と注釈を試みたものである。本百韻の存在は、米沢の郷土史家今井清見氏が『直江城州公小伝』（慧文社、二〇〇八年〔初版一九三七年〕）において指摘したのが最初である<sup>1</sup>。だが、冒頭の三句が掲出されるのみで、出典の明記もなく、その全貌は長らく不明であった。

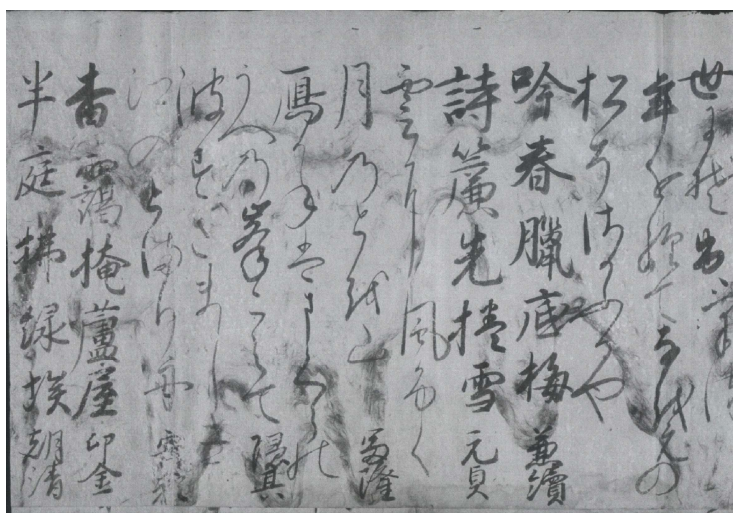
ところが、今井氏の『直江筋書』第二巻<sup>2</sup>に百韻全ての書写が彼の自筆によって残されていることが判明した。さらに、慶應義塾図書館に蔵されている「慶長六年十二月十九日兼続元貞等「夢想和漢聯句」」は、今井氏が書写した際に実見した懐紙である可能性が極めて高いことが明らかとなった。

当該和漢聯句は、関ヶ原の合戦後、西軍を援護したがために、米沢に三十万石で減封された慶長六年に興行され<sup>3</sup>、政治的に重要な時期にあり注目される。且つ、原本の所在と詳細が明らかとなったことで高い史料的价值をも有すると考え、ここに本文を掲げ注釈を施した<sup>4</sup>。

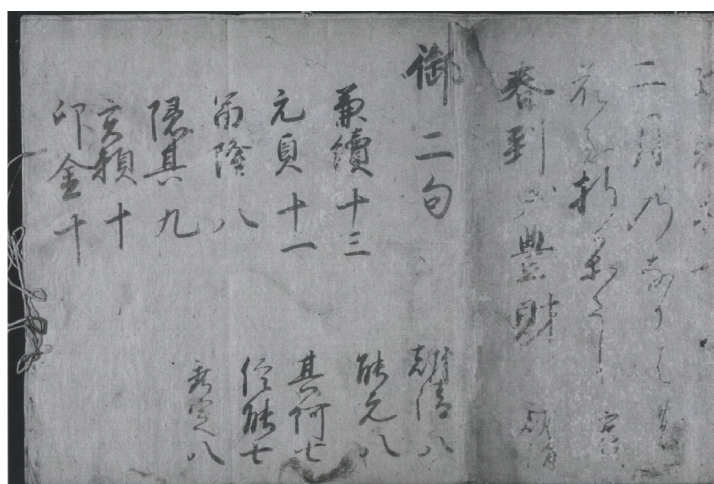




慶應義塾図書館蔵：図版 1 端作



図版 2 初折才



図版 3 句上

※転載禁止

## 一、底本書誌と連衆

まず書誌を記す。慶應義塾図書館蔵（請求記号I10X@189@1）。『慶應義塾図書館和漢貴重書目録』（二〇〇九年）に記載の書名は「慶長六年十二月十九日兼続元貞等「夢想和漢聯句」」。一紙は縦一八・八糎、横五三・五糎で計八紙。斐楮。内曇り（上藍、下紫）が施される。二ツ穴に水引で綴じる。裏打補修あり。85句・92句・93句・98句は一部または全てが摩滅し判読不能な箇所がある。なお、この摩滅は今井氏の記録と一致する。今井氏の記録によれば、中山小太郎氏が所蔵<sup>5</sup>。

次に本百韻の連衆と句数を句上に従って挙げれば次のようになる。懐紙に記名される名を掲げた後、（ ）内に句数を示した。生没年が分明な者は興行時の年齢を記した。なお、当該百韻の連衆と翌年の慶長七年に催された「亀岡百首」の参会者は□で囲んだ<sup>6</sup>。

### 《連衆》

- ・御（和一・漢一）…直江兼続が感得した夢想の句か（後掲の略註にて詳述）。
- ・兼続（漢十三）…直江山城守兼続。上杉家家宰。上杉景勝に近侍。この時、四十二歳。
- ・元貞（漢十一）…中堀入道元貞。上杉家家臣か。
- ・富隆（和八）…八王子民部少輔富隆。上杉家家臣か。
- ・隠其（和九）…越後称念寺隠居、元越後府中時宗寺院の住職。
- ・実頼（和十）…大国但馬実頼。兼続の実弟。能書、連歌の上手と評される。小国家の養子。飛鳥井雅継の門弟。

紹巴、元齋、佐河田昌俊らとの交流あり。文禄三年九月の都の連歌会では執筆役を務める。本作品の翌年、「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」（以下「亀岡百首」と略記）では和歌の部の出題者<sup>7)</sup>。

・**印金**（漢十）…伝未詳。上杉家の連歌・聯句会では当該作品において初めて出座が確認される。

・**朝清**（漢八）…宇津江九衛門朝清。兼統直属の与板衆（与板城時代からの側近）。『詠歌大概』『百人一首』『古文真宝』を自ら書写。『連歌師長珊撰五十番歌合』を伝える。

・**能元**（和八）…安田上総介能元。国衆、旧族。安田城主の治部少輔長秀の一族。会津時代、大石播磨守、岩井備中守と並んで会津三奉行の一人とされていた。

・**其阿**（和七）…僧。会津若松東明寺其阿弥。時宗寺院。翌年の「亀岡百首」で和歌を詠む。

・**信能**（和七）…岩井備中信能。新たに景勝直属の旗本となった。後、信州飯山城主となるが再び近侍として会津三奉行の一人と目され米沢に供奉。天正九年、毛利秀広が私恨により山崎秀仙・直江信綱を殺害した時、主命により秀広を誅殺。

・**秀定**（漢八）…鮎川与五郎秀定。庄内羽黒山神職家の出身。天正十九年庄内藤島一揆討伐の時、景勝に帰服。当該作品で執筆を務めるか。

米沢で催されたもう一つの文事との関わりについて、木村氏は、次のように述べる。

米澤へ帰國後、幾程もなくして、同十二月十五日、其邸に於て、和漢聯句會を開き、景勝も之に臨み、主従和樂して、三十萬石に減封された年末とは思はれず、兼統に對する景勝の信賴は益々加はつて居る。（略）翌慶長七年四月廿七日、米澤郊外三里の亀岡文殊堂に於て、僧泰安、及び安田能元、岩井信能等藩將士二十餘人と

漢和百韻の雅會を開いて和樂した。これまた、如何に闔藩一致して、戦後の復興に努力したかを物語る史料ともなるであらう。

当該百韻が興行された背景を裏付ける資料はないが、木村氏が推測するように、上杉家家臣団の結束を仰ぐべく企画された、とみるのが穏当だろう。

## 二、翻刻

慶長六年十二月十九日

夢想

和漢聯句

⌋ (初折才)

- |   |                 |    |    |                |    |
|---|-----------------|----|----|----------------|----|
| 0 | 堂のすみより世にそ出ける    |    | 9  | しら露の玉のを柳みたれあひ  | 能元 |
| 1 | 年を経てなをえの松そさかふるや |    | 10 | そゝくも見えぬ春雨の空    | 其阿 |
| 2 | 吟春臘底梅           | 兼統 | 11 | おほろなる月の明かた雲引て  | 信能 |
| 3 | 詩簾先捲雪           | 元貞 | 12 | 好友興相催          | 秀定 |
| 4 | 雲に風ふく月のとを山      | 富隆 | 13 | 山自遠方到          | 兼統 |
| 5 | 雁かねはさくらのうへの峯こえて | 隠其 | 14 | 嵐傍深戸推          | 元貞 |
| 6 | 波すさましき江のとまり舟    | 実頼 | 15 | まつ人はこぬ面かけの立うかれ | 富隆 |
|   |                 |    | 16 | けふるはかりのおもひくるしも | 隠其 |

17 袖にあまる涙は露をかこことにて  
 18 荒村嘯月回  
 19 壁間蛩唧々  
 20 ふもとの野辺の風さむきくれ  
 21 坐花紅染袂  
 22 斟杏緑浮醅  
 23 霞む日はとをくすむをも問よりて  
 24 遊轡苦駑駘  
 25 嶮棧常経蜀  
 26 靈方好覓萊  
 27 平之仙市鶴  
 28 かけも木たかく見ゆる松原  
 29 住吉や往來の袖のつゝくらむ  
 30 浦半の月になかめする暮  
 31 霧晴磯上頭  
 32 引あととをし初塩の浪  
 33 種玉塵間鷺

兼続 富隆 秀定 其阿 信能 能元 元貞 兼続 印金 朝清 実頼  
 50 はるをこゝろの哥のしなく  
 49 不改旧花耳  
 48 一夜のほとに老となりぬる  
 47 さすらふるその行衛こそ悲しけれ  
 46 鯨之入羽能  
 45 白也出唐鳥  
 44 下若画雲疊  
 43 落楓舗地錦  
 42 秋もくれまつ鞠のかたらひ  
 41 沙砌露降湿  
 40 忍履月相踏  
 39 ひとりぬる枕に風の音信て  
 38 ふりしきる夜の雨はものうし  
 37 ほとゝきす声やそことも分さらん  
 36 旅過幾崔嵬  
 35 宿からむさとはたく火をしるへにて  
 34 いり日の末の野はかすか也  
 実頼 印金 朝清 能元 兼続 秀定 能元 兼続 印金 朝清 実頼

「(初折ウ)」  
 「(二折オ)」  
 富隆 兼続 其阿 隱其 秀定 元貞 兼続 印金 実頼 朝清 元貞 富隆 信能 能元

66 むまれなからにおこなへる道  
 65 禅識無能味  
 64 芳茗雪其礎  
 63 遠鐘風是杵  
 62 松於岩谷栽  
 61 おさまれる國はやしろをいはひそへ  
 60 まつるに神や世をめぐむらん  
 59 泰雲雖寸々  
 58 一蓑帶雨来  
 57 なかれぬる汀の柳ちりそめて  
 56 涼しくなれる秋のゆふ暮  
 55 まちいてゝ月にむかへる窓のうち  
 54 投閑書卷開  
 53 載恨行舟重  
 52 おもふをゝきて旅たつはうし  
 51 永日もしたしき中はそひあかて

「(二折ウ)

其阿 67 鶯の巢をはなれすも声たてゝ  
 信能 68 竹のはやしの春寒きころ  
 元貞 69 山すみも霞をくめる伴ひに  
 朝清 70 茅齋月作媒  
 実頼 71 妾衣先襯露  
 富隆 72 身にしめつゝもまつはいく秋  
 隠其 73 虚夕刻其歳  
 秀定 74 早天夏以雷  
 兼続 75 山たかみ雲のかさなる曙に  
 兼続 76 棹舟過水隈  
 実頼 77 ちりうかふ花や岸根に淀むらん  
 能元 78 和暖杖徘徊  
 元貞 79 蛙なく堤のあたり暮初て  
 兼続 80 すきのこしたるを田のかたく  
 「(三折オ)

「(三折ウ)

朝清 81 民村烟半起  
 実頼 82 駅路日将頽  
 実頼 83 鈴舟のよる音すまの浦ちかみ  
 秀定 84 民村烟半起  
 能元 85 すきのこしたるを田のかたく  
 隠其 86 蛙なく堤のあたり暮初て  
 兼続 87 和暖杖徘徊  
 元貞 88 棹舟過水隈  
 兼続 89 ちりうかふ花や岸根に淀むらん  
 実頼 90 和暖杖徘徊  
 秀定 91 民村烟半起  
 元貞 92 蛙なく堤のあたり暮初て  
 兼続 93 すきのこしたるを田のかたく

84 秋風白髮衰  
 85 松〔むカ〕しの鳴そふまくらねさめして  
 86 新奇得月臺  
 87 池ひろきかたへはなみの声もなし  
 88 床をかさぬる水のうき鳥  
 89 舟過山走馬  
 90 くるゝあらしにはやき雲あし  
 91 笛近牧帰否  
 92 □ □ 女美哉  
 93 「 〔過來し〕□□□□もはれて  
 94 空闈日厚苔  
 95 岩かねにたえす雫や音すらむ  
 96 なかれはほそきは水のすゑ

「(名残折才)

元貞 兼統 其阿 兼統 信能 富隆 印金 隱其 朝清 元貞  
 97 歌堯村校楽  
 98 □〔逢カ〕 □〔欲カ〕 □ □ □〔鳴カ〕  
 99 二月のなかはの花を折かたし  
 100 春到必豊財  
 御 二句  
 兼統 十三  
 元貞 十一  
 富隆 八  
 隱其 九  
 実頼 十  
 印金 十  
 其阿  
 秀定 八  
 信能 七  
 其阿 七  
 朝清 八  
 能元 八  
 其阿 七  
 元貞 七  
 兼統 八  
 朝清 八  
 能元 八  
 其阿 七  
 元貞 七  
 兼統 八  
 朝清 八

「(名残折ウ)

兼統  
 実頼  
 朝清

### 三、注釈

0 堂のすみより世にぞ出ける

当該句は「夢想」の句、つまりその場に居合わせる連衆の句ではなく、神仏からの啓示を受けた句とみなして書かれた句である。<sup>8</sup>『兼載雑談』に「一、夢想の事。下句を見れば面九句にして。夢想の句ともに百一句たるべし。夢想の会の句引に。発句に神一句と書。又は御の字をかく事可依事なり。神慮のやうに見ば可然なり。我したると見ば。我名を可書となり。」とあり、当該作品はこの句を含めて全一〇一句となる。夢想の句には普通作者を付さず、句上げには「御」と記される。本作品で作者が無記であるのは当該句と次の第一句であり、これら二句が夢想の句となる。

さらに、傍線部に依るならば、句上げに見られる「御」は、天皇や連衆の中で最も立場が高い人物の句であることを示す御製句の意ではなく、夢想の句であること

を示すための「御」となるう。兼続の主君である上杉景勝が詠者として想定されなくもないが、慶長期における兼続の文学活動に彼の影は薄く、夢想句を感得するのは、脇句を詠む者である可能性が高い<sup>10</sup>ことを考えれば、直江兼続が詠者であろう。一句は、堂の一隅から俗世に出た、と詠む。

1 年を経てなをえの松ぞさかふるや

「年を経て」は、『産衣』に「年をへてニ 春ハ来て同意也」とあること、慶長六年の立春は、当該作品興行の三日前、同年十二月十六日である<sup>11</sup>。「なをえの松」は、「名を得」で、名松として賞翫されるの意。『竹林抄』に「名を得たることはりしるき月夜哉」（巻十・発句・一七四一・能阿）とある。また、「なをえ」には「直江」の名が掛けられる。春が来て、あの名松のように「直江」の名も栄えることであるよと、当該和漢聯句会の主催者たる自身を我褒めする直江兼続が出詠した発句であろう。冬1（年を経て）。



2 吟。春。臘。底。梅。 (春を吟ず 臘底の梅)

兼統

前句の「年を経て」が年内立春であることを踏まえ、陰暦十二月に咲く梅花(臘底梅)を付けて応じた脇句。なお、「梅ムメ」(漢和三五韻)の韻字により本作品の韻は上平声灰哈韻に定まった。「臘底梅」は陰暦十二月に咲く梅のこと。『竹馬集』には「冬梅←年内に立春、冬ながら立春」とある。『再昌』に「臘底如春山色青 野梅吐玉一枝香(臘底春の如くに山色青し、野梅玉を吐く一枝の香)」(冬日即事・一一五六)。冬2(臘底)。

3 詩。簾。先。捲。雪。 (詩簾 先づ雪に捲ぐ)

元貞

前句の「吟」を、詩を吟じるの意に取りなして、「梅」に「雪」で応じた。「梅←雪」(連珠合璧集)。簾の辺りで詩を朗詠する側で雪が舞う景を展開した。「詩簾」は、簾の近くで詩を吟じる意か。「先捲雪」は、雪が降るか、真っ先に簾を上げてその景を目にしたい、という意だろう。冬3(雪)。

4 雲に風ふく月のとを山

富隆

前句の「簾」を「捲」き上げると見える、遠方の山に昇る月の姿を付けた。「簾←なかむる月」、「雪←遠山・月」(類船集)。また、前句の「簾」をめくりあげた「風」は月を覆う「雲」に吹いて、月の姿を露わにする。「雲に風ふく」は、雲に風が吹くことよって、雲が流れて空が晴れる。『春夢草』に「くもにかぜふくよはぞさびしき」(雑・八一三)。風が、遠山を遮っていた雲を流したので、遠くの山の姿もその山から出て来た月もはっきりと見えると詠む。秋1(月)。

5 雁がねはさくらのうへの峯こえて

隠其

前句の「風」にのって、雁が秋に花をつけていない桜の木よりも高い峰を越えて帰ってくる姿を付けた。「白雲←雁」、「月←雁金」、「月←峰」、「遠山←桜」(類船集)といった寄合語による付けが目立つ。「さくらのうへ」という表現は、和歌・連歌例共に見られない。

桜の木が植えられている場所よりも、高いところに位置している峯を雁が飛び超えて行くという意か。桜の木がある場所も既に高いのだが、それよりも高い峯を雁は超えて行つたと、その高さを強調する表現。秋に雁が峯を超えてやってくることは、「雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ」（古今集・雑下・九三五）など。秋2（雁がね）。

6 波すさましき江のとまり舟

実頼

前句の「雁がね」が飛び渡る眼下では、波が激しく立つ岸辺に繫留される小舟を、山の上空の景から地上の水辺の景に転じて付けた。「波←雁がね」、「江←雁」（類船集）。秋3（すさまし）。

7 杳靄掩蘆屋

印金

前句の「すさましき」を荒涼としたの意に取りなし、その象徴である沿岸に建つ蘆屋を付けた。また、前句の舟が停泊している理由を「杳靄」（周囲を見えなくす

るような暗く濃い靄）が立ち込め、これ以上先に進めないからだ、と説明する付句となる。一句は、暗く深いもやが、葦で屋根を葺いた家を覆い隠す、と詠む。秋4（蘆）。

8 半庭弘緑埃

朝清

「半庭」は、庭の中央の意か。『錦繡段』に「柳塘漠漠暗啼鴉、一鏡晴飛玉有華。好是夜闌人不寢、半庭寒影在梨花。（柳塘漠漠たり啼や暗し鴉、一鏡晴れて飛んで玉に華有り。好し是れ夜闌けて人寝ねず、半庭の寒き影梨花に在り）」（春月・呂中孚）。「弘緑埃」は「弘緑苔」と同義か。白居易「秋興賦」の「林間暖酒焼紅葉、石上題詩弘緑苔（林間に酒を暖めんとして紅葉を焼く、石上に詩を題せんとして緑苔を弘ふ）」に基づく表現か。なお「苔」も灰韻である。雑。

9 しら露の玉のを柳みだれあひ

能元

前句の「半庭」に植わる「柳」の姿を付けた。「庭・

緑←柳」（類船集）。また、前句の「半庭」で「緑埃」を払っていたのは「柳」の葉先であったと前句に返る心。

「しら露の玉のを」とは、玉のような白露を貫くひものこと。当該句では、その紐が切れたように白露が乱れ散るさまを表現するか。『新千載集』に「白露のむすぶもながき青柳の玉の緒とけて春風ぞ吹く」（春上・六三・法印定為）。春1（柳）。

10 そくぐも見えぬ春雨の空

其阿

前句の「白露」は「春雨」が降ったことで置かれたと付けた。一句では、春雨は細かいので、降り注いでいるが上空には見えない、と詠む。春2（春雨）。

11 おぼろなる月の明がた雲引て

信能

「雲」が棚引くことで、「春雨」が降ったと前句に返る気持ちである。また、前句「見えぬ」に「おぼろなる月」が応じる。「おぼろなる月」であるのは当該句で

は明け方であるためとなるが、前句との関係では「春雨」が降り注いだためと解せる。春3（おぼろなる）。

12 好●友●興●相●催●  
（好友興相ひ催す）

秀定

前句の「おぼろなる月」を受けて、明け方まで一緒にそれを賞翫し、感興を催させてくれる親友の存在を付けた。雑。

13 山自遠方到（山遠方より到る）

兼統

前句の「友」に「遠方到」で応じて『論語』（学而篇）の「有朋自遠方来、不亦樂乎（朋あり遠方より来たる、また樂しからずや）」に拠って付けた。一句の意は『枕草子』「山の端いと近うなりけるに」を下敷きに、遠方にある山が目の前にせまっているかのように見える、と解せるか。雑。

14 嵐○傍○深○戸●推○  
（嵐深戸に傍ひて推す）

元貞

対句で展開した。嵐は奥深い場所にある家の戸まで

も遍く推し開くとその風の強さを詠む。雑。

15 まつ人はこぬ面かげの立うかれ

富隆

前句の「深戸」を開く主語を恋人に読み替えて付けた。待ち続けている恋人の訪れはなく、その人だろるかと思われ人の姿は現れたかと思うと、消えてしまふと恋のはかなさを詠む。雑、恋1（まつ人）。

16 けぶるばかりのおもひくるしも

隠其

前句の「まつ人」が来ないことによる愁いを「おもひくるしも」と受け、また「面かげ」が「けぶるばかり」である、と付けた。『新古今集』に「こぬ人をおもひたえたる庭のおものよもぎがすゑぞまつにまされる」（恋四・一二八七・寂蓮法師）。煙のようにほかない恋心を抱くのは苦しいと詠む。「おもひ」に「火」が掛けられ、「けぶる」と縁語となる。雑、恋2（おもひくるし）。

17 袖にあまる涙は露をかごとにて

実頼

前句の苦しい恋心のせいで、袖を濡らすほどに落ちる涙であるが、それは露のせいであると、言い訳する句を付けた。秋1（露）、恋3（涙）。

18 荒<sup>○</sup>村<sup>○</sup>嘯<sup>●</sup>月<sup>●</sup>回<sup>◎</sup>（荒村 月に嘯<sup>うそぶ</sup>きて回<sup>めぐ</sup>る）

印金

前句で恋人の訪れがなく涙を流す女性に対して、まだ月が出ている時分に女性の元から帰る男性の姿を付けた。なお前句「かごと」を、荒涼とした村では月が綺麗なために逍遙して帰る、という意に読み替えて付けた。一句では、荒涼とした村で月下に詩を吟じながら逍遙する、という意。秋2（月）。

19 壁<sup>●</sup>間<sup>○</sup>蛩<sup>○</sup>唧<sup>●</sup>々<sup>●</sup>（壁間 蛩<sup>しつ</sup>唧<sup>しつ</sup>たり）

朝清

前句の「荒村」の家の壁のすき間でちちとしきりに鳴く蛩を付けた。「唧々」は蛩の鳴き声のことで、『三体詩』巻一「宿杭州虚白堂（杭州虚白堂に宿す）」に「秋月斜明虚白堂、寒蛩唧唧樹蒼蒼（秋月斜めに明らかな

り虚白堂、寒蛩唧唧、樹蒼蒼)」（李郢）。前句で月に嘯く声を蛩の鳴き声に取りなして応じた。秋3（蛩）。

20 ふもとの野辺の風さむきくれ

能元

前句の蛩が、家の壁間で鳴いているのは、野辺を吹く風が冷たい暮れ方だからだ、と付けた。風が寒くなると前句の蛩の命もわずかであることを嘆く句。秋4（さむきくれ）。

21 坐●花○紅●染●袂●（花に坐せば紅袂を染めん）秀定

前句の「ふもとの野辺」で座って花を賞翫すれば、花の紅色が袂を美しく染めると詠む。春1（花）。

22 斟○杏●緑●浮○醕◎（杏を斟めば緑醕に浮く）兼統

対句で展開した。「醕」は、『漢和三五韻』引用の杜甫詩と注に「樽酒家貧只旧醕、注醕未漉（樽酒家貧しくして只だ旧醕あるのみ。注に醕は未だ漉さざる）」とあり、漉していない酒のこと。春2（杏）。

23 霞む日はとをくすむをも問よりて

実頼

前句の「杏」を「斟」むのは、春霞が立ち込める日に、遠くに住んではいるが、友人などを訪ねて来た人であると、前句に返る心で付けた。また酒と「霞」が縁となる。春3（霞む）。

24 遊○轡●苦●駑○駘◎（轡を遊ばせば駑駘を苦します）

朝清

前句で遠方から「問よ」る手段としての馬の様子を付けた。「遊轡」は、馬をあやつるために轡を取り付けること。「駑駘」は血統の劣った馬。雑、旅。

25 嶮●棧●常○經○蜀●（嶮棧常に蜀に經）

印金

前句の「駑駘」が通る道を、秦の恵文王が蜀王を騙して敷かせた險阻（嶮棧）な「蜀の棧道」で具体的に付けた。李白が「蜀道難」で「噫吁戲危乎高哉、蜀道之難難于上青天（噫吁危乎高哉、蜀道の難きは青天に上るよりも難し）」。雑。

26 靈<sup>○</sup>方<sup>○</sup>好<sup>●</sup>覓<sup>●</sup>萊<sup>◎</sup>（靈方 好く萊に覓む）

兼統

対句で展開した。「靈方」は優れた効能がある薬。「萊」は想像上の山の名で蓬萊山か。一句は、優れた薬をしばしば蓬萊山に探し求める。雑。

27 平<sup>○</sup>之<sup>○</sup>仙<sup>○</sup>市<sup>●</sup>鶴<sup>●</sup>（之れを平らぐ 仙市の鶴） 元貞

前句の「萊」を蓬萊山の宮殿に取りなして、山を「平らげ」て仙人が住む、と付けた。「蓬萊院閉天台女（蓬萊の院は閉ざす天台の女）」（『全唐詩』卷八八九・李煜「菩薩蛮 其二」）。雑。

28 かげも木だかく見ゆる松原

能元

前句の「仙市鶴」が止まる「松」の原っぱを付けた。「も」には松それ自体が高いことは無論だが、地面に映ったその陰も高く見える、と詠む。雑。

29 住吉や往来の袖のつゞくらむ

信能

前句の「松原」から「住吉」が導かれた（随葉集）。住吉詣に行き交う人の袖が連なっているのだろう、と詠む。雑。

30 浦半の月にながめする暮

其阿

前句の「住吉」から「月」が導かれ（随葉集）、住吉の浦で月を賞翫する暮れ方の情景を詠む。秋1（月）。

31 霧<sup>●</sup>晴<sup>○</sup>磯<sup>○</sup>上<sup>●</sup>頭<sup>●</sup>（霧晴れて磯上頭る） 秀定

前句の「月」は霧が晴れた（霧晴）ことにより姿を現したものであった。「磯上」とは水際の石の多い場所。

秋2（霧）。

32 引あをとをし初塩の浪

富隆

前句で「磯上」が頭わになったことで、初塩の浪が引いていった跡が遠くの方まで見える、と付けた。秋3（初塩）。

33 種●玉●塵○間○鷺●（玉を種う 塵間の鷺）

兼統

前句で浪が引いた海辺の上に鷺がいる。「種玉」は玉のように美しく価値ある苗などを植える意か。「種玉水田飛白鷺（玉を種え水田白鷺を飛ばす）」（『陶山集』巻三・陸佃「答毅夫遺橋株之什三首 其二」）。「塵間」は俗世のこと。雑。

34 いたり日の末の野はかすか也

隠其

前句の「鷺」がいる「野」の様子を付けて、沈む日の光が野の端をぼんやりとさせている情景を詠む。雑。

35 宿からむさとはたく火をしるべにて

実頼

前句の日の入り方（いたり日）に、宿を探そうしていると、人の気配がある里では焚かれる火がその目印となる、と詠む。雑、旅（宿）。

36 旅●過●幾●崔○嵬○（旅に過る 幾の崔嵬を）

印金

前句の「たく火」を目印にしながら、旅中、何度山の険しい路を通ってきたことか、と付けた。「崔嵬」は険しい路。雑、旅（旅）。

37 ほととぎす声やそことも分ざらん

能元

前句の険しい旅路（崔嵬）で、姿は見えないがどこからともなく聞こえる「郭公」の声を付けた。夏1（ほととぎす）。

38 ふりしきる夜の雨はものうし

信能

前句の「ほととぎす」から「雨」が導かれた。『新古今集』の「昔おもふ草のいほりの夜の雨になみだなそへそ山郭公」（夏・二〇一・藤原俊成）を意識するか。また、前句の郭公の姿が見えない理由を、雨がふりしきる夜であり、闇に紛れているからだ、と付ける。雑。

39 ひとりぬる枕に風の音信おとづれて

富隆

前句の「ものうし」の理由を、一人の寝の枕に吹く風のせいである、と付けて恋句で展開した。雑、恋1（ひとりぬる）。

40 忍履月相踏（忍びたる履 月相ひ踏む） 元貞

前句の「音信て」を受けて、地面に映った月の影を「履」が踏みながら、月光を頼りに女性の元から帰る、或いは、女性を訪ねる男性の姿を付けた。秋1（月）、恋2（忍）。

41 沙いさ砌せき露降つゆ湿ぬ（沙の砌露降りて湿なり） 朝清

前句の「月」の光が映る「砌」は、露が降りて湿っている、と詠む。また、前句の「履」と「踏」から、「砌」が導かれた。秋2（露）。

42 秋もくれまつ鞠のかたらひ 実頼

前句の「沙砌」から「鞠」が導かれた。『随葉集』に

「鞠の音」には「砌の真砂」。『源氏物語』若菜上で、柏木が六条院の蹴鞠に参り、媒介の女房を「語ら（仲間に入れて協力させる）」って女三ノ宮に懸想する場面を想起するか。但しこれは春なので、「秋も」としたか。日の入り方が早い秋であっても、夕暮れを待つ、鞠の場での語らい。秋3（秋）。

43 落楓おち舗ほ地ち錦にしき（落楓地に舗く錦） 印金

前句の「秋もくれまつ」に対して、楓が散って地面を錦のように美しくしている秋の暮れの景を付けた。楓は鞠の懸に植える木。秋4（楓）。

44 下若かじやく画雲え疊もたい（下若雲に画く疊） 兼統

対句で展開した。「下若」は酒。「疊」は、酒を入れる樽のことで雲の模様が刻まれた。『漢和三五韻』が引用する『説文』に「龜目酒尊刻木作雲雷象（龜目の酒尊、木を刻みて雲雷の象を作る）」とある。雑。



45 白也出唐鳥（白や唐を出づる鳥）

元貞

前句の「鬢」を盃などの酒器をさす「白」で受けたか。或いは、「鬢」に画かれる雲上を飛ぶ伝説上の鳥の姿を付けたか。或いは、「白」は「白頭」のことで、そのような頭の形をしていた、鍾離春という齊の醜女のことか。「其為人極醜無雙、白頭、深目、長壯、大節：（其の人となりや極醜無雙にして、白頭、深目、長壯、大節：）」（『列女伝』弁通）。雑。

46 鯀之入羽能（鯀は之れ羽に入る能）

秀定

対句で展開した。「鯀」は、夏の禹王の父で、堯帝の命で大水を治めようと試みるが失敗し、舜帝によって追放された人物。幽閉された場所が羽山であり、「入羽」と詠まれる。なお、「鯀」は想像上の大魚の名で、「能」は亀に同じとされる（漢和三五韻）。「鯀」のことを、水辺の伝説上の生物に見立てた表現か。雑。

47 さすらふるその行衛こそ悲しけれ

隠其

前句の「鯀」を禹王の父鯀と見て、彼が治水工事に失敗し、帝舜に殺された後の行き場のない一族、家臣らの悲哀を詠むか。雑。

48 一夜のほどに老となりぬる

其阿

前句の「さすらふる」と「悲しけれ」を受けて、流浪しているうちに一晚にして老いてしまったと月日の流れの速さを嘆く老境の句を付けた。雑、述懐（老）。

49 不改旧花耳（改まざるは旧き花のみ）

兼続

前句ですっかり老いてしまった我が身を嘆く句に對して、昔から咲いている「花」だけはその美しい姿を保っている、と付けた。春1（花）。

50 はるをこゝろの哥のしなぐ

富隆

前句の「花」を和歌に詠む春は、それらを詠う人の位（しな）によって様々にあると付けた。つまり人々

は各々の春、身分相応の春を過ごして歌を詠むという意か。人のしな（身分）は変わるが、「花」の美しさは変化することはない（不改）と対比する。春2（はる）。

51 永日もしたしき中はそひあかで

其阿

前句の「哥」を詠む仲間を「したしき中」と付けて、一日が長く感じられる春の日であっても、親しい仲間であれば一緒にいても飽きない、と詠む。春3（永日）。

52 おもふをゝきて旅だつはうし

信能

前句の「したしき中」である人との別れがあるので、旅立つことがつらい、と付けた。「おもふをゝきて」は、思う相手を残して。「旅だつはうし」の主体は、次句が舟を見送る側が主体となるので、当該句では旅立つ人が主体と考え、親しい人に対する想いが深く、旅立ちによる別れをむかえるのがつらい、と解した。雑、旅（旅だつ）。

53 載● 恨● 行● 舟● 重○（恨みを載せて 行舟 重し） 元貞

前句の「おもふをゝき」を旅立ちを見送る側の別れに対する恨みの気持ちととり、それを載せる舟を「重し」と形容した付句。当該句と類想の和漢聯句に「載景 軽舟重（景を載せて 軽舟 重し）」（享禄元年十月五日和漢百韻・四五）がある。雑、旅（行舟）。

54 投○ 閑○ 書○ 卷● 開○（閑に投じて書巻を開く） 朝清

「投閑」は、静かな環境に身を置くことで『翰林五鳳集』に「世路危於經劍關、何如市隱獨投閑」（和福壽 菴主南韻・瑞溪周鳳）など。「書巻」は、古代の書物の装釘は卷子であったから、書籍のこと。和漢聯句に「愛 静翫書卷（静を愛でて書巻を翫ぶ）」（天正十四年十二月七日漢和聯句・五九・西笑承兌）。静かな環境に身を置いて、書物を開く、と詠む。雑。

55 まちいでゝ月にむかへる窓のうち 実頼

前句で「書巻」を開いて読んでいる場所は「窓」の

側である、と付けた。また、前句ではその窓から差し込む「月」の光で「書卷」を読むという関係になる。一句では、窓の内側で月の姿が出てくるのを待っていたところに、ようやく出てきた月に対座すると詠む。『顕証院会千句』に「まちいでてしづかにむかふよはのつき」(第二・七九)と類似句がある。秋1(月)。

56 涼しくなれる秋のゆふ暮

富隆

前句の「月」から「涼」が導かれる(類船集)。「涼しくなれる」は体感として涼しさを感じるという意と、前句の「月」の光が冷ややかであるという意が掛かる。

秋2(秋のゆふ暮)。

57 ながれぬる汀の柳ちりそめて

隠其

前句で「涼しく」なって、柳が散り始めた、と秋が深まるさまを付けた。柳は夏の季語だが、『産衣』に「柳散ハ秋也」とあることから、当該句では秋の季語となる。例えば、連歌に「袂すずしき秋になるころ／下葉

より砌の柳散りそめて」(文禄二年正月十日百韻・二九)。秋3(柳ちり)。

58 一・蓑。帯。雨。来。来。(一蓑 雨を帯びて来たる) 秀定

「一蓑」で、蓑笠を着ている人を表現し、雨の中を進むさまを詠む。雑。

59 泰。雲。雖。寸。々。(泰雲 雖だ寸々たるのみ) 兼統

前句の「雨」を受けて、それを降らせた「雲」がゆったりと(泰)、途切れ途切れに(寸々)空に浮かぶさまを付けた。雑。

60 まつるに神や世をめぐむらん

実頼

前句の「泰」を古来、天子が即位のときに天地をまつる儀式を行う「泰山」に取りなした。そうした儀式を経て為政者となった人の治世に神が、世の中に恵みをもたらしてくれるだろう、と詠む。また「雲」に「神」が寄り合う(類船集)。雑、神祇(まつる・神)。

61 おさまれる國はやしろをいはひそへ 能元

前句で「世をめぐむらん」と推測したことが、当該句で国が治まり実現した、と付けた。また前句の「神」を「まつる」先が「やしろ」とである、と詠む。類想的な展開が『菟玖波集』に「くにまつるたからをいまもおさめおく／いくよをふるのやしるなるらむ」（巻七・五八七）がある。社を祀れることは、国が安定している象徴となる。雑。

62 松<sup>○</sup>於<sup>○</sup>岩<sup>○</sup>谷<sup>●</sup>栽<sup>◎</sup>（松は岩谷に栽ゆ） 元貞

前句の「いはひそへ」を受けて、永年を象徴しそれを寿ぐ「松」を付けた。「岩谷」は岩石の聳えた峡谷のこと。『臨濟録』に「巖谷栽松、後人標榜（巖谷に松を栽へ、後人標榜す）」など。「栽」は『漢和三五韻』に「ウユル」。雑。

63 遠<sup>●</sup>鐘<sup>○</sup>風<sup>○</sup>是<sup>●</sup>杵<sup>●</sup>（遠鐘 風は是れ杵となる） 印金

前句の「松」から「鐘」が導かれる（類船集）。吹く風が杵の代わりに遠くの鐘を鳴らすのだ、と詠む。『翰林五鳳集』に「遠鐘幾杵半天風。吹落溪橋西又東。（遠鐘幾ばくか半天の風杵とならん、溪橋に吹落つ西又東）」（遠寺晚鐘・琴叔）がある。雑。

64 芳<sup>○</sup>茗<sup>●</sup>雪<sup>●</sup>其<sup>○</sup>磴<sup>◎</sup>（芳茗 雪は其れ磴なり） 兼統

対句で展開した。「杵」と「磴」の対比が意識される。『易経』（繫辭下）に「断木為杵、掘地為臼（木を断ちて杵と為し、地を掘りて臼と為す）」。「雪其磴」とは、積もった雪を掘ってそれを磴の代わりにすることか。「芳茗」は香り、品質のよい茶のこと。一句は香りの良い茶を、雪の磴で挽くという意か。冬1（雪）。

65 禪<sup>●</sup>識<sup>●</sup>無<sup>○</sup>能<sup>○</sup>味<sup>●</sup>（禪識 能く味わうこと無し） 朝清

前句の「芳茗」（茶）から「禪」が導かれたか。和漢聯句に「よろづうき世ぞ思へ身のはて／禪榻茶煙淡（禪

榻茶煙淡し」(応永元年十二月十二日後小松天皇独吟和漢百韻・八九)。一句は、禅僧は食べ物には、必ずしも美味しい味ばかりではないことを心得ている、という意か。雑、釈教(禅識)。

66 生まれながらにおこなへる道

隠其

前句の「禅」に「おこなへる道」を付けた。「生まれながら」は、この世に生を受けた時からの意で、連歌に「のりはただうまれながらのみなれかし」(伊勢千句・第七・六三)。一句は、生まれた時から修行をする人生である、と詠む。雑、釈教(おこなへる)。

67 鶯の巣をはなれずも声たてゝ

其阿

前句の「生まれながら」を受けて、まだ巢立ちをしていない「鶯」の声が付くか。時代は下るが『崑山集』に「生まれながらやうぐひすの法の声」(春・六〇四)がある。春1(鶯)。

68 竹のはやしの春寒きころ

信能

前句の「鶯の巣」がある場所の余寒を付けた。「竹←鶯」(類船集)。「竹のはやしの」という表現はやや説明的ではあるが和歌に、「風ふけば竹の林の友ずりにふしやわづらふ夜半のうぐひす」(夫木抄・春部二・竹林鶯・四五八・源仲正)など。春2(春寒き)。

69 山ずみも霞をくめる伴ひに

富隆

前句の「春寒きころ」には「竹のはやし」に住む者(山ずみ)も酒(霞)を酌み交わす相手となる、と付けた。竹林の七賢のイメージ。「山ずみ」は山中や山里にすむ人のことで、『新明題集』に「外よりは淋しとみるも山住の友なりけりな灯の影」(雑・四二二四・信慶)。「霞をくめる」は、酒を酌み交わすことで、連歌に「あかなくもしひてかすみをくむそでに」(永禄石山千句・第五・七九)など。春3(霞)。

70 茅○齋○月●作●媒<sup>◎</sup>（茅齋 月 媒<sup>なかだち</sup>と作る）

秀定

前句で酒の異称として詠んだ「霞」を、当該句では実際の霞に取りなした。霞が晴れて見える「月」の姿を詠む。「茅齋」の「齋」は部屋の意、つまり茅葺の家のこと。「月作媒」は月が二つのもの（当該句では男と女のことか）仲立ちとなる、の意。一句は、茅葺きの家では、月光が男女の仲を取り持つのだ、と詠む。

秋1（月）、恋1（媒）。

71 妾●衣○先○襦●露●（妾衣 先づ襦露<sup>しん</sup>たり）

元貞

前句の「茅齋」で待つ女性の涙（露）を付けた。「襦」は、はだ着のこと。一句は、妾の着物は（悲しみのために）まず、はだ着から涙に濡れるのである。秋2（露）、恋2（妾）。

72 身にしめつゝもまつはいく秋

実頼

前句の「妾」が男性の訪れを何年も待つ思いを付けた。「身にしめつゝも」は連歌に見られる表現で、『嵯

峨千句』に「みにしめつゝもうらみよらばや」（第六・三〇）。「まつはいく秋」は、和歌では「松はいく世」という表現で見られるが、当該句では句意から「待つ」の意。一句は、秋を心に深く感じながら過ごすが、恋人の訪れを待ち過ごす秋は何度めか、と嘆く句。秋3（秋）、恋3（まつ）。

73 虚○夕●刻●其○歳●（虚夕 其の歳を刻む）

兼統

前句で、期待して待ち続けている人がなかなか訪れない、夕暮れ時の時間の虚しさを付けた。「虚夕」は寂しさを感じる夕暮れ時のこと。『和漢兼作集』に「暮煙晴色攢松嶺、夜雨虚夕落葉窓（暮煙晴色松を攢むる嶺、夜の雨虚しき夕べ落葉の窓）」（秋下・秋於大原勝林院言志・八七三・秋漸空）、『新拾遺集』に「初雪のふらばといひし人はこでむなくはるる夕暮の空」（冬・六五四・前大僧正慈鎮）など日本の詩と和歌に見られる。雑。

74 早天夏以雷Ⓞ（早天 夏は雷いかづちを以てす） 印金

「早天」は、日照りが続き、雨が降らないこと。一句は、日照りが続く日に（夕方になると）雷が轟き夏を告げる、と詠む。夏1（夏）。

75 山たかみ雲のかさなる曙に

隠其

前句の「鳴神（雷）」から「浮雲」が導かれた（随葉集）。高い山の頂の上で重なる雲から「雷」が落ちる、と前句に返る心である。雑。

76 棹舟過水隈Ⓞ（舟に棹さし水の隈くまを過よぎる）元貞

前句の明け方（曙）に舟を漕ぐ景を詠み、山から水辺の景に展開した。「隈」は、水が滞留している場所。一句は、水が滞留する場所では、棹をさして舟を進ませる、と詠む。雑。

77 ちりうかぶ花や岸根に淀むらん

能元

前句の「隈」を受けて、そこに散る花が岸根に留ま

るだろうと思ひ遣る句を付けた。「小舟」と「岸」が寄合（類船集）。「岸根」は、岸と水が接する場所で和歌に「吉野河ちる桜あれば咲きつぎて岸根色どる山ぶきの花」（新明題集・春・款冬・一〇六七・資茂）など。散った花が「淀む」と詠む和歌に「ちりつもる花こそいはによどむとも香はながれてや瀬にかほるらん」（散木奇歌集・春・五六）。春1（花）。

78 和暖杖徘徊Ⓞ（和暖杖たちやすらふ徘徊）

兼統

前句で岸根に溜まった「花」に見入って、歩みを止める人の姿を付けた。「和暖」は穏やかな陽気のこと、和漢聯句に「愛山和暖鞍（山を愛づ和暖の鞍）」（天文二年六月七日和漢聯句・一一）など間々見られる表現。「杖」は人が歩むさまを物に仮託した表現で、これも和漢聯句に屢々用いられる。「老擲深春杖（老は擲つ深春の杖を）」（明応二年四月十四日和漢百韻・九一・蘭坡）など。「徘徊」は、歩みを止める意で、『漢和三韻』の「徊」の脚注に「徘徊ハ不レ進貌」とあること

に拠る。春2（和暖）。

79 蛙なく堤のあたり暮初て

隠其

前句で立ち止まっていたら、辺りは日が沈み始め蛙が鳴く時分となった、と付けた。類想的な和歌に「くれふかきいりのつつみのした水に声うちそへて蛙なくなり」（為尹千首・夕蛙・一六五）。春3（蛙）。

80 すきのこしたるを田のかたぐ

能元

前句の「堤」を「田」のそれと取りなし、小田のあちらこちらには、土を掘り返していない場所がある、と付けた。また「蛙」から「田」が導かれる（類船集）。『産衣』に「田を返す、田をすくハ共に春なれば」とあることから季節は春。春4（すきのこし）。

81 民○村○烟○半●起●（民村烟半ば起つ）

秀定

前句の「田」の側にある「民村」の景を付けた。「民村」は、民衆が住んでいる村落のことで、和漢聯句に

「霞灑民村賑（霞灑ぎて民村賑かなり）」（長享元年十月二日和漢百韻・九九）など。「烟半起」は、民家の煮炊きの煙が空の中ほどまで立ち上っている様子。雑。

82 駅●路●日●将○類◎（駅路日将に類れんとす） 印金

対句で展開した。「駅路」は宿駅の設けられている街道のこと。「類」は『漢和三五韻』の脚注に「説文ニ禿ノ貌 一ニ曰暴風」とあり「ノワキ」の訓があるが、ここは句意から「くずれる」と訓読して日が暮れるさまと解した。和漢聯句に「村遠日西類（村遠し日は西に類れる）」（大永二年六月三日和漢百韻・六八・竹）など。雑、旅（駅路）。

83 鈴舟のよる音すまの浦ちかみ

実頼

前句の「駅路」から「鈴舟」を導いた。「鈴舟」とは『藻塩草』（一七・船）に、「すす船 鈴舟とはむまやぢの舟の事也」、『産衣』に「鈴舟 旅也。哥註ニ舟に鈴を立る事也。源じすまへ趣き給し時、鳥羽より舟に



召されけるに、其舟に鈴を立てられける。惣じて公卿殿上人の乗る舟にハ鈴を立てる也と有。」とあり、通行手形となる鈴をつけた官船のこと。須磨の浦を通る鈴舟を詠む和歌に、「すずぶねをよするおとにやさわぐらんすまのうへのにきぎすたつなり」（千五百番歌合・雑二・一四五番左・二九一〇・顕昭）。また「音す」の掛詞。一句は、鈴舟が近づいてくる音が聞こえるのは、須磨の浦が近いからだ、となる。雑、旅（鈴舟）。

84 秋。風。白。髪。衰。◎（秋風 白髪衰ふ）

元貞

前句の「鈴舟」は「秋風」によって進んでいた、と付けた。「風←船」（類船集）。一句は、ただでさえ年老いて白くなる髪が、秋風によってより一層衰えてしまふ、と詠む。秋1（秋風）。

85 松。□。しの鳴そふまくらねぎめして

其阿

前句の「秋風」に乗って「松虫」の音が聞こえて目が覚めてしまふ、と付けた。「松虫←秋風」（合璧集）。

寝床で松虫の声を聴く、と詠む和歌に「折しもあれ身にしみまさる枕かな秋かぜふかき松虫の声」（今川氏真詠草・深夜虫・一八〇）など。秋2（松むし）。

86 新。奇。得。月。臺。◎（新奇 月を得る臺<sup>うてな</sup>）

兼統

前句の「むしの音」から「月」が導かれる（類船集）。和漢聯句においては一句に「月」と「新」、「奇」を詠み込む句は他にも見られる。たとえば「月新興愈奇（月新しく興愈よ奇し）」（天正六年九月二十五日漢和聯句・四・周寔）から、「新奇」とは素晴らしい新月のことか。「臺」は、屋根のない楼のことですこで月を眺める。秋3（月）。

87 池ひろきかたへはなみの声もなし

信能

前句の月を映す池の様子を付けた。「池←月」（類船集）。水面が波立っていない（なみの声のなし）から、前句の月が綺麗に映っている。「池ひろきかたへ」とは広大な池の一部分のことで、和歌では池に張った氷の

一部分が溶ける例で屢々見られる。「ふゆとはるとゆきかふかぜのいけ水にかたへとけゆくうすごほりかな」（千五百番歌合・冬三・一〇二九番右・二〇五七・内大臣）など。雑。

88 床をかさぬる水のうき鳥

富隆

前句の「池」に浮かぶ「鳥」の姿を付けた。「池←水鳥」（類船集）。「床をかさぬる」とは、雌雄の鳥が仲睦まじくねぐらを共にしていることで、『大発句帳』に「をしもなくとこかさなれるねざめかな」（陽明文庫本・七一八九）など。雑。

89 舟過山走馬（舟過つて山に走る馬）

印金

前句の水辺を通る舟と、山を走る馬を詠み、水辺と山の景を一句の中で対比的に詠む句。雑。

90 くるゝあらしにはやき雲あし

隠其

前句の「山」から「嵐」が導かれた（類船集）。また、

前句の馬がはやく走ることと縁となつて、景色がはやく流れることと併せて慌ただしい様を付けた。「くるゝあらしに」とは夕暮れ時の嵐のことか。連歌に「あらしにくるる」という形で「あらしにくるるそでのさむけさ」（太神宮法楽千句・第六・六）とある。「はやき雲あし」とは、空に雲が速く流れるのは雲が速く流れる、と詠む。雑。

91 笛近牧帰否（笛近けれども牧帰るや否や）

朝清

前句で夕暮れとなり、嵐も来る気配があるので、牧童がそろそろ帰る頃なのだろうとか思い遣る句。「笛近」とは牧童が吹く笛の音が近くに聞こえるという意で、前句からの展開も当該句と類似する和漢聯句に「くるればあらし山風ぞふく／猿誤帰樵笛（猿かと誤る 帰る 樵の笛）」（天文十年月日未詳和漢聯句・七・梅子）がある。一句は、牧童が吹く音だけは確かに聞こえるが、その姿は見えないことを詠む。雑。

92 □ □ 女●美●哉◎

元貞 岩に絶え間なく、雫が落ちる音がするのだろう、と詠む。雑。

93 「 「過来し□□□□もはれて

能元

96 ながれはほそきさは水のすゑ

其阿

94 空○ 闈○ 日● 厚● 苔◎ (空闈 日厚き苔)

秀定

前句の「岩がね」に水が滴るのは、沢水の流れがあるため、と付けた。「岩←水」(類船集)。雑。

「空闈」は、異性の訪れが無い独り寝のこと。「日厚苔」とは、恋人の訪れがないため、日々庭の通路の苔が厚く積もる、という意か。恋(空闈)。虫損がある92句は「女」で恋句の一つ目となり、当該句まで恋句となる可能性が高い。

97 歌○ 堯○ 村○ 校● 楽● (堯を歌ひて 村校樂し)

兼統

95 岩がねにたえず雫や音すらむ

信能

沢水の下流域近くの村校(村の学び舎)の様子として付けた。「歌堯」は、聖天子の堯が治める世は平和であると謳歌することで、和漢聯句では「ゆたかにみゆる民のつくり田／世歌堯与舜(世は歌ふ堯と舜を)」(文明十四年四月二十二日和漢百韻・四五)の用例もある。

前句の「苔」から「雫」が導かれた。『産衣』に「雫ニハ石か、苔か、山など結てすべし」とあることに拠る。また、和漢聯句に「懸樋の水のたえだえの音／岩がねのしづくは苔にむすぼゝれ」(天文二十三年正月二十九日和漢聯句・七一・四辻中納言)。一句は、大きな

一句は、堯が治める世を壽ぎ、村中の学び舎は愉しげである、と詠む。付合は「流れは細き」から、「是以太山不讓土壤、故能成其大、河海不擇細流、故能就其深、王者不却衆庶、故能明其德」(史記・李斯伝など)を想起して、度量の広大な古代の聖王である堯へとつなげた

ものであるうか。雑。

98  (逢カ)  (欲カ)   (鳴カ)  (印金カ)

など。前句の季は断定し難いが、式目上、春は最低三句続けるべきことを鑑み、当該句は春の二句目とした。春2(二月・花)。

99 二月きさらぎのなかばの花を折がたし 実頼

100 春<sup>○</sup>。到<sup>●</sup>。必<sup>●</sup>。豊<sup>○</sup>。財<sup>◎</sup>。(春到りて必ず豊かなる財<sup>たから</sup>となる) 朝清

前句が判読不能であるが、「鳴」の主体は「鶯」で、「花」を導くか(類船集)。如月の中旬頃に咲く花は、春の盛りの頃のものであるから、手折るのはもったいないと詠む和歌に「吹く風ものどけきころと二月のなかばにかかる花ざかりかな」(隣女集・春・一〇〇六)

前句とは、明確な寄合語はないが、春の句で付けた。「必豊財」は、春の情景が豊かとなり、それはまるで財宝のように美しいものである、と詠む。祝言の挙句である。春3(春到)。

注

1 「公はしばしば和漢聯句百韻の会を催す」とあるが、三句のみ掲載。今井清見(一八八三年〜一九四四年)は、米沢市史編纂委員を務めた人物。

2 今井氏が、『直江城州公伝』を執筆する際に必要とする情報、資料を書き留めていた資料群。「史料抜抄」三(K212・1)、「直江史料」(K289・1、一九三八年)など。資料は未整理の状態のものが多く、「直江筋書」第二巻には請求番号が付されていない。

3 「慶長六年の減封以降、錯綜した仕事の中で聯句を催す悠々たる文雅の心」「敗軍の将とも思えぬ優雅さの中にも、一藩あげて戦後の復興を目指す悠揚たる気概、これまた見事である。」（『米沢市史第二巻・近世編1』）。

4 なお、慶長期に兼続が関与した連文芸の一つに両吟連歌が存することも明らかとなっている。第三章第四節参照。

5 本作品の所蔵者に関して、中山小太郎は、高田家の家臣団にも同姓同名の人物がいるが、その人物ではなく、米沢地域の骨董品を蒐集する人ではないか、と市立米沢図書館郷土資料室の青木氏よりご教示を賜った。現在、中山小太郎所蔵史料とされているものは、上杉謙信書状（天正二年三月二十八日景勝朱印状（天正十一年霜月日）北條氏直書状（天正八年七月二日）など八点。「夢想和漢聯句」を含め九点となる。

6 第一章第三節参照。

7 前掲注（6）参照。

8 伊地知鐵男『連歌の世界』（吉川弘文館、一九六七年）に「なお諸社法楽・供養追善などの経文名号、夢想連歌などの場合は、賦物の行<sup>くだ</sup>りの個所に「北野社御法楽」「名号之連歌」または「夢想之連歌」などと書く。夢想が、和歌一首の場合は上句・下句を各二行書きにするし、上句のみの時は「脇起し」といつて脇句から詠みはじめる。夢想の句や御製には普通作者名は付さない。」とある。

9 前掲注（6）参照。

10 鶴崎裕雄氏「夢想和歌・連歌・学際的研究を目指して」（國文學第一〇一号、二〇一七年）参照。

11 発句、脇句、第三の当座性について。季節は年内立春であるが「冬」でとるべきか。「春」にすると最低三句続けるべきであり、そうすると第三の季節は「雪」を似物の雪にしなければならぬ。脇句の注に引いた「再昌」の詩は「冬日即事」とあり、冬。



終

章





本論文では三章十三節に亘り、戦国期に武家が関与した文芸、とくに連歌・和漢聯句につき、様々な観点から考察した。最後にその内容を振り返りつつ、本論文の考究により分明となった点、そして今後検討を要する課題につき確認し、本論文の結びとする。

第一章においては、戦国期を代表する大名上杉氏の文芸活動の実態につき考察した。初めに上杉景勝とその家宰直江兼続による天正期から慶長期の連歌・和漢聯句作品の分析をし、従来閑却されてきた武家の和漢聯句の特質を追求した（第一節）。続いて、戦国期連歌界の最重要人物である連歌師里村紹巴が直江兼続に宛てた発句の抜書を取り上げ、地方武家がどのように一流の連歌師と接触をとり、中央の文芸活動に触れていたかを明らかにした（第二節）。次に上杉氏の家臣と所縁の武将や僧・連歌師が併せて百の詩歌を詠進した「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」につき考察・考察を試み、和漢聯句盛行の流れの中で歌と詩が百首規模で継がれた新たな作品形態の需要を伝える資料であると位置づけた（第三節）。最後に、和漢聯句の表現論につき考察を加えた。具体的には「鶉衣」と「百結」の表現に着目し、それらの語はとりわけ五山僧が進んで享受した表現を公家・連歌師が自分達の表現世界に取り込み、地方武家の和漢聯句に本説とはやや異なる形で摂取されたことを明らかにした（第四節）。

第二章は、武蔵国忍の地を本拠とした成田氏の文芸活動を対象とした。まず、成田氏長が召し抱えた連歌師了意が独吟した「了意千句」の成立と伝来につき、詳細に考察して従来の研究の不備を補正し（第一節）、諸本を調査して新出伝本を提示し本文の研究を試みた。原本・古写本はないが、多数の伝本を有し、諸本間の異同が甚だしいため、原態に近い本を定め異同をとり校本を作成し、今後の読解・利用に資した（第二節）。成田氏もまた連歌・和漢聯句を手段として、里村紹巴を介し、中央の文化と独自に繋がろうとした構造が上杉氏と類似することを明らかにした。

第三章は、七節に亘って直江兼続の主権ないし深く関与した和漢聯句・連歌一座の注釈研究を行なった。これは戦

国期の連歌・和漢聯句の史的展開の研究に不可欠でありながら、従来十分に博搜されてこなかった各地の郷土資料につき調査・分析をしたもので、翻刻・注釈により内容の精密な分析を試みた。

以上の考察はいずれも各地に散在する郷土資料を渉猟し、併せて周辺資料に言及しながら戦国期の連歌・和漢聯句史を素描することを主眼とした。その結果、かつて武家の文武両道の姿を印象づけるために脚色された由来不明な記述を打ち捨て、実証的見地から誤謬を指摘し、或いは新資料を提示することで、地方武家と連歌師の交際の実際を分明にした。

しかしながら、本論文は中世と近世の端境期に着目して集中的に扱ったが、およそ二十年間を対象としたが故に、先行する時代のいかなる文学史的流れから影響を受け、後世にどのような影響を与えたのか、といった視点からの考察は十分とはいえない。更に注釈から抽出された表現論・内容解釈に関する具体的な検討も不十分である。

例えば第三章五節「梅が香は」注釈においては、49「夏の夜はまだ宵ながら更／＼で」句は、『古今集』の「夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらむ」(夏・一六六・清原深養父)に依拠し、下五のみが作者の作るところである。ここに俳言が加わると、江戸初期の俳人で松永貞徳に師事した松江重頼(一六〇二〜八〇)が得意とした本歌取りの俳諧が出来上がる。問題はこうしたいわば俳諧的な連歌がいつ頃から詠まれ広がるのか、連歌から俳諧へと移行するはざまの事象把握が不十分な点にある。併せて本論文では紹巴が主な考察の対象となったが、連歌師の史的位罫については、彼に続く昌叱、昌琢、玄仍らの行動分析と連歌の読解も進めることが求められよう。

これらの諸問題を連歌史上に巨視的に素描し当該分野の研究をさらに充実させていくことが、依然として急務となる。

## 初出一覧

序章…新稿

### 第一章

第一節…新稿

第二節…『連歌俳諧研究』（一三八）、二〇二〇年三月「連歌師紹巴と戦国武将―直江兼統宛「発句抜書」を中心

に―」

第三節…『和歌文学研究』（一一六）、二〇一八年六月「戦国期の詩歌百首…「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」につ

いて」

第四節…新稿

### 第二章

第一節…『国語国文』（八九）、二〇二〇年十一月「了意千句の成立と伝来―紹巴が評した関東連歌師の独吟千

句―」

第二節…新稿

### 第三章

第一節…新稿

第二節…新稿

第三節…『三田國文』（六〇）、二〇一五年十二月「直江兼統一座漢倭聯句百韻「楓散風紅色」注釈」

第四節…『慶應義塾高等学校紀要』（四九）、二〇一八年十二月「市立米沢図書館蔵慶長三年三月二日賦何人連

歌「しめゆふや」注釈―新出の直江兼続・称念寺其阿両吟連歌―

第五節：『三田國文』（六五）、二〇二〇年一二月「埼玉県立文書館蔵慶長五年正月廿一日賦何船連歌「梅か香は」注釈―上杉景勝主催の連歌―」

第六節：『慶應義塾高等学校紀要』（五二）、二〇二〇年一二月「慶長六年十月四日漢倭聯句「落葉雨天下」注釈―直江兼続主催の漢倭聯句―」

第七節：『三田國文』（六八）、二〇一八年一二月「慶応義塾図書館蔵慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」注釈―新出の直江兼続主催の和漢聯句―」

終章：新稿